IS 《インフィニット・ストラトス》 ～陽光の戦乙女と月下の黒騎士～

ライガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　《インフィニット・ストラトス》　～陽光の戦乙女と月下の黒騎士～

【Ｎコード】
Ｎ２１２２Ｒ

【作者名】
ライガ

【あらすじ】
ＩＳを稼動出来る、世界でたった二人の男、織斑一夏、音無一弥。そのせいで唐突にＩＳ学園に入学することに。しかし、彼ら二人以外全員女子という惨劇。彼らの悲劇、もとい学園生活はバラ色！？
一弥「まさか、あそこまで男に餓えてるとは…」
一夏「やば、囲まれ――うわぁっ！？」
負けるな二人の男の子！学園ＳＦラブコメディ、開幕っ！

プロローグ（前書き）

頑張らせて頂きます。文才がないので、感想、アドバイス等いただけると作者も喜びます～

プロローグ

日差し。

その日差しは積もりに積もった雪をとうに溶かしきり、春の暖かい南風を連れてくる。暑すぎず、寒すぎない、ポカポカという擬音がよく似合う陽気である。四月のとある昼下がり。その快適で思わず眠くなってしまうかのような、のどかな日差しから逃れるように日陰に入り、息を整えている一人の男子がいた。

「はぁっ……はぁっ……ま、撒いた、か……？」

彼の名は織斑　一夏（おりむら　いちか）。ここ、ＩＳ学園に絶賛在籍中の男子生徒である。

白を基調とした制服を身に纏い、全体的に整った顔立ちだが、少々目が吊り上がり気味ゆえ、肉食的な印象がある――――それがこの学園の女子連中に人気なのかは神の、いや女子のみぞ知る話である――のだが、今の彼の状況・状態から、肉食とは程遠いようである。運動についてはあまり考えて作られていない制服で、汗を拭って走っているのは校内マラソン中、というワケではなく、ただ単にとある集団から逃げていただけだった。

ＩＳを扱える男、という称号の希少価値は尋常のものではなく、女子の追っかけという一生に一度はやられてみたいが、実際やられる側に立つとただの耐久マラソンと大して変わらない、といったなんとも身体的にも精神的にも堪えるといった、微妙な特典がついてく

るのだった。女子から好意を持たれるのは嬉しくないハズがないというのに、それが集団での追っかけとなると女子の黄色い声（略して黄声）と地響きに心を削りながら体力を削る、最早トラウマにならないのがおかしいというくらいの恐怖となってしまうのだった。

「――見つけたわ！織斑君よ！」

「っ！？やば、囲まれ――うわぁっ！？」

ついに捕獲された彼に、息切れ一つついていない女子達が迫る。女子の好奇心、もとい無限の体力に戦慄を覚える彼だが――

――キーンコーンカーンコーン――

――神は彼を見捨てたワケではないらしく、チャイムという名の救世主が現れた。

「やばっ！予鈴鳴っちゃったよ！？」

「は、はやく戻らないと！」

それらの声を筆頭に、女子達は自分の教室へ戻っていく。その様子

を見ていた彼はというと、

「なんとか助かったみたいだな……あっちは大丈夫かな…？」

疲れたと言わんばかりに座り込む彼の表情は、軍隊（女子限定）から逃れられたばかりというにすっきりしないようだった。

「あいつは俺より体力ないからなぁ……ところで、何か忘れてるような……？」

少し考え、追いかけてきた女子の言葉を思い出してみると――

「……ってヤバい！入学初日なのに授業に遅れるのは流石にヤバいっ！」

そして今度は彼、織斑一夏によるタイムアタックが始まった。

――一方その頃――

「ぜぇっ……ぜぇっ……ま、撒いた、か……？」

織斑一夏とほぼ同じ状況に陥り、ほぼ同じ台詞を吐く男子生徒がいた。

彼の格好も一夏とほぼ同じだが、こちらはデザインのいい眼鏡をかけ、制服は着崩しており、一見ラフに見えるが、伸びすぎた前髪から覗く眼光の強さが、なんとも近寄り難い雰囲気を醸し出していた。

彼の名は音無　一弥（おとなし　かずや）。一夏が心配していた張本人であり、親友である。一弥も一夏同様、必要のない特典のせいで耐久マラソンに強制参加を強いられていた。

「――見つけたわ！音無君よ！」

「っ！？くっ……もう体力的に限界だってのに……うおぁっ！？」

――一夏同様、女子軍勢に捕まってしまうのだった。

――そして、神が舞い降りる。

――キーンコーンカーンコーン――

「やばっ！予鈴鳴っちゃったよ！？」

「は、はやく戻らないと！」

あっちの台詞をリピートして、女子軍勢は来た道を逆走していった。

「はぁっ……はぁっ……まさか、あそこまで男に餓えてるとは……はぁ～……」

疲れると言わんばかりに大きなため息。そして安堵したかと思うと、

「あっちは……まぁ俺より体力あるしな……。ってか、何か忘れてる気が……」

救世主のチャイム様＋さっきの女子の言葉。そこから導かれるものは一つしかない。

「……ってヤバい！遅刻なんざ冗談じゃねぇ！」

これまた一夏同様、音無一弥のためのタイムアタックが始まった。

ＩＳ学園所属、織斑一夏、音無一弥。今、彼らの学園生活が予鈴を合図に、幕を開ける――――。

プロローグ（後書き）

連載がんばります！ふつつか者ですが、応援なにとぞよろしくですっ！

第一話　彼らとＩＳの出会い（前書き）

タイピングがはやくなりました。

第一話　彼らとＩＳの出会い

「全員揃ってますねー。それじゃあ、ＳＨＲをはじめますよー」

黒板の前でにっこりと微笑んでいるのは、さっきの自己紹介が本当ならば女性副担任こと山田真耶先生である。身長低め、黒縁眼鏡はずれて、服のサイズすら合っていない。

……なんというか、『子供が背伸びしている』的な不自然さを抱くのはきっと俺だけではないはずだ。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね。」

『……』

副担任という立場の人がここまで丁寧な口調で挨拶をしているのに、教室の中は変な緊張感に包まれ、誰からも反応がない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いしますっ。えとっ、しゅ、出席番号順でっ」

俺だけでも反応しておくか？いや、なんか面白そうだからこのまま放置してみよう。隣なんか緊張のせいかガチガチだ。

なぜか？簡単だ。俺達以外のクラスメイトは全員女子だからだ。

（二人でよかったな……一人は流石にきつそうだ……）

自意識過剰ではなく、確かにクラスメイトほぼ全員から視線を感じる。座っている席も最悪だ。最前列、一夏なんか真ん中ときている。ちなみに俺はその窓側の隣だ。

ん？こっちをチラ見してきた。どんな反応をすればいいか分からないので、無難に肩をすくめてみせる。

「……くんっ。音無一弥くんっ」

「ん？」

っと。今は自己紹介の途中だったな。頭文字が『お』だから俺の番はすぐに回ってくるのは当然か。

「音無一弥だ。好きに呼んでくれて構わない。見ての通り男で至らない点があるだろうが、その時は遠慮なく言ってほしい。できる限り改善していく。一年間よろしく頼む」こんなところか。

俺が座るとパチパチと拍手が聞こえてきた。前の席のやつはされていなかったはずだ。きっと苦い表情をして――あ、あなたたちも拍手してくれてるんですか。そりゃどーも。

「うん、よろしくお願いしますね。それじゃあ、次、織斑くん、いいかな？」

「は、はいっ」

どもってるどもってる。少し落ち着けっ。

「えー……っと、織斑一夏です。一年間よろしくお願いします」

なんとも微妙な……もう少し何か言えばいいものを――と思ったのもつかの間、女子の視線が『もっと色々喋ってよ』的に物語っている。

一夏のほうは……ダメだ。固まったまま動かない。いや、動けないのか……気の毒に……

しかし俺に出来ることもなく、ただ座って自己紹介を待つだけ。

「……はぁ……」

誰にも聞こえないように小さくため息を吐く。なんだか、この学園に来てからというもの、ため息の絶対値が格段に上がっている気がする。『ため息の数だけ幸せが逃げる』と聞いたことがあるが、その前にこの状況が不幸以外の何物でもない。

「……はぁ」

――そもそも、なんで俺達はここにいるんだ――？

☆　★　☆

「あー……さっみぃぃぃ……」

二月の真ん中、俺達は中学三年で、受験生というか今からその受験を受けにいく真っ最中だった。

「なんで受験受けるためだけに四駅も乗らないといけないんだ……

？しかも今日寒すぎだし……」

昨年起きたカンニング事件のせいで入試会場を二日前に通知するという政府のやり方には疑問しか浮かばないんだが、そんなただの学生の声が政府のお偉いさんの耳に届くはずもなく、せいぜい愚痴りながら会場に向かうのが関の山だ。

俺達が受けるところは、家から近い・学力真ん中・学費が安いという三拍子揃っている私立藍越学園。その中でも、学費に関しては私立のくせに圧倒的に安い。

なぜか？簡単……じゃないな、確か一夏が卒業生の進路の九割が学園……なんとかに就職できると言っていたが……はて、何だったかな。

「なぁ一夏。なんで藍越学園なんだ？」

「……今から受験なのにとんでもないこと聞くよな。一弥ってさ……」

直接的に聞き過ぎたか？えーっと確か……

「そうじゃねぇって。なんで藍越学園は私立のくせに学費が特売セール並に安いんだ？他の私立高校、涙目だろ」

「ああ、そういうことか。前にも言わなかったっけ？」

一夏曰く、その卒業生の進路の九割が学園法人の関連企業に就職できるからしい。

卒業後の進路までケアしてくれるというのはありがたいからなあ――という一夏の考えに、俺はひどく納得してしまった。

「いつまでも千冬姉の世話になるワケにもいかないしなぁ……」

「気にしすぎだ、一夏。それどころか、もっと甘えてもいいくらいだと思うけどな……」

俺達はまぁ、色々あって両親がいない。ありがちで、しかし自分の身に降りかかるとは思ってもみなかった交通事故で呆気なく他界してしまった。莫大とまではいかないが、かなりの遺産を残してくれた両親には感謝している。一夏の両親はよく知らないが……その分、俺もお世話になっている年の離れた姉が養ってくれている。だが、一夏はというとそのことに引け目を感じているらしい。せっかくの姉弟なのになにを遠慮する必要があるのか……よく分からねぇな。

幸い彼女、千冬さんの稼ぎがいいので貧乏はしていない。それを無理させていると勘違いした一夏は、中学を出たら働くと豪語していたが、姉の力（八割腕力、二割眼力）にアッサリ高校に受験することに。

ヘタレと思うかもしれないが、千冬さんは――――いや、そんなことより。

「まずは目の前の試験をボコボコにしてから考えるとするか」

「ボコボコって……一弥らしいな」

とりあえず模試での判定はAだが、あまりに気を抜いて臨んだら居眠りしてました、みたいな惨劇は御免こうむりたいので、適度に緊張感は持っておく。

「おし、気合い入れっか！」

「そうだな。集中、集中！」

気合い十分に声を掛け合い、目的地へ意気揚々と足を踏み出した――――……

☆　★　☆

……なのだが。

「迷った」

なんてわかりにくい構造してるんだ。設計者を呼び付けて文句の一つでも言ってやりたい。

「もっと真面目に仕事しろよ設計者……一夏も言ってやれ」

「というか、この『常識に捕われない俺カッコイイ』みたいな感じはなんなんだよ？こんなのただの迷路じゃないか」

「……何気に俺よりひどいよな」

自覚がないところがまたひどい。それにしても中学三年にもなって迷子……恥ずすぎだろ。

「ちっ、もう次のドア見つけたら入るぞ。だいたいそこであってる

だろ」

「……なんという楽観主義……あっ、待てよ一弥！」

ん？いいところにドアが。喜べ！貴様は選ばれたのだ！――――さっさと入ろう……

「あぁ、君たち受験生だよね。向こうに着替えあるから。時間押してるから急いでね、四時までしか使えないんだから。全くやりにくいったら……」

部屋に入った途端、神経質そうな女性教師に言われる。相当忙しいのか、俺達の顔も見ずに矢継ぎ早に指示を出して出て行った。

「着替え？着替えなんかするのか？」

「大方カンニング対策だろ。さっさと入ってさっさと終わらせるか」

そう言って俺達が入ったドア、教師が出て行ったドアとはまた別のドアに入ると――――二つの『鎧』が鎮座していた。

いや、鎧というには語弊があるだろう。忠誠を誓う騎士のような姿は鎧のそれだが、よく見ると細部が甲冑とは違う。それに、俺達はこれを知っていた。

『ＩＳ』、正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定されたマルチフォーム・スーツ。

だが、宇宙進出が一向に進まず、スペックの高さから『兵器』、そして各国の思惑から『スポーツ』に大幅なランクダウンした……早い話が飛行パワードスーツだ。だが――

「……筆記試験にこんなの着るのか？無茶振りにも程があるだろ……」

「……それ以前に男は乗れないんじゃなかったっけ……？」

そう、女しか使えないのだ。だから、今俺達の目の前のものはガラクタも同然だ――そう思って、触れた。

「っ！？」

キィンッと、金属質の音が頭に響く。それと同時に、意識に直接流れ込むおびただしい量の情報。数秒前まで知りもしなかった基本動作、操縦方法、性能、特性、装備、行動範囲、センサー精度、レーダーレベル、アーマー残量、出力限界、ｅｔｃ，ｅｔｃ……

あらゆる事象が手に取るように解る、解ってしまう。ふと隣を見ると、もう一つの『ＩＳ』に一夏が触れていた。

「か、一弥、これ……」

「ＩＳ……だよな……なんで……」

動くのだ。『ＩＳ』が。自分の手足のように。女性にしか扱えないはずの兵器が。思うがままに。

肌の上に直接何かが広がっていく感触――――皮膜装甲（スキンバリアー）展開……完了。

突如、体が軽くなる無重力感――――推進機（スラスター）……確認。

右手に加わる重量感――――近接ブレード……展開。

知覚精度が急激に高まる清涼感――――ハイパーセンサー最適化……終了。

それら全てが解る。解る。習ってすらいないのに。教わってすらいないのに。解る。

そして、『ＩＳ』から送られてくる情報で見る世界は、まるで……

あぁ、これはまるで――――

第一話　彼らとＩＳの出会い（後書き）

あれ、箒出してな――――

まだまだ続くよ自己紹介。

第二話　続・自己紹介（前書き）

感想待ってます！

第二話　続・自己紹介

「……ん？」

あれ。なんで一夏だけ立ってるんだ？しかも後ろ向いて――あぁ、今自己紹介だっけ……ってまだ一夏のターンなのか！？いやいや、流石に引っ張りすぎだろ！そのせいで……ホラ見ろ。山田先生なんか半泣き寸前だ。ってか今にして思えば山田先生って上から読んでも下から読んでも『ヤマダマヤ』だな。うん、どうでもいいな。どうでもいいが……山田先生の両親はウケ狙い八割で名前を付けたに違いない。……なんて不憫な……

あ。また一夏がこっちチラ見してきた。目線だけで『なんとかしてくれ！』……そんなこと言われてもどうしようもないのだった。無難に肩をすくめてみせると一夏は――ん？今どこ見てたんだ？俺ではなかったはずだ。

一夏の視線の先を見てみると、そこにいたのはポニーテールが特徴的で、やや吊り目だが、和風美人という言葉を具現化したような――ってあれ箒か……？一夏はすぐ気づいたらしいな。

しかし箒はというと、腕を組んで窓の外に目を向けている。一夏の危機など知らぬ存ぜぬか……なんだか、一夏が気の毒に思えてきたな……。

そう思い、一夏のほうに視線を向けると――お？深呼吸なんかして……なんか凛々しい表情になった気がするな。ついにいくか！一夏、お前の力を見せてや「以上です」がたたっ。

女子の数人がずっこける音がした。もう……苦笑いくらいしか出て来ない。箒に至っては頭に手を置いてため息をついている。

「あ、あの～……」

見ろ。山田先生なんかすでに涙声だ。はぁ……仕方ない。少しばかりフォローでも――

バゴッ！え？今なんかすげぇ音しましたよ？一夏が頭を押さえてる当たり、何かで叩かれたんだろうが……

「挨拶もロクに出来んのか。馬鹿者」

なんだか聞き覚えのある声がした。そうあってほしくないと思いながら、恐る恐る振り返る。

そこにいたのは、黒のシャツにタイトスカート、肩まで伸びている鮮やかな黒髪、手には出席簿を装備し、狼を思わせる鋭い目をした女性がいた。

「げっ！？張飛！？」
「げっ！？関羽！？」

バゴッ、バゴッ！……俺まで叩かれた……ってか超いてぇ。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者共。済まないな山田先生。クラスの挨拶を押し付けてしまって」

え？なにこの温度差。冬の極寒から春の陽気に高跳びした気分だ。

「い、いぇっ、会議お疲れ様ですっ。副担任なんですから、せめてこのくらいは……」

こっちもさっきまでの涙目・涙声のコンボはどこへやら、今は熱っぽい視線を向けている。……あ、はにかんだ。教師と生徒ってだけでここまで態度が変わるのか……なんとも世知辛い。ところで、千冬さんってやっぱ教師なのか……？その疑問に答えるように、千冬さんは教壇に立つ。……めちゃくちゃ様になってるな。

「諸君、私が織斑千冬だ。君達新人をこの一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。そして君達の仕事はこの一年間鍛え抜くことだ。私に逆らってもいいが、言うことは聞け。いいな」

これなんて暴君？間違いなく俺の姉貴分、一夏の姉・織斑千冬という名の暴君だ。

にもかかわらず、教室の女子達は黄色い声（黄声）を上げていた。

「キャ――――！千冬様、本物の千冬様よ！」
「ずっとファンでした！」
「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」
「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」
「私、お姉様のためなら死ねます！」
命は大切にしましょう。今頃君の両親は号泣です。

きゃいきゃいと騒ぐ女子達に、千冬さんはかなりうっとうしそうな顔を向ける。

「……毎年よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

これが体裁ではなく、本当にうっとうしがっているのが千冬さんだ。
千冬さん、人気ってもんはお金じゃ買えないんだぜ？もうちょっと優しく――

「きゃぁぁぁぁぁっ！お姉様！もっと叱って！罵って！」
「でも時には優しくして！」
「そしてつけあがらないように躾をして～！」
「……全員叩かれればいいのに」
「……そして俺の優しい気持ちを返してくれ」

クラスメイトが元気でなによりですね。ぜひ叱ってあげてほしいです。ちなみに最後のは一夏、俺の順で言った。ってか、千冬さんが担任で俺達も驚いていたはずだったんだが……女子の黄声で逆に落ち着いた。

「で？挨拶も満足に出来んのか、お前は」

まさに辛辣という言葉がピッタリの口調だった。

「いや、千冬姉、俺は――――」

バゴッ！本日三度目。一夏の頭は今頃悲鳴を上げているだろう。

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

なるほど、いつもの呼び方はタブーなのか。

「いや、千冬様、なんでここに――――」

バゴォッ！やべ、すげぇ音した。ダメージもハンパない。これ二回分くらいあるだろ。

「織斑先生と呼べ。気色の悪い」

「……はい、織斑先生」

――と、ここまでのやりとりを目にしていた女子が疑問の声を上げた。

「え……？織斑君って、あの千冬様の弟……？」アウトぉ！千冬様って言ったな！？出席簿アタックの餌食になってしまえ！

「音無君は……お姉様の眷属！？」待てぇ！確かに千冬様って言っちまったが、それでも飛躍しすぎだろ！

「さ、三角関係っ！？」よーし、今言ったやつちょっと校舎裏に逝こうか？

「それじゃあ、ＩＳを使える男っていうのも、それが関係して……」ねーから！ありえねーから！千冬さんどんだけ万能だよ！？

「あぁっ、いいなぁっ、代わってほしいなぁっ」

最後のはほっとくとして、俺達は今、世界で初めてＩＳが使える男達として、ここ公立ＩＳ学園にいる。

――藍越学園（あいえつ）とＩＳ学園（あいえす）って似てるよな。うん。バカ丸出しである。

「……」

ふと、まだ興奮の冷めない教室から、低温の視線を感じた。視線の先をたどると、窓の外に目を向けていたはずの箒が、こっちをそれとなく見ていた。呆れを含んだ視線だが、他の感情が含まれているのが分かる。あれは……そんなことを思っているとチャイムが鳴った。

「さあ、ＳＨＲは終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ。」

なんという鬼教官……。これからの学園生活が真っ黒に塗り潰された気がするのは決して幻覚ではないだろう。

「……はぁ……」

ついにクセになってしまったため息をついてしまう。それを見逃してくれる程、目の前の鬼教官は優しくはなかった。

バゴッ！「返事はどうした？」

「……はい、織斑先生」

4―3。俺と一夏による出席簿アタック勝負は俺の勝利で幕を閉じた。……全然嬉しくねぇ……

第二話　続・自己紹介（後書き）

シャルをいつだせばいいのか……悩む。

第三話　幼なじみとの再会（前書き）

一話一話が短いですね……もう少し頑張らないと……感想待ってます～

第三話　幼なじみとの再会

「……ちょっといいか」

「「え？」」

思わず気の抜けた返事をしてしまう。それはそうだ。話しかけられるとは思っていなかったのだから。なぜかというと、今は一時間目の休み時間なのだが、教室に異様な雰囲気が充満しているからだ。その雰囲気の正体は俺達以外女子というこの状況。しかもクラスだけならまだしも、学園全体がそうなのだ。休み時間なのに休むどころか疲れが倍増だ。しかも『世界で初めてＩＳを使えた男達』ということは世界的にニュースになっていたので、在校生から学園関係者まで全員が俺達のことを知っているときた。そのせいで廊下には他クラスの女子から二、三年の先輩方まで詰めかけている。しかし男には慣れていないのか、誰も話しかけてこない。それはクラスの女子も同じで、『あなた話しかけなさいよ』から始まり、『話しかけて！』や『ちょっとまさか抜け駆けする気じゃないでしょうね』といった緊張感がその異様な雰囲気の全貌だった。

そんな空気の中から話しかけられるとは思うはずがなかったので、あんな返事をしてしまったのだ。呼ばれた方を向くと、そこにいたのは六年ぶりに再会した幼なじみだった。

「一夏、お前に話がある。廊下でいいか？」

「あ、ああ」

「待て、俺もついていっていいか？この空気の中で一人ってのは少しばかり厳しいもんがあるんでな」

「……別に構わない。行くぞ」

「ああ」

変な間があったし、一夏と二人で話がしたいんだろうが、そうはいかん。こっちも余裕がないんだ。

許しももらったし、そうと決まれば急ぐとするか。さっさとこの空気から脱出したい。そう思い、一夏と並んで箒についていく。

それで廊下に出たわけだが……俺達と箒から四メートル程の離れた包囲網が完成しているだけだった。……休める場所がないだろうが……。しかも全員聞き耳を立てているってのが嫌でも分かる。こんなの教室にいた時と変わらねぇじゃねーか。チクショウ。

「そういえば」

「ん？」

「何だ」

一夏が何か思い出したように話を切り出す。ってか箒……自分で呼びつけといて自分から話さないってのは新しすぎだろ……。

「去年、剣道の全国大会で優勝したんだってな。おめでとう」

「「……」」

こいつはこれを天然でしやがるから手に負えないんだ。堕とした女は数知れず、そんでもって堕とした張本人は気づかない、自覚すらないときたもんだ。そのせいで裏で何があったかも知らず……この話はよそう。頭が痛くなる。

「……おい一弥」

「……どうした箒」

一夏の言葉を聞くなり、口をへの字にして顔を赤らめた箒が俺に問いかける。

「……こいつはいつも、こんな感じだったのか……？」
「……こいつはいつも、こんな感じだったな……」

「？？？」

やべぇ……こいつ殴っていいかな……

「だっ、大体、何でそんなこと知っているんだ、お前は」

「何でって……新聞で見たし……なぁ一弥？」

俺に振るんじゃねぇ。俺は何もしてないぞ。

「なっ、何で新聞なんか見てるんだっ」

「落ち着け箒。新聞くらい好きに読ませてやれ」

それにしても、久しぶりに聞いたが相変わらず男みたいな口調のやつだ。あまり変わってなくて嬉しいっつったらまあ嬉しいがサムライみたいなやつだな。そんでもって中身は驚く程女の子ときたもんだ。

「あー、あと」

「なっ、何だ!?」

「……」

「あっ、いや……」

流石に自分の剣幕に気づいたのか、ばつが悪そうにする箒。まあ仕方ないだろう。俺でも分かるくらいに箒は一夏に惚れている。六年前、俺達の前から姿を消した後もずっと一夏のことから想っていたんだろう。それが今、こうして偶然にも同じ高校、同じクラスになっちまったんだ。テンパって当然だろう。

「久しぶり。六年ぶりだけど、箒だってすぐ分かったぞ」

「え……」

……全く、こいつときたら……

「……あぁ、久しぶりだな、箒。変わってなくてなによりだ」

「……久しぶり。一夏。一弥。よく分かったものだな……」

六年ぶりの再会にしては簡単すぎたが、それだけで俺達は元通りになれた。六年前のあの頃に。

「ほら、髪型一緒だし」

一夏がちょんちょんと自分の頭を指さすと、箒は長いポニーテールをいじってモジモジし始めた。……俺邪魔ですかね……？……教室戻るか……

「よ、よくも覚えているものだな……」

「箒のこと忘れるわけないだろ？幼なじみなんだから」

「「……」」

ギロッ。箒が一夏を睨む。照れ隠しっつっても睨むことないだろうに。俺も睨みたい気分だが。別の意味で。

「……さて、そろそろ教室に戻って次の授業の準備でもするかなー。じゃ、お先に」

そう言い残し、一人で教室に戻る。あんなハートマークが飛び交う桃色空間にいるくらいなら教室にいたほうがまだマシだ。

「……はぁ……」

教室に着くなりため息が出てしまう。なんか異常な早さでストレスが溜まっていくんだが……なんとかならねぇかな。

「どうしました？音無君。お疲れのようですけど……」

「ああ、山田先生。いや、ちょっとな……」

幼なじみ達がイチャイチャしてやがるんです、なんて言ったら卒倒しそうだなこの人……。男に耐性なさそうだし。

「それにしても、音無君は格好いい眼鏡をしてますね。どこのブランドですか？」

「いや、ブランドものではないけど。山田先生のはどこにでもあり

そうだよな」

「あぅぅ……。でも、ウチのクラスには眼鏡の子がいないんですよねぇ。ちょっと寂しいです……」

なぜだ。目がいいことはいいことじゃないのか？いや、そんなことより。

「じゃあ、眼鏡をかけてるのはこのクラスで俺と山田先生だけってことか……？」

「はい！そうなんですよ！仲間ですねっ！」

すげぇ嬉しそうだな。山田先生。

「そうなんですか～。二人だけなんですか～」

「はい！そうなんですよ！」

「なるほど、なるほど。……コンタクト用意しとくか」

結構小声で言ったんだが、山田先生には聞こえていたらしい。チッ、耳聡いヤツめ。

「ままま待ってください！なんで眼鏡外しちゃうんですか！？」

「え？外すなんて言ってませんよ？いやだなあハハハ。あ、チャイム鳴りましたね。それじゃあ俺はこれで！」

「ほ、本当ですか！？信じていいんですよねっ！？」

「もちろんです。俺は嘘はつきません」

チャイムが鳴ったのは紛れも無く本当のことだ。席に着くと、箒が戻ってきた。ってか……

「箒。顔赤いぞ」

「っ！？な、何でもないっ！」

ったく、あいつは……ってあれ？一夏がいな……あ、いた。扉の前でなんか考えてる。そんなとこに立ってると――――

バゴッ！鬼教官の餌食だってのに。

「さっさと席に着け、織斑」

「……ご指導、ありがとうございます、織斑先生」

どうせなら色恋沙汰の指導もしてほしいくらいなんだがな……。

第三話　幼なじみとの再会（後書き）

次はセシリアですか～……なんかやられキャラ的ポジションですよねセシリア。……セシリア派の方ごめんなさい。
作者は断然シャル派です。
シャル可愛いよシャル。

第四話　英国の代表候補生（前書き）

セシリア派の方ごめんなさい。

第四話　英国の代表候補生

「――であるからして、ＩＳの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したＩＳ運用をした場合は、刑法によって罰せられ――」

すらすらと教科書を読んでいく山田先生。ってか意外だ……山田先生のことだから、授業もあたふたしてる内に終了。そんな感じをイメージしてたんだが……腐っても教師ってことか……。

……そんなことより。

「……」

どっかりと積まれた教科書五冊。正直に言おう。サッパリ分からん。一番上のものをぱらりとめくるが、意味不明の単語の羅列にしか見えない。分かることといったら日本語ということくらいだ。

（一夏……俺は信じてるぜ。お前もこっち側ってな……。ってかみんな分かるのか？このアクティブなんちゃらとか広域うんたらとか、どういう意味なんだ？まさかこれ全部覚えるとか言わないよな……？）

ちらっと隣の席の女子を見ると、山田先生の話に時々頷いてはノートを取っている。

（ぐ……。この学園に入るヤツはみんな事前学習してるってのは本当なんだな……）

その反対側の席の男子を見ると、冷や汗ダラダラ、顔真っ青で俯いていた。……女尊男卑の社会になるワケだ。

（エリートには興味ねぇが……流石にこのままじゃヤバいな。勉強しとかねぇと。）

「ど、どうしたの？」

ふと、声のした方を向くと、一夏が声をかけられていた。一夏の様子がおかしいと思ったのか、声をかけた女子は緊張しているような、何か期待しているような、引きつった笑顔だった。

「あ、いや、何でもないんだ。ゴメン」

「そ、そっか……」

一夏の言葉を聞いて、がっかりしたような表情を浮かべてノート記入に戻る女子。

「織斑くん、何か分からないところがありますか？」

一夏と隣の女子のやりとりに気づいたらしい山田先生が、わざわざ聞いていた。今やってるとこってーと……七ページか。『ＩＳの稼動時間の重要性』うん、全然分からん。

「あ、えっと……」

「分からないところがあったら聞いてくださいね。なにせ私は先生なんですから」

えっへんとでも言いたそうに、胸を張る山田先生。聞くっつってもさっきの休み時間のやりとりで頼りにならないって分かっちまったしな……いや、もしかして授業についてはすごいっていう設定なのか？にわかには信じられないな……。

だが、一夏は信じてしまったらしい。あぁ……知ーらねっと……。

「先生！」

「はいっ、織斑くん！」

やる気に満ちた返事。いつまでもつだろうか？

「ほとんど全部分かりません」

……ここまで自信を持って自分がバカなことをさらけ出すとは……流石一夏。そこにシビレルぅ！でも憧れない。だってバカだもん……。

「え……。ぜ、全部ですか……？」

山田先生の顔が困り度百パーセントで引きつった。アンタの自信は二秒でノックアウトか……。

「か、一弥は分かるのか？」

「……お前と一緒にするな」

「うっ……」

「日本語くらい読める」

「違う！俺が言ってるのはそういうことじゃない！日本語くらい俺でも読めるわ！意味が分かるのかって聞いたんだ！」

「……女尊男卑とはよく言ったよな……」

「……」

と、ここまでのやりとりを教室の端で聞いていたらしい千冬さんがついに動いた。……手に出席簿を装備して。「……織斑、音無、入学前の参考書は読んだのか？」

参考書って……あのタウンペ○ジのことか？あいつが犯人だったのか……参考書だと侮ってたぜ……。

さて、どうするか。目の前の鬼教官に『読むのが面倒でした』なんて言ったら出席簿アタックの餌食だ。ここは例えをうまく使って回避に専念しよう。

よしっ！行くぜっ！

「ゲームを買ってもマニュアルは読まない主義なんです」

「古いタウンペ○ジかと間違えて捨てました」

バゴッ、バゴッ！バカな……完璧だったのに……。

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者共。あとで再発行してやるから一週間で覚えろ。いいな」

「タウンペ○ジを一週間で……だと……！？」

「いや、一週間であの分厚さはちょっと……」

「やれと言っている」

「「……はい、やります」」

はぁ。――――やるしかねぇか。
世界初の男ＩＳ操者とくれば、各国の研究者共がデータを欲しがるだろうし、日本政府にデータを謙譲すれば給料くらいもらえるだろ。そうなればもう父さん達の遺産に頼ることはなくなるし、自分で稼ぐとなれば――妹を高校にも大学にも行かせられるからな。
父さん達が死んだ時、あいつだけは守るとガキなりに決めたんだ。ここで逃げてたら死んだ父さん達やあの頃の俺に顔向けなんか出来たもんじゃない。

「え、えっと、音無くん、織斑くん。分からないところは授業が終わった後の放課後に教えてあげられますから、頑張って？ね？ねっ？」

――それに、俺達のことを気にかけてくれる、頼りになる先生もいるしな。

「そうだな。じゃあ早速、今日の放課後にでも」

「山田先生、よろしくお願いします」

それだけ言って、席に着く。千冬さんも教室の端に戻っていった。

「ほ、放課後……放課後に三人で授業……。た、大変ですっ！先生、強引にされると弱いんですから……。それに三人でなんて……」

――前言撤回。千冬さんに教えてもらおう。脳内トリップで意識のトんでる人に教わるなんてプライドが許さない。

ってか周囲の視線がいてーんですが。視線に物理干渉力があったら今頃ハチの巣だろう。そして千冬さんの極太レーザーで消し炭、と。

「あー、んんっ！山田先生、授業の続きを」

「は、はいぃっ！」

一向に妄想から帰ってこない山田先生を、千冬さんの咳ばらいが呼

び戻す。
山田先生は慌てて教壇に上がろうとして――こけた。

「は、はわわわぁわぁ」

……果てしなく前途が多難な気がするのは俺だけだろうか……？

☆　★　☆

「ちょっと、よろしくて？」

「ん？」
「へ？」

二時間目の休み時間、どうせまた視線マシンガンでハチの巣だろうと思っていた俺達は、いきなり声をかけられ、思わず素で返してしまった。
話してきた相手は、地毛の金髪が鮮やかな女子だった。白人特有の透き通ったブルーの瞳が、やや吊り上がった状態で俺達を見ている。ロールがかかった髪は、いかにも高貴なオーラを出していて、その女子も『いかにも』今の女子という感じだった。

今の世の中、ＩＳのせいで女性はかなり優遇され、女尊男卑の社会が完成している。早い話が『てめーら男はＩＳ使えないんですから私のパシリでもやっていればいいんですわ！』ということだ。（目の前の女子風）

つまり、そういう現代的な女子が目の前にいた。腰に当てた手が様になっている辺り、どこぞのお嬢様なのかもしれない。

……正直こういうヤツは苦手だ。相手をするだけ労力の無駄だからな。

「一夏、呼んでるぞ」

「え？俺だけ？」

適当に追い払ってくれ。俺は勉強したいんだ。

「貴方達二人に話があるんですのよ」

しかし俺の事情はお構いなしと言わんばかりに突っ込んできやがる。せっかくやる気になったってのに。さっさと追い払うか。

「チッ……どういう用件だ」

さっさと済ませてくれよ。そう思いながら俺が答えると、目の前の

女子はかなりわざとらしく声を上げた。

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないのかしら？」

「……」

うっぜぇぇぇぇぇ……。そりゃＩＳは女しか使えないさ。そしてＩＳは国家の軍事力だ。そうなれば当然女が偉くなるだろうよ。だが、その力を振りかざすのはおかしいだろ。弱い者に力を使うくらいなら世界平和のために汗を流してこいと言いたい。

「悪いな。俺、アンタが誰か知らねぇし」

実際知らないからな。自己紹介の時は千冬さんが担任ってことにかなりショックを受けていたからほとんど覚えてねぇし。

しかし、どうも目の前の女子（名前はまだ知らない）にとってかなり気に入らないものだったらしい。吊り目を細めて、いかにも男を見下した口調で続ける。……どうでもいいが、このクラス吊り目多いな。

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試首席のこのわたくしを！？」

あ、名前言った。まあ覚える気なんざさらさらねぇからすぐ忘れるだろうが。ってかそろそろ勉強したい。

「あ、質問いいか？」

一夏が挙手をする。そのまま相手してやってくれ。もう俺は知らん。さて、勉強、勉強。

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

がたたっ。このクラスノリがいいヤツ多いな……。実に面白そうだ。

「あ、あ、あ……」

「『アメンボ』」

「アメンボ？代表候補生ってアメンボなのか？」

「貴方っ、本気でおっしゃってますの！？」

すげぇ剣幕だなー。ちょっとからかってやるか。

「まあ落ち着けよ、オルゴールさん。情緒不安定なのか？」

「オルコットですわ！それに勝手に病人扱いしないでくださる！？」

「で、代表候補生って結局何なんだ？一弥、知ってる？」

「当たり前だろ？えーっと……国家代表ＩＳ操縦者の、その候補生として選出される人達のこと……だ。常識だろ？」

「教科書見ながら言っても説得力ないぞ？」

「……」

ふと、静かになったので前を向くと、オルゴールさんがこめかみを押さえながらぶつぶつ言い出していた。

「どうしたんだ？オルゴールさん。頭が悪いのか？精神科に行って来たらどうだ？」

「オ・ル・コ・ッ・トですわ！それに頭が悪いのではなく、頭が痛いのですわよっ！」

やべぇ……こいつおもしろっ。週七のペースで弄ってやるか。やっとこの学園で楽しみが出来たぜ。

「……信じられない。信じられませんわ。極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら……」

「お、おい……セシリアさん、どうしたんだ？」

「さあ？バカとエリートは紙一重ってよく言うしな。紙一重でバカなんだろ？」

「おいおい……あー、セシリアさん？セシリアさんってイギリスの代表候補生なのか？」

チッ……。もう少しストレス発散したかったんだがな……。

「そう！つまり、エリートなのですわ！」

「紙一重で？」

「紙一重どころか紙千枚はありますわよ！……まあ、本来ならわたくしのような選ばれた人間とはクラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解いただける？」

「そうか、それはラッキーだ」

「……バカにしてますの？」

いや、さっきからバカにしてるんだがな……。アホの子なのか？それにお前が幸運って言ったんだろうが。

「大体、貴方達ＩＳについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でＩＳを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、正直期待ハズレですわね」

なんだ？どや顔で返してきたぞ？仕方ない、ちょっとばかりお手本を見せてやるか。

「済まないな。今度教えてくれないか？オルドリルさん。どうすればそのドリルみたいに頭を高速回転できるんだ？」

毒舌はこう使うんだ。

「ドリルではありませんわ！それと、オルコットと何度言えば覚えていただけますのっ！？」

「わりいわりい。許してくれよ。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めなんだろ？」

「ふんっ！まあでも？わたくしは優秀ですから、貴方のような人間にも優しくして差し上げますわよ。ありがたく思ってくださいな。」

「え？優秀って優しさに秀でるって書くんだぞ？（嘘だが）そんなの当然の措置だろ。その高速回転するドリルは飾りか？」

「だからドリルは関係ないと言っているでしょう！それに、いつ高速回転したんですの！？」

本当、こいつは弄り甲斐のあるヤツだな。山田先生の次くらいにランク付けとくか。

「くっ……まあ、泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートなのですから」

「え……？いや、流石に男にその髪型は似合わないだろ。悪いが遠慮しとく」

「誰が！いつ！ドリルについて教えると言いましたのっ！？ＩＳについてに決まっているでしょうっ！」

「あれ？入試ってあれか？ＩＳ動かして戦うってやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

やべ、一夏のことすっかり忘れてた。ってか勉強ぉぉぉぉぉ！ヤバい！後は頼んだ一夏！

「あれ？俺も倒したぞ、教官。確か一弥もだ」

「は……？わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

ピシッ。ん？何か割れる音がしたぞ。氷にヒビでも走ったような…
…気のせいか？

「つ、つまり、わたくしだけではないと……？」

「いや、知らないけど」

「貴方！貴方も教官を倒したっていうの！？」

「な、何だ！？ドリルがキまってるぞ！？故障でもしたのか！？」

「質問に答えてくださいまし！そしてオルコットと何度言えば覚えていただけますの！？」

「お、落ち着けって。な？」

「こ、これが落ち着いて――――」

――キーンコーンカーンコーン――

カオスの世界を元に戻したのは三時間目の始まりを伝えるチャイムだった。チャイムって神が住んでるんじゃねぇ？

「……っ！また後で来ますわ！逃げないことね！よくって！？」

そう言って後ろの方の席に戻っていく。結局勉強できなかった……。まぁ面白いヤツ見つけたし、それでチャラって考えとくか。

☆　★　☆

「さて、この時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

一、二時間目とは違って、山田先生ではなく千冬さんが教壇に立っている。よっぽど大事なことなのか、山田先生までノートを手に千冬さんの話を聞いている。俺も真面目にノートくらい取らないとな。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

ふと思い出したように千冬さんが言う。代表者……素晴らしく面倒そうな響きだ。まぁ、ドリル辺りが立候補するだろう。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあクラス長だな。ちなみに、クラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点では大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

なるほど……つまりクラス長を決めるのか。そんでそのクラス長は対抗戦に出たりと色々な面倒な仕事がつく、と。なるほど、さっきの休み時間でドリルが突っ掛かってきた理由が分かったな。女子の注目の的である俺達に向かって大声で学年首席と叫べば、それはそれはみんなの頭に残るだろう。紙一重のエリート（笑）も大変だねぇ。わざわざ他薦させるつもりなんだろう。ドリル、プライド高そうだしな。

「はいっ！音無くんを推薦します！」

「「なっ！？」」

にもかかわらず、クラスの女子の頭にはドリルのドの字も頭に残っていないようだった。ってか俺かよ!?待て、そういう仕事は正直今までやったことがないし、それに後ろでも声が聞こえなかったか？ドリルのアテが外れたんだろうが、全くちっとも嬉しくない。

「それなら、私は織斑くんを推薦します！」

「お、俺!?」

「では候補者は音無一弥、織斑一夏……他はどうだ?自薦他薦は問わないぞ」

一夏、お前もか!……ってこれは流石にマズい。なんとかドリルのヤツをクラス長にしたいが……俺があんな工事現場で活用されているヤツを推薦するなんて冗談じゃない。ここは俺の候補を取り消そう。

「待ってくれ……さい!俺はそんなのやれません!」「そ、そうですよ!俺は別に――」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦された者に拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

「くっ……」

くそっ、ドリルの名前はまだ挙がらないのか！？ってか男が優遇されているのになんでこんなに嬉しくないんだ！？

「で、でも――」

「待ってください！納得いきませんわ！」

まだ反論しようとしている一夏を遮り、甲高い声が上がる。このアホの子みたいな声――ドリルかっ！やっと動きやがった！

「男がクラス代表だなんて、いい恥さらしですわ！このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国まで訪れてサーカスをする気は毛頭ありませんわ！」

わあい。すっごい男女差別。最早人ですらなくなってるよ。まあそれでドリルがハズレくじ引いてくれるってんなら喜んで我慢しよう。

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

なんかやっとエンジン温まってきましたわー！って感じだ。ってかあんなに叫んでよく声が枯れないな。今度どこまで声帯が耐えられるか実験してみよう。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ……！？」

あーあ……、一夏のヤツ、我慢できなかったんだろう、つい言っちまったって感じだ。仕方ない。フォローを入れておくとするか。

「言い過ぎだ、一夏。ドリルがファッションの最先端と思ってる国が自慢なんてあるワケないだろ？もう少し考えようぜ」

「貴方は口の聞き方を考えるべきですわっ！貴方達、わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

一夏の方を見ると、『やっちまった……』みたいな表情をしている。
それに対して俺は『やっぱこいつおもしろっ』的な表情をしていることだろう。

「決闘ですわ！」

バンッと机を叩くドリル。相当激昂しているのだろう、顔を真っ赤にして怒りを示していた。

「おう、いいぜ。たかがドリルが一夏の針千本に勝てると思うなよ」

「誰がそんな決闘をすると言いましたのっ！？ＩＳで勝負に決まっているでしょう！」

「はいはい、分かってるっての。んじゃ一夏、負けるなよ？」

「お、俺かよ！？」

「ふん。どうせ相手にならないでしょうから、二人同時でも構いませんわよ。イギリスの代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね！」

「だって俺タウンペ○ジ覚えなきゃいけねぇんだぞ？遊んでる暇はないんだ」

「俺もそうだよ。大体、一弥が煽ったせいでセシリアさんのエンジンが爆発寸前なんじゃないか」

「無視するんじゃありませんわっ！」

「落ち着け、セシリア・オルコット。音無もその辺にしておけ」

「しかし……！」
「はーい」

「返事は伸ばすな。そうだな、それならこうするとしよう」

「「「え？」」」

「どうせ音無と織斑には専用機が当たるし、今の時点で勝負をしてもオルコットの圧勝、二人が相手をしても連携などロクに取れずに決着が着くだろう」

千冬さんがそこで区切ると、教室がざわめいた。

「せ、専用機!?一年のこの時期に!?」
「つまりそれって政府からの支援が出てるってこと!?」
「あぁ～いいなぁ……。私も専用機欲しいなぁ」

専用機云々のことはひとまずそこらへんに捨てといて……

「まあ、そうですね。経験から差がありますし」

「あら、音無一弥、貴方にしては殊勝な態度ですわね」

「ドリルの回転もケタ外れです」

「殴らせて!あの男を一度でいいから殴らせてくださいまし!」

なんか後ろが騒がしいけど、気にしない方向で行こう。

「全くお前は……。それでだ、まずは一週間後、織斑と音無が勝負をし、勝った者がオルコットと勝負、ということにする。異論はあるか」

なるほど、とりあえず初心者同士を戦わせて少しでも経験を積ませようってことだろう。勝ったら二回も戦うことになってしまうが――

「分かりました。それで構いません」

「俺もです」

――千冬さんは俺達が勝てると信じてあの提案をしてくれたんだ。それを蔑ろにする程俺は腐っちゃいない。

「確かにすぐに倒してしまったら面白味がありませんものね。わたくしの方もそれで構いませんわ」

なんかドリルが喋っていたが、そんなことはどうでもいい。そんなことより――

「さて、まずは一夏と勝負か。手加減なんて下らない真似はしてくれるなよ？」

「それはこっちの台詞だ。それに負けるつもり自体さらさらないからな？」

俺達はニヤリと笑い合い、拳を打ち付けた。

「さて、話はまとまったな。勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑と音無は準備をしておけ。では授業を始める」

パンッと手を打って千冬さんが話を締める。ドリルはどうでもいいが、一夏には負けられないな。

（よし、真面目に授業を受けよう）

今の目標はとりあえず一週間後。正直、結構楽しみにしている俺がいた。

第四話　英国の代表候補生（後書き）

少し長くなってしまいました……楽しみが増えたと考えていただければ幸いです。

第五話　乙女と智将と鈍感と（前書き）

感想お待ちしています

第五話　乙女と智将と鈍感と

「「意味が分からん」」

今は放課後、俺達は机の上に転がる屍と化していた。
とにかく専門用語の羅列なのだ。俺の一抹のやる気も一蹴され、今日一日ほとんど全くついていけなかった。
しかも放課後になると少しは落ち着いたのか、学年、クラス問わず押しかけ、きゃいきゃい小声で話し合っている。これでもマシな方なのだ。昼休みになったときなんて……やめよう。自分で自分の傷をえぐるようなもんだ……。

「あっ、二人共、まだ残ってくれてたんですね。よかったです」

ふと顔を上げると、山田先生が書類を片手に立っていた。何かあるのか？

「どうしました？山田先生」
「手短にな。早く帰りたい」「えっと、二人の寮の部屋が決まりました」

ＩＳ学園は全寮制だ。生徒は全て寮で生活を送ることが義務づけられている……と、今日もらったばかりの生徒手帳に書いてある。まあ各国の勧誘から守るためだろう。実際、どこの国も優秀な操縦者

の勧誘に必死だ。

「……一週間は自宅から通学って話じゃなかったか？」

「そうなんですけど、事情が事情なので……二人共、そのあたりのこと政府から聞いてます？」

最後は俺達だけに聞こえるように耳打ちしてきた。

日本政府は今まで前例のない『男のＩＳ操縦者』だから国として保護と監視を付けたいようだった。それに、あのニュースが流れてから自宅にはマスコミだの各国大使だの果ては遺伝子工学研究者だの……。『ぜひとも生体を調べさせてほしい』だと？却下に決まってるだろ……。

「そういうわけで政府特命もあり、とにかく寮に入れるのを最優先したみたいです。二人一緒なんですが、大丈夫ですか？」

「山田先生、大丈夫だから。とりあえず離れようか？」

「あっ、いや、これはそのっ、わ、わざととかじゃなくて……！」

「……それで、寮のことは分かった。じゃあ荷物とか準備したいし、一回家に帰っていいか？」

「あ、そうだな。何も用意してなかったし」

「荷物なら私が手配しておいた。ありがたく思え」

「千冬さん……じゃなくて……織斑先生、俺の荷物までは無理なんじゃ……？」

千冬さんって言っただけで睨まれた……。もうヤダこの人。睨みに『ギロッ』って効果音がつきそうだよ。極太レーザー？これ波動砲クラスじゃねぇの……。

「音無の分は妹さんに頼んでおいた。生活必需品だけだがな。着替えと携帯電話の充電器で十分だろう」

なんて大雑把な……。人間には日々の潤いも必要だと思います、閣下。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。お風呂は……各部屋にシャワーがあるのでそれを。大浴場もありますけど……今のところ使えません」

「え、なんでですか？」

え、こいつ本気で聞いてるんですか？

「……お前女子と風呂入りたいのか？分かった、後で箒に頼んどいてやる」

「あ……ち、違うって！それに、なんで箒なんだよ！？」

「お、織斑くん、女子とお風呂に入りたいんですかっ！？だっ、ダメですよ！」

「い、いや、入りたくないです！」

「ええっ？女の子に興味ないんですか！？それはそれで問題のような……」

あれー？この人結構人の話聞いてない？しかも山田先生の言葉に反応した女子が『婦女子談義』とやらが花咲いていた。

「織斑くん、男にしか興味ないのかしら……？」

「それはそれで……いいわね」
「音無くんとの……禁断の恋っ！？」今言ったヤツの顔は……よし覚えた。覚悟してやがれよ……。

「んじゃ行くか、一夏。早くこの視線から解放されたい」

「……そうだな。それじゃ先生、色々ありがとうございました」

俺達はため息混じりに立ち上がり、やっと見つけた安息の地へ急ぐのだった。

☆　★　☆

「あ」
「ん？」
「む……」

今は入学式翌日の朝八時。一年生寮の食堂なんだが、ばったりと箒に会ってしまった。

「よ、箒。一緒にメシ食わないか？」

「む……いいだろう」

「一弥、箒。あそこ空いてるぞ」

一夏、箒、俺でテーブルに着く。にしても……

「久しぶりだな、こうして三人で会うのなんて」

「昨日も会っただろう」

「そりゃそうだけどな。何にしても嬉しいもんには変わりねぇな。なー箒ー？」

「な、何を言うかっ。そ、その……確かに嬉しいけど」

ひとしきりモジモジした箒は、ごまかすつもりなのかご飯を掻き込んでいる。可愛いヤツめ……。そして一夏、その『？？？』って表情やめろ。殴りたくなるだろうが。

「にしても、昨日は大変だったな……」

「ああ……普通部屋まで来るか……？」

昨日の夕食後。部屋に戻った俺達を待っていたのは女子の訪問という名の拷問だった。実際休めた時間が部屋に着いて夕食を取りに行くまでの十分間。安息の……安息の地がぁ……っ！

「ふん。その程度で音を上げるとはな。そんな調子であの代表候補生に勝てるのか？」

「「なんとかなるだろ」」

「……その自信はどこから湧いてくるんだ」

「そう思うならＩＳについて教えてくれよ。箒なら詳しいだろ？」

「む……」

ＩＳを創り出した人は篠ノ之束（しののの たばね）というんだが、苗字から分かるよう

に箒は束の妹だ。しかし、本人はそれを快しとしないのか、公言したがらない。実際、そのせいで六年前、離れ離れになってしまったのだ。無理もないだろう。

「だ、ダメか……？」

一夏が捨てられた仔犬のような目をする。こいつはまた……。

「わ、分かった！教えてやるからそんな目で私を見るな！」

こうなるんだよ。幼なじみとしてこういう時反応に困って仕方ない。

「……はぁ」

もうため息しか出ねぇっての。

☆　★　☆

「あの時は安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようなんて思っ

てなかったでしょうけど」

「ふーん」

昼休み、早速俺達の席に（弄られに）やってきたドリルは腰に手を当ててそう言った。そのポーズ好きだなー。

「まあ？一応勝負は見えてますけど？流石にフェアではありませんものね」

「頭の回転（笑）が違うもんな」

「そういうことではありませんわ！いいでしょう、庶民の貴方にに教えて差し上げますわ」

「ドリルの極意かっ！？だが断る！」

「ドリルのドの字も言っていないでしょう！真面目に聞いてくださいまし！」

バンッ！両手で机が叩かれた。おいバカ教科書落ちただろバカ。

「こほんっ、実はこのわたくし、セシリア・オルコットはイギリスの代表候補生……つまり、現時点で専用機を持っていますの」

「なん……だと……？」

「ふふん。驚いているようですわね」

「お前の名前ドリルじゃなかったのか？」

「いい加減ドリルから離れてくださいませんか！？」

バンッ！こらバカノート落ちただろバカ。

「こほんっ、さっきの授業でも言っていた通り、世界でＩＳは４６７機。つまり、専用機を持つものは全人類六十億超の中でもエリート中のエリートなのですわ」

「そうなのか……」

「ええ、そうですわ」

「人類って今六十億越えてたのか……」

「そこは重要ではないでしょうっ！」

バンッ！ああバカタウンペ〇ジ落ちただろバカ。

「貴方！本当にバカにしてますの！？」

「そんなことないもんっ！」

「嘘つくんじゃありませんわよっ！なら、どうしてそんな口調になるんですの！？」

面白いからに決まってるだろ。

「どうしてだろうな、一夏」

「お、俺かよ！？え、えーっと……」

一夏に振る。本気で考えている。ただの真面目くんのようだ。

「な、なんでだろうな、箒」

考えてその案しか出なかったのか……。一夏が話を振るとギンッ！という効果音がつきそうな視線が飛んできた。『私に振るな！』と無言で告げている。ってか人それぞれ視線って違うんだな。千冬さんのは波動砲で消し炭、箒のは日本刀で真っ二つって感じだ。どっちにしろ怖いことには変わりない。

「そういえば貴方、篠ノ之博士の妹なんですってね」

箒は自分に矛先を向けてきたドリルに、鋭い視線を返す。

「妹というだけだ」

ちょ、やめたげてよぉ！怖い怖い！本気ですごむなよ、怖いから！ほら、ドリルなんか「う……」って感じで怯んでるじゃん！どこぞの極道かよお前は！

「ま、まあ、どちらにしてもこのクラスで代表に相応しいのはわたくし、セシリア・オルコットであるということをお忘れなく」

ぱさっと髪を手で払って回れ右、そのまま立ち去っていった。……逃げたな。

「箒」

ふと声のした方を向くと、一夏が箒に話しかけている。フォローのつもりだろう、さっきのやりとりで箒が妙に浮いた感じになったからな。

「一弥。昼食べに行かないか？箒も一緒にさ」

少し待つと箒と腕を組んでこっちに歩いてきた。ってか何やってんの……？箒真っ赤じゃん。

「い、一夏放せっ。一人で歩けるっ」

「放したら逃げるだろ？こうでもしないと一緒に昼食えないじゃん」

「よ、余計なお世話だっ！」

「なんだよ、幼なじみで同門なんだ。これくらいの世話くらい焼かせてくれよ」

「うぅっ……そ、その……ぁりがとぅ……」

「え？今なんて？」

「な、何でもないっ！早く行くぞっ！」

……なるほどなるほど。つきあってられねぇっての。

「……はぁ」

「ん？どうかしたのか、一弥？」

「頼みがあるんだ一夏。一発殴らせてくれないか？」

「嫌に決まってるだろ！？」

「おい、二人共」

「「え？」」

「今日の放課後、剣道場に来い。腕がなまってないか見てやる」

そういえばＩＳについて教わるって約束したんだっけ。ＩＳに……ついて。

「俺剣道やったことねぇんだけど」

「いや、ＩＳについて聞きたいんだけど」

「見てやる」

「「……はい」」

☆　★　☆

「どういうことだ」

「どういうことと言われましても……」

「一弥の方はまだ分かる。初めてと言っていたしな。むしろ初めてにしてはかなりやる方だ。才能があると言っても過言ではない」

「それは……っ、どうも……っ、嬉しく、ねぇけど……っ」

何コレ？何で剣道ってこんな疲れるの？マジで死にそうなんだけど。

「だがな……一夏」

時間は放課後、場所は剣道場。今もまたギャラリーは満載で、俺達は箒の言う稽古を受けていた。
今は一夏の方を向いている箒。手合わせから十分。一夏の一本負け。こっちからは見えないが、面具を外した箒の目はさぞ吊り上がっていることだろう。

「どうしてここまで弱くなっている！？」

「えーっと……受験勉強してたから？」

「……中学では何部に所属していた」

「自宅警備。三年連続皆勤賞だ」

「お、おい、一弥っ！」

「いや、事実だろ……」

まあ、実際はバイトしてたんだけどな。家計助けるために。

「……なおす」

「ほ、箒さん？」

「鍛え直す！ＩＳ以前の問題だ！これから毎日放課後三時間みっちり稽古を付けてやる！一弥もだ！」

「俺まで！？俺は関係ないだろ！？」

「さ、三時間は長くないですか？それよりＩＳのことをだな」

「それ以前の問題だと言っている！」

うわあ。すげぇ怒ってる。てか俺関係なくね？とばっちりくね？

「情けない。ＩＳならまだしも、剣道で男が女に負けるなど……悔しくはないのか！」

「そりゃ、まあ、格好悪いとは思うけど」

「格好？格好を気にしている場合か！そんなことだから貧弱になるんだ！」

「うぐぅぅ……」

いやはや、尻に敷かれるってこういうことを言うんだろう。実に勉強になる。

「気持ち良くなったりするのか？」

「なるかっ！」

「ふん……軟弱者め」

箒はそれだけ言うと、軽蔑の眼差しで一瞥して更衣室に行ってしまった。ありゃ相当怒ってるな。

「よう、最低辺。気分はどうだ?」

「……最高に最悪だ」

そりゃそうだろうな。気持ちいいなんて言われたら親友やめてるところだ。

「最悪なら汗でも流してすっきりしたらどうだ?最低辺なら何しても上がるだけだろ。ちょうどここに練習相手もいることだしな」

「……そうだな。んじゃ、ちょっとばかり本気出すか」

「死亡フラグだぜ?それ」

やろう。もう落ちることはない。落ちようがない。
俺達は、こんなところで負けていられないのだから。

（少しきつく言い過ぎただろうか……）

◇

更衣室で着替えをしながら、箒はずっと同じことを考えていた。

（い、いや、あれくらいでいいのだ。たるんでいるのが目に見えている）

一夏は、六年前の幼なじみは強かった。そして格好良かった。

（ま、まあ、その、なんだ、格好は……わ、悪くないけど）

六年前よりも大人びて、ただ生意気だっただけの瞳は、わずかだが大人の男を感じさせるものに変わっていた。

（一弥も余裕があったし……成長しているのだな……それにしても……）

頭に巻いた手ぬぐいを解き、髪に触れる。長く伸びたそれは、後ろでくくってもまだ腰近くまで届く程だ。

（よく私だと分かったものだ……）

「ふふっ」

それが、純粋に嬉しい。一夏は新聞で昨年の剣道全国大会優勝を知ったというが、どうせ写真もない端の方の記事だろう。それでも、気づいてくれた。

箒も十五才の春を迎えた少女である。恋の一つや二つしていてもなんら不思議はない。

「……はっ！？」

ふと、鏡に映った自分の顔を見て我に返る。恋のため息をつく乙女そのものの顔に、軽く引く。

（と、とにかく、明日から放課後は特訓だ。人並み程度に使えるようになってもらわなくては）

何が困るのか自分でも分かっていないが、箒は腕組みして何度も頷いた。

（それに――）

それに、一夏と放課後に会える口実ができた。一弥もいるが、自分の気持ちを知っているだろうし、いい感じにしてくれるだろう。

「いや！そ、そのような不埒なことは考えていないぞ！」

そう、そうだ。下心なんてあるはずもない。私は純粋に、同門の不出来を嘆いてるだけだ。同門故に面倒を見てやるだけだ！

「故に正当だ！」

だだっ広い更衣室で一人、握り拳を作って声を荒げる箒だった。

第五話　乙女と智将と鈍感と（後書き）

次はやっと戦闘シーンです。

第六話　親友・ライバル・好敵手？（前書き）

テストが始まりました。勉強？なにそれ美味しいんですか？

第六話　親友・ライバル・好敵手？

そして翌週、月曜。一夏との対決の日。

「なあ一夏」

「どうした一弥」

「気のせいかもしれないんだが」

「うん。気のせいじゃないぞ」

「「ＩＳの練習してねぇじゃん」」

……

「どういうことだ箒っ！納得いく説明をしてもらおうか！？」

「なんでＩＳの対決なのにずっと剣道の稽古だったんだ！？」

「し、仕方ないだろう？お前達のＩＳがなかったのだから」

「ＩＳなくても予備知識とか基本とかあるだろ！むしろそっちがメインだったんだけど！？」

「……」

「「目をそらすなぁっ！」」そう、俺達のＩＳは何かごたついているらしく、まだＩＳが到着していない。

「おおお音無くんっ織斑くんっ！」

山田先生が俺達のところにやってきた。本気で転びそうで見てるこっちがハラハラする。

「落ち着け、山田先生。はい深呼吸～」

「は、はい……ってあああっ！？お、音無くんっ眼鏡はどうしたんですかっ！？」

「え？ＩＳで戦闘中は邪魔でしょ？コンタクトにしたんですよ」

「じ、じゃぁ、普段の授業の時はつけるんですよねっ？ね？ねっ？」

「コンタクトって楽だな～。今度からこれにしよ」

「うぅぅ……唯一の眼鏡仲間が……接点が……ぐすんっ」

すごい泣き出しそうだ。ってかそんなことより……

「で、どうしたんですか？山田先生」

「あ、そ、そうですっ！来ました！二人のＩＳ！」

「「――――え？」」

「そういうわけなので、織斑くんは第三アリーナ・Ａピットに向かってください！音無くんは私についてきてくださいね」

「え？あ、ちょっ山田先生！？」

急いで山田先生についていく。それにしてもこのタイミングで届くとは……まさか狙ってたんじゃないだろうな。

そうこうしている内に第三アリーナ・Ｂピットに到着。ゴゴッ、と鈍い音がして、ピット搬入口が開く。斜めに噛み合うタイプの防壁扉は、重い駆動音を響かせながらゆっくりと向こう側を晒していく。

――そこには『黒』がいた。

「へぇ……これが……」

「はい！音無くんの専用ＩＳ『黒奏』（くろかなで）です！」

黒奏。無機質なそれは、ただこの時を待っていたように見えた。

「では、装着してみてください！時間がないのでフォーマットとフィッティングは実戦で勝手にやってくれますので」

せかされ、俺は漆黒のＩＳに触れる。

「これは……」

試験の時のように、初めてＩＳに触れた時に感じたあの電撃のような感覚はない。ただ馴染む。それだけだ。

「背中を預けるように座ってくださいね。後はシステムが最適化しますので」

かしゅっ、かしゅっ、という空気を抜く音が響く。そして一体、融和、適合。俺と黒奏が『繋がる』。
解像度を一気に上げたようなクリアな感覚。視界中心に広がって、全身に行き渡る。

「音無くん、気分は悪くないですか……？」

「ああ、問題ない」

そう言って俺はピット・ゲートに進む。体を傾けただけで、黒奏はふっ、と浮かび上がって前へ動いた。そうしてる間にも、黒奏は膨大な情報量を処理している。最適化処理、その前段階の初期化。
そうしてる内に、ゲートが開放され、俺は空へ飛び立った――――。

一夏はまだ来てはいないようだった。黒奏は未だ最適化と初期化を続けている。
――――黒奏。俺だけのＩＳ。その身は全てを飲み込むが如く漆黒。
ふと動かしてみると思った場所に動いてくれる、俺の相棒（パートナー）。
ふと、前からゴウンッと音がして、真っ白の機体が飛び出してくる。
――――操縦者織斑一夏。ＩＳネーム『白式』。戦闘タイプ近距離型。

特殊装備有り――――。

「悪いな、待たせたみたいで」

「そうでもねぇさ。それどころかもっとゆっくりしてくればよかったのによ」

一夏が武器を出す。近接ブレード。それと――――それと……？

「え……そんだけ……？」

「え……こんだけ……？」

どうやら一夏の装備は刀一本らしい……箒との特訓が生かせそうでなによりだ。

「ハッ！悪いな一夏！この勝負勝たせてもらうぜ！？」

「くっ……」

装備一覧を見ると、『誘導武器』と書かれているものが一つだけだった。それでも一夏よりはマシだろう。俺は《名称未設定》の装備を呼び出し（コール）、展開する。

「……なんだこれ」

出てきたのは両刃の――――ナイフ？が八本。持つ場所もなく、空中に黒奏と平行して浮かんでいる。少し動かしてみたが、俺の回り一メートルから離れてくれないようだった。愛されてるね、俺。

「「……」」

なんだこの空気。ギャラリーは沸いているのに渦中の俺達は全く盛り上がらない。てかいつ始めればいいんだろ。

「……行くぞっ！一弥あああああっ！」

「かかってこいやあああああっ！」

泣いてない！俺は泣いてないぞ！目から汗が出てるだけだ！
そんなことを考えている内に一夏が目の前に迫る。――――速い！

「くそっ！」

毒づき、八本のナイフを操って迎撃しようとするが、一夏の近接ブレードに敵うはずもなく、袈裟斬りが右腕に当たってしまう。

「ぐ……っ！」

――バリア貫通、ダメージ３７。シールドエネルギー残量、６１３。実体ダメージなし。

「どうしろってんだよっ！」

とりあえず逃げるしかない！そう思い後方に第二撃を回避、そのまま距離を取る。こうなったら最適化と初期化が終わるまで逃げ続けるしかない。

しかし、一夏の白式のスピードは俺の予想、そして黒奏のスピードを上回っていた。すぐに追いつかれ、近接ブレードを叩きつけてくる。くそっ、箒の稽古が役に立ってんじゃねえか。

「はあぁっ！」

「ちぃっ……！」

こうなれば仕方ない。最適化と初期化が終わるのは俺の方が早いはずだ。なるべくシールドエネルギーの消費を抑え、それが終わった

時に瞬殺する！
俺の中で戦略を立て、一夏と距離を取る。シールドエネルギー残量は残り５９３。気を抜いて一夏の斬撃を受け続ければすぐに決着は着いてしまうだろう。そう思っている間にも一夏は接近してくる。今度は八本のナイフを総動員し、受けに徹する。それでも一夏のブレードが思った以上に威力があるのか、押されっぱなしだ。

――ダメージ２８。シールドエネルギー残量、５６５。実体ダメージ、なし。

くっ、これでも無理か……！こうなったらもう回避しかない。一夏の方は操縦に慣れてきたのか、距離を取ろうとしてもピッタリついて来る。そこに隙が生まれ、大上段を叩き込まれる。

――バリア貫通、ダメージ５３。シールドエネルギー残量、５１２。実体ダメージ、レベル低。

「くそっ！」

回避に専念しながらも、今度は八本のナイフで迎撃する。だが効いてる感が全くと言っていい程しない。これなんてリンチだよ……！？

シールドエネルギー残量、４３９。絶体絶命だった。

☆　★　☆

戦闘開始から約二十分強……ってとこか？俺のシールドエネルギー残量は２００を切り、それに対し一夏の方は無傷と言っても過言ではない。

「おい一夏。弱いもんイジメは楽しいかよコンチクショー」

「ははは……まあ勝負だからな。手加減はダメだろ？」

「当たり前だっつの」

そんなことしやがったらドリルで風穴開けてやる。
それにしてもマズすぎる……最適化と初期化はまだか！？

「それじゃあ、一気に行くぞっ！」

チッ……やるしかねぇ！

「こいやぁっ！」

一夏が近づき、突きを仕掛けてくる。それをギリギリで回避し――

―こっちも一夏に近づく。

「っ！？」

零距離になれば剣を振っても当たらない。しかし白式の機動力があればすぐに距離を取られる。それなら――

「くっ……！」

俺は右手で刀を掴み、引き戻せないようにする。さらに自分の方へ引っ張り、空いた左手の五指を揃え、三本のナイフと共に手刀を一夏の脇腹に突き出す。

「がっ！」

手刀と同時に掴んでいた右手を放し、一夏を吹き飛ばす。あのまま攻撃を繋げてもよかったんだが、目的は時間稼ぎだ。目的を見失っては勝機も見失う。

そうこうしている内に、一夏が突撃してくる。今度は下段。俺は真上に回避し、今度は一夏の顔面に掌底を入れる。もちろんシールドエネルギーに阻まれるが、目の前に掌底が来たら目をつぶってしまうのが人間だ。その隙に体を前転させ、二本のナイフと共に踵落としをぶち込む。

「ぐっ！」

――やっぱりな、思った通りだ。

一夏は速い分、装甲が薄い。それに対して俺は遅い分装甲が硬い――つまり頑丈なのだ。そこを利用すれば、俺にも勝機はある！

再度突撃してくる一夏。いいね、この緊張感。回避が少しでも遅れたらすぐに決着が着く。シールドエネルギー残量、１８２。まだまだ勝負はこれからだ！

「つあぁっ！」

今度は水平斬り。それを下方に屈んで避ける。一夏の脇腹に再度手刀をぶち込もうとしたとき――膝が目の前に現れ、顔面に直撃した。

何が起きた！？いや、間違いない。一夏が俺と同じく格闘術を使ったのだ。顔面に膝が入ったせいで致命的な隙が生まれ、頭に大上段を受けてしまう。

――バリア貫通、ダメージ６２。シールドエネルギー残量、１２０。実体ダメージ、レベル低。

一夏が格闘術を使い、隙がなくなった以上、もうあの戦法は役に立たない。完全に勝機を失い、半ば絶望しかけた――その時。

――フォーマットとフィッティングが終了しました。確認してください。

希望の光が差し込んだ。刹那、我が身そのものである黒奏が黒い光の粒子に弾け、消え、形を成す。

これでやっと、俺専用の機体になった。

なにより変わったのは、その武器だった。

――剣状多腕式誘導突貫縛鎖・《雨簫》（あまかがり）。

「えぇぇっ!?今まで初期設定で戦ってたの!?」

「そ、それにしてはレベル高くなかった?」

「じ、じゃあ織斑くんも……」

ギャラリーがざわついていたが、そんなことはどうでもいい。

八本のナイフ。今はその使い方が分かる。全く待たせやがって……

冷や冷やさせんじゃねぇよ。

「わりぃな一夏。こっからがメインみたいだぜ?」

口ではそういうが、正直時間がない。もたもたしていたら一夏も一次移行（ファースト・シフト）が終わってしまうだろう。その前に決着を着ける!

俺は四本のナイフを一夏に向け、そして――発射した。

「っ!?」

四本のナイフ――いや、鎖というべきだろうそれは、一夏を喰らわんと、穿たんと一夏に猛スピードで接近する。これが俺の武器、雨簫だ。先端が槍のように尖っており、直線的な軌道で猛スピードで相手に接近、貫く。俺の命令で動き、漆黒の色をしたそれらは相手に絡み付かせ、動きを封じることも可能だ。今まさに一夏の刀と左足を捕らえ、残り六本で一夏を滅多刺しにする。

しかし、どうしても火力に欠ける。この勝負が終わったら粒子砲でも装備しよう。

鎖に縛られた一夏に勝機はない。一夏のスピードが、刀が封じられた今、なす術などないだろう。

――一次移行以外には。

一夏が光に包まれ、形状を変える。絡み付いた二本の鎖は引きちぎられ、残りは六本になってしまった。

一夏の光が弱くなる。見ると、最初の工業的な凸凹は消え、滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的な、どこか中世の鎧を思わせるデザインへと変わっている。

「……こっからがメインです、ってか？ったく……」

「待たせたな、一弥」

「そりゃこっちの台詞だ。気にすんな」

全ての条件が整った。準備運動も十分。今からやることはただ一つ。

「「全力でぶっ飛ばす！」」

負ける気がしねぇ！俺は空高く飛び上がり、六本の雨簪を字の如く、雨のように降り注がせる。一夏はそれを回避し、新しく光を纏った刀で弾き、それらを防ぐ。一夏はその場を動かない。いや、動けないのだ。六本の剣鎖を防ぐのに精一杯だ。

――マズい。このままだと負ける。

一夏の動きを封じるのはいい。時々攻撃が当たり、シールドエネルギーをがりがりと削っていく。

しかし、雨簪は脆いのだ。いつ一夏の刀に破壊されてもおかしくない。

そしてついに一本、二本と鎖が壊され、残り三本になった時、余裕が出来た一夏がこっちに接近してくる。

こうなってしまえば勝つのは難しい。かくなる上は――

俺は残った三本の雨簪を引き戻し、待機状態にする。刀で例えるなら鞘に納めている状態。そこから一気に噴射し、抜刀の如く一夏を貫く！

それでも俺は勝てないだろう。避けられてしまえばそこでゲームセットだし、確実に当たるまで引き付ければ一夏の刀が俺を貫く。だが、勝てないからといって勝負を投げるのは死んでもごめんだ。ここまできたんだ、せめて一矢報いないと気が済まない。

「来い……一夏ぁっ！」

「あぁぁぁぁぁっ！」

俺の攻撃は三本とも一夏を貫いた。しかし、一夏の刀もまた、俺を貫き、残ったシールドエネルギーを残さず刈り取った。

そして一夏の勝ちを告げるブザーが鳴り響く。

『試合終了。引き分け（ドロー）です』

……え？

「あれ……？」

多分俺は全力で「なんで？」という顔をしているだろう。向き合った一夏もぽかんと口を開けて同じような顔をしている。
観客達は物凄い拍手と歓声を俺達にくれたが……意味が分からん。

何が起こったか分からないまま試合は終了。勝負の結果は――引き分けに終わった。……なんで？

第六話　親友・ライバル・好敵手？（後書き）

初の戦闘シーン。文才なくてスイマセン……感想お待ちしています。

第七話　クラス代表決定戦！（前書き）

感想待ってます

第七話　クラス代表決定戦！

「あれだけ有利な状況であのざまか、大馬鹿者」

今は勝負が終わった後の放課後。一夏は千冬さんのありがたい説教を受けていた。いつの間にか馬鹿者から大馬鹿者にランクアップしている。千冬さんらしいと言ったらそこまでだが。

「武器の特性を考えずに使うからああなるのだ。身をもって分かっただろう。明日からは訓練に励め。暇があればＩＳを起動しろ。いいな」

「……はい」

「音無くんっ、すっごく格好良かったですよっ！誘導機器を初めてであそこまで使いこなせるなんてすごいですっ！」

「ははは……どうも」

対して俺のサポート役は山田先生なのでさっきからベタ褒めである。嬉しくないといったら嘘になるが、千冬さんを前にして手放しで喜ぶのも気が引ける。

「えっと、二人のＩＳは今待機状態になってますけど、呼び出せばすぐ展開できますからね。これに規則が書いてあるので読んでおいてください」

どさっ。どさっていったよこれ。目の前のこれはなんだ？ＩＳ起動におけるルールブックと書いてあるが、どこからどうみてもタウンペ〇ジにしか見えない。……何ページあるんだよ、これ……。

「何にしても今日はこれでおしまいだ。帰って休め」

「あ、織斑先生、聞きたいことがあるんですけど」

「なんだ」

「ドリル戦っていつやるんですか？」

「ふむ……そうだな。二日後くらいでいいだろう。一夏の白式もそれくらいで準備が終わるだろうしな」

「そうですか、分かりました」

「ち、ちょっと待て！なんで俺がセシリアさんと戦うんだ？引き分けだっただろ？」

「ほう、お前に雨簗を五本破壊、三本負傷されたんだが、それで戦えっていうんだな？」

「う……」

雨簗の修復は待機状態の黒奏がやってくれるが、なかなか時間がかかるんだ。今回の被害だと、よくて一週間、悪くて十日はかかるだろう。

「話はまとまったな。さっさと帰って休め」

「帰るぞ、一夏、一弥」

って箒いたのか……会話に参加してこないからさっさと帰ったのかと思ったんだけどな。

「一夏」

「ん、なんだ？」

「その、なんだ……負けて悔しいか？」

「いや、俺負けてないんだけど……」

「負けたも同然だろう。一弥の方はなかなかの健闘だったが、十分勝てた試合だと思うが？」

「……はい、そうですね」

「お前弱いな……」

まあ、竹刀持ってるサムライにすごまれたら流石にきついか……。
一夏は気を取り直すためか、深呼吸をした。

「悔しいよ。またやりたいな」

そう、一夏は答えた。どうせ二日後にドリルと戦うだろうが、……そういうことじゃない、か。こいつは俺とまた決着を着けたいと言っているんだろう。

「そ、そうか。それなら、いい」

なんかどもってるぞ、箒。俺邪魔かな？ちょうど眠いところだし、さっさと部屋に戻って寝よっかな。

「あ、明日からは、あれだな。あ、ＩＳの訓練も入れないといけないな」

「ああ、教えてくれよ、箒。今度は負けたくないんだ」

「そ、その……い、一夏は私に教えて欲しいのだな……？」

「そうだな」

「そ、そうか……そうかそうか。ふふっ、仕方ないな」

「……帰ろ」

付き合ってられん。今日の勝負でかなり疲れたし、さっさと部屋に戻って寝よう。……今日一日の疲労感がハンパないんだが……。

☆　★　☆

二日後、ドリルとの試合の日。俺達五人は一昨日来た第三アリーナ・Ａピットにいる。
一夏はすでに白式を起動しており、いつでも試合を始めても問題ないと言わんばかりだ。それにしても改めて見ると真っ白だな、一夏のＩＳ。

「気分はどうだ、一夏」

「大丈夫、千冬姉。いける」

「勝ってこいよ、一夏。俺の分も暴れてこい」

「ああ、分かってる」

「い、一夏」

「箒、行ってくる」

「あ、ああ。勝ってこい」

「ははっ、耳が痛いな」……なんか戦場に行くヤツの見送りみたいな雰囲気だが、気にしない方向で行こう。そうこうしている内に、ゲートが開き、一夏が敵の元へ飛び立っていく。さて、ここからは脇役は引っ込んでいるとするか。後のことは、白馬に乗った王子様が何とかしてくれるだろ。

◇

「あら、逃げずに来ましたのね」

セシリアさんがふふんと鼻を鳴らす。また腰に当てたポーズが様になっている。けれど、俺の関心はそんなところにはない。そんなところは、ハイパーセンサーは感知しない。

――戦闘待機状態のＩＳを感知。操縦者セシリア・オルコット。ＩＳネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り――。

鮮やかなその青色の機体は特徴的なフィン・アーマーを四枚背に従えた姿は、どこか王国騎士のような気高さを感じさせる。

それを駆るセシリアさんの手には二メートルを軽く超す長大な銃器

――検索、６７口径特殊レーザーライフル《スターライトｍｋ？》と一致――が握られていた。

「――来い、雪片（ゆきひら）」

アリーナ・ステージの直径は２００メートル。すでに試合開始の鐘は鳴っているので、いつ撃ってきてもおかしくはない。いつでも対処できるように、こっちも雪片を構えておく。

「笑止ですわね……そんな刀一本でこのわたくしに立ち向かうなど」

「生憎、これしかないんでね」

「そう、では、最後のチャンスをあげますわ。わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。なので、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るというなら、許してあげないこともなくってよ？」

そう言って目を笑みに細める。――警戒、敵ＩＳ操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティロックの解除を確認。

「一方的な勝利？イギリスの人達は面白いジョークを言うんだな」

雪片を握っている手に力を込める。そろそろ御託も終わりにしよう。

「――勝つのは俺だっ！」

その言葉を合図に、俺はセシリアさんの懐に潜ろうと、セシリアさんは射撃体勢に入る。

「なら、お別れですわね！」

キュインッ！と、耳をつんざくような独特の音。それと同時に走った閃光が刹那、俺の体を撃ち抜いた。

「ちぃっ！」

白式のオートガードがどうにか守ってくれたが、直撃は避けたものの、左肩の装甲が吹き飛ぶ。直後、遅れてやってきた衝撃波（ソニック・ブーム）に引っ張られた。

――バリア貫通、ダメージ４６。シールドエネルギー残量、５２１。実体ダメージ、レベル低。

（マズい。かなりの距離ができちまった）

「さあ踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で！」

「やってやるさ。こちとら負けっぱなしじゃ格好がつかないんでな！」

引くわけにはいかない。激戦が、始まった。射撃、射撃射撃射撃。粒子がこれでもかという程に降り注ぐ。それを俺は回避する。それの応酬。四つの自立機動兵器が、俺の周囲を飛び交い、レーザーを放つ。

「これら四つのパーツは『ブルー・ティアーズ』というんですのよ。この特殊装備を積んだ実戦投入一号機がこの機体ですので、同じ名前がついているんですの。お分かり？」

「いらん講演ありがとさんっと！」

それよりも気になることがあった。さっきから四つのビットの先端が発光、レーザーを放ってくる。それをかろうじて回避すると、その隙をセシリアのライフルが突いてくる。とにかくこのパターンだ。

（……おかしい）

なぜ同時に撃ってこない？そうすれば俺はたちまちレーザーに穿たれ、すぐに決着が着く。いや、簡単には勝たせないが、そうすればもっと楽に試合を運べるはずだ。実際、一弥の雨簗は六本全てを攻撃に回してきた。あれがもしあのまま続けば俺の負けだっただろう。なら、なぜそうしない？余裕のつもりか？それとも――

（……試してみるか）

今、セシリアさんのライフルが左足を掠め、また四つのビットがレーザーを放ってくる。それを俺は気にせずにセシリアさんの懐へ突っ込む。

「甘いですわっ！」

そしてセシリアさんが四つのビットの操作をやめ、ライフルを構えた。――そう、操作をやめた。
ライフルから発射された閃光は、俺の左足を穿ち、俺は衝撃波で吹き飛ばされる。だが――

「なるほど、分かったぜ」

「あら、負けを認めますの？」

「その余裕もここまでだっ！」

セシリアさんは空いている方の左手を横に振る。すると、それまで待機していたビットが俺に向かって飛んできた。そのレーザーをくぐり抜け、一閃。ガィンッ！と重い金属を切り裂く感触が手に伝わる。真っ二つにされたビットは断面に青い稲妻を走らせ、爆散した。

――一つ目。

「なんですって！？」

驚愕するセシリアさんに向けて、俺は上段の構えで斬り込む。それをセシリアさんは後方に回避し、また左手を振るい、ビットを操作する。その軌道を先読みし、ビット３の後部推進器を破壊して落とす。

「この兵器、毎回お前が命令を送らないと動かないんだろ？その時、お前はそれ以外の攻撃をできない。制御に集中してるからな。そうだろ？」

「……！」

ひくっとセシリアさんの目尻が引きつった。図星か。残りビットは二機。軌道も読めた。あれは必ず俺の死角を狙ってくる。というこ

とは、自分から隙を見せればそこに来る。俺はそれを待ち伏せするだけでいい。それに、セシリアさんは中距離射撃型だ。近接格闘の間合いであのライフルは役には立たないだろう。見ている限り、近接用の装備もない。

俺はセシリアさんの間合いに入り、振り下ろした雪片でビット2を撃墜。残るビット4に回し蹴りをして吹き飛ばす。確実に一撃が入る！

「――――かかりましたわ」

にやり、とセシリアさんが笑うのが見えた。――――マズい！本能的に危険を感じ、距離を置こうとするが、それこそ間に合わない。

「おあいにく様。ブルー・ティアーズは六機あってよ！」

セシリアさんの腰部から広がるスカート状のアーマー。その突起が外れ、動いた。左肩と右肩を狙っている。回避が間に合わない。しかも、さっきまでのレーザー射撃ではなく、弾道型――――ミサイルだった。

「う……おぉぉぉ！」

ドカァァァンッ！

赤を超えて白い爆発と光が、俺の目に広がった。

◇

「一夏っ！」

そんな……一夏が負けたのか？

「落ち着け、箒。まだブザーが鳴ってないだろ？」

「だが……」

「それに、そう心配することもねぇさ」

一弥の言葉に、私はわけが分からなくなる。そしてもう一度モニターを見て――――驚愕した。

◇

「今のは流石に危なかったな。ミサイルじゃなかったら負けてた」

――ダメージ３２。シールドエネルギー残量、１０９。実体ダメージ、レベル低。

「貴方……っ！？一体、どうやって！？」

「粒子と実物の違いさ。粒子は斬れないが、ミサイルなら斬れる」

そう、左肩と右肩を狙っていたのは分かっていた。回避ができないなら、そのミサイルをぶった斬ればいい。爆発には巻き込まれるが、直撃は回避できる。

「く……！」

「悪いけど、一気に決めさせてもらう！」

その言葉を合図に、雪片が光を帯びた。

☆　★　☆

「「バリア無効化攻撃？」」

聞き返すと、千冬姉は小さく頷く。一弥との勝負の後、俺と一弥と箒はどうして勝負が引き分けになったのかを考えていたんだが、今一つ結論が出ない俺達に、焦れた千冬姉がやってきて説明、今に至る。

「《雪片》の特殊能力がそれだ。相手のバリア残量に関係なく、本体に直接ダメージを与えることができる。そうなるとどうなる？音無」

「相手は死ぬ」

バゴッ！「篠ノ之。どうなる？」

「は、はいっ。《絶対防御》が発動して、大幅にシールドエネルギーを削ぐことができます」

「そうだ。分かったか音無。私がかつて世界一の座にいたのも、《雪片》のその特殊能力によるところが大きい」

「あれ？それなら一撃喰らわせたら勝てるじゃないですか。無敵じゃありませんか？それ」

「そこだ。《雪片》の特殊攻撃は行うのにもまた、シールドエネルギーが必要になる」

「あー……」なるほど、合点がいった。つまり――

「つまり……シールドエネルギーを攻撃に転換しているということですか？」

「そうだ。まあ、欠陥機だな」

「欠陥機！？千冬姉、今欠陥機って言ったよな！？」

バゴッ！……教師に対する言葉遣いは気をつけよう。

「大体目安として一撃に９０から１００の消費を伴う。それをしっ

かり頭に入れておけばまだまだ強くなるさ。なにせ――私の弟だ」

☆　★　☆

昨日の会話を思い出し、改めて武器を見る。
――近接特化ブレード・《雪片弐型》（ゆきひらにがた）。雪片。かつて千冬姉が振るっていた専用ＩＳ装備の名称。刀に型成した型名。雪片。
ちらっと残りのシールドエネルギーを確認する。残り２３。一撃喰らえばすぐに決着が着くが、それは相手も同じだ。

「くっ……まだですわ！」

弾頭を再装填したビットが二機、セシリアさんの命令で飛んでくる。それに反応し、俺は右手の雪片を握りしめ――セシリアさんの懐へ潜る。

ギンッ！横一閃。両断されたビットは、慣性のまま俺の横を通り過ぎて、爆ぜた。爆発の衝撃が背中に届くより速く、俺はセシリアさんへと突撃する。

「おぉぉぉっ！」

手の中でエネルギーが密度を増していくのを感じる。そして、セシリアさんの懐に飛び込んだ俺は、下段から上段への逆袈裟払いを放ち――決着を告げるブザーが鳴り響いた。

『試合終了。勝者――織斑一夏』

◇

サアアア……

シャワーノズルから熱いめのお湯が噴き出す。水滴は肌に当たっては弾け、またボディラインをなぞるように流れていく。白人にしては珍しく均整の取れた体と、そこから生まれる流線美はちょっとしたセシリアの自慢だ。しゅっと伸びた脚は艶めかしくもスタイリッシュで、そこいらのアイドルに引けを取らないどころか勝っているくらいである。

その体にシャワーを浴びながら、セシリアは物思いに耽っていた。

（今日の試合――）

いつだって勝利をものにしていたセシリアにとって、この困惑はひどく落ち着かないものだった。

（――織斑、一夏――）

あの男子のことを思い出す。自分から勝利を奪っていった、あの男子を。

孤高の強さ。それは、セシリアの父親を逆連想させた。

名家に婿入りした父は、多くの引け目を感じていただろう。さらに、ＩＳが発表され、父の態度はますます弱いものになった。母は強い人で、それをどこか鬱陶しそうだった。

そう。『だった』。過去形である。三年前に事故で他界した。

いつも別々に暮らしていた両親が、なぜその日に限って一緒にいたのか、未だ分からない。

とてもあっさりと、両親は還らぬ人となった。

手元には莫大な遺産が残り、それを守るための勉強の一環で受けたＩＳ適性テストでＡ＋が出た。政府から国籍保持のために様々な好条件が出され、遺産を守るために即断した。第三世代装備ブルー・ティアーズの第一次運用試験者に選抜され、稼動データと戦闘経験値を得るため日本にやってきた。そして――

出会ってしまった。織斑一夏と。理想の強さを持った男と。

「織斑、一夏……」

その名を口にする。どうしようもない程、胸が高鳴り、そっと自分の唇を撫でてみる。水滴に濡れた形のいい唇は、不思議な興奮を生み出した。
熱いのに甘く、切ないのに嬉しい。
――なんだろう。この気持ちは。
意識すると途端に胸に広がる、この感情の奔流は。
――知りたい。
その正体を。その向こう側にあるものを。
――知りたい。一夏の、ことを。
浴室には、ただただ水の流れる音だけが響いていた。

第七話　クラス代表決定戦！（後書き）

一弥「おい。俺の出番がないんだが？」

すいません……次回ということで。

セシリア城、陥落。

第八話　その後の彼らは（前書き）

鈴登場フラグ。

第八話　その後の彼らは

翌日、朝のＳＨＲ。

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでいい感じですね！」

山田先生は嬉々として喋っている。そしてクラスの女子も大いに盛り上がっている。うんうん。こういう雰囲気は結構好きだ。そんな中暗い顔をして机に突っ伏している男子一名。全く、空気を読んで欲しいもんだ。

「忘れてた……なんで勝っちゃったんだよあの時の俺ぇ……」

「まあ気にすんなって。ほら、お前も盛り上がろうぜ？同じバカなら踊らないと損だろ？」

「……それ、俺を暗にバカにしてるだろ」

「気にしすぎだ（笑）」

「くっそぉぉぉ……」いやはや、まさか一夏がクラス代表とはねぇ。
そう仕込んだんだのは俺だが、正直全然信じられねぇな。
そう、内心ほくそ笑んでいた俺の耳に信じられない言葉が聞こえた。

「それでは、副クラス長は音無一弥くんということで。これも漢字が一ですね！先生、運命を感じちゃいます！」

「ちょっと待てぇ！」

副クラス長だと？聞いてねぇぞっ！俺は立ち上がり、断固として抗議する。そんな面倒臭いもんやってられるか！

「どうしたんですか、音無くん？あ、今日は眼鏡かけてるんですね！カッコイイですよ！」

「あぁ、コンタクトってちょっと目がゴロゴロして――って違う！なんで俺が副クラス長なんだ！そんな話上がってすらいなかっただろ！？」

「私が推薦した。文句があるか」

教室の端っこから声が聞こえてくる。お前が犯人かぁっ！

「文句だと？あるに決まって――ないですよねっ！副クラス長、頑張ろうっと！」

向けられた波動砲台を見て一瞬で態度を変える。色々失ったものがあるが、あの出席簿アタックよりマシだ。俺は何事もなかったように座る。

「良かったな。副クラス長さん？」

隣のバカが何か言っている。はっ！勘違いするな。今から俺の技量というものを見せてやる！

「しかし織斑先生。ドリ――セシリアさんが副クラス長に適任だと思いますよ？僕なんかより強いし、やる気も十分だと思います」

「あっ！汚いぞ、一弥！」

ふん！なんとでも言え！副クラス長？そんな面倒事なんかやってられるかってんだ！

「その心配はないぞ、音無」

「しかし、セシリアさんを置いて僕だけとは――」

「元々、オルコットの推薦だ」

「こんのくっそドリルがぁーーーー！」

あンの野郎なんてことしやがる!?俺が目線を後ろに向けると、ドリルは優雅に立ち上がりやがった。畜生、ムカつく。

「わたくし、考えてみましたの。一夏さんと貴方が引き分けで、わたくしと一夏さんでわたくしが負けたのに副クラス長になるのはどうなのかと……なので、副クラス長の座は貴方に譲りますわ」

「いらん気遣いに涙がでそうだ……！」

「どうしたんだ、一弥？同じバカならなんとやら、だろ？」

こいつら……！なんというありがた迷惑だ！まさかグルってワケじゃあないだろうな!?――ん？そういえばドリルのヤツ、一夏のこと名前で呼ばなかったか!?やっぱこいつらグルだったのかっ！畜生っ！

「いやあ、セシリア分かってるね！」
「そうだよね。せっかくの男子なんだから、同じクラスになった以上持ち上げないとねっ！」
「私達は貴重な経験を積める。他のクラスに情報が売れる。一粒で二度おいしいね」
「先生っ！俺の個人情報を売買してるヤツがいます！出席簿アタックの餌食にしてやってください！」

そう叫んでも目を閉じたまま腕を組んでいるだけの千冬さん。今のは流石にアウトだろぉっ！？くぅぅ……！これが男女差別か……！千冬さんだけは信じてたのにっ！裏切られた気分だよ畜生っ！

「そ、それでですね」

コホンと咳ばらいしてあごに手を当てるドリル。なんだ？いたぶってほしいのか？望むところだこの野郎っ！

「わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がＩＳ技術を教えて差し上げれば、それはもうみるみる内に成長を遂げ――」

ドリルのエレガントってたかが知れてるだろ。と思った時、バン！と机を叩く音が聞こえた。見ると立ち上がったのは箒だった。

「生憎だが、一夏の教官は足りている。私が、直接頼まれたからな」

うわ修羅場……。てかドリルって一夏のこと好きなのか？いつの間に堕としたんだ一夏のヤツ……。にしてもドリルの方もやるな。箒の睨みに先週は怯んでいたはずなんだが、今は誇らしげに正面から受け止めている。すげー。

「あら、貴方はＩＳランクＣの篠ノ之さん。Ａのわたくしに何かご用かしら？」

「ら、ランクは関係ない！頼まれたのは私だ。い、一夏がどうしてもと懇願するからだ」

「……そうなのか？一夏（ボソボソ）」

「……いや、どうしてもとは言ってないはずなんだが……（ボソボソ）」

「てか箒ってランクＣなのか？意外だな」

「だ、だからランクは関係ないと言っている！一弥っ、お前はどっちの味方なんだ！？」

「いや、んなこと言われてもな……」

ちなみに俺達男達は仲良くBだった。全然嬉しくないが。ってかこれは訓練機で出した最初の格付けだから、あんま意味はないって千冬さんが言っていたような――

「座れ、馬鹿共」

すたすたと歩いていった千冬さんは箒、ドリルの頭をバゴッ！と叩いて、低い声で告げる。良かった、千冬さんが男女差別じゃなくて。そう思っていたらすぐ隣からバゴッ！という音が聞こえた。

「その得意げな顔はなんだ。やめろ」

まさか……本当に男女差別なのか……？確認のために一夏に小声で話しかける。

「……お前何したんだよ（ボソボソ）」

「……何もしてねーって！ただ……（ボソボソ）」

「……ただ？（ボソボソ）」

「……凄みとすごすご、なんつって（ボソボソ）」

「……死ね（ボソッ）」

「……え？何？何て言ったんだ！？めちゃめちゃこわ――」

バゴッ！……ざまあみろバカめ。下らんこと言うからだ。

「黙れ。ＳＨＲの邪魔だ」

「……はい」

「お前達のランクなどゴミだ。私からすればどれも平等にひよっこだ。まだ殻も破れていない段階で優劣を付けようとするな」

流石のドリルも千冬さんに言われては反論の余地がないらしい。何か言いたそうな顔をしていたが、結局言葉を飲み込んだ。

「代表候補生でも一から勉強してもらうと前にも言っただろう。下らん揉め事は十代の特権だが、生憎今は私の管轄時間だ。自重しろ」

うーん、千冬さんはこんなにしっかりしていたのか。それにしても十代の特権と言っていたが、千冬さんにもそんな時期があったんだろうか。

『ら、ランクは関係ないもんっ！』
『〇〇くん、カッコイイなぁっ！』
『えー？そんなことないよぉ』

ぶはっ！これはマズい……！ギャップのせいで……！腹筋崩壊する……！

バゴッ！

「……お前、今何か無礼なことを考えていただろう」

「そっ、そんなことはありません」

やべ、声裏返っちまった。

「ほう……」

バゴッバゴッ！れ、連続……！？

「すいませんでした」

「分かればいい」

こうして善良な市民は暴力に屈するのか……！なんという理不尽……！

「クラス代表は織斑一夏。副クラス長は音無一弥。異存はないな」

はーいと（男子を除く）クラス全員が一丸となって返事をした。団結はいいことだ。ただ、俺達にとってもいいことであればよかったなと思う。心からそう思う。

☆　★　☆

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、

音無、オルコット。試しに飛んでみろ」

織斑、音無、オルコットって無駄にテンポいいなと思いながら、黒奏を呼び出す。

今は二時間目。さっきのツイン出席簿アタックのダメージが残っているせいか、どうもアホなことを考えてしまう。さっきの授業も粒子について千冬さんが講義をしていたが――

『――つまり、粒子とは光であり、光とは――なんだ、音無。答えてみろ』

『一夏の武器』

……などという天然極まりない答えを言ったせいでクラス全員ずっこけるわ、出席簿アタックの餌食になるわで大変だった。

流石にこのままじゃマズいな。切り替えないと。

「早くしろ。熟練したＩＳ操縦者は展開に一秒とかからないぞ」

あれ？黒奏が出てない？マズい本気で集中しないと。

ＩＳは一度フィッティングしたら、ずっと操縦者の体にアクセサリーの形で待機している。ドリルはイヤーカフス。一夏は右腕のガントレット。防具じゃん、というツッコミは後にして、俺はピアスだ。

「集中しろ」

いかん、次は叩かれる。流石に一日に五回なんて勘弁願いたい。新記録を更新してしまう。

イメージは黒。闇ではない。漆黒を想像し、暗黒を連想する。刹那、全身に薄い膜が広がり、展開時間に一秒とかからず黒奏が出現する。

「よし、飛べ」

言われて、飛び立つ。ちらっと雨簑の様子を見たが、修復にはまだ程遠いようだ。そんなことを考えている内に一夏が遅れてやってくる。ドリルもその隣についていた。

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的でしてよ」

「そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚自体、まだあやふやなんだよ。一弥はどうなんだ？」

「ん、俺か？さあ、直感でやってるから分かんねぇな」

「そういえば貴方、あの誘導機器をうまく操っていましたわね。どうやってるんですの？」

「んなこと言われてもな……直感、としか言いようがないな」

あの試合以来、ドリルの物腰は次第に柔らかくなった気がする。あの見下した目線をしてこないし、今は俺達のことをしっかりＩＳ操縦者と認めているようだ。恋って偉大だねぇ……。

「一弥さん、よろしければ放課後に教えていただけませんか？同じ誘導機器を扱う者同士ですし」

「むしろ教えてもらいたいのはこっちなんだがな。それより……」

俺は声を低くし、ドリルだけに聞こえるようにする。一夏の方を見ると――飛ぶという感覚を掴もうとしているのか、ふらふらしている。好都合だ。

「……一夏のことが好きなら一夏に教えてやれよ。チャンスだろ？」

「ふぇっ！？な、ど、どうしてそのことを……！」

「……モロバレだ、バカ。それより、なんで俺なんだ？好みのタイプとか聞きたいのか？」

「あ、あの、それは、その……」

なんて分かりやすいヤツだ……。だがこういうヤツは嫌いじゃない。

「そういうことなら昼休みで十分だ。時間はあるか？」

「あ、え、ええ、大丈夫ですわ」

「ん？何話してんだ？」

一夏がこっちに気づいたようだ。ちょうどいいタイミングだな。

「なんでもねぇよ。……昼休みな」

「は、はいっ！」

「ん？セシリアさん、どうかしたのか？」

「今飛ぶ感覚について教わってたんだ。すげぇ分かりやすかったぞ。放課後教えてもらえ」

「そうなのか？なあ、セシリアさん、俺にも教えてくれよ」

「も、もちろん構いませんわ。あと、わたくしのことはセシリアでよろしいですわよ」

「分かった、セシリア。じゃあ放課後よろしくな！」

うんうん。完璧だ。箒には悪いが、今はこっちに加勢させてもらおう。

『一夏ぁっ！いつまでそんなところにいる！早く降りてこいっ！』

いきなり通信回線から怒鳴り声が響いた。見ると、遠くの地上で山田先生がインカムを箒に奪われておたおたしていた。てか通信機を奪うなよ……どこぞのハイジャックかよお前は……

「にしてもすごいな……箒のまつげまで見えるよ……」

「ちなみに一夏さん、これでも機能制限がかかっているんでしてよ。元々、宇宙空間での稼動を想定しているのですから、これくらいは当たり前ですわ。」

なるほど、流石は優等生。知識面も豊富だな。ちなみに箒の説明は

『ぐっ、とする感じだ』
『どんっ、という感覚だ』
『ずかーん、という具合だ』

と、かなり役に立たなかった。あれでＩＳを動かせるんだろうか。不安で仕方ない。

『織斑、音無、オルコット。急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地上から十センチだ』

そんなことを考えていると千冬さんから命令が下った。見ると、箒が頭を押さえている。なんてバカなハイジャックだろう……。両親も涙目間違いない。

「了解です。では一夏さん、一弥さん、お先に」

言って、すぐさまドリルは地上に向かう。ぐんぐん小さくなって、

停止した。

「うまいもんだなぁ……」

「流石は代表候補生、ってとこか。なあ一夏」

「ん？どうしたんだ？」

「どうせなら勝負しないか？ルールは……スピードだと勝負にならねぇから、そうだな、チキンランでどうだ？勝った方は負けた方にジュース一本だ」

「乗った！」

「んじゃ、せーのでスタートだ。いくぞ、せーのっ！」

意識を集中、背中の翼状の突起からロケットファイアが噴出している感覚を描き、一気に地上へ。

「あれ？急停止ってどうやるんだ……？」

こいつ……バカだ……。
時すでに遅し、俺達は地上に急降下し、そして――――

ギュンッ――――――ズドォォンッ！

「……音無は三十センチか。まだまだだな」

「……先生、現実逃避はやめましょうよ……」

一夏は地上には着いた。しかしこれは専門用語で墜落と言うらしい。
体に異常はないだろうが、心はクラスメイトのくすくす笑いで瀕死だろう。

「大馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

「お前チキンランで墜落してどうすんだよ……命は大事にしろ」

「……すみません」

「情けないぞ、一夏。この間私が教えてやっただろう」

声のした方を向くと、腕を組み、目尻を吊り上げている箒がいた。
……この間教えたってあの擬音のことだろうか……。……箒も冗談を言うようになったようだ。

「大体だな一夏、お前というやつは昔から――」

箒の小言が始まるかと思ったら、遮るようにドリルが一夏に向かっていった。

「大丈夫ですか、一夏さん？お怪我はなくて？」

「あ、ああ。大丈夫だけど……」

「そう。それはよかったですわ」

「……ＩＳを装備していて怪我をするわけがないだろう……」

「あら篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然のことですわ。常識でしてよ？」

「お前が言うか。この猫かぶりめ」

「鬼の皮を被っているよりマシですわ」

バチバチッという擬音が聞こえそうだ。全くこいつらは……。そう思っている内に、チャイムが鳴った。

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

片付けるって……あのクレーター直せってことだよな……なんて無茶振りだ……。周りを見るとさっさと帰ってしまっている女子軍勢。血も涙もないな。

「うう……一弥、手伝ってくれよ」

「はあ……運んでくるだけだぞ？」

「助かる！」

「待ってろ、今とんぼ運んできてやる」

※とんぼ：野球などをする時、グラウンドをならすために使う道具。クレーターを埋めるのには全く役に立たない。

「違う！てか、これならすっていう次元じゃない！」

「なんだよ、仕方ねぇな……分かったよ、今ドリル借りてきてやる」

※ドリル：主に工事現場でよく見かける。固い地盤などを壊す時に使う。クレーターを埋めるのには役に立つどころか逆効果である。

「誰が掘るって言ったんだよ！？埋めるって言ってるんだ！さてはお前、セシリアのことをドリルと称して教室に戻るつもりだな！？」

「よく分かったな……正解者にはドリルをプレゼントだ。今取ってくるから少し待ってろ」

「ちょ、いらん！いらないから待ってくれぇーーーー！」

一夏の声をＢＧＭに、俺は教室に戻った。だって……クレーター戻すなんてやってられないだろ？

◇

「ふうん……ここがそうなんだ……」

夜。ＩＳ学園の正面ゲート前に、小柄な体に不釣り合いなボストンバッグを持った少女が立っていた。まだ暖かな四月の夜風になびく髪は、左右それぞれを高い位置で結んである。それでも腰まである髪は、金色の留め金がよく似合う、少し黒めの茶髪だった。少女は日本人に似ているがよく見ると違う。鋭角的でありながらもどこか艶やかさを感じさせる瞳は、中国人のものだった。彼女は昔から、『歳をとっているだけで偉そうにしている大人』が嫌いだった。それゆえ、今の世の中は非常に居心地が良かった。男の腕力は偽り、女のＩＳこそ正義。それもまた気分がいい。彼女は『男っていうだけで偉そうにしている子供』が大嫌いだった。

――でも、アイツは違ったなあ。

とある男子を思い出す。その男子のことは、彼女にとって日本に帰ってくる最大の理由だった。

――あたしのこと、分かるかな

そんな想いを胸にしまい、彼女は受付へ走っていった。

そして、新たな波乱が幕を開ける。

第八話　その後の彼らは（後書き）

はやくシャルだしたいなぁ……

第九話　セカンド幼なじみの襲来

「というわけでっ！織斑くんはクラス代表、音無くんは副クラス長決定おめでとう！」

『おめでと～！』

ぱん、ぱんぱーん。クラッカーが乱射される。俺の頭に乗ってきた紙テープは、その実質重量よりもはるかに重く俺の心にのしかかっていた。

今は夕食後の自由時間。場所は寮の食堂、一組のメンバーは全員揃っていた。各自飲み物を手にわいわいと盛り上がっているはずなのに、渦中の俺達男子二人はテンションが低いどころか大暴落だった。こんな気分は三日ぶりだ。

それにしても何がおめでとうだ。ちっともめでたくない。何なんだこのパーティーは。壁を見ると、そこにはデカデカと『織斑一夏クラス代表音無一弥副クラス長就任パーティー』と書かれていた。無駄な労力使いやがって……。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

さっきから相づちを打っている女子は二組だった気がするんだが、

気のせいなんだろうか……。ってかなんでクラスの集まりに他のクラスが混ざってるんだ?ざっと見ても四十は軽く超えてる気がするぞ……。

「人気者だな、一夏」

振り返ってみると、一夏が箒に話しかけられていた。随分と不機嫌そうだ。全く……。

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生、音無一弥くんと織斑一夏くんに特別インタビューをしに来ました~!」

イェーと一同が盛り上がる。なぜかは分からないが、すごくイラッとした。なぜかは知らん。

「あ、私は黛薫子(まゆずみかおるこ)。よろしくね。新聞部副部長やってまーす。はいこれ名刺」

受け取って名前を見るとものすごい画数が多かった。め、面倒くさ……書く時大変だろう。少し同情した。ほんの少し。

「ではではまずは織斑くん!クラス代表になった感想をどうぞ!」

ボイスレコーダーをずずいっと一夏に向け、無邪気な子供のように瞳を輝かせている。こういうのが一番面倒臭いんだよなぁ……もう抜け出しちまうかなぁ……。

「えーと……」

一夏を見ると、随分とコメントに悩んでいる。つくづく真面目くんめ……。

「まあ、なんというか、頑張ります」

会場全員がずっこけた。こいつは……いや、もう何も言うまい……俺の名誉のために言っておくが、決して面倒になったワケじゃない。

「えー？もっといいコメントちょうだいよ～。俺に触ると火傷するぜ、とか！」

ふる……。随分と前時代的だな……。

「自分、不器用ですから」

「対抗する意味が分からない！」

「仕方ないな～。じゃあまあ、適当に捏造しておくとして、音無くん！副クラス長になった感想をどうぞ！」

隣で一夏がさめざめと泣いているんだが……。捨てられた子犬のような目が印象的だった……。

「チッ……感想だったか？」

「うんうん！一言……あっ！？」

こういうのは思いっきりやった方がいい。ナメられないためにも、今後のためにも。俺はボイスレコーダーを引ったくった。

「俺が一年一組副クラス長、音無一弥だ！文句のあるやつは出てきやがれ、俺と黒奏の名の下に串刺しにしてやる！まずはクラス対抗戦で優勝をもぎ取って一組という名を学園中に轟かせてやる！以上だ」

正直戦うのは一夏なんだが、そこは別にどうでもいい。こう言っておけばもう俺の周りに群がることはないだろう。自分ながら恐ろしいぜ。

会場の女子はシーンとなり、声が出ないようだった。ふふん。俺の怖さが分かったか。

『き……きゃあぁぁぁぁぁっ！』

そうかそうか。悲鳴を上げるほどか。……って待て！なんでそんなに嬉しそうなんだ！？そこは怖がるところだろ！？

「さぁっすが音無くん！分かってるねぇっ！バッチリ新聞に載せとくからねっ！」

「ちょ、待て！今のは口が滑っただけだ！頼むから待て！そしてお前らはその黄声をやめろぉっ！」

終わった……。今にして思うとなんであんなこと言っちまったんだろ……。あの時の自分を雨簀で八つ裂きにしてやりたい……。

そんなこんなでこの『織斑一夏クラス代表音無一弥副クラス長就任パーティー』という無駄に長いパーティーは十時過ぎまで続いた。

「やべぇ……女子のエネルギー侮ってた……」

「なんであそこまでハイテンションを続けられるんだ……」

気づいた時にはもう夜はどっぷりとふけ、俺達は無駄にエネルギーを消耗して部屋へ帰還した。こういう時はさっさと寝るに限る……。俺達はさっとシャワーだけ浴び、布団に潜りこんだ。

☆　★　☆

「音無くん、織斑くんおはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

朝。席に着くなりクラスメイトに話しかけられた。入学からの数週間でそれなりに女子とも話せるようになったのは大きな前進だろう。

「転校生？今の時期にか？」

今はまだ四月だ。入学じゃなくて転入にする意味が分からない。

「じゃあ、転入ってことは相当強いのか？」

「ん？一夏どういう意味だ？なんで転入ってだけで強いんだよ」

「この学園、転入はかなり条件が厳しいんだよ。試験はもちろん、国の推薦がないとできないようになってるんだ」

「なるほど、それで相当強い、ね。ってことは……？」

「そう、なんでも中国の代表候補生らしいよ」

「ふーん。そういえば、代表候補生っつったらドリルがいたな」

「……いい加減その呼び方はなんとかなりませんこと？」

今朝もまた腰に手を当てたポーズをしている。ってかいつの間に背後に……。

「なんか慣れちまったんだよ。努力はするが、クロワッサンって言うよりマシだろ？」

「そっちの方が断然いいんですけど！？」

「え？お前のドリル食用なのか？イギリスも進んでるな」

「そういうことではありませんわ！セシリアとお呼びくださいと言っておりますの！」

「分かった分かった。油断したらそう呼んでやる」

「呼ばれる時が間違いって釈然としませんわ……」

「それより、このクラスに転入してくるわけでもないのだろう？騒ぐほどのことでもあるまい」

だからなんでこう俺達の周りの女子は背後取るのが好きなんだ……。箒なんかさっきまで席に着いてたはずなんだが……つくづく恋って偉大だ……。

「どんなやつなんだろうな」

「興味ねぇな……それより一夏。お前四日後だっけ？クラス対抗戦だろ。余裕こく暇があるのか？」

普段はこういう言い方はしないんだが、状況が状況だ。……女子二

人が怖いんだもの……。

「一弥の言う通りだ。他のことを気にしている場合ではないだろう」

「まあ、やれるだけやってみるか……」

「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝っていただきませんと！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」

「安心しろ。負けたら俺だけは率先して白い目で見てやる」

「全く安心できない！むしろプレッシャーだろ！」

「気のせいだろ？」

そんなことを喋っていると、女子が集まってきた。油断してるとあっという間に女子に埋め尽くされるが、これはどうしても慣れない。しかし女子ってヤツはなんであんなに噂が好きなのか……理解できん。ちなみに、俺が言った白い目というのはクラス対抗戦の優勝したクラスには学食デザートの半年フリーパスが配られるからだ。俺

はそこまで欲しくはないが、女子が燃えているのはそれが理由だ。

「織斑くん、頑張ってね！」
「フリーパスのためにもね！」
「今のところ専用機持ってるクラス代表は一組の他に四組だけだから、余裕だよ」
「つまり負けたら訓練機にすら負けたっていうレッテルをはられるってワケだな」
「は、ははは……」

やいのやいのと楽しそうな女子一同に対し、一夏の方は冷や汗ダラダラだ。別に緊張する必要なんかないだろうに。

「――その情報、古いよ」

ん？なんか聞き覚えのある声だな。教室の入口から聞こえたが……。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

腕を組み、片膝を立ててドアにもたれていたのは――

「鈴……？もしかして鈴か？」

「そうよ、一夏久しぶりね。中国代表候補生、鳳鈴音（ファン・リンイン）。今日は宣戦布告に来たってワケ」

ふっと小さく笑みを漏らす。トレードマークのツインテールが軽く左右に揺れた。ってか――

「その身長でそんな動作をされてももはや子供が背伸びしているようにしか見えないのがツボに入って腹筋崩壊寸前だったが、空気を読んで笑わないことにした。ぶふっ……」

「全部声に出してんのよアンタはぁーーーッ！ってか笑わないとか言いながら最後ちょっと笑ったでしょっ！？」

おぉ、やっと普通に喋ったか。やるな鈴、ここまでできる子だったとは……。

「何気取ってたんだ？軽く引いたぞ」

「気にしちゃダメだ、一夏。子供扱いされたくないお年頃なんだよ」

「アンタらのその的確にコンプレックスを突いてくるところも変わ

ってないようでなによりだわ……！」

「失敬な。俺は一夏みたいに天然じゃないぞ。ちゃんと狙ってやってるんだ」

『タチ悪っ！』

なんかクラスが一丸になった気がするけど、気にしない方向で。

「ってか何アンタら女子高に潜りこんでんのよ？一夏なんて代表になってるし。そんなに女に飢えてるのかしら？」

む、攻撃体勢に入ったな？バカめ！返り討ちだ！

「ああ、でも安心してくれ。ロリコンではないからな。鈴だけは安全だ」

「誰がロリだぁーーーッ！」

こいつも昔から面白い反応してくれるんだよなぁ……。俺はいい環境に恵まれたもんだ。

「一弥っ！アンタ女子に囲まれて少しはマシな性格になったと思ったのに！全然変わってないじゃないの！」

「そうでもないでちゅよ？結構僕は丸くなったでちゅ」

「その赤ちゃん言葉をやめんかぁーーーッ！」

「分かった分かった。それよりもうすぐチャイム鳴るぞ。教室に戻った方がいいんじゃないか？」

「ふんっ！騙そうったってそうはいかないわよっ！チャイムがなによ、体罰になるワケでもなし！」

「あ、おい鈴後ろ……」

「なによ！？一夏、アンタまでグルなの？」

「おい」

「なによ！？どいつもこいつも――――」

バゴッ！聞き返した鈴に痛烈な出席簿アタックが入った。――――鬼教官登場である。

「もうＳＨＲの時間だ。さっさと教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。そして入口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません……」

「お前弱いな……」

さっきまでの威勢はどこへやら、すごすごとドアからどく鈴。その態度は百パーセント千冬さんにビビっている。

「また後で来るからね！逃げんじゃないわよ！一夏！一弥ぁっ！」

なんか俺の名前呼ぶ時だけ怨念込められた気がしたが、気のせいだろう。

「さっさと戻れ」

「は、はいぃっ！」

二組へ向かって猛ダッシュ。アイツほど変わってないヤツも珍しいだろう。そう思い、ふと千冬さんと目が合って……席に戻った。

「……一夏、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだったなぁ？」

「い、一夏さん！？あの子とはどういう関係なんですの！？」

その他、クラスメイトからの質問集中砲火。知ーらねっと……。

バゴバゴバゴバゴッ！

「席に着け、バカ共」

千冬さんの出席簿が火を噴いた。乱射機能まであるのか……。人海戦術は通用しなさそうだな……。それにしても――

「ではＳＨＲを始める。今日は――」

――バカとハサミは使いよう、とはよく言ったもんだ。

◇

（さっきの女子は何なのだ……一夏達と随分親しそうに見えたが……）

朝の一件が気になって、箒はなかなか授業き集中出来ないでいた。

（それに、一夏はまるで――）

まるで、幼なじみと再会したかのような反応だった。

――ムカッ。

（幼なじみは私だろう……！）

込み上げる怒りをどうにか抑えながら、ちらっと一夏の方を伺う。

途中には一弥もいるので、二人を見るようになったが、二人共真面目にノートを取っていた。

（私は授業に集中出来ないというのに、お前達は……！）

これが俗に言う逆ギレ、というやつなのだが、恋する乙女には関係のないことである。ますます腹が立ったと言わんばかりに日本刀に負けない切れ味を持つ視線を向ける。――少しくらい、私を気にしたらどうだという気になってくる。

（一弥も一弥だ……！）

私のことを応援してくれるんじゃなかったのか、という恨みの視線を向けるが、本人は気づかない。それがまた箒の怒りのボルテージを引き上げた。

（全くあいつらはいつもそうだ。人のことなど構いもせずに……！）

ぶつぶつと一人呟いている箒。理由の知らない人が見るとかなり怖い構図だった。隣の女子は最初から箒の異変に気づいていたが、怖過ぎて声をかけるどころかもはや震えている。

「篠ノ之、答えは？」

「は、はいっ！？」

突然名前を呼ばれて箒は素っ頓狂な声を上げてしまう。――そうだ、今は授業中。それも山田先生ではなく織斑先生の授業だった……！

「答えは？」

「……き、聞いていませんでした……」

バゴッ！と重量感のある打撃音が響いた。相変わらず頑丈な出席簿だった。

◇

「……」

教室の後ろの方では、セシリアがノートにシャーペンを走らせていた。しかし、書かれているのは全く意味のない線で、言葉にすらな

っていない。

（何なんですの、さっきの方は！）

いやに一夏達と親しげな様子だった女子が気になって気になってしょうがない。ただでさえ、現時点で箒という最大のライバルがいるのに、これ以上競争相手が増えたら気が気ではない。

しかも人間関係――一夏との距離においてはさっきの女子の方がリードしている。一生懸命マラソンをしていたら、いきなり中間地点から走り出した選手が自分を追い抜いていった気分だ。

（それはズルですわ！正々堂々と勝負なさい！）

人間関係の正々堂々というのがよく分からないが、とにかくセシリアはそう思った。

（しかも代表候補生――）

確かに、ここＩＳ学園には代表候補生が二十数名在籍している。だが、一年では四人しかいなかったはずだ。しかも、専用機持ちは一夏と一弥を抜いて二人。かなり大きなリードになるはずだった。なのに……

（専用機持ちって言ってましたわね……）

最悪。最悪である。こちらの手札はキャンセルされて、むこうのズルが通ったようなものだ。

（い、インチキですわ！）

しかし、今更そんなことを言ってもしょうがない。なんとか、先手を取らなくてはいけない。しかも箒や鈴を大きく突き放すほどのものがないと意味がない。

（ＩＳの模擬戦だけでは足りませんわ。もっとなにか、決定打になるような――）

「オルコット」

「……例えばデートに誘うとか。いえ、もっと効率的な……」

「……」

バゴッ！ふんわりとしたブロンドの髪が、出席簿によって圧縮された。

◇

「お前達のせいだ！」
「貴方のせいですわ！」

昼休み、開口一番に箒とセシリアが文句を言ってきた。

「なんでだよ……」

「箒に限っては俺もかよ。意味が分からんぞ……」

この二人、午前中だけで山田先生に注意五回、千冬さんに三回叩かれていた。気持ちは分からんでもないが、切り替えろよ……山田先生なんか涙目だったぞ……。

「まあ、話ならメシ食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」

「む……。ま、まあお前がそう言うのなら、いいだろう」

「そ、そうですわね。行って差し上げないこともなくってよ」

「素直じゃねぇんだからなぁ……」

やれやれ、もうツンデレは見飽きたんだがな。
他にもクラスメイトが数名付いてきて、俺達はぞろぞろ学食に移動した。するとそこには――

「待ってたわよっ！アンタ達っ！」

「……ラーメン持って待ってるとか勇者だなお前。伸びてるぞ」

「あ、アンタ達がさっさと来ないからでしょ！？」

「あ、むこうの席が空いてるな。行こうぜ」

「一夏ぁっ！アンタは無視すんじゃないわよっ！」

相変わらずうるさいヤツだ。鈴を一言で表すなら天真爛漫が似合う

だろう。あとは単純バカとか。それは一夏の特権だったか？まあなんでもいいか。それにしてもこう十人近いと移動にも席を探すのにも時間がかかって仕方ない。すぐに見つかったのは運がよかった。

「なあ鈴。いつ日本に帰ってきたんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ、一夏。アンタらこそなにＩＳ使ってるのよ。ニュースで見た時ビックリしたじゃない」

席に着いて早速と言わんばかりに一夏は質問を投げかけていた。あぁバカそんな鈴ばっかに構ってたら――

「一夏。そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「一弥さん？まさか、一夏さんはこの方と、つ、つつ、付き合ってらっしゃるの！？」

疎外感を感じた二人がキレるだろ……ってか俺まで標的かよ。理不尽すぎる。見ると、他のクラスメイトも、興味津々とばかりに頷いていた。

「べ、べべ、別にあたしは付き合ってるワケじゃ……」

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼なじみだよ」

「……」

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの見た目が残念な幼なじみだ」

「アンタには悪意しか感じられないのよ一弥ぁっ！」

「落ち着けって鈴。牛乳飲んでないからそんな幼児体型になるんだぞ」

「今体型のことは関係ないでしょ！？牛乳なら毎日二リットル飲んでるわよっ！」

「え？飲んでてそれなのか……？」

「もはや遺伝だな」

「好き勝手言ってくれるじゃない……！」

「……一弥、幼なじみとはどういうことだ？」

「あぁ……箒が引っ越していったのが小四の終わりで、鈴が転校してきたのが小五の頭だ。んで、中二の終わりに国に帰ったから、会うのは一年ぶりだな」

そういえばこいつらは面識ないんだよな。入れ違いで引っ越してきたんだし。

「鈴。このポニーテールが箒で、ドリルがセシリア。二人共お前のライバルだ」

「「なっ！？」」

「ん？ライバルってなんの？」

バカがなにかほざいていたが、気にしてはいけない。

「へぇ……まあ、あたしは負けないけどね」

「ほう……私も負けるつもりはさらさらないがな」

「うふふ、何をおっしゃっているのかしら。勝つのはこのわたくしですわ」

バチバチッと火花が散る。煽っといてこういうのもなんだが、やめとけばよかったか……女子が震えちまってる。

「それにしても変わってないわね、一夏。その鈍感具合……」

「へ？」

「なんでもないわよっ。それより一夏さぁ、あたしがいないとやっぱ寂しかった？」

チッ、鈴のヤツ、完全に俺はスルーのつもりだな？俺がいないと修羅場勃発だってのに……いても勃発させるけど。

「まあ、遊び相手がいなくなるのはそれなりにな」

「そうじゃなくってさぁ～」

……なんかムカつくな。ちょっと弄ってやろう。

「んなことより、鈴。お前代表候補生だろ？どんなＩＳ使ってるんだ？」

「ん？それはまあ、見てのお楽しみってとこかな～？」

腹立つな～。まあいいや。さっさと食っちまおう。

「ところでさ、一夏。約束覚えてる？」

約束？約束ってまさかっ！アレのことかぁ！？マズい！今一夏があの約束を言ったらただでさえ空気扱いの箒とドリルが爆発する！ヤバいヤバい！どうする！？どうするよ俺ぇ！

「約束って、あれか？えーっと……」

「ご、ごちそうさんっ。先教室行ってるからなっ」

逃げるしかないっ！もう止めるのは無理だ。決してカオスになる食堂が見たいとかそういう理由じゃない。俺の名誉のため。

「あれか？鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を――」

グッバイ、親友。お前のことは半年は忘れないぜ……。決しておもしろがっているワケじゃない。俺の（略。

「――おごってくれるってやつか？」

「「……はい？」」

……あぁ、なるほど。これはアレだ。ナパーム弾が落ちてきたと思ったら核爆弾が落ちてきたってヤツだ。つまりどっちにしても命はなかったという……。

「いやしかし、俺は自分の記憶力に感心――」

パァンッ！

うわちゃー……。これはひどい。何がひどいっていうと一夏とか一夏とか一夏とか。鈴の方を見ると、肩を小刻みに震わせ、怒りに満ちた眼差しで一夏を睨んでいる。瞳にはうっすらと涙が浮かんでいた。

「最っっっ低！約束ちゃんと覚えてないなんて、馬に蹴られて死ねっ！」

そこから鈴の行動は素早かった。どんぶりを洗い場に突っ込み、走って行ってしまう。

「待て、鈴！」

少しばかりフォローを入れないとマズい。俺も食器を洗い場に出し、走る鈴を追いかけた。

☆　★　☆

「鈴……た、頼むから待てって……！」

「……」

やっと止まってくれた……。なんでこいつこんなに足が速いんだ？

かなり凹むんだが……。

「……なにしにきたのよ」

「フォローを入れにだよ……はぁ～」

「……アンタ知ってるっけ？あの約束」

「あぁ……あのプロポーズみたいな約束だろ？あんなもん一夏が意味を理解してるワケねぇだろ」

鈴が言ってるのはあの『毎日味噌汁を～』ってヤツだ。ちょっとアレンジが加わっているが、そんなもんあのバカが気づくはずがない。

「……それでも、ちゃんと覚えててほしかった」

「はぁ……なんでアイツなんだろうなぁ……ただのバカじゃん」

「……アンタにだけは言われたくないでしょうね」

「違ぇねぇな」

「……ふふっ、ホントに、アンタ達ってバカよね。……結構周りから見ると羨ましかったりするのよ？」

「お前もその一人なのか？」

「……違うわよ。あたしは、友達止まりなんて絶対イヤ」

「強いねぇ……泣きたいときは泣いていいってなんかの歌の歌詞にあったぞ？」

「……アンタが受け止めてくれるの？」

俺か……そうだな、俺なら……

「冗談。そんな重いの願い下げだ」

「言うと思った。……ふふっ……」

「んじゃ、チャイムも鳴りそうだし、俺は戻る。一夏は好きにしていいぞ」

「言ったわね？対抗戦でボコボコにしちゃうわよ？」

「むしろ病院送りにしちまえよ。全部あのバカが悪いんだからな。そう考えた方が楽だろ？」

「あははっ！そうね。よしっボッコボコにしてやるんだから、一夏のやつ！」

「その意気だ。それと、鈴」

「ん？なに？」

「久しぶり。俺は結構寂しかったりしたんだぜ？」

「……バカね。あたしなんかずっと寂しかったんだから」

「違ぇねぇな」

「……ありがとね、カズ。それと、久しぶり」

「あぁ、早く教室戻れ」

「うん。じゃあねっ！」

鈴を見送ると、俺は身を翻し、自分の教室へと向かった。鈴は見た目に反してかなり傷付きやすいし、それを放っとくといつまでも引っ張る。だが、今回は大丈夫だろう。そう思い、我がクラス代表様のいる教室に入った。

「……どうしたんだ一夏……」

「……ちょっと暴動が起きて……」

そこにいたのは机に突っ伏している一夏だった。こいつも苦労してるよな……。まあ、今回は鈴の方に着かせてもらうが。

「そんな一夏くんに朗報と伝言です！」

「え？鈴、機嫌治ったのか？」

「ボッコボコにしてやるんだから！だってよ。ご愁傷様」

「……は、はは、はは……」

一夏の乾いた笑い声が印象的だった。今回はお前が悪いぞ……バカめ。

第九話　セカンド幼なじみの襲来（後書き）

質問があったので説明を。
第八話の一夏のギャグ、「凄みと、すごすご。なんつって」というのは千冬の凄みに箒達もすごすご……という説明してたら死にたくなるような底の浅いギャグです。作者バカだなーとスルーしていただければ幸いです。

第十話　決戦！クラス対抗戦（前書き）

疲れました……

第十話　決戦！クラス対抗戦

そして、試合当日。第二アリーナ・Ａピット。普通だったら一夏の応援に行くんだが、今は鈴のところに来ていた。見た感じ……うん、大丈夫そうだ。あのビンタ事件から四日。全く顔を出さなかったのでそれなり心配したんだが、杞憂に終わったようだ。

「あれ？一弥じゃない。なんでこっちにいるのよ？一夏はＢピットのはずよ？」

「そりゃあまあ、お前に用があったからな。……にしても随分と攻撃的なＩＳだこと……」

鈴のＩＳは『甲龍』（シェンロン）といい、ブルー・ティアーズ同様、非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）が特徴的だった。肩の横に浮いた刺付き装甲（スパイク・アーマー）がやたらと攻撃的な自己主張をしている。……あれで殴られたらすげぇ痛そうだな……一夏に合掌しとこ……。

「用ってなによ？」

「ん？あぁ、もう済んだ。お前の顔見るのが俺の用事だったからな」

「……あ、そ。別に心配なんてしなくていいわよ」

「さいですか。……っと、時間だな。行ってこい、鈴」

「うん。見てなさいよ、一夏のやつをボッコボコの病院送りにしてやるんだから！」

「その意気だ。歩くフラグ乱立男に鉄槌下してやれ！」

バシュッ！っと、鈴が飛び去っていく。もうアイツのことは心配ないだろう。後はじっくりとこのイベントを楽しむとしよう。そう思い、俺はその場を後にして、Ｂピットに戻るのだった。

◇

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに促されて、俺と鈴は空中で向かい合う。その距離は五メートル。俺と鈴は開放回線（オープン・チャネル）で言葉を交わす。

「一夏。一弥の許可も下りたことだし、本気で潰すからね」

「……あいつは……まあいいか。なら、俺にも手加減なんて期待するなよ？」

勝負の世界に手加減などいらない。勝負というものはそういうものだ。全力でやってこそ意味がある。

「一応言っとくけど、ＩＳの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる。そこらへん分かってんでしょうね？」

それは脅しではなく本当のことだった。聞いた話では、ＩＳ操縦者に直接ダメージを与える“ためだけ”の装備も存在するらしい。もちろん競技規定違反だが、つまり、『殺さない程度にいたぶることは可能』という意味にもなる。代表候補生クラスはそれができるのだろう。

『それでは両者、試合を開始してください』

ビーッと、ブザーが鳴った瞬間に俺と鈴は動いた。

ガギィンッ！と、瞬時に展開した《雪片弐型》が物理的な衝撃で弾かれる。俺はなんとか、旋回を駆使して鈴を正面に捉えた。

「ふうん。初撃防ぐなんてやるじゃない」

「ダテに特訓してないからな！」

鈴は手にした異形の青龍刀をバトンでも扱うかのように回し、縦横斜めと角度を変えながら斬り込んでくる。しかも、高速回転している分、刃をぶつけてさばくのにも苦労する。

「ちぃっ……！」

（マズい。一度距離を取って――）

「甘いっ！」

ばかっと鈴の肩アーマーがスライドして開く。中心の球体が光った瞬間、俺は目に見えない『衝撃』に殴り飛ばされた。

（な、なんだっ！？）

「今のはジャブだからね？」

にやり、と不敵な笑みを浮かべる。マズい、ジャブの後は――

ドォンッ！ストレートと相場が決まっている！

「ぐあっ！」

目に見えない拳に殴られ、地面に打ち付けられる。

――バリアー貫通、ダメージ７２。シールドエネルギー残量、４９５。実体ダメージ、レベル中。

くっ、ヤバい。どうすればいいんだ！？

◇

「……なんだあれ？鈴のヤツ何かやったのか？」

Ｂピットに戻り、リアルタイムモニターを見てみると、一夏が吹き飛ばされていたところだった。鈴のヤツ、有限実行とは……敢えて行動力があると言っておこう。それより試合だ。

「『衝撃砲』ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す……ブルー・ティアーズと同じ第三世代型兵器ですわ」

「ふむ……だから砲身も砲弾も見えなかったのだな？」

「一夏のヤツ随分苦戦してるな……こりゃ病院送りってのもシャレになんねぇかもな」

根性見せろよ、と、一弥は誰にも聞かれないように呟いた。

◇

「へー、よくかわすじゃない。ここまでやるとは思ってなかったわ」

「そりゃどうも……」

あの衝撃砲はかなり厄介だ。砲弾も砲身も見えない上に、真後ろにまで展開して撃ってくる。射線は直線だが、操縦者である鈴の能力

がかなり高い。かなり、強敵だ。何か対策を打たねば。
ぎゅっと右手の刀を握り締め、先週までの訓練を思い出す。近接戦闘、急加速急停止、基礎移動技能。箒との剣道訓練も、刀というものの間合いと特性を再度把握できた。

（あとは気持ちの問題……か）

実力差は歴然だ。その実力差を『何か』で埋めるとしたら、やはり心しかない。あとは自分を信じ、実行するだけだ。

「鈴」

「なによ？」

「本気で行くからな」

「な、なによ……今更そんなこと言って……と、とにかく、格の違いを見せてあげるわよ！」

鈴はバトンのように両刃青龍刀を一回転させて構え直す。俺は衝撃砲が火を噴く前に、加速体勢に入った。この一週間で身につけた技能、『瞬時加速』（イグニッション・ブースト）は、出しどころさえ間違わなければ隙をつけるというものだ。その名の如く瞬時に加

速させ、間合いを一瞬で詰める。

「なっ！？」

「はあぁっ！」

この奇襲は一回しか使えない。それゆえ、《雪片弐型》のバリアー無効化と同時に放つ！

「うぁっ！」

俺の斬撃は鈴の右足に当たり、かなりのシールドエネルギーを減少させることに成功した。このまま一気に押し切る！
そう考えた瞬間、有り得ないことが起きた。

ズドォォォンッ！！

「「っ！？」」

鈴に追撃を加える瞬間、ひときわ大きな衝撃がアリーナ全体に走った。鈴の衝撃砲ではない！？範囲も威力も桁外れだ！しかもステージ中央からは煙が上がっている。

「な、なんだ？一体何が……」

『一夏、試合は中止よ！すぐにピットに戻って！』

状況が分からず、混乱する俺に、鈴からの言葉が飛んできた。その言葉を聞いた瞬間、ＩＳのハイパーセンサーが緊急通告を行った。

――ステージ中央に熱源。所属不明のＩＳと断定。ロックされています。

「なにっ！？」

アリーナの遮断シールドはＩＳと同じものでできている……つまり、それを破壊、貫通するだけの威力を持った機体が乱入し、こちらをロック――

つまり、絶対絶命というやつだ。

『一夏、早く！』

「お前はどうするんだ！結構ピンチだろ！？」

「代表候補生なめんじゃないわよ。あたしが時間稼ぐから、その間に逃げなさい！」

「んなことできるか！足止めなら二人でやるぞ！」

「もう！アンタとは経験が違うのよ！」

ちなみに、俺がプライベート・チャネルで返さなかったから鈴も普通に喋っている。

「あぶねえっ！」

「きゃっ！」

間一髪、鈴の体を抱きかかえてさらう。直後、煙が晴れ、さっきまでいた空間に熱線が通り抜けた。そして、その射手たるＩＳが浮かび上がる。

「なんだこいつ……？」

そのＩＳはかなり変わった形をしていた。深い灰色、首がなく、手

が異常に長い。何より際立ったのが、『全身装甲』（フル・スキン）だった。異常、普通でないＩＳということはすぐに理解できた。

『織斑くん！凰さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生達が制圧に行きます！』

「いや……先生が来るまで食い止めます。いいな、鈴？」

「あ、当たり前でしょ。そ、それより放しなさいよ……！」

「ああ、悪い――――っと！」

放した瞬間に敵ＩＳが体を傾け、砲撃を開始した。それをなんとか避ける。

「ふん、随分とやる気じゃない」

「血気盛んなことで」

俺と鈴は横並びになり、それぞれに得物を構える。

「んじゃ、あたしが援護するから、一夏突っ込みなさいよ」

「了解。無理すんなよ」

キンッと互いの武器を当てる。それを合図に、俺て鈴は飛び出した。

◇

「……」

「もしもし!?聞いてますー!?」

プライベート・チャネルでは声を出す必要はないのだが、山田先生がめちゃくちゃ焦っている。そんなことも忘れているらしい。周囲から見ると危ない人に見えるのは秘密ということにしておこう。

「落ち着け、山田先生。これを見ろ」

「へ？」

ブック型端末の画面を数回叩き、表示される情報を切り替える。気づくと、全員がそれを覗き込んでいたが、一弥だけは腕を組んで黙ってモニターを凝視していた。

「遮断シールドがレベル４に設定……？しかも、扉が全てロックされて――――あのＩＳの仕業ですの！？」

「そのようだ。これでは避難することも救援に向かうこともできないな」

実に落ち着いた調子で話す千冬だったが、よく見るとその手は苛立ちを抑えきれないとばかりにせわしなく画面を叩いている。

「救援できないって……では、一夏達はどうなるのですか！？」

「落ち着け、篠ノ之。今、三年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。遮断シールドを解除できれば、すぐに部隊を突入させる」

「し、しかし――――」

「はぁぁ……結局、待っていることしか出来ないのですね……」

箒はまだ気になることがあるのか、千冬に質問を投げかけ、セシリアは一弥の隣に来てモニターを見ていた。見ると、今も一夏と鈴は死闘を繰り広げている。

「……なあ、セシリア。聞きたいことがある」

「え？」

いきなり名前を、しかも一弥の口から呼ばれるとは思っていなかったため、つい素っ頓狂な声が出てしまう。しかし、一弥の方は気にした風もなく、質問をする。至って普通の声色で。

「あのセシリアが使ってた粒子砲、俺が使うことはできないか？」

「え？えっと……《スターライト》のことですの？一応わたくしが使用許諾（アンロック）すれば、一弥さんは登録してあるので使えますけど……まさか、一弥さん……」

「そのまさかだ。貸してくれないか？頼む」

「で、ではわたくしも――――」

「いや、わがまま言うが、俺一人で行かせてくれないか？」

「なっ……そんな、危険ですわ！大体、一弥さんの武器もまだ完治していないのでしょう！？」

「それでも、だ。大体、まだ直ってないからあのライフル借りるんだろ？」

「だ、ダメですわ！そんな、そんなこと――――」

「セシリア」

一弥はようやく、セシリアの方を向いた。――――至って普通の表情で――――

「幼なじみ二人がピンチなんだ……俺が行かなきゃ、誰が行くんだ？」

――――しかし、その声色は、異論を許さない、何かを秘めていた。

◇

「くっ……！」

一撃必殺の攻撃力を内蔵した《雪片弐型》を振るう。しかし、俺の斬撃はするりとかわされてしまう。

これで四回目のチャンスを逃してしまった……。だが、そのせいで敵のＩＳの特徴が分かってきた。

「スラスターの出力が尋常じゃないな……避けられるわけだ」

「感心してる場合じゃないでしょ！？一夏、離脱っ！」

「おうっ！」

敵はいつも攻撃を避けたあとに反撃をしてくるのだが、その方法がまた無茶苦茶だ。バカみたいに長い腕をブンブン振り回してそこからビーム砲撃まで行ってくるのだから手に負えない。

（マズい……）

鈴は強がってはいるが、俺の一撃を喰らってしまったのでもうシールドエネルギーがほとんど残ってないはずだ。

「どうすんのよ？今の火力でアイツを機能停止させる確率なんて一桁あればいいほうよ……？」

「くっ……」

本格的にヤバい……そう思ったときだった。

ズドォンッ！

「「っ！？」」

なんだ！？何の音だ！？音源を確認しようと肉眼であちこちを見て回る。そうしている間にもズドンッという音は鳴り響いている。何回も、何回も。まさか、敵の援軍かっ！？そして、その音源はすぐに見つかった。敵ＩＳを挟んだ向こうの遮断シールドが膨れ上がり、今にも破裂しそうだった。そして、ひときわ大きな音が鳴り、ついに遮断シールドが破れた。見ると、敵ＩＳもその遮断シールドに注

目している。そこにいたのは――

「そりゃあ、ボッコボコにしろって言ったけどよ」

――黒いＩＳに身を包み、長大なライフルを構え、六つのナイフを纏わせた――

「誰もお前に許可したつもりはなかったんだがな」

――煙が晴れる。そして、その姿が完全に浮かび上がる。そこにいたのは――

「好き勝手してくれたじゃねぇか。覚悟はできてんだろぉなぁ！！」

――唯一無二の親友、音無一弥だった。

◇

「覚悟はできてんだろぉなぁ！！」

その言葉を放った瞬間、持っているレーザーライフルで首無しＩＳを撃ちまくる。首無しＩＳはぐらり、と体勢を崩したが、それだけだ。すぐに俺に向かってビーム砲撃を放ってきた。俺はそれを避け、反対側にいる二人の場所に来た。

「一弥、あんま無茶すんなよ……」

「悪い。つい我慢できなくてな。許してくれ」「アンタらしいわね……んじゃ、さっさと片付けちゃいましょ」

「いや、鈴はあの俺が作った穴から脱出しろ」

「はぁ！？なによ、敵を目の前にして逃げ出せって言うワケ！？」

「お前、一夏の攻撃喰らってもうほとんどシールドエネルギー残ってねぇだろ？後は俺達に任せとけ」

「うっ……分かったわよ……」

「よし」

「ただし！絶対死ぬんじゃないわよ！」

「おま、死亡フラグ立ててくなよ！一夏が死んだらどうすんだ？」

「俺！？そこは一弥だろ！？」

「別に一夏は元々病院送りにするつもりだったし」

「あれ冗談じゃなかったのか！？」

軽口を叩き合い、鈴を下がらせる。さて――

「一夏。アイツ見て何か気づくことはなかったか？」

「一弥もそう思うのか？何だか、動きが機械じみてる気がするんだ……それに、こうして話してるっていうのに、アイツは攻撃してこないし……」

「よく気づいたな。多分だが……あれは無人機だ」

「え？でもそんなの有り得ないだろ？」

「そうだが、そうでも考えないとおかしな点ばかりが残る。今はあの機体は無人機って思っとけ」

「……分かった」

「よし。それじゃあ作戦を言うぞ。俺はシールドエネルギーがフルだからまずは俺が特攻して雨篝で動きを止める。一夏は上空からトドメをさせ。どうせあと一発分だろ？」

「そうだけど……でもそれじゃあ一弥が……！」

チッ、気づきやがったか。そう、確かにシールドエネルギーがフルの状態とはいえ、あんな極太レーザーを直撃したらただじゃ済まないだろう。そのことを言っているに違いない。

「大丈夫だ。ただで直撃させる程落ちぶれてねぇよ」

「……分かった。頼んだぞ！」

ったく、誰にもの言ってんだか。言うだけ言うと一夏は飛び上がり、首無しＩＳは一夏を撃ち落とそうと砲身を向ける。バカが……

ズドォンッ！

「させると思ってんのか？今のお前の敵は俺だよ。脳みそもないのか？」

レーザーライフルで首無しＩＳを射撃し、注意をこちらに向ける。思惑通り、首無しＩＳは砲身をこちらに向け、砲撃してきた。それを俺は避けるが、白式ほど機動力はないので、直撃こそしないものの、どうしてもシールドエネルギーを削られていく。それをも承知で、首無しＩＳに突っ込む。雨篠は最後まで使えない。まだ完治はしていないのだ。壊されたら、勝機を失うと言っても過言ではない。

「あぁぁぁっ！」

粒子、粒子、粒子。その粒子は俺のシールドエネルギーをがりがり削っていく。だが、それがどうした。そして、ついに俺はその砲撃の直撃を受けてしまう。――だが、この距離なら十分だ。

俺は雨篠を噴射し、首無しＩＳを貫く。それだけでは飽き足らず、グルグルと巻きつける。身動きが取れないように、最後の一撃を生かすために。

「今度は外さねえぇぇぇっ！」

上空から雄叫びが聞こえる。味方だからかもしれないが、それは聞いていて安心するような、そんな声色だった。
そして、一夏の攻撃は首の部分貫き、首無しＩＳは――沈黙した。

「……終わったか」

「ああ、確かに手応えは感じた。多分もう大丈夫だと思う」

「頼りねぇ言葉だな……はぁ、もうこれ対抗戦とか言ってられねぇだろ」

「だよなぁ……焼け野原だもんなぁ……」

そう軽口を叩き合い、油断していた時だった。

――敵ＩＳの再起動を確認！更に射撃モードに移行中！

「「っ！？」」

マズい！油断してた！首無しＩＳの方を見ると、最大出力形態（バースト・モード）に変形した首無しＩＳが地上から狙っていた。――狙いは……一夏っ

！？

「マズい！一夏、逃げ――――」

俺が言い終わる前に、一夏は動き出していた。――――首無しＩＳに向かって。

次の瞬間、放たれるビーム。一夏はその中に突っ込み、そして――――完全に沈黙させた。

第十話　決戦！クラス対抗戦（後書き）

祝・総合評価１００ポイント！これからも頑張らせていただきます！

第十一話　波乱は連続的に（前書き）

鈴可愛いよ鈴。シャルは僕の嫁。ラウラさん愛してる。

第十一話　波乱は連続的に

「つつ……」

あの首無しＩＳ騒動（俺命名）は一夏がトドメを刺し、無事にとは全くもっていい難い結末を遂げた。かくいう俺もあのビーム砲撃の直撃を喰らったので、一夏ほどではないにせよ、そこそこ身体にダメージが残っていた。今、俺がいるのは保健室のベッドの上。隣には一夏もいるが……やはりダメージが相当のものなのか、まだ目を覚ましてはいなかった。

「別に寝込むほどのケガじゃないと思いますけど……」

「黙れ。一夏ほどではないにせよ、お前もほっといていいほどの程度ではない。歩くのには問題ないだろうが、今は寝ておけ」

「さいですか……ってか、一夏のヤツは絶対死んだと思いましたけどね」

「そう簡単に死ぬはずがないだろう。アレは私の弟だぞ？」

「顔ニヤけてますよ」

「お前もな、一弥」

言い合い、笑い合う。外を見てみると、まだ日はそれなりに高い。大体三時ちょい、ってところだろうか。

「では、私は後片付けがあるので仕事に戻る。少し休んだら部屋に戻っていいぞ」

「んじゃ、遠慮なく爆睡させてもらいます」千冬さんは言うだけ言うと、すたすたと保健室から出て行った。仕事には真面目なんだな。プライベートとは真逆だ……。さて、次は……。

「箒。一夏はまだ起きないと思うぞ」

「……」

保健室の端っこで立ちっぱなしの箒に声をかける。しかし、箒は身じろぎせず、ただ俯いていた。

「……一弥は、あれほどまでに強かったのだな」

「そうでもねぇだろ。今回の主役は一夏。俺は脇役にすぎねぇよ。ま、ヒロインは鈴ってとこだな」

「む……」

箒が口を尖らせる。まあ、今の言い方じゃ不機嫌になるのは当然か。

「……あの女子も、かなり強かった」

「鈴、か。まあ、代表候補生だしな。強くて当然だろ」

「……私は何もできなかった」

「違う」

こいつは……本当にバカだ。自分が何を言ってるのか分かってるんだろうか。

「いいこと教えてやる。お前は一夏を応援した。心配した。危惧した。それだけでお前も立派なヒロインだ」

「しかし……っ！」

「しかしもクソもねぇよ。お前は十分、一夏のために戦った。自信持ちやがれ、バカ」

「……そう、なのかな……」

「そうなんだよ。応援されて、心配されて。女の子がそれだけのことをしてくれるんなら俺はなんだってしてやるっつーの」

「……全く、バカはどっちだ……」

「俺なワケないよな？」

「そう思っておけ。……では、私は部屋に戻る」

「二人きりになりてぇなら一夏を叩き起こした後退散するけど？」

「一弥、お前もそれなりに怪我をしてるんだ。無理は禁物だぞ？ではな」

そう言い残し、箒も保健室を出ていく。残ったのは俺と一夏だけだ。とにかく無駄に増幅した睡魔の期待に応えるとしよう。

☆　★　☆

昼寝の領域を超えた（爆睡していた）俺を起こしたのは、バシュッというドアの閉会音だった。……うるせぇな……もっと病人のこと考えて造れよ設計者……とか思ったが、仕方ないので目を開けると……

「……何してんだお前」

「わきゃぁっ！？」

なんか可愛い声が聞こえたが……俺の視覚が捉えたものは鈴だった。ただし……

「……流石に寝てる時は反則じゃないのか……？」

「ちちち違うのよ！こ、こ、これは、その……っ！そう！具合！怪我の具合見てたのよ！」

寝てる一夏にキスしようとしてたヤツがよく言う……と思っていたら、鈴が流石にうるさすぎたのか、一夏が起きた。

「ん……あれ？鈴？なんで顔赤いんだ？」

「べべべ別になんでもないわよっ！夕日！夕日が赤いせいよ！」

「苦しいぞー」

うるさいっ！って言われました。だって事実だろ。

「鈴。その……悪かった。色々と。ごめん」

「え……あ……ううん、あたしもムキになってたし、いいわよ、もう」

「あの約束、正確には『料理が上達したら、毎日あたしの酢豚食べてくれる？』だっけ。で、上達したのか？」

「え、あ、う……」

「……」

なんか俺邪魔物っぽい？だが、敢えてここに居座らせてもらおう。一夏がどんな地雷を設置して自分で踏むのか楽しみだ。

「そういえばさ。こっちに戻ってきたってことは、またお店やるのか？鈴の親父さんの料理、また食べたいぜ」

チッ、うまく回避したか、つまらん。まあ本人に自覚なんて高度技術（一夏にとってだけだが）なんてできていないのだろうが。

「あ……その、お店は……しないの」

「「え？」」

「あたしの両親、離婚しちゃったから……」

離婚……？あんなに仲が良かったのにか？鈴も冗談で言っているようには見えないし……どういうことだろう。

「あたしが国に帰ることになったのも、そのせいだしね」

「そうだったのか。それで……」

腑に落ちない点だらけだった。むしろそれしかなかった。家族がバラバラになる。それは絶対にいいことじゃない。だが、そうせざるを得ない何かがあった？

気前のいい鈴の親父。活動的な鈴のお袋を思い出す。それは、いつも笑顔だった。なぜそんなことになったのか――その質問をぶつけられるほど、俺達は鈍感じゃない。

「家族って、難しいよね」

家族か……俺にはもう存在していない。そのことを知っているのは、確か一夏と箒だけか……。一夏も、両親がいない。いや、それだけならまだいい。“知らない”んだ。一夏は。両親を。俺は……まだ幸せな方だ。

「なあ鈴」

ふと我に還ると、一夏が口を動かしていた。

「今度、どこか遊びに行くか」

「え!?それって、その、デー――」

「一弥も行こうぜ。五反田も野々宮も呼んでさ。久しぶりに五人で集まるか」

「「……」」

ま、まさかここで地雷設置&爆破するとは……！シリアスが一気に霧散していくのが肌で感じる。鈴の怒りも。一夏、恐ろしい子っ！鈴の様子を伺うと……なんか顎に手を当てて考えてますポーズを取っている。あ、動いた。

「あ、アンタと二人きりっていうなら行ってあげても――」

顔を真っ赤にしてそういう鈴は普通に可愛かったんだが、鈴の台詞はバシュッという音で止められた。

「一夏さん、具合はいかがですか？わたくしが看護に――あら？」

つかつかと部屋に入ってきたのはドリルだった。しかし、鈴を見てその言葉が止まる。うむ。修羅場だな。もう色々と面倒くさいし、部屋に帰って寝るとしよう。

「んじゃ、俺は部屋に戻るかな。じゃあな」

どうせ誰も聞いてないか。俺はばっと布団をめくり、保健室をあとにした。後ろからぎゃあぎゃあと聞こえるが……気のせいと思っておこう。

☆　★　☆

「ただいま……」

「ん？一夏、今日は保健室で一泊じゃなかったのか？」

「……一弥、いつの間に保健室から出て行ったのかと思ったら……」

「飯も済ませたぞ。すげーだろ」

「威張る要素が見当たらない！」

ちなみに今は八時。もう一年が食堂を使える時間は過ぎている。俺はビニール袋からカロリーメイトを出し、一夏の方に放った。

「サンキュ。飯抜きは流石にキツかったから……助かる」

「ま、今日のＭＶＰだしな」

さてと。まだ八時だし、予習しちまうかな。そう思った矢先、コンコンとノックが響いた。

「一夏出てくれー」

「ＭＶＰの扱いとは思えない！」

「だって俺予習するんだよ。それにどうせ千冬さんが事後説明に来たはずだ（嘘）。さっき部屋に行くって言ってたしな（大嘘）」

そう言っている間に、コンコンという音はいつの間にかドンドンと拳の音を奏でるようになっていた。一夏は慌ててドアを開け、来訪者を確認した。

「……箒？どうしたんだ？」

なんだ、箒か。んじゃ、別に心配するようなことはないな。……にしてもなんで箒は何も喋らないんだ？

「どうかしたのか？とりあえず部屋に入れよ」

「い、いや、ここでいい」

なんか緊急の用事みたいだ。まあ一夏が対応してるし、こっちは予習を続けよう。

「「……」」

っておい。流石にためすぎじゃないですかね箒さん。

「ら、来月の、学年別個人トーナメントで！」

「お、おう！」

何やってんだろこいつら。ちなみに今は五月の初めの初めだが、六月に行われるそれはクラス対抗戦とは違い、完全に自主参加の個人戦だ。まあ……今日のこともあったし、ちゃんと行われるのかは疑わしいが。

「わ、私が優勝したら――――」

そして、箒は爆弾を投下する。

「つ、付き合ってもらう！」

「「……はい？」」

思わず反応してしまった。一夏はこちらからは見えないが、口を開けてポカンとしているだろう。その気持ちはよく分かる。

なぜなら――――俺も一夏とさして変わらない表情をしているだろうから。

第十一話　波乱は連続的に（後書き）

一巻も終わったことですし、今度はサイドエピソードを書こうと思ってます。
内容は一弥、一夏、鈴、弾、そして一夏がちょこっと言っていた野々宮という女の子をオリキャラとして登場させ、彼らの中学時代に迫っていきたいと思います。あと、鈴が一弥のことをなぜカズ、と呼ぶのか、など。
大体の方針は決まっておりますが、文才がちょこっと、ほんのちょこっとアレなので少し間が空くかもしれませんが……是非見てやってください！宿題も何もかもかなぐり捨てて書きますので！

第十二話　束の間の休息（前書き）

本当にごめんなさい！サイドエピソードを書く、なんて言っておきながら自分の文才のなさに今頃気づき、結局本文に戻ってしまいました……。あの、お叱りは優しくお願いします……。これからは調子に乗らないようにしますので……。

これからも何とぞ何とぞお願いしますっ！

第十二話　束の間の休息

五月の終わり、日曜日。
俺達は久々にＩＳ学園の外……というか、五反田の家にいた。

「ちょっ、カズ兄、砂パ！？協調性が全く感じられないよ！」

「妹よ、男には譲れない時がある……そして、今がその時だ！」

「弾、お前ヌケ○ンは自殺行為だろ。頭使おうぜ……」

「貴様、ＨＰ１の強さなめんなよ！？二ターンでケリつけてやる！」

「その前に死ぬっての」

高校生にもなってポケットに入るワケもないモンスターで遊ぶヤツが世界にどれくらいいるのか分からないが、暇つぶしにはなるので俺達はタッグを組んで戦っていた。異様なテンションで。

「妹よ、悪は滅んだ！俺達の兄妹愛が勝ったぞ！」

「むしろカズ兄の一人勝ちだよ！カズ兄のいいとこどりだよ！贅沢微糖だよ！」

必死になって頬を膨らませて抗議しているのは俺の妹である音無藍（おとなしあい）。軽くウェーブのかかった黒髪は肩の辺りまで伸びて、身長はまあ鈴より少し高いくらいだ（要するになかなかのちびっ子）。今は弾の家で世話をしてもらっている。俺がＩＳ学園に入学する話になったので、家に藍一人は色々と危ないと思い、弾に頼んだのだ。

「のぉぉぉぉ！なんで俺ばっか負けるんだぁぁぁ！」

「いや弱いからだろ……タイプ偏りすぎだし」あっちでバカみたいに叫んでいるバカは五反田弾（ごたんだだん）。まあ……バカである。一夏とは違うベクトルのバカなんだが……それくらいしか紹介のしようがない。

「くそぅ……なんでお前らは虫タイプの良さが分からんのだ」

「所詮虫だろ。焼けば一発だ」

「黒い彗星なんて絶対使いたくないもん」

「ひどい言われようだ」

ちっくしょぉぉ……と、うめいている弾。どうでもいいが、男のマジ泣きってほんと汚い絵だと思う。

「いや、そんなことよりどうなんだよお前ら」

「あん？」
「うん？」
「ふぇ？」

「いや藍ちゃん以外。女の園だろ？いい思いしてんだろ？えぇ？」

「そういや罰ゲームがまだだったな。弾、一夏。今すぐ蘭の胸揉んでこい」

「ちょっ、勘弁してください！死ぬ！それは絶対死んじゃう！」

「そ、そうだぞ一弥！嫌われたらどうするんだ！？」

「いや、一夏は問題ない。むしろ責任とれって言われるな」

「「どこが問題ないんだよ！？」」

「ねーねーカズ兄。それでどうなのさぁ。女の園なんだぜ？」

「弾、テメェのせいで藍が変な言葉を覚えた。責任とって蘭の胸揉んでこい」

「それ死ねって言ってるだろぉ!?まだ俺は命が惜しいっての!」

「ねーねーカズ兄!女の園はどうなのさぁ!」

「……なんだこのカオス」

なんだろうね。煽っといてなんだけど全然分からねぇや。

「……で、どうなんだよ。一夏は別として一弥もモテるだろ……!」

「台詞の途中で殺意沸くぐれぇなら聞くなよ。っつってもなぁ。一夏が女作るまで俺は作る気なんざねぇよ」

「一弥、まだそんなこと言ってるのか?別に気にしなくてもいいのにさ」

「俺なりのケジメってヤツだ。……ってか腹減ったな。飯はここで食うんだろ?」

「お兄！さっきからお昼出来たって言ってんじゃん！さっさと食べに――――」

そう言ってドアを蹴破るように開けたのは弾の妹の蘭だった。藍と同級生であり親友で、一つ年下の中三である。藍と同じく有名私立女子校に通っている優等生だ。

「あ、久しぶり。邪魔してる」

「元気そうだな」

「一弥さんに、いっ、一夏……さん！？」

ちなみに蘭は今、肩まである髪を後ろでクリップに挟んでいる。服装もショートパンツにタンクトップという機能性重視の格好だ。ついでに言うと藍の方もキャミソールにハーフパンツという寝起きスタイルだ。別に欲情するワケじゃないが、（ってかしたら問題だ）弾の前でもあんな格好なんだろうか……。少し不安だったりする。にしてもアレだ。ＩＳ学園にいたせいでこういう格好には大分慣れてしまった。不本意だが。

「悪いな、蘭。姿が見えないからいないと思ってたんだが……不注

意だった。すまん」

「い、いえ、一弥さん、そんなっ、それより、全寮制の学園に通っているって聞いてましたけど……」

「ああ、今日は外出したくて。一弥と一緒に家の様子見に来たんだ」

「俺はまあ、藍の様子見に来ただけだけどな」

「わーい！藍ちゃんカズ兄に愛されてるぅ！」

ええい抱き着くな。発育のいい胸が当たってるだろ。まさか弾にもそんなことしてないだろうな。

「そ、そうだったんですか……」

ちなみに見ての通り、蘭も一夏の毒牙にかかったタイプだ。本当すごいよね。一夏のヤツ。年下まで堕とすんだからさ。弾の複雑な気持ちも若干分かる。念のために言っておくが、藍は一夏には惚れていない。ってか、恋愛感情すらサッパリと言っているくらいだから兄としては正直不安である。

「蘭、お前なあ、ノックくらいしろよ。恥知らずな女だと思われ――」

ギンッ！蘭の視線一閃。効果は抜群だ！弾は怯んだ！

「……なんで、言わないのよ……」

「は、ははは……い、言ってなかったっけ……？」

「……」

ギロ……ッ！ってすげぇ。千冬さんや箒とはまた違うタイプの視線攻撃だな。じわじわと獲物を殺す感じ。

「えっと……お二人共お昼食べていきますよね？」

「あ、あぁ、いただくよ。ありがとう」

「悪いな」

ぱたん。ドアが閉じて静寂が訪れる。それにしても弾……流石に同

情するぜ……。まあ便乗したのも俺なワケだが。

「弾。胸揉むならさっきがチャンスだったんじゃねぇか？」

「勘弁してくれ……」

「ハハッ、いつまで経っても弱いままだな。さて、飯食ったらノノのとこ行くんだっけか？」

「野々宮？あいつも来るのか？」

「あぁ、あいつ午前中部活だからな。よくやるよ、全く」

「それより今はご飯だよ！お腹と背中がくっついたら大変なんだよ！？」

「分かった分かった。んじゃとりあえず飯な」

「どうせ売れ残りの定食だろうけどな」

というワケで弾の部屋を出て一階へ。食堂にぞろぞろと入る。

「うげ」
「ん？」
「へぇ」
「うゅ？」
「……」

上から……言わなくても分かるな。うん。露骨に嫌そうな顔をする弾。天然入ってる一夏。先客に見惚れる俺。不思議な声を出す藍。んで、黙っている蘭。一応説明しておいた。念のため。

「何よ？何か文句でもあるの？あるならお兄一人で外で食べてくれば？」

「ねぇ皆聞いた？あの愛に溢れた言葉。身内に言う台詞じゃないよな？」

「日頃の行いだろ。さっさと食うぞ」

先客の蘭の言葉に涙目な弾はほっといて、俺達は席に着く。ってか……

「蘭ちゃん着替えたのー？どこか行くのー？」

「えっと、藍ちゃん、それは……」

さっきまでのラフな格好ではなく、一言で言うならお嬢様みたいな格好に着替えた蘭。めちゃくちゃ気合い入ってるな……。

「気持ちは分かるが、気合い入れすぎじゃないか？」

「そ、そんなことは……」

「だよなぁ。お前そんなに気合いの入れたオシャレするのなんて数ヶ月に一回――」

バシッ！瞬撃のアイアンクロー。効果はこの上なく抜群だ！

「……！……！？……！」

「（コクコクコク！）」

多分、『余計な事言うんじゃねぇよ！死にたいのか！？生きていたけりゃ黙ってろ！』みたいなやり取りだろう。にしてもアレには流

石に身震いが止まらない。蘭さん。目が、目が怖いです。

「お前ら、仲いいよな」

「「はぁ！？」」

そんな中で一夏が的外れなことを言う。主従関係がはっきりしてるの間違いだと信じたい。

「一弥もそう思うだろ？」

「まあ、主従関係ははっきりしてるよな。それより飯だ。藍なんかおかわりしてやがるぞ」

「おじーちゃんおかわりー！」

「「「早っ！」」」

「おう。藍はよく食うな。最近のガキにしちゃ出来た子じゃねぇか、カズ坊」

「食う量に比例するなら、こいつ程出来た子はいないでしょうね」

「ガッハッハ！違ぇねぇ！」

豪快に笑っているのは五反田食堂の大将、一家の頂点、五反田厳（ごたんだ げん）。
筋肉隆々、という言葉がよく似合う、八十を過ぎた化け物だ。

「あの、一弥さん……」

「ん？どうした、蘭」

「い、一夏さんは、その、学園ではどんな……？」

「んー……本当のこと言うぞ？絶望すんなよ？」

「そ、そこまで……」

「今は超絶の美少女三人が一夏を狙ってるな。その内一人は鈴だ。
知ってるよな？」

「うっ……あの人が……」

「まあ、メインがその三人で、あとは数えだしたらキリがないな。何たって学園全体女子だからな」

「うぅ……」

「……そう落ち込むな。俺にできることがあればなんでもしてやるからさ」

「……ありがとうございます。はぁ……一弥さんが兄だったらどれだけよかったか……」

「そういうボソッと言うのやめて！かなりダメージ来るから！」

「うっさい！自業自得！」

「んなわけないだろぉ！？どう考えても俺は被害者……いや、なんでもないです、ハイ」

ギロ……ッ！弾、お前も苦労してんだな……。

「あれ？よく考えれば一弥と変われば藍ちゃんが妹に……是非変わろう！一弥！今すぐ変わろう！」

「とりあえず静かに飯食おうな……」

俺の言葉にもくもくと昼飯を食べだす四人（一人足りない？さっきから食ってるからノーカンだ）。

「……」

それでも蘭は何か考え中なのか、真剣な顔をして器を睨んでいる。何か思うことがあるんだろうか。弾の処刑の方法とか。

「……決めました」

ふむ、聞かせてもらおうか。

「私もＩＳ学園に入学します」

ガタッ！ビュッ！ガンッ！

あ……ありのまま今起こったことを話すぜ！
蘭の言葉に驚いた弾が立ち上がったが、どこからかおたまが飛んできて額にぶつかり、弾は瀕死になった。
うん、そこまで驚くようなことじゃないな。おたま投げたのオッサンだろうし。それよりも。

「適性とかどうなんだ？」

スッとポケットから一枚の紙を取り出す。適性の紙だろう。えーっと……

「へぇ、判定Ａか。なら問題ないな。筆記試験も大丈夫だろうし」

「なにぃ！？」

「どれどれ……」

俺から紙を引ったくる弾に覗き込む一夏。弾なんか見た瞬間血の気が引いていくのが分かる。

「一弥さんの言った通り、問題は解決済みです。私もＩＳ学園に入学します」

「そっか。頑張れ……って、ん？も？も、ってことは……おい、藍。お前もＩＳ学園に来るのか？」

「ふも？ふん！あはひもあひへふふぁふえんひいふほ！」

「飲み込んでから喋れ。ってか喋れなくなるまで詰め込むな」

「……ごくん。うん！あたしもＩＳ学園に行くよ！」

「そうか……まあ、お前の人生だ。勝手にしろとまでは言わねぇが……相談くらいしやがれ」

「うん！ありがとカズ兄！」

「……」

「ほら、弾。あっちもいい感じにまとまってるしさ。諦めようぜ？」

「……そうだな。蘭、お前の人生だ。勝手にしろとまでは言わねぇが……相談くらいしやがれ」

「黙れバカ兄。誰が発言を許可したの？バカなの死ぬの？」

「一夏ぁ……慰めてぇ……」

「おぉ……なかなかに汚いな、弾」

「親友やめてやるっ！」

「まあまあ……でも、たまにはビシッと言うのも大事だぞ？」

「なんだ、一夏。お前千冬さんに勝てると思ってるのか？」

「……」

こいつら弱いな……。

「なあ、蘭。今からノノ誘ってゲーセンとか行くけど、お前も来るか？」

「あ、はい。お邪魔じゃなければ」

「んなワケないだろ？それなら弾なんかどうなるんだ？」

「一弥ぁっ！お前は敵だっ！夜道には気をつけやがれよっ！」

「うっさいっ！」

弾、土下座までしなくても……。

「ごちそうさまぁー！おじーちゃん、美味しかったよー！」

「……これなんてスカイツリー？」

藍の底無しの胃袋に戦慄する俺達だった。

☆　★　☆

「イチ兄イチ兄！太古の達人しよ！たいたつー！」

今、俺達はゲーセンに来ている。なんかゲーセン入るとテンション上がるな。藍なんか最高潮だ。

「カズ君、藍ちゃんはいつ見ても元気だよね」

「まあ、多少バカでも元気なのが一番だからな」

「出た。カズ君のシスコンー！」

「違うっての」

今俺と話しているのは野々宮梨理子（ののみや りりこ）。肩まである明るい栗色の髪を片方だけくくり、身長はまあ、藍より少し高いくらいだ。（要するにまあまあちびっこ）。鈴は中二の時に国に帰っちまったが、俺、一夏、弾、ノノの四人は三年間同じクラスで、もはやなにかの陰謀と疑った程である。

「あ、藍ちゃん！ダメよ！一夏さんは私とプリクラ撮るんだから！」

「わーい！プリクラも遊びたいなぁー！行こ！イチ兄、蘭ちゃーん

！」

あっちはあっちで楽しんでるみたいだな。んじゃ俺は……

「一弥ぁ！俺と勝負しろ！エアホッケーで勝負だ！」

「……お前何十連敗中だよ」

「大体、弾が勝ったところすら私は見たことないんだけど」

「うるせぇ！今日の俺は一味も百味も違うぜ……！ほら、早くやるぞ！」

「ったく……んじゃノノが暇になっちまうし二対一でいいな」

「エアホッケーなんて、大体久しぶりかもー！」

「構わんよ！俺の前にひざまずくがいい！」

☆
★
☆

「弾君」

「……」

「二対一は流石に卑怯だと思ったよ」

「……」

「でも……ストレートで負けるのは……」

「ちくしょぉぉぉっ！」

真っ白になった弾の悲鳴が印象的だった……。

☆
★
☆

「あー……腕痛ぇ」

「結局カズ君はずっとエアホッケーだったもんねぇ」

「一弥、ご苦労様」

「まあ、弾のバカも今に始まったことじゃないしな……」

午後六時過ぎ。夏が近づいているせいか、まだ日は高い。俺達はノノを送っている最中だ。流石に一人で帰らせるのも気が引けるしな。

「でも楽しかったねー！また遊ぼうよ。鈴ちゃんも誘ってさー！」

「鈴か……アイツ今必死だからな……っと、ここまでだな」

「じゃあな、野々宮」

「ちぇー。もうちょっと遊びたかったのにー……」

「メアドも交換したし、休日ならいつでも遊べるさ。な、一弥？」

「そうだな。鈴は微妙だが……まあ引っ張ってでも連れてくるさ」

「うん！じゃあ、また遊ぼうねー！今度はこっちから誘うよー！」

そう言って、走り去るノノ。ってか足はや……。流石陸上部のホープだな。

「にしてももうすぐ個人トーナメントか。遊ぶ時間はないな……」

「そうだな。ってか一夏。お前、箒が優勝したら付き合うんだろ？阻止しなくていいのか？」

「ん……別にいいんじゃないか？」

「なにっ！？お前、ついに……」

「だって、買い物くらい付き合うだろ、幼なじみなんだから」

「その発想はなかった！箒、同情するぜ……」

敢えて言わないでおくが。

「はあ……まあいいか。今日は疲れた。帰ってさっさと寝ようぜ」

「そうだな。明日からまた学校だしな……」

まだ日の高い夕方、俺達は自分達以外女子で埋め尽くされた母校に向かい、ため息をつきながら歩いていった。

第十二話　束の間の休息（後書き）

しかも梨理子が全く生かせてない……もう……死にたい……。

第十三話　転校生はｂｏｙ　ｏｒ　ｇｉｒｌ？（前書き）

感想お待ち申し上げます。

第十三話　転校生はｂｏｙ　ｏｒ　ｇｉｒｌ？

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名です！」

「ん……？」
「え……」
『えええぇぇぇっ！？』

今は週明けのＨＲ。突然の山田先生のカミングアウトに、俺は疑心顔、一夏は驚き、そしてクラスの大合唱。正直うるさい。まあ三度のメシより噂が好きな女子軍の情報網をかい潜っていきなり二人も転校生が現れたんだ。驚くのも無理はないが……転校生と聞くだけで嫌な予感しかしないのは何故だろう……。杞憂に終わると願いたい。

（そもそもウチのクラスって時点で怪しさ大爆発だろ。普通分散させるものだし……このクラスの辞書に平和って文字はないのかね……）

そうネガティブな考えをしていたら、教室のドアが開いた。

「失礼します」

「……」

クラスに入ってきた二人の転校生に、ざわめきがぴたりと止まる。
それも仕方ないだろう。
そのうち一人は、男子の格好をしていたのだから。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

転校生の一人であるデュノアがにこやかな顔で告げて一礼する。なんだか俺の自己紹介と被った気がしたのは気のせいだろうか……？
いや、それより男……？確かに男と言われればそう見えなくもないが……怪しさビッグバンだな……。一応、注意はしておこう。

「お、男……？」

誰かがそう呟いた。クラスの雰囲気からするに、皆デュノアを見て呆気に取られて――いや、一人だけ険しい顔をしたヤツがいるな。デュノアの隣の……なんだあれ……眼帯？をした女子は腕を組み、目を閉じて落ち着いた雰囲気を出している。いや、落ち着いているというよりは冷たい、と言った方が的確だろう。そんな個性に溢れている転校生を『観察』していると、呟いた声に返すかのように金髪（ブロンド）の貴公子風のデュノアは口を開いた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――」

人なつっこそうな顔立ちに、礼儀正しい振る舞い。長い髪は首の後ろで丁寧に束ねられている。体も華奢だし……男か女か聞かれるとすぐには分からないだろう。

『きゃ……』

「はい？」

『きゃぁあああ――っ！』

本日二度目の大合唱。しかし侮るなかれッ！その勢いやよしッ！衝撃波を引き起こす程でござるッ！ちなみに衝撃波に当てられたワケではない。補足説明。

「男子！三人目！男子！」

「しかも違うタイプ！守ってあげたくなる系！」

「地球に生まれて良かった～～～！」

今日もうちのクラス一同は元気のようでなによりです。願わくば、先生方（主に千冬さん）に指導を受けられることを。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

面倒くさそうに千冬さんがぼやく。それにしても今の女子一同はまだお姉様だの千冬様だの言っているのだろうか。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんからぁ～！」

山田先生の言葉に、もう一人の転校生に目を向ける。その転校生は、一言で表すなら『異端』という感じだった。

まず一番最初に目を引くのはあの黒い眼帯だろう。医療用ではない、何かワケありな空気を出している。次に印象的なのがその髪。金髪に対し、こちらは銀髪（プラチナ）。その輝くような白銀のそれは腰近くまで長く伸びており、伸ばしっぱなしという整えられていないが、自然体の美しさという感じだった。身長は鈴くらいだが、その冷たい雰囲気はそれよりも若干大きな印象を受けた。

「……」

しかしその転校生は未だ口を開かず、教室の女子達を下らなそうに

見ているが、すぐに視線をある一点……千冬さんの方に向けていた。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

「ここではそう呼ぶな。織斑先生と呼べ」

「了解しました」

千冬さんとラウラ、と呼ばれた眼帯の会話にクラス一同がぽかん、とする。が、俺の方はおそらく険しい顔をしているのだろう。

（……千冬さんは各国を転々としていた時期があったし、おそらくその時の教え子……みたいな関係か。それにしてもすげぇ熱の入りようだな）

そんなことを考えている内に、眼帯が口を開いた。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「……」

名前だけ義務的に言い放ち、それ以上は口に出さない。なんとも軍人のようなヤツだ。……よろしく、という類の言葉がないのは、あっちからもよろしくする気がない、ということか。

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

山田先生が出来る限りの笑顔で聞くが、眼帯はそれを一蹴、返ってきたのは無関心な風の即答だった。あぁ……山田先生が泣きそうだ。ってか生徒に泣かされる教師ってどうよ？

そこで、眼帯と目があった。鋭い片目をさらに鋭くし、こちらを見てくる。……喧嘩でも売っているのだろうか。つい睨み返していると、コツコツとこちらに近づいてきた。

「……何か用か、眼帯」

「……一つ、聞きたいことがある」

「聞いてやる。その目をやめればな」

まさしく一触即発の雰囲気。俺達のやり取りに、クラスの雰囲気は氷点下だろう。

「……織斑一夏、というのは貴様のことか？」

……なんだ、俺に向けた敵意じゃないのか。つまらん。

「いや、隣の男が一夏だ」

そう親切に教えてやることにした。なんか隣でビクッ！とした雰囲気が漂ってきたが、敢えてスルーさせてもらおう。

「……！貴様が――――」

そう、怒気をはらんだ言葉に、俺の極限にまで磨かれた脳は、瞬時に眼帯の次の行動を読み取り、そして――――

パシッ！という乾いた音が響いた。それは、予想通り眼帯が一夏に手をあげようとし、それを阻止した俺の手が重なった音だった。

「……邪魔をする気か？」

「暴力はよくないだろ。千冬さんにそう教わらなかったか？」

「……邪魔をするというのであれば、貴様も私の敵だ」

「上等。一夏の敵は俺の敵だ……忘れるな」

バッ、と手を払う眼帯。そして一夏に向け、一言。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

そう言い放ち、すたすたと空いている席に座る。その最中に、一夏は立ち上がり――――

「認めないって言うなら、認めさせるまでさ。俺は嘘偽りなく、千冬姉の弟なんだからな」

そう、言った。

「……ふん……」

空いている席に座ると、一夏の言葉など聞こえない、と言わんばかりに腕を組んで目を閉じ、微動だにしなくなる。それを確認すると、俺も座り、一夏も同じく席に着いた。

「やれやれ……では、これでＨＲを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散！」

っと、ボヤボヤしてる場合じゃないな。早く着替えないと。このままクラスに残っていると女子と仲良く着替えという最悪の展開になる。それだけは避けたい。確か今日は第二アリーナ更衣室が空いていたな。

「一夏、急ぐぞ。デュノア、お前も一緒に来い。このままじゃ女子と着替えることになるぞ」

「君が音無君？初めまして、僕は――」

「自己紹介は後回しだ。とりあえず移動するぞ。着替えは持ってるか？」

「う、うん」

「よし、行くぞ。一夏も遅れんなよ」

「分かってる」

それにしても頭をフル回転させてたからちょっと投げやりな態度になってたか？さっきの態度引きずってるのかもな。警戒させるのもマズいし、少し話しておくか。

「今回は男子は第二アリーナ更衣室で着替えるんだ。俺は音無一弥。好きに呼んでくれ」

「俺は織斑一夏。よろしくな。えっと……」

「待て一夏！自分で振っといてなんだが、少し急ぐぞ！」

「え、え？ど、どうしたの、二人と――――」

デュノアが言い終わる前……というか、さっきから地響きがどんどん近づいている。なぜなら――――

「あっ！転校生発見！」

「音無君も織斑君もいるわ！これはチャンス！」

女子軍勢が後ろからどんどん近づいているからだ。なんのチャンスか激しく気になったが、なんとなく頭が警告しているのでスルー。それより早く逃げないと質問攻め→遅刻→鬼教師の特別カリキュラム、という最悪のコンボが待っている。そんなもん食らった日には息絶えるわ。

「二人の黒髪もいいけど、金髪もアリね！」
「しかも瞳はエメラルド！」
「きゃああっ！見て見て！織斑君と転校生、手繋いでる！」
「……何やってんだ、お前……」

一夏を見るとデュノアの手を繋いでいて、しかもデュノアも顔赤くしてまんざらでもない……ってやっぱお前女だろ！？

「まあ、いいか。あの、一夏だし。……うし！無事到着っとぉ！あー、マジ体力つくわコレ……」

「んじゃ、走ったおかげで時間もあるし、自己紹介タイムといこうか？俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

「うん、分かった。それで、こっちが音無一弥君？」

「そういえばさっき話したな。よろしくな、デュノア？」

「うん。よろしく一夏、一弥。僕のこともシャルルでいいよ」

「あぁ、了解」

「よろしく、シャルル」

さて、こんなもんで十分だろう。

「んじゃ、さっさと着替えるか。早く行ってもバチは当たらんだろ」

「そうだな」

そう言いつつ、俺はとりあえず様子見。一夏は制服のボタンを外し、一気に脱いで上半身裸になった。

「わあっ！」

はい、顔赤くしてますねー。アウト三つで女子にチェンジってか。

とりあえずこれでもう気になることは眼帯以外にはなくなった。俺もさっさと着替えるとしよう。

「どうしたんだ、シャルル？早く着替えないと遅れるぞ？ウチの担任はそりゃあ時間に厳しい人で――――」

「う、うんっ！き、着替えるけど、その、あっち向いててね？こっち見ないでね！？一弥も！」

「？？？まあ、別にジロジロ見る趣味なんてないしな」

「ま、女子だったら別だけどな」

「だ、ダメだよっ！そ、そんな、女の子だったらって――――」

「シャルル、分かったから。あっち向け。着替えられないだろ？」

「……？……っ！ご、ゴメン！」

……素晴らしく前途多難なスパイ？だった。こんなんでやっていけるのか……？

☆　★　☆

「ん……ギリギリってとこか。まあ遅刻しないで良かったな」

「「そうだな（ね）」」

結局なんだかんだと着替えに時間をかけてしまい、ギリギリになってしまった。周りを見ると結構な数の女子が集まっ……やめよう。目に毒だ。これはマズすぎる。本当あの水着みたいなＩＳスーツはなんとかならないだろうか……。とりあえず落ち着こう。びーくーる、びーくーる。

「随分ゆっくりでしたわね」

一夏、俺、シャルルの順で最後尾に座ると、隣がドリルだったせいか、ドリルが話し掛けてきた。

「あぁ、少し自己紹介みたいなことしてたんだよ」

「そうでしたの。でも、それで授業に遅れては元も子もないのでは

なくて？」

セシリアの言葉に刺がある気がするのは俺だけだろうか……。まあ一夏のヤツ、さっき殴られかけてたしな。無理もないっすね。

「なによ？アンタ達またなんかやったの？」

「なんで問題児扱いみたいな言い方なんだよ」

「問題児じゃないつもりなの？」

「「……」」

「二人共、目を合わせたらどうですの？」

「ほら見ろよ鈴。こんなところにドリルがあるぜ？」

「微妙な話のすり替え方ね……」
あるぇ～？引っ掛かってない？やるな、鈴。

「なっ、鈴さん！それはわたくしの髪型が微妙とおっしゃってます

の！？」

「そうは言ってないっていうか、まあ実際微妙じゃない？」

「バカ、ドリルナメてたら風穴開けられんぞ？」

「言ってくれますわね……！」

「成程。元気があり余っているようでなによりだ」

なん……だと……？今、幻聴が聞こえた気がしたんだが……？ギ、ギ、ギ……ッ、と軋んだブリキのように幻聴の聞こえた方向に視線を向けると――――鬼教師が出席簿を振り上げていた。

――――縦にして。

ゴッ！いぃってぇえええっ！ま、まさかの縦！？それは流石にひどくないですか千冬さん！？

「では、話を聞かないバカ共も待ちくたびれているところだし、簡潔に説明しよう。本日から格闘及び射撃を含む実践訓練を開始する」

『はい！』

いい返事だ。気合いが入っているのが分かる。だが、どうせなら俺達もそのノリに加わりたかったなぁ……。

「くうっ……。何かというとすぐに人の頭をぽんぽんと……」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

「お前らはまだいいだろ……。俺なんか……」

くっそぉ……。めちゃくちゃ頭に響いてやがる。今度は一夏が角アタック食らいやがれ！そもそも全てお前が原因だ！

「ちょ、鈴、その呪縛みたいに俺の名前連呼するのやめてくれ！怖いから！」

確かに鈴の目から光が消えているのが分かる……ってか怖っ！鈴、怖っ！めっちゃ睨んでるじゃねぇか！どこのヤンデレだよお前！

「今日は戦闘を実演してもらう。ちょうど活力が溢れんばかりの生

徒もいることだしな。――音無！凰！オルコット！」

「最初に呼ばれるなんて納得できないんですが！？」

「な、なぜわたくしまで！？」

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。いいから前に出ろ」

「だからってどうしてわたくしが……」

「一夏のせいなのになんであたしが……」

「俺の質問はスルーですか……」

男女差別である。

「お前ら少しはやる気を出せ。――アイツにいいところを見せられるぞ？」

なるほど。そうきたか。なら俺は――

「そういえば、一夏のヤツこんなこと言ってたな。――――一生懸命頑張る子って見ててほれぼれするな、と」

「やはりここはイギリス代表候補生である、このセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！よぉし！頑張るわよ！」

計・画・通・り（ニヤリ）

それにしても……なんて扱いやすいヤツらなんだ……。将来が不安すぎる。

「音無、お前もだぞ」

「えぇ……。俺は別に一夏なんかに惚れてませんよ……」

「そうか。ならば仕方ない。どうせ専用機持ちには今からする実践訓練など何も得るものなどないし、その間グラウンド五十周でも――」

「おらぁ！相手は誰だっ！？串刺しにしてやんよぉっ！」

ってか先生！今のは流石に脅迫だと思います！

「それで、相手はどちらに？三人での乱戦ですの？」

「それじゃ、ドリルが有利だな」

「ふふん。まあ、負ける気なんてさらさらないけどね」

「慌てるなバカ共。対戦相手は――」

「は、はぅあぁ～～～」

「「「「……」」」」

あれかな？ツッコまなきゃいけないのかな？かな？

「……対戦相手は？」

「……山田先生だ」

『……』

ほら見ろ。今度は皆が『えぇ～……』って顔してるじゃねぇか。ってか千冬さん？アンタもさっき目を逸らしませんでしたか？

「す、すいません、遅れてしまいまして～」

「……山田先生、大丈夫ですか？」

「あ、音無くん……ってまた眼鏡外してますっ！？」

「いや、あの……」

「山田先生」

「は、はいっ！」

千冬さんに声をかけられ、直立する山田先生。なんでこの人教師なれたんだろ。七不思議に入るくらい不思議だ。

「問題は、ありませんか？」

「はい、異常は見当たりません」

……え？誰？今喋ったの。なんか山田先生が凛々しくなった感じなんだが……。どういうことだ？

「あの、もしかして……」
「俺達が戦うのって……」
「本当に山田先生……？」

すげぇコンビネーション。もはや向かうところ敵無しって感じだ。

「さっきもそう言っただろう。心配するな。今のお前達ならすぐ負ける」

負ける、という言葉に反応したのだろう、鈴とドリルは今までの空気を払拭するように、瞳に闘志をみなぎらせている。確かに、千冬さんの言った通り今の山田先生（命名、山田先生改）は今までのおっとり具合からは程遠い何かを感じさせる。……油断は禁物だな。

「では、はじめ！」

その言葉を合図に、俺達は一斉に動き出した。

第十三話　転校生はｂｏｙ　ｏｒ　ｇｉｒｌ？（後書き）

やっと……！やっとシャルとラウラの二人が登場……！（注・作者の目から流れているのは心の汗です）

第十四話　桜舞う天閣、薬莢は零れて

「では、はじめ！」

千冬さんの合図と共に動き出す俺達。神経を研ぎ澄まし、周囲の情報を読み取る。鈴は連結した《双天牙月》を手に、山田先生改に特攻。セシリアは《スターライト》を持ち、右側に回って銃撃。しかし、山田先生改も右側に旋回しながら移動して、セシリアと鈴が直線上になるように動いている。その途中でも射撃の手は緩めない。確かに、かなりの熟練度を感じさせる。ちなみに俺は上空で待機、監視、指示の三つを行っている。俺の武器である《雨箒》は攻撃、防御と双方に優れているが、今のような状況ではセシリアのレーザーが当たってしまったりと、かなりの障害になる。新しい装備もストックしてあるが、正直まだ訓練が足りておらず、味方に被弾してしまう可能性もあるので、まだ使わないでおく。ついでに言うと、他の生徒達も被弾しないように、グラウンドの片隅にあるシールドシェルターの中にいるので、山田先生改なんかアサルトライフルをバンバン撃ちまくっている。……全然似合ってない。いや、それよりも指示だ。

『鈴、セシリア。標的は二人の衝突の誘導が目的だ。射撃に警戒しつつ、お互い距離を取るようにしろ』

『ああもうっ！ちょこざいわね！素直に当たりなさいよ！』

『くっ、射撃が当たりませんわ！というか、鈴さん邪魔ですわよ！』

『なによ！？自分の射撃技術の低さを人に当たるんじゃないわよ！』

だというのに二人は個人間秘匿通信（プライベート・チャネル）で仲良く喧嘩していた。……お前ら、確か代表候補生じゃなかったか……？ってか俺忘れてないか？

『落ち着け、今はまだ標的はアサルトライフルしか使ってないが、それ以外にも何かあるかもしれないんだぞ』

『大体、こんなヤツとコンビを組むっていうのが気に食わないのよ！』

『それはこちらの台詞ですわ！こんなことならわたくし一人で戦った方がマシですわ！』

……スルー？なんか泣きたくなってきた……。仕方ねぇ、こうなったらあの作戦しかない！

『よし、作戦を実行するぞ。ちゃんと聞けよ』

そんなことを言ってもぎゃあぎゃあと喧嘩を続ける二人。好都合だ。

『やることはただ一つ。――玉砕してこい、ＩＳ型使い捨て装甲板』

少し音量を落としたその声が二人に届くはずもなく、戦闘は続く。

さて、あの二人がバカみたいに動き回っている間に山田先生改の隙ができるまでじっくり観察だ。決して無視された腹いせではない。

待つことも戦術の一つってな。

◇

「全くあの馬鹿者共は……音無は自分の役割を理解しているようだが、駒であるあの二人があの調子では一騎打ちになるのも時間の問題だな」

すごい。何がすごいというと、山田先生の動きだ。二人を相手にして上手く立ち回っている。

「そういえばシャルル。山田先生は何ていう機体なんだ？」

「うん？えっと、あれは『ラファール・リヴァイヴ』だね。拡張領域（バススロット）が多くて、沢山の後付武装（イコライザ）が付けれるのが特徴的だね。その他にも操縦が簡単だとかで、全対応ってところかな」

「へぇ……随分詳しいんだな？」

「このことは教えたはずだぞ、馬鹿者。……戦況が傾いた」

「「え？」」

ふと、一弥達の方に目を向けた瞬間――――爆発音が轟いた。

◇

ついに、というかようやく、というかやっぱり、という具合に、俺の予想通り二人は衝突した。その隙を、生まれ変わった山田先生改が見逃すワケもなく、手の中にあるもの……あれは……グレネード

か！これはチャンスだ！俺は山田先生改が手に持ったグレネードを投擲［とうてき］した瞬間に急降下をする。山田先生改の方ではなく、山田先生改と二人の直線上になるように、だ。そして急降下の途中でグレネードが爆発し、二人がヘロヘロといった感じで墜落していく。それを確認した俺は爆発でできた煙を煙幕代わりに使い、煙の向こう側にいるであろう山田先生改に向けて《雨簪》を放つ。

しかし――

「なに……っ！？」

おかしい、何故手応えがない！？タイミングは完璧だったはずだ！まさか、読まれていたのか！？そう考えている間にも雨簪を引き戻す。その途中で、左側から山田先生改が現れた。

「ッ！」

「はっ！」

気合いの入った声と共に、手に持ったアサルトライフルを発砲してくる。俺は迷わず煙幕の中に突っ込んだ。そして、新しく装備した武器を手に、急上昇を行い、山田先生改を見ると、未だ煙の中を射撃していた。これは嬉しい誤算だ。おそらく、あの煙幕の中から雨簪を放ってくると思っているのだろう。

今度は山田先生改に向かって急降下し、手に持った新しい銃器――四十二口径マシンガン《桜閣》［おうかく］を乱射した。

「っ！？」

散り乱れる桜の如く舞う銃弾、薬莢。それを見た山田先生改は一瞬だけ体を硬直させ、右側に旋回して回避行動を取る。俺は構わず急降下を続け、山田先生改を見上げると――あれは、グレネード！？

「くぅっ！」

すぐにまた急降下をするが、間に合わない。爆発は回避したが――爆風は避けられなかった。俺は想定外のスピードに急ブレーキをかけるが、地面に叩き付けられてしまう。

「が……っ、くっ！」

それでもなけなしの気合いを振り絞り、ハイパーセンサーが指す方向――斜め後方に向けて六本の雨箭と桜閣を発射、発砲する。

「やあぁっ！」

それをも予想通りといった風に、螺旋状にこちらに向かってそれを回避、さらに発砲してきた。そしてグレネードを手に持った瞬間―

――残り二本の雨簪が、両足を捕縛した。

「えっ！？」

驚いて当然だろう。その二本の鎖は、見えないように背後に隠し、地中を伝わせて死角となる真下から突き出し、山田先生改を捕縛したのだ。俺はその全ての雨簪を引き戻す。当然、地中から突き出した雨簪は地中を通って戻ってくるので、山田先生改は地面に墜落した。

「これでフィニッシュだ」

起き上がった山田先生改に、発射源である雨簪六本と、桜閣を突き付ける。そして――

「そこまで！」

千冬さんの合図に、桜閣を光に霧散させ、捕縛している雨簪を引き戻す。

「はぁ……なんとかなったか……」

正直、あのバカ二人が衝突して五分も経っていないのだろうが、ものすごく疲れた。主に頭。脳細胞。誰かブドウ糖をくれ……。

「ふむ、音無にはやられてしまったが、それでもＩＳ学園教員の実力は理解できただろう。以後、敬意を持って接するように」

「あ、あうぅ……」

「あの、罪悪感で潰れそうなんで、泣かないでくださいよ……？」

いつの間にか普通の山田先生に戻っていた山田先生に、とりあえず慰めの言葉。……俺、何してんだろ。

「くうぅ……。まさかこのわたくしが……」

「あ、アンタねぇ……！射撃一発当たってなかったじゃないの……！」

「それは貴方が邪魔をしていたからでしょうっ！」

「大体ビットなんて出すんじゃないわよ！一回肩に当たったのよ！？」

「鈴さんこそ！無駄に衝撃砲をバカスカと！」

「なによ！？」

「なんですの！？」

「……早い話がどっちも相応にバカってことだな」

俺がそう言うと周りの女子がうんうんと頷いていた。正直、連携という言葉を知っているのかすら疑わしい。

そこでパンパンと手を叩く音が聞こえた。千冬さんだ。

「それでは、専用機持ちが六人いることだし、六人グループに分かれて実習を行う。グループリーダーは必ず専用機持ちがやれ。では、分かれろ」

千冬さんが言い終わるなり、二クラス分の女子が俺、一夏、シャルルに詰め掛けてくる。……勘弁してくれ……こっちはそれなりに疲れてるってのに……。

そんな疲れた顔をしていた俺を見兼ねたのか、状況そのものを見兼ねたのかは分からないが、千冬さんが額を指で押さえながら助け舟を出してくれた。

「この馬鹿者が……出席順に並べ！音無、織斑、凰、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒに各一人ずつだ！」千冬さん、アンタが今は女神に見えて仕方ないぜ……。心の汗が零れるのを感じながら、そんなことを思った。女子の方もその声を聞いてささっと移動していた。まあ、並び終わってもぼそぼそと喋っていたが、そこは許容してやろう。

「……音無君と同じだぁっ。さっきの格好良かったなぁ……」
「……織斑君と同じ班っ。名字のおかげね……」
「……セシリアかぁ……。さっきボロ負けしてたし。はぁ……」
「……凰さんよろしくね。後で二人の話聞かせてよっ……」
「……デュノア君！実は私、今フリーなんだけど……」
「……」

ちなみにおしゃべりがないグループがドイツの転校生である眼帯の班だ。随分と張り詰めた空気を出しちゃってまあ……女子がすげぇビクビクしてる。合掌。
そんな調子で実習は続く。俺の班は『リヴァイヴ』を使っての操縦の方法だ。

「それじゃ、俺の言うことは聞けよ。とりあえず出席順に装着と起動、そのあとは飛行だな。よし、最初のヤツはーーー」

「はいはいはーいっ！」

「――面倒そうだから最後からやるか。最後のヤツ、挙手ー」

「ひ、ひどいっ！この女泣かしっ！」

ひどいのはお前の評価と頭じゃないのか……何となくそう思った。

「冗談だ……。ほら、早くしろ。もうお前からでいい。えっと……」

「相川清香だよ！よろしくね！」

「あぁ、相川。んじゃ、装着して起動してくれ。居残りは勘弁だからな」

「そ、そうだねっ！急ごうか！」

そんな感じで順調に進み、三人目が（確か佐藤さん）装着してる間に、周りをざっと見ると、ドイツの転校生である眼帯のグループに何かトラブルが起きたらしい。どうやら、前の女子がＩＳをしゃがませるのを忘れたせいで、次の女子が乗れなくなってしまったらしい。あれじゃどうしようもないな……ＩＳに膝かっくんでもして屈ませるんだろうか。そんなことを思ったが、眼帯は以外なことに次の女子を抱えて運んでいた。なんだ、それなりに良心は持ち合わせてるみたいだな。なんだかんだで優しいヤツってことか。

っと、それよりも。俺のグループも装着と起動だけでも終わらせないと――――って。

「……おい」

「て、てへっ？」

こいつ……！やってくれるじゃぁないか……！後ろを見ると、次の女子が目をキラキラさせてこっちを見ていた。……勘弁してくれ……。

そんな感じで、なんとも精神的に疲れる実習だった。……午前中でこれかよ……。

第十四話　桜舞う天閣、薬莢は零れて（後書き）

山田先生改（笑）

頑張ってましたね。

次はシャルと絡ませるつもりです。

第十五話　それぞれが抱える、心の檻

午前中の実習がようやく終わり、昼休み。一夏はどうやら箒と約束があるらしく、仲良く屋上へ（鈴とドリルが黙っていないだろうが）。

それに対し俺はというと、未だ午前中に受けたダメージが回復できておらず、机に突っ伏していた。これはひどい……もう帰りたくなってきちまったぜ……。

「えっと……一弥、大丈夫？」

「シャルルか……まあなんとか大丈夫だ。どうしたんだ？」

「うん。まだ一弥もお昼ご飯食べてないみたいだから、一緒に食堂行かないかなぁって思ってね」

「そうだな……」「あと、案内もしてほしいんだけど……まだ校舎の全体を把握しきれてないから、お願いしていいかな？」

「あぁ、そういえばそうだな。んじゃ、昼メシついでに案内してやるよ」

そう言って席を立つ。だが、俺が向かったのは教室の出口ではなくとある席だった。

「眼帯。お前も昼まだなんだろ？食堂行くぞ」

俺は眼帯に話しかけていた。こいつのことは結構気になるからな。

「……断る。なぜ私が貴様のような奴と行動を共にせねばならんのだ。貴様は敵だと言ったはずだ」

「なら、昼メシはどうすんだ？何も食わないつもりか？そんなんで午後の実習を乗り切れるのか？そんなことは無理だって分かってるだろ？」

「……」

「どうせまだ校舎の全体像を把握しきれてないんだろ？俺は副クラス長なんでな。案内はするが、二度手間は御免なんだよ」

「……」

てか教室。なんで俺と眼帯が話するだけで雰囲気が氷点下まで下が

るんだ。警戒しすぎだろ。

「お前のことだから後で覚えるつもりなんだろうが、この学園は広いからな。俺でも必要最低限だけでも覚えるのに苦労したぞ。そんなことだったら、今俺についてきて場所を覚えた方が効率的だろ？」

「……ふん。そこまで言うのならついて行ってやる。だが、勘違いを――」

「してるのはお前だろ？俺は副クラス長の仕事をしてるだけだ。眼帯、お前は仕事に私情を挟むのか？」

「……」「んじゃとりあえずメシだな。シャルル、眼帯もついて来るけど、構わないよな？」

「うん。僕は全然気にしないよ」

「じゃあまずは昼メシだな。行くぞ」

計・画・通・り（ニヤリ）

それにしてもよくあんなに喋ったな俺……。自分の才能に思わず身震いしちまうぜ。まあ眼帯も道連れにできたし、色々気になることを聞かせてもらうとしよう。

「待て」

「……ん？なんだ？」

そう思っていたら、眼帯から話しかけられた。珍しいな、こいつから話を振ってくるなんて。

「私のことを眼帯と呼ぶのをやめろ」

「ん？トラウマでもあんのか？」

「そんなことは貴様の知ったことではない。とにかくやめろ」

何かあるのか？まあやめろって言ってるしやめるか……ってか、それならお前もその貴様って呼ぶのやめろよ。どこの大佐だよお前。

「ラウラ。これでいいか？」

「ふん……」

言い返してこないってことはいいってことなんでしょうか。最近ツンデレを身近に感じてたから何となく扱い方が分かってしまった。
どうでもいいが。
結局三人で食堂に行くことに。適当な場所に座り、それぞれが食事を楽しむ。

「そういえばシャルル。部屋とかどうすんだ？何も聞いてないのか？」

「え？部屋？どこでもいいんじゃないかな？」

お前仮にもスパイ？だろ……どんだけ天然なんだこいつ……。

「……お前、案外女好きなのな」

「……？あっ！い、いや、そういう意味じゃなくて、えっと……」

思い出した！今この子思い出しましたよ！？イコール忘れてたってことですよね！？

「んー……やっぱ俺達三人で一部屋になんのかな。でも三人はちょっと狭いしなぁ……」

と、そこで眼た……じゃなくて、ラウラに目が行く。黙々と昼メシを食べている辺り、話をする気などないってことだろう。そうはさせんよっ！

「ラウラ。お前何か聞いてないか？」

「……」

「おーい。メシ食いながら寝てんのか？どこの麦わらだよお前」

「……知らん。興味もない」

「あぁ、ボーデヴィッヒさん。口にソースついてるよ」

「んむ……。そ、それくらい自分でできる」

おぉ。あの眼帯大佐のラウラが照れている。ってかなんかお前らお似合いだな。あるぇ？シャルル女だっけ？もうなにがなんだかワケが分からん。

「まあ放課後になったら山田先生が説明するだろ。一緒の部屋になれるといいな、シャルル」

「あ……うんっ！」

やべぇ、可愛い。お持ち帰……はっ！俺は一体なにを!?おおお落ち着け！れれれ冷静になれ！

「んで、ラウラ。聞きたいことがあんだけど」

「なんだ」

「お前一夏に恨みでもあんのか？口ぶりからするに、千冬さん関係みたいだけど」

「……」

やっぱタブーかな、この話は。でもそれじゃあ俺が納得できねぇんだよ。

「何か理由でもあるのか？」

「……貴様には関係ないことだ」

「……そうかよ。でも、これだけは言わせてもらうぞ」

「……なんだ」

「アイツは今、頑張っている。努力をしている。それだけは否定してやらないでくれ」

「……」

「……そろそろ校舎案内に行くか。ダラダラしてたらすぐに昼休みが終わっちまうからな」

「うん、そうだね」

がたがたと立ち上がり、食器を流し台に入れる。

「……私は……だけど……」

「……ラウラ。行くぞ」

「……分かっている……」

何か考えているようだったが、時間的にも余裕がない。ラウラを急かして、俺達は食堂を出た。

「……優しいんだね。一弥は」

「ん……そうか？」

「うん。なんていうか……頼れるお兄さんって感じがする」

「兄貴ねぇ……まあ妹がいるからな。世話焼き体質なのかもな」

「そうなんだ……」

「あぁ、だから」

そこで、二人を見て、

「お前らも、困った時は頼れよ。俺じゃなくてもいい。頼れるヤツを探せ。そうしねぇと、壊れちまうからな」

「……うん。ありがとう、一弥」

「……ふん、余計な世話だ……」

こいつらにも事情があるんだろう。それは、こいつらにとって重く、暗いことなんだろう。

でも、一人で抱える必要はないだろう。俺なんか力になれないかもしれない。なら、もっと強い人に頼れよ。

お前らが何を抱えているのかは知らねぇけど――お前らが潰れるところは、見たくないからな。

☆　★　☆

「あっ、シャルル君、お話があるので少し残ってくれますか？音無君と織斑君も関係があるので、二人もお願いしまーす」

「あ、はい」

「部屋割の話だろ？結局どうなるんだ？三人一部屋か？」この三人一部屋ってのは思いつく限り最悪の展開だ。一夏は天然の日本代表候補生だからしばらくは大丈夫かもしれないが、シャルルの方が秘密を守ることに対しての執着がなさすぎる。正直、見ていて危なっかしいったらない。できれば一人一部屋、それが無理なら俺とシャルルの相部屋が望ましいんだが……。

「いえ……ＩＳ学園の寮は二人部屋が基本なので、三人では少し狭いと思います。なので、一人が二人部屋を一人で使うことになります。それで……」

「問題でもあるんですか？」

一夏が山田先生に質問をする。できるならシャルルを一人で部屋を使わせることができれば良かったんだが……そう簡単にはいかないか。

「あ？そういえば一夏。お前いつの間に復活したんだ？昼休み終わってからぐったりしてたから敢えてほっといたけど……なんかあったのか？」

「……一弥。セシリアの手料理はヤバい。あ、あれは――――（ガクガクガクガク）」

「お、落ち着け一夏っ！もういい、もういいから！な！？」

なんだ！？ドリルの手料理ってそんなに危ないのか！？

「えーと……話を続けても大丈夫ですか……？」

「あ、あぁ。続けてくれ」

「それでですね、シャルル君はこの学園に来たばかりなので、勝手が分かるまでの間、できれば相部屋になってあげてほしいんですけど……」とりあえず一夏は置いといて……ふむ、最悪、とまではいかないが、まあそれでもいい方だろうな。

「分かりました。んじゃシャルル。俺が相部屋になるけど問題ないか？」

「一弥がなってくれるの？うん、こちらこそよろしくね！」

一夏？あぁ、そいつなら教室の隅っこで「なんでサンドイッチが甘いんだ……」とか言ってるからスルーだ。問題ない。

「音無君がなってくれるんですね？それじゃあ、鍵を渡すのでその部屋で寝泊まりをしてくださいね。私からは以上です」

「了解。んじゃシャルル、行くか」

「それはいいけど……一夏は大丈夫なのかな……？」

「……いや大丈夫だろ……。大丈夫だと祈る……」

一夏……強く生きろよ……！

ん？今思えば全部原因はニブチンのアイツじゃね？同情の余地はないな。心配して損したぜ、ったく。

☆　★　☆

荷物の移動も、夕食も済ませた後、俺達は部屋でくつろいでいた。

ちなみに荷物の移動の途中で箒に会い、一夏は今部屋に一人だぞ、と言ったら顔を真っ赤にして「ふ、不埒な！」だからそんな考えに至るお前の方がよっぽど不埒だっつーに。

「うーん、紅茶とも違うし、不思議な味だね。でもおいしいよ」

「そうか、よかった」

休憩がてらに緑茶を入れたんだが、気に入ったようでなによりだ。

「一弥って結構なんでも器用にこなすよね。今日の山田先生との模擬戦闘もすごかったし。料理とかもできるの？」

「まあ家庭料理くらいならな。それに、今日の模擬戦はまぐれだ。大したもんじゃねぇよ」

鈴とドリルが俺の言うことを聞けば、あんな危なっかしい勝ち方しなかっただろうしな。

「そういえばシャルルもフランスの代表候補生なんだろ？やっぱ専用機持ってんのか？」

「うん。えっと……一弥達って放課後に特訓してるんだよね？」

「主に一夏目当ての女子軍団がな。まあ俺もしてるっていったらしてるけど」

「じゃあ、その時に説明するよ。今は夜も遅いしね」

「ん、りょーかい。んじゃ寝るか。電気消すぞ？」

「うん。おやすみ、一弥」

「あいよ、おやすみ」

電気を消しても、外からの月光が差し込んでいるので、それなりに明るいが、そんなことを気にするほど神経質じゃない。明日もハードだし、さっさと寝よう。

「……ねぇ、一弥……」

「ん、なんだ？」

「もし……もしさ、自分のことを友達だ、って思ってくれてる相手に、どうしても黙っていなきゃいけないことがあったら……もし、一弥が秘密を隠さなきゃいけなくなったら……どうするの……？」

「……俺か。そうだな……」

悩んでいるんだろう。苦しんでいるんだろう。今日見ただけでも、こいつは相当のお人よしだ。自分が女だ、ということを秘密にしていて、罪悪感が沸いてきたんだろう。考える必要はない。俺がするべきことは、こいつを助けること。後押しすること。一緒に悩んでやること。それが俺のやることだ。

「俺は別に、どっちでもいいな。その秘密ってヤツがバレようが、バレなかろうが」

「……どうして？」

「分からないか？」

「……うん」

「別にバレても、俺の周りのヤツらは受け止めてくれるからだ。それなら、秘密にしてもしなくてもどっちでもいいだろ？あとは俺の気分次第だ」

「……」

一夏。俺の親友。アイツのことは千冬さんより分かっている自信がある。アイツなら、例え俺が人殺しだろうと手を差し延べるだろう。だからアイツのことは尊敬もしているし、目標にもしている。

「……一弥は」

「ん？」

「一弥は、どうするの？僕がもし、一弥を騙していたら……」

「シャルルはどう思ってるんだ？」

「……う、受け止めて、くれる……？」

声が震えてるな……。本当なら、抱きしめたりしてやればいいんだろうが、一応まだ男って設定だしな。

「ああ。お前はもう、紛れも無く俺の友達だからな」

「……ありがとう、一弥」

「もう寝ろ。明日がキツいぞ」

「うん、おやすみっ」

◇

私は、迷っているのだろうか？

そんなはずはない。私は、あの男を許せない。そして、この学園に来た。

なのに、どうして私は躊躇うのだろう？あんな男の言うことに揺らぐのだろう？

……明日。

私は本気だ。

……明日の放課後、思い知らせてやる。

私は、そのためにここに来た。

……貴様など、ただの足枷だと思い知らせる。存在を、否定しきってやる。

眼帯をした彼女は、月夜に沈むように、抱かれるように、眠りについた。

第十五話　それぞれが抱える、心の檻（後書き）

なんか、後戻りできなくなったような……。

初のシリアスです。「ははっ、作者ワロス」そんなこと分かってるんですよぉーーーーっ！

第十六話　Ｃｏｍｉｎｇ　Ｏｕｔ（前書き）

一夏いじりは楽しいですねっ☆

第十六話　Ｃｏｍｉｎｇ　Ｏｕｔ

次の日。放課後。ラウラを除いた俺達専用機組（新撰組みたいな感じだなオイ）は二組に分かれて特訓をしていた。なのだが……。

「なんで一弥に教わらなきゃいけないのよ！？アンタ、あたしよりＩＳ稼動時間短いでしょ！？」

「そうですわ！それより、一夏さんの方が気になります！」

「おい一弥！なぜ私まで一緒なのだ！納得いくまで説明をしてもらえるんだろうな！？」

全くこいつらはぎゃあぎゃあと……じゃあ言わせてもらいますよ？言っちゃいますよ？ハートブレイクの準備はできましたか？

「まずは鈴とドリル。昨日の模擬戦で戦闘中にも関わらず口喧嘩して山田先生にボロ負けしたのは忘れたワケじゃないよなぁ？」

「「うっ……」」

「精一杯やるならまだしも、敗因が俺の指示の無視、さらに自滅に近いときたもんだ。お前ら本当に代表候補生か？」

「「うぅっ……」」

「個別に言うとしたら、鈴！お前は動きに無駄がありすぎる！《双天牙月》振るう予備動作がデカい。あと衝撃砲を撃つタイミング。あんなもん一対一か一対多にしか使わねぇだろ。もっと近接戦闘を極めろ」

「うぐぅぅ……」

「次、ドリル！誘導機器の扱いが雑すぎる！しかもお前まだライフルとビットの平行使用ができねぇんだろ？ビットの操作もほとんどマニュアル通り。んなもん5分もあれば攻撃パターン読まれるに決まってるだろ」

「ふぐぅぅ……」

「っつーワケで、箒と鈴は近接戦闘！模擬戦形式でな！ドリルは俺と誘導機器の操作の基礎の反復！分かったか！？」

「一弥！私には理由がないというワケではあるまいな！？」

箒……お前ってヤツは……。仕方ないので、肩を回して箒だけに聞こえるようにする。

「……優勝したら、付き合ってもらうんだろ？油売ってる場合か？」

「さあ鈴！早速特訓を始めるぞ！位置につけ！」

なんて扱いやすい……まあやる気も出したし、俺はドリルの特訓でも見るとしよう。

「一弥さん、せめてコツかなにかございませんの？貴方、あそこまで誘導機器を操れる人なんて世界でそうはいませんわよ？」

「そうだな、要は空間認知だ。網を張り巡らすようなイメージに、交差した部分にポイントを打っていく感触。あと標的の動きを読むこと。あとは慣れだ」

「網を……張り巡らす……？」

「やって見せるか。おーい、箒、鈴！今から妨害するからな！うまく回避しろよ！」

無茶言うなぁー！という声が聞こえた気がするが、敢えてスルー。
雨箒を撃ち出そうとした時、周囲がざわついたのが聞こえた。

「ねぇ、ちょっとアレ……」
「ウソ！？ドイツの第三世代型！？」
「まだ本国でトライアル段階って聞いてたけど……」

注目の的を探すと、それはすぐに見つかった。俺と同じ黒のＩＳ。
しかし、黒一色、というワケではなく、ところどころに赤いラインが入っている。……ってか……

「……ネコミミ？」

「そんなわけないでしょう……」

素直に疑問に思ったことを口に出したらドリルにツッコまれた。いや、あれどう見てもネコミミじゃね？
そのＩＳに乗っていたのは、ドイツ、という語句ですぐに分かったが、やはりラウラだった。周りのざわめきに全く動じていないどころか、誰もいないかのように振る舞う孤高の狼みたいなヤツ。

「おい」

話しかけてるのは……やっぱ一夏か。なるほど、それじゃあ……

「特訓続けるか」

「「「はぁっ!?」」」

え?なんでそんな反応?

「アンタバカなの?どう考えてもヤバい雰囲気でしょうが!」

「バカはお前だ。むしろヴァカだろ」

「一弥、なぜ止めないのだ!一触即発なのはすぐに分かるだろう!」

「んなもん、俺達が行く必要がねぇからだよ」

「「「え?」」」

視線を戻すと、シャルルが話の相手をしている。シャルルは温厚だ

し、別に大丈夫だろう。それにガチでやっても、この人数を相手にできるほどの実力者ではないだろう。そんなもん化け物の領域だ。思った通り、ラウラは一言二言残して去って行った。にしても大丈夫なのか、アイツ？いつも一人だし、仲間も作ろうとしていない。かなり心配だが……

「俺が気にかけても無意味……か」

ああいうヤツは一回ボコボコにしてやるのが一番だ。どうせそれまで人の話を聞く耳すら持たないだろう。

「っと、それより特訓だ。他のことに構ってる暇なんてないだろ？」

今、俺にできることはない。受け身の姿勢は気に入らないが、待つ以外することもない。
あっちの出方を見るだけだが……ラウラ、無茶はすんなよ……。

☆　★　☆

「んじゃ、今日はここまでにしとくか」

「こんの……スパルタめぇ……」
「女性に対する扱いがなっておりませんわ……」
「ふ、ふん……だらしの、ないな……」

肩で息をしている一夏予備軍。そこまでキツくなかったと思うんだが……。大体これくらいしねぇと真面目にやらねぇだろうがお前ら。まあこのままってのも面倒だしな……仕方ない。

「そういえば一夏は一人で部屋を使うようになって寂しいって言ってたなぁ……。傷心の一夏に優しくしてやれば、ひょっとしたらひょっとするかもな？」

「いいい一夏っ！？さ、寂しいならあたしが一緒に寝てあげてもいいわよ！？」
「いいい一夏さん！じ、実はわたくしもちょうどお話したいと思ってましたのよ！」
「いいい一夏っ！ま、全く仕方ないなお前はいつまで経っても甘えん坊なんだから全く仕方ないな！」

「え？ちょっ、お前らどうしたんだ急にっうわぁぁぁっ！」

じゃ～な～一夏～。頑張れよ～。まあとりあえず合掌しておこう。
なむなむ……。

「……一弥って……」

「シャルル。恋する乙女の手助けをしてやったんだ。悪いのは全部あの天然歩くフラグ乱立野郎だ」

「はぁ……まあいいや。それより、シャワー浴びて夕食にしない？一弥が先に入っていいよ」

「お、悪いな。んじゃお前が上がるまで待ってることにすっか」

他愛のない話をしながら新しい自分の部屋、そしてシャワールームへ。男のシャワーなんて頭、顔、体を洗うだけだ。最後にさっとシャワーを浴びて水滴を拭き取り、着替えは……部屋着でいいか。

「待たせたな、シャルル。空いたぞ」

「……」

「……シャルル？おーい、シャールルーさーん？」

「ふぇっ!?な、ど、どうしたの、一弥!?」

「こっちの台詞なんだが……シャワー空いたぞ」

「……う、うん……落ち着け……落ち着け……」

熱でもあるんだろうか……フラフラとどこか危なっかしい歩き方で、シャルルはシャワールームに入っていった。一応注意はしておくか。

「さて、何すっかな」

PiPiPiPi!

暇を持て余していると、不意に携帯が鳴った。誰だ?携帯の表示を見ると、一夏の文字が。……出るの面倒くせぇな……。
そんなことを考えていても一向に鳴り止まない携帯電話。しょうがないヤツめ……。

「……おかけになった番号は、現在使われておりません。さっさと腹括れ女泣かせのヘタレ野郎（笑）」

『んなこと言う電話センターがあるかぁ!ってか意味が分からん!』

チッ、バレたか。

「三割冗談だ。んで、何か用か？」

『冗談が三割しかない！？そ、それより助けてくれよ！なんか筹達の目が血走ってるんだ！』

「なんだと！？だが断る！」

『なんでだよ！大体一弥のせいだろぉ！？今どんな状況か分かってるのか！？』

「……事後？」

『サラっと卑猥なことを言うなぁ！しかも今純粋に聞いただろ！？』

「なんだ、違うのか。んじゃ、さしずめシャワールームに立て篭もってるってとこか？」

『逃げ回ってるんだよ！なんとかしてくれよ、一弥！』

「俺はドラ〇もんじゃないぞ。あっ、タケコプター貸してやろうか？俺の部屋まで来いよ」

『行けないからこうして電話かけてるんだろぉ！？……って、うわぁ！きたぁっ！』

「仕方ねぇな……おい一夏、今どこだ？」

『い、今？三階の東階段登ってるところだ！どうすればいい！？』

「まあ落ち着け。立ち止まって深呼吸でもしろ。話はそれからだ」

『あ、あぁ……って、だから立ち止まったら話を聞く前に捕まるって言ってるんだよっ！さては全く助ける気がないな！？』

「冗談だ。東階段なら……そこの突き当たりを右、そんで次の曲がり角を左に行けば――」

『うまく撒けるんだな！？』

「――行き止まりだから気をつけろよ」

『危なぁーーーっ！おい一弥本当真面目にやってくれお願いしますからぁっ！』

チッ、惜しかったな……。そんなことを思ってたら小さい声が聞こえてきた。これは……箒か？

『……待て一夏！おとなしく捕まれ！どうして逃げるのだ！……』

「なんだ、箒じゃねぇか。なんで逃げてんだよ、一夏」

『日本刀持って追いかけてきたら誰でも逃げるだろっ！』

「……そうですね。そりゃそうだ」

日本刀持って追いかけ……かなり猟奇的な……そら怖いわ。

「んじゃアレだ。窓から飛び下りてＩＳで逃げろよ」

『あ、ＩＳ？でも使っちゃいけないって書いてあったじゃないか！』

「大丈夫だ、問題ない。ちょっと千冬さんの出席簿が火を噴くだけだ」

『ちょっとで済ませられる問題じゃないだろぉ！』

んー、じゃあどうすっかなー。と、そこまで考えている途中でドアが開く音がした。

「あ、悪い一夏、俺今からメシだか……ら……」

カシャッ。携帯が落ちる音が響いた。その音が俺の携帯だと気づくのに時間がかかってしまった。『か、一弥？一弥ぁー！』という一夏の叫び声がした気がするが……いや、落ち着け。分かっていたことじゃないか。何を取り乱すことがあるんだ。

「……え、えっと……一弥？」

顔を赤らめて俺の名を呼ぶ彼――いや、彼女は、いつものシャープなジャージを着ている。そこまではいい。問題は……胸が、膨らんでいる、ということ以外には見受けられなかった。

☆　★　☆

「……驚かせちゃったかな？」

「まあ確かにいきなりだから驚いたな」

「そっか……一弥は、分かってたんだよね？僕が、実は女子だってこと」

「……まあな」

「ふふっ……やっぱり一弥は優しいね。分かってて、僕を慰めてくれたんでしょ？」

「まあ……秘密を暴きたがる性分は持ち合わせてないからな。それより、バラしてよかったのか？」

「ううん……よくないけど……一弥が友達って言ってくれたから。友達に隠し事はよくないって思ったからね」

「別にいいだろうに……俺だって、鈴とは長い付き合いだが、隠し事の一つや二つはあるぞ？」

「だって、もう一弥にはバレちゃったじゃない。それなら、これ以上隠すなんて無意味だよ」

「そうか。……で、なんで男としてきたんだ？やっぱ俺と一夏のデータか？」

「……うん。一弥は、デュノア社って聞いたことある？」

「あー、あれか。『リヴァイヴ』を生産してるとこだろ。やっぱそこと血縁関係なのか？」

「うん……。僕の父がそこの社長。その人から直接の命令なんだよ」

「……命令？子供にか？そりゃまた変態的な趣味を持ってそうだな」

「一弥。僕はね、愛人の子なんだよ」

「……」

「引き取られたのが二年前かな。ちょうどお母さんが亡くなったときにね、父の部下がやってきて、色々と検査してるうちに適性が高いことが分かって……非公式だけど、デュノア社のテストパイロットに選ばれたんだ」

そんな身の上話をしているシャルルの顔は、明らかに曇っている。言いたくない話なんだろう。それでも健気に喋るシャルルは、ひどく脆く感じた。

「それで、デュノア社でも第三世代型を開発してたんだけど、圧倒的にデータも時間も不足してて、なかなか形にならなかったんだよ。それで、政府からの通達で予算が大幅にカット。さらに、次の欧州連合の総合防衛計画『イグニッション・プラン』で選ばれなかった場合は、援助の全面カットに。ＩＳ開発許可も剥奪されることになるんだ」

「なるほどな。男装は注目を浴びて予算を取り戻すため。ＩＳ学園に来たのはデータ、ってワケか」

「……うん」

「随分とまあ癪に障る父親だな。ただ利用するくらいにしか考えてねぇんだろうな。結果がついてこないワケだ」

「……そうだね。まあ、そんなところかな。あぁ、話したらすっきりしたよ。聞いてくれてありがとね。それに、ウソをついててゴメン」

「それは別にいいが……お前はどうなるんだ。バレたら本国に呼び戻されるんだろ？」

「……本当に一弥は頭がよく回るね……なんで勉強はできないの？」

「俺はやればできるから問題ないんだよ」

「それ、要はやらないからできないって言ってるんだよね？」

「……んなことより、どうなるんだ？お前」「……時間の問題かな。フランス政府も真相を知ったら黙ってないだろうし、僕は代表候補生を降ろされて牢屋行きかな」

「それでいいのか？」

「いいも悪いもないよ。僕には選ぶ権利がないんだから」

「なるほどな。……んじゃ、その腐った性根の父親に代わって俺が選んでやるよ」

「……え？何を言って――」

「特記事項第……なんだっけ？確か、ＩＳ学園の生徒は在学中は国家や組織に属さない。同意がない場合な。つまりお前の父親が捨てたも同然のお前の権利を俺が拾ったんだ。これでお前はもう俺のモンだな」

「お、俺のものって……」

顔を赤くするんじゃありません！僕にも性欲というものはあるんですよ！？はっ！？落ち着け落ち着け、びーくーるびーくーる。

「だってそうだろ？その父親は介入できないし、お前の秘密を握ってるのは俺だけだしな」

「う……」

「だから。俺もその権利を捨てる」

「……え？」

「捨てた権利はもう誰のものでもない。拾うなりなんなりすればいいぞ」

「あ……！」

「ここに残るなり、好きにしろ。もうシャルルはシャルルだけのものだ」

「あ、あぅ……い、いいの、かな……僕が……ひっ、……僕なんかが、ここにいて……ひっく……」

「……あぁ。お前が居たい、って言うなら、俺は歓迎してやるよ」

「う、うん……うんっ。ぐすっ……あ、ありがとう、一弥ぁ……ふぇ……」

「あーもー泣くなよ。な？ほらよしよし」

「う、うん……でも、む、無理だよぉ……だって、だって……嬉し

くて……」

「んじゃ泣け。俺の胸でな」

「うん……」

「……はい？え、いや、うんじゃなくて……ほあぁっ！？」

な、なんだ！？なんでこうなった！？あ……ありのままままま今起こった、じゃない、起こってることを話すぜ！

『シャルルが俺の胸で泣いている』

あれ！？割と簡単！？ま、待て！落ち着け！と、とりあえずシャルルが泣き止むまで待とう。話はそれからだ！

コンコン、とそんなことを考えている間に、扉がノックされる音が……ってノックぅ！？

『一弥いるー？一夏もいないし、アンタも夕食まだでしょ？シャルルも来て一緒に食べない？』

鈴！？なんてタイミングの悪い！いや、いいのか？とりあえずぐっじょぶ鈴！

「ってそんなこと考えてる場合じゃねぇ！シャルル、隠れろ！」

「う、うん。え、えっと、とりあえず身を潜めて――」

「なんで潜めるんだよ!?ベッドベッド!布団の中で大丈夫だ!」

「あ、ああっ、そっか!」

『一弥ー?入るわよー?』

バシュッ。ドアが開く。なんとか間に合ったか……。

「なんだ、いるんじゃない。さっさと夕食に……って、シャルルはどうしたの?」

「あ、ああ。具合が悪いみたいなんだ。今薬を飲ませた。夕食もいらないみたいだし、ちょっと心配してたところだったんだ」

「そうなの?んじゃ仕方ないわね。一弥行くわよ。シャルル、無理しちゃダメだからね?」

「う、うん。ありがと」

バシュッ、という音を背に、食堂へ歩く。あれ？そういえば。

「鈴、一夏はどうしたんだ？」

「まあまあ、気にするんじゃないわよ」

「気にすんなって……ってオイ。なんで腕を組むんだ？」

「別にいいじゃない。こうして一弥と話すのも久しぶりなんだし」

なんだ？随分とご機嫌だな。いいことでもあったのか？そんなこんなで食堂に着いた俺達だが、鈴が腕を話そうとしない。ってかキツく絞めすぎじゃないか……？

「おい鈴。どこ行くんだ？」

「まあまあ、えっと……あ、いた。おーい、連れてきたわよー！」

なんだ？誰か待ってたのか？それにしても激しく嫌な予感がするのは俺だけか？そんな俺を待ちうけていたのは――

「ああ一弥。待っていたんだぞ？ふふふ……」
「一弥さん？じっくりお話しましょうね？ふふふ……」

食堂に居座る阿修羅だった。

「さらばだっ！」ガシィッ！し、しまったぁぁぁぁ！鈴にホールドされてたんだったぁぁぁぁ！

「ねぇ一弥ぁー？一夏がなんだって言ってたっけー？」

「ぎゃぁぁぁ！り、鈴！ちょ、腕ぇぇぇ！俺の腕ぇぇぇ！」

「よくもあたし達で遊んでくれたわね……覚悟は出来てるんでしょうね……？」

や、ヤバい！ってか箒さん！？なんで日本刀なんて抜くんですか！？学園で刃傷沙汰なんて冗談じゃないですよ！？

「くっ……。あ、おい一夏っ！助けろ！」

「えっ！？い、一夏っ！？」

「さらばだっ！」

できた一瞬の隙を見計らい、逃走。こんな殺人鬼のいる食堂にいられるかぁ！

「あっ！待ちなさい一弥っ！今ならガゼルパンチ十発で許してあげるから！」

「じ、冗談じゃねぇ！」

ＩＳ学園の夜は、今日も賑やかだった。

第十六話　Ｃｏｍｉｎｇ　Ｏｕｔ（後書き）

シャルル可愛いよシャルル。

第十七話　立ち込める暗雲、鳴り響く警鐘

「あーあ。この距離だけはどうにかならねぇのかね……」

学園内の男子トイレは全部で三ヶ所しかないため、用を足すのにいちいち時間がかかる。本当に面倒くさいったらない。

「いつつ……ったくアイツら……どんだけしつこいんだっつーの……」

昨日の強制的で賞品が俺の命という無茶苦茶な耐久マラソン（虐殺ではない。そんなの俺は認めない……！）のせいで脚や太股が悲鳴を上げている。くそっ、体育会系は一夏専門だろうが。しかも朝一夏に会ったんだが、アイツは何事もなかったように

「ケロッ☆」

としていた。あの時ほど殺意が沸いたのも久しぶりだ。

「なぜこんなところで教師など！」

「やれやれ……」

ん……？何か聞き覚えのある声がするな。こっちの……ってか俺の進行方向からか？

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか！」

ちらっと見てみると……やっぱラウラと千冬さんか。あのラウラがあそこまで声を荒げている辺り、本当に千冬さんを尊敬しているんだろう。話の内容は、千冬さんの仕事について、ってとこか。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分も生かされません」

「ほう？」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるに足る人間ではありません」

「なぜだ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ＩＳをファッションかなにかと勘違いしている。そのような程度の低い者達に時間を割かれるなど――」

「――そこまでにしておけよ、小娘」

「っ……！」

千冬さんの声に凄味が増し、相手を威嚇するそれになる。流石のラウラも、その声に含まれる覇気にすくんでしまったようだ。言葉が途切れたまま、続きの言葉を発しない。発せない。

「少し見ない間に偉くなったな。十五歳で既に選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は……」

ラウラの声が震えているのが分かる。千冬さんの力に対する恐怖。それに、敬愛している相手に嫌われるという恐怖。

「さて、授業が始まるな。さっさと教室に戻れよ」

「……」

ぱっと声色を戻した千冬さんが急かし、ラウラは黙ったまま足早に去っていった。

「そこの男子。盗み聞きか？異常性癖は感心しないな」

「俺の教室の進行方向に居たので待っていただけですよ」

「全くお前は……ああ、一弥。お前が頼んでいたカタログが到着した。放課後にでも取りに来い」

「あ、了解です。にしてもあれですね。どんな武器使ってもタダなんて随分気前がいいですね」

「一夏のＩＳは拡張領域がないからな。お前の方に期待がかかっているんだろう。それに、その武器を作っているのも匿秘のラボだ。武器を使わせてデータを取っているのだから、むしろ金を取ってもいいくらいだ」

「えげつな……いえ、なんでもないです。っと、んじゃ、そろそろ次の授業が始まりますんで」

「ああ。廊下は走るなとは言わん。バレないように走れ」

「昨日一夏予備軍に追いかけ回されたんで筋肉痛なんですよ……」

「ほう？随分面白そうな話じゃないか。私にもご教授願いたいな」

「放課後にでも。んじゃ千冬さん、これで」

「ああ、遅れるなよ」

千冬さんに別れを言い、俺は教室までの道のりを痛む足を引きずって歩いていった。

◇

「「あ」」

二人揃って間の抜けた声を出す。時間は放課後。場所は第三アリーナ。人物は鈴とセシリアだった。

「奇遇ね。あたしはこれから次の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「あら奇遇ですわね。わたくしも全く同じですわ」

二人の間に見えない火花が散る。どうやら二人が狙っているのは優勝らしい。

「本当は一弥を相手にしたかったけど、いい機会だしこの前の実習のことも含めてどっちが上かはっきりさせとくってのも悪くないわね」

「あら、珍しく意見が一致しましたわね。わたくしも一弥さんに今までの誘導機器の特訓の成果を見せたかったのですが、そうですわね。どちらがより強くより優雅か。ここではっきりさせましょうか？」

二人がメインウェポンを呼び出す。それを構えて対峙する二人の間に――――音速の砲弾が直撃、爆発した。

「「！？」」

すぐに臨戦体勢を取り、砲弾が飛んできた方向に意識を向ける。そこには、あの漆黒に浮かぶ赤いラインが特徴的な機体が佇んでいた。機体名『シュヴァルツェア・レーゲン』。登録操縦者――

「ラウラ・ボーデヴィッヒ……」

セシリアの表情が苦く強張る。その表情には、欧州連合のトライアル相手以上のものが含まれていた。

「……どういうつもりかしら？いきなりぶっ放すなんていい度胸してるじゃない」

とん、と連結した《双天牙月》を肩に預けながら、鈴は衝撃砲を準戦闘状態へシフトさせる。

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か。……ふん、データで見た時の方がまだ強そうだったな」

いきなりの挑発的な言葉に、鈴とセシリアのこめかみに青筋が浮かぶ。

「何？やるの？わざわざドイツからボコられに来るなんて気持ちいいくらいのマゾっぷりね。ジャガイモ農場じゃそういうのが流行ってるのかしら？」

「あらあら鈴さん、言葉の使い方も分からない知能の低い方に何を言っても無駄だと思いますわよ？」

ラウラの見下した目つきに不快感を抱きながらも、二人はなんとか怒りの言葉を見出だす。
しかし、まあ無駄な労力だった。

「ふっ……。二人がかりで量産機にボロ負けする程度の力量しか持たぬ輩が専用機持ちとは……同情する。人材不足の国にな」

ぶちっ。
何かうら若き乙女から聴こえはいけない音がして、鈴とセシリアは最終安全装置を外す。

「ああ、ああ、分かった。分かったわよ仕方ないわね。お望み通りスクラップにしてあげる。セシリアー。ジャンケンするわよー。順番決めるジャンケンー」

「そうですわね。わたくしとしてはどちらでもいいのですが――」

「はっ！二人がかりなんてどうだ？下らん種馬を取り合うようなメスにはそれくらいがちょうどいいだろう？」「慌てんじゃないわよー。今から泣くまで殴っやるんだから」

「場にいない人間まで侮辱するとは、全く情けないですわね。その軽口、二度と叩けぬように躾をしてあげますわ」

得物をきつく握り締める二人に冷ややかな視線を送り、

「とっとと来い」

「「上等！」」

◇

「一夏、今日も放課後特訓するの？」

「ああ、もちろんだ。今日使えるのは、えっと……」

「第三アリーナだ」

「「わあっ！？」」

廊下でシャルルと並んで歩いていると、突然予想外の声が飛び込み、つい声を上げてしまった。声のした方を見ると、いつの間にか並んでいた三人目は箒だった。

「……そんなに驚くようなことか。失礼な……」

「お、おう、すまん」

「ごめんなさい。いきなりでびっくりしちゃって」

「あ、いや、別に責めてるわけではないが……」

折り目正しく頭を下げるシャルルに、流石の箒も気勢を削がれる。そして謝らせてしまったことを恥じるように、ごほんと話を逸らす咳ばらいをした。

「ともかく、だ。第三アリーナだ。今日は使用人数が少ないらしいから、空間が空いていれば模擬戦もできるだろう」

それは非常に助かる。なんだかんだで実力は稼動時間に正比例するので、わずかな時間でも実戦同様の訓練ができるのはありがたい。

「……ん？そういえば一弥はどうしたのだ？サボりか？」

「すぐにサボりって決め付けるのはよくないと思うぞ……」

「一弥なら教員室に用があるからって理由で少し遅れるみたいだよ。なんでも――」

『武器が俺を待ってるぜぇっ！あーっはっはっは！』

「――だとか」

「ただの武器マニアじゃないか……？」

「なんて猟奇的な……親の顔が見たいな」

「……日本刀持って追いかけ回す人に言われたくないと思う」

「あ、あはは……」

さっと目を逸らす箒をジト目で見る俺に、苦笑いのシャルル。そんな調子でアリーナに向かうと、何やら慌ただしい様子が伝わってきた。

「なんだ？」

「何かあったのかな？こっちで先に様子を見ていく？」

「誰かが模擬戦をしているようだな。しかしそれにしては様子がおかしい」

そんなことを喋りながら観客席のゲートに向かう。そして、着いたと同時に――

ドゴォンッ！

「「「！？」」」

突然の爆発に急いで視線を向けると、その煙を切り裂くように影が飛び出してくる。

「鈴！？それに、セシリア！？」

特殊なエネルギーシールドで隔離されたステージからこちらに爆発が及ぶことはないが、同時にこちら側の声も聞こえないと言わんばかりに鈴とセシリアは苦い表情で爆発の中心部へ視線を向ける。そこにいたのは、漆黒のＩＳ『シュヴァルツェア・レーゲン』を駆るラウラだった。

よく見ると二人はかなりのダメージを受けているのに対し、ラウラの方はかなり軽微な損傷に見える。

「無駄だ。このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな」

「くっ……！」

ラウラは何かバリアのようなものを展開しているのだろうか、右手を突き出しただけで衝撃砲を完全に無力化している。そして、鈴を捕まえ、反対側にいるセシリアの方へぶつける。さらに――――あれはっ！？

「『瞬時加速』《イグニッション・ブースト》――――！？」

見間違えるはずはない。あれは確かに俺の十八番、格闘特化の技能だ。

なぜ格闘戦でしか使わない『瞬時加速』を使うのか？その理由はすぐに分かった。ラウラの両手首に装着されたパーツから、プラズマ刃が展開され、鈴に斬りかかったのだ。

「この……っ！」

なんとか刃を凌ぐ鈴だが、ラウラのワイヤーブレードが襲い掛かる。両肩、腰部左右から二つずつ発射された計六つのそれが、一弥の操る《雨箒》のように三次元に、しかしその動きは躍動するように鈴に迫る。しかし――――

「させませんわ！」

間一髪、セシリアが持つ《スターライトｍｋ？》を盾に使い、必殺の一撃を逸らす。同時に、ウェイト・アーマーに装着された弾道型ビットを至近距離でラウラに向けて発射させた。

ドガァァンッ！

半ば自殺行為の接近戦でのミサイル攻撃は、鈴とセシリアも巻き込

み、そのせいで二人は床に叩きつけられる。

「ふん……終わりか？ならば、次は私の番だ」

それでも無傷のラウラはそう言い放ち、同時に『瞬時加速』で地上へと移動、鈴を蹴り飛ばし、セシリアに近距離からの大型カノンによる砲撃を見舞う。さらに、ワイヤーブレードが吹き飛ばされた二人を捕まえ、ラウラの元にたぐり寄せる。そこからは、ただの暴虐だった。

そして、確かに見た。ラウラの無表情が、確かな愉悦に口元を歪ませたのを。

――その瞬間、俺の頭の中で、何かがトんだ。

◇

「はっはっは！それは傑作だ！ついにお前にも罰が下ったか！」

「笑い事じゃないですよ……。日本刀振り回すヤツに追いかけられるってめちゃくちゃ怖いんですよ？」

今は放課後。俺はカタログを取りに教員室に来ていた。それで昼に言っていた話を千冬さんにしている最中である。

「それに、罰ってなんですか、罰って。俺は女泣かしの誰かさんの弟をサポートしてるんですよ？」

「ほう？誰の弟だって？」

「あがぁっ！ちょっ、生徒にヘッドロックはいだだだっ！」もうなんなんだこの人！？ブラコンだろ！？もうブラコンだろ！？

「何か失礼なことを考えてないか？」

「このブラコ――――冗談だからマジで放せぇぇぇっ！」

「全く……少しは口の聞き方を勉強したらどうだ？それと、武器の注目は三日後までだ。この紙に書いて申請しろ」

「あつつ……わ、分かりましたよ。んじゃ、これで失礼します」

そう言って教員室を出ようとしたら、山田先生にぶつかった。

「は、はわわぁわぁ」

「……えーと、大丈夫か？」

「は、はいぃ、大丈夫で――――ってそれより大変なんですよ、織斑先生！」

「ん？どうかしましたか？」

「第三アリーナで、少し大変なことになってるんです！模擬戦にしては険悪な雰囲気ですし、ボーデヴィッヒさん達が――――」

「ちょっと待った、山田先生。誰が模擬戦してるんだ？」

「へ？え、えっと……凰さんとオルコットさんが――――って音無君？どうかしたんですか？」

「はぁぁ……やっちまったか……」

「全く仕方ない奴らだ。音無、先に行って場を鎮圧してこい。私もすぐに行く」

「了解でーす。面倒事はいつも俺か……」

◇

「おおおおっ！」

白式を展開、同時に《雪片弐型》を構築、全エネルギーを集約させ、『零落白夜』を発動。アリーナを取り囲むバリアへと叩きつける。そして、あらゆるエネルギーを消滅させる『零落白夜』によって切り裂かれたバリアの隙間を突破する。

そして射程内に入ると同時に瞬時加速。本来なら零落白夜の最大出力との同時発動はエネルギーを圧迫することになり、自殺行為なのだが、今の俺にはそれを考えている余裕はなかった。

「その手を放せぇぇぇっ！！」

「ふん……。感情的で直線的。絵に描いたような愚図だな」

「なっ……！？体がっ！」

ラウラがこちらに手を向けた途端に、目に見えない腕に掴まれているかのような感覚に陥る。腕も振り上げたまま下ろせず、零落白夜のエネルギー刃は次第に小さく消えていく。

「やはり敵ではないな。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では、貴様も有象無象の一つでしかない。――消えろ」

肩の大型カノンが接続部から回転し、ぐるんと俺へと砲撃の口を向ける。――くそっ！

『一夏！離れて！』

シャルルからの個人間秘匿通信（プライベート・チャネル）が聞こえて、同時にアサルトライフル二丁での弾雨が降り注ぐ。

「ちっ……。雑魚が……」

それまで俺を拘束していた目に見えない力が消え、体に自由が戻っ

てくる。俺はすぐに鈴とセシリアを抱き抱え、瞬時加速で一瞬のうちにラウラのそばから離脱した。

「おい、大丈夫か！？」

「う……。一夏……」

「無様な姿を……お見せしましたわね……」

『一夏っ！二人は！？』

「黙ってろ。……シャルル、大丈夫だ。なんとか意識はある」

『よかった』

個人間秘匿通信でわずかに安堵した声で答えるシャルルだが、その手は一切休まることがない。

「ふん……格好の的だな。失せろ」

「っ！？」

ラウラが、シャルルの弾丸を避けながら、防ぎながらこっちに砲口を向ける。マズい！無茶な最大出力同時発動のせいでエネルギーがほとんど残っていないのだ。瞬時加速も使えない。避けられない！

ドガァァァンッ！

「がっ……はぁっ……！」

鈴とセシリアを後ろに放り、庇うように立つ俺に大威力の砲弾が二発三発とぶち込まれる。や、ばい。シャルル一人じゃマズい……！

「次はお前だ。世代差というものを見せてやろう」

ラウラがもう俺に用はない、と言わんばかりに、今度はシャルルに攻撃体勢をとる。体を低く屈め、瞬時加速を使うつもりだろう。このままシャルル一人にラウラを任せるのは危険すぎる……！

「行くぞ……！」

「くっ！」

ラウラがまさに飛び出そうとしたその瞬間、俺達の間に影が割り込

んできた。

ガガガッ！

「ちっ！」

金属同士が激しくぶつかり合う音が響き、ラウラが加速を中断し、後ろに下がる。先端が槍のような両刃のナイフに、漆黒の鎖。あの武器は……！

「随分面白そうなことをやってんなぁ？」

「か、ずや……！」

「一夏。もう寝てろ。……俺も混ぜてくれよ。ちょうど暇ができちまったんでな」

一弥の純粋な黒の機体を視認した瞬間、力が抜けて意識が途切れた。

◇

「ふん、次から次へと……」

「悪いな。まあいいだろ？暴力を振ることでしか笑えないヤツなら、相手がいることは嬉しいことじゃねぇか」

「ほざけ。貴様もそこで転がっている雑魚と同じ運命を辿りたいらしいな」

「御託はこれくらいで十分だろ？シャルル。合わせろ」

「了解！」

俺はラウラに向かって突っ込み、雨簪を撃ち出す。しかし――――

「……なるほど。確かに厄介だな」

ラウラがこちらに手を向けた瞬間、動きが止まる。一筋縄じゃいかない、ってか。

「ラウラ。ここまでにしないか？この続きはトーナメントってことにして」

「ふん、命乞いか？見苦しいな。そもそも、貴様にそれを言われる筋合いはない。消えろ」

砲口がこちらを向く。やれやれ……血の気の多いヤツだな。

ガギンッ！

俺が肩を竦めると同時に、金属がぶつかり合う音がする。千冬さんだ。なんだ、以外と早かったな。

「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「教官……！？」

うわぁ……。ＩＳなんて装着してないのにＩＳ用の近接ブレード振り回してやがる……。こわ……。

「模擬戦をやるのは構わん。――が、アリーナのバリアを破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。音無の言った通り、

続きは学年別トーナメントでやってもらおうか」

「……教官がそう仰るなら」

ラウラは渋々ながらも頷き、ＩＳの装着を解除する。

「音無、デュノア、お前達もそれでいいな？」

「は、はい！」

「それより三人の介抱が先だ。シャルル、保健の先生を呼んできてくれ」

「わ、分かった！」

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

パンッ！と千冬さんが手を叩く音は、銃声のように鋭く響いた。

☆　★　☆

「「……」」

場所は保健室、時間は第三アリーナの一件から一時間が経過していた。ベッドの上では打撲の治療を受けて包帯の巻かれた鈴とドリルがむっすーとした顔であらぬ方向を向いている。一夏はまだ目を覚まさない。おそらくアイツはトーナメントは出れないだろう。

「別に助けなくてもよかったのに」
「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

「お前ら……。まあ大した怪我もなくてよかったな」

「こんなの怪我の内に入らな――いたあっ！」
「大体こんな横になっていること自体無意味――つううっ！」

「……バカ、という言葉で例文を作りなさい。『鈴とドリル』」

「あたし＝バカってこと！？あたしより一夏の方がバカよ！」
「そうですわ！あんな正直に砲弾をバカスカと食らって！」

「お前らを守るためだろ？俺はカッコイイと思うけどな」

ちらっ、と一夏が寝てる方に視線を移す。二人は、自分の弱さを悔いているのか、一夏に守られたことを恥じているのか、俯いてしまった。

「はい、烏龍茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね？」

「……ありがと」
「……いただきますわ」

「もぉー！無理しちゃだめなんですよぉ！一夏くんなんかまだ一ヶ月しか経ってないじゃないですかぁ！男の子ってそういうものなんですかぁ！？」

可愛い声を上げて抗議しているのは紫藤奈菜（しどうなな）。保健室の管理人……まあ保健の先生だな。
髪は明るい水色。なのだが……見た目がどこからどうみても小学生である。幼児体型、の一言で済ませられる人だ。ちなみに実年齢を聞いたら

『永遠の１７歳ですよっ☆』

というので

『永遠の7歳ですかっ！納得ですっ☆』

と言ったら涙目でポカポカと叩かれた。全く痛くなかったが、通りかかった人達の視線は死ぬほど痛かった。「とにかく！落ち着いたら帰っていいですから、今度から気をつけてくださいよぉ！？」

「了解でーす」

全く心配させるんですからぁ……と呟いて奈菜は（そう呼べって言われた。趣味ではない（否定）断じてない（さらに強調））保健室を出て行った。

「さてと。一夏が起きるまでここに居座ってやろうと思ったけど……どうする？シャルル」

「うーん……一夏が心配だし、もう少し待とうよ」

「ああ、了解。んじゃあ定番化したあの悪戯でもしますかね。額に肉って書いてやるか」

額に肉と書かれた一夏を想像すると……

『う……ん』

『一夏！よかった、無事だったみたいだな』

『ああ……心配かけたな……』（額に肉）

『気にすんな。それより、体は大丈夫なのか？』

『俺のことより鈴とセシリアはどうなって――――くっ！傷がっ！』
（額に肉）

『いいから寝てろ！あとのことは任せとけ！』

『ああ……悪いな……。なんだかすごく眠いんだ……』（額に肉）

「ぶはっ！」

ヤバい……！これはヤバい！ふ、腹筋崩壊する！ちら、とシャルルの方を見ると、シャルルも想像してしまったのか、顔を背けながらも肩を小刻みに揺らしていた。シャルル、お前もか！

「も、もうっ！そんなことしちゃだめだよ、一弥！」

「面白ければ大丈夫だ！問題な――――ん？何の音だ？」

ドドドドドドド……！

地鳴りに似たそれは廊下から聞こえてくる。だんだん近づいてきてるのは気のせいだと信じた――――いぃっ！？

ドカーン！と保健室のドアが吹き飛ぶ。いや、マジで。マジで吹き飛んだんだって。ビビったな。コント以外でもあるんだな、こういうの。

「音無君！」
「デュノア君！」
「織斑君！……は寝てるのね」

「な、なんだ！？」

「ど、どうしたのみんな……少し落ち着いて」

『これ！』

状況が飲み込めない俺達の前に、何枚もの紙が突き出される。その内の一枚を取って読んでみると……

「んーと……『来週開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、二人組での参加を必須とする。なお、ペアができなかった場合の者は抽選で選ばれた者同士で組むものと――』」

「そこまででいいから！とにかくっ！」

『私と組もう、音無君！』
『私と組もう、デュノア君！』

まあ大体予想していた通りだ。先月、あんなことがあったので何か手を打ってくるとは思っていたが……ややこしいことになったなー。それにシャルルは実は女子なのだ。……なんだ、選択肢なんて一つしかねぇじゃねぇか。選択肢はッ！いつも一つッ！

「悪いな、俺はシャルルと組むんだ。一夏は……まだ寝てるし、なるべく静かにしてやってくれ」

俺の言葉に静まり返る女子諸君。チッ、まだ足りないってのか？

「まあ、そういうことなら……」
「他の女子に組まれるよりいいし……」
「男同士って絵になるし……ゴホンゴホン」
「おい。最後のヤツなんつった？」

まあとにかく納得してくれたようだ。次々に保健室を去っていき、ペア探しが始まったのか、廊下から喧噪が聞こえてきた。

「あービビった……。なんか興が削がれちまったし、もう帰ろうぜ、シャルル」

「あ、うん、そうだね。それじゃ二人共、お大事に」

「じゃーなー」

そう言ってドアのない保健室を出ていく。ってかあれどうすんだろ……。

☆　★　☆

「ねぇ、一弥」

「んー……？」

風呂、夕食を済ませてベッドの上でダラダラしていたら、シャルルに話しかけられた。あー……きもちいいなーこれー……。

「遅くなっちゃったけど……助けてくれてありがとう」

「あー？……何かしたっけ？」

「ほら、保健室で庇ってくれたでしょ？それに、僕がピンチの時駆け付けてきてくれたじゃない」

「ああ……あれか。別に礼を言うことでもないだろ」

「そんなことないよ。一弥はやっぱり優しいからさ。僕はすごく嬉

しかったよ？」

何を言い出すかと思ったら……。

「あーもう。いちいち礼なんか言うなって」

「え？」

「お前は俺のダチだろ？それなら助けんのなんか当然だろ。言っとくが、俺は一夏相手にありがとうなんてこっ恥ずかしいこと言ったことねぇぞ？」

「……そっか。そっかぁ……えへへ」

「……気持ち悪いヤツだな、ったく……もう寝るぞ！あーつっかれたー。ってか足痛ぇんだよ」

「あ、うん。おやすみ、一弥」

「あいよ。おやすみ」

照明を消し、布団に潜り込む。疲れていたのか、睡魔はすぐにやってきた。薄れゆく意識の中、確かな声が聞こえた。

「……それでも、ありがとうね、一弥」

（ったく……）

恥ずかしいったらない。でも、正直悪い気分ではなかった。

☆　★　☆

あれから一週間。六月も最終週に入り、ＩＳ学園は今日から学年別トーナメント一色に変わる。それにしても……

「すげぇなこりゃ……」

更衣室のモニターから観客席の様子を見る。そこには各国政府関係者、研究員、企業エージェント、その他諸々が一堂に会していた。

「今のところは関係ないだろうけど、トーナメント上位入賞者にはさっそくチェックが入るだろうね」

「ふーん。ご苦労なこった」

「……よし！一弥、こっちも準備できたよ」

「おー。そろそろ対戦表が決まるぜ。にしてもAブロック一回戦一組目なんて運がいいな。やっぱ早く見たいってことか？」

「うん？なんで運がいいの？」

「待つのは嫌いなんだよ。デートで待つのはまだしも、興味ねぇ試合なんて見てもタルいしな。それに、こういうのは勢いが肝心だってどこかのバカが言ってたしな」

「ふふっ、どこかのバカって、一夏のこと？」

「他にいないだろ」

ペアでの特訓を重ねた、準備は万端。あとは全力投球ってとこか。

「あ、対戦相手が決まったみたい」

モニターがトーナメント表へと切り替わった。俺もそれまでの思考は一掃して、表示される文字を見る。

「「――――え？」」

出てきた文字を見て、思わず間の抜けた声を上げてしまった。

なぜなら……一回戦の対戦相手は、ラウラ・箒のペアだったのだ。

第十七話　立ち込める暗雲、鳴り響く警鐘（後書き）

そういえば、日別にアクセス数を割り出すことができるみたいなんですよ。俺のはどんなかなーってみてみると

『１０３２７』

ななななんですとぉーーー！？Σ（ ゜ロ ゜ノ）ノ

こんな駄文にお付き合い下さって……おいたわしや……おいたわしやぁーーー！（自分でも何言ってるか分かりません）

これからも頑張らせていただきます！でぁでぁ！

第十八話　Ｄａｒｋ　ＶＳ　Ｂｌａｃｋ

「まさか一回戦にあたるたぁな。千冬さんの陰謀か？ったく、出し惜しみも出来そうにねぇな」

「ふん、そういえばお前はあの訓練機には勝っていたな。なるほど、今のところ最強、というわけか」

「お褒めに預かり光栄ですっと。願わくば、その余裕が崩れないように、ってか？」

「ほざけ。どうも最近雑魚を相手にしていたせいか、お前の低いレベルにまで下がってしまったらしい。喜べ。瞬殺は免れるぞ」

試合開始まであと十秒。

『シャルル、予定通りに行くぞ』

『了解』

個人間秘匿通信でシャルルの様子を見る。問題なさそうだな。試合

開始まであと五秒、……三、二、一――――開始。

「叩きのめす」
「楽しむとするか」

相反する言葉を放ったが、きっと心の奥底では同じことを考えているだろう。一夏、鈴、セシリア。俺の友達があそこまでやられて、怒り心頭なのだ。手加減なんてできそうもねぇな。

だが、今は試合中。感情を爆発させれば相手の思うがままにされる。だから、静かに、穏やかに、怒る。青い、怒りの炎は燃え上がらせて。

試合開始と同時に俺は雨箒を全て抜き放った。自分も遅れながら、ラウラに突進する。

「バカの一つ覚えだな……」

ラウラが右手を突き出し、雨箒の動きが止まる。だが、遅れた俺はなんとか動けるようだ。俺はラウラと直接戦った鈴とセシリアの意見を思い出す。

☆　★　☆

「「ＡＩＣ？」」

「そ。シュヴァルツェア・レーゲンの第三世代型兵器よ。アクティブ・イナーシャル・キャンセラーの略。慣性停止能力」

「ふーん」

「ちなみに二人共、ＰＩＣはご存知ですわよね？」

「ああ、あれだろ？ポケモン・イスカリオテ・クリリン」

「お前バカだろ？パワーで・一夏を・くっつける、に決まってんだろ」

「両方違うわ！漫才やってる場合じゃないのよ！このダブルバカ！」

「パッシブ・イナーシャル・キャンセラーの略ですわ。それでＩＳは浮遊、加速、停止させてますの」

「なるほどな。……なら、エネルギーとかは防げないってことだよな？」

「そうなるわね。元々エネルギーは慣性なんかないし」

「っつっても今はエネルギー武器ねぇんだよなぁ。もらったカタログには銃器メインだし」

「あ、それならセシリアのライフルはどうだ？」

「無駄ですわね。わたくしのスターライトは銃身が実体してるので、銃身を止められらすわ」

「あー、なんで一夏の零落白夜が止められたのか、つまりそういうことか」

「え？なんで止められたんだ？俺なら切り裂けるのに」

「簡単よ。セシリアの言った通り、エネルギー弾がダメなら銃身を、アンタの場合、雪片がダメなら腕を止めればいいんだから」

「厄介だねぇ……。そういえば、効果範囲ってどれくらいなんだろうな。俺は突っ込んじまったから分からなかったが、雨簗がどのくらいまで止められるのかは知りたい」

「うーん……わかりませんわね。戦って試すしかなさそうですわ」

「なるほど」

☆　★　☆

シャルルの銃弾は平面的に止められた。一夏は腕だけ止めたと鈴は言っていたが、体が動かなかったと言っていた。そして今、雨簗は核になっている部分まで動きを止められている。つまり、ＡＩＣとは一つの動きを止めたら、連続している全てを止めるということか。俺の雨簗は俺の半径一メートルから離れられない。無理に離そうとしても制御はできず、重力に従って落ちてしまうだろう。つまり、絶体絶命――だが。

「頼んだ、シャルル」

「任せて！」

今はタッグ戦だ。シャルルを忘れてもらっては困る。俺の頭を飛び越えたシャルルは、同時に六二口径ショットガン《レイン・オブ・サタディ》による銃弾がラウラを襲う。

「ちっ……！」

なるほど、どうやらＡＩＣを展開している時は自分も大きな動きはできないらしい。俺の束縛を解いたラウラは急後退して間合いを取る。それをシャルルが追撃しようとするが――

「私を忘れてもらっては困る」

その前に箒が立ちはだかる。そのまま持っている近接ブレードを型に合わせた動きでシャルルを襲う。

『シャルル。あとは任せた』

『了解！』

シャルルと箒が移動をして、距離が開いたラウラと対峙する。予定通りに、なんて言ったが、要は１ｏｎ１で戦うだけだ。これは俺の我が儘だったが、シャルルは快く引き受けてくれた。条件付きで。

『うん、いいよ。そのかわり、絶対に勝ってね？』

「ったく……本当にいいパートナーに巡り会えたぜ。そっちはどうだ？」

「下らん。群れることしかできない弱者がほざくな。行くぞっ！」

聞く耳すら持たないってか。分かった分かりました分かりましたよ。

「……来い。潰してやる」

「っ！？なめるなぁっ！」

両手を広げ、空を仰ぐ。挑発されたことで、少しだけ剥き出しになった感情が見えた。

ラウラは体勢を低くし、瞬時加速を使って一気に距離を詰める。させるかよ。俺は全ての雨箪を撃ち出し、迎撃。瞬時加速は速いことには速いが、直線的にしか動けない。ラウラのミスか、と思った矢先、雨箪の動きを止められた。

「ＡＩＣ……なるほど、瞬時加速に見せかけてのフェイクか」

メインウェポンである雨簪の動きを止められてしまっては攻撃手段はかなり限られる。剥き出しの感情も利用するか。とんでもないヤツだな。

俺は最近注文した銃器を『コール』、ラウラに向けて放つ。七二口径アサルトカノン《胡蝶》。

「はっ！射撃の腕は落ちるみたいだな？もう貴様に用はない。消えろ！」

しかし、その銃弾もＡＩＣに阻まれる。そしてこちらに向けられる大型レール砲。ラウラの顔が笑みに歪み――――

ドォンッ！ドォンッ！

俺の撃った銃弾が爆発した。

「なっ……！？」

「特注品だ。流石、いい仕事をしてくれるな」

俺の撃った最初の二発の銃弾は特注の弾丸だ。爆発（バースト）、と呼ばれるそれが、爆発を引き起こしてくれたおかげでＡＩＣが解けた。俺は直

ぐさま雨簪を引き戻し、そして――

「なっ！？速い！」

俺は瞬時に後ろに回り込み、今度は距離を置いて三次元に雨簪を撃ち出す。つまりこういうことだ。ＡＩＣの効果が及ぶのは平面。ならば、上下左右に攻撃を展開すれば、一つでも動きを止められれば俺も動けないが全ての攻撃は防げない。

「貴様っ……『瞬時加速』を使っただと！？データにはなかったはずだ！」

「驚くようなことじゃねぇだろ？それに、ただの瞬時加速だと思うなよ」

「なにっ！？」

雨簪を防御、回避、停止させているラウラが叫ぶ。間髪を入れずにＡＩＣで雨簪を一つでも止めているので、俺はこの場は動けない。だが、本体は動ける。

俺は《胡蝶》に新たな弾を装填し、撃ち込んだ。――ラウラのすぐ近くの地面に。

「くっ……、小賢しい！」

今度は煙幕（スクリーン）。漂う煙がラウラを取り囲む。しかし、持っている大型レール砲を俺がいた場所へと撃ち、煙幕はすぐに霧散する。だが――

「……っ！？くっ、また！」

俺は瞬時に背後を取り、今度は六本の雨箒と《桜閣》を放つ。俺が今、背後を取れたのは黒奏の本来のスピードでもないし、瞬時加速を使ったワケでもない。いや、そういうと語弊があるか。確かに俺は瞬時加速を使った。――二回連続の瞬時加速、『跳弾加速』≪エル・ブースト≫。

つまり、瞬時加速だけでは直線的にしか進めないため、背後を取れない。だが、二回なら？『く』の字に加速すれば十分背後を取れる。だが、二回続けて瞬時加速をするのだ。エネルギーの消費もバカにならないが、元々黒奏は、一夏の白式とは対照的に、耐久性が高いのだ。つまり、短期決戦型と長期決戦型。燃費の良し悪し。このくらいの消費は痛手にもならない。

「はぁっ！」

「なっ！？」

そして、今度は瞬時加速。一気にラウラに肉薄し、残った二本の雨簪で穿つ。雨簪は相手に巻き付けて動きを封じることができるが、こんなこともできる。シールドエネルギーに穴を開け、雨簪を食い込ませる。つまり、雨簪を動かせばラウラも動く。それを利用して――

「おっらぁぁぁぁっ！」

二本の雨簪をブンブン振り回し、ラウラの大型レール砲の照準が定まらないようにする。

「こっのっ……、ふざけるなぁぁぁっ！」

二本の雨簪はＡＩＣで止められ、俺の動きも止まり、ラウラの動きも止まった。そのできた隙に残りの雨簪で手足を縛る。

「この……！無意味だということが分からないのかっ！？」

「無意味なことなんてないさ。忘れたのか？これはタッグマッチなんだぜ？」

『一弥っ！お待たせ！』

素晴らしいタイミングだ。やっぱ俺はパートナーに恵まれてるな。

「ああ、トドメは頼んだぜ？」

「無駄だ！第二世代型の攻撃力などで堕とされる機体ではないぞ！」

「それなら、単純な攻撃力ならどうかな？」

シャルルの言葉に、ラウラがハッとする。

単純な攻撃力。それなら、第二世代型最強と謳われた装備がある。

そして、それはシャルルがずっと装備していた。盾の中に隠して。

「回避不可。移動不可。反撃不可。流石一弥。最高のパートナーだよ」

「当然だ」

盾の装甲が弾け飛び、中からリボルバーと杭が融合した装備が露出

する。六九口径パイルバンカー《灰色の鱗殻》『グレー・スケイル』。通称――

「《盾殺し》『シールド・ピアース』……！」

雨簑を破壊しようと、六本のワイヤーブレードが雨簑に攻撃する。しかし、それがどうしたというのか。ワイヤー、つまり『糸』が雨簑の『鎖』を断ち切れるワケもない。

そして、シャルルが微笑む。それは、死の宣告。断罪の一撃の予兆。眩くように、輝くように。それでいて、罪深い、笑み。

ズガンッ！！

「ぐううっ……！」

ラウラの腹部に、最強最悪の一撃が叩き込まれる。ＩＳのシールドエネルギーが集中して絶対防御を発動して防ぐものの、エネルギー残量をごっそりと奪われる。これが俺達のコンビネーション。束縛し、最強の一撃を見舞う。シンプル、かつ最強のコンボ。

ズガンッ！ズガンッ！ズガンッ！

続けざまに三発の杭を撃ち込まれ、ラウラの身体が大きく傾く。そ

の機体にも紫電が走り、ＩＳ強制解除の兆候を見せ始める。

――――そして、最悪の異変が起きた。

◇

「ふわぁ……二人共すごいですねぇ……」

「俺の友達ですから」

保健室。まだ打撲の治っていない俺は紫藤先生とモニターで試合を見ていた。しかし、一弥も瞬時加速、しかも二回連続で使えるなんて……俺も頑張らなきゃな。

「あ！銀髪ちゃん捕まっちゃいました！もう決まっちゃいましたかな？」

モニターには一弥がラウラの動きを封じ、シャルルがトドメを刺している。決まったな。

「流石二人だなぁ。俺も負けてられないな」

「そうですねぇ……。……え？ど、どうしたんでしょうか？」

紫藤先生の言葉にモニターに注目する。そこにいたのは、黒……じゃない。あれは……悪。純粋な悪の色が、ラウラを取り込んでいた。

「なっ、なんだあれ！？」

叫んでも答えは返ってはこない。そして、その悪色のＩＳは――――

「あっ！一夏ちゃん、どこ行くんですかぁ！？」

その武器、そして動きを見て、俺は駆け出していた。

◇

（こんな……こんなところで負けるのか、私は……！）

確かに相手の力量を見誤った。しかし、それでも――

（私は負けられない！負けるわけにはいかない！）

『出来損ない』。その烙印の証である、左目の金眼。周りには闇しかなかった。ただただ深い闇へ、止まることなく落ちていった。

そんな私が、初めて目にした光。それが教官との、織斑千冬との出会いだった。

憧れた。強く、深く。その強さに、凛々しさに。振る舞いに。

――こうなりたい、この人のようになりたい。

その人を見るだけで力が湧く。それは、『勇気』。そんな力があったからだろうか。私はある日聞いてみた。

『どうしてそこまで強いのですか？どうすればそこまで強くなれますか？』

その時だ。鬼のような厳しさを持つ教官が、わずかに優しい笑みを浮かべたのは。

『私には弟がいてな、あいつを見ていると、解るときがある。強さとはどういうものなのか。その先に何があるのかをな』

『……よくわかりません』

『今はそれでいいさ。日本にくることがあれば一度会ってみるといい。……ああ、だが一つ忠告しておくぞ。あいつに――――』

優しい笑みだった。それが許せなかった。教官にそんな表情をさせる存在が。だから――

（あの男を完膚無きまでに叩き伏せるまで、私は負けられない！）

『汝、自らの変革を望むか……？』

（邪魔物を排除できる、力が欲しい！）

『より強い力を欲するか……？』

言うまでもない。力を、比類無き最強を、唯一無二の絶対を――――
私によこせ！

◇

「あああああっ！！！」

突然、ラウラが身を裂かんばかりの絶叫を上げる。そして――――

「変形だと……？『形態移行』《フォーム・シフト》か……？」

いや、違う。変形などという生やさしいものじゃない。ぐにゃりと溶け、どろどろのものが、ラウラの全身を包み込んでゆく。

『シャルル、聞こえるか？』

『一弥！あれは一体……！』

『落ち着け。試合は中止だ。とにかく、あいつを鎮圧するぞ』

『り、了解！』

ぐにゃぐにゃの粘土人形みたいなものは、全身を変化、成形、構築していく。

ボディラインはラウラのそれをそのまま表面化したような少女のそれだ。頭部にはフルフェイスのアーマーで覆われている。問題は、その手に持つ武器だった。

「雪片……？」

千冬さんの、かつて振るった刀。それをまるごとトレースしたような形だった。

「っ！」

刹那、黒のＩＳが懐に飛び込んでくる。居合に見立てた刀を中腰に引き、必殺の一閃が閃く。それは、紛れも無く千冬さんの太刀筋だった。

「くっ……」

即座に上方へ瞬時加速。そして距離を取り、桜閣を乱射する。だが、全く効いている様子がない。

「箒、シャルル！お前らは離脱しろ！こいつは俺の獲物だ！」

「なっ！？バカを言うな！そこまでしなくても収拾はつくだろう！」

『非常事態発令！トーナメントの全試合は中止！状況をレベルDと認定、鎮圧のため、教師部隊を送り込む！来賓、生徒はすぐに避難すること！繰り返す！』

「聞いたでしょ！？一弥がやらなくても大丈夫なんだよ！」

「……そうだな。これは俺の仕事じゃない」

「ほら、一弥。すぐに避難を――」

「確かに間違ってたよ。俺がやってもアイツは、ラウラは救われない」

「え？何を言って――――」

「じゃあ教師部隊か？違う。そんなんじゃ、ラウラは救われねぇだろ。だから、俺は教師陣を鎮圧する」

「なっ……！？バカなことを言うな！一体なんだというのだ！」

「アイツを、ラウラを救うのは。お前の仕事だろ？」

え？という顔をした二人が、後ろに振り返り、驚愕する。

――――そこにいたのは、白の機体を駆る一夏だった。

☆　★　☆

「お膳立ては整えてやる。お前はアイツを救ってこい」

「違うな。俺は腹を立ててるんだ。俺の好きなようにするだけさ」

「はっ……。素直じゃないねぇ」

軽口を叩きながら、一夏は悪色のＩＳと対峙する。さてと。俺もいきますか！

「一弥っ！」

「ん？どうしたシャルル？止めてくれるなよ？」

「分かってる。気をつけてね、一弥」

「……ああ、任せとけ！」

シャルルの言葉を胸に、雨箒を教師部隊に撃ち出す。数は……五体ってとこか。

「なっ！？何をする！」

「敵はあっちだぞ！」

「申し訳ありませんね。今は先生方の出る幕ではないんですよ。退

場していただきます」

左手に桜閣、右手に胡蝶。銃器の二丁流、ダブラの構えで教師部隊を迎え撃つ。

「貴様、正気か!?こんなことをしてただで済むと思うなよ!」

「二人と三人に別れましょう。私を含めた三人は暴走したラウラ・ボーデヴィッヒの鎮圧に向かいます」

その指示を受けてか、指示を発した人を含めた三人がラウラの元へ駆け寄る。

「させませんよ」

だが、俺は雨箒を三つの機体に穿たせ、空高くに放り投げる。同じくなかなかのコンビネーションで前後から射撃と斬撃をしてきた教師にも同じ方法で撃ち上げる。

「くっ!」

「お前らの相手は俺だ。お前らじゃ役不足だから俺が相手をしてやるっつってんだよ」

「こいつ……！全員かかりなさい！全力で鎮圧、すぐにラウラ・ボーデヴィッヒの鎮圧に向かうわよ！」

『了解！』

ざっと見て近接ブレード持ちが二人、射撃が三人ってとこか。……面白ぇ。

「かかってこいやぁ！」

近接ブレードを持った二人と、アサルトライフルを持った一人、計三人が間合いを詰めてくる。それに俺は四本の雨箭を撃ち出し、桜閣で応戦する。だが、当たらない。

「チッ……流石は教師ってか！？」

斬りかかってきた教師の大上段を避け、蹴り飛ばす。その隙を突いたもう一人の近接系がブレードを振るい、アサルトライフルを持った二人が射撃をする。俺は持っている胡蝶を近接系の教師に突き付ける。

「くっ！」

回避行動を起こす近接系に、銃身を逸らす射撃系。なるほど、太刀打ちできたもんじゃない。

だが、一瞬でも隙を突ければ。勝機は見えてくる。俺は弾かれた胡蝶をそのまま振り向かせ、背後に迫ったもう一人の近接系に銃弾をぶち込んだ。そして――

「煙幕か……！面倒な真似を！」

煙が広がり、視界が眩む。だが、近接系の二人は近くにいるので分かる。俺は離脱しようとした二人の近接系に二本ずつ雨篶を撃ち込み、急降下させた。

「きゃぁあっ！？」

床に叩き付けられる近接系。それだけではない。シールドエネルギーを貫いた雨篶はその金属質の床も穿ち、しっかりと食い込ませた。

「まずは二人！次だ！」

煙幕が晴れ、一夏の様子を見る。傷が痛むのか、若干押されている。あのバカが……！

「一夏ぁっ！テメェ根性見せろやぁっ！」

「……っ！おぉぉぁぁぁっ！」

「人の心配してる場合？」

声のした方を向いた瞬間、銃弾が雨のように降り注ぐ。

「だからなんだ？」

俺は撃ってきた相手に向かって残った全ての雨箪を放つ。しかし、相手はそれを旋回してかわし、また銃撃を続けてくる。それにならい、残り二人も銃撃を始める。残りシールドエネルギーは２００を切った。ボサッとしている場合じゃない。俺は一番近いヤツに瞬時加速で距離を詰める。しかし、予想されていたのか対応が速い。だが――

「なっ！？」

「えっ！？」

最初っからお前なんて狙っていない。瞬時加速に見せかけた跳弾加

速で、今度は一番遠いヤツに肉薄する。いきなりの行動に一瞬だけ止まった機体に、雨簗を穿つ。そして床に叩きつけ、近接系と同じく地面にはいつくばらせる。見ると、地面に縫い付けられた近接系は雨簗を壊そうとしていた。このままでもジリ貧なのに、近接系が加わったらすぐに終わる！

俺は残り三本になった雨簗の内、二本を近接系の二人の腕を貫かせ、床に縫い付ける。そして元々の二本ずつの雨簗を引き戻し、残り二人に攻撃しようとした瞬間――――教師が銃を下ろした。

「……？何のつもりだ？」

「もう私達のすることは終わったわ」

その言葉に視線を下に向けると、一夏がラウラを抱き留めていた。

◇

私は、羨ましかったのだ。教官にあんな顔をさせる、その男が。
そして、出会って分かった。はっきりしない意識で、私の前で戦うその男を見て、理解した。

強さとは――なんなのか。

『強さっつーのは心の在処じゃないのか？』

……そう、なのか？

『自分の歩き方も知らないやつが、強いとか弱いを知るはずがないだろ』

……歩き、方……。

『ああ、やりたいようにやらなきゃ、人生損だろ？』

――では、お前は……？なぜ、そんなにも強い？

『俺が強いっていうのなら、それは――』

――それは……？

『強くなりたいから、強いのさ』

――。

『一弥も、シャルルも。俺の友達はみんな強く、高くあろうとする』

――あいつらも……。

『ああ。そして、強くなって、誰かを守ってみたい。誰かのために

戦ってみたい』

――――それは、まるで……あの人のようだ……。

『そうだな。だから、お前も守るよ。ラウラ』

言われて、私の胸は初めての衝撃に揺さぶられる。

ああ、あの人の言う通りだ。

『あいつに会っても、油断するとすぐに惚れてしまうぞ？』

貴方達はずるいです……。だって、だって……

こんなにも、私の心を揺さぶるのだから――――。

第十八話　Ｄａｒｋ　ＶＳ　Ｂｌａｃｋ（後書き）

本当に勝手ながら、少しアンケートをとらせてください。

次の一弥の武器ですが、日本語が英語か迷ってます。日本語の場合の例・『胡蝶』

英語の場合の例・『ファイア』

日本語の場合は?を、

英語の場合は?をお願いします。

第十九話　心が結ぶ、心の絆（前書き）

お気に入り件数が１００件に！！ありがとうございます！もうドヒャーです！ドヒャー！

これからもゼヒゼヒ！よろしくお願いします！

ヾ（〇。°▽°。〇）シ

第十九話　心が結ぶ、心の絆

『トーナメントは事故により中止となりました。ただし、今後の個人データ指標と関係するため、全ての一回戦は行います場所と日時の――――』

ピ、と誰かが学食のテレビを消す。俺、一夏、シャルルは今、学食でメシを食っている。

「にしても厳重注意だけで済むなんてな」

「お疲れ様、一弥」

「ああ。多分、千冬さんが手を回してくれたんだろ。ああ見えて案外融通の利く人だしな」

あの後すぐ。俺は教員室に連行されたのだが、教師にケンカ吹っかけたというのに停学もくらわなかった。全く、千冬さん様々だ。

「だろうなー。あ、シャルル醤油取って」

「はい、一夏」

「サンキュー」

「……お前らもっと緊張感持てねぇのか？てか一夏、お前怪我どうしたんだよ」

「もう治ってるさ。なのに、紫藤先生が離してくれなくてさ……」

「よく言うぜ。人型メタルスライムに手こずってたくせによ」

「ぐ……、悪かったよ」

「へいへいっと。……ふー。ご馳走さん。やっぱ旨いな、ここの料理は」

「僕もそう思うよ。色んな国の料理が食べられるしね」

俺達はあの後、俺の説教が済むと事情聴取をされた。それがやっと終わった頃には食堂終了ギリギリだわ、食堂に行くと女子の軍勢に囲まれるわ……ここまで疲れたのも久しぶりだ。

「中止……約束……無効……」

あ……そういえば箒のヤツ、優勝したら付き合ってもらうとか言ってたっけ……。仕方ないな。

「一夏、箒との約束はどうするんだ？」

「ああ、箒。先月の約束だけど」

「う……」

「付き合ってもいいぞ」

買い物にだろ。

「ほ、本当かっ！？う、嘘だったら承知しないぞっ！」

「ああ、買い物くらい付き合うさ」

あ、箒が固まっ――――たのは一瞬で、大きく引き付けて――――

「そんなことだろうと思ったわ！！」

右ストレート！じゃない！今ゴキッていったぞ！？

「ふんっ！！」

「ごふぁっ！」

おお、倒れたところに膝蹴り。まあ原因は全部一夏だし、同情の余地はないだろう。

「……一夏って、わざとやってるのかなぁ？」

「わざとだったら相当のドMだな……」

ちなみに当の本人は全く動かない。あそこに放置されても邪魔なだけなんだが……。

結局一夏はその十分後に回復した。凄まじい回復力である。

「あ、音無君に……織斑君とデュノア君もいますね。ちょうどよかったです」

「ん？もう説教なら聞いたぞ？」

「いえ、そのことではなく……というか、本当に反省してるんですか？全くもう、教師に手を出す生徒なんて音無君が初めてですよ。それも五人まとめて！」

「反省は十分すぎるくらいにしてるさ。後悔はしてねぇけどな」

「全くもう……と、それよりも、なんとですね！事情があって、今日だけ男子が大浴場を使えるんです！」

「な、なんですとー！」

一夏……お約束だな……。にしても大浴場か。俺も風呂は好きなんだが……。

「えっと……」

シャルルは女だしな……。はあ、最後に一仕事と行くか。

「悪い、シャルルが疲れてるみたいでな。一旦部屋まで送るから、一夏は先に風呂に行っててくれ」

「え？」

「そうなのか？まあ、そういうことなら、分かった。シャルル、無理は禁物だぞ？」

「あ、う、うん」

「よし、んじゃ行くか。俺も少ししたら行くから」

「分かった。さて……待ってろよ大浴場ー！」

単純バカでなによりだな。さて、俺も部屋に戻るとしよう。

「シャルル、行くぞ」

「うん、ありがとう、一弥」

「だーかーらー」

「ふふっ……一々謝るな、でしょ？」

「ったく……」

そんな感じで部屋にたどり着く。正直、もう寝ちまいたい。シャワーにすっかなぁ……。

「あれ？一弥、大浴場行かないの？」

「んー……面倒くせぇ」

「せっかくの機会なんだし、楽しんできなよ。僕も一夏が上がったら入るつもりだし」

「それもそうだな……んじゃ、せっかくだし入ってくる。俺達が上がったら個人間秘匿通信で教えてやるから」

「うん、分かった。いってらっしゃい」

「ああ」

バシュッ、という音を背に、着替えなどを持って大浴場に向かう。
その間、少し迷ってしまったが、なんとか目的地に辿り着いた。着ている制服を脱ぎ捨て、タオルを巻いて……

『わはははは！』

……なんか幻聴が聴こえたが……。うん、気のせいだろう。

『ひざまづけ！命乞いをしろ！』

「……」

と、そこで大浴場に入った俺と一夏の目が合う。

「「……」」

「……いや、一弥、これは……」

「……これはこれはムスカ大佐。入浴中でしたか」

「ちょっ、待ってくれ！これは違うんだぁー！」

「黙れ！俺の知り合いに精神病を抱えてるヤツは一夏しか――――っ！？一夏じゃないか！？」

「待て！それって前から俺の頭の心配してたってことか！？」

当たり前だろ。あそこまで鈍いなんて、最早精神病の類だ。

「んで、ムスカ大佐？もう上がるのか？」

「その呼び方はやめてくれ……。もう少し浸かってから上がるよ」

「ん、そうか。んじゃ、シャワーだけ浴びて俺も入るかな」

さっと体を流して大浴場へ。それにしてもすごいな。ジェットやバブル、打たせ滝までありやがる。確かにこれはテンションが上がる。

「なあ、ムスカ大佐。次は何を見せてくれるんだ？」

「うぐぅ……」

一夏を弄っている内に、のぼせたらしい一夏が風呂を出る。その後に――――

『一弥。湯加減の方はどう？』

『ああ。すげぇ気持ちいい。体洗ってから出るから、あと十分くらい待ってくれ』

シャルルから個人間秘匿通信が入る。こういう時ＩＳって便利だな。

俺はゆっくりと肩まで浸かって今日のことを振り返る。ラウラは救われただろうか。それだけが気掛かりだ。

副クラス長。自分からなったワケではないが、なってしまった以上、なんとか仲良くやっていきたいのだが……。

目を瞑り、思考の渦に身を投げる。しかし、ネガティブな考えは大浴場の気持ち良さに霧散していった。あー……ヤバい。寝ちまいそうだ……。そんな時、カラカラカラ……、という音がした。また一夏が入りに来たんだろうか。全く、アイツの風呂好きにも困ったもんだ――――

「お邪魔します……」

「だあぁぁぁっ!?」

なんだ?疲れてるのか?さっきから幻聴が聴こえっ放しなんだが、耳鼻科でも行った方がいいだろうか。

幻聴の聴こえた方向を恐る恐る向くと……シャルルが全身にバスタオルを巻いて立っていた。じゃない!何やってんの?何やってくれちゃってんの!?

「う……あんまり見ないで……一弥のえっち……」

「っ!?す、すまん!」

えー?なにこのじょうきょう。ぼくさっぱりわかんなくてしこうがようちえんじみたいになっちゃうよー。はっ!?お、落ち着け!そうだ!円周率だ!円周率を数えろ!円周率はπでも表せる!π?パイ?おっ……

「うおぉぉぉーーーっちつけ俺ぇぇぇーーーっ!!!」

「きゃっ！？ど、どうしたの、一弥？」

「な、なんでもないです！はい！問題点しか見当たりません！」

ああもう！自分で何言ってるのか分かんねぇ！なんだこれ。今の俺の状況――――

「そ……そんなに見たいの？」

なんだこれぇぇぇーーーっ！え？マジ？うん、って言ったら見せてくれるの？ま、待て！そうか！ドッキリか！一夏のヤツが仕返しにやってきやがったんだな！？ちくしょう！やられた！

「もう、しょうがないなあ。少しだけだよ……？」

「うぉぉっ！？」

バスタオルが重力に従って落ちて――――って危ねぇ！危うく大人の階段を二段飛ばしで上がるとこだったぁ！

「……なんちゃって♪」

「え……？」

恐る恐るシャルルの方を向くと――――

「……スク水？」

学園指定の水着である旧型の紺色スク水を着ていた。な、なんだ…
…安心したようなガッカリしたような……。

「まだ体は洗ってないんだよね？背中流すよ」

「はぁ……ビビった」

「ふふっ、あそこまで取り乱した一弥を見たのは初めてだよ」

「うるせっ」

イスに座ると、シャルルが背中を洗ってくれる。おー、こういうの
も結構気持ちいいモンだな。

他愛のない話をして湯舟に浸かる。大浴場、入ってよかったな。

「……あのね、一弥」

「……ん？」

「僕、この学園に残るよ。すごく気に入っちゃったから……」

「……そうだな。ここはなにより楽しいしな。落ち着きがないって言ったらそれまでだが」

「うん。それに……一弥が、友達って言ってくれたから。僕はここに残りたい」

背中越しに伝わる声。心。それは、聞いていてものすごく心が安らぐものだった。

「ああ……歓迎するぜ」

「うん。それでね……一弥に頼みがあるんだ」

「……なんだ？今なら気分がいいから大抵のことは頼まれてやるぞ」

「うん。僕の名前ね、本当はシャルロットって言うんだけど、二人の時にはそう呼んでほしいな」

「……ヤダ。長い。シャルで十分だ」

「うん？そっちの方が嬉しいかも」

「そっかよ……シャル」

その後、俺は風呂から上がり、設備の一つであるマッサージ機に座って片手にコーヒー牛乳を持ってシャルを待っていた。ヤベェ……すげぇ幸せだ、俺……。

それから部屋に戻ってしばらく他愛のない話をして眠りについた。

☆　★　☆

翌日、朝のホームルームにはシャルの姿はなかった。

『先に行ってて』と言うので食堂で別れたんだが、何かあったのだろうか。

「なあ一弥。シャルル、どうしたんだ？」

「さあ？俺も詳しいことは知らん」

見ると、ラウラもいなかったが、まあそれは予想通りだ。事情聴取もあって大変だろうしな。

「お、おはようございます～……」

なんか山田先生がふらふらしている。昨日の始末で睡眠時間が取れなかったのだろうか。

「今日は、ですね……何と言いますか、転校生？を紹介します……じゃあ入ってください」

「失礼します」

ん？激しく嫌な予感が。まさか――

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願いします」

ぺこり、とスカート姿のシャルが礼をする。一夏を含めたクラス全員がぽかんとしたまま、凍りついている。

「デュノア君はデュノアさんでした。ということです。はぁぁ……また寮の部屋割りの入れ替え……もうＨＰは０ですよぅ……」

なるほど、山田先生の憂いはそこだったのか。――って、ヤバいかも……。

「デュノア君が……女子！？」
「やっぱり！おかしいと思ったのよね」
「あれ？じゃあ音無君と織斑君は知ってたってこと？」
「ちょっと待って！そういえば昨日男子が大浴場使ったわよね！？」

あぁ……もう勘弁してくれ……。朝一で鬼ごっこは避けたいんだが……。

ドガァンッ！

そんなことを思っていたらなんかドアが吹っ飛んだ。またかよ……。

吹き飛ばしたのは鈴だった。ってうぉっ!?めっちゃキレてるじゃねぇか!?

「一夏ぁ!!死ねぇぇぇ!!」

その怒涛の勢いで衝撃砲を展開。最大出力で――って俺も当たるんですけど鈴さぁん!?

「あ。無理。これ絶対死んだわ」

一夏、何気に大物だよなお前……。

そして、発射される衝撃。とっさに黒奏を展開しようとするが……その前に、影が俺達の前に踊り出た。そのおかげで衝撃は飛んでこない。あのＩＳは――

「ラウラ……助かったぜ。もうＩＳは大丈夫みたいだな?」

「コアはかろうじて無事だったからな。予備パーツで組み直した」

「へぇ。事情聴取は?」

「質問を続けるな。次は私の番だ」

「なんなりと」

「一弥。貴様は私の友にする。異論はないだろうな？」

「へぇ。変われば変わるモンだな」

「どうなんだ？」

「問題ない。むしろ歓迎するさ」

こいつとは話が合いそうだしな。あれだ。酒を飲み合える間柄？そんな感じ。

「へー。じゃあ俺とも友達に――――むぐっ！」

ちゅー。キス。接吻。それが、今まさに俺の前で展開されている。ラウラが一夏の方に振り向き、胸倉を掴み、引き寄せ、唇を奪っている。

「……ひゅー♪大胆なこって」

「お、お前は私の嫁にする！異論は認めん！」

一夏に選択肢がないぞー。教室の生徒はみんな呆然としている。鈴も箒もセシリアも。シャルはなんか目をキラキラさせてる。なぜに！？

そんな一夏の返事やいかに！？

「……嫁？婿じゃなくて？」

「お前どこまで大物なんだよ！？」

俺のツッコミに教室に喧騒が戻ってくる。これ一夏死亡フラグだろ？合掌。

ジャキンッ！ビシュンッ！ダンッ！

あ、ちなみに今の擬音の羅列は鈴が再び衝撃砲を開いた音、セシリアがレーザーを放った音、箒が日本刀を突き立てた音だ。すげー。本格戦闘学園って感じだ。ちなみに俺は第六感が危険察知をしたのでシャルの横で事の一部始終を傍観している。

「た、助けなくていいのかな？」

「それよりも、なんで女子の格好してるんだ？一言くらい言ってくれりゃあいいものを……」

「あはは。言わなかったのは驚かせたかったからだよ。この格好は――――」

「……？」

「――――僕の友達に、ありのままの姿を見てほしかったから、かなっ」

そう、屈託なく笑いかけるシャルに、不覚にも顔を赤くしてしまった。

第十九話　心が結ぶ、心の絆（後書き）

二巻終わりっ！なんかあっという間でした……。

個人的にはバカテスも書きたいなぁーなんて思ってますが、まだまだ先の話になりそうです。文脈なくてすんません……。

では。またの機会にお会い出来ることを願って、最後に一言。

シャルのスク水はやはり最強かつ最愛であって注目すべきはあのアニメでもあった美脚！そう！スク水、それはシャルのためにあるような――（以下略）

第二十話　忍び寄る影（前書き）

今回は少し短めです

第二十話　忍び寄る影

丑三つ時。学園の生徒、教師達は寝静まり、月光が輝く頃。結局一夏の部屋で寝ることになった俺は、部屋で無音の徒手格闘を謎の襲来者と繰り広げていた。

（なんだこいつ……。動きに隙がない。しかも……タイツでも着ているのか？服すら掴めねぇ。確信犯かよ。面倒だな）

「はっ……！」

「ふっ……！」

腕を取り、一本背負いをかます。しかし、相手は身軽に転がり、距離を取った。身長はかなり低い。おそらく……ラウラほどだろう。

「面白い……」

なかなか低い声だ。これは例えるなら……ラウラ辺りだろう。そして、その影が動く。その眼に宿る赤い光が残光を残す。これもラウラに似ている。

「――待てい。何が『面白い……』だ。お前ラウラだろ」

「む……？友とは拳で語り合うというものだと聞いたぞ？」

「間違ってるとは言わないが、それならなぜ首を絞めてくるんだ。顔を狙えよ」

「むぅ……これも違うか……」

最近友達になって分かったんだが、こいつはありえない程常識がない。曰く、『友達はボール』と言って蹴ってきたり『殺し合って生まれる友情』と言ってガチで模擬戦で殺しにきたり……お前に常識を教えているヤツを串刺しにしてやりたい。しかも今度は――

「なぜに全裸……頭痛ぇ」

「む？殴ってやろうか？」

「なぜその結論に至る！？」

「日本では壊れたテレビなどは叩くと直ると聞いたぞ」

「ツッコミどころの宝石箱かお前は……」

「？？？」

「まあ、いい。全然よくないけど。疲れるからスルーさせてもらう」

「スルーする。なんつって」

「……一夏の受け売りか？」

「よく分かったな」

「そんな気が触れた発言する知り合いは一夏しかいねぇよ……」

「気が合うな。私も聞いていて少し鳥肌が立った」

「ならすんな。……で、何しに来たんだ。夜ばいか？」

「そうだ」

「ここまで清々しい顔で言い切るとは……ラウラ、あらゆる意味で恐ろしい子……」

「夫婦は包み隠さないものと聞いたぞ？」

「なら新婚の方々は家で全裸なのか……シュールすぎる」

「ところで一弥」

「なんだ」

「私には色気がないのか？全く慌てる様子がないんだが……」

「いや、あの……さっきまで首絞められた相手に欲情するのも大物すぎるかと……」

「そんなものか？」

「そんなものだ……ふあぁ……。それに眠い。寝起きに欲情する程の元気は持ち合わせてねぇ」

「お前もなかなかにツッコミどころが多いぞ」

「ほぅ？言ってみろ」

「寝起きに徒手格闘をしていたのはどこの誰だ」

「バカな……ラウラにツッコまれただと……？死にてぇ……」

プライドずたずただ。

「さて、私は一夏と寝る。お前ももう休め」

「なぜ侵入者のお前が仕切る……。まあいいか……よくないけど」

「気にしたら負けだ」

「頭痛ぇ……」

そんなこんなでベッドに潜る。こういう時はさっさと寝てしまおう。

『む……？包み隠さないということは、私の嫁も裸にする必要があるな。よし、脱がすか』

幻聴、幻聴……。何も聴こえない。何一つ聴こえない。

そんな中で、俺の意識は途切れていった。

☆　★　☆

「……で……だ……い……ろ」

「おかしな……夫婦……隠さない……」

「違う……半裸……何しや……」

うるせぇな……。なんだってんだ？

「……まだ六時じゃねぇか。うるせぇぞ」

「か、一弥！まだ寝てろって！な！？」

「そう思うなら静かにしろ……ラウラ、一夏は大胆な女が好きだ。んじゃおやすみ」

「一弥ぁーっ！お前の差し金かぁーっ！」

「なるほど。で、では失礼して……」

そこでまたしても俺の思考は途切れた。

◇

「む……。時間か……あふ……」

六時。いつものように朝練を始めるため、胴着に着替える箒。箒は

剣道部に所属しているのだが、なんだかんだでほとんど顔を出していない。だが、それでもこうして剣の腕が鈍らないように鍛練は欠かしてはいなかった。

（う……っ、そうか、もう七月なのだな……）

最近は朝の日差しが強くなるのが早い。加えて、じわりとした熱気が大気に満ちている感覚がする。

（七月――七月だぞ。一夏め、よもや忘れてはいないだろうな……）

「……よし、今週末には買い物に付き合っ……つ、付き合ってもらうことにしよう！」

そんな気合いを入れ、朝練に一夏を誘いに部屋まで行く。

コンコン。

「一夏。朝練をするぞ」

しーん……というワケではないが、中から話し声が聞こえる。叫び声に聞こえるのは気のせいだろうか。

「一夏？入るぞ？」

バシュッ、という音で開く自動ドア。ん？そういえば鍵もかかっていなかったが――

「一夏、早く起きて支度を――」

「げ」
「む？」
「くー……」

びしり。箒の表情が、動きが、全身が固まる。確かに一夏はいた。全裸のラウラに覆い被されて。しかし、それもすぐに解け――

「ふふふ……なぁるほぉどなぁ……楽しそうじゃぁないかぁ……一夏ぁ……」

すらっ……と真剣を抜刀。矛先？一夏以外に何があるというのか。

「あ、あのー、箒さん？なんで俺の部屋に来るだけなのに真剣を持ってくるんでしょうか……？」

「聞きたいか……？」

「ひぃっ！え、遠慮します！」

「お前のような軟弱者をっ、叩っ斬るためだぁーーーっ！！」

ずどん！と音がして布団がベッドごと真っ二つになる。一夏の方はすんでのところで避け、ラウラはしっかり安全圏をキープ。一弥に至っては……起きているだろうが、まだ目は覚ましたくはないらしい。

「一夏！大人しく死ね！」

「何言ってるのか分かってるのかお前！？」

「人の嫁に手を出すとは不躾な」

「あーもーうるせぇな……ってベッドぉぉぉっ！？真っ二つじゃん！真っ二つじゃん！！落ち着け箒ぃーっ！」

こうして、早朝のドタバタ騒ぎは山田先生が大慌てで駆け込むまで続いた。

第二十一話　臨海学校前日（前書き）

遅れてしまって申し訳ありません！

同時進行の『バカとテストと神転者』もよろしくお願いします！

第二十一話　臨海学校前日

七月の休日。俺はシャルと臨海学校のための水着を買いに来たんだが……

『いっ、一夏。人が多くなってきたな。はぐれると面倒だし、そ、その……』

『ああ、そうだな。手でも繋ぐか？』

『そっ、そうだな！うん！』

……何故かデート？中の一夏と箒を見つけてしまい――

「一弥っ！アンタも協力しなさい！」

「そうですわ！他でもない幼なじみでしょう！？」

……尾行の共犯者になってしまった。あーづーいー。

「あっづぁ～……」

「一弥、夏が苦手なの？」

「大ッ嫌いだ。臨海学校なんて死にに行くようなものと言っても過言じゃない」

「あはは……。流石に過言だと思うよ？」

「ねぇ、セシリア？」

「なんですのー？鈴さん」

「あれー。手ぇ繋いでないー？」

「繋いでますわねー」

「そっかぁ。幻覚かなって思ったんだけど、やっぱりそうなんだぁー。――――よし殺そう！」

「このダブルヤンデレめ……」

「ほう。面白そうなことをやっているな。私も混ぜるがいい」

「「！？」」

「「あ」」

声のした方へ振り返ると、ラウラが立っていた。

「なっ!?アンタいつの間に!」

「そう警戒するな。今のところ、お前達に危害を加えるつもりはないぞ」

「し、信じられるものですか!再戦というのなら受けて立ちますわよ!?」

なんか盛り上がってんなー。ってかお前ら、一夏達どっか行ったけどもういいのか?

「シャル。なんか俺達はどうでもいいっぽいし、さっさと買うモン買っちまおーぜ」

「あはは……それじゃあ行こっか」

「俺達も手でも繋ぐか?」

「え、えぇっ！？」

「……冗談だ。でもそれなりに傷ついたな」

そこまで嫌か……。

「あ、いや、嫌ってわけじゃないけど……」

「分かった分かった。この優等生め。んじゃ、俺はこっちで適当に見繕ってくる」

案外水着売り場の近くだったらしい。歩いてすぐの場所に目的地は佇んでいた。

「あ、うん。分かった。待ち合わせもここでいいよね？」

「そうだなー。三十分後くらいでいいな」

言ってシャルと別れる。にしても水着なんて別にいらないんだが…

…別の機会に使うことを考えて買っておこう。

結局ドクロの柄が入った黒の水着と、オレンジのレンズのサングラ

スを買ってさっさと店に出る。

早過ぎたかな、と思い、待ち合わせの場所に行ったら、案の定シャルはまだのようだった。

「……5分で水着決めた自分の即決力に思わず身震いだな」

暇つぶしに持っていたウォークマンに繋がったイヤホンを耳にさし、一昨日入れた新譜を聴く。

ガヤガヤといった喧噪は次第に遠ざかっていく。壁に寄り掛かり、スッと目を閉じると、夏の暑さを払うようなバラードが流れる。

季節感を盛大に無視した曲だが、こうしていると暑さが多少紛れるのだ。暇つぶしにもなるし、多少の時間は稼げるだろう。

三曲目に入った時、クイクイ、と袖を引かれて目を開ける。シャルだ。

「ん……終わったか？」

「あ、え、えっと……」

「……？どれにするか迷ってるとかか？」

「あ、うん。それで、一弥に決めてもらいたいなぁ……って思うんだけど……どうかな？」

「聞くまでもないだろ。早く行くぞ」

「うん……」

それにしてもシャルの様子がおかしいな。よそよそしいというか。

「ちょっと、そこの男」

今はシャルが水着を取って来るのを待っているところだ。にしても、俺の意見を聞いても仕方ないと思うが……

「そこの貴方。貴方に言ってるのよ」

そういえばさっきの曲はよかったな。何と言うか、涙を誘う、って感じだったし、スッキリと聴けた。

「ちょっと！聞いてるの！？」

しかし、シャルの水着姿か……。ごめん。イメージしてみたが、何着ても「似合う」としか言えない気がする……。

「いい加減にしなさいよ！あんたに言ってるのよ！」

「ん……？」

声のした方を向くと、恰幅のいい（笑）女性が仁王立ちしていた。

「無視するなんていい度胸じゃないの。男のクセに」

「そうですか。んじゃ連れを待ってますんで」

「待ちなさい！あんた、人を無視しといて言うことはないのかしらぁ？」

やめろ……！関わるな……！

「えっと……今日も厚いですね？」

「そんなこと言ってるんじゃないわよぉ！謝れって言ってるのよぉ！しかも今漢字違ってたでしょぉ！？」

俺に近づくな……！

「気のせいだろ。それで何の用だ」

「ふん！口の聞き方もまともにできないなんて親の顔が見たいわねぇ？」

「ん？用ってのは説教か？随分愉快な見た目……失礼、性格ですね。万死……悪い、尊敬に値するよ」

「なんですってぇ！」

これ以上は……！

「あの！これくらいでいいでしょう？彼は僕……私の連れですから」

と、いいタイミングでシャルが現れる。

危なかった……もう少しで爆発するところだった。

「ふん！あんたの男なの？躾くらいしっかりしなさいよね！」

そう言い残して、恰幅婦人はドスドスと歩いていく。……もういいか。

「あの、ごめんね……。嫌な思いさせちゃって」

「……」

「え、えっと……今日はもう帰らない？気分が悪いなら……」

「……くっ」

「……え？」

「だははは！腹痛ぇ！さっきのヤツ傑作だったな！」

「え？え？」

「ブタが躾ときたか！は、はははっ！や、ヤバい！腹筋が！あははははっ！」

「……はぁ。心配して損したよ……」

「ははっ、何の心配だよ？」

「その、怒っちゃったかなって……」

「ふふん。いいこと教えてやる。俺が我を忘れて怒ることは“ありえない”。これは絶対だ。怒った時はあるが、それでも頭は冷えてんだよ」

「もう……それじゃあ、水着見てくれる？」

「おう。その二つか？」

「うん。ちょっと待っててね」

そう言って試着室に入るシャル。なんか待たされてばっかだな。今日は。

『我を忘れて怒ることはありえない』。か。確かにそうだ。あの首なしＩＳが襲来した時。ラウラが一夏、鈴、セシリアをいたぶった時。ラウラと対峙した時。怒ってはいたが、頭ではどう鎮圧するか。相手の弱点は何か。そういったことを考えていた。

こうなったのは両親が死んだからだろう。交通事故の報せを聞いた時。俺の中で何かが壊れる音を、確かに聞いた。

そして次の瞬間に考えたことが、藍を守ること。

おそらく、あの時の壊れる音の正体は、俺の感情の一部みたいなものだろう。それ以来だ。『怒る』ということを忘れてしまったのは。『理不尽』に、『偶然』に怒りを示しても何も生まれない。そのことを知った瞬間。『怒り』を下らないものと思うようになったきっかけ。

挑発された時。大切な人が傷つけられた時。そんな時、俺の頭は氷点下まで下がり、怒りの炎を燃やす。挑発された時なんかはその炎すら現れない。

「問題と見られない異常、か。傑作だな」

『え？一弥、何か言ったかな？』

「ん、なんでもないさ。少し黄昏れてただけだ」

『……？よしっ、と。うん。一弥、もういいよ』

シャッ、とカーテンが開く音がする。現れたのは夏によく似合うだろう黄色のセパレートを着たシャル。もう何着ても似合いますよ。

「ど、どうかな……？」

「ああ、すげぇ似合ってる。髪にもいい感じに合ってるしな」

「ほんと？うん、じゃあこれにするよ！」

「おう。早く着替えちまえ。んで、何か腹ごしらえにどこか入るぞ」

「うんっ！」

そしてまた閉められるカーテン。さて、俺は何してるかな。

「き、緊急事態だ……！」

「ん？」

何か聞き覚えのある声がしたような。

「……ラウラ？何してんだアイツ」

トランシーバーのようなものでどこかと連絡を取っているようだが……ここで使うなよ。

それにしても、ラウラなら俺の気配だかなんだかゴルゴ１３みたいなことを言ってすぐに見つけるんだろうが……相当テンパっているらしい。

「お待たせ、かず――――むぐ」

（ちょっと面白い場面に出くわした。静かにな）

（ぷはっ。面白い場面？）

（見れば分かるさ）

そう言い、ラウラの方を指す。その当の本人はというと、喜んだり驚いたり、正直挙動不審である。

（……ほんとだ。珍しいね、ラウラがあそこまで慌ててるなんて……ふあっ！？）

（こっちにも気づいてないしな……ん？ああ、少し近かったか）

今俺達は水着の陰に隠れて様子を見てるのだが……少し近づきすぎたか。

（うっ、ううん！少し驚いただけだから……！）

（そ、そうか。とりあえず落ち着こうな）

そんなやり取りの後、ラウラの方を見ると、連絡が終わったらしいラウラがふらふらと水着を持っていた。

アイツのことだからスク水にするかと思ったんだが……そろそろ悪趣味なことはやめとくか。

「ラウラ、何して――――るか聞いただけだからナイフを下ろせ。銃刀法って知ってるか？」

今お前が盛大に違反しているものなんだが。

「かかか一弥かっ。は、背後に立つんじゃない。危うく切り掛かるところだっただろう」

「それ以前に、刃物を常備する習慣を治すことから始めようか。相変わらずツッコミどころの多いヤツだな」

「ラウラ、どうしたの？様子がおかしいみたいだけど……」

「し、シャルロットもいたのか。ちょうどいい。私の水着を見てくれないか」

言われて、俺とシャルは顔を見合わせる。それもすぐのことで、シャルは目をキラキラさせてラウラの方に向き直った。

「うんうん！やっぱり学校の水着じゃなくて可愛い水着がいいよね！一弥は審査員になってくれないかな？」

「イキイキしてんなお前……了解だ」

その後、ラウラの水着に驚き、購入。ラウラは一夏のところへ飛んで行ってしまった。

「んじゃ、メシ食って帰るか？」

「うん、それで、ご飯の後はちょっとお店を見て回ってもいいかな？」

「ん。了解だ」

そう言って昼食、ウインドウショッピングを楽しんだ。

それにしてもこの暑さはどうにかならないものか……。

☆　★　☆

そして、気がつけば日が沈み始め、帰りのモノレール内。

「今日はありがとね！すっごく楽しかったよ！」

「ああ……三日分の体力使っちまったぜ……」

明日からの臨海学校、生きて帰れるだろうか。

「そういえば一弥、待ってた時、何を聴いてたの？すごく注目集めてたよ」

「ん？そんなに邪魔な場所だったのか？」

「そういうことじゃなくて。一弥、自分で気づいてないだろうけど、見ててすごく、その……格好良かったんだよ？」

「そうなのか？一夏ばっかモテてたからな……自分に対しては疎いのかもな」

「ふふっ、かもね。それで、何聴いてたの？ラジオ？」

「歌……バラードさ。シャルも聴いてみるか？ホラ」

言って、イヤホンの片方を渡す。シャルは左に、俺は右の耳につけ、曲を流す。

「わ……すごく落ち着く曲だね……」

「だろ？」

学園に帰る間の時間、俺達はずっとそうして厳かな歌を聴いていた。

なんだかんだで楽しい一日だったな……明日からは地獄だが。学園に帰る間、そんなことを考える俺だった。

第二十二話　ＳＵＭＭＥＲ　ＴＩＭＥ！！

『海だぁー！』

トンネルを抜けたバスの中でクラスの女子が声を上げる。

臨海学校初日。天候にも恵まれ、陽光を浴びた穏やかな海面はキラキラと輝いている。

「おー。やっぱり海見るとテンション上がるなぁ」

「ふふっ、そうですわね。まさしく海日和、といったところでしょうか」

「ああ、目一杯遊ぶか。……おーい、一弥。もうすぐ着くぞー？」

後ろの席で寝ている一弥を呼ぶが、イヤホンをさしている辺り、何か聴きながら寝ているようで一向に眼を覚まさない。

「あ、一夏。着いたら僕が起こすよ。昨日連れ回しちゃったから、きっと疲れてるんだと思うから」

「ん、分かった。箒、向こうに着いたら泳ごうぜ。昔から水泳は得意だったよな」

「む……。わ、私はいい。少し、その……調子が悪いのでな」

「そうなのか？体調には気をつけろよ？」

「あ、ああ。分かっている」

昨日から箒の様子がおかしい。落ち着きがないというか、そわそわしているというか……落ち着きがないといえば。

「……」

「おーい、ラウラー。ラーウーラー？」

ラウラもそうだ。今も俯いたまま、聞こえていないのか、ボーッとしている。こいつら何かあったのか？あんまり反応がないのでその顔を覗き込む。

「っ！？なっ、なんっ、なんだ！？ち、近い！バカ者！」

「いや、呼んでも気がつかないからだろ。体調でも悪いのか？」

「だ、大丈夫だ。大丈夫だからとりあえず離れろ！」

ぐいぃっ、といった感じで押し返される。まあ、問題ないみたいだな。

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと座れ」

「一弥、そろそろ目的地に着くみたいだよ。ほら、起きて起きて！」

「ぐぁ……地獄の幕開けか……何が何でも生き残ってやるからな……」

「大袈裟だよ……一弥は泳がないの？」

「シャルロット。そっとしといてやってくれ。一弥は昔から日差しが苦手だったのだ」

「え？そうなの一夏？」

「ああ、箒の言う通り。でも最近はまだマシになってきたんだけどな……」

「そうなんだ……一弥と一緒に泳ぎたかったんだけどなぁ……」

シャルロットは一弥と泳ぎたかったらしく、がっかり、と言わんばかりに肩を落としている。一弥にも困ったもんだ。

「お前に言われたくねぇよ一夏……」

「どういう意味だよ？」

「専用機持ちに聞けば分かるだろ。……着いたぞ。地獄に」

「「「いや、一弥にとってだけだから」」」

俺、箒、シャルロットの声が見事にユニゾンした。

◇

「織斑センセ。俺らの部屋はどこになるんですか？」

地獄の門をくぐった俺はすぐさま安息の地の確保に勤しむ。海？バカを言え。そんなところに行ったら灰になるだろうが。

「着くなりそれか……全く。お前と織斑は特別室だ。ついてこい」

「え？個室じゃないんですか？」

俺も思ったことを一夏が代弁。別々ってことか？

「最初はその予定だったのだがな」

千冬さんが顔を曇らせて口を開く。何かあるのか？

「それだと絶対に就寝時間を無視した女子が押しかけるだろうということが簡単に予想されてな」

「「ああ……はい……」」

ですよね……俺としても貴重な夜は体力温存に当てたいしな。

それにしてもここは気持ちいいな。エアコンが効いててひんやり快適だ。

「というわけで、ここになった」千冬さんがとある一室の前で止まる。そのドアには『教員室』と書かれた貼紙が貼られていた。

「つまり、千冬さんと同室だと？」

「そういうことだ」

普段の俺なら絶望しているだろうが、今となってはありがたい。これで夜の安全は確保できた。

「……音無。お前臨海学校をサバイバルか何かと勘違いしてないか？」

「ラウラじゃありませんが、こっちも死活問題でして」

「達観してるなー……」

やかましいわ。

「では、入れ。中には風呂もあるが、大浴場も一部の時間のみ使用可だ。深夜、早朝に入りたければ部屋の方を使え」

「分かりました」

「了解です」

「さて、後は一日自由だ。荷物も置いたし、好きにしろ」

んじゃ、ゆったりと昼寝でも――

「ただし、今から仕事をするためにこの部屋に残ることは禁ずる」

ちぃっ！読まれてたかっ！なら少し騒がしいが広間の方で――

「一夏」

「了解、千冬姉」

そう思った矢先、一夏にガッチリとホールド。千冬さんは俺の水着を取り出している。

「ちょっ！一夏てめぇッ！千冬さんも！俺を殺す気か！？」

「一名様ご案内～」
「楽しんでこい」

「マジで勘弁してくれ！死ぬ！溶けるんだってマジでぇぇーーーっ！」

強制的に海に連れ出された俺の悲鳴がこだました。

◇

ところ変わって女子更衣室。海に入るために、女子達が着替えをするために設置されたもので、すぐそばには海があるところ、なかな

か良心的である。

そんな中、二人の乙女が着替えをしていた。

「無理無理無理だっ！や、やっぱり無理だこんなものバカじゃないのかそれになんでこんな髪型におかしいんじゃないのかダメだダメダメだっ、大体なんでこんなに面積が少ないんだ！？くそくそくそっ！クラリッサクラリッサクラリッサぁぁ！覚えておくがいい帰ったら絶対に許さないからなあっ、ちょっ、し、シャルロットほんとやめてお願い許して恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしいからぁっ！」

「ダーメー！せっかく買ったんだから、一夏に見せないともったいないでしょ？それに、その髪型似合ってるから大丈夫だよ！」

しょうがないなあ、ラウラは恥ずかしがり屋なんだから。せっかくのルックスがもったいないよ。

「だっ、だっ、だってだって……そ、そうだ！面積が少ないなら日焼けしてしまうな！仕方ないな全くバスタオルで隠すしかないな！」

「う～ん……もう……仕方ないなあ。一夏の前ではちゃんと脱がなきゃダメだよ？」

っと、僕も着替えなきゃ。そういえば一弥は結局どうするのかな…？できれば一緒に泳ぎたかったんだけどなあ……。

そこで、ふと気づく。そういえば、あの一件、一弥と一緒にお風呂（水着装着につき、卑猥なことではない）に入った辺りから、どうしても一弥のことを考えている。今だってそうだ。あわよくば、一弥と一緒に居られたら、過ごせたらと思っている。

（やっぱり友達だからかな……？でも、一弥は今のところ迷惑には思ってないだろうし……大丈夫……だよね）

そんなことを考えている内に、水着に着替え終わる。クイクイ、と胸の落ち着き具合を確かめ、おかしなところがないかチェック。うん、問題なし。

「うん、それじゃあ行こうか、ラウ……ラ……」

『了解だ』

振り向いてみるとそこにいたのは……なんというか、タオルの集合体のようなものが鎮座していた。声もくぐもっている辺り、妙にリアルなのがまた怖い。

「えーっと……ラウラ？」

『なんだ』

「……いや、なんでもないよ。うん……」

『そうか。では行くぞ』

「はぁ……」

人知れず、ため息をつくシャルロットだった。

◇

目の前には輝く海面が広がり、水平線が見える。これぞ夏！って感じだ。

「ぐあぁ……蒸発する……っ……さっさとパラソル差して日陰作らねぇと……」

だというのに隣の親友ときたら寝ることしか考えていないらしい。ビーチパラソルと幅の長いイスを担ぎ、黒の水着に帽子のついた上着を着込み、オレンジのサングラスをかけている。

「あっ、一夏！い、ち、か～～～！」

「うわっ！？鈴！？何すんだよっ！」

いきなり俺の背中に乗ってきたのは鈴だった。猫みたいなやつだな全く。

「はぁ～…勝手にイチャついててくれ。俺は寝る……」

「あっ、おい一弥！泳がないのか！？」

「まだ死にたくねぇ」

泳ぐ＝死ぬ、の方程式でも成り立ってるのかアイツは……。そんなことを言いながら適当な場所にパラソルを砂浜に刺し、イスを伸ばして本当に寝始めた。イヤホンをさして雑音を遮断する辺り、執念のようなものが感じられる。

「アイツも変わんないわね～。まだ日差しに弱いのかしら？」

「まだマシになったけどな……っていい加減降りろ！猫じゃないんだぞ！」

「あははっ！いいじゃない別に！にゃーにゃー♪」

「ああっ！り、鈴さん、何をしてますの！？」

そう言ったのはセシリアだった。鮮やかな青のビキニが眩しい。うーん。ＩＳもそうだからか、セシリアには青がよく似合うな。

「そ、それより、一夏さん？バスの中で言っていた通り、サンオイルを塗ってくださいまし！」

「「「え！？」」」

セシリアの言葉に周りにいた女子が一斉にこちらに振り向く。ああもうなんでそんな大声で……。

「ったく……んじゃ、パパッとやっちまうか」

「え、ええ。それでは、お願いしますわね……」

刺したパラソルの下のシートに（いつの間に用意したんだ？）寝そべり、ブラの紐を解く。ぐ……一々色っぽいから困る……。

「くっ……じゃあ塗るぞ」

「あ……いい感じですわ。もっと下の方もお願いします」

「ぐ……せ、背中だけだよな？」

「い、いえ、せっかくですし、手の届かないところは全部……」

「んなっ！？」ちょっ、この子何言ってんの！？いくらなんでも無防備にも程があるだろ！

「はいはい、あたしがやったげるわよ。ぺたぺたこちょこちょっと」

「きゃあっ！な、り、鈴さん！もう！邪魔をしないでくださいまし！」

た、助かった。そう思って顔を背ける。次は絶対――

「もう！いい加減に――」

後ろで立ち上がる気配。いやはや、全く危なかったな。

「おー。想像してたけどかなりすごいわねぇ」

「え……きゃあぁっ！り、り、鈴さん！絶対許しませんわよ！」

「んじゃ逃げる。まったねー」

「ま、待ちなさい！許さないんですからねっ！」

そして始まる鬼ごっこ。アイツらほんと仲いいな……。

◇

くっそぉ……一夏のヤツ……絶対仕返ししてやる。月の出てない日ばかりと思うなよ……。

そんなことを考えながら水分補給を繰り返す。地獄に来てしまった以上、水分補給は欠かせない。色々失ったが、これ以上は何が何でも死守してやるからな……。

「――――――」

「あぁ……？」

何か聴こえた気がして目を開ける。そこにいたのは、昨日買った水着を着たシャルと、それと……なんだこいつ……。

「……なんだそのタオルおばけ」

「ラウラなんだけど……恥ずかしいって言ってずっとこの調子なんだよ。可愛いから大丈夫って言ってるんだけど……」

『だっ、大丈夫かどうかは私が決めるっ』

「……らしくて」

「流石に防御力高すぎだろ……」

そんなことを思っていると、どこからか声が聴こえてきた。ん……？なんだ？

『待ちなさい！いい加減捕まりなさいまし！』

『待てって言われて待つやつがあるかよとっつぁ～ん！』

……鈴とセシリアだった。ってか鈴。キャラ変わってんぞ。

そしてこっちに走ってきている。鈴は後ろを見ているため、こっちには気がついていないらしい。

どうしよう。避ける気力も生まれないんだが……。

「わ、わっ！鈴、危ないよっ！」

「え？な、うきゃあっ！？」

「ごふっ！」

鈴が俺の上にダイブ。バタバタとパラソルとイスが倒れ、当の本人である鈴は俺の腹の上にヒップドロップ。

こ、こいつ……！俺を殺す気か！？一夏といい千冬さんといいなんなんだよ！

「どけ鈴……！流石にキツい……！」

「あたた……。って、一弥？アンタ何してんの？」

「お前が突っ込んできたんだろうが……！ぐっ、日差しが……っ！」

「ほんっと弱いわねぇ……ん？なに――――あ」

「うふふ。捕まえましたわよ、鈴さん？」

肩に置かれた手に力を入れているらしいセシリア。その姿を見た鈴は青ざめている。

「そ、その～……ほ、ほらっ！一弥を保健所に運ばないといけないから、ね！？」

「セシリア、連れてけ」

「了解ですわ」

薄情者ぉーっ！鈴が叫ぶが、知らん顔。実際知らんからな。

「クソッ……また無駄な体力使っちまった……」

「ひ、必死だね、一弥」

「実際死活問題なんだ」

『ふん。鍛えていないからそうなるんだ』

「ほぅ……？じゃあ鍛えているラウラさんはさっさとそのバスタオルを脱いだらどうなんだろうなぁ？」

『ちっ、ちがっ……！こ、これはその、力を溜めているんだ！』

「なんのだよ……」

「一弥。それで……泳がないの？」

「見ての通りだ……先に一夏のところにラウラを連行してやってくれ」

『なっ！？ま、待て！まだ力が溜まっていないんだ！』

「もう……ほら、行くよっ、ラウラ！」

『ま、待ってくれ！本当に、その、心の、じゃなくて、力の準備が！』

やれやれ……アイツらにも困ったもんだ。

そう考え、再び日陰を作り、また寝そべった。いい加減体力の限界だ……。

◇

それなりに時間が過ぎ、今はゆったりと泳いでいる。日差しが体を熱するが、それを海水が冷ます。本当に気持ちいい。

「あっ、いたいた。おーい、いっちかー！」

『まっ、待ってくれ！本当にマズいんだ！』

「ん……？あっちからか？」

声のした方へ泳ぎ、海から出る。そこにいたのはイエローの水着を着たシャルロットと……

「……ミイラ？」

「あはは……一応、ラウラなんだけどね……ほら、出てきなってば」

『ま、まだ力が……！』

ん？くぐもったが、今の声はラウラか？

「仕方ないなぁ……じゃあ一夏、遊びに行こっか。二人で」

『な、なにぃ？』

そう言って腕を引っ張るシャルロット。なるほど、誘導尋問ってやつか。

『ま、待て。私も行く』

「その格好で？」

『くっ……！ええい！脱げばいいのだろう！？脱げば！』

ばばばっとバスタオルをかなぐり捨て、水着姿のラウラが現れる。
レースをふんだんに使った黒の水着。正直……可愛い。

「わ、笑いたければ笑うがいい……！」

『うははははっ！』

遠くでほんとに笑い声が上がった。一弥だ。

「一弥ぁぁぁぁぁっ！貴様貴様貴様ぁっ！絶っっっ対に許さないからなぁぁぁぁっ！！その首ちょん切ってこの青空の下に晒して転がして弄くり回してやるっっ！」

『やってみやがれー！この背伸び娘ー！』

こいつらも仲いいよな……。

「落ち着けって、ラウラ。ちょっと驚いたけど、可愛いと思うぞ？」

「な、なっ……！？かっ、かわっ……！？」

髪型もいつもと違い、ツインテールにしている。可愛いのだが、それが落ち着かないのか、狼狽したように両手の指を弄ぶ。

「おっりむーらくーん！」
「ビーチバレーしなーい！？」
「わー、おりむーと対戦～。ばきゅんばきゅーん」

「おーう！シャルロットもやろうぜ？ラウラも」

「うん。そうだね！」

「む……いいだろう」

のほほんさん（一弥命名）達とビーチバレーを楽しむことに。しばらく遊んでいると、辺りが急に黄色い声に包まれた。

「わ、織斑先生！ビーチバレーですよ！私達も混ざりましょう！」

「羽目を外しすぎないように、な」

そこにいたのは山田先生と千冬姉だった。山田先生はワンピースタイプを、千冬姉はメッシュ状にクロスされた黒のビキニを着ていた。その迫力に、女子一同は圧倒されている。

「千冬姉も混ざる？」

「ああ。その前に……」

ん？千冬姉がどこかに向かって歩いて……あれは一弥のところか？
そう思っていると、急にイヤホンを取り、

「活力溢れる高校生がのんきに寝るな。一弥、お前も混ざれ」

「……勘弁してください。俺はまだ死にたくなぶっ！」

あ、いつの間にかラウラがボールを持って一弥の顔面に……

「ふふん。一弥貴様、さっき笑った仕返しだ。ざまあみろ」

ポテッ……と落ちるボール。それを一弥はガシッ！とわしづかみして……

「上等じゃねぇかラァァウラァァ……音無一弥、参戦だコラァーーっ！」

ばっ！と上着を脱ぎ捨て、サングラスをクイッ、と位置の調整。瞳には闘志の炎が燃えている。

「一弥君も参戦ね！正直諦めてたけど、夢のコラボが実現したわ！」

誰かが何か言っていたが、とりあえずスルー。直後、ドドド……ッ！という効果音が聞こえてくる。

「待ちなさい鈴さん！性懲りもなくまた！」

「にゃはははー！捕まえられるもんならつかむぎゅっ！」

そして、千冬姉の胸にダイブ。

「ほぅ。元気のいいことだな。お前達も混ざれ」

「「え、えぇっ？」」

そして、頂点を賭けたビーチバレーが始まった。

◇

「……」

時は過ぎ去り、日が沈み始め、海は鮮やかな朱色に染まる。海と空と太陽のコントラストが鮮やかで美しい。そんな景色を、高台にいる一人の女子、篠ノ之箒は厳しい目で見ていた。

「そろそろ夕飯の時間だぞ」

後ろから声が掛かる。正体は千冬。それにも動じず、箒は首肯で返す。

「明日はお前の専用機が来る。色々やることもあるし、しっかり休んでおけよ」

「……分かりました」

再び夕日に目をやり、彼女は呟く。彼女による、彼女だけのＩＳを。

「――紅椿」

臨海学校は、まだまだ始まったばかりである。

第二十二話　ＳＵＭＭＥＲ　ＴＩＭＥ！！（後書き）

一弥とラウラってすごく絡ませやすいんです。

第二十三話　熱帯夜

楽しい時間は過ぎるのが早く、今の時間は七時半。大広間三つを繋げた大宴会場で、俺達は夕食を取っていた。

「うん、うまい！昼も夜も刺身が出るなんて豪勢だな」

「ほんとだね。ＩＳ学園って羽振りがいいよ」

そう言ったのは右隣に座るシャルロット。

理由は不明だが、この旅館では館内では浴衣着用が決定事項らしい。なんともよく分からん旅館だな。

「っ……ぅ……」

ちなみに左隣にはセシリアがいるんだが、正座が苦手らしく、ずっとこんな感じで呻いている。

「セシリア、正座苦手ならテーブル席にしたらどうなんだ？」

ＩＳ学園には多国籍の生徒が集まるため、正座ができない生徒は隣の部屋にあるテーブル席を使える。ラウラなんかがそれを使っているのだが……

「へ、平気ですわ……この席を獲得するのにかかった労力に比べれば、このくらい……！」

席？獲得？夕食の席は入ってきた順じゃないのか？

「一夏。女の子には色々あるんだよ」

「そうなのか？」

「ふふっ、そうなの」

そうらしい。

「う、ぐ……くぅ……」

でもこれはちょっとアレじゃないか……？さっきから全然食えてないし。

「なあ、セシリア」

「移動は、しませんわ」

むう、言い切られてしまった。

「このままじゃいつまで経っても食事が終わらないだろ。食べさせてやろうか？」

「えっ！？い、一夏さん、今のは本当ですの！？」

「お、おう！？いや、だってそのままじゃ食いにくいだろ？」

「そ、そうですわね！では、お願いしますわ！」

すごい剣幕だな……。そう言ったセシリアは俺に箸を預けてくる。

それを受け取り、俺は刺身を一切れ掴む。

「じゃあ、ほら」

「は、はい。あー……」

ん、と言おうとしたところで問題が起きた。

「ああーっ！セシリアずるい！何してるのよ！」
「織斑君に食べさせてもらってる！卑怯者～！」
「ズルイ！イカサマ！インチキ！」

そりゃバレるよなー。ずらっと一列に並んでるんだし。普通気づくわな。

「ず、ずるくありませんわ。席が隣の者の特権です」

「それがずるいって言ってんの！」
「織斑君、私も私も！」

そして一気に解放される女子の願望。どう見てもお前ら自分で食えるだろ！

「お前達は静かに食事することもできんのか」

後ろの襖が開く気配がして、そんな声が聴こえる。その声を聞いた

女子はすぐに正座して背筋を伸ばす。変わり身早いなっ！

「織斑。あまり騒動を起こすな。鎮めるのが面倒だ」

「わ、分かりました」

俺のせいなのか？俺のせいなんだろうなぁ……。

「音無。お前も鎮め……ろ……」

「あー……一弥はちょっと……」

「プクプクプク……」

昼に体力を使い切ったせいか、今は口から魂が出てる状態なんだよなぁ……

「ぐぁ……ぁぐ……はっ！？」

「あ、起きた」

「音無。夕食はしっかり取っておけ……とは言わん。朝はしっかり取っておけよ」

「千冬さんか……んじゃ、先に部屋に戻ってるからな……」

一弥退場。あれで少しはマシになったというんだからなんとも言えない。

「一夏さぁん……」

「わ、悪いセシリア。また騒いだら流石にまずいだろ？」

「ええ、ええ、分かってますわ。一夏さんはお姉さんが大切ですものね」

怒らせちまったな……。どうするか……あ、そうだ

「セシリア。代わりと言っちゃなんだが、後で部屋に来てくれよ」

「後で部屋に……？わ、分かりましたわ！必ず行きますわ！」

「あ、ああ。んじゃまた後でな」

その後は正座に慣れたのか、セシリアはかなり高いテンションで夕食を食べていた。

◇

「はぁ～……」

今、俺は露天風呂から上がり、クーラーの効いた部屋で一人寝そべっている。ようやく昼のダメージが抜けてきたところだ。

風呂から上がった時、入れ代わりに一夏とすれ違ったから、おそらくもう夕飯の時間は過ぎたんだろう。

「ん？お前一人か」

低い、特徴的な声がする。見るまでもない。千冬さんだ。

「情けないな。最近は篠ノ之達と鍛えているんじゃないのか？」

「そりゃそうだけどな……やっぱ苦手なもんは苦手だ」

「そんなもんか」

言って、襖の向こう側にある木製の椅子に座る。それにならい、俺も向かい側にある椅子に座る。

「それで？女の一人や二人連れてこないのか？」

「んな体力ねぇよ」

「詰まらん奴だな……。そういえば、お前に好きな女はいないのか？」

「この俺が一人の女に固執する男に見えるのか？」

「最近はシャルロットと仲が良さそうじゃないか」

「ん？アイツは友達だ。仲がいいのは当然だろ？」

「くっくっく……お前がそう言うのなら、私は構わんがな」

魔女みたいな笑い方する人だなー

そんな折、ドアが開く気配がし、声が聞こえた。

「あれ？二人共早いな」

「一夏か。お前の風呂が長いんだよ」

「いやだってしょうがないだろ？ここの露天風呂は学園のとはまた違った良さがあるんだから」

「全く、ジジイみたいな弟だな……」

「それより一弥、もう大丈夫なのか？」

「ああ、夜になって日差しが消え失せたからな。月光は俺の力の源

だ」

「お前は……ゾンビみたいな奴だな」

うるせーやい。

「じゃあ千冬姉。風呂上がりだし、久しぶりにアレやる？」

「む……そうだな。久しくされていないしな」

「んじゃ、俺は腹も減ってきたし、売店にでも行ってメシを調達してきますかね」

「ああ、一弥。それと――――」

「分かってるよ。ここにはキッチンがないしな」

さて、邪魔者は空腹を満たすとしよう。

☆　★　☆

「ふぅ、やっぱ少しくらい食っときゃよかったかな」

売店である程度腹を満たすものを買い、外のベンチでそれらを食べる。

にしても、今日は少しばかり体力を使い切ったせいか、今のところ結構キツい。明日から大丈夫だろうか……

「ほっ」

不安を払うように、空のペットボトルを真上に投げる。今日は無風なので、風には乗らず、満月をバックにまっすぐ俺のところに戻ってくる。

ィィン……

「……？何の音だ？」

パシッ、とペットボトルをキャッチし、音の出所を探す――必要はなかった。真上。そこに音源がある。

「……は？に、にんじん……？」

そのにんじん？の形をしたなにかはまっすぐ俺のところに――って俺っ！？

キィィンッ――ズドォォンッ！

とっさの回避行動が幸いしたのか、俺は直撃せずに済んだ。

いや、直撃せずに済んだ。じゃねぇよ！こんなの当たったら死ぬだろ！？

そして、そのにんじん型のミサイルが真っ二つに割れ、中から人が出てくる。

「あっはっは！ビビりすぎだぞぅ？かずりん！こーんばーんわー！」

「……いやまあにんじんミサイルで大体予想はしてたけどな……」

篠ノ之束。ＩＳを生み出した科学者……科学者？科学者だ。そして箒の姉貴。

「それよりかずりん！我が愛しい愛しい妹の箒ちゃんはどこだい！？」

「このシスコンが……それよりなんでここに――」

「まあ私が開発したこの箒ちゃんセンサーがあればすぐに見つかるさぁ！ふっふっふ！待っていたまえふぎゅ！」

「いるのか聞いてるんだがなぁぁ……？」

後ろの襟首を掴んで逃走を阻止。本当こいつの相手は面倒だ。人の話は聞かない、テンションは常にメーター振り切れてるし。苦手というか相手にしたくないタイプだ。

「えほっ、えほっ！ひ、ひどいよかずりん！ＤＶだー！虐待だー！」

「黙れ。そんで、なんでこんなとこに来たんだよ。研究所にいたんじゃないのか？」

「ああーっ！そうだよさぁっすがかずりん！研究所にアレ忘れてたぁっ！んじゃあねかずりん！あでゅー！」

「……」

まさに台風。そんな言葉がピッタリだ。そう言った束はさっさとどこかに走り去っていった。

なんだろう……すげぇ体力使っちまった気がする。

「……月が」

あまりの呆気のなさに思わず空を仰ぐ。暗雲が月を覆っていた。

臨海学校、荒れそうだなぁ……。

「勘弁してくれ……」

一抹の願いは聞き取られることはなく、暗雲は完全に月を覆った。

☆
★
☆

束事件に巻き込まれた俺はさっさと部屋に戻ろうとした。そして部屋の前。

「えっと……どこからツッコめばいいんだ……？」

俺の部屋の前には、専用機持ち五人が襖に耳をピッタリとくっつけ、中の音を聞いているらしかった。

うん……みんな、盗聴って犯罪なんだよ……？

「あっ……！一弥！こっちこっち……！」

鈴さん。なんで手招き？聞かないからね？俺は犯罪なんてしないからね？

「シャルまで……お前ら何してんだよ」

『しーっ！』

何このユニゾン。連携の時に見せろよ。ってかさ、そんな耳押し付けてると――――

バターンッ！

『へぶっ！』

「襖倒れるぞ……って遅かったか」

バカ五人を跨いで部屋に入る。中ではマッサージ中の織斑姉弟がいた。

☆　★　☆

「全くこのバカ者共が……」

『すいませんでした』

今、専用機組五人は正座をしている。うん……フォローしようがないよね。

「まあいい。一夏、こいつらにもマッサージしてやれ」

「え？ああ、分かった。んじゃセシリアからだな。約束してたし」

「ええっ！？あ、あれはそういう意味で……！？」

顔を赤くしてどういう意味だと思ったんでしょうかね。

「んじゃ、何か落ち着く系の曲でも流すか」

俺はそう言い、持って来たステレオにウォークマンをセット。曲を流す。

「ほぅ……なかなかの選曲だな」

「どうも」

そんなことをしている内にマッサージが続く。セシリアは気持ちいいのか、今にも寝そうだ。

そこで意地の悪い顔になった千冬さんが、がしっ！と効果音がつきそうな勢いでセシリアの尻を掴んだ。浴衣をめくって。

「おー、マセガキめ。年不相応な下着だな。その上黒ときたか」

ちなみに俺はセシリアの頭の方向にいるので俺からは見えない。しかし、一夏は顔を赤くしてこっちに視線を向けている。

「しっかり焼き付けたみたいだなぁ？」

「かっ、一弥っ！」

かはは。笑えるぜ。

「せっ、先生！離してください！」

「やれやれ、教師の前で淫行を期待するなよ、十五歳」

「い、いっ、インコっ……！？」

「ドリルはエッチだなぁ、おい？」

「え、えっ、エッチじゃありませんわ！もうっ！一弥さんっ！」

「かはは！傑作だな！」

そんなイベントシーンも終わり、マッサージが終わった。

「ふぅ……流石に二人連続は汗かくな」

「んじゃまた風呂入ってこいよ。気持ち悪いだろ」

「そうだな。それじゃあ、難しいかもしれないけど、ゆっくりしてってくれ」

そう言って一夏はタオルと着替えを持って部屋を出る。シャルを含めた専用機組五人は言葉通り、どうしていいか分からないまま正座を続けている。

「別に千冬さんの前だからっていつも緊張しろとは言わないぞ？」

「い、いや、その……」

「織斑先生とこうして話すのは、ええと……」

「は、初めてですし……」

まああの鬼教官の前じゃ当然か。

「全く、しょうがないな。私が飲み物を奢ってやろう」

そう言った千冬さんは備え付けの冷蔵庫から清涼飲料水を取り出していく。

「ほれ。ラムネ、オレンジ、スポーツドリンク、コーヒー、紅茶だ。それぞれ好きなのを選べ」

「選ぶ必要がないように分けてよく言うよ」

千冬さんは俺達のことをよく知ってるからな。ちなみに俺の分はない。

『い、いただきます』

全員が同じ台詞を言い、渡された飲み物を飲む。

計・画・通・り（ニヤリ）

はい、何回目か分かりません。

反省はしてます。でも後悔はしていないッ！

「「飲んだな？」」

千冬さんもしたり顔だ。

ここからは俺達のターンッ！

「え、ええ……」

「そりゃ、飲みましたけど……」

「ま、まさか何か入ってましたの!?」

「失礼なことを言うなバカめ。ちょっとした口封じだ。一弥、お前は何にする？」

「チューハイある？味はなんでもいいけど」

「ほら、カシスだ」

投げて渡される。千冬さんは星のマークが輝いている缶ビールだ。
それらを俺達は飲む。

「……」

全員が唖然としている。そらそうか。

「一弥、何を買ってきた？」

「ジャーキーにイカ。これくらいで十分だよな？」

「ああ、山田先生は仕事が忙しいみたいだからな。一人で飲むのは味気ないんだ」

「か、一弥……未成年だよね？」

シャルが問い掛ける。やっと硬直から戻ってきたか。

「もちろん。まだ十五歳だぞ？」

「おかしな顔をするなよ。私だって人間なんだ。酒くらい飲んでも問題ないだろう？」

「そりゃまあ……」

「そうですけど……」

「でもその、今は……」

「仕事中じゃ……？」

ちなみにラウラは混ざっていない。目の前の人物と敬愛している千冬さんが一致しないんだろう。口を開けたまま固まっている。

「うら」

「いたっ。な、何をする一弥！」

口を閉じてやったら舌を噛んだらしいラウラが抗議してくる。おお、戻った戻った。

「いや、お前がバカみたいに口開けてるからだろ？コーヒー温くなるぞ」

「ふふっ、まあ固いことは言いっこなしだ。もう口止め料は払ったぞ？」

千冬さんが持っている飲み物を指し、全員が「あっ」と声を上げる。
計算高い人だなー。

「って一弥っ！アンタ未成年じゃない！何一緒になって飲んでるのよ！？」

「そ、そうだよ一弥！犯罪だよ！？」

「なんだよ、中国じゃガキでも飲んでるぞ？それにシャル。さっき盗聴してた犯罪者が何言ってんだ。これでおあいこだろ？」

今度は全員が「うっ」という顔をする。楽しいねぇ。

「さて、盛り上がってきたな。前座はこのくらいでいいだろう」

「なんならお前らも飲むか？ラウラ」

「うっ……い、いや、私は……」

「子供には早かったか」

「言ったな!?飲んでやろうじゃないか!」

俺のチューハイを奪い取り、一気に傾ける。途中、シャルが「あっ」と言ったが、ここまできて犯罪うんぬんはナシだろ?

「ぷはっ……ふ、ふん……大したことにゃいにゃ……」

「呂律回ってねぇぞ?」

「う、うるひゃい!ふあ~」

そう言って目を回してラウラは後ろに倒れてしまった。あーあ、やっぱまだまだガキだな。

「やれやれ、ちょうど四人分の布団あるし、ここで寝かせるか。シャル、布団敷くから一緒に寝るか」

「え、えぇぇっ！？」

「かはは！冗談だ。もう一本チューハイ取ってくれないか？」

「も、もう……一弥のえっち……」

こうして見るとシャルも本当可愛いよな。顔赤くして涙目で上目遣いしてくるところとか。

ラウラを布団に寝かし、さて本題に入りましょうか。

千冬さんも二本目のビールを飲んでることだしな。

「それで、お前らはアイツのどこが好きなんだ？」

アイツ、が誰を指すのかは言うまでもないだろう。一夏だ。

「シャルはそうでもないんだろ？そんな雰囲気出してねぇしな」

「か、一弥、分かるの？」

「何年アイツの親友やってると思ってるんだ……惚れてるか惚れて

ないかくらいすぐ分かる。だよなその他？」

「べ、別に私は昔より弱くなっているのが腹立たしいだけで……！」
「べ、別にあたしは腐れ縁なだけだし……！」
「べ、別にわたくしはクラス代表としてしっかりしてほしいだけで……！」

「べ、別にツンデレが見飽きたワケじゃないんだが？」

「「「ツンデレじゃない！」」」

「そうか、本心か。ではそう一夏に伝えておこう」

しれっと言う千冬さんに、ぎょっとした三人が詰め寄る。

「「「言わなくていいです！」」」

ほんとこいつら面白いな。

「まあ、どちらにせよアイツと付き合える奴は得だな。家事は万能、料理もうまいしマッサージもできるときた。どうだ、欲しいか？」

「「「くれるんですか！？」」」

「欲望に素直なヤツらだな」

「やるかバカ」

「「「ええ～……」」」

「喜怒哀楽の激しいヤツらだな！」

思わず爆笑。腹が痛い……！シャルも苦笑いだ。

「女ならな、奪うくらいの気持ちで行かなくてどうする。自分を磨けよ、ガキ共」

三本目のビールを口にする千冬さんが楽しそうに言った。確かに、今日ほど酒のうまい日も久しぶりだ。

俺はこれから幕を開ける波乱を今だけは忘れ、手に持つチューハイを傾けた。

第二十四話　紅に彩るＩＳ

合宿二日目。天候は昨日心配していた通りにはならず、曇り。俺にとってはありがたい。今日は午前中から夜まで丸一日ＩＳの各種装備試験運用とデータ取りだ。特に専用機組は大量の装備が待っている。千冬さんは俺を殺す気だろうか。

「全員集まったな。――――おい、遅刻者」

「は、はいぃ……」

頭を押さえて返事をしたのはラウラだった。おそらく二日酔いだろう。チューハイを半分飲んだだけであそこまで酔えるものなのか？

「……まあ体調管理はしっかりしておけ。遅刻の件はなかったことにする」

「ありがどう……ございばす……」

どうしよう、目が虚ろだ。千冬さんでさえ冷や汗をかいている。

「二度と酒なんか飲まないからなぁ……」

ごめん。口車に乗せられて（主に俺の）酒を飲むラウラがすぐに想像できた。

ちなみに俺はそこまで酔ってない。むしろ絶好調だ。適度な飲酒なら気持ち悪いどころかすっきりする。一部の人間を覗いて。

「さて、後は各先生方に従って振り分けられた装備試験をするように。専用機持ちは私についてこい」

「ラウラ、いくぞ。大丈夫か？」

「大丈夫に見えるのか……」

「絶好調か？」

「死ねっ！あぅぅ……」

叫んだせいで頭にきたらしい。ほんと酒に弱いんだなぁ……。

しばらくして、崖に囲まれた岩場に到着する。すぐそばには大海原が広がっていた。

ここで搬入された新型装備のテストが今回の合宿の目的だ。一夏はどうでもいいだろうが、拡張領域がそれなりに空いている俺にはかなり大事な問題だ。

……ってか、ずっと思ってたっていうかつい専用機持ちみたいに扱っちまったけどさ。昨日も専用機組五人とか言っちまったけどさ。

「なんで箒もいるんだ……？」

俺の疑問を一夏が代弁してくれました。

「今から説明する。篠ノ之、お前は今日から――」

「ちぃーちゃーん！箒ちゃーん！」

昨日会った束が崖から下りてきた。ちなみにその崖見るからに傾斜が８０度はありそうなんですが？誰か、誰か夢だと言って。

「会いたかったよちーちゃん！さあハグハグしぎゅむっ！」

「うるさいぞ、束」

飛び掛かる束を片手でわしづかみ。ってかアイアンクロー。なんか既視感を覚えた。

「ぐぬぬぬ……ていっ！相変わらずひどい接し方だねっ！」

アイアンクローから脱出し、着地した束が次に標的にしたのは言うまでもなく、箒だ。

「やっ！」

「……どうも」

「ぐふふ。久しぶりじゃのぅ。おぅおぅ！たわわに実ったこのおっぱいがなんとも言えなあだぁっ！」

ガンッ！待って箒さん。いつの間に日本刀なんて持ってきたの？ＩＳスーツって隠すところないよね？

「殴りましょうか？」

「殴る前に聞いて！そこ世界の決まり事だよ！？」

「それより、頼んでいたものは……？」

ためらいがちに箒が尋ねる。それを聞いた束の目がキュピーン。今光らなかった？

「うっふっふ。それはすでに準備済みだよ。さあっ、大空をご覧あれいっ！」

「とか言って下から突き出してくるんだろ」

ボゴォッ！

ほらな。

「か、かずりん！ネタばれはダメじゃなぁいかぁ～～～！」

「もう貴様の行動パターンは読めた」

ここからずっと俺のターン！ドロー！

流石にこのネタも飽きたな。とりあえずその束が持ってきたものを

見るか。

「じゃじゃーん！これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』（あかつばき）！全スペックが現行ＩＳを上回る束さんお手製ＩＳ第三弾なのでございまーっす！」

深紅の装甲が印象的、というのが俺の第一印象だった。

ってか今とんでもないこと口走らなかったかこいつ？現行ＩＳがどうとかって。

「さあ！箒ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズをはーじめーるよー！私が補佐るからすぐに終わるよんっ！」

「……センセ。試験武装をしませんか」

見ているだけで体力気力が吸い取られている気がする。

「ああ、少し待っていろ。今篠ノ之の拡張領域を見て連携に加えるかみるからな」

つまり箒のフィッティングが終わるまでこいつに付き合えと……？

死刑宣告を受けた気分だ。

そんなことをしている間にも限界を超えたテンションで話しかけまくっている。箒は全部スルーしているが。

「はいっ！フィッティング終了～！さぁっすが私！超早いね！ほらほらいっくん！かずりん！拍手拍手～！」

「ＤＡ☆ＭＡ☆ＲＥ」

「え、笑顔がっ！笑顔が怖いよふぇ～～～んっ！」

今ならついカッとなってやった、って供述した犯人の気持ちが分かる気がする。

あと一押しで俺も犯罪者の仲間入りになりそうだ。

流石にこの年で警察のお世話にはなりたくないので、箒の専用機、『紅椿』に視線を向ける。

機体は近接特化に見える。なぜなら、腰の左右に一本ずつの日本刀型ブレードがあるからだ。それ以外は武器らしい武器は見当たらない。一夏の白式に似ている……そんな気さえする。

しかし、さっき束が言っていたこと――

『全スペックが現行ＩＳを上回る束さんお手製ＩＳ第三弾なのでございまーっす！』

あの言葉が事実ならこのブレードにも細工がされているんだろう。
他にも、予想を遥かに超えた機能がついているんだろう。

「――――はっ」

何が行動パターンは読めた、だ。俺のような凡人に天才の考えが解るはずがない。
思わず浮かべる自嘲的な笑み。アイツはいつもそうだったな……。

――――待てよ？何シリアスな雰囲気作っちまってるんだ？所詮束ごときにシリアスなんか必要ないだろ。

「バカみたいだな」

「ほぇ～？誰が誰がっ？誰がおばかさんなんだいっ！？」

「ああ。世界を代表するバカが目の前にいるんだ」

「う～ん？いっくんのこと？」

「……否定できねぇ」

「そこは否定してくれよっ！」

だってなぁ……。

正直バカじゃん？五反田の弾といい勝負だと思うよ？

「よしっ！あとは自動処理に任せとけばパーソナライズも終わるねんっ！さあさあ次はいっくん！君に決めたぁ！」

「モンスター○ールでも開発すんのか」

ってか今思うとモ○スターボールって日本語にすると『怪物玉』だよな？なにこれ怖い。

『よしっ！相手が弱っている！今がチャンスだ！怪物玉ぁー！』

『うぼぁー……！』

怖っ！相手殺しちゃうじゃん！つかショック死もいけそうだよ！子供泣くどころかトラウマものだよ！地球の皆さんの元気を吸い取る元気玉よりタチ悪いよ！

そんなことを考えていると、一夏のデータを取り終わったらしい束がこっちに走ってきた。一本背負いで後ろにブン投げる。

「悪い、ついカッとなってやった。反省も後悔もしてねぇや」

「ひど過ぎるっ！扱いがっ！存在するだけで人に殺気みなぎらせちゃう人間なのかな私って！？」

「……え……？」

「こらぁ！その『今頃何言ってんだこいつ？』みたいな目をやめんかぁー！泣いちゃうぞっ！ベッドの上で泣いちゃうぞぉっ！」

「分かった。そんなに紐無しバンジーがしたいか。百メートルクラスの崖があるといいな？」

「え？ちょ、目がマジなんだけど、冗談だよね？ね？ねっ？」

「そうだな……まずはデータ取りからだな。話はそれからだ」

「なぁんだやっぱり冗談……あれ？なんか死刑が後回しにされただけな気がしてきたよ？あるぇ～？」

バレタ☆

「ん～……大体はいっくんと一緒だけど……稼動率がすごいねぇ。８２％かぁ。連続の瞬時加速でもしたのかな？」

「俺は『跳弾加速』って呼んでるがな」

「エル・ブースト……なるほどね。Ｌ字に進むからかな？」

「安直だろ？」

「そんなことないよぅ？カッコイイと思うけどなぁ～。連続、とかつけない辺りが常識を無視してる感じだぉ！だぉだぉ！」

「お前から常識という言葉を聞けるとは思わなかったな」

「単一仕様能力（ワンオフ・アビリティ）は……まだ使えてないんだねぇ。第二形態移行（セカンド・シフト）もまだかぁ」

「融通の効かない相棒でな」

「な、なんてカッコイイ台詞っ！抱いてくだしゃいっ！めちゃくちゃにしてぇぇ～っ！」

「串刺しの間違いってか？了解だ」

「そ、それじゃあそろそろパーソナライズが終わるかなぁー！るんるん！」

チッ、逃げたか。

「束さん、ちなみに、俺のＩＳが後付装備ができないのはなんでですか？」

一夏が話しかける。すごいな、こいつに自分から話しかけるなんて。体力気力の無駄だってのに。

「うん？そりゃー、私がそう設定したからなのだよ、ワトソン君！」

「へぇ～……え！？白式って束さんが作ったんですか！？」

「うむうむ！なかなかなかなか察しがいいよワトソン君！まあ欠陥機としてポイされてたのを弄っただけなんだけどにゃー。そんでねー、なんかねー、第一形態で単一仕様能力使えるでしょ？元々そーゆー機体らしーよ？日本が開発してたのはー。あぅ、喋りすぎた。誰か飲み物ないかねワトソン君達！」

「目の前に大量に水があるぞ。飲み干してこい」

「わーいっ！って海水だよ！そりゃ飲み物だけどさぁ！あるぇ？今飲み干せって言わなかった！？死刑宣告だよそれ！しかも結構苦行だよ！」

「黙れ、そして機密事項をべらべらバラすなバカたれ」

バゴッ！おおう。出席簿君久しいな。最近は全く世話になってないから存分に暴れてくれたまへ。

「あぅ～。は～やれやれ、ちーちゃんの愛情表現は今も昔も過激だねぇ。そこに痺れる感じちゃうゥ！」

「逝け」

バゴッ!!逝けぇ!そこだ!そこで連続攻撃だよ連続攻撃!

「はぅぅ～それよりいっくん!白式改造してあげよっか!?」

「え?どんな風に?」

「いっくんが女の子になるんだ「結構です」おおっ!即席おっけいもらえたよ!じゃあ早速……」

「だあっ!いらんわっ!わざと間違えんなぁ!どこぞの悪徳商会か束さん!」

よくいるよねー。『いいです』を肯定として受け取るバカが。目の前に。

「あー……ごほんごほん。こっちはまだ終わらないのですか?」

「ほぇ?もう終わってるよ?全く三人共仕方ないんだからなぁもう

っ！」

束、一夏、千冬さんか。うんうん。分かってるじゃないか。

「いっくん、かずりん、ちーちゃんだよ？」

「「「そんなバカな！？」」」

「そこ驚くところじゃないよっ！さては三人全部に束ちゃんをカウントしたなぁ～！？」

千冬さん？アンタですか？目を見てほしいんですが？

「まあ箒ちゃん待たせるのもなんだよね。試運転かねて飛んでみよっか！ふらいあぅぇ～い！」

「では、試しに」

まぶたを閉じて意識を集中させる箒。間もなく、主を乗せた紅椿はもの凄い速度で飛翔した。

「くっ……！」急加速の余波で砂が舞い上がる。箒は既に空高く飛び立っていた。

「じゃあ次は刀だぜぃ！いざ鎌倉ぁ！無念でござるぅ～！あ、右が『石蕗』（つわぶき）で左が『空裂』（からわれ）ね」

ついでみたいに言うなよ。

「石蕗は打突に合わせてエネルギー弾を放出、相手を蜂の巣に！空裂は斬撃に合わせて帯状のエネルギー刃を放出、相手を真っ二つー！だよん！」

箒はすらっと二本を抜刀、まず右の刀――石蕗を突き出す。それと同時にいくつもの赤色のレーザー光が弾丸となって空を突き抜けた。

次に左の刀――空裂。ふっ……と軽く、優雅に振り、すぐさま本命の一閃を降る。クロスされた帯状の光が、空気を斬り裂くように生まれた。

「すげぇ……」

ああ、確かにすごい。が、問題は別にある。今からどうなっていくか……。

「た、たっ、大変です！お、おお、織斑先生っ！」

山田先生の登場。しかし様子がおかしい。慌てているのはいつもだが、それにしてはいつもに増して慌てている。

「どうしました？」

「こ、こっ、これをっ！」

渡される小型端末。その画面を見て千冬さんの表情が曇る。

「特命任務レベルA、現時刻より対策を始められたし……」

そう言って小言で話す二人。

やれやれ……どこに行ってもトラブルはついてくるんだな。

「――――そ、それでは、私は他の先生達にも連絡してきますのでっ」

「了解した。――――全員注目！専用機持ちは全員集合しろ！篠ノ之もだ」

「はいっ！」

妙に気合いの入った声。それが、俺の不安をさらに駆り立てた。

「なんとか荒れる前にケリを着けねばな……」

空は、厚く灰色の雲に覆われていた――。

第二十四話　紅に彩るＩＳ（後書き）

ヒロイン空気……次頑張ってもらいましょ……。

第二十五話　銀の福音（前書き）

今回は真面目に書きますよ！！

第二十五話　銀の福音

「二時間前、ハワイ沖で試験稼動にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用ＩＳ『銀の福音』《シルバリオ・ゴスペル》が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった」

今、俺達は旅館の一番奥に設けられた部屋に詰め込まれている。

証明を落とした薄暗い室内。その中で、大型の空中投影ディスプレイが浮かび、周りには作業をしている女性がパソコンに向かっている。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することが解った。時間にして五十分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった」

なるほど。つまり――

「そのＩＳが五十分後に近くに通過するからそいつを墜とせってワケですか。随分リアルな臨海学校ですね」

「え、えぇっ！？」

テンテー、話を聞いていなかった子がいまーす。
にしても銀の福音か……なんか黒奏といい感じに被ってないか？ぜひ串刺しにしてやりたいね。俺の旋律の一部にしてやろうか。

「一弥……悪い顔してるよ……」

「おっと、気のせいだ」

「今、『おっと』って言ったよね」

「とにかく、そいつを墜とすっていうなら連携が必須になってきますね」

シャルがジト目で見てくるけど気にしない。

「慌てるな、音無。教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

まあそうだろうな。バカにしているワケじゃないが、訓練機じゃどうしても限界があるし。二対一で訓練機に負けたヤツもいるがな。

「では、作戦会議を始める。意見のある者は挙手するように」

「はい」

はい、セシリアちゃん。

「目標ＩＳの詳細なスペックデータを要求します」

「分かった。だが、情報が漏洩した場合、査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられるからな」

「了解しました」

あのセシリアが真面目だ。写メ撮りてぇかも。不謹慎ですね。俺も久々にスイッチ入れるとしよう。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのＩＳと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですわね」

「いや、これは無差別な分セシリアのＩＳよりタチ悪いぜ。チッ、

束縛しても意味がなさそうだな……」

「攻撃と機動の両方が特化した機体ね。厄介だわ。しかも、スペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから向こうの方が有利……」

「この特殊武装がくせ者って感じはするね。ちょうど本国からリヴァイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルも分からんが……『跳弾加速』などが使えるとすればこの上なく厄介だ。偵察は行えないのですか？」とりあえず一夏くん。その頭の上で飛び交うクエスチョンマークを引っ込めようか。

「無理だな。この機体は今も超音速飛行を続けている。最高速度は時速二四五〇キロを超えるとある。アプローチは一回が限界だろう」

「なんだ……それ早く言ってくださいよ。行くヤツ決まってるんじゃないですか」

「そうですね……今のところ、一撃必殺の攻撃力を持っているのは一人だけですし……」

全員で一夏を見る。さ、逝ってこい一夏！

「お、俺！？」

他に誰がいるんだよ。

「一夏、アンタの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね。問題は――」

「どうやって一夏を運ぶか、だね。全力の一撃じゃないと難しいだろうから」

「目標に追いつける速度のＩＳでなければいけないな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

「おい、一夏」

オロオロしてる一夏を呼ぶ。正直うざったい。

「腹括れ。今頃ダダこねるぐれぇなら今すぐ家に帰れ。邪魔だ」

そう言った。今更何をうろたえる必要がある。俺達はこの道を選んだんだ。それくらいの覚悟がなくてどうする。

それ以前の問題だ――俺達は、男なんだから。

「……ああ、分かった。俺がやってみせる」

「当たり前だ、バカ」

グシグシと一夏の頭を掻き乱す。やればできるじゃねぇかお子ちゃまが。

「それでは、作戦の具体的な内容に入る。現在、最高速度が出せる機体はどれだ？」

「それなら、ちょうどイギリスから強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られて来ていますわ。超高感度ハイパーセンサーもついています」

パッケージとは、まあ機体の性能と性質を大きく変更するものだ。単純な武器ではない。今のところ専用機持ち全員がセミカスタムの標準装備だけど。シャルだけはフルカスタムの標準装備だか。紛ら

わしいな、全く。

「ちょっと待ったぁっ！！」

「んじゃセシリアが適任ですね。作戦実行といきますか」

「か、かずりん！？空気！？私は空気扱いなのぉ！？束ちゃんの心の余命はあと三日だよ！！」

「ああ……なにこの脳に直接くるダメージ……正直死ねる」

「……束、出ていけ」

俺と同じく頭を押さえる千冬さん。こんなところで気が合っても全くちっとも嬉しくない。

「聞いて聞いて！ここは断・然！紅椿の出番なんだよっ！」

「なに？」

「説明しましょ～そうしましょ～。紅椿にはね、展開装甲というこ

の束さんが作った第四世代型ＩＳの装備なのさあ！」

「真面目な話なのに全く聞く気になれないのは俺が悪いんですかね」

誰か教えて。

「うん？黒奏にも一応使用されてるよ？まだ出てないけどにゃん！」

「「「「「え！？」」」」」

「せんせー、猫が紛れ込んできたので焼却炉に捨ててきますねー」

「待って待ってぇ～！なにその『眠いから寝ますね』みたいな軽いノリ！人命は大切にしようよ！」

「束、お前はきっと疲れてるんだ。沸騰した温泉に頭のてっぺんまで浸かって千数えような？」

「エグいよ！今の言葉で死に至る箇所が二個もあるよぅ！束ちゃん感じちゃうじゃないかぁ！！」

「千冬さん。惨殺許可を」

「落ち着け、音無。優先事項は銀の福音だ」

うわぁ……押し付けられた……

「話を戻すぞ。束、紅椿の調整にはどれくらい時間がかかる？」

「お、織斑先生！？」

「落ち着けセシリア。ついでに諦めちまえ。これ以上アイツに付き合いたくねぇ……」

「一弥さん、でも！」

「それに、あらゆる場面で対処できるヤツが適任だろ？連れてってはい終わりじゃないんだからな」

「うう……」

「ちなみに紅椿の調整時間は七分あれば余裕だっちゃ☆」

今ほど殺意が沸いたのは初めてだ。

「では、本作戦は織斑・篠ノ之の両者による目的の撃墜に決定とする。作戦開始は３０分後だ。ただちに準備にかかれ」

パンッ！と千冬さんが手を叩くのを始めに、教師や専用機持ちがバックアップに必要な機材を運ぶ。俺も手伝わないとな。

「シャル、重いだろ、貸せ。どこに持ってくんだ」

「それはあっちのケーブルに繋いでね。ありがと」

「どういたしまして」

「かずりん、かずりん！」

「鈴、他には？」

「え、えっと……この荷物運んでくれる？」

「ねーねーかずりんってばぁ！」

「次はこのゴミを捨てに行くか。おい粗大生ゴミ。焼却と埋め立てとどっちがいい？」

「リアルだよ！なんかほんとにゴミ扱いだよ！そ、それよりデータを紅椿に入れるからちょっとこっち来てくだちゃい！」

「ああ？データ？」

「黒奏はスーパーウルトラ耐久型だからね～。データを紅椿に繋ぐのさぁ！」

「チッ、めんどくせぇ……」

言って黒奏を呼び出す。腕だけ。

「カチッとな。それじゃあ始めますかねぇぐっしっし」

そこから束は色々と紅椿を弄くり回し、おそらく七分以内で終わらせた。計ってないけど。

「おい一夏。箒に見とれてないで高速戦闘のレクチャーでもしてもらってこい」

「あ、ああ。分かった」

さて……

「箒。ニヤけてないで少し話をしようか」

「な、なっ！？に、ニヤけてなどいないっ！！」

「分かった分かった。それで――」

俺はケーブルに繋がれたまま、俺の考えている心配を口にする。

「お前、調子に乗ってるだろ」

「……っ！？」

「図星か」

「ち、違うっ！」

「早くこのＩＳで戦いたい、どうせそんなことだろ？まあ気持ちは分かるな」

だけど。俺はそう続ける。

「お前は一人で戦ってる」

「ひ、一人……？」

「自分のパートナーを意識しろってこった」

「パートナー……一夏のことか？」

「バカ」

なっ、なにぃ！？と言う箒を遮り、言葉を紡ぐ。こいつには解ってほしいから。

「お前の姉貴が作ってくれたＩＳだろうが、紅椿は。こいつが一番のパートナーだろ」

紅椿。オーバーキルもいいところのＩＳ。それを箒は試したいと思っているんだろう。

「自分のパートナーを試すな。信じろ。最高のパートナーだろうが」

「……」

「ＩＳはただの道具じゃないんだ。もっとＩＳと一体になれ」

「……ああ」

分かってくれただろうか。正直こういうのは苦手だ。恥ずいし、めんどくせぇし。

「ほいっ、終わりぃっ！いやー、かずりんカッコよかったねん！束さんは感動してボロボロ泣いちゃったよびぇ～ん！！」

「せんせーミキサーあります？人間一人入るくらいの」

「人肉ジュース！？グロいよ！しかもめちゃくちゃ痛そうだよそれ！！ガリガリ削れそう！ガリガリ君だよ！」

「天井のシミでも数えたらすぐ終わるぞ？」

「なにその脅し文句！しかもフタ閉まってるから天井見れないじゃん！インチキだぁっ！！」

「え……ツッコむところそこなんですか……？」

「山田せんせ、バカと天才は紙一重ですから。頭のネジが二、三百本ふっ飛んでるんですよ」

「そうだよえっへん！って単位がおかしいよ！そんなに外れたらバラバラじゃん！分解したてのロボットだロボ！」

うるさい紙一重のバカ「天才だよ！！」は放っといてそろそろ本格的に気合い入れないとな。

俺は参加するワケじゃないが、こういうのは気持ちの問題だからな。

☆　★　☆

真夏の日は高い。が、今はその日光が厚い雲に遮られているせいでいつもより薄暗い感じだ。

砂浜。一夏と箒はそこから銀の福音に近づき、アプローチを仕掛ける。俺達にできることはない。

「……」

「……一弥？どうしたの？」

今、俺はＩＳスーツの上に浴衣を着込み、空を見上げている。さっきの部屋から少し離れた場所にいる。

「ん？シャル……と、なんだよ、全員いるのか。いや、少し荒れそうだなって思っただけだ」

「ふむ……確かに少し降りそうだが……降ってくる前に終わるだろう」

「てかアンタいつの間に着替えたのよ……」

「そこはスルースキルを使っとけ」

「一弥さん、何か心配事でもありますの？」

「いや、ないな。アイツならパパッと終わらせて帰ってくるだろうさ」

「でも、そうは見えないよ？」

鋭いヤツめ……

「俺がいけないのが不満なだけだ。それに、太陽が出てないのがもっと続けばいいのになーとかな」

「どんだけ苦手なのよアンタ……」

「もはや吸血鬼の領域に足を踏み入れてますわね」

「うるせっ」下らない言い合いを続け、さっきの部屋に戻る。確かに、ザワザワと胸が疼く。勘に頼るのは癪だし、こいつらを不安にさせるようなことを言っても仕方がない。

さっきの部屋に戻ると、騒然としていた。バタバタと、かなり落ち着きがない。そんな俺達に、千冬さんが近づき――

「……作戦は失敗だ。すぐに救助に向かう」

苦い顔で、そう言った。

◇

「……」

旅館の一室。壁の時計は七時を指している。ベッドに横たわる一夏は、もう六時間は目覚めないままだった。

今、教師達は次の作戦を練っている。このままでは被害が多岐に及ぶ。

箒は、その傍らに控え、そっと一夏の頬を撫でた。

（……悔しい）

あの時。密漁船を庇い、絶好の機会を逃してしまった。それはいい。一夏の判断は合っている。だが。

（そんな偶然に、一夏は……っ！）

箒は立ち上がる。納得いかない。運も実力のうち、という言葉があるが、そんなもので納得できるはずがない。

（次は、私達の番だ）

私が、一夏を守る。

そして、襖が開けられる。鈴とラウラだ。

「出たぞ。ここから３０キロ離れた沖合上空に目標を確認した」

「で、アンタの方はどうなの？準備できてんの？」

「当然だ。問題点など見当たらない。他はどうなんだ？」

「ああ、それなら――」

ラウラがドアの方へ視線をやると、すぐにドアは開かれた。

「たった今完了しましたわ」

「準備オッケーだよ。いつでもいける」

「よし。後は――」

「準備できたな？」

セシリア、シャルロット、一弥と部屋に入る。専用機持ちが全員揃った。

「んじゃ、リーダー。号令よろしくね」

「リーダーは一夏だろ？俺は司令塔だ。リーダーってガラじゃない」

頼もしい仲間達。

「さあ、リベンジマッチだ。作戦会議といくぜ。確実に墜とすぞ」

「「「「「了解！！」」」」」

次はない。覚悟をしておけ、銀の福音！！

第二十五話　銀の福音（後書き）

五秒で真面目に書く宣言を断念しました。つ、次こそは……！！

第二十六話　嵐、大激戦

ザァァァァ――ッ！

「……」

雨が降りしきり、風が暴れ、海は唸っている。大嵐真っ只中。海上２００メートル地点。そこで静止している『銀の福音』は、まるで胎児のように膝を抱え込み、丸めた体を守るように頭部から伸びた翼が包む。

――――――？

不意に、福音が顔を上げる。次の瞬間、超音速で飛来した砲弾が頭部を直撃し、大爆発を起こした。

「初弾命中。続けて砲撃を行う！」

五キロ離れた場所に浮かんでいる、ラウラの駆るＩＳ『シュヴァルツェア・レーゲン』は、福音が反撃に移るよりも早く次弾を発射した。その姿は通常装備と大きく異なり、八〇口径レールカノン《ブリッツ》を二門、左右それぞれの肩に装備をしている。

（敵機まで四千……三千……くっ、予想より速い！）

あっという間に距離が千を切る。その間も砲撃を続けるものの、福音が放つエネルギー弾が半数以上を撃ち落としている。

そして三百メートルを切ったところから、さらに加速。ラウラに右手を伸ばす。

避けられない。しかし、ラウラはニヤリ、と口元を歪めた。

「――――Ｎｅｘｔ（続け）！！」

伸ばした腕が、体が大きく傾く。福音の機体に粒子の雨が降り注いだ。

「月の出てない夜には背後に注意、ってな」

粒子散弾銃《天凪》『そらなぎ』による百七発の粒子の雨が福音の体勢を大きく揺らがす。その銃は決して大きなダメージは与えることができない。しかし、それを補う利点があった。

それは、『衝撃波』。連携とは、次へ次へ攻撃を繋ぐもの。そこに切れ目があっては敵に暇を与える。この銃はその切れ目の補うため

に試行錯誤を繰り返したものだった。

かくして、弾雨による衝撃波に晒された福音は、流されるように、完全に体勢を崩した。

「――――Ｎｅｘｔ（繋げろよ？）」

ドォンッ！

次は青一色の機体、ブルー・ティアーズが、ステルスモードからの強襲を行った。六機のビットはスラスターとして腰部に接続されており、手にしている大型ＢＴレーザーライフル《スターダスト・シューター》は、その全長が二メートル以上もあり、ビットを犠牲にしている分の火力を補っていた。

『敵機Ｂ、Ｃを認識。排除行動へ移る』

「――――Ｎｅｘｔ（次ですわ）！！」

「了解」

福音が体勢を整え、反撃に出るよりも速く、ステルスモードによって背後に迫ったシャルが、ショットガン二丁による射撃を開始する。

《天凪》ほどではないにせよ、体勢を崩した福音だったが、それも一瞬のことですぐさま四機目――シャルに対して《銀の鐘》『シルバー・ベル』による反撃に転じた。

「おっと。悪いけど、この『ガーデン・カーテン』はそう簡単には墜ちないよ」

実体シールドとエネルギーシールドの両方によって福音の弾雨を防ぐ。その間にも、得意の『高速切替』（ラピッド・スイッチ）によってアサルトカノンを呼び出し、タイミングを計って反撃を行う。

それに加え、高速機動射撃を続けるセシリアと、距離を置いての砲撃を再開するラウラ。さらに粒子散弾銃の再装填を終えた一弥が射撃のタイミングを見計らう。

体勢を崩され、さらに三方向からの射撃に、福音はじわじわと消耗を始める。

『……優先順位を変更。現空域からの離脱を最優先に』

全方向に射撃を展開した福音は、次の瞬間に全スラスターを開き、逃走を試みる。

「させるかぁっ！」

海面が膨れあがり、そして爆ぜた。

飛び出してきたのは深紅の機体『紅椿』と、その背中に乗った『甲龍』。

「離脱する前に叩き落とす！」

福音へ突撃する紅椿。その背中から飛び降りた鈴は、両肩の衝撃砲を開き、さらに増設した二つの砲口、計四門の熱殻拡散衝撃砲『崩山』で一斉に砲撃を行った。

『《銀の鐘》最大稼動――――開始』

その直撃を受けてなお、機能を停止させない銀の福音が、両腕を左右いっぱいに広げ、翼を大きく展開し、刹那。眩いほどのエネルギー弾の一斉掃射が始まった。

「くっ！」

「箒！僕の後ろに！」

前回の福音戦。紅椿はエネルギー切れを引き起こし、敗れた。それ

を踏まえ、防御をシャルに任せ、エネルギー切れを防ぐように設定し直したのだ。

「だけど……結構キツいかも……！」

異常なまでの連射を受け、ついに実体シールドが一枚、完全に破壊される。

「ラウラとセシリアは遠距離から射撃を続けろ！足を止めて鈴は再度衝撃砲を使え！俺が囮になる！箒はトドメを刺せ！シャルはいつでも防御ができるようにしとけよっ！！」

「任せろ！」

「行きますわよっ！」

ラウラとセシリアがそれぞれ左右から射撃を行う。その隙にシャルは後退し、距離を取る。二人の射撃に、福音は左右からの射撃に足止めを食らっていた。

「足が止まればこっちのもんよ！」

「援護すんぜ！」

俺は真上から、鈴は遅れて真下から福音に近づく。桜閣を手に連射で注意を引く。

だが、予想に反し福音は俺の方ではなく、全方向に射撃を展開した。俺はシャルの隣にいたが、鈴は違う。ラウラのように距離は離れてないし、セシリアのように高機動ではない。

しかし、エネルギー弾を全身に浴びながら、鈴も同じく拡散衝撃砲の弾雨を降らせ、互いに深いダメージを負いながら、福音の片翼を奪った。

「鈴！無理すんじゃねぇ！セシリア！鈴を連れて離れてろ！」

「はぁっ、はぁっ……！これで――――ぐっ！」

「鈴さん！しっかりなさいまし！」

「箒ぃっ！トドメだ！」

「よくも鈴を――――あぁぁぁっ！！」

箒は両手に刀を持ち、福音へ斬りかかる。その急加速に一瞬反応を失った福音の右肩を、刃が斬り裂いた。

（もらった――――！！）

そう思った刹那、福音は左右両方の箒の刀を手のひらで握りしめる。

「なっ！？」

刀身から放出されるエネルギーに装甲を焦がしながら、それでもその手は放さない。そして、両腕を最大に広げる。当然、刀を握る箒も同じく両手を広げることになり、無防備な箒に福音が砲口を向けた、その瞬間。衝撃波が福音を襲った。見ると、一弥が《天凪》を手にしていた。

「決めてこい」

「っ！感謝するぞ一弥ぁっ！」

体勢を整えさせることなく、瞬時に肉薄した箒が、残り一つの翼を斬り裂く。

ついに両方の翼を失った福音は、崩れるように海面へ墜ちていった。

「はぁっ、はっ、はっ……」

「無事か！？」

珍しく慌てた様子のラウラの声を聞きながら、箒は乱れた呼吸を落ち着けている。とりあえず無事みたいだな。

「私は大丈夫だ。それより福音は――――」

「ああ、墜落した。俺達の――――」

勝ちだ、と続けようとした俺の台詞を遮り、海面が光の球によって吹き飛んだ。

「なにっ！？」

球状に蒸発した海の中心に、青い雷を纏った『銀の福音』が自らを抱くようにうずくまっている。

「これは……一体なにが……？」

「……っ！！最悪なタイミングだなクソがっ！！《第二形態移行》『セカンド・シフト』だ！！第二ラウンド始まんぞっ！！」

俺が叫んだ瞬間、その声に反応したかのように福音が顔を上げる。そこには、確かな敵意があった。こいつはヤバい……！

『キアアアアア……！！』

獣の咆哮。その言葉がぴったりの声を発した福音は、ラウラに飛びかかった。

「なっ……！？」

あまりの速さに、その動きに反応できず、ラウラは足を掴まれる。そして、切断された頭部から、あれは、エネルギーの……翼かっ！？くっ……！

「ラウラを放せぇっ！」

シャルが近接ブレードに切り替え、突撃をする。が、その刃は空いた手によって受け止められる。バカ野郎が……っ！

「よせ、シャルロット！こいつは――――なっ！？」

ガガギィンッ！

上空から三本の鎖――――雨簪を撃ち出し、一本が福音のシールドエネルギーを穿ち、もう一本がラウラを掴んでいた手に刺さり、最後の一本がシャルの近接ブレードを叩き折った。

「っらぁぁぁっ！」

俺はその雨簪を引き戻し、福音を引き寄せる。俺の周りには雨簪が、両手には剣が握られていた。

玉射式斬裂粒子剣《緋焔》『あけほむら』、《氷如月》『ひさらぎ』。

簪のように実体していない、一夏と同じ粒子の剣。しかし、その異常なまでの粒子が圧縮された剣は、粒子特有の淡い光のような感じは全く異なり、あたかも実体があるかのような、細く長い、細剣（レイピア）のような形状をしている。

引き寄せた福音に緋焔と氷如月による斬撃を見舞う。その軌跡に小さな粒子の玉がふわりと浮かび、小さな爆発が生まれる。福音はその剣を掴もうと、剣身を握るが、これは粒子剣。実体がないものには触れることを許さない。

「全員待避しろっ！こいつはヤバい！！」

「なっ……！？」

そう指示を出す間にも、俺は近距離戦闘を続けている。福音の頭部から生えた翼は、俺を捕まえようと迫ってくる。その速さは尋常ではなく、『瞬時加速』、それでもダメな場合は『跳弾加速』で逃げ回る。

その間にも反撃の手は緩めない。雨篝で福音のシールドエネルギーを穿ちまくる。両手の二本の剣も同じく振るい、緋と蒼の光の奔流を生み出す。

完全な超速消耗戦。だが、こっちの耐久力、燃費の効率も甘く見てもらっては困る。このまま、このまま集中を切らさなければ――！

バンッ！

「ぐっ！？」

そう思った瞬間だった。福音の胸部から、腹部から、背部から、装甲が卵の殻のようにひび割れ、小型のエネルギー翼が生えてくる。その衝撃で俺が押され、距離ができてしまった。

「ヤバ――――！！」

叫ぶ間もなく、福音は俺に突撃してくる。瞬時加速で上空に逃れるが、磁石に引かれるようにくっついてきて、ヤバい、これは――――！！

『キャアアアアア！！』

「がっ、ぐあああぁぁぁぁっ！！」

エネルギー翼が俺の体を包み込むように抱き、エネルギー弾雨を零距離で食らう。

全身をズタズタにされた俺は、乱気流に流され――――意識を、手放した。

「か……一弥ぁぁぁぁぁっ！！」

悲鳴のようなシャルの声が、最後に耳に残った。

◇

ざあ、ざあん……。

さざ波の音を聞きながら、俺は流木に腰かけ、砂浜にいる女の子を見ている。その子が歌う歌は、踊っている踊りは、なぜか俺をひどく安心させる。

「……あれ……？」

ところが、気がつくと少女の歌は終わっていた。

その女の子はいつの間にか俺の前に立って、問い掛ける。

「どうして、力が欲しいの？」

その女の子は白いワンピースを着ている。顔は……よく、分からない。でも、無邪気そうに、純粋に、俺に問い掛ける。

「仲間を守るため、かな」

「仲間？」

そうだ。ここにいる場合じゃない。俺は――――

「行かなきゃ、ね？」

「……ああ」

そして、世界が光り、夢が終わる。

◇

暗い、暗い、街。

漆黒が空を包み、あるはずの建物も見えない。いや、それ以前に街かどうかも怪しい。

……？

声……？いや、これは、歌……？声のする方へ進むと、女の子がいた。黒いワンピースを着て、楽しそうに踊っている。

俺はただ、それを見るだけで楽しくて。

それを聞くだけで、心が穏やかになれた。

……だけど、な

「俺を、戻してくれないか？」

女の子は、歌をやめてこっちを向く。何も知らない、無邪気な顔。無垢な瞳。

「ここにいる、場合じゃないんだ」

「どうして？」

なぜ――その言葉の答えは、考える必要はない。

「仲間の、力になりたいからさ」

力になる。守るんじゃない。それは、アイツの仕事だから。俺は、敵を貫く矛に。アイツ――一夏は、友を守る盾に。

「……うそ」

「……え？」

「貴方も、守りたい人がいるよね？」

「――――――」

「力を、欲して」

――そうだ。

「私を、手にして」

――俺も

「さあ、いってらっしゃい」

――アイツを、守りたい。

そして、世界を砕き、夢を終える。

◇

殲滅。その言葉通り、一弥が墜とされて、箒達はなす術はなかった。一方的な暴虐。撃ち、墜とし、排除する。すでに戦闘が不可能な状態の鈴に加え、ラウラ、セシリアと墜とされていく。

「くっ……うぁぁっ……！」

福音の手は、箒の首を絞め、シャルの足を掴んでいた。

「うっ……！よくも……っ、みんなをっ、一弥をっ！」

ショットガンをコール、連射――――の前に、小さなエネルギー翼がシャルを包み、爆発する。

「うぁぁぁぁっ！！」

「シャルロット！！この……っ！！」

そして、シャルに第二波を浴びせようとした時――――それは起きた。

バシィッッッ！！！！

『！？』

突然の爆音に、福音はシャルへの射撃を中止、その手を放す。

そして次の瞬間。砲撃を受けた福音が吹き飛んだ。

（何が……何が起きたの……！？）

「シャルロット……！無事か……！？」

「大丈、夫……それより、一体何が――――」

言葉を続ける前にシャルはそれを見つけた。

「あ……あっ、あぁ……っ」

福音の時のように、雲を球状に掻き分け、月光が落ちる。その中心に――――第二形態移行を終え、単一仕様能力を覚醒させた――――音無一弥が、浮かんでいた。

◇

雪月花。日本の四季を代表する風物詩。その三つを象徴する機体が、篠ノ之束によって生み出された。

『雪』の名を冠し、絶対の攻撃力を持った機体――『白式』。
『月』の名を与え、無二の耐久力を備えた機体――『黒奏』。
『花』の名を遂げ、唯一の回復力を乗せた機体――『紅椿』。

そして、『月』の力が覚醒し、その耐久力は、無双の速さに変わる。

（……待たせたな）

黒奏、第二形態『月下閃影』。月の下に閃く影。機体ならではの厚い装甲は見る影もなく、しなやかな、無駄を一切省いたような形状をしている。

そして、切り離された装甲はそのまま武器へと姿を変える。雨篠。当初八本、という数に加え、さらに三本が武器として変形し、十一本となっていた。

その雨篠自体にも変化があった。先端のナイフのような刃物はさらに長く、鋭利なものへと、鎖の部分には稲妻状の刃が突き出し、凶悪な印象を受ける。

《怒雷》『いかづち』。その名を、その身に新たに宿し、獲物に見せつけるかのように、主人に忠誠を誓うかのように、機体の周りに浮かんでいる。

さらに、黒奏の単一仕様能力が、解放される。

――稼動率が１００％を超えました。これより、当ＩＳの単一仕様能力《朧月夜》『おぼろつくよ』を起動、使役に移ります。

抑揚のない、コンピュータの声が響く。黒奏の単一仕様能力。それは、稼動率の限界突破。無限への挑戦だった。

「シャル、無事か？」

「一弥……っ！よかった……無事、で……！」

「ちょっと待ってろ。今、すぐ終わらせるからな」

一夏の方を見る。箒を抱え、何か渡しているように見えるが、それもすぐのことで、こっちに向かってくる。

「気が合うな。第二形態移行が同じタイミングとはな」

「一弥、やるぞ」

「ああ、任せとけ」

一夏が福音に突撃する。それに対応し、福音はエネルギー弾をばらまくが、一夏の左手に持つ新たな武器――《雪羅》が、盾のように展開し、福音の弾雨を完全に防ぐ。

ギャリギャリギャリギャリッッ！！

『キアアアア――ッ！！』

背後に回り、怒雷を撃ち出す。その速さは瞬く間に福音に迫り、その機体を貫き、削る。連続する痛みのせいか、福音が声を上げ、こちらに猛スピードで近づくが、それに勝る速さで距離を取る。

俺は《緋焔》と《氷如月》をコール、両の手に握る。二刀。一夏に目配せし、左右から襲撃を仕掛ける。

『キィィアアアアッッ！！』

福音が寄声を上げ、全方向にエネルギー弾雨が降り注ぐ。一夏は雪羅で無効化に、俺は怒雷で全て斬り落とす。――そして、福音への道が拓けた。

「これで、借りは返したからな」

「月夜に沈め。命を散らせてな」

交錯した斬撃は、福音を容赦なく斬り裂き、福音は、『銀の福音』は――――機能を停止した。

「一弥っ！」

「ああ、終わらせた」

抱き着くシャルを受け止め、空を仰ぐ。

嵐は過ぎた。満天の星と、煌々と輝く月が、俺達の勝利を祝福するかのように、天空に散りばめられていた。

第二十六話　嵐、大激戦（後書き）

はい、ご覧の通り、一弥の武器の名前は日本語で安定でした

第二十七話　月光彩る星空に

「作戦完了――――と言いたいところだが、お前達は独自行動により重大な違反を犯した。帰ったらすぐ反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」

『……はい』

戦士達の帰還は、それはそれは冷たいものだった。

大体懲罰用ってなんだ。俺達は囚人じゃないんだぞ。そこんところ分かってますか千冬さん？そしてそれは何種類あるんですか？

そして身体中が痛いのに正座ってなんだ。どこの世界に怪我人に正座させて説教するヤツがいるんだ。

時間的に今は大体十時ってところだろうか。もう眠くて仕方ない。さっきなんかつい気を抜いて欠伸をしてしまい、出席簿君と久しぶりの再会を果たした。センセ、頭も切ってるんですよ？

「あ、あの、織斑先生。もうそろそろその辺で……け、怪我人もいますし、ね？」

「ふん……」

山田先生が女神に見えるのは俺だけじゃないだろう。今度からは敬語を使わせてもらおう。気を抜いた時にでも。

「じ、じゃあ服を脱いで全身見せてくださいね。――――あっ！だ、男女別ですよ！分かってますか織斑君！」

「なんで俺だけ！？一弥もカウントしてくださいよ！」

脱いで、って山田先生が言った途端にそれとなく自分の身体を隠したのが印象的だったな。

「……」

「……あの、その殺さんばかりの睨みをやめてもらえると……」

心臓停めてきそうな感じがしますよ、千冬さん。

「……しかしまあ、よくやった。全員、よく無事で帰ってきたな」

「え？あ……」

「んじゃ、今日は打ち上げだな。ラウラ。今度は日本酒いってみるか」

「貴様殺す気か！？死んでも一夏が頼んでも飲まないからな！」

順番おかしくね？

「全くお前達は……」

仕方ないな、と言わんばかりに笑う千冬さん。とりあえず心の中で感謝しとこう。

『……』

っと。女子が睨んでるし、そろそろ出てくか。一夏は気づいてないから放置でいいな。

「あれ、一弥どこ行くんだ？」

「トイレ？」

疑問形で返しといた。そして部屋を出た瞬間――――

『とっとと出てけっ！！』

専用機持ち達の大合唱。息もピッタリだ。そして慌てて出てくる一夏。

「もっとゆっくりしてこいよ」

「お前なぁ……まあいいや……今更だし……」

多分一夏はあの四人の誰とくっついても尻に敷かれると思う。

その後、別の部屋で手当をしてもらったのだが、驚くことに俺達の傷はすでに塞がりかけていた。第二形態移行がもたらしたのかは分からないが、別にどうでもいいか。

「なあ、一弥」

「ん？なんだ」

「俺は……仲間を、守れたよな」

「はっ……いつもそうだろ？いつものことだ」

「そうなのか？」

「そうなんだよ」

「でも……一弥も守れただろ？」

「……だといいけどな。で、これからどうすんだ。もう寝るのか？」

「んー……ちょっと海に行って泳いでこようかと思うんだけど……」

「そうか。行ってこい」

「待てぃ。そこは『俺も付き合うぜ』みたいな台詞のとこだろ！？スルースキル全開じゃないか！！」

「うるせーこっちは疲れてんだこの体力バカ！テメェなんか調子乗

って足攣って溺れて箒達に人工呼吸されてこい！！」

「なななんでそうなるんだこの変態バカ！そんなんだから体力つかないんだ虚弱バカ！！」

「言ったなテメェ！？言っとくが昨日の無理矢理海に連行されたことまだ許してねぇんだからな！！むしろ溺れてこい！女の海に溺れてこい！！」

「言ってる意味が分からん！」

「はあ……お前って、一夏だよな……」

「なあ一弥。俺の名前を罵倒の類の言葉に設定してないか？」

「気のせいだろ？海でもどこでも行ってこいよ」

「ああ……。お疲れ様」

「お疲れさん、英雄」

ハイタッチを交わし、それぞれ真逆の方へ歩く。さて、俺は――

☆　★　☆

「見つけたよ、一弥」

「ん……シャルか」

旅館の屋根の上。そこに寝転び、俺は月を見ていた。満月……に見える。昨日も満月だったし……どっちが満月なんだろうか。よく分からん。

「えいっ」

「あ、こら。返せ眼鏡」

「うわわ、結構強いね、この眼鏡」

「ったく……まあいいか」

「それじゃ、失礼して……っと」

「おい、濡れるぞ」

さっきまで豪雨だったからな。屋根も乾くはずがない。俺は別に構わないが……

「大丈夫だよ、少しくらい。それより、眼鏡外すと何も見えないの？」

「おま……一夏みたいな質問するなよ……ボヤける程度だ」

「そっか。一弥って髪は切らないの？前髪、邪魔じゃないかな？」

「もう慣れたし、邪魔なときはゴムで縛ればいいしな」

「ふむふむ。一弥って、一夏の近くに住んでるの？」

「ああ、小中学校が一緒なくらいだからな」

「ふーん」

「……なんだいきなり。質問殺しってヤツか？」

右手に触れたものは殺すってあれか。

「殺すわけじゃなくて……もっと、一弥のことを知りたいなー……って」

「なんだ急に」

「うーん……わかんない」

それっきり、月を見たまま何も話さなくなる。本当に綺麗な空だ。月だけでなく、星も、雲も、全てが美しく見える。

「あっ！一弥、またお酒飲んでるっ！」

「月見酒ってヤツだ。今日くらいいいだろ？」

「ダメだってば！犯罪なんだよ？」

盗聴してたヤツに言われたくねぇ……とか思ったが、敢えて言わないことにした。俺は空気を読める人間だからな。

「もー！没収だよ！」

「それは勘弁だ」

「あっ、こらっ！いい加減に――ひゃあっ！？」

濡れた屋根は滑りやすいらしく、シャルが俺の上に横に覆い被さってくる。うわ。軽いなこいつ……何食ってんだ？

「あ、あぅぅ……鼻打ったぁ……」

「いつでも悪者が勝つんだぜ？」

「この瞬間、一弥は世界を敵に回したよ……あぅぅ」

クイッと酒を煽る。なんか中年みたいだな……いや、気のせいだと信じよう。

「……ふあっ！？」

「うぐふっ！」

いきなりシャルが俺の腹に膝をついて上体を起こす。さ、流石にそれはキツいんですが……。

「わ、わっ、わぁっ！！」

「って危ねぇっ。何遊んでんだ。落ちるだろが」

バランスを崩したシャルの手を取り、引っ張る。ほんと俺の周りにいるヤツらは楽しそうだよな……一人でも。

「あ、ありがと、一弥」

「大人しくしてろよ？」

また座り直し、今度は海を見る。黒。だが、その色は包み込むような優しさを持っているように思えた。

「……今日、一弥、すごかったね」

「すごかっただろ」

「でも」

ぐいいっ、と顔を近づけてくるシャル。さ、流石に近くないですか？

「『お前らは逃げろ』みたいなこと、言ったよね？」

「あ？あ、あー。ああ」

総員待避、だったかな。それがどうしたんだ？

「あんなこと、もう絶対言わないで。あの時、自分が囮になろうとしてたでしょ」

「い、いや、ちゃんと勝機はあって……」

「か・ず・や」

「うぐ……」

「一弥が……こんなこと言いたくないし、想像したくもないけど……死んじゃったら……僕は悲しいよ」

「う……」

「みんなだってそう。だから、もう二度とあんなことしないで。一弥がいたから……僕はこの学園に残ろうって思ったんだよ……？いなくなっちゃ、やだよ……」

「……分かっ、た。約束する。もう無理はしない」

「……ほんと？」

眼鏡取られてるから分かりにくいが、そんな涙目で言われたら断れないだろうが……。

「ああ。まだ死にたくないしな」

「……よかった」

静かに笑うシャルは、本当に可愛くて、なにより美しかった。

『ぎゃぁ――――……！』

「ん？なんだ？」

声のした方を見ると……一夏さんが箒さんをお姫様抱っこして三人のＩＳから全力で逃げていた。うん……学習しようよ一夏さんや……。

「ったく……さ、そろそろ寝ようぜ。疲れたし、いい具合に興奮も冷めたしな」

ここに来たのは目が覚めてしまったからだ。説教の時は眠かったはずなのに、あの時のことを思い出したら目が覚めてしまった。

「え、えぇぇっ!?こ、興奮って、何を言ってるの一弥!?」

「お前こそ何言ってやがる!?福音との戦闘のこと思い出しただけだ!」

「え、あ、そ、そうだよね!あは、あははは……」

「はあ……ほら、乗れ。降りるぞ」

「あ、うん」

ＩＳを足だけ起動し、シャルをおぶってゆっくり屋根から降りる。

「……でも、ね。今日の一弥は、すごく……格好良かった、かな……」

後ろでシャルが呟く。本当……可愛いヤツめ。

今日は、とてもいい夢が見れそうな――――そんな気がした。

☆　★　☆

「生き残ったぞぉ――――っ！！」

翌朝十時。全員がクラス別のバスに乗り込み、学園に帰還する。これでこの地獄からもおさらばだぜ！

「あ～……」

「なんだゾンビみたいな顔しやがって。昨晩海に出て箒と会ってたけどなんかいいムードになってそれを他の三人に見つかって追いかけ回されたあげく千冬さんに旅館抜け出したのがバレてまたありがたい説教を聞かされてやっと寝れたのが四時でもう死ねる、って感じだぞ？」

「知ってるなら止めろよっ！？悪魔かお前はっ！！……うぐ……喉が……」

まさしく立場逆転ってヤツか。

「すまん……誰か飲み物持ってないか……？」

「ツバでも飲んでいろ」ラウラ

「知りませんわ」セシリア

「ふ……ふんっ！」箒

自業自得です。お疲れ様です。

「ごめんね、今は持ってないんだ」

「ははっ、シャルが渡してどうするんだ？」

「ふふっ、それもそうだね」

「シャルロットまで！？俺に味方はいないのか！？」

いねーよ。ってかむしろ全員味方か全員敵かのどっちかだろ。

そんな感じでバスは出発。鈴もいればオールスター勢揃いだったんだが……惜しかったな。

☆　★　☆

「ほら、チェックっと」

「な、なにぃ？」

バスの中、俺は通路を挟んで補助席を台にラウラとチェスをしている。

「こ、これなら！」

「お。クイーンゲット。悪いな」

「うぐぅぅ……」

「なあ、一夏が気になるならさっさと行ったらどうだ？」

ガッシャーン

チェス盤に頭突きすんなよ。ひっくり返っただろ。

「な、な、なにを……」

「まあ落ち着け。チェス盤をひっくり返して考えるのだよ。今、一夏は疲れてる上にみんなから冷たくされて疲労の限りを尽くしている。そこにお前がその飲み物を持って優しくしてやれば一夏も揺らぐんじゃないのか？」

「む、むう……しかし……」

☆　★　☆

「角ゲットっと」

「あ、ああっ！」

その後、俺はセシリアとリバーシをしていた。

「こうですわ！」

「角二つ目だな。ありがてぇ」

「ふぐぅぅ……」

「一夏が気になるならさっさと行ったらどうだ？」

ガッチャーン

だからリバーシ盤に頭突きをするなと。

「なななにを言っているのかさっぱりですわね……」

「まあ落ち着け。リバーシ盤をひっくり返して考えるのだよ。（以下略）」

「う、うう……ですが……」

☆　★　☆

「王手」

「な、なんだと？」

さらにその後、俺は箒と将棋をしていた。

「こ、これで！」

「王手飛車取りだな。ごちそーさん」

「むぐぅぅ……」

「一夏が気になるならさっさと行ったらどうだ」

ズッシャーン

将棋盤でも同じことだっつーの。

「いいい一体何を……」

「まあ落ち着け。将棋盤をひっくり返して考えるのだよ。（以下略）」

「ぬ、ぬう……だけど……」

◇

「うあ～……しんど……」

「「「い、一夏（さん）っ」」」

「はい……？」

今はパーキングエリアなんだが、各自で昼を済ませなきゃいけないのに不運にも財布を忘れてしまった。踏んだり蹴ったりの極限バージョンだ。

「ねぇ、織斑一夏くんって、君のこと？」

「はい？」

四人が声を発するのと同時に、バスに入って来た見知らぬ女性が近づいてくる。

大体二十歳といったところだろうか。格好のいいブルーのカジュアルスーツを着込んでいる。胸元は大きく開かれ、大人の女、という雰囲気がある。

「君がそうなんだ。へぇー」

「あ、あの、あなたは……」

「私はナターシャ・ファイルス。『銀の福音』の操縦者よ」

「え――――」

「ちゅっ……。これはお礼よ、白いナイトさん」

「え、あ、う……？」

「じゃあまたね。バーイ」

「は、はあ……」

ひらひらと手を振ってバスから降りるナターシャさん。そこで、昼を終えた一弥とシャルロットに出会った。

「それで、こっちが黒いナイトさんね」

「ん？アンタは？」

「ふふっ、さっきの男の子に聞いてね。ちゅっ……」

「っと。いきなり何を？」

「ふふっ、お礼よ。バーイ」

「はあ……？ってシャル？なんでそんな羅刹の表情で――ごふぅっ！！」

「一弥のバカっ！」

マズい。これは――

「浮気者め」

「一夏さんは行く先々で幸せいっぱいですわねぇ」

「謝ろうと思って来てみれば……なるほどねぇ……」

「はっはっは」

「落ち着こうみんな。お、俺はしたのではなくされたのであって―

――」

そう言うころには、四人全員が投球フォームに入り、そして――――

「「「「はい、どうぞ！！」」」」

投げつけられるペットボトル。今分かったことといったら、思ったより固かった、ということくらいだった。

第二十八話　ｆｏｕｒｔｈ　ａｃｔｉｏｎ

地獄の臨海学校も終わり、あと十日ほどで夏休みに入るころ。俺達専用機持ちは昼飯を取っていた。

「にしてもあっついな……太陽系爆発しねぇかな……」

「いや、一弥。それ地球も爆発するから。死ぬから普通に」

ノリで話してるんだよ。

「にしても一夏。お前第二形態なって弱くなったよな」

「うぐ……」

とにかくエネルギーの消費が早いわ早いわ。避けてたらいつの間にかゲームセットって感じだからな。

「しかし一弥。お前もアレは反則じゃないのか」

「すごかったよねぇ、福音戦。残像が見えるくらいだったよ」

「いや、月下閃影の機動力は稼動率に比例するからな。スロースターターってヤツだ」

だから最初は第一形態で戦っているんだ。

俺の黒奏は第二形態移行を果たしたが、いつでも第一形態に変形できる。形態移行ではなく、形態変換と言った方が合っているかもしれない。

「むしろ俺は司令塔なんだからお前らが頑張ってほしいんだがな」

「そういえば、もうすぐアレがありますわね？」

アレ？

「そうね！見てなさいよ一夏、一弥！絶対負けないんだから！」

「ふん、私達夫婦に勝てるものか」

「負けませんわよ、鈴さん！」

「……なあ一夏。こいつら何のこと言ってるんだ？」

「……さあ……わかんねぇ」

謎な疑問を抱えながら、俺達は昼飯を終え、教室に戻った。

☆　★　☆

「「フォース・アクション？」」

「お前達はクラス長とその補佐だろうが……」

その日のＬＨＲ。初耳な話を聞かされた。

「つまりは球技大会だ。学年ごとに別れ、それぞれ競い合う。優勝者には夏休みにクラス全体で温泉旅行に行けるという賞品もついてくる」

「ああ、球技大会ですか。まあ、曲がりなりにも高校ですからね。で、何の球技なんですか？」

「ああ、野球だ」

「……また難しいものやりますね。普通はバレーとかバスケなのに」

一夏の言うことも頷ける。なんで野球なんだ？

「お前達、ここがどこだか言ってみろ」

「え？ＩＳ学園で……って、まさか」

「元々ＩＳはスポーツで使われているものだ。何の問題もないだろう」

「はあ……そういうことですか……」

だからｆｏｕｒｔｈ　ａｃｔｉｏｎか。打つ・走る・守る・投げる、の動作。それに力って意味も入ってるんだろう。学園も考えてんだ

なぁ……。

「それで今日はそのスターティングメンバーをお前達に決めてもらう。前に出ろ」

うわぁ……死んでもやりたくねぇ……。

「はあ……一夏、ＩＳの野球ってどんなルールだっけ？」

「確か……外野二人、内野五人の七人だ。専用機を使ってるところは見たことがないな……」

「どうなんですか？織斑先生」

「ああ、そもそもＩＳに慣れるためと行事だからな。専用機でも問題はない」

「めんどくせぇ……んじゃ、少数精鋭で行くか。まず専用機持ち五人で問題ないな」

「おいこら一弥。貴様も出るんだぞ」

「箒……なんで俺まで……」

って一夏と温泉旅行であわよくばってヤツか……女子の皆さんの目が血走ってるのが分かる。

後で千冬さんに賞品を変えてもらうように説得しておこう……。

「はあ……んじゃ、まずこの六人として……他いないか他ー」

「なら、あたしハンド部だし、あたしも入っていいっ！？」

「相川か……経験者も必要だしな。よし、採用だ。他はどうだ？」

その後ＬＨＲを時間の許す限り使い、その日は幕を閉じた。

☆　★　☆

三日後。球技大会当日。空には薄い雲が広がり、いつもよりは涼しいくらいだ。

ルールは普通の野球と同じだが、四回までしかなく、七人で戦う。武器、ＡＩＣ『アクティブ・イナーシャル・キャンセラー』は禁止。つまりは飛んだらダメってことだ。使うボールはハンドボールくらいの大きさだが、重量がかなりある。ＩＳの力はすげぇからな。あと速さも。ちなみに賞品の方も変えてもらい、遊園地のタダ券になった。

「最初の敵は……三組か。別に問題ないだろ」

今、俺達出場者はベンチで守備位置と打順を決めているとこなんだが……どーすっべかー。

「油断しちゃダメだよ音無君。三組はハンド部の子がいっぱいいるんだから」

「んー……ってなんで俺が考えてんだよ！一夏の仕事だろこういうの！」

「お前が司令塔と言ったんだろう。責任を取れ」

「はあ……よし、これでいいか。守備位置と打順発表すんぞー」

一番　レフト　一夏
二番　ショート　相川
三番　ピッチャー　ラウラ
四番　ライト　箒
五番　セカンド　シャル
六番　ファースト　セシリア
七番　キャッチャー　俺
ベンチ　鷹月　岸里

「これでいいよな？」

「わたくしはファーストですか……まあいいでしょう」

「そうだね。一夏と箒はこの中で速い方だし、いいんじゃないかな」

「内野も小回りの効くシャルロットと経験者の相川……いいのではないか？」

『問題は……』

「ふむ。私がぴっちゃーか。投げるだけなら簡単だろう」

（ラウラ……）

「まあそこんところは問題ない。色々レクチャーしたからな」

「むう……一弥がそう言うのであれば……」

そして、ＩＳ学園球技大会、ｆｏｕｒｔｈ　ａｃｔｉｏｎが幕を開けた。

第二十八話　ｆｏｕｒｔｈ　ａｃｔｉｏｎ（後書き）

ＩＳでスポーツというのは一回書いてみたかったんですが……どうでしょうか？ＩＳ野球。

ちなみに内容は全く考えてません。ど、どうしよう……真面目にやるかギャグに走るか……

第二十九話　プレイボール

「では、一組対三組の試合は三組が先攻で始めます」

普通の野球より広く区切られたグラウンドで、ズラリと並んで顔合わせのようなことをする。審判はハンド部がするらしい。それにしても曇ってて助かったな。晴れてたら……考えたくもない。

「両者、礼！」

『お願いしまーす！』

キャップつきの帽子を取って礼。うーん。これぞ野球！って感じだ。

全員が守備位置につき、ラウラが投球練習を……なんでしないんだろうねアイツ。

《さっさと投げろよ》

《む？もう始まってるのか？》

《今は練習だ。半分の力で投げろ》

プライベート・チャネルで指示。こういう時便利だよな。そして、無事投球練習も終わり――

『プレイ！』

さあ、試合開始だ。

《好きに投げていいぞ》

《本当か？》

《最初だしな。思いっきりこい》

《了解した！》

振りかぶるラウラ。さあこい！

ドゴスッ！！

『デッドボール』

「いたぁぁぁっ！！」

《よしっ！》

よしっ！じゃねぇよ！一応シールドエネルギーで守られているが、顔面直撃は流石に痛いんだぞ！？

「だ、大丈夫か？すまん」

「あ、う、ううん！大丈夫大丈夫！」

「ちょっとタイムで」

『タイム！』

「ラウラ、お前ちょっとそこに正座しろ」

「なっ、なぜだ！？好きなところにと」「正座。しろ」

「……はい」

「なんで顔面当てた？」

「お前が好きなところにと言ったからだろう」

「お前正気か！？大体昨日ルール教えただろうが！次からはちゃんと投げろよ。いいな？」

「むう……仕方ないな」

仕方ないのはオメーだよ。

しかし一球目からタイムを取るとは格好つかん……ここは少し真面目にやるか。

気を取り直して……次は二番か。

《一球外せ。シャル、そっちボール行くからな》

《《了解》》

ラウラが昨日教えたクイックモーションで投げた瞬間、一塁のランナーが走る。盗塁だ。させるかっ！

「ふっ！」

投げるのに最適なラウラのボールをキャッチし、セカンドのシャルに送球。

『アウト！』

よし、まずはワンナウト。これで流れは引き込んだな。

その後、二人共ショートゴロに打ち取り、俺達の攻撃。

「さて、もちろん一夏は出塁するよな」
「男の方ですものね」
「三振はありえないだろう」
「嫁。ほーむらんだぞ」
「あはは……」

「お前らプレッシャーかけるのやめてくれないか！？」

そうは言ったものの、相手の速い球（おそらくハンド部）をキッチリ打ち返し、一塁に出た一夏。チッ、つまらん。

ちなみに普通のハンドボールは下から投げるが、ＩＳハンドは上から投げるため、ハンドボールとも野球とも言うらしい。ｂｙ相川。

《一球待て。一夏はリードを大きく取ってくれ》

二回ほど牽制球が入り、ようやく投げる。だが、盗塁を恐れていたのか、大きく外れた。

『ボール』

《もう一球待て。リードは大きくな》

また二回ほど入る牽制球。そして、今回も大きく外れ、ボール。これで2ボールだ。

《よし、盗塁だ。一夏、リードはさっきより小さく取れ》

《小さく?》

《警戒を解くのさ》

《なるほど、分かった》

「一弥ってなんでもできるんだねぇ」

「今頃気づいたのか？」

「体力はありませんけどね？」

「うるせー」

話をしている内に盗塁成功。バッターは経験者の相川だし、打たせるか。

相川は打ったが、ファーストゴロ。だが、一夏は三塁に進んだ。次、ラウラ。アイツのやることはただ一つ。

《かっ飛ばしてこい》

《任せろ！》

カァン！と痛快な音が響く。ライトフライだが、一夏はタッチアップでホームに帰ってきた。これで１－０。

続く箒は三振に倒れ、一回の攻撃は終わった。

「この四番、ハンド部のホープだからね！気をつけてね！」

相川のそんな助言。とは言われても俺達のやることは変わらない。

《低い球》

《了解》

振りかぶって投げるラウラ。ラウラの球は速い。速いが――

『ボール』

少しコントロールが甘い。こうなったら普通に投げさせるか。

《よし、思いっきり投げろ》

《任せろ！》

『ストライッ！』

全力投球のラウラに流石に驚いた風のハンド部ホープ。このまま抑えるっ！

『ファール』

「うっ……！」

バットに掠り、その球の重さに呻くホープ。いけるな。

《どんどんこい》

《了解！》

『ファール』

流石はハンド部ホープというべきか、キッチリ食いついてくる。さ

て、ここらで一つ……

《スローボール。タイミングを外すぞ》

《分かった》

意地が悪いが、ここはキッチリアウトを取りたいからな。そして振りかぶるラウラ。しかし、その球はさっきまでとは違い、スローボール。

「くぅっ……！」

タイミングの外されたボールを打つが、手だけで打ったボールは飛ぶことなく、セカンドフライに終わった。

《ナイスピッチャーだよ、ラウラ！》

《ふ、ふん。当然だ！》

《照れるなよ》

《一弥もいい配球だったよ》

《ははっ、ありがとさん》

「お願いしますっ！」

一際大きい声。こいつもハンド部か？

《疲れるだろうし、七割くらいの力で投げろ》

《了解だ》

投球フォームに入るラウラ。その球はド真ん中だったが、申し分ない球だ。

キィンッ！

「くっ！？」

しかし、しっかり芯で捕らえた打球がセンター方面に飛ぶ。外野は二人しかいないので、真ん中は空いてしまうのだ。

《サードだ！》

《くそっ！》

『セーフ！』

三塁打。チッ、やるじゃねぇか……だが、次は問題ないだろ。

《ラウラ。今だけ思いっきり投げろ》

「全身守備だ！」

声に出して叫ぶ。こういうのは気持ちの問題だからな。

『ストライクッ！』

ハンド部の主審の声。さっきより球威が落ちてるな……ラウラが縮こまってしまっている。

《ラウラ》

《な、なんだ？》

《一夏がこの試合勝ったらデートしてやるだとよ》

《……》

スパァァンッ！

『ス……ストライク！』

すごっ！ってかはやっ！一夏効果ハンパねぇなおい！

カウント2ナッシング。スクイズはないだろうし……全力投球だな。

《いくぞっ！》

そう言って投げるラウラ。それをバッターは――――バント！？

コンッ

《くっ、シャル！ファーストだ！》

《うん！》

2ストライクからのスクイズ。あっちもなかなかやるな……！

一点取られたが、その後は三振で二回裏。俺達の攻撃。

「ま、まあ嫁としてはいい心掛けだな。この試合は任せておけ」

「？まあ、頑張って勝とうぜ」

「そ、そうか！お前もそ、その……デートに……（ゴニョゴニョ）」

「うん？ラウラ？」

「ししししシャルロット！ほ、ほーむらんだぞ！ほーむらん！」

「？？？」

※さっきの言葉はラウラにしか聞こえないように設定しました。悪しからず。

シャルは苦笑いしながらも、粘ってフォアボール。どうやら、相手ピッチャーもラウラのようなタイプらしいな。

「ところで相川。お前本当にあの四番がハンド部ホープってヤツだったのか？」

「ぎくっ！」

「……」

「ご、ごめんなさい！謝るから、串刺しだけはっ！！」

「ったく……」

呟きながらバッターボックスを見る。セシリアはこういう野球は苦手なのか、どうしてもうまく……って待てコラドリル。

《バット握る手が逆だぞ》

《え……？こうですの？》

《なんで太い方を持つ!?ええい、ったく!》

その後、今度はセシリアをレクチャー。なんか疲れるチームだなおい……

セシリアは打ちやすくなったせいか、レフト前ヒット。流石は代表候補生、といったところか。

「っと、次は俺か」

「一弥、しっかり打つのだぞ!」
「ほーむらんだからな」

「分かってるっつの」

バッターボックスに立つ。うわぁ、久しぶりだな、野球なんて。

黒奏を不動月桂（第一形態）のまま、バットをスイングして練習。

うん、問題ないな。

「う……音無君か……でも歩かせちゃマズいし……」

一つ言っておこう。この黒奏というＩＳ。第一形態が耐久型、というだけあって移動には『瞬時加速』を使わなければならないほど動きが重い。

あ、ちなみに瞬時加速とかの小技も使ってはいけない。ってかエネルギー系統は全部アウトだ。

話が逸れた。つまり――

「勝負だよっ！音無君っ！」

投げられるボール。確かに速いが――正直、絶好球だ。

「吹き飛べやぁ――――っ！！」

キィンッ！と甲高い音を響かせて飛んでいくボール。見るまでもない。

『ホ……ホームラン！』

そう！つまり、力があるってことなのだよ！

誰かなんだってーって言ってくれねぇかな。言ってくれねぇか。

「すごいよ一弥！」
「お見事ですわ！」

「当然だ。任せとけ」

ホームで待っていたシャルとセシリアにハイタッチ。ベンチに戻ると一夏が

「え……めちゃくちゃプレッシャーなんだけど……」

頑張れ男の子。

結局その試合はそのままリードを保ち、俺達の勝ちとなった。

☆　★　☆

「一回戦、勝ったらしいな」

「千ふ……織斑先生？なんでここに？」

一組用シェルター。今日はここで昼飯だ。一応学食も使えるが、こういう時くらい外で食べるのも悪くない。

「おかしいことなどないだろう。私は担任だからな」

「それもそうですね」

「次は凰か。アイツは随分と手強そうだな」

「力ありそうなＩＳですよね」

言いながらカロリーメイトをパクつく。やっぱりチョコ以外はマズいよなー。チーズは……臭う。

「一弥、よかったらお弁当食べない？」

「ん？食っていいのか？」

「うん！」

「さんきゅ。……でもお前ら。流石にその量は一夏だけじゃ食えねぇだろ」

弁当×5。一夏が自分で作った分もあるから5個だ。モテる方も大変ですこと……。

「一夏、私のを食べるよな？」
「一夏さん？自信作ですのよ」
「一夏。早く食べなさいよ」
「嫁。口を開けるがいい」
「勘弁してくれ……」

「はあ……なら、全員のをつまむってのはどうだ。それなら一夏も食えるだろ」

どうやら納得してくれたようで、シートの上の丸いちゃぶ台のようなテーブルの上にそれぞれ弁当を広げる。

「ラウラ……それはなんだ……？」

「おでんだ」

「……」

「おでんだ」

「なんで二回言った!?待て!今は夏だぞ?なんで冬に食うもの作るんだよ!」

「夏に食べてはいけないという決まりはないぞ?」

「確かに夏に食うなとは言わねぇけどな!弁当に詰めるなよ!ってか一つ一つがデカすぎだろ!?ほらぁー!汁垂れてるからぁー!!」

「むう……難しいな」

「難しくしてるんだろうが……頭痛ぇ」

ってかなんで鈴いるの?お前二組だよな?

「はあ……まあ、食うか。セシリアのは結構うまそうだな」

「「「「あっ」」」」

ん？ラウラ以外が何か言いかけたが……どうしたんだ？

口に入れた卵焼きを味わう。

「ふむふむ……って辛ぁぁぁぁっ！？」

なんだこれ！？マスタード！？マスタード入ってないかこれ！？まさか色鮮やかってこのマスタードのせいなのか！？

「辛い！熱い！むしろ痛い！」

「一弥……お気の毒に……」

「お気の毒じゃねぇよ！！おいマスタードリル！お前何入れやがった！？ロシアンルーレットのつもりか！？」

「おかしいですわね……ちゃんと巻き返しはしたはずですのに……」

「巻き返しって何だよ!?お前料理をレースかなんかと勘違いしてないか!?」

巻き返す頃には大抵もう遅いんだよ!

そんなハプニングもあったが、シャルの弁当で生き返り、なんとか腹を満たすことはできた。

第三十話　決勝戦！

昼飯も食べ終わり、ついに始まってしまった決勝戦。一組対二組の試合。今回もこっちが後攻だ。この試合のスタメンは以下の通り、

一番　レフト　一夏
二番　ファースト　セシリア
三番　セカンド　相川
四番　ライト　箒
五番　ショート　鷹月
六番　ピッチャー　シャル
七番　キャッチャー　俺
ベンチ　ラウラ　岸里

『プレイ！』

「おい一弥！なぜ私がベンチなのだ！？」

「お前の球と鈴は相性最悪なんだよ。それにさっき投げて疲れてんだろ？」

「むうぅ……！」

「……分かった。代打で出すかもしれねぇから。我慢しろ」

「……分かった」

さて、一番は鈴じゃないみたいだが……素振りをしている辺り、二番ってとこだろう。ならこの一番バッターは殺さないとな。

《シャル、このバッターはしっかり刺せよ》

《アウトにするってこと？うん！》

《『盾殺し』でな》

《反則だからね！？刺すってそっちなの！？》

《三割冗談だ。このバッターは塁には出さないぞ》

《あれ……？七割本気って言ってるのかな？》

気にしたら負けだぞ。

さて、俺がシャルをピッチャーに任命したのは言うまでもなくコントロールがあるからだ。ラウラのように球威こそないが、コントロールは大きな武器になる。俺の配球の腕の見せ所だな。

《アウトコース、低い球》

《任せて》

振りかぶるシャル。その球は、キャッチャーミット（ＩＳ野球用）を動かす必要なく、指示した場所に吸い込まれた。

『ストライク！』

《流石だな。ナイスコントロール》

《えへへ、ありがと》

《次だ。さっきのコース、少しだけボール気味に》

《ボール？》

《ギリギリにな》

《分かった》

第2球。さっきの球とほとんど変わりない球だったが、バッターは動かない。いや、動く気がないのか？

『ボール！』

《よし、次は頭を狙え》

《どうしよう……あまりにも自然に言うから思わず頷きそうになっちゃったよ……》

言い方が悪かったか？

《違うっての。ギリギリ当たらないように投げろってことだ》

《うーん、やってみるよ》

投球フォームに入るシャル。そのコースはインハイをかなり逸れ、ギリギリバッターに当たらないコース――だが。

『デッドボール』

「はーい」

バッターはむしろ当たりに行き、デッドボールになってしまった。なるほど、出塁が狙いだったな。次の鈴を活かすため、か。

バットを担ぎながらバッターボックスに入る鈴。さっきの試合ではホームラン二本、三塁打一本を打ったらしい。手強いな……。

「さぁ～って！悪いけど打たせてもらうわよ！」

「はっ、打てるもんならな」

《よし、当てるか》

《か～ず～や～？》

いや、正直悪くない作戦だと思うんだがな……。

《じゃあアウトコース低め、ボール気味だ》

《了解》

「さっ、来なさい！」

シャルの投げた球はしっかりミットに入る。鈴は見送った。

『ボール！』

そういえば昔鈴と野球やったな……目はいいか。あんとき鈴はちっこくて毎回フォアボールだったし。

でも甘い球は容赦なくスタンドに入れられる。めんどくせぇ……。

《よし、アウトコース低め。今度はストライクだ。気張れよ》

《了解！》

クイックモーションで投げるシャル。シャルには教えてないんだが

……なんでもできるヤツだな。

「でぇいっ！！」

ガキッ！と鈍い音を響かせる鈴。その打球はスタンドに――――入る前に横に逸れた。

『ファール！』

「ふふん、今のはデモンストレーションよ」

やるな……だがまあやることは変わらない。

《気にすんなシャル。次は……スローで揺さぶってやれ》

《ふふっ、了解》

気にしてない風のシャル。ああいうのを見たら普通は縮こまるもんなんだが……頼りになるヤツだ。

《打たせてくぞ！一夏、箒、キッチリ取れよ！》

《《了解！》》

守備のヤツらにも気合いを入れさせ、シャルがクイックで投げる。
スローボール。

「ぐっ……つぇぇぇいぃっ！！」キィンッ！

げっ！？鈴のヤツ、腕だけであそこまで飛ばすのかよぉっ！？

鈴の打ったボールは、スタンドにこそ入ることはなかったが、深く守っていたはずの箒の頭上を越え、一塁にいたランナーは三塁を蹴ってホームイン。鈴も三塁を蹴ってホームへ――――させるかぁっ！

《箒ぃっ！バックホ――――ムッ！！》

《おのれぇっ！！》

箒のレーザービームのような送球。シャルが中継に入り、投げると同時に鈴が滑り込み――――

『セーフッ！！』

「くっ！」

やられた……！これで2－0。まだ一回表でよかったな……。

「ふっふーん！やっぱりあたしは天才ね！」

「……ホームラン打っただけでかよ」

「うぷぷ。負け犬がなんか言ってるわね」

こんのヤロォ……調子乗りやがって……。次は秘密兵器使ってやる。

《ドンマイだ！2点くらい俺が取り返してやる！気合い入れ直せ！》

《《《《《《了解！》》》》》》

続く三番。こいつは……軽く揺さぶるか。

《インハイだ》

《うん！》

その後は三者凡退に打ち取り、俺達の攻撃。

『ストライク！バッターアウト！』

「悪い、アレはちょっと打てなかった」

「まああの剛速球だ。仕方ないかもしれねぇな」

そう、ピッチャーも鈴と、ガチメンバーで勝ちにきているのだ。しかもその鈴の投げる球が速いのなんの。一夏でさえ三振にされたほどだ。

「セシリア、ちょっと待て。みんなも集まれ」

「どうしましたの？一弥さん」

「秘策でも思い付いたか？」

「今回は鈴がかなり負担になってる。なるべく鈴を疲れさせて、疲れた時に一気に点を取るぞ。いいな？」

『了解』

セシリアがバッターボックスに入る。さて……どうすっかな。

☆　★　☆

そして膠着状態が続き、三回表。鈴からの打順だ。

「さて、今度こそホームランよ！」

「くっくっく……やれるもんならな。主審。ポジションチェンジだ！」

ポジションの入れ替えはシャル↓ショート、鷹月さん↓レフト。そして――――

「さあ、行くぞ鈴。これ以上、点は取らせねぇ！」

一夏だ！これが俺達の真骨頂――ダブルエース！！（今つけた）

『プレイ！』

《ド真ん中。度肝抜いてやれ》

《ＯＫ》

スパ――ン！！

「うっ……」

『ストライク！』

一夏の球は言うほどコントロールもなければ、ラウラのように重さもない。軽い球だ。

だが。速さ。速さに関しては先の二人よりズバ抜けている。いや、速く見えるのだ。サイドスローで投げる一夏の球にはとてつもない

キレが生まれる。
故に、俺やバッターにとってものすごく速い球に見えるのだ。

《次。どんどん投げろ》

《ああ》

スパン！と軽快な音がこだまする。シャルのコントロール重視の球からいきなり速い球に切り替わったのだ。流石の鈴も対応できず――

『ス、ストライク！バッターアウト！』

「うき――――っ！」

三球三振。その後のバッターも同じく綺麗に三球三振に倒す。まだまだ試合はこれからだ！

三回裏、俺達の攻撃。俺からの打順だったが、疲れが見えてきたせいか、俺は敬遠され、続く一夏は内野ゴロで足の遅い俺を軽々とゲッツー。一夏に対する女子の視線が熱いものから冷たいものへ早変わりしたのは言うまでもない。

四回表もキッチリ三人に抑え、ついに四回裏――――最終回がやってきた。

「よしお前ら――――やることは一つ！勝つ！それだけだ！」

『おう！』

「行くぞ！この試合、サヨナラで決めてやんぞぉ――――！！」

『おぉ――――っ！！』

打順は箒から。この回で勝者が決まる。箒は何球か粘ったが、最後に空振りしてしまい、三振になってしまった。

「くっ、すまない……」

「気にしなさんな。よし！ラウラ！お前の出番だ！キッチリかっ飛ばしてこい！」

「任せろ！」

鈴の球はラウラにとって打ちやすいはずだ。想定通り、ラウラはライト前ヒットで出塁。続く六番バッター、シャル。

シャルは……もう言う必要はないな。シャルの得意技。それは、小回りの効くところ。つまり、ピッチャーの球をファールにするくらい、造作もない。

『ボール。フォアボール』

さあワンナウト一塁二塁。俺の出番だ。

《来たわね一弥……アンタも一夏も三振にしてあたし達の勝ちよ！》

プライベート・チャネルから鈴の声がする。そういえば試合中とはいえ、鈴とも会話できるんだったな。

『ボール』

《はっ、やってみろ。サヨナラ逆転ホームランにしてやるぜ！》

『ボール！』

《させないわ！あたしが勝って、一夏とデートに行くのよ！》

『ストライクッ！』

《……と言いたいところなんだけどな》

《へ？》

『ボール』

《ほら、もう後がないぜ。歩かせてくれるのか？》

『ストライクッ！』

これで2ストライク3ボール。フルカウント。

カキッ

『ファール』

軽く当てるまだまだこんなもんじゃない。

『ファール』

《……なによ、アンタもシャルロットと同じってワケ？》

《さあ、なんのことやら》

『ファール』

《とぼけんじゃないわよ！打つ気なんてないくせに！》

『ファール』

当たり前だ。アイツ……鈴は、どうやら勘違いをしているらしい。
仕方ない、教えてやるとするか。

《今回の主役は……一夏、だろ？》

《え！？》

『ボール。フォアボール！』

さあ、お膳立ては整えた。

「ここまでしたんだ。後は任せたぜ、エース」

「ああ、任された、エース」

グッ、とバットを片手で渡すと、一夏もそれに合わせてグッと握り返した。頼りになるよ、お前は。

「こい、鈴！」

鈴が投げた球はアウトコース。キッチリストライクだ。なるほど、読めたぜ。

《次はインコース高め。来るぞっ！》

《了解だっ！》

配球は読めた。そして鈴が投げた球はインコース高めに吸い込まれ

――――

キィィィンッ！！

ライト側のラインの上を駆け抜けるボール。やりやがった！

まずラウラがホームインし、続いてシャルがホームイン。ボールはすでにセカンドが持っている――――が、俺はサードを回ってホームに走った。

《一弥っ！？》

驚いたような全員の声と同時に、バシイッ！と、俺は黒奏の装甲を解き、月下閃影に変換する。先程とは違う猛スピードでホームに向かうが、セカンドの送球をキャッチャーが取る瞬間、俺は滑り込んだ――――！！

『……セーフ！セ――――フ！！』

こうして、俺達一組はｆｏｕｒｔｈ　ａｃｔｉｏｎに優勝した。

第三十一話　夏休み、開幕！（前書き）

ようやく夏休み編です。

第三十一話　夏休み、開幕！

（（どうしてこうなった……））

「ははははは！これが力の歴然たる差だ！跪け！命乞いをしろっ！！」

「なぜにムスカ……？」

「ラウラさん……もう貴女の好きにはさせませんわ！」

「いや、あの……」

「私は負けない……いや！負けられないんだ！」

「どこかで聞いたことある台詞だな……」

「アンタの時代もこれで終わり！これから来るのはあたしの時代よ！」

「どっちにしろ暗黒時代だ……」

もう一度言おう。

「「どうしてこうなった……」」

隣のシャルも同じ気持ちらしかった。

☆

★

☆

「ふー。やっと夏休みかー」

終業式も終え、後は帰るだけ。ようやくの長期休暇に、俺の胸は弾んでいた。

「いぃっちかー！……って一弥。アンタもいたの？」

「……いちゃ悪いか、鈴」

「ああ、じゃあ部屋に来るか？久しぶりになんかして遊ぼうぜ。夏休みだしな」

一夏の声がどこか弾んでいるように聞こえる。こいつも浮かれてるのか？

「じゃあ三人だけど、久しぶりに……アレ、やるか？」

「ふふん……面白いじゃない。上等よ」

「なら俺らの部屋だな。レートは……学食、か？」

「そうだな。お前らのサイフ、思いっきり軽くしてやんよ」

ニヤリ、と三人で笑い合う。はんっ！負ける気がしねぇな！

☆　★　☆

そして、俺達の部屋に到着。適当に座り、俺は引き出しから――トランプを取り出した。

そう、中学時代、俺らでよくやったゲーム。それは――

大富豪。それは、己の身分を表す、格差社会を顕現したゲーム。勝者は敗者に税金を払う（学食おごる）システム。

「ルールはいつも通りでいいよな。革命、８切り、Ｊバック、２＆ジョーカー上がり無し、ジョーカーはオールマイティ、だな」

「レートは三回負けたら学食一回分ね！さあー食べるわよー！稼ぐわよー！」

「そういえば俺は一弥に負け越しだったしな！ここらで借りを返してやるよ！」

そしていざ始めようとした時、廊下が騒がしい……というかなんか聞き覚えのある三人組の声がして、バシュッと、部屋の扉の開く音

がした。見るまでもない。箒、セシリア、ラウラだ。

「なっ……鈴さん！？抜け駆けは卑怯ですわよ！」

「はあ……こうなったらシャルも呼ぶか。仲間外れにされたっていじけそうだしな」

言って携帯を取り出し、シャルを誘う。用事はないらしく、すぐに行く、とのことだった。

「それでお前達は何を――――ああ、トランプか。何のゲームをしているのだ？」

「ああ、大富豪さ。ちょっと賭けをやっててむぐっ！」

（お前バカか！？箒にそんなこと言ったら天罰とか言って暴れるだろうが！）

（そ、そうだった！ついうっかり……！）

「賭け……だと？……何を賭けていたのだ？」

思った通り、箒の目が厳しくなる。くっ、どうするよ俺！？
そんな絶体絶命のピンチを救ったのは、意外にもラウラだった。

「大富豪とはアレか。一番勝った者の言うことは絶対きく、というものか」

いや、それなんて王様ゲームの派生系だよ……とか思ったが、この救いの手を取らない手はない！

「そ、そうなんだ！ラウラの言う通り、勝ったヤツは――」

「そして勝った者は負けた者との夜を満喫できるのだな？」

「「「は？」」」

まさか……あのクラリッサとかいうヤツの入れ知恵かっ！？お前どんなこと教わってんだよ！

「よ、夜を満喫……」
「一夏とひと夏の思い出……」
「あ、アバンチュール……」

ちなみに上から箒、鈴、セシリアだ。ってか鈴もそっち側かよ！？

「さあやるぞ！勝負は五回やって最後に大富豪だった者が一夏になんでも言うことを聞いてもらう！いいな！？」

「箒っ！？お前何仕切ってんだ！？」

「「「異議無し！」」」

「お前らも何乗ってんだよ！？」

「じょ、冗談じゃない！俺だけおごるなんてさせないからな！」

「一夏っ！？お前まで！？何なんだこの状況はぁーっ！？」

「お邪魔しまーす……って、みんなどうしたの……？」

途中から来たシャルには、暑さにやられた六人が謎なことをやっている様に見えたのだろう。可愛らしく首を傾けて頭に『？』のマークを飛ばしていた。

☆　★　☆

……そして、今に至る。

今の王様……じゃなくて、大富豪は、意外にもラウラだった。そして鈴、俺、箒、セシリア、一夏、シャルというランキング状況。ちなみにこれで三回目。

シャルはルールを知らなかったらしく、やりながら教えていたら最下位になってしまった。

「俺は負けられない……いくぜっ！俺のターン！！ドロー！」

「うわトランプでやるとダセェな……」
「一夏、アンタ何ドローするつもりよ」
「バカなのか？いやすまない、バカだったな……」

ボロクソに言われながらも一夏が出したのは２四枚。

☆革命

「んじゃ俺は3四枚っと」

☆革命返し

「え？一夏アンタ3ないのに2でレボったの？」

「レボ？」

「レボリューション。革命のことですわ」

「バカだ……」

そして三回戦が終了。ランキングは鈴→俺→ラウラ→セシリア→箒→シャル→一夏だ。都落ちはないので、ラウラはビリにはならなかった。

「やっとあたしの時代が来たわね！そして一夏と……えへへぇ～」

「くっ！おい大貧民！さっさと分けろ！！」

「……はい」

一夏……強く生きろよ……。にしてもクラリッサとかいうヤツ、一体どんな知識をラウラに植え付けてやがるんだ。汚いな。流石ドイツ軍特殊部隊きたない。

そして献上（大貧民が大富豪と2枚、貧民が富豪と1枚交換するシステム。弱い方は一番強いものを渡す）でシャルから一枚もらう。うお、ジョーカーかよ。ありがてぇ。

「……ねぇ一夏」

「……事実だ」

「ん？どうした鈴？」

鈴が一夏から受け取ったカードを見せてもらう。

……QとJだった。

「よわっ！お前引き弱すぎだろ！？大富豪も迷惑だろこんなもん！！」

「うるせぇぇぇっ！！言うなぁぁぁっ！！」

そんな一夏の不幸な面もあったが、ダイヤの3を持っているシャルからスタート。並び順は俺↓シャル↓箒↓一夏↓鈴↓ラウラ↓セシリア↓俺……という風に回っていく。チッ、最後かよ。

俺のターンの頃にはKのダブルとかなり高い数字になっていた。むう……まだ序盤だし、セシリアが出したからみんなパスすれば次はすぐ回ってくる。

「うし、パスだ」

そして全員がパス。セシリアのターン。4のトリプル。

トリプル……は、Jがあるな。よし、出しちまおう。

「つーかさ」

場が流れ、シャルのターン。そこで俺は口を開く。

「一夏が億が一、勝ったら……どうすんだ?」

地雷設置完了致しました。ようやくほんわかとしてきた雰囲気が再び凍り付くのが分かります。

「そりゃあ、大貧民のヤツにおごらせる……ってなんでそんな睨むんだ!?怖すぎるぞ!?」

そういうことじゃないのだよ、一夏クン。

「んじゃ、これで上がり、ってな！」

「ああっ！ちょっと一弥アンタいつの間に！？」

「一弥。もし……お前が一番だったらどうするのだ？」

ラウラから質問が来る。俺が勝ったらか……チラッ、と隣でベッドに座っているシャルを盗み見る。

「……！」

うっ、目が合っちまった。何かこういう時って無性に恥ずかしい。

「そ、そうだな。一夏にみんなが笑うまで一発芸でもさせるかな」

「鬼だっ！お前は鬼だぁっ！！」

なんとかごまかせたか。ったく、危なかったな……

四回戦も終わり、ランキングは以下の通り。

俺→鈴→シャル→箒→ラウラ→セシリア→一夏

よわっ！一夏よわっ！！

大貧民（一夏）がカードを分け終わり、献上も済ませる。AとK。

まあ……さっきよりマシか。

「俺からだな。5のダブルだ」

最終戦。これで一夏の運命が決まると言っても多分過言じゃない……はずだ。それよりシャルの運のよさに驚かされる。ルールも理解してきたみたいだし、もしかしたら勝つのはシャルかもしれない。

「じゃあ8で切って4の二枚ね」

8を二枚も持ってたのか……やっぱり勝つのはシャルかな。

そして、最終戦が終わった。ランキングは――

大貧民→一夏。灰になっている。

貧民↓セシリア。貴族の恥だとか。
平民↓箒、ラウラ、鈴。めっちゃ悔しそう。
そして――――

「大富豪はシャルに決定～」

という順番だった。

「まあ、シャルロットなら問題あるまい。では、大富豪の命令を聞こう」

ラウラ潔いな……まあシャルなら無理な注文は言わないだろうしな。

「そうね。シャルロットは一弥のだし」

「ふぇぁっ！？」

「……鈴、何言ってんだお前」

見ろ！シャルの顔がトマトのようだ！

「え、えとっ、そのっ、あの……～～～っ！！」

シャルが可哀相だろ……仕方ない。覚悟を決めよう。

「シャル、なんでもいいぞ？」

「な、なんでもっ？」

「ああ。大富豪サマの命令だからな」

その言葉に目をパチクリとさせたシャルは、さっきまでとは一転して顎に手を当てて考えだした。

「……うん。よしっ」

「決まったようだな」

固唾を呑んで全員がシャルを見る。ガン見しすぎだろ……？

「やっぱり、保留にするよっ」

『……へ？』

「大富豪様の命令は、保留。ね、一弥」

「え？お、おぅ？」

ニコニコと、いつもの太陽のような笑顔を俺に向け、そう言ったのだった。

まだまだ、夏休みは始まったばかりである。

第三十一話　夏休み、開幕！（後書き）

感想待ってますよ～！

第三十二話　夏休み狂想曲（前書き）

シャルと藍、仲良しフラグ。

第三十二話　夏休み狂想曲

容赦なく照り付ける日光の中、俺は掃除をしに帰るという一夏を見送り、五反田の家でウダウダと過ごしていた。

「いや、過ごしていた。じゃねぇよ！邪魔だっつの！」

「弾……うるせぇ」

「なにこの堕落を人で表してみた、的な堕落っぷり！もうお前見て堕落の二文字以外思いつかねぇよ！」

「バカ兄、うっさい！」

あー……っちぃなー……これ溶けるんじゃねぇかなー……

「だ～ん～クーラーつけて～」

「清々しいほど他人任せだなオイ……おーい藍ちゃん！兄貴の面倒見てやってくれー！」

「カズ兄どっか遊びに行こっ！ねーねーカズ兄！」

「ああ……弾ん家にでも行くか……ってか言いにくいな。死ねよ弾」

「理不尽にも限度があんぞ！？」

「カズ兄ってばぁぁぁっ！！」

「うがあぁぁあぁぁあ……ってやめんか！首もげるだろが……ん？」

Ｐｉｐｉｐｉ！

「誰からだ……？はい、留守番サービスです。３０秒以内に円周率を全て答えることができたら通話を許可します」

『無理だからね！？あれ無限にあるからね！？』

「その声は……シャルロット・デュエルさんか。悪いがそういう気分じゃないんだ。また来世でやろうな……」

『えっと……ツッコむ箇所が多すぎるからスルーさせてもらうとして、今時間あるかな？』

「畳の目を数えるのに忙しい……」

『……』

「……」

『……えっと……暇、なんだよね？』

「たた以下略……」

『略すところが微妙すぎるよ！と、とにかく一夏の家に来れないかな？』

「はーいっ！お電話代わりました！すぐ行きますねっ！」

「いってらっしゃい……この挨拶長くねぇか？作ったヤツ俺のためにアイス買ってこいよ弾」

「んな挨拶作ってねぇ！言い掛かりつけたいだけだろお前っ！」

『え？あ、あの……誰、ですか？』

「藍ちゃんです！」

「藍、返せ。……お電話代わりました。一弥君です……」

『と、とにかく……一夏の家に来て！急いでね！』

切れる電話。なんなんだよもー……動きたくねぇ……。

「藍……おぶって」

「うん、わかった！」

「気をつけてな～もう戻ってくるなよ～！」

「フヒヒ……私はいつでも貴様の隣にいる……居座ってやるからなァ……」

「お前どこまでゾンビ化すれば気が済むんだ！？」

「それでは、出発進行ー！」

「あ、ちょっと藍さんなるべく日陰を……ギャァァァッ！！」

一夏の家に着く前に復活に時間のかかる俺だった……髪とか溶けたかも……

☆　★　☆

「ふにゃー、汗かいちったよぅ」

「ふぎゃー、髪溶けちったよぅ」

一夏の家の前。入ったら後戻りできなさそうだな～……

「……雲かかってる内に入るか」

一夏の家のドアを開け、リビングに入る……前に靴を脱ぎ忘れたのに気づき、靴を脱いで今度こそリビングへ。

するとそこにいたのは――――！！

「……ドリルと眼帯と日本刀と犬歯と唐変木」

勢揃いだった。

「む、やっと来たか。早く座れ」

「なになに～？どうしたの？」

ひょこっと俺の脇腹の後ろから顔を出す藍。こいつらがいたのか……失敗した……。

☆　★　☆

その後キッチンにいたシャルに話を聞いたところ、どうやら遊園地に行く計画を立てる……という名分でラウラが一夏の家に行こうとしたところに暇だったシャルがついていったらすでにシャルとラウラ以外の全員が勢揃いしてて軽い乱闘騒ぎのような状態に発展したが今はもう落ち着いたとのことなのでじゃあ帰ってよくね？みたいなことを考えたら今度は藍がここに居座りやがって帰るに帰れない、という状況になった。あー、よく息続いたなー俺。

「でもびっくりしたよ。電話で女の子の声がしたと思ったら……妹さんだったんだね」

「ああ、そういえば言ってなかったな……藍、自己紹介くらいしとけ」

「うんっ！音無藍ですっ！あたしも来年ＩＳ高校に入るので、来年はよろしくお願いしますっ！」

「藍、久しぶりだな。六年ぶりか？」

「箒ちゃんお久しぶりだね～！鈴ちゃんも！」

それからワイワイと藍に関することでちょっと騒然となった。

「……ふん……」

「ラウラ、俺の妹が気に入らねぇか」

あの性格だもんな。ＩＳを遊び道具と勘違いしているだの、そう思ってるんだろう。

「そうではない。そうではないのだが……」

「ラウラは一弥の妹みたいな感じだから寂しいんだよね？」

「し、シャルロット！な、何をバカなことを……！」

「確かにお前友達っていうより妹って感じだよな」

「なんだと！？禁じられた恋に発展ということか！？」

「今度クラリッサとかいう腐女子連れてこい！一日中説教してやらんと気が済まん！！」

ドイツの未来が見えた気がした瞬間だった。

「しかし、来るなら来るで誰か一人くらい連絡くれよ」

「仕方ないだろう。今朝になって暇になったのだから」

「そうよ。それともあれかしら？いきなり来られると困るわけ？」

「ってかお前ら、あの『来ちゃった☆』がやりたかっただけもがっ」

「一弥さん？息が苦しいみたいなので、止めておいてあげますわね？」

「～～ぶっはぁ！！ドリルお前殺す気かっ！？なんだよ息が苦しいから止めるって！殺す気満々だろテメェ！」

「一弥の言う通りだ。突然やってきて驚かせてやろうと思ってな。どうだ、嬉しいだろう」

「にしちゃ、随分と気合いの入った服装ですこと」

「あ、僕が見立てたんだよ。ラウラが可愛い服を選んでむぐぅ」

「全く何を言っているのかさっぱりだな！ん！？どうしたシャルロット！喉が痛いならかっ切ってやろうか！？」

「お前ら……人ん家で殺人犯すなよ……」

「それで、この後はどうしたもんかな。うちはあんまりみんなで遊べるものとかないぞ」

「鬼の縄張りだからな」

「まっ、そういうことだろうと思ってあたしが用意してきてあげたわよ。ほら」

鈴が持ってきたらしい紙袋から、トランプに始まり、花札、モノポリに人生ゲーム、といった様々なカードゲームｏｒボードゲームの類のものが出てきた。

「んー、トランプならこの前やっただろ。なんか違うことしてぇんだが」

そう言って紙袋をガサガサと探すが、中に残っていたのはＰＳＰが一個だけ。

うーん、と全員が悩んでいるところに、ラウラが口を開いた。

「ああそうだ。これは聞いた話だが「なんかねーかなんかー」おい一弥人の話を聞け！」と、悩んでいるところに、今度はシャルが口を開いた。

「じゃあ……王様ゲームってやってみたいかも」

「……まさかシャルの口からそんな単語を聞けるとは」

「おぉ！気が合うなシャルロット！私もそれを言おうとしたんだ！」

「シャルロットに失礼でしょ……」

まあ特に異論はなかったので（面白そうだったから）割り箸を八人分用意していざスタート。ただし一夏親衛隊がアレな命令をすると

アレなので、一人三つずつ紙に書いた命令を王様が引く、というルールに。紙に書かれたことは絶対で、番号は王様が決めていい。

「なんかオチが読めるが、始めっか。王様だーれだー」

「む……私だ」

最初は箒か。箱の中から紙を取り出し、中を見る。

「……では、3番と5番と7番。１０連ピンポンダッシュだ」

「「「一弥ぁぁぁっ！！」」」

いきなり俺のか。ちなみに一夏、鈴、ラウラだった。

「仕方ないな……なら選ばせてやるよ。１０件に1回ずつか、1件に１０連ピンポンでどうだ」

「どっちでもいいわ！なんで一番最初なのにこんなハードル高いんだよ！」

結局王様の命令には逆らえないので、屋外実施。一夏は１０連中に家の人が出てきて悲惨な目に合っていた。

「んじゃ次だ次。王様だーれだー」

「あ、僕だ」

ガサゴソ。パッ。

「えっと……1番が5番にデコピン」

「「「レベルの差が激しすぎる！！」」」

「1番は俺だ。5番誰だ？」

箒にデコピン一発。外したせいか軽い罰だった。ちなみに今のはシャルが書いたものだった。

「次よ次！絶対一弥にアレをさせてやるんだから……！」

鈴コワイ。ラウラも睨むなって。

「あ、あたしだー！わーい！ん～……君に決めたぁっ！！」

藍か……なかなか俺に来ないな～……

「えっと～、じゃあ、5番と7番！服交換ね！」

「あっぶねぇぇぇぇぇっ！！」↑俺。6番

「う、またあたし……7番誰よ？」

「……私だ」

「ぶはははははっ！！」

鈴と箒。物理的に無理があるだろ！傑作だ！

「一弥一弥一弥ぁぁぁっ！！アンタ絶対許さないんだからぁぁぁっ！！」

「り、鈴。その、上は無理だから下だけということで……」

鈴が人間から夜叉にジョブチェンジした！

そして着替えが終わった。ちなみにさっきのは鈴が書いたものらしい。

「今のところ当たってないのはシャルと藍とセシリアか。んじゃお望み通り次いくか」

『王様だーれだー』

「あ、俺だ。んー……これだっ」

一夏か。これ王様が誰でもかなりアレな命令がくるよな……

「４番が逆立ち一分だ」

「……一夏の命令って地味というかローカルというか」

４番の藍が逆立ち一分。ハーフパンツだったのでムフフな展開ではなかった。ちなみに藍自身が書いたものらしい。

「ってかこれいつ終わるんだ？次いくぞ」

『王様だーれだー』

「私だなっ！私が王様だ！」

むーん、という感じに胸を張るラウラ。早く引けよ。

「これだっ！むう……よし！2番と5番と6番が家を出て突き当たりまでダッシュ、そして戻ってくる！」

「いやだぁぁぁっ！！」

「あ、僕だ」

「わたくしですわね」

ええ、やりましたよ。ちゃんとやりました。遺言を残して。

ちなみに終わった時、シャル曰く『溶けたプリン』状態だったらしい。よく生きてるな、俺。今の命令を書いたのは箒だった。

「なあ、これいつやめるんだ？一弥がグロッキーなんだが……」

「では、あと三回ということにしましょう。さて――」

『王様だーれだー』

「やっとあたしの時代ね！うふふ……一夏にあんなことやこんなことさせてやるんだから！」

「うぐぐ……は、早く引けよ……」

「か、一弥、大丈夫？」

「なんとかな……」

慌てんじゃないわよ、と言いながら紙を引く鈴。ってか王様ゲームってキスとかそんなラブコメの王道じゃないのか？ラブの字が盛大に抜けてるぞ。

「命令よ！王様がコンビニに行って全員分のアイスを買ってきて会計が終わった時に『コンビニ王に、俺はなる！』と言って帰ってくる！あははっ！なによこれ最悪ね！って王様がぁっ！？」

「ああ、鈴……社会的に逝ってこい」

「一弥ぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

結局一夏監視の下、鈴は見事にやってのけた。すげぇ。まあアイス食いたかっただけなんだが。

「おし！完全復活したところで――――」

『王様だーれだー！』

「ようやくわたくしの番ですわね！それでは失礼して……これですわ！」

ちなみに一回引いたものは捨てているので、同じ命令はない。

「こほんっ……あら？これはわたくしの……４番が一日中王様の口調を真似する、ですわ」

「バカな……」

ラウラ……似合わねぇー……

「ほらラウラ、なんか喋ってみろよ」

「じょ、冗談じゃな……ありませんわ！」

『ぶふっ！！』

ラウラを除く全員が盛大に吹いた。想像してごらん……あのラウラがセシリア言葉……くっそワロスｗｗｗ

「おーし、次がラストだな。せーの」

『王様だーれだ！』

「俺だな」

ガサガサと箱の中を漁る。……よし、これだ。

紙に書かれたことを見て……俺はふっ、と笑ってしまった。

「んじゃ、王が命じる。これを全員でやろうか」

紙をみんなが見えるように見せる。その紙には、『今日の夕飯を作る』という命令が書いてあった。

☆　★　☆

「ん？なんだ、賑やかだと思ったらお前達か」

スーパーで買い物に行った後、全員で厨房に上がり、狭いだのシャルはやっぱ料理うまいなだの箒もうまいぜだの鈴の鼻歌音程ズレてるだのラウラお前何作るつもりだよだの寿司だ……ですわだのお前おにぎりと寿司を一緒に考えてるだろ！？だのセシリアは何作るんだだのハッシュドビーフですわ赤色が足りませんわねだの赤色にタバスコ使うなよ！？だのあら？ピザソースの方がよかったかしらだのもうお前厨房上がるなだの、などと騒いでいるところに千冬さんが帰ってきた。

「おかえり、千冬姉。今みんなで夕飯作ってるところだけど、千冬

姉はどうする？」

「……ふむ、いや、いい。すぐにまた仕事だからな」

これは嘘だろうな……流石大人の女だ。空気が読めている。

「では、行ってくる。一弥、後は頼んだぞ」

「了解です。いってらっしゃいませ」

執事のようなことを言いながら千冬さんを見送る。全員が帰ったらメールでも送っておこう。

「って待てラウラ。なんで寿司なのに三角に握ってんだ！？」

「おかしなことを言う……ますわね。太巻というものを知らないのか……ですわ？」

「おかしいのはお前の頭だ！」

「鈴、大根余ったら分けてもらえるかな？」

「えぇ、いいわよ。箒ー、火の強さこれで合ってるー？」

「どれどれ……うむ、後は煮込むだけだな」

「セシリアっ！お前はもう調味料禁止だっ！」

「な、なぜですの一夏さん！わたくしの料理は後半で挽回するものですのに！」

夏の夜のとある平日。騒がしくも、楽しげな旋律が辺りに響き渡っていた。

◇

「お待たせしましたっ」

駅から少し行ったところにある商店街。その地下にあるバーに息を切らしてやってきたのは、山田先生こと山田真耶だった。

『バー・クレッシェンド』。千冬の行きつけの店である。

「すまないな、急に呼び出して」

「いえいえ、どうせ部屋で通販カタログを眺めていただけですから」

真耶が席にかけると、千冬がノーマルのビールをマスターに注文する。真耶の分だ。

「千冬さんも新しいのをお出ししましょうか？」

「そうですね、頼みます」

「かしこまりました」

初老のマスターが一人でやりくりしているこの店は、マスターの白髪をオールバックという容貌のせいか、女性ファンが多い。千冬は例外だが。

「乾杯」

「乾杯です。今日はどうしたんですか？お休みだから、帰省されたんじゃ？」

「そのつもりだったんだが、家に女子がいてな。まあいつもの面々だが」

「あれ？一弥君は違うんですか？」

「ああ、あいつも、妹もいた。監視を頼んでおいたんだ」

「ということは専用機持ちが八人……あれ？一弥君に妹なんていたんですか？」

「まあな。会うと驚くぞ。見事に性格が逆転しているからな」

ビールグラスを傾け、くっくっく、と笑う千冬。

「そうだったんですかー……そういえば、一弥君は……あまり女子といるところは見かけませんね？デュノアさんくらいでしょうか？」

「ん？ああ……あいつ、まだあのことを守っているのか。律儀な奴だ」

「あのこと？」

「あいつの両親が、あいつが幼い頃に交通事故で亡くしていることは知っているだろう？」

そのことは知っていた。一弥の詳細書に書いてあったからだ。

「えぇ、はい……可哀相ですよね……」「そうだな。辛かっただろうな。だが、あいつは泣かなかった」

「え？まだ8歳くらいのことじゃ……？」

「ああ。隣で藍……ああ、妹の名だ。藍はわんわん泣いていたがな。一弥は隣で手を握ったまま泣きもしなかった。壊れたように、笑いもしなかった」

「……一弥君は……両親の死を前に何を思ったのでしょうか……？」

悲しげにそう呟く真耶を見て、またグラスに口をつける。

「それは本人にしかわからん。だが、一つ言えることがあれば……あの瞬間、あいつは私より先に大人になってしまった」

「へ？どういうことですか？」

「考え方のことさ。両親を前に、あいつは妹を守ると決めた、と言っていた」

「……立派ですね」

「それだけじゃない」

「え？」

「守る、という漠然とした目標に、あいつは大人になるまでの１２年後とそれからの計画を完璧に立てたのさ。８歳の、甘え盛りのガキがな」

「え……そ、それは……」

「そのためにあいつは計画を立てた瞬間から猛勉強を始めた。だが、小学生が休み時間も勉強していたら、当然悪ガキのイジメの対象になるだろう」

マスター、おかわり。と間を入れ、千冬は続ける。

「そして、それを一夏が助けた。確か篠ノ之もいたな」

「それで……えっと……あれ？」

そこで真耶は区切った。つまり、どういうことだろうか？

「その時は私もいたが、あれは傑作だったな。助けられた一弥はなんて言ったと思う？」

『悪い、助かったぜ』

「……え？そ、それだけ……？」

「それだけだ。そして一夏が怒ったのさ」

『お前っ！あんなやつらにイジメられて悔しくないのかよっ！？』

『ん？ああいう奴らは好きにさせればいいんだ。やりすぎたらあいつの両親を脅して慰謝料を払わせればいいしな』

『なっ……貴様、それでも男か！？』

『男以前に、俺は人間だ。人間は賢くないと生きていけねぇぞ』

「……」

「驚いてるようだな？その後、一夏が目を覚まさせるのさ」

「え？」

「『お前、バカなのか？』そう言ったのさ。つまり、完璧だと思っていた自分の考えを『バカ』と言われたんだ」

「え、えっと……？」

「それで、一弥は自分の考えをバカだと言う人間もいるんだ、と悟った。あらゆる人間は考え方が違うのだと。そして、その人間達に出会うことで、自分は成長していくのだ、とな。ちなみにこれは一弥に缶ビールを１４本飲ませた時に言っていたことだ」

「あ、あはは……それで、織斑君と篠ノ之さんの友達に？」

「ああ、その時だな。『じゃあ一夏。お前が女作るまで俺はお前を応援してやる。なー、箒？』その後篠ノ之に竹刀で叩かれていたな」

「ああ！つまり、気づかせてくれた織斑君へのお礼ってことですね！？」

「篠ノ之の想いに、一夏の鈍さに気づいたから、あんなことを言ったのだろうな」

これで終わりだ。と千冬は締め、ビールグラスを置くと、ソルティードッグが出された。グラスの縁につけた塩が、雪化粧のように美しい。

「……まだ頼んでない」

「そろそろ飲みたい頃だと思いまして」

「やれやれ……私の周りはお節介者ばかりだな」

そう呟く千冬と優しい表情で笑う真耶を、ソルティードッグの氷が眺めていた。

第三十二話　夏休み狂想曲（後書き）

なんか最後は無理矢理だったような……泣きたい

第三十三話　じゃれ合う小猫と見守る紳士（前編）（前書き）

二分割です。それではどうぞ～

第三十三話　じゃれ合う小猫と見守る紳士（前編）

夏休み、とある学生寮の一室にて

「し、シャルロット。少しいいか？」

「うん？どうしたのラウラ？」

「ああ、じ、実はだな……今日は私の嫁と、その……で、デートに行くのだが」

「わあっ、ラウラから誘ったの？それでそれで？」

「い、いや。球技大会で勝ったらデートに行こうと……そ、それで、その……二人きりは、は、恥ずかしいというか……それで、シャルロットにはだな」

「一緒についてけばいいの？」

「う、うむ。頼む！このとおりだ！」

「うん、僕もひまだったしね。それなら、一弥も誘ってダブルデートなんてどうかな？」

「あ、ああ！来てくれるというなら全然構わないぞ！」

「それじゃあ明日だったよね？四人で遊ぼっか！」

「ああ！」

☆　★　☆

昨日。シャルからラウラ達とダブルデートがしたい、という電話があったので、待ち合わせの時間の３０分前に駅前に到着すると、すでにシャルとラウラが待っていた。

「よっ。待たせたか？」

「あっ、一弥！ううん、全然待ってないよ」

恋人同士みたいなやり取り。正直結構恥ずいんだが……こういうのも悪くないよな。

「それで、私の嫁はどこだ？」

「ああ……なんか山田先生に呼ばれたから先に行けって……ん？」

Ｐｉｐｉｐｉ！

「どうせ一夏だろ。ほら」

ラウラに携帯を投げて渡す。器用なことに片手でキャッチ。……お前人のものは大事に扱えよ……。

「む、私だ。……なにぃ！？約束が――――ってこら待て！おいっ！こんの……っ！」

「俺の携帯に当たるな！お前携帯両手で持って何しようとしてやがる！？」

逆パカなんて冗談じゃねぇよ！確かにスッキリするけどさ！（一夏の携帯で体験済み）

「えっと……一夏、来れないって？」

「アイツが約束断るんなら相当重要なことだろ。また今度二人で行けよ」

「むうぅ……！」

膨れるラウラ。子供かお前は。

「とにかく電車乗ろうぜ……毎日暑くてなけなしの体力振り絞って来たんだからな」

「うん……ほらラウラ、今日は服とか見に行こう？ね？」

「ふん……仕方ないな……」

一夏不在、両手に花……片手は刺状態で俺達は学園のモノレールに乗った。

☆　★　☆

３０分後。

「おい一弥あれだ！あれを見てみろ！」

機嫌治るの早っ！そんなこと言ったらまた膨れるから言わないが…
…本当、最初に比べたら随分と角が取れて――

「あそこの建物は狙撃地点には最適だなっ！あっ！あのスーパーは長期戦時にライフラインとして使えそうだぞ！」

――前言撤回。こいつほど無垢な笑顔で街を戦場と考えるヤツはいないだろう。大体お前は何と戦ってるんだ。

「あはは、ラウラってば子供みたい」

「達観してるなシャル……こんな子供がいたら世界は火の海だろうな……」

「む……失礼な。私ほど未来を見据えている人間はいないぞ」

「だろうな！こんな街中が戦場になるなんて何世紀後だろうな！」

むしろお前を見てると近い未来に思えてきちまうよ。

「しっかし確かに子供みてーなはしゃぎようだな……さしずめ、俺とシャルの子供……ないな。うん、ないない」

あんな子供を産む親はきっと自分にも他人にも地球にも厳しいだろう。

「ふぇっ！？そ、そんな、僕と一弥の……こっ、子供だなんて……」

「落ち着けー。例え話だからねシャルロットさーん」「で、でもどうせなら三人くらい……」

「シャル!?頼むから落ち着け!帰ってこぉぉいっ!!」

「ん?やれやれ……全くお前達は子供だな。私を見習うがいい」

「おおおおぁぁぁぁ……なんだこのツッコミパラダイス……一夏がいればぁ……っ!」

切に願う。平和と安息をプリーズ。

とにかく、漫才をしている内にモノレールが到着。今日は一夏に服を見てもらうつもりだったらしいので、とりあえずその店へ歩き出す俺達。

つーか。一夏とラウラのカップリングは構わないんだが……こいつらだとデートで普通にドイツ軍特殊部隊秘密基地だとかなんとかに行きそうで怖い。

「つーかラウラ。お前一夏と二人でデートくらい行けるようになれよ」

「うっ、うるさい。その……どこに行けばいいのか分からないんだ。それに、シャルロットがいてくれるしな」

「それは嬉しいけど、いつかは二人で行かないとね。好きなところ

に行けばいいんだよ。デートなんだから」

「好きなところに、か……ああ、そうだ。一弥の武器に興味があったからそれを開発しているところに――」

（シャル、ツッコめよ）

（か、一弥がツッコんでよぅ。僕じゃきっと役不足だよ）

（いや振ったのお前だろ!?正直俺はこういう展開予測してたぞ！）

（ほら、お兄ちゃんでしょっ。妹の面倒は見てあげないとっ）

（うわーい、すげぇ理不尽。世間なんてこんなもんだ）

「ラウラ」

「しかしあの粒子剣は素晴らしい……む？どうした？」

「……あの粒子剣、カッコイイよな」

（一弥っ!?まさかの僕が少数派!?）

「……じゃない!ラウラ、お前はデートというものを勘違いしている」

「む?シャルロットは好きなところに行けばいいと言っていたぞ?」

「お前の好きなところが一夏も好きって保障はないだろ。大体そんな研究所みたいなところでイチャイチャできるのかお前」

『見ろ、一夏。なんと華麗な粒子剣だろうか。あれで斬られるものは幸せものだ』

『ああ、でも、ラウラの方が華麗だよ』

『ば、バカ者……研究員が見ているではないか……』

なんだこのカオス。

「むう……難しいな」

「あはは……あ、着いたよ。あっという間だったね」

本当にな。ツッコんでたら本当にあっという間だったな。その分疲労もとんでもないことになってやがるが……。

「にしても……『サード・サーフィス』？変わった名前つければカッコイイとでも思ってないか？」

「意味の分からん店名だな」

「あ、あはは……ほら、入って入って」

シャルに言われる通り店に入る。途端に店の客から店員まで視線が俺達に集結した。まあシャルは可愛いし、ラウラは……見てくれだけはいいからな。

女性専門の店らしく、中には見事に男がいない。俺が居ても場違いなだけだろうな。

「んじゃ、俺はここで――――ぐぇっ！」

「どこへ行く、一弥」

「逃がさないからね？一弥♪」

結局逃げ場はないらしく、後ろの襟首を二人で掴まれ、服を見るこ

とに。一応俺にも羞恥心はあるんだぞ……。

「ど、どっ、どのような服をお探しで？」

なんかテンパってる店員。とりあえず落ち着きませんか。目が血走っておりますよ？

「この子に似合う服を探してるんですが」

「こっ、こちらの銀髪の方ですね！すぐにお持ちいたします！」

「なるべく機能性重視がいいのだがな」

「お前のリクエストに応えられる服なんざ迷彩服くらいだろうよ……」

なんせこいつときたら、シャルと同室になる前までは私服は持ってないわ、持ってる服は制服だけだわ、寝る時は素っ裸だわ……ってそりゃ今もか。

ほどなくして、店員がマネキンが着ている服を持ってくる（マネキン素っ裸なんだが……）。白の薄手のサマーシャツだ。千冬さんに似合いそうな、いわゆるクール系というヤツだった。

「んじゃ試着してみろよ。迷彩服には及ばないだろうがな」

「全く、面倒くさいな……」

ラウラが試着室に入り、カーテンを引く。そうなると暇で仕方ない。服を見ようにもここは女性専門の店だからなぁ……。

「一弥、一弥っ。これなんかどうかな？」

「うん？黒……は似合わないだろ。もっと明るい色の方が似合うと思うぞ？」

「え？確かに子供っぽいと思うけど、普段はクール系だと思うよ？」

「クール系？むしろ癒し系だろ？」

「ええっ！？一弥、あれで癒されるの！？」

話が噛み合ってない気がするな。

「シャルのことじゃないのか？」

「ほぇ？ラウラのことだよ？」

やっぱり……二人でお互いをじっと見て、思わず吹き出してしまった。

「ラウラが癒し系か！そいつどんだけ大物なんだよ？」

「あははっ、そうだね。うーん、一弥が見てくれるんなら僕も試着くらいしてみようかな？」

「ああ、見てこいよ。俺はラウラが出るの待ってるから」

「うん！じゃあちょっと待っててね」

笑顔で走り出すシャル。ファッションセンスもかなりのもんだし、全く非の打ち所のないヤツだ。

「あの……お二人とは、どういうご関係で？」

「ん？ああ、まあ友達――」

店員の質問に即答しそうになり、ふと思い立つ。んー、そうだな。

「友達以上、ってところですかね。一人は妹みたいな感じだけど」

「そうなんですか！お似合いですね！頑張ってくださいね！」

「ど、どうも」

妙に興奮したような店員。いるよね、恋ばなが好きな女性って。それとも女性というのはみんなそんなもんなんだろうか。ラウラだけは違うということは理解できるが。

「お、おい、一弥……」

「ん？着替え終わったか？」

気がつくと、ラウラがカーテンの隙間から顔を出していた。肩も見えているが、剥き出しという辺り、まだ着替えてないのだろう。

「どうした？サイズが合わなかったか？」

「い、いや、そういうことではなくてだな……その、も、もっと……かっ、可愛いのがいいんだが……」

「……つくづく恋って偉大だな。んー……シャルはいねぇし、俺が見繕うか。露出度はどうする？」

「その、少し高いくらいが……」

「仰せのままに～」

店員の元に戻り、肩の出たワンピース、ブレスレット、ついでにミュール……とかいう靴も選んでもらう。ある程度めどがついたところで、ラウラの元へ戻る。

「ほら。着替え方は分かるな？」

「う、うむ。すまない」

再び引かれるカーテン。それと同時に、シャルが服を持って戻って

きた。

「それじゃあ一弥っ。少し待っててね？」

「おう。早く着替えてこい」

なんか今日はこういう役回りが多いな……まあ、それを楽しんでいる俺がいるんだが。

その後、着替え終わった二人に殺到する客をさばきながらも服を買って当初の目的を果たし、『サード・サーフィス』を出るのだった。

第三十三話　じゃれ合う小猫と見守る紳士　（後編）

「はあ……だいぶ時間食っちまったな」

今の時間は１２時過ぎ。俺達はオープンテラスのカフェでランチをとっている。

「全く騒々しかったな。一体なんだというのだ」

「まあお前は見てくれだけはいいからな」

あのあと。同時に着替え終わった二人に店内の客から外のヤツらまで群がりだして一時騒然となった。まあ俺がなんとか鎮めたんだが……俺はマネージャーじゃないぞ……

「えへへ……」

「……おい一弥。シャルロットはどうしたというんだ。さっきからこんな調子だぞ」

「いや……まあ……」

二人が着替えている間、俺はシャルに似合いそうなネックレスを見つけ、ラウラにバレないようにこっそり買って渡したんだが……それっきりこんな調子だ。昼メシにも手をつけてないし、トリップ状態である。なんか今日はこんなシャルが多いな。ちっさいシャルが四人で手を繋ぎ合って花畑で踊っていそうな感じだ……。

「そ、それよりこのあとはどうするんだ？シャル」

「ふぇ？あ、えっと。生活用品を見て回ろうよ。僕、日本製の腕時計が見たいんだ」

「腕時計？」

「ああ、そりゃいいな。ラウラも何か欲しいものないのか？」

「日本刀だ」

「「……」」

「日本刀だ」

「二回言う必要があったのか……？とりあえずこんなところにそんな猟奇的なもんはないからな」

どうすればこんな武器大好きっ子に育つのだろうか。千冬さんの話では、生まれた時から戦争の道具として育てられたという。

ラウラは……普通になりたいと思わないのだろうか。もっと普通に俺達と遊んだり、一夏とデートをしたり、女の子のようなことをしたり……。

やり直したいと……思っているのだろうか？一夏に救われたラウラは、確実に変化を遂げている。冗談も言うようになった。笑顔を見せるようになった。なにより、恋をしている。

過去のラウラを見て、きっと『くだらない』と一蹴するだろう。だが……今のラウラは、過去のラウラに何を思うのだろうか？

俺には解らない。でも、一つだけはっきりしていることがある。

助けを求められたら、助ける。今の俺には、それしかできない。

「……や。一弥っ！」

「ん？なんだ？」

「どうしたんだ、ぼーっとして。珍しいな」

「いや……少し考え事をな。それで、もう出るのか？」

ラウラがちょいちょい、と指差す。その方向を見るとシャルが、なにか困った様子の女性を凝視している風景が見えた。

やれやれ……仕方ないヤツだな。

「シャル」

「え？」

シャルの頭に手を置き、くしゃっ、と撫でる。

「話を聞く。まずはそれからだ」

「あ……うんっ。ありがとう……一弥」

上目遣いは反則でございますよ、お嬢様。

そう言い、女性に近づくシャル。それに続くように俺達も物憂げな空気を放っている女性に近づく。

「あの、どうかされましたか？」

「え？――――！？」

俺達を見るなりイスを倒す勢いで立ち上がる女性さん。え、なにこの危機感。幻だと信じたい。

「あ、あなたたち！」

「は、はい？」

「バイトしない！？」

「「え？」」

「うげ……」

まだまだ波乱が続きそうな一日だった。

☆　★　☆

話を聞いたところ、いきなりバイトの二人が辞めてしまい、今日は視察の人間が来るので、今日だけアルバイトをしてほしい……とのこと。なら俺いらねぇじゃん、と思ったが、それなら副チーフとして調理場を仕切ってほしい、とのこと。か、帰りてぇ……

俺は調理用の服を、ラウラはメイド服を着ている。ラウラのメイド服の似合いっぷりに思わず爆笑してしまったが、問題はそのことではない。

「なんでシャルが執事服なんだろうか……」
「右に同じだ」
「左に同じです……」

「だってほら！似合うじゃない！？そこいらの男よりずっとキレイで格好いいもの！」

こいつ殺したろか。

「そうですか……」

「シャル……あんま気にすんなって。比較された俺よりマシだろ……？」

「あら、そっちの男の子だってきっと似合うだろうけど……執事っていうよりご主人様って感じなのよねぇ」

この店長、侮れないっ！？

「まあ……さっさと始めましょうか。俺は料理はそこまでうまくないですけど……」

そして、@クルーズにて半日バイトが幕を開けた。

◇

「デュノア君、四番テーブルに紅茶とコーヒーお願い」

「わかりました」

カウンターから飲み物を受け取った僕は、@マークの刻まれたトレーへ乗せる。始まってから1時間ほど経ち、そこそこ慣れたかな？というところ。僕はこのお店の雰囲気に馴染むようにトレーを持ち、四番テーブルに向かう。

「お待たせいたしました。紅茶のお客様は？」

「は、はい」

手を上げた女性の前に紅茶を差し出す。もう一人の方にはコーヒーを。それで、確かこのあとにこのお店のサービスを聞くんだよね。

「お砂糖とミルクはお入れになりますか？よろしければ、こちらで入れさせて頂きますが？」

「お、お願いしますっ」
「わ、私もそれでっ」

どことなく緊張した風の二人の女性。店長に言われたように、この格好が似合ってるのかな。うーん……似合うのは嬉しいけど、どうせなら一弥にこんな反応をしてほしかったな。

そう考え、ふっ、と笑ってしまう。あの日――銀の福音を倒し、屋根の上で一弥と話しながら夏の星と月を見た時から、自分の気持ちにようやく気づけた。

――僕は、一弥が好きなんだ。

相手も……一弥も、きっと僕に対して不快な気持ちは抱いてないよね。それなら、ダブルデートに行こうと言われて来るはずがないから。

でも……僕にはまだ解決してない問題があるから。

デュノア社の……実の父親の監視から、三年は外れることが出来たといっても、三年後にはまた問題が再登場してくるのだ。

一弥に三年の猶予をもらったとはいえ、根本的には解決してないから……だから、その問題が解決できた時、ちゃんと一弥に告白しよう――そう思ってる。

だから、その時まで待っててね。

「わ……」

ふと、女性のお客の声で我に還る。いけないいけない。バイト中なんだし、ちゃんと集中しないと。

そういえば、一弥の方は大丈夫かな？

◇

「三番テーブル遅れてるぞ！何やってんだ！」

「今すぐ！」

「オーダー！五番テーブル洋梨タルト、苺のムース！気合い入れろよお前らぁっ！！」

『はい！』

厨房の中は店内とは打って代わって多忙を極めている。こりゃまとめ役が必要なワケだ……人気の店なだけあって注文が雨のように降りしきる。それを読み上げ、指示、遅れているところがあれば叱咤を繰り返している。

「四番テーブル、季節のフルーツタルト、上がりました！」

「フルーツタルト上がったぞ！四番テーブル！」

「はいっ！」

俺は何もしなくていい、と言われたが、峠ということでコーヒー豆くらいはすり潰している。これはなかなかハードだ……全くもって帰りたくなってきた。

「副チーフ！季節のフルーツタルトの材料の在庫が切れました！」

「業者に頼んだとチーフが言っていた！俺が見てくる！注文の読み上げはウェイターに頼め！」

『はいっ！』

スリッパを履き、裏の勝手口から荷物を探す……必要もなく、すぐそばに発泡スチロールの山が積まれていた。うわ……力仕事とか聞いてねぇよ……。

下半身に力を入れ、荷物を持って冷気のこもった厨房に入る。いやぁ、この涼しさがあればなんだってできるぜ。

そういえば、ラウラが心配だな……。

◇

「水だ。飲め」

任務完了。さて次は……ふん、これでいいな。

「飲め」

コーヒーを客の前に出す。む？少しこぼれたか。まあ戦場ではよく

あることだ。むしろ水だけでもただでもらえるのだから感涙していることだろう。

「え、えっと……コーヒーを頼んだ覚えは……」

何と言う事だろうか。飲み物を飲めるだけでもありがたいというのに、この愚民は文句があるらしい。全くこれだからゆとりは。

「ふん、客でないなら出ていけ。貴様には水すらもったいない」

「は、はい……」

「飲んだら出ていけ。邪魔だ」

「はい……」

これがセッキャクというものか。一弥のヤツは『お前絶対無理だろ……』とか言っていたが、私にかかればこんなものだ。クレームの一つもこないからな！

「あ、あの！注文いいですか！？」

「なんだと?貴様に注文などという権利があるとでも思っているのか?この愚民が!貴様など空気でも食っておけ」

「は、はいっ!」

どうだ、私のセッキャクは!この客など顔を赤らめているぞ!つまりは満足しているということだ。ふふふ、今度は一弥のヤツに私のセッキャクを見せてやろう。きっと驚くだろうな!

(どうだシャルロット!何の問題もなかっただろう!?)

そう思ってシャルロットの方を見たのだが、目が合った瞬間逸らされた。ふっ、私が完璧すぎるからといって恥じることはあるまい……

ふむ、なら次は嫁にこの姿を見せてやるとしよう。そうすればきっと私の嫁になりたがるに違いない。

『ラウラ……なんて可愛いんだ。君の可愛さに気づかなかった自分が憎い』

『ふふふ……ようやく理解したか、一夏……』

『ああ、ラウラ。ご奉仕してくれるか？』

『仕方ないヤツだ……好きにするがいい……』

『ラウラ……』

『一夏……』

なんてな！なんてなっ！ふはははは！気分が高揚してきたぞ！次の獲物はどいつだっ！？ドイツなだけになぁ――っ！！あーっはっはっは！！

『どうしよう……ラウラが壊れてきちゃったよ……』

シャルロットが何か言っていたが、そんなの気にもならん！さあ！待っていろよ嫁！嫁！一夏ぁ――っ！！

◇

同時刻、ＩＳ学園にて。

「うっ……？」

「どうしました？織斑君？」

「いや、少し寒気が……おかしいな、真夏だってのに」

「風邪でしょうか？なら、早くデータを採って部屋で休みましょうね」

「了解です……なんか不吉な感じが……なんなんだぁ……？」

◇

一弥が様子を見に来てラウラに拳骨を落としたりしたけど、比較的平和な状況が2時間ほど続き、ラウラにも僕にも疲労が溜まってきた頃、事件は起きた。

「全員動くんじゃねぇ！」

ドアを破らんばかりの勢いでなだれ込む三人組が怒号を発しながら入ってくる。店内の人達はすぐには理解できず、固まっていたけど、次の瞬間に発砲された拳銃を見て、悲鳴が上がった。

「きゃあああっ！？」

「騒ぐんじゃねぇ！静かにしろ！」

「……ラウラ。どうする？」

「……ふむ、まあ問題ないだろう。さっさと鎮圧――といきたいところだが、如何せんこの服は動きにくい。しばらくは様子見だな」

話している間にも強盗達は店の奥のテーブルを陣取り、銃をこちらに向けている。警察の声がメガホン越しに聞こえたけど、人質と言って立て篭もるだろう。とんだ休日になっちゃったなぁ……。

◇

峠も越え、ようやく厨房にも余裕ができた頃、店内の方から銃声が轟いた。

「なっ、なに!?」
「うわぁっ!」

騒然とする厨房。今のところこっちに来る様子はないな。それなら一般人を裏の勝手口から逃がすとしよう。

「落ち着くんだ。いいか?お前達は勝手口から逃げろ」

「そ、そんな!副チーフは!?」

「しっ。大声を出すんじゃない。なぁに、俺なら大丈夫さ。後は任

せて先に行け」

「副チーフ……」

「さ、行け」

『ありがとうございます、副チーフ！』

音を立てずに勝手口に向かう調理人達。一人残された俺は……俺は……

「はっはァ！一回言ってみたかったんだよな！『俺に任せて先に行け』ってよ！」

異常なほどテンションが上がっていた。眼鏡を外し、いざ出陣ってなぁ！

☆　★　☆

「ご注文の品、お持ちいたしました」

「あぁん？」

「こちら、限定スィーツの季節のフルーツタルト、ガトー・ショコラ、白桃のエクレアとなっております。どうぞご堪能を」

（（一弥っ！？））

シャルとラウラが驚いたような顔をする。深く下げた頭でシャルとラウラに目配せし、二人はニヤリ、と笑った。

「なんだぁ？こんなもん頼んだ覚えはねぇぞ！」

「まあまあ、いいじゃないッスか。めちゃくちゃうまそうッスよ！」

「そうですよ兄貴ぃ。せっかくメイド喫茶に――」

「本日はようこそ、@クルーズへ。メイドと執事、それに私のサービスを思う存分お楽しみください。さ、君達。こっちへ」

言って二人を手招きする。もちろんシャルとラウラだ。

「では、まずはお客様がご自分で召し上がってお楽しみください」

「へへっ、なんか悪いなぁ」
「お、俺、メイド喫茶って初めてッス！」
「うまそうですね～兄貴ぃ！」

言って口に運ぶ強盗三人組。その瞬間、俺達は動きだした。

シャルは大きくかかとを振り上げ、一番近くの強盗に一気に振り下ろし。

ラウラはいつの間にか持っていた皿を奥のテーブルに座っていた強盗目掛けて投げ。

俺は素早く目の前のヤツの手首の関節を外して戻して外した。

以下、その時の効果音。

ドゴッ！↑シャルのかかと落とし
ガシャッ！↑ラウラの皿投げ
ゴキッ、ゴキッ、グギッ！

まあ、最後のは言わずもがな、俺ということで。

「「ぎゃぁぁぁ――――っ！！」」

「げっ。ラウラちゃんと仕留めろよ」
「ふむ、シャルロットは流石容赦ないな。完全に気絶している」
「ってまだのんびりしてる場合じゃないよ！あと二人！」

「てっ、テメェらよくも！……って、あれ？」

「捜し物は」
「こちらの」
「拳銃でよろしかったですかぁ？」

俺、ラウラ、シャルの順番です。補足説明。ちなみに俺↓マシンガン、ラウラ↓ショットガン、シャル↓ハンドガンだ。うわ、整備もされてねぇのかよ。いつ暴発してもおかしくねぇぞ。

「く、くそっ！こうなったら全部爆発して――――」

「うぜぇ。死ね」
「遅い。死ね」
「えっ。二人共待っ――――」

ズダダダッ！×２

マシンガンが火を噴き飛ばし、ショットガンが光を撒き散らす。俺の銃弾は強盗に当たらないようにキッチリとギリギリで外し、ラウラの銃弾は強盗の脇腹に巻かれていたプラスチック爆弾の導線を撃ち抜いた。

「次は耳だ」
「なら俺は眉間だな」
「もう……ほんといいコンビだよ、二人共」

シャルが何か言ってたが、気にしない。それと同時に客から歓声が上がり、警察が中に入ってきた。おっと、時間だな。

「ひっ、ひいっ！す、すみま――――」

敗北宣言を聞くことなく、警察が来る前に俺達は立ち去った。

黒き一陣の風を奏でるように。

☆　★　☆

「コーヒーだ。存分に――」

「0点」

「えっと……2点かな……」

「なぁっ!?さ、差別だろう!私のセッキャクは完璧だぞ!」

無事学園に戻り、今は居るのはシャル&ラウラの部屋。ラウラが『お前に私のセッキャクを見せてやろう!』と言い出したので受けてみればこれだ……なんでメイドと客の関係が皇帝と奴隷みたいな関係になってるんだ。意味わからん。ちなみに100点満点だ。

「まあそれはいいとして……俺はなんでこの服を着ているんだろうか……」

「えっと。僕が着てたのは大分折り曲げて使ってたからさ。やっぱり一弥にピッタリだったね」

「ふむ。確かに似合うことは似合うが、やはりお前に執事はないな」

「……ペットに言われたくねぇよ。記念撮影っと」

パシャリ。

「なぁっ!?かかか一弥!誰が撮影を許可したっ!?」

「うるせぇっ!お前も自分の嫁とやらにその構図見せてやるからなぁっ!」

俺の格好はシャルが着てた執事服。シャル&ラウラはお揃いの猫のパジャマという、かなりカオスなこの状況。どこで間違ったのか……。

「あははっ!じゃあさ、みんなで撮ろうよ。記念にさ!」

「し、シャルロットまで!?ええい、私は断じて――ひゃっ!?」

「いいからいいから~。ほら、一弥も入って入って!あ、これデジカメね」

「はあ……貸せ、俺が撮る。いくぞ。はい、チーズ――――」

パシャッという音と共に切り取られるその瞬間。その一瞬には、じゃれつく白猫、困ったような黒猫、そしてそれを見守る執事……というより、紳士が写っていた。

第三十四話　苦悩は蒼みを帯びて（前書き）

（；「―「）＝＝＝＝＝⇒

※特に意味はありません。

第三十四話　苦悩は蒼みを帯びて

キュインッ！！

「っと！」

今の時間帯は４時を少し過ぎたというところ。場所は第三アリーナ。俺はセシリアと模擬戦をしていた。

「墜ちなさい！」

四つのビットとホーミングタイプのミサイル、それにレーザーライフルが俺を襲う。黒奏を《不動月桂》の状態にしている俺は、瞬時加速でライフルを避け、両手に持った緋焔と氷如月でビットのレーザーを弾き、ミサイルを斬り墜とす。

『もっと誘導したらどうなんだ？』

『くっ、今やっていますわ！』

個人間秘匿通信で気になった箇所をズバズバ斬り込む。稼動率６７

%。《月下閃影》に変換すればすぐにケリをつけられるが、ハンデとしてそれは使わない。ただし、制限時間３０分以内にセシリアが俺を墜とせなかったら俺の勝ちだ。

『今の稼動率は？』

『うっ、くっ……３４％ですわよっ！』

『うーん……もうちょっと頑張れよ』

稼動率。その数字には色々な意味があるが、俺の場合だと過ぎた例だが、高くなればなるほど《月下閃影》の機動力が上がったりする。これは他のＩＳにも言えることで、例えば《単一仕様能力》の発動キーになったり、ＩＳが独自に蓄積する戦闘経験値が急激に積まれていく――などといった特典みたいなものがある。

稼動率を上げるためには……これはまだ解明されていないが、ＩＳとの心の距離だとか色々な説があるらしいのだが、俺の場合は『テンション』だったり『身体の暖まり具合』だったり『エネルギーの消費時』などらしい。

どうやら俺の黒奏の稼動率は単一仕様能力の影響か、上がりやすい性質らしい。セシリアやシャルの最大時稼動率を聞いた時は驚いたものだ。

しかしこの稼動率。ＩＳを展開していない時も表すことができる、

というのだからいよいよお手上げだ。全く面倒な代物を作ったもんだ、束のヤツは。

『あと5分だぞ』

『まだですわっ！』

結局そのまま逃げ切り、シールドエネルギーを半分近く残して俺が勝利した。

☆　★　☆

「はあ……」

「よっ……ん？意味ありげに溜め息をつくセシリア。声をかけてと言わんばかりだ。俺はそんな憂鬱さを全開アピールしているしなびたクロワッサンを凝視する」

「……」

「セシリアが目を細めてこちらを見ている。もしこの目が仲間になりたいという目だとしたらなかなか面白い。きびだんごで餌付けすれば仲間になるだろうか。いや、この場合はきっとクロワッサンだろう」

「……一弥さん」

「今度は怪しさ全開の目。色々なバリエーションがあるものだ。実に面白い。ドリルで穴を開けたらどうなるのだろうか？試してみたいところだが、あいにく今はドリルを持って――いや、目の前にあった。よし、セシリアが油断した隙に実験開始といこう」

「……全部声に出していますわよ」

「……」

「……」

「あれ？よぉセシリア！こんなところで会うなんて奇怪なドリル……間違えた。奇遇だな！」

「奇遇と奇怪なドリルをどうすれば間違えられるんですの!?『き』しか合っていないでしょう!しかもさっきまでの実験うんぬんはなかったことにしてませんか!?」

きっと妖精さんの独り言だよ。

「はあ……ところで、何をしているんですの?」

「んー?緋焔と氷如月の偏光制御だ。うまい具合に稼動率が上がったからな。ほっ……」

「偏光制御(フレキシビリティ)……一弥さんはできるんですの?」

「曲げるくらいならな。まだまだ実践的には程遠い」

大体、緋焔と氷如月のリーチが箒より短いのだ。これ以上長くするとエネルギー刃を保っていられなくなっちまう。

「最終的な目標はこの剣が生み出すエネルギー玉の制御なんだが……よっと」

緋焔を横殴りに振る。ヒュンッ、という風斬り音と共に、剣が描いた軌跡に生成される赤いエネルギー玉。制御しようと手をかざすが、少しの時間の経過と共に小爆発を起こして消える。シャボン玉みたいな感じだな。

「これでもまだマシになったんだ。前まではすぐに爆発しちまったからなぁ……」

ＩＳを待機状態にして、ガリガリと頭をかく。なかなかうまくいかない。この他にも双剣流の剣術も身につけなければならないし、高機動時にかかる負荷に耐える身体作り、黒奏の改造、さらに射撃練習に連携……やることは山積みだ。全く嫌気がさす。特に双剣術。箒は二刀流だからやっぱり微妙な矛盾が生まれるので、独自の剣術を生み出さないといけない。めんどくさすぎる。

「で？しなびたクロワッサンさんはどうしたんだ？クロワッサンさんって言いにくいな。クロワッって呼ぶか」

「そっちの方が明らかに言いにくそうですわよ！？って、わたくしの名前はセシリアですわ！」

「自分でも忘れてたくせに――なんでもございません」

ライフルの照準合わせるのやめて。回避不可能だから。人間にもできることとできないことがあるから。

「ふう……ありがとうございます、一弥さん」

「弄られて礼を言ったのはお前が初めてだぞ、エムワッサン」

「そうではありませんわ。わたくしのことを気遣かってあんなことを言ったのでしょう？」

「にゃにを」

噛んじまった。死にたい。

「ふふふ……一弥さん。今のわたくし達の戦況は知っていますでしょう？」

「あー……まあ、うん」

さっきのように、俺達は色々と制約をかけて模擬戦闘を行っている。それにランキングがあり、早い話がセシリアがビリだ。そのことで悩んでたのか。

「一夏さんが第二形態移行（セカンド・シフト）をして以来、わたくしは負け越しておりますわ……」

「ただの順番づけだろ？そこまで躍起になる必要もなかろうに」

「いいえ、問題は順番ではなく……わたくしが成長していないのではないか、と思ってしまって……」

「クロワッサンもしなびちゃったワケか」

「……」

「……ごめんなさい」

その冷え切った視線はやめて。

「別に成長も人それぞれだろ。そんなに悩むようなことか？」

「……実はわたくし、三年前に両親を交通事故で亡くしておりますの」

「なんとも重そうな話だな……そんで？」

「同情を引くつもりではありませんわ。わたくしの母親はいくつもの経営を成功させていたんですの。莫大な財産も残してくださいましたわ」

「話が見えんが……」

「その財産を守るために、わたくしはここにいる、ということですわ」

「つまり……結果を出さないと代表候補生を降ろされて母親の財産が守れないんじゃないのかですわ……ってことか？」

「ですわ、が余計ですが……その通りですわ」

「ふーん」

「……はい？あの、他に反応することはありませんの？」

「え……だって俺関係ねぇし……」

「なっ!?何のためにこんな話をしたと思ってるんですの!?」

「わかったわかった……そうだなー。んじゃ頑張れよ」

「は、はあ……？」

「結局俺達にはその選択肢しかねーだろ。ネガティブになって得るもんがあるのか？ないからみんな頑張ってるんだろ」

「う……」

「みんな頑張ってるんだ。お前のだぁーい好きな一夏もな。好きな相手と一緒に頑張りゃいいじゃねぇか」

「か、一弥さんっ！」

「困った時はお互いサマ、ってな。ここに来た目的はもう変わったんだろ？」

こいつも変わった。男を軽蔑の目で見なくなったし、物腰も柔らかくなった。いいことじゃねぇか。

「一人で悩んでるぐらいなら周りも巻き込んでやれ。そのための俺達だろうが」

「……なら、一弥さんも巻き込ませてもらいますわよ？」

「一夏の後なら考えてやる」

さて、夏だからまだ日は高いだろうし（アリーナの屋根を展開して直射日光を遮断している。そうしないとこんなこと無理だっつの）、休憩もそろそろにしとくか。

「それより、一弥さんの方はどうなんですの？」

「あん？」

「シャルロットさんとはうまくいってるのですか？うふふ」

「ああ、この間ダブルデートに行ったぞ」

「まあ！ダブルデートに……え？ダブルデートって……まさか、一夏さんと！？あ、相手は、一夏さんの相手は誰なんですの！？」

「模擬戦に勝ったら教えてやるぞ？」

「うふふふふふふ……望むところですわ……！」

ちょ、怖いよ！なんかドス黒いオーラ漂ってるし！悪霊にでも憑かれたのか！？むしろ一夏に憑いた方だな。やべ、うまいこと言った。

結局セシリアの気迫に気圧されたり、急に動きがよくなったビットやセシリアに対応できず、模擬戦は負けてしまった。まあ一夏の不幸はカルピス原液の味、が俺の座右の銘なので嬉々として教えたのだが。

その後、一夏が追いかけ回されたのは言うまでもないお約束ってことで。

オリキャラ武装説明（前書き）

希望があったので、今の時点の一弥の武器を並べてみました～

オリキャラ武装説明

Ｍａｉｎ　Ｗｅａｐｏｎ

・雨簗（あまかがり）

分類：剣状多腕式誘導突貫縛鎖

詳細：黒奏の初期装備。両刃で、先端がナイフのようにとがっている。鎖のように扱うことが可能で、核となっている部分は操縦者の１メートル以上は離れない。全部で８本。敵ＩＳに巻き付けて捕縛したり、シールドエネルギーに穿たせることも可能。長さは無限大にある。ナイフ、鎖、核の全てが黒色で覆われている。黒奏第一形態《不動月桂》の武器。

・怒雷（いかづち）

分類：剣状多腕式誘導削裂縛鎖

詳細：黒奏第二形態《月下閃影》の武器。先端のナイフはさらに長く鋭くなった。鎖の部分は稲妻状の刃が突き出し、削ったり斬ったりすることが可能になり、動きの速さも格段に上がった。全部で１１本。

Ｓｕｂ　Ｗｅａｐｏｎ

・緋焔（あけほむら）
・氷如月（ひさらぎ）

分類：玉射式斬裂粒子剣

詳細：細剣（レイピア）のような両刃の近接ブレードだが、箒の石蕗（つわぶき）と空裂（からわれ）とは異なり、実体がなく剣身は完全に粒子。全長は箒の刀より少し短いくらい。今の一弥は偏光制御（フレキシビリティ）で曲げることくらいならできる。操縦者の任意で振るった軌跡に粒子の粒を生み出すことができ、銀の福音（ゴスペル）の放つ粒子弾ほどではないが、小爆発を起こす。斬ったり突いたりできるが、粒子なので受けができない。しかし、同じ粒子なら弾（レーザーなど）いて軌道を曲げることができる。

・桜閣（おうかく）

分類：四二口径マシンガン

詳細：マシンガンの割にはなかなか大きい方の口径をしているマシンガン。両手用に開発されたが、黒奏《不動月桂》時のスペックなら片手で扱うことも可能。銃身の色は桜色とは程遠く、完全な黒。

・胡蝶（こちょう）

分類：七二口径アサルトカノン

詳細：とにかく口径がでかく、特殊な銃弾しか装填できない。同じく両手用だが、黒奏《不動月桂》時なら片手持ちが可能。銃身は銀色に輝いている。最大2発まで装填可能。

銃弾の種類・本編
・爆発（バースト）
・煙幕（スクリーン）

本編外
・閃光（フラッシュ）
・轟音（カノン）
・散弾（スプレッド）
などなど。

・天凪（そらなぎ）

分類：粒子散弾銃

詳細：粒子の銃弾を撃ち出す散弾銃（ショットガン）。最大装填数が１０７発とかなり多いが、緋焔と氷如月の生み出す粒子玉のように爆発はしない。しかし、１０７発の粒子の銃弾が大きな衝撃波を引き起こし、敵ＩＳの体勢を大きく崩すことが可能。

第三十五話　Ａｑｕａ　Ｓｐｌａｓｈ

夏の陽射しはとどまるところを知らず、本日も刺すような日光が降り注いでいる。今日も太陽系はすこぶる絶好調らしい。誰得な話だ。そろそろ太陽のアンチクショウに自分の身分を理解させてやりたいところだ。

そんな真夏日真っ只中、俺達は今月できたばかりというウォーターワールドに行くところだ。聞いた話によると、前売券は今月分はすでに完売してしまったらしく、相当人気があるんだとか。知り合いから都合が悪くなったから、と言われてもらいうけなければ、一生縁がなかっただろう。

もらったチケットは二枚だけ。当然、行けるのも二人だけとなり、休みに男女二人で遊びに行くとなれば立派なデートだ。「色んなプールがあるんだってな」「うん、すっごい楽しみ！」あんまりはしゃぐなよ？」「ふふっ、オッケー」

他愛のない会話がとても楽しい。腕を組み、目的地まで途中までは学園から出ているモノレールで、降りたら歩いて行く。いやあ、もう二度と使うことはないだろうなと思っていた水着をまた着る機会ができるとは。知り合いサマサマだ。屋内プールだし、思う存分涼を取らせてもらおう。

「それよりさ、一弥」

「んー？どうしたー？」

「聞きたいことがあるんだけど、いい？」

長い髪を揺らし、問い掛けられる。肩が震えている辺り、大事な話だということがわかる。俺に答えられることならなんでも答えよう。俺ができる範囲でなら、力になってやりたいからな。

「ああ、どうした？」

「……なんで」

「ん？」

「なんで一夏が来ないのよ――――っ！！」

そればっかりは俺の範囲外です。

◇

「ウォーターワールド？」

「そ。アンタ、夏休みで外出したことなかったでしょ？帰省以外で」

今の時刻は5時を回ったところ、といったところかしら？あたしは一夏をデートに誘うために、一夏と一弥の部屋の前に来て一夏と交渉していた。

でも、ここにいるのは一夏とあたしだけ。一弥はセシリアと一緒に模擬戦をしてるし、他のライバル達も今は一夏の周りにはいない。絶好のチャンス！

「そうだな……うん。たまにはいいな。それで、いつ行くんだ？」

やった！食いついた！

「明日の土曜日よ」

「また急な話だな……まあ、これといった用事もないしな。どうせ

なら外で待ち合わせるか？」

「うんうん！そうね！せっかくだし、駅前で待ち合わせがいいわね！」

やりい！すっごくデートっぽい！むしろこれデートよねっ！

心の中でグッとガッツポーズ。夏特有の暑さは嘘のように吹き飛んでいた。他のライバル達も出遅れてるみたいだし、あたしが一歩リードしてるわよね！

心の中で両手を上げて喜んでいると、向こうの廊下から一弥が歩いてくるのが見えた。っと、いくら一弥でもバレたらマズいわよね。

「じゃあ明日の１０時、駅前ね！忘れるんじゃないわよ？」

「おう、了解だ」

やった！やった！ふふっ、明日が待ち遠しいわね！早く戻って準備しなきゃ！い、一応下着とかも用意した方がいいわよね！？あ、アイツに限ってありえないけど、万が一、万が一のためにね！

◇

「はぁ～やっちまった……まさかセシリアに負けるとはな～……」

「お、一弥。お疲れ様」

「おう。あ、そうだ一夏。千冬さんが《白式》の点検するから明日整備科に来いってよ」

「え？明日？それって何時からだ？」

「んー……１０時だったかな。なんかあるのか？」

「あー、ちょっと約束が……どうするかな……」

「約束？明日は一日オフだし、代わりになれるならなってやるぞ？」

「じゃあこれ渡しとくよ。１０時に駅前で、あと水着も忘れないよ

うにな。断りのメール入れないと……ん？」

ドドドドド……！

「一夏ぁっ！ラウラとデートとはどういうことだっ！？」
「一夏さんっ！納得いく説明を要求しますわ！」

「へ？箒にセシリア？ラウラとデートってあの時は――――うぎゃあああ！！」

水着？もらったチケットにウォーターワールドって書いてある通り、水中でのＩＳ活動のテストだろうか？まあこのクソ暑い中涼めるというなら喜んで行くか。

☆　★　☆

「あ」
「ん？」

１０時。予定の時間より１０分前に着くと、鈴がボケッと立っていた。なんだこいつ。こんなクソ暑いのに誰か待ってるのか？ご苦労なこった。

「か、一弥じゃない。どうしたのよ？」

「いや、ちょっと代打でな。そういうお前は？」

「え、えっと！ほら、買い物！買い物しに――――ん？」

♪～♪～♪～♪

鈴の携帯から軽快な音楽が流れる。それをバッ！と音速並の速さで取る鈴。何なんだこいつ。

「うん、あたし。……はぁ！？だ、だって約束――――ちょっと一夏っ！？一夏ぁー！？」

「……一夏はなんて？」

携帯を持って肩を震わせている鈴に問う。まあ十中八九わかるが……

「ふ、ふ、ふ……一弥と楽しんで来てくれ、だってさぁ……」

やっぱりですか。

☆　★　☆

「なあ……やっぱり帰った方が――――」

「断固拒否よ。いーい？一弥。あたしはこの日を楽しみにしてたの。だからこの日はなにがなんでも楽しまなきゃ気が収まらないのよ……！」

理屈のような屁理屈のような……。

「じゃあ……着替え終わったら入口でな」

「……こうなったら一弥を悩殺して一夏に嫉妬させてブツブツ……」

果てしなく不安だ……。だが、俺がそんな心配をしても女子更衣室に入ってまでアイツの世話をする気なんかさらさらないしな。さっさと着替えよう……。

着替えはここに来る前に終わらせたので脱ぐだけ。大体、男子更衣室がありえないほどボロい。女子更衣室がどうなのかはわからないが……世界中の皆さん。平等という言葉をご存知ですか。

「……おし」

ビーサンを履き、オレンジレンズのサングラスをかけ、ふとロッカー脇の鏡を見る。準備万端問題皆無。だが、できればシャルと来たかったんだがなあ……。

「ってやべっ。シャルに電話……入れるべきか？」

まだ付き合ってないからなー……。でも後で知ったら膨れるだろうし。まあメールだけ送っておこう。

To：シャル

『世界の思惑により、混沌の世界に足を踏み入れてしまった俺。真実は、いつも一つ！注：鈴もいるよ』

こんなもんでいいか。送信……完了っと。んじゃ鈴を待たせるのもなんだし――

Ｐｉｐｉｐｉ！

って返信早いよ！これが今時のＪＫか……！侮ってたぜ……！この速さ。まさに世界を揺るがす！

Ｆｒｏｍ：シャル
『意味がわからないよ！（＜＿＞）』

ですよね。

☆　★　☆

「ごめーん、待った？」

「待ったわよ！なんで男のくせに女のあたしより遅いのよ！普通こういうの逆なんじゃないの！？バカなの死ぬの！？」

おぉう、相手に喋らせる隙を与えない、まさしくマシンガントーク。ってかテンション高いね。

「随分気合いの入った格好だな。まあ……いつかは成長するさ」

「どこ見て言ってんのかしらぁ……！？」

「……全部？」

「殺すわ」

「まあ落ち着け。ほら見ろよ鈴。観葉植物だ」

「アンタ話題逸らすつもりないんでしょ！？話の切り替え方が雑すぎんのよ！」

「冗談だよ……んじゃ、まずは何するかな」

「ウォータースライダーよ！乗って乗って乗りまくるんだから！」

すべりだいを往復する子供かお前。だが、結局ウォータースライダーに乗ることに。結構な列ができていて、３０分待ちらしい……暇だな。

「なあ鈴。そういえば、こんな話を聞いたことがある」

「ん？なによ？」

「実は……両方の胸に注射器でモルヒネ打つと、胸がでかくなるんだと」

「ほんとっ！？ねぇ一弥！それほんとなの！？アンタ今モルヒネ持ってない！？」

「いや……軽い冗談だったんだが……」

必死にも程があるだろ……。ってかそう言われたら本当にモルヒネ打つつもりだったのか？あれ麻薬なんですが……。

「一弥、アンタねぇ……！」

「まあ落ち着けって。幼児体形も一部の人間ならいやらしい目で見てくれるぞ」

「だからあたしは幼児体形じゃないっての！これからが成長期なのよ！」

言ってて悲しくならないんだろうか……？でも俺の見立てだと鈴は一緒成長することはないだろう。ずっとこのまま幼児体形……不憫すぎる。きっとこいつは二十歳過ぎても成長すると信じるだろうな……。鈴……たとえみんなに同情の視線を向けられても強く生きてくれよ……。

「……一弥。アンタのその生温かい目がめちゃくちゃムカつくんだけど」

「おっと、俺達の番だな。早く行こうぜ」

「納得いかないわ……」

スタッフの先導に従い、水が流れる土管みたいな中に入る。スタッ

フが何を勘違いしたのか、二人で滑ることになってしまった。

「あーあ。ほんとなら一夏と来たかったのにな～」

そうだよな……鈴は一夏と来たかったんだよな……でも、一夏は来れないから俺が来ることに不満があるんだろう……よしっ！こうなったら今日は鈴を目一杯楽しませてやるとするか。仕方ないな、全く。

「よっと」

「うきゃっ!?ちょ、一弥アンタ何してんのよ!?」

鈴をお姫様だっこで抱え上げる。軽いなー、無駄な脂肪がないからか。

「なに、俺に任せとけ……鈴」

「ちょ、ちょっと!?アンタにはシャルロットが――」

腕の中で暴れる鈴。俺はそのまま土管の中に――

「楽しんできやがれ一夏ゾッコン娘がぁ――――！！」

鈴を放り込んだ。

「うぇ！？ちょ、うきゃあああああああっ！！」

ゴロゴローと滑るどころか転がっていく鈴。あー、ちょっとスッキリした。ってかこれじゃウォーターローリングだな。うまいこと言った。さて、そろそろ俺も行くか。土管の中から怨念が垂れ流れているが、気にしない気にしない。

「イエー！」

スピードが上がり、どんどん速く滑る。うわ、結構楽しいな、これ。

「一弥ぁっ！よくもやってくれたわねっ！！」

「うぉっ！？お前止まってんじゃねぇよ邪魔だろがっ！」

「うっさいこのふぎゃっ！？」

逆走してきた鈴をドロップキック。もしこの場にプロレスのプロデューサーがいたら間違いなくスカウトを受けていただろう。いやそれどころじゃないっ！鈴が変な風にドロップキックされたせいで俺までバランスを崩して――

「「うぎゃあああぁぁっ！！」」

……そのままゴール。後に残ったのは絶大な疲労感だけだった。

☆　★　☆

そんなハプニングがありながら、波プールや流れるプールなどで遊び、また着替えて帰りのモノレール。

「うーん……！今日はなかなか楽しかったわね！」

背伸びをして笑顔を見せる鈴。確かに楽しかったな。

「まあ最初のはなしにしとくか」

「あれは完全にアンタの過失でしょうがっ！なにあたしのせいみたいに話してんのよっ！」

「何言ってんだ。せっかく来たのに楽しまなきゃ損だろ？」

「あたしを放り込むことがアンタの楽しみなワケ！？どんな性癖よっ！どう考えても自分が楽しんでたでしょっ！」

「気のせいだと信じとけ」

「はあ……って何今の言い方。確信犯じゃない！」

日本語って便利だよね。

「まあ、七割くらい一夏一夏ってうるさい見た目も小娘のヤツの腹いせも入ってたが、一割くらいはほんとに楽しませようと思ったんだよ」

「……残りは？」

「面白そうだったから」

はぁぁ～……と日本海溝より深い溜め息を吐く鈴。それを見てまた笑う俺。

その光景に、ふと中学時代を思い出した――

第三十五話　Ａｑｕａ　Ｓｐｌａｓｈ（後書き）

文才が育ってると信じて、挫折した道をもう一度！頑張ります！

35．5話　桜の下の友情（前書き）

悪ガキ戦隊・ガキレンジャー！

はーじまーるよー

35．5話　桜の下の友情

春。新春、桜舞う季節。

俺達三人は無事……とは言い難い卒業式を終え、春休みを満喫し、中学校の入学式。パリッとしたワイシャツが身を包み、学ランを肩に引っ提げる。今日は入学式だけなので筆記用具の類は必要ないはずだ。ランドセルがなくなったおかげでいつもより軽い体に鞭を入れ、颯爽と疾駆する。3分で歩行に早変わり。これは遅刻決定かもしれない。

いやいや入学式から遅刻なんて冗談じゃない。そんなことになれば教師どころか他の新入生からも目をつけられてしまう。それだけは避けたい。

大きく息を吸った瞬間、一陣の風が桜を散らす。たなびく前髪をかき上げ、ちょうどよく吹いた追い風に乗って風になろうとした、瞬間だった。

「遅刻遅刻〜！遅刻する〜！」

目の前をパンを食わえて疾走する生徒。とりあえずその俺のストレスの原因のようなヤツを蹴り飛ばし、これからお世話になる中学校へ急いだ。

「コラァ！てめ、人蹴っといて――――って俺のパンがっ！？」

雑音には耳を傾けない。疲労がますだけだからな。

☆　★　☆

「おっそいわよ一弥！」

「もう入学式始まるぞ」

なんとかギリギリセーフらしく、門の前で男女二人がこっちに向かって手を振っている。一夏と鈴だ。一夏はバリバリ新入生ですよ、と言わんばかりにキッチリと学ランを着こなしている。一夏のツンツン黒髪とよく似合ってるな。それに対し、鈴はセーラー服を適度に着崩し、身長のことを除外したら新入生どころか上級生にも見えないこともないかもしれない。胸の赤いリボンと白を基調とし、青のラインが入ったセーラー服が、鈴のツインテールにとても似合っている。なかなかデザインがいい制服だ。ついでに男子の制服ももう少し格好よくしてくれたら文句なしなんだが。それにしても鈴がセーラー服を着てるとコスプレ？と聞きたくなってしまうのは俺が

悪いんだろうか。

「鈴、コスプレか？」

「ふんっ！」

疑問を口に出したら溜め０のフックをかまされた。痛いです。しかも的確にみぞおち狙わないで。死ねるから。

「それより早く校舎に入ろう。初日から遅刻なんて御免だからさ」

「ぐふっ……了解……」

痛む腹を押さえ、上がった息を整え、校舎に入る。そういえばさっきのバンダナ野郎はどうしたんだろうか。フラグだけは立たないでほしい。

☆　★　☆

長ったらしい校長の意味の有り難い（ようするに必要ない）話もついに乗り切り、決められた教室へと足を運ぶ。俺達三人は嬉しいことに同じクラスだ。新しい友達、というのも魅力的だけど、やっぱり一夏達と一緒なのは素直に嬉しい。

「あ？鈴、お前留学生だから職員室行かないといけないんじゃないのか？時間ねぇぞ」

「あ、あぁぁぁっ！！忘れてたっ！いっ、急がないと！」

「ご愁傷様なこって」

猛然とダッシュする鈴。ああ、廊下を走るなというのに……途中ですれ違った女子生徒もびっくりしている。にしてもやっぱり速いな鈴のヤツ。

「ねぇねぇ！さっきの娘って君達の知り合い？」

そういえば鈴のヤツ職員室の場所知ってるのか……？と少し心配になったとき、その鈴がすれ違った娘が声をかけてきた。身長は俺達より低く、鈴より高いくらい。長い栗色の髪と整った顔立ちが印象

的で、活発という文字が似合いそうな娘だ。

「そうだけど、何か用か？」

「あの娘、何組かわかる？」

「俺達と同じだから……ほら、そこの教室だ」

言って、着いたばかりの教室を指差す。至って普通の教室で、特に違和感はない。

「あ、あたしと同じクラスなんだー！よろしくね！んじゃバイバイ！」

教室のすぐ近くまで来ているというのに全力疾走する女子。うわ、あの娘も速いな……鈴といい勝負だ。まさに台風、という言葉がピッタリだ。

そういえばあの娘はなんで鈴に興味を持ったんだろう？そんな疑問を抱えながら、一夏と我らが教室に足を踏み入れたのだった。

☆　★　☆

「えー……皆さんのこれからの、ね。一年間担任をすることに、なりました。えー……よろしくお願いします」

教室。社会の荒波に揉まれた廃人のようなオッサンの挨拶から始まり、中学校に上がったら規律をうんたらとか社会的な振る舞いがどうたらという話を聞きながし、途中遅れてきた鈴を弄ったりしていると、ガラッ、というドアが開く音がした。

「すいませーん、ちっとばっか遅れちまいました」

ウザッ。

「ああ、五反田君。空いている席に座ってくださいね。えー……これからはこんなことがないように」

「うぃっす！」

無駄にバカデカい声で返事をするバカ。というか規則にひっかかってもおかしくないバンダナをつけているところを見ると、さっきのバンダナ野郎のようだ。そんなことを思っていたら、バンダナ野郎と目が合った。ってか席隣かよ。

「ああっ！お前、朝俺のこと蹴ったヤツだな！？」

どうやら俺はフラグというものを甘く見ていたらしい。俺が知っているフラグというものは朝にパンを食わえた女子と曲がり角でぶつかり、少し口論をして学校に来てみたら同じクラスだった……というのが俺が持っている知識だが、まさか朝にパンを食わえた男子を歩道で蹴り飛ばしてもフラグと認められているらしい。フラグというのは女子との甘いイベントと夢見ていたあの頃を返してほしい。まさしく甘く見ていたという言葉がよく似合いやがるな。

「五反田君、昨日女性をたぶらかしたせいで寝坊したことを僕のせいにしないでくれよ。それに、女遊びはほどほどにね？」

「驚いた！俺の名前以外嘘しか言ってないぞお前！それに俺の地位を操作するのをやめろぉっ！！」

「そっか。精神科から帰ったばっかだったね。頭の病人っていってもやっていいことと悪いことがあるのに……」

「待て！どこからツッコめばいいかさっぱりだ！まずはそのさりげない罵倒をやめろっ！初対面の人になんてこと言ってくれちゃってんだ！？」

テンション高いなこいつ。

「まあ少し落ち着けよ。頭に血が上ってるのか？窓に頭突きすれば血も引くんじゃないのか？」

「お前のせいだろうがよっ！？しかもその方法は血が引くどころか吹き出るだろっ！！まだ死にたくねぇっての！」

「えー……五反田君、静かに、ね。してください」

「く……っ！覚えてろよなっ！」

小悪党みたいなことを言って席に座るバンダナ。教室から退散とかはしないらしい。どうせなら最後までしっかりと演じてほしいもんだ。ってかセンセ、どうせならバンダナも注意しようよ。校則スレスレ（でアウト）だと思いますよ？

この学校の校則について少し思うところがありながら、その日の簡単な自己紹介とＨＲを終えた。

☆　★　☆

「おい音無一弥！」

「よし一夏帰ろうぜ」

「えっと……呼んでるぞ、一弥」

めんどクセェ……

「お前っ！シカトするんじゃねぇよ！」

「ごめんな、えっと……五反田弾、だったよな？俺は織斑一夏、一夏って呼んでいいぜ」

「おう！じゃあ俺も弾でいいぜ！よろしくな、一夏！」

「じゃあ俺のことは皇帝陛下って呼んでいいぜ」

「おう！皇帝陛……ってなんでお前まで混ざってんだよ！しかも図々しいにもほどがあるだろっ！？」

「ま、まあまあ。他にも紹介したいヤツがいるんだよ、弾。えっと……あれ？」

「鈴なら手ぇ引かれてどっか行ったぞ」

確か……野々宮、とかいうヤツだったかな。朝に鈴とすれ違った女子だ。まあ悪意は全然なさそうだったし、大丈夫だよな。

結局その日はバンダナを加えた三人で帰り、鈴とは別々に帰ったのだった。

☆　★　☆

次の朝。同じく遅刻寸前のギリギリで間に合うか間に合わないかの瀬戸際で、少ない体力を振り絞って走っていたとき、パンを食わえたバンダナが通りかかった。蹴り飛ばす。再びダッシュ。なんとか間に合いそうだ。

「うぉぉーっ！俺の朝メシがぁーっ！」

後ろから何か聴こえた気がした。やだな、幻聴か？

「ん……？鈴？」

「あっ！一弥じゃない。アンタも遅刻するわよ！」

「だから走ってるんだよっ。それより、昨日はなんの用だったんだ？」

「んー……ちょっと一緒に陸上部見に行こって言われちゃったのよ。別にどこにも入るつもりないのに……」

「一夏と会えないもんなー」

「う、うっさい！そんなんじゃないんだからっ！」

顔を赤くしてプイッとそっぽを向く鈴。全く素直じゃないヤツだなー。そんなんじゃ一生あの鈍感野郎は気がつかないのに。

走りながら話してもなんとか時間内に学校に到着。バンダナ野郎はまた遅刻ということで俺に突っかかってきた。自業自得じゃん。

「お前が蹴ったからだろうがよ！？」

記憶にございません。

◇

「鈴ちゃん！一緒に陸上部入ろーよー！」

「う……だ、だからぁ……」

休み時間、あたしはずっと野々宮さんの陸上部の勧誘を受け続けていた。困ったなぁ……あたし、部活なんてするつもりないのに……でも適当にあしらうこともできないし……。

「あたしは部活をやるつもりなんてないから、ね？」

「えぇー。もったいないよ、せっかく足が速いのに！一緒に青春をおうかしよー！」

謳歌、って漢字わからなかったのね……この娘、ちょっと天然入ってるかも……。

「ああもう！入らないったら入らないの！無茶言わないでよ！」

結局突き放し、一夏達のいる場所へ、文字通り逃げ込んだ。ああ、またやっちゃった……野々宮さんも怒ってるよね。もう勧誘はしてこないだろうけど……でも、やっぱり友達になりたかったなぁ……

相手を突き放すようなさっきの態度に反省しながらも、やっぱり直すことのできない自分の性格に溜め息……をついたのを見計らったように、休み時間の終了を告げるチャイムが鳴り渡った。

◇

「おい音な――――」
「おいお前らっ！」

「あん？」
「……はあ」
「また……」

午前中に終わった学校の放課後にて。またバンダナ野郎のウザいテンションに付き合うのかと思っていたら、男子４人組に囲まれた。こいつら、確か小６のときに妙に俺達に構ってきたヤツらだ。それまでは適当にあしらっていたが、卒業式に今までの因縁がどうたらこうたらと言って校舎裏に連れ込まれた。まあすぐ近くに先生を呼んどいたからすぐに見つかって無理矢理俺達に謝らせて事なきを得たんだけど。まだ根に持っていたらしい。

「お前ら、チョーシ乗ってるだろ！」
「いつもうるさいんだよ！」
「今日こそ泣かせてやるからな！」

「校舎裏来いよ！」

４人に囲まれているので、拒否権を使うことはできないらしい。腕を掴まれ、無理矢理立たされた俺達は、逆らうことなくヤツらについていった。

「あ……」

所在なさげに佇んでいた、バンダナ野郎を残して。

☆　★　☆

「お前ら、ウゼーんだよ！」
「そうだそうだ！」
「チョーシ乗るなよな！」
「そうだそうだ！」

ところかわって校舎裏。まだ二日しか通ってないのによくわかった

な。まさか下調べとかしてたのか？暇人だなー、こいつら。

「アンタ達、いい加減にしなさいよ！しつこいのよ！」

がう！と言わんばかりに鈴が正論を口にする。な、なんだよお前！とか言いながら少したじろぐ４人組。ん？こいつら、もしかして。

「はっはーん……お前らがなんでちょっかい出してくるのかわかったぜ」

「「え？」」
「「「なっ！？」」」

４人揃って驚く悪ガキ戦隊。それも練習とかしてたのかな。

「一弥、どういうことだ？」

「こいつら、鈴のことが好きで俺達にちょっかい出してたんだよ。どうせうらやましかったとか好きな子の気を引きたいとかそんなところだろ」

「な、何言ってんだよお前！」

「て、適当なことゆうなよな！」

あたふたと慌てる悪ガキ戦隊。一人足りないか？まあそんなことはどうでもいい。

「……こいつらに、好かれるくらいだったら……」

「……鈴？どうしたんだ？」

一夏の声に鈴の方を向くと、肩を小刻みに揺らしながらうつむいていた。そして、弾かれたように顔を上げた。怒りに真っ赤な顔に、涙を目にためて。

「ウザいのよアンタ達っ！もう一生顔を見せないでっ！アンタ達に好かれるくらいだったら……！あたしは、友達の一人くらいほしかったのよっ！！」

「り、鈴！？落ち着け！」

せきを切ったように流れる本音と涙。鈴は……小5のときに転校してきたが、みんなとは国籍が違う、という理由で軽いイジメにあっていた。俺達の通っていた小学校は規模の小さいもので、クラスが一つしかなかったのでずっと同じクラスなのだ。これからもずっと

こうしてイジメられるんだろう――そう思っていただろうが、それを見た一夏がそのイジメをやめさせ、フラグが立った……ということなんだが、やっぱり女子の友達もほしかったんだな……。

「ふ、ふざけんなよっ！好き勝手言うなよな！」

「うるさいっ！早く消えて！顔も見たくないのよっ！！」

「鈴！落ち着け！」

一夏に抱きとめられても、子どものようにいやいやをするように髪を振り乱し、耳をふさぎ、目をぎゅっと閉じる鈴。その目には涙が溢れ、頬には涙が伝っていた。

「う、うるさいんだよ、日本人じゃないくせに！みんな、やっちまえ！」

「チッ……！」

掴みかかってきた悪ガキ戦隊の一人の手を掴み、蹴りを入れる。まずい。運動神経がいい鈴はずっと泣いたままだ。このままだとフルボッコ確定になっちまう。

「一弥！俺も――――」

「バカ！お前は鈴の心配だけしとけ！」

実質1対4。どう考えてもこっちの方が不利だ。俺は相手の拳をいなすことや避けることなら3人の中で断トツだが、囲まれたら避けることなんてできない。絶体絶命――――それでも身構えると、風が吹き、桜が散って――――

「お前らっ！俺の友達に何してくれちゃってんだよ！」

「アンタ達っ！よくも鈴ちゃんのこと泣かせたわねっ！！」

左右から、救世主達が現れた。バンダナと、野々宮だ。

「うぉぉ――――っ！」

「うわぁっ！」

バンダナのドロップキック。吹き飛ぶ悪ガキ戦隊の一人。いやそこは違うだろ……とは思いながらも、心の底では安堵していた。

「先生！こっちです！こっちでイジメがー！」

野々宮の方は先生を呼んできたらしく、曲がり角で手招きをしている。こっちの方がよっぽど頭いいな。

「せ、センコーだよこーちゃん！逃げようよ！」

悪ガキ戦隊の情けない声を筆頭に、クモの子を散らすように逃げる悪ガキ戦隊。どうやらなんとかなったらしい。

「よっ。大丈夫だったか？」

「……俺も友達に認定されてるとは思わなかったけどな」

「おいおいひねくれんなよツンデレちゃんめっ。何か言うことはないのか～？」

「……チッ。バンダナ似合ってねぇな」

「そっちじゃねぇよっ！ってか罵倒されるとは思わなかったよ畜生っ！感謝の言葉は出てこねぇのか！？」

「だからお前はバカなんだよ。知らねぇのか？」

バンダナ――――いや、弾を正面に見据える。

「友達に礼なんて、必要ねぇだろ」

「……へへっ。よろしくな、一弥！」

「皇帝陛下だろうが」

「それまだ続いてたのか！？」

おっと、それよりも鈴が心配だ。

「鈴ちゃん、大丈夫！？」

「野々宮、さん……なんで……」

「やだなー、もう。ほら！あたし達、もう友達でしょ？」

「あ……う、うん……うんっ……！」

「ほらほら、顔ぐしゃぐしゃだよー。フキフキ、っと！」

「ん、んう。自分でできるよ……」

「よかったな、鈴」

「一夏……あ、ありがと……。ねぇ、野々宮さん」

「うん？どうしたの？」

「あたしも……リリちゃん、って、呼んでいいかな……？」

「わぉ！もっちろんだよー！えへへ、鈴ちゃんはかわいいなー！」

「く、苦しいよ、リリちゃん……」

……よかったな、鈴。友達ができて。

「そういえば野々宮。先生はどうした？」

「ふぇ？やだなー、嘘だよ嘘！先生なんてすぐに呼べるワケないよー！」

やべぇ、こいつ侮れない。

「んじゃ、めでたく問題解決ってことで、鈴の店でメシでも食うか！」

「え？マジ？鈴さんも店やってんの？俺んちもなんだぜー！ってか鈴さんのフルネームってなんて読むの？」

「鈴でいいわよ。凰鈴音（ファン・リンイン）……よろしくね、弾」

「そういえばお腹すいたよねー！たくさん食べるぞぉー！」

「今日は一夏のおごりだな」

「か、一弥っ！何言ってんだよ！」

みんなで笑い合い、心が満たされる。これが――俺達、弾とノノの出会いだった。

☆　★　☆

「……や……一弥っ！」

「ん、ん？なんだ？鈴」

「なんだ？じゃないわよ。ほら、学園ついたわよ」

っと……もうついたのか。つい昔のことを考えちまった。なんだか急に年寄りくさくなったな俺……

「で、何考えてたのよ？寝てるかと思えば目は開いてるし、呼びかけにも答えないし」

「いや、ちょっと、な……。……鈴」

「ん？なに？」

「また、５人で遊ぼうぜ。ノノも会いたがってたしな」

「リリちゃん？いいわね！一夏とデートも捨てがたいけど、リリちゃんにも会いたいし！」

たとえ違う高校に進んでも。国籍が違っていても。性別が統一していなくても。

きっと俺達は、これからもこうして仲がいいんだろう。関係を保っているんだろう。

途切れることのない繋がりを身近に感じて――不意に、思わず、つい。涙が零れてしまった。

35．5話　桜の下の友情（後書き）

なんとか書ききれました。前を振り返ってみると少しだけ成長できたのかな?と思います。内容は……別として。

でも……鈴を抱きとめるだと?織斑一族郎党爆発しろ。ひい千冬さん冗談ですごめんなさい。

次もよろしくお願いいたしますー皆さんの感想、心からお待ちしています

第三十六話　二刀双剣（夏祭り編）（前書き）

このペースが普通になりそうです……次回はなるべくはやくお届けしたいですね。

それではどうぞ。

第三十六話　二刀双剣（夏祭り編）

～音無一弥の日記～

今日は鈴とウォーターワールドに行った。ちょっとしたハプニングもあったが、そこそこ楽しかった。帰りには色んなことを思い出し、5人で遊ぶ約束をした。モノレールが学園に着く。シャルが笑顔で待っていた。俺も笑顔を返す。鈴も笑顔。引きつってるのは気のせいだと信じたい。手を繋がれた。あわわ。照れるぜ。みんな笑顔で校舎を歩く。和やかなムード。みんな笑顔。俺も笑顔。シャルも笑顔。校舎裏に着く。首締められた。鈴が詳細説明。空気を確保。父さんと母さんが見えた。お花畑。わーいうふふ、あはは。こっちおいでよー。ひいい。まだ死にたくないですシャルさん。でも鈴と遊んだだけだよ？シャル思いっきり膨れる。抗議するような上目遣い。かわいい。記念撮影。また首締められた。父さん母さんコンニチワ。ひいいまだ死にたくないです。シャルが命令を使った。大富豪のときの。あれまだ有効だったの？聞いたら笑顔を向けられた。顔に「3度目はないよ？」ごめんなさい黙ります。結局シャルとデートに行くことに。嬉しいけど臨死体験だけはもう勘弁してほしい。楽しかったけど心からそう思えなかった一日だった、まる。

PS．シャルとのデート、どこに行こう……。

「ふう……こんなもんかな」

「一弥。夕飯食べに学食行こうぜ」

「ん。了解」

日記を閉じ、学食へ向かう。一応夏休みでもＩＳ学園に残る生徒は結構多いため、学食もやってくれているのだ。ところで、一夏の顔に鮮やかな紅葉が見えるんだが。まだ紅葉の季節じゃないってのに、なにやったんだこいつ。

「……鈴に思いっきりぶたれて……」

「あー……ん？今思えば俺がシャルに怒られたのも一夏のせい……？」

「ははは。今日の学食なんだろな！」

「一夏テメェちょっと待てや！なんだその全力ダッシュ！俺にもツラ貸せやコラァ！！」

学食到着。一夏の頭を小脇に抱えながら（俗に言うヘッドロック）食券をおばちゃんに出す。夏休みで大方の生徒が帰省しているせいか、ぐるりと見渡してもチラホラとしか生徒が見えない。

「おーい一夏ぁー！こっち来なさいよー！」

そのチラホラの中に鈴が混ざっていた。よく見ると全員揃ってるな。お前らなんだかんだで仲いいよな。

「あてて……んじゃ、あそこに座ろうか」

「そうだな」

専用機持ち7人。軽く戦争を起こせる戦力に少し冷や汗をかきながらも、みんなで他愛のないことを言って笑いあう。

「それで一弥。どこに行くか決めてくれた？」

「うぐ……いや、なかなかいいところが……」

「む？シャルロット。一弥とどこか行くのか？」

対岸の箒に声をかけられる。私服を着ている辺り、どこか行ってきたんだろうか？ちなみに俺と鈴と箒以外は全員制服だ。やっぱり訓練とかしてたのか？

「うん。今度は一弥に行き先を決めてもらってね」

「ふむ……」

あごに手を当てて考える人のポーズ。あれ、違ったか？どんなポーズだったっけあれ。

気にしだしたら止まらなくなってしまった。夕飯の間もずっとうんうん唸り、いつの間にか全員が食べ終わっている。やべ、早く食わないと。

「じゃあ一弥。ちゃんと考えといてね？」

「むぐむぐ……ま、任せとけ」

あー……どこ行くかなぁ……全然わかんねぇ。鈴にでも相談すっかな……。

「一弥」

「ゲーセンはないな……遊園地……は、もうすぐ行くし。プール……いやいや下心が見え見えだろ……！うぁぁどこ行けば……！」

「……なかなかレアな構図を激写」

「うぉあっ!?箒!?何撮ってんだ消せ!デリートだデリート!」

「そんなことはどうでもいい。デートの場所を考えているのか?」

「人のキャラをサラっと壊してくれるな箒さん。まあそうだが……何か用か?一夏絡みかそーかそーかさっさとちゅーでもなんでもしちまえコンチクショー」

「なななにも言ってないだろう!ち、ち、ちち、ちゅーなど……!したいけど!したいけどっ!!」

パニクるあまり本音が出てますぜ箒さんや。

「そっ、それより!デートにうってつけの場所があるぞ」

「え?まぢ?」

「まぢだ。もうすぐアレがあるだろう?」

「アレ……ＩＣＫ総選挙？」

「いや関係ないから。むしろあったことに驚きだ」

いやないよ。あっても俺が潰してるな。

「そうじゃなくて……ほら、私の本家の近くで祭があるだろう？」

「ああっ！すっかり忘れてた！なるほど、そこにシャルを誘えばいいんだな？」

「そういうことだ。なんなら浴衣も貸すぞ。どうだ？」

シャルの浴衣……だと……！？……見たい。

「……条件は？」

「……一夏も連れてくること。そして……後はわかるだろう……？」

「オーケー……取引成立だ……」

ガシッと握手。いやはや全く持つべきものは悪友……じゃない。友達だよなぁ。とりあえず日記に追加エピソードができた。

☆　★　☆

「へぇ……変わってねぇなあ」

祭当日。去年も来たし、変わってないのも当然だろう。だが、ここ最近濃い生活を送ってきたせいか、たった一年ぶりの祭も久しぶりに来た気分になってしまう。相変わらず活気があり、色々な屋台が並んでいる。ただいまの時刻、６時。夏で日が高いせいでまだまだ明るい。俺は今、篠ノ之神社の石段に座ってシャルを待っている。なんか知らんが浴衣も装備。深い紺の浴衣だが……ええい、袖が邪魔すぎる。めくっちまおう。

「一弥、お待たせっ」

「ん。……おぉ……」

後ろからシャルに声をかけられて振り向く。そこにいたのは、浴衣姿のシャルだった。

ピンクと白が明るい感じに混ざり合ったような浴衣に朝顔が花開いており、黄色い帯によく映えている。その姿はいつもの明るい印象とは異なり、純潔で清楚な雰囲気を振り撒いているように錯覚する。髪も結ってもらったのか、束ねて片方に長く下ろしており、鮮やかなかんざしがシャルの金髪と見事なコントラストを表現している。

「……すげぇ」

「えへへ……どうかな？」

くるっとターン。結い上げられたせいで見える白いうなじがとても魅力的だ。ほんっとこいつなんでも似合いやがる……。

「畜生……可愛い」

「えへへ……あ、ありがとっ」

顔を朱に染めて照れたようにはにかむシャル。どうしよう……理性がもたないかもしれない……。

流石にこんなことでシャルの信用も失いたくないし警察のお世話にはなりたくない。祭だ祭。祭に集中だ。それか冗談でも言ってないとまぢでヤバい。

「んじゃ、俺の浴衣姿も可愛いか？」

ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべ、袖をまくる。よしよし、大分調子が戻ってきた。

「うん……一弥も、すっごくカッコいいよっ」

俺のターン、2秒でエンド。ヤバい。顔が熱い。あわわ。もうこれずっとシャルのターンじゃないのか。

「なっ、こっ、ばっ、あっ、いや、うぐ……」

「あはは！照れた一弥もかわいいよ？それじゃ行こっか！」

「……完敗だ……」

シャルに手を引かれ、石段を駆け降りる。くそぅ。今日は調子と運と形勢が悪すぎる。

「おーい、かずやー！」

「ん？どうした箒ー！？」

石段を降りる途中で箒に呼び止められる。後ろを振り返ると巫女服の箒がいた。ほー、これなら一夏も悩殺だな。

「１０時になったらあの場所へ行こう！４人でなー！」

「あの場所……ああ、あそこか。わかった！１０時な！」

石段の頂上にいる箒に拳をかざし、握ったシャルの手に力を入れる。さて

「行こう、シャル」

「うんっ！」

ここからは、俺のターンだぜ？

☆　★　☆

「そういえばシャルは日本の祭って初めてだったよな。金魚すくいでもやってみるか？」

「金魚すくい？」

「やればわかるさ。おっちゃん！二人分くれ」

「おう！ほー、こりゃまた可愛いカノジョだな！おしっ！一人分まけてやらぁ！」

「わあ、ありがとうございますっ」

ぺこりとお辞儀してはにかむシャル。がっはっはと笑うおっちゃんの頬が赤に染まっていることを俺は見逃さなかった。

「まあいいか……これで金魚をすくうんだよ。やってみ？」

「ん……わっ、できたよ一弥！」

なんて器用な子……将来が楽しみザマスね。

「んー……あ、破けちゃった……」

「ほら、俺の分もやっていいぞ」

「え？いいの？」

「俺はこういうのは苦手だし、シャルの方は結構得意だろ」

「えへへ、よーし、たくさんとるよー！」

結局合計４匹ゲット。うん、まあまあだな。まあまあすごいよ。だが、こんなにはいらないので２匹だけもらってあとはリリースした。

「おし、次はどうする？なんか食べるか？」

「そうだね。一弥が決めていいよ」

何言ってんだか……

「今日は俺にエスコートさせるんだろ。なのに、俺が決めてどうすんだよ、この優等生」

「あたっ」

軽いデコピン一発。キョトンとしながら額をさするシャルは……小動物みたいで面白い。ってか可愛い。

「そっか……そっかぁ……えへへ……」

「で、何をご所望されますか？」

「うん、じゃあ、あのタコ焼きっていうの食べようよ」

個人的にはチョコバナナが……ゲフンゲフン。あー、なんか今日はのどの調子が悪いなー。

「お姉さん、極上のタコ焼き、一つ頼める？」

「あらイケメン！少し待っててね。もうすぐ出来上がるからね！」

おぉう、俺もなかなか捨てたもんじゃないな。まあ調子に乗ってると痛い目見るし、シャルも膨れるだろうし、これっきりにしとくか。シャルには遠く及ばないしな。やっぱり美少女は格が違うぜ。

「ほら、出来立てだからきっとうまいぞ」

「うん、じゃあ……あそこに座って食べよっか」

指差された先の近くにあった石に座る。どうでもいいが……なんか近くないか？

「じゃあ……はいっ、一弥」

「ん？おう」

言って箸とタコ焼きを渡される。俺が食うのか？

「えっと……か、一弥が食べさせてね？」

「……そうきたか……」

予想外……いや、予想を軽く超えたぜ。

「……恥ずかしくね？」

「エスコートするって言ったのに……一弥のうそつき……」

抗議するような目を向けられた。俺は悪くないはずなのになんでこんなに罪悪感が……納得いかん……。

「仕方ないか……ふー、ふー……ほらシャル。Ｓａｙ，ａｈ（あーんだ）」

「あ、あーん……」

ぱくっ。

「……」

「……」

「……そろそろ離さないか？」

「！！」

ばっ！と離れるシャル。顔を真っ赤にしてうつむき、モゴモゴと口を動かしている。

「はあ……ほら、自分で食え。味なんかわからねぇだろ」

「うぅ……結構恥ずかしいねコレ……」

まあ公衆の面前でやることじゃないよな……。さて、それよりこの後はどうするかな。

「……（キラン）」

「……なんだその効果音。不吉すぎんぞ」

「ね、一弥」

「……拒否権を行使する」

「はい、あーん」

こいつ……！やってくれるじゃぁないか……！まさか仕返ししてくるとは思わなかったぜ……！

「エスコート……だよね？」

「ぐっ……あ、あー……」

ぱくっ。

「どう？一弥」

「……恥ずい」

味なんかわかりゃしねぇ。さて、そっちがそうくるなら次は俺のターンだな！

「それじゃあシャル？あーん、だ」

「ふぇっ！？え、えと……あ、あーん……」

その後、そんな応酬がタコ焼き分続いた。つーかこれ、他人から見たらどう見えるんだろうか……。

☆　★　☆

その後、食ったり遊んだりといつの間にか午後８時半。歩き疲れた俺達は今、椅子に腰を下ろして休憩をとっている。その場所なんだが……

「ガッハッハ！まさかあのカズ坊が女連れるたぁな！明日は大雨だなコリャ！」

「祝福の言葉として受け取っておきますよ……で、なんで射的屋なんて開いてるんです？」

そう、炎の料理人こと五反田厳が開いている射的屋だ。そこの脇にあるベンチに座っている。

「それがよ、ちと耳寄りな情報があるって蘭の奴がな」

蘭って……蘭も来てたんだな。

「ほれ、あそこにステージがあるだろ？あそこでまたイベントやるつもりらしくてな」

「イベント……去年もやってましたね。確かビンゴ大会」

「そうだそうだ！そんで、そん時のことが随分と好評みたいでな。今度はもっと大規模にやろう、ってことになったんだよ」

「へぇ……今年は何やるんです？」

「サバイバルゲームだとよ。それで射撃の腕を上げるんだーって……ほれ、あそこにいやがるぞ」

指差した方向を見ると、同じく射的屋の脇で銃……おそらくモデルガンだろう、それを構えて標的である空き缶を狙っている。

「やっ！」

カンッ、カンッ！という甲高い音と共に吹き飛ぶ空き缶。へぇ……なかなかやるな。

「ふう……あ、一弥さん、と……わっ、彼女ですかっ！？」

「残念ながら違うんだな。にしても、なんでそんなに必死なんだ？」

わざわざ練習することもないだろうに。そう思って聞いてみたらこいつわかってないわみたいな感じで肩をすくませやがった。なんかムカつく。

「知らないんですか？今回のサバゲ、優勝賞品が温泉旅行のペアチ

ケットなんですよ！これに優勝して一夏さんを誘えば……！」

「温泉……旅行……」

あ、ヤバい。なんかシャルが攻撃モードに入ってる。こうなったらもう止められない。

「えっと、蘭、だよね。それ、どこでエントリーできるのかなあ？」

「え？えっと……ほら、あそこで参加者募集してますよ。でもこれペア参加ですよ？」

「そっかぁ。ペアかぁー……ねぇ、かーずやっ」

「勘弁してくれよ……」

拒否権も選択権も俺には与えられてないらしかった。ようするに絶対服従ってワケですね、わかります。

☆
★
☆

『さあー今年もやって参りました、夏祭り恒例イベント！今年の種目はサバイバルゲーム、通称サバゲ！この厳しい激戦を制するのはどのペアなのでしょうか！？』

妙に高いテンションの司会と観客。沸き起こる歓声と拍手の中、俺とシャルはステージに上がる。シャルは観客に笑顔で手を振っているが、正直こっちとしては憂鬱以外の何物でもない。つか帰りてぇ。

『今回のイベント優勝者にはなんと！温泉旅行一泊二日の旅が贈られます！ぜひともこの真夏の日射に負けない熱いバトルを繰り広げてほしいところです！』

真夏の日射に勝てるものがあろうか、いやない（反語）。にしてもぐるっと見渡すだけでかなりの人数が参加しているのがわかる。カップルから親子、友達同士とよりどりみどりだ。そんなに行きたいのだろうか、一泊二日。

「今回は勝たせてもらうぞ、シャルロット」

「僕だって負けないんだからね、箒」

……少なくとも俺の両隣の女子はなにがなんでも行きたいらしかった。これはあれか。俺達もこんな青春ドラマみたいなことをしろってことなんだろうか。

「一夏。俺の屍を踏み越えて先に行け」

「一弥。お前はトップに立てる人間だ」

「「ふんっ！」」

足、というよりピンポイントで小指が踏み抜かれた。しっ、死ぬほど痛い……！ちなみに一夏は箒からみぞおちに正拳をもらっていた。なんか似てるね俺達。嬉しくねぇけど。

「一夏貴様……よもや手加減なんてくだらないことは考えてないだろうな？」

「一弥、真面目にやってくれないと……風穴開けちゃうかもしれないよ？」

「「すいませんでした……」」

『いやいやー！真ん中のカップル２組は知り合いなのでしょうか！？このサバゲの華となってくれそうですね！』

華っつっても刺がありますけどねー。誰だ綺麗な華には刺がある、なんて言ったヤツは。全くもってその通りだよこんにゃろう。

『ではこのサバゲの説明に入りましょう！ルールは簡単。今から渡されるモデルガンにはペイント弾が装填されています。それでペイントが当たったら失格となります！ちなみにペイント弾は特殊なもので一日もすれば蒸発しますのでご安心を！』

司会の説明と並行して渡されるモデルガン。俺のはよくあるベレッタ、という連発式のハンドガン２丁だが、他の奴らはサブマシンガン（シャル）やアサルトライフル（箒）などが渡されている。差がありすぎだろ。ここまで差別化が進むといっそ清々しいな。

『注目はところどころにある武器庫でしょう！ありとあらゆる武器が身を潜めている武器庫をどう活用するかが勝利のカギとなっております！』

弾倉（マガジン）を外して装弾数を確認する。１３……＋１発か。とりあえずセミオートに切り替えておくとしよう。どうせ乱戦になるだろうし、

臨機応変に対応しないとな。

『では、ピストルが鳴った3分後に鳴る2発目のピストルの音で開始となります！皆さんは3分の間に武器庫を見つけたり戦略を立ててください！それでは――開始っ！』

パァンッ！という乾いた音と共に走り出す参加者。俺達もそれにならい、人気のない場所へ移動する。

「さて……以外と人数が多かったし、どうする？とりあえず武器庫ってとこに行くか？」

「うーん……そうだね。これだけじゃ心もとないし」

サブマシンガン抱えてる人の言うことじゃないよな。ジャキッ！って音がかなり猟奇的だ。

「じゃあ行くか。……3分だ」

2度目のピストルの音が鳴り響き、夏祭りサバイバルゲームが始まった。なんだこれ……言っててなんだがカオスすぎる。

第三十六話　二刀双剣（夏祭り編）（後書き）

他作品を見て思いましたが、この二次小説コメディ分が多いですね……。やるときはやりたいです。

第三十六話　二刀双剣（サバイバル編）（前書き）

R15タグ外しちゃいましたが……だ、大丈夫だよね？えろくないもんね……？

第三十六話　二刀双剣（サバイバル編）

「はっ！」

ズダダダッ！というサブマシンガンの豪快な音が夜闇の森にこだまする。放った銃弾できっちり参加者をペイントまみれにしている辺り、さすが実弾を扱う代表候補生だ。俺の出番がフォロー以外に全くない。

「お疲れ。にしても武器庫が見つからないな」

「そうだね……いっそＩＳのハイパーセンサーで――」

「いや、流石にそこまでやるとやりすぎだからな……」

つか不平等だろ。身体能力だけでも反則一歩手前だってのに。

「それより、あちこちで銃声が鳴ってんな……とりあえず気を――」

配って、と続けようとした瞬間、それは起きた。

『ぎゃあああぁぁぁぁっ！！』

「「っ！？」」

なんだ！？多重に響く悲鳴絶叫の方に目をこらす。だが、そこにあるのは闇だけ。祭のせいでところどころに明かりはあるが……見えるはずもない。

「おそらくロケットランチャーの類だろうな……大型マシンガンの可能性もあるけど……」

「でも、銃声がなかったのが不思議だよ……どうする？始末しとく？」

「いや……邪魔な素人を一掃してくれるってことなら好都合だ。鉢合わせたらその時応戦すればいい」

「そうだね。……あっ！武器庫ってあれじゃないかな？」

目の前にあるいかにもなテント。間違いなさそうだな。銃を構えて中に誰もいないのを確認する。

「……よし、俺達が1番乗りらしいな」

「わあ、いっぱいあるね。なににしよっかなあ」

今日の晩ご飯、なににしよっかなあ、みたいなノリで銃の選別をしないでほしい。これが僕達の住む世界です。いろんな意味で汗が吹き出るな。

「俺は……これで十分だな」

手にした武器を袖に忍ばせる。使ってみてわかったが、このベレッタはかなり使いやすい。そこまで武器を変える必要はないな。

「僕の方も終わったよ。それじゃ行こっか」

「……待て、シャル」

淡い光を発する剥き出し電球の下でシャルを呼び止める。……いや発情とかしてないよ。浴衣に銃器ってレアだな、とか思ってないよ！すいません後者はちょっと思ってました。

「入り口に敵……かな？ライフルではないだろうけど……厄介だね。誘い込まれたのかな」

そうなのだ。そもそも、結構時間が経っているのに武器庫に1番乗り、というのが怪しさ花丸満点だ。おそらく、入るときはそれなりに警戒してる標的を武器で釣って一つしかない出口から出てきたところを……

「バーン、ってな」

「ペイント弾だから布を貫通はできないだろうし……立てこもるしかないね」

こんな頼りない照明のテントの中で二人きり……他人から見たらどう写るんだろうか。

そんなことを考えながら、ふとシャルの方を見る。残弾数を数えたり標準を合わせたり……すげー。この状況わかってねぇのかな。むしろわかってるけどそれどころじゃないって感じだ。すごいね温泉旅行。人をここまでやる気にさせてるよ。

武器に、敵に囲まれて30分ほどが経過。しかし……ここでずっと潜んでるってのもつまらん。そろそろアクションを起こすか。

「シャル。囲っているヤツは何人だと思う?」

「うーん……10人、かなあ……手を組んでるんだろうね」

「場所はわかるか？」

「たぶん、入り口中心に囲ってるだろうね」

なるほどね……。

「じゃ、そろそろ行くか」

「篭城はもうやめるの？」

「じっとしてるのは性に合わないし、どうせやるなら楽しみたいからな」

右手に持つベレッタをくるくると人差し指で回す。探り合いは終わりだ。素人と玄人の違い、しかと見せてやんよ。

◇

彼らは、焦っていた。

今、彼らはテントに来た一組の参加者を囲っている。しかし、一向にその二人が出てこないのだ。ステージで見る限り、そんなに武器にこだわるような外見はしていなかったし、対して強そうにも見えなかった。

特に女子の方は観客に手を振っているくらい楽観的だったし、もう一人の男子にベタ惚れのように見えたし、とてもこういった銃撃戦に得意とは思えなかった。

さらに男子の方はやる気のなさそうな態度に、相方の女子に引っ張られているような印象だった。おそらく女子の方が男子の方をこのイベントに誘い、やる気のない男子を焚きつけている……そんな感じだろう。

この『テントに集まった参加者を狙う』という計画は１０人いる仲間が一日かけて編み出した必勝の計画である。必勝、そのはずだった。

「なのに……」

その二人がテントから出てこない。テントの中を確認した感じはあ

ったが、こちらのことはバレていないはずだ。なのに、姿を現さない。その感覚はまるで、底の見えない大穴を覗いているような感覚だった。

「ねぇ……ほんとにあの中にいるの……？」
「いないワケないだろ……いる、はずだ……」

広がる疑念、不安、焦燥。あの二人がテントに入って３０分は経っている。どう考えてもおかしい。こんなに時間がかかるわけがない。そんな時だった。

ズダダダダッ！

テントの中から聞こえる銃声。中に人がいるのは、これで証明された。不安を払うようにやってくる安堵感。全員がホッとし、持っている銃器を握り直し、闇の中に佇むテントに目をこらした――その瞬間。

ズダダダダッ！

『なっ！？』

同じ銃声が耳の内部に響く。しかし今度のそれは、常識的には考え

られない、彼らの後ろから聞こえてきた。

途端にパニックに陥る潜伏者達。そんな彼らを一人、また一人と被弾させ、脱落させていく。今度の銃声はドンッ、ドンッ！という単発な音だったが、慌てふためいている彼らはそんなことすら知覚できない。

一体何が――――彼らのリーダー役がそう思う暇すら与えず、それは目の前に現れた。

冷徹で、人を殺すために作られたものを真似た代物。その存在感は圧倒的で、絶対的だった。銃を持ち上げることすら叶わず、心臓部でペイント弾が弾けた。

「どっ、どうして……なん、で……？」

「ふふふっ」

片目を閉じ、煌めく金髪を揺らして微笑む少女は、美しく、崇高な存在に思えた。思えてしまった。

奇しくもそれは、まるで戦場に舞い降りた、天使の笑顔に酷似していた――――。

◇

「……どうやったんだ？」

俺達がいた武器庫を囲っていたヤツらの一人が質問してくる。その答えを示すために、足元に落ちていた……というより投げたものを拾った。

「つまりはこういうことさ」

足元に落ちたもの、すなわちケータイを操作し、1分ほど待つ。すると……

『ズダダダダッ！』

「っ！？」

「さっきテント内で銃声が聞こえただろ？あれはこれを録音するためだったってワケさ」

「な、ならなぜ！なぜそこにケータイがあるんだ！？おかしいだろう！」

「それは、あなた達が僕の銃声を聞いたすぐ後に一弥が投げ入れたんですよ。あなた達の背後にね」

「そこまで忍耐力がないくせに待ち伏せなんかするからだ。あんたら、この銃声を聞いて油断しただろ？敗因はそれだ。じゃあな」

あんぐり、と口をバカみたいに開けているオッサンを放って森の中に進む。つか……ケータイ、壊れてないよな……？

☆　★　☆

その後１０分ほど経過し、エンカウント率もそこそこ落ちてきた頃。あの時々起きる悲鳴絶叫を聞き流しながら森を進む。にしても銃声が聞こえたり聞こえなかったり……一種の七不思議だな。

「一弥」

「……何人だ？」

言うまでもなく敵だ。姿勢を低くしてシャルが指差す方向を警戒する。毎回このパターンだ。シャルが索敵、猛然と突っ込むシャルのフォロー、殲滅完了。正直つまらん。はやく終わってほしいもんだ。

「大体１０人、だけど……」

はっきりしないシャルの声色。珍しいな、今まで戦乙女のごとくサブマシンガンやらアサルトライフルやらショットガンやらをぶっ放してたくせに。

ちょっとからかってやろう、そう思ったときだった。

『うぎゃあぁぁぁぁぁっ！！』

「……！」

１０メートルほど離れていてもそれがわかる。闇色に染められた森

が悲鳴と共にピンク――ペイントの色に書き換えられていく。10人を相手にしてもオーバーキルと言うべきペイントの量。ペイントだけで水たまりができているほどだ。

なるほど……このチートに等しい銃を持ってるヤツが優勝候補みたいなヤツであり、今までの悲鳴絶叫の原因か。

臨戦体勢に入るシャルにならい、俺もベレッタを構える。ピンクに染められた闇の中を悠然と歩いてくるその殺戮者に標準を合わせて。

「お？誰かと思ったらカズ坊じゃねぇか！」

「は……？厳、さん……？」

大型のマシンガンを肩にかつぎ、それでも悠々と歩いてくる五反田厳。いやその銃って、もしかして……！

「そ、その銃……」

「ん？これか？いやー、蘭が武器庫を見つけてよ。とにかくデカいのにすっか、ってことでこれにしたんだよ。いや、流石俺の孫娘だ！ガッハッハ！」

ガッハッハ、じゃねぇよ！それなんて銃か知ってんのか！？

「Ｍ６０マシンガン……！？」

「えむろくじゅ……ええい、詳細なんて気にしねぇ。んじゃカズ坊には悪いが、ここで脱落してくんな！」

ガシャンッ！という音と共に向けられる複数の銃口に、ジャラジャラと音を立てる大型ペイント弾。流石のシャルも顔を青ざめている。そんなの当たり前だ……！千冬さんの武器講座で習ったので知っている。モデルガンだが、あれは米国が開発した重さ１０ｋｇにもなる――――

戦争用の、機関銃なのだ！

「よ、避けろぉぉぉ――――っ！！」

「わ、わあああぁぁぁぁぁっ！？」

シャルと俺はそれぞれ左と右に大きくジャンプ。そして、次の瞬間

――――

ばりばりばりばりばりぃ――――っ！！

息もつかせぬ、まさしく横殴りの弾雨が殺到した！

「クソジジィ――――ッ！ざっけんな殺す気かぁ――――っ！？」

先程俺達のいたところがペイントまみれになっていく。あんなの食らったらペイントまみれじゃ済まないだろっ！？責任者呼んでこぉいっ！

「ガーッハッハ！いや、これすっとほんとスッキリすんぜ！ほれ、もういっちょだ！」

ガシャガシャッという音が耳に届く。狙いは――――シャルか！高火力のヤツを最初に消そうって寸法かよ！筋肉ダルマが頭使いやがって！

「さぁっすがおじいちゃん！どんどんやっちゃってー！」

蘭いたのかよ！クソッ！蘭の指示だったのか！もう一度、あの弾雨を避けるのは不可能だ。ってか無理だ。体勢を崩してるし、大体避けきれたこと自体信じられない。こうなったら――――あれしかないっ！

「オラァッ！クソジジィッ！こっち向かねぇとてめぇの孫娘ペイントまみれの濡れ濡れR指定にしてやんぞコラァッ！」

「ぬぅぅわぁぁんだとこンのクソガキぃぃぃっ！！」

……五反田厳は聞いての通り、孫娘である蘭を溺愛している。結果、蘭を傷つけたり傷つけようとしたヤツには火山が噴火するがごとく怒り狂うのだ。ってかこわっ！マジで背後に阿修羅とか見えるんですけど！？

だが、作戦通りＭ６０の銃口はこちらに向いた。それが火を噴く寸前、ギリギリで大きな木の影に隠れることに成功して……

ば――――――――――っ！！

今度こそ本当に息もつかない、ジジィの怒りを代弁したような無数のペイント弾が降り注いだ。なんとか木の影に隠れられたな……。

さてと。

「やぁっ！」

予想通り、回り込んだ蘭が木の影に隠れた俺に銃を向けてくる。銃の種類はワルサー。レディースが使う、小型の連発銃だ。火力なら

こっちが勝っているが、ワルサーの特徴は隠蔽（いんぺい）のしやすさだ。他にも足の付け根にワルサーを帯銃していたら弾数で負ける。……それならっ！

「ふっ！！」

パパン！パンパン！という乾いた音が夜のピンク色の森にこだまする。未だＭ６０の連弾は続いているので、木の影から出ないように回避する。確かに練習したかいはあったらしく、俺の元いた場所にペイント弾が炸裂する。が、所詮缶を狙っての練習だ。動いている標的ではない。それに引き換え、こっちはＩＳで『瞬時加速』をしながらの銃撃の練習もしているのだ。飛び込み前転をしながら、こちらも蘭に銃撃する。

「きゃぁっ！」

短い悲鳴を上げ、木の影に隠れる蘭。……ってかさっきから「クソガキぃーっ！出てこぉーいっ！」ってうるさいんですが……仕方ない、その要望に応えるとしよう。弾雨が止んだ瞬間、俺は木の影から飛び出した。

「そこかクソガキッ！」

ガシャッ！という音。今の俺は全くもって無防備だ。今、あのＭ６

0の弾雨にさらされたらひとたまりもなく脱落だろう。

――だが。

「たぁっ！」

「ぬぉっ！？」

バババッ！というシャルのサブマシンガンの音がジジィを襲う。これでジジィは退場。残るは蘭のみとなった。

「わっ、えっ！？」

特攻してくるとは思わなかったのか、俺のダッシュを木の影から見た蘭が驚いたような声を上げる。そして、二丁のワルサーがこちらに向いた瞬間、俺はその向けられたワルサーを両手のベレッタで撃ち落とし、蘭の懐に潜り込んで――両脇腹に一発ずつペイント弾を炸裂させた。

――五反田蘭・厳ペア、脱落。

☆　★　☆

「うぅ……一夏さんとの温泉旅行が……ひどいです一弥さんっ！」

「仕方ないだろ？あんな弾雨の餌食になんてなりたくねぇよ……」

トボトボ、といった効果音が似合いそうな足取りでステージに戻っていく蘭。厳さん？もちろんあのことは冗談だ、なんて言って許してくれるはずもなく、拳骨を一発もらいましたがなにか？畜生、まだ響くぜ。

さて……あとは一夏・箒ペアだが……

「見つけたぞ、一弥。シャルロット。どうやら私達で最後のようだな」

まあ……あんな轟音響かせて見つからないワケないよな。後ろから聞こえる戦国時代の人間のような声を耳に振り向く。

「……そういうことか」

つまり、そういうことだったのだ。あの銃声が聞こえないのに悲鳴絶叫だけ聞こえる現象。あれは厳の持っていたＭ６０では無理だ。さっきのように、とてつもない銃声が空気を切り裂く。

だが――箒と一夏が持っている、木刀なら銃声など出るはずもない。当然だ。銃ではないのだから。

箒と一夏が持つ木刀の刀身はピンク色をしている。なるほど、木刀を身体に当てても退場させることができるってワケか。

それにしても巫女服姿の箒と浴衣姿の一夏……かなり似合ってんな。さっさと付き合っちまえばいいものを。

「よっ、一夏。結局生き残ったんだな」

「ははは……まあ、ほとんど箒のおかげだけどな」

「だろうな。ってことで俺からの提案だ」

「え？どうしたの？」

「この勝負、一騎討ちってことにしないか？一夏はやる気なさそう

だしよ」

うーん、とあごに手を当てて考えるシャル&箒。一夏はやる気なさそう、と言われてむっとした感じだが、何も言わない辺り賛成なのだろう。

「ふん……いいだろう。では、私とシャルロットの一騎討ちだな」

「負けないからね、箒」

「……待て、シャル」

人の話は最後まで聞けっての。

「箒とやるのはシャルじゃない。俺だ」

言って、武器庫で調達し、袖に潜ませておいた、2本の棒を地面に出す。そして、ドンドンッ！とベレッタで棒を撃ち、箒の木刀のようにピンク色に染め、拾い上げた。

「……悪い、シャル。少しだけ俺のわがままに付き合ってくれ」

ずっと前から、双剣術を体得しようと思っていたときから、箒とは一戦交えたかった。なんだかんだで夏の暑さにやられて機を逃し続けていたが……今なら、絶好の機会だ。そのために、この棒も調達したのだ。

「……うんっ。頑張ってね、一弥！」

「……一夏。木刀を貸してくれ」

「ああ、頑張れ、箒」

2本の木刀を持った箒が構える。それに合わせて、俺も2本の棒を交差させ、臨戦体勢に入る。

ここに、サバイバルゲームの頂点を賭け、流派の違う二刀と双剣の剣士達の戦いが今、幕を開けた――――

第三十六話　二刀双剣（サバイバル編）（後書き）

三分割にしてしまいました……なるべく早くお届けしたいです。

第三十六話　二刀双剣（思案編）（前書き）

生身の勝負って書くの難しい……

第三十六話　二刀双剣（思案編）

ざぁぁ――――……

森に訪れた夜風が木の葉を、草花を揺らし、怪しげな効果音を生み出す。森の開けた場所に、俺達サバイバル生存者は、かたや優勝賞品のため、かたや己の力試しのために相対している。

「……」

「……」

二刀を持ち、こちらを殺さんばかりに睨みつける箒。その狂暴的な視線を意に介さず、ありったけの殺意を含んだ視線で箒を真っ向から睨み返す。箒は腰に吊った木刀の鞘に得物の一つを納め、霞構（かすみのかまえ）――刀を自分の頭部の真横に構える型。その繰り出される剣閃の速さから刀が霞んで見えるため、その名が付けられた――でもう一本の木刀をこちらに向けている。

箒のスタイルは……確か、『一刀一閃』……だったか？『相手よりも早く抜き放ち、一太刀をもって必殺とする最速の瞬き』。それが箒のスタイル。なるほど、片手の木刀で隙を作り、最速の居合で俺を斬り臥せるつもりだろう。にしても鞘まで用意している辺り、本気でこのサバゲに取り組んでるみたいだな。

「……これは必要ないな。持っててくれ」

眼鏡を外し、シャルに放る。視界が若干ぼやけるが、今はコンタクトがない。眼鏡で戦うよりはマシだ。

俺は箒のスタイルに対抗するように、右腕で首を隠すように左からの斬り払いの構えを作る。左手は棒を下げ、下段の構え。そして姿勢をぐっ、と低くする。

ＩＳでの戦闘は機動があるのであまり役には立たないが、今のような状況なら『読み』が必要になる。上段か？中段か？下段か？突きか？それらの情報を相手に与えてしまうことは致命的なミスとなる。

初動を見破らんと俺の動きを凝察する箒。自分の構えを余すところなくさらけ出す俺。二人は構えた状態のまま動かない。俺の神経は極限にまで磨かれ、冴えた頭をリラックスさせるように、さらに研磨するように、軽く両手の棒を握る。

――果たして、一際強い夜風が横殴りに吹いた。

「「――――っ！！」」

１０メートルほどの距離をお互いが全力で地を蹴り、瞬時に駆け抜ける。俺は右手首を返し、斬り払いに見せかけた渾身の突きを箒の右肩に向けて放つ。

「ふっ！！」

短い気合と共に身体を左側へ傾ける箒。それと同時に左腰に吊った木刀を右手で一気に抜き放つ。まさに雷光とも言うべき剣速。

「はっ……！！」

その動きを読んでいた俺は身体を逆時計回りに捻り、逆手に持った左手の棒でそれを受ける。

カァンッ！という集積された木材の甲高い音が静まった森に響く。勝負が始まった、と脳が遅れて知覚した瞬間、肌がちりちりと痺れるのを感じた。今、俺は箒に背を向けている状態だ。要はがら空きの隙だらけ。箒が左手の木刀で俺の脇腹を斬りかかる。先の居合ほどの速度はないものの、それでも突きを繰り出した右手を引き戻して受けている時間など皆無なのは明らかだ。

避ける暇もない――――そう知覚した瞬間、俺は身体全体で後ろ向きのまま背後の箒に体当たりした。

ドッ！という鈍い音。一夏との初陣のときのように、ゼロ距離ならば剣閃は当たらない。箒の左手の木刀は行き場を失い、俺はそのまま箒を突き飛ばす。

「らぁっ！！」

そのまま身体を思いっきり捻り、遠心力と捻転力を込めた右斬り払いを見舞う。ゴォッ！という音と共に俺の剣は風を斬る。

箒はすぐさま体勢を整え、受け止められた居合を行った右の刀を引き戻し、俺の下段を受けた。

カァンッ！と再び鳴り響く高音。俺はようやく慣れてきた下駄で大きくバックステップ、剣を引き戻して箒と距離を取る。

――――やっぱり、強い。

いや、強すぎる。身のこなし、剣閃のスピード、居合のタイミング、受け流し、全てが磨き抜かれている。当然か。箒はずっと鍛練を欠かさずにここにいるんだ。あれくらい、当たり前なのだろう。

それに比べ、俺ときたら動きが雑だし、双剣も生かしきれていない。さっきのも全て運が良かっただけだろう。

格上の相手。その完成された動きに、自分の弱さを突き付けられたような錯覚に陥る。

――――強く、なりたい。

この戦いで、きっと俺は強くなる。再び地面を蹴り、２本の得物で箒に斬りかかった。

◇

シャルロット・デュノアは驚愕した。

目を凝らしてようやく見えるほどのハイスピードな戦いを目の当たりにして。

ＩＳの戦いではない。生身の戦いだ。それも剣術の。それをあそこまで相手の動きを読み、剣を受け、刀を捌く二人に、思わず驚愕してしまった。

――僕も。

一弥の強さに、思わず見惚れてしまう。同じ万能型のＩＳを駆る男性操縦者。初めて会ったときもそうだった。タッグを組んだときもそうだった。彼は、強い。一体、どこまで強くなるのか。

――強く、なりたいなあ。

願望だけで終わらせるつもりはない。決意を胸に秘め、彼の戦いを見守る。今は、それだけのことしかできないけど。それだけのことを、全力でやろう。

◇

織斑一夏は後悔した。

自分は今まで何をしてきたのか。目の前の二人は今も激戦を続けている。自分は、あの二人より弱い。その事実から、目の前の戦いから、今すぐにでも背を向けて逃げ出したい。

それは、辛い道のりだろうから。生半可な覚悟では、辿り着けない高みだろうから。

――俺も。

箒を、みんなを守る、なんて考えていた自分を殴ってやりたい。このままじゃ、自分は守られる側の人間だ。本当に情けない。

――――強く、なってみせる。

だから、この二人の戦いをしっかり刻みこもう。まず目指すべき目標は、この二人を負かすこと。それだけを考えよう。

◇

篠ノ之箒は喜悦した。

今、目の前にいる幼なじみは幼少の頃から体力が絶望的になかった。筋力、瞬発力、空間認知力は自分よりあったし、他人よりズバ抜けていたが、体力だけはなかった。夏の陽射しを浴びれば貧血を起こし、小学校での持久走は毎回最下位だった。

そんな、普通と虚弱の狭間にいるような幼なじみが今、剣の勝負で自分と対等に渡り合っている。

それが、この上なく嬉しい。

――私も。

一弥の剣を弾き、大きく距離を取る。立ち直る暇を与えないためか、一弥はすぐさま距離を詰めてくる。力とスピードを折り重ねたような、交ぜ合わせたような剣術。目の前の剣士も、自分とは違うものを持っている。自分には力がない。

――強く、ならねばな。

自分のために、仲間のために、一夏のために。そしてなにより、一弥に言われて気付けた、自分のＩＳ（パートナー）のために。だから、今はただ、全身全霊で目の前の剣士を倒そう。

◇

（（（（強くなるために））））

四人の思考が、一致した。

◇

勝負が始まって大体１０分ほどが経過した。そろそろ俺の体力も限界だ。頬に汗が流れ、手足が疲労で震える。受けに徹した箒はまだまだ余裕のようで、息一つ乱れていない。

「シッ！」

「つっ……！」

箒の突きが耳を掠める。体勢を立て直すべく、致し方なく作戦を変更し、バックステップで距離を取る。

……そろそろ限界だ。体力を使いすぎた。激しく脈打つ心臓を静めるように深呼吸し、再び二つの剣を力強く握りしめる。これ以上長

引いたら俺の勝ちは万に一つもなくなる。一息に勝負を決めるべく、俺は二つの剣を肩にかつぐように構えた。

箒もそれにならうように木刀を二つとも鞘に納める。二刀居合……おもしれぇ。その壁、越えてやる。

「一弥。お前の成長に敬意を表して、今ある最強の技でお前を倒してやる」

「ハッ……御託はいい。見せてみろ」

ちりちりという緊張感。箒は腕を交差させ、俺は頭の後ろで剣を交差させる。髪を揺らす夜風が涼しくて気持ちがいい。適度な疲れが身体を温め、自分の最高のコンディションを作りだす。

「篠ノ之流居合、《鬼天門》（きてんもん）。代々受け継がれた技だが、独自の技を生み出そう」

篠ノ之二刀流居合、《妖天門》（ようてんもん）。そう告げた箒は姿勢を低く腰を落とす。箒がスピードで決めにくるなら、俺は力でねじ伏せてやる。

「神機御火鎚（しんきみかづち）」

丸一日かけて編み出した技なんだ。それくらいの力くらい見せてみやがれ。

どちらからというワケでもなく、俺達は地を蹴って握る剣に、刀に力をこめる。頭の後ろで交差させた二つの剣。折り重なった剣を、俺はそのまま力の限り振り下ろす。Ｘの字の中心点、交差部分に全体重を乗せて。

箒は先の居合を上回る速さで二つの刀を一息に抜く。それらは流麗な軌跡を描き、剣閃が交錯する。

双剣と二刀。それぞれの刃が、ただ一点を目指して四つの点となり――

バギィィィィンッ！！

二つの剣が、根本からヘシ折れた。

☆　★　☆

「おー。やってるな」

箒達の表彰式を終えたときにはすでに１０時が過ぎ、少し遅れて４人で約束の場所へ走る。

「わあ……すごい綺麗……」

森を抜けたその先には、色鮮やかな花火が上がっていた。そういえば、祭のたびにここに来てたな。腰を下ろして花火を見る。身体は疲労で悲鳴をあげている。こりゃ明日は地獄に堕ちるな……。

「さっきの勝負、すごかったね」

「おう、まあな」

「やっぱり、一弥は強いよ」

「……ああ」

俺は……強いのだろうか。前に一夏が言っていた。強さとは、心の在処だ、と。俺は、感情の一部が死んでいる。怒り。心の一部が死

んでいてもなお、俺は強いと言えるのだろうか。

……きっと、俺は弱い。根本的なところが、圧倒的に弱いんだ。

――――でも。

「当たり前だ。当たり前と書いてとうぜんだ」

「……それ、当然って言いたいの？」

こいつの前では、強くありたい。なぜなら、気付いてしまったから。

力になるだけじゃ足りないと。俺も……守りたいと。

打ち上がる色とりどりの花火。輝いては消え、また空を光で照らす。

月はその光にたじろぐように月光を引っ込めている。

――――俺は、上を目指せるだろうか。

その後も暗黒の空を彩る花火は、月の役目を取り上げ、空に鮮やかに咲いていく。まるで、月など必要ないとでも言わんばかりに。

第三十六話　二刀双剣（思案編）（後書き）

ギリギリ感が否めないです。

やっぱりＩＳ戦闘書きたいな。

第三十七話　天賦の才は誰が為に（前書き）

遅れに遅れた投稿です……次は早めにできるとイイナ……

第三十七話　天賦の才は誰が為に

「〈スキップ〉」

「……」

夏休みも終わりに差しかかり、快晴という文字がピッタリな陽気。俺達は球技大会で獲得した遊園地のタダ券を消化するべく、モノレールで移動をしていた。正直、こんな暑い日に遊園地に行くなんざ自殺と言っても過言ではないが、シャルが行きたいと言ったから「じゃあ行ってこい」と言ったらいきなり世界が暗転、今に至る。意識が亡くなる（誤字にあらず）寸前のシャルの笑顔が印象的だった。ツッコミ？そんなことする元気も出ない。気にしたら負けだ。

まあモノレール内は結構涼しくて快適なため、こうしてＵＮＯで遊んでるワケだが。ちなみに向かいも合わせて４人しか座れない席なので一波乱起きたのは言うまでもない。結局一夏側に鈴、セシリア、箒が。俺の側にシャルとラウラが来たワケだが。

一回りして俺のターン。前のシャルが「ごめんね」と言いながら〈ドロー２〉を出す。むう……仕方ないな……。

「ははっ、さあ一弥、早く出すがいい！」

「じゃあ……〈スキップ〉」

「……」

聞いてわかる通り、シャル→俺→ラウラ→一夏→箒→セシリア→鈴の順番。一番手札が多いのは俺。〈ドロー2〉引いちまったからな。今の場のカードは青の7。鈴以外の全員（ラウラを除く）はパスだ。さては青がないな？

「手札になかったら一枚引くんだよね？んー……パスかな」

「お前ら（ラウラ以外）青ねぇのかよ？これはもう俺の勝ちだな。〈リバース〉」

「……一枚も……っ！一枚も出せない……っ！」

ラウラざまぁ（笑）。だが、当然そんなことをやっていてもいつかはラウラのターンが回ってくる。今度は鈴もパスで、ラウラのターン。

「くっくっく……今までの憂さを晴らさせてもらうぞ！〈ドロー4〉！」

「ドロー2」Ｎｅｘｔ、シャル
「ドロー2だよ」Ｎｅｘｔ、鈴
「ドロー2よ」Ｎｅｘｔ、セシリア
「ドロー2ですわ」Ｎｅｘｔ、箒
「ドロー2だ」Ｎｅｘｔ、一夏
「えっと……すまん。ドロー2……3枚」

「みぎゃあああぁぁぁぁぁぁっ！！」

ラウラのターン！計２０枚ドロー！遊○王でも手札が多ければいいってもんじゃないよ。知らんけど。やったことねぇし。

「ははははっ！甘いぞラウラ！」

「うるさい黙れ！くぅぅ……！」

全員が残り数枚という終盤戦に、ラウラだけが山札と勘違いするほどの手札を持っていた。ぐぬぬ……！という感じの軽いイジメにあったような涙目に思わず爆笑してしまった。

☆　★　☆

「おぉぉぉ……！」

そんなラウラだったが、遊園地に着いた途端に機嫌が直った。入場ゲートでは少し混んだが、中は案外広く、走り回っても問題ないくらいで、ジェットコースターや観覧車、メリーゴーランドに目をキラキラと輝かせ、全身で早く遊びたいオーラを漂わせている。

浮足立っているのはラウラだけにあらず、シャルや箒、セシリア鈴一夏……というか俺以外が全員顔をほころばせていた。っつーか日陰ってアトラクション作ってくれねぇかな。

「見ろ！あのノコギリみたいなのすごくおっきいぞ！」

観覧車のことだろうか。確かにデカい。観覧車を指差し、満面の笑顔がラウラの顔に花咲く。っつーかなんでノコギリなんてものを連想するんだろう。

「まあ、あれに似た拷問用具がウチの部隊にあるんだがな！」

……疑問は拭い去られたが、ドン引きだった。

「……とりあえずそれは後だ。まずは何に乗るんだ？」

うーん、と全員が悩むそぶりをする……ワケでもなく、乗りたいものは決まっていたのか、全員が口を揃える。

『ヒートレッドマウンテン！』

「……マジか……？」

ヒートレッドマウンテン。それはこの遊園地が誇る超最大規模の名前だ。全体が赤く染められており、山をぐるぐると回っていく感じ。トンネルなどもあり、その破壊力は計り知れず、曰く乗った大人が廃人寸前になったとか、子供が病院に担ぎ込まれたとか、乗る前に誓約書を書かされるとか……というかなりアレな乗り物だ。

「いきなりか？お前ら正気か？マジであんなもん乗るのか？」

「ここに来たら一度は乗ってみたかったのよね！」

「うむ！まあどうせ拷問時のような恐怖感はないだろうが、来たか

らには乗ってみるに尽きる！」

「その通りですわ。まあでも？いつもＩＳに乗っているわたくし達にとってはつまらない代物でしょうけど！」

「すげぇ面白そうじゃないか！こう、怖いもの見たさっていうのか？」

「まさか一弥……怖い、とか言うんじゃないだろうな？」

箒がニヤニヤと笑いながら黒い縁の帽子（シャルが用意した。他にも、ワイシャツなどフォーマルな格好をしている。全く記憶にないのが末恐ろしい）を深くかぶっている俺の顔を覗き込んでくる。くっ……いい勘してるじゃねぇか……！

「ああ……だって……名前からして暑そうだから……」

『ああ……うん……』

みんなの妙に優しい視線が逆に俺の心を深くえぐった。

「……つーか鈴は身長制限とか大丈夫なのかがふっ！！」

続いて鈴の溜め０フックも俺の心臓を深くえぐった。なにこの精神攻撃と肉体攻撃のコラボ。殺す気か？

「ほーら！早く乗ろうよ一弥！きっと楽しいからさっ！」

シャルに始まり、俺以外全員が乗り気のようだ。……待てよ……？最速、っていうくらいならきっと風が涼しくて体力も回復するはず……よしっ！

「おっしゃあっ！ヒートレッドマウンテン攻略に行くぜぇっ！！お前ら、ついてこぉい！！」

『おぉ――――っ！！』

拳を空に突き出すと、それにならうように他のメンバーも拳を掲げる。俺だけ目的が大きく違うが、そこは気にしないことに。

朝早いせいか、１０分くらい待つとすぐに順番は回ってきた。結局鈴はギリギリセーフ、一番前の席を陣取った。二人乗りなので、前から鈴とセシリア、箒とラウラ、俺とシャル、一夏一人、という順番。一夏が一人なのはまあ隣の席は誰になるかで揉めたからだ。若干不服そうな面々だったが、すぐに機嫌は直った。さあ、いざゆかん、赤き山へ！

『ぎぃやあぁぁぁ

二刀流で細切れにしてもなお足りん骨を残さず斬り刻んでやるからなぁっ!!あ、あ、あ、ちょ、ほんとやめてお願いします待ってストップ止め止め止めてぇ――――っ!!いやぁぁぁぁ――――――っ!!助けて一夏あああぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!（失神寸前）」

セシリア「べべべ別にこんなの全然これっぽっちもロンドン塔ほどもここ怖くあああありませんわねいやうそ冗談ですわ怖い怖い怖いですぅっ!!鈴さん騙しましたわねっ!?なにが『乗ったことないの?楽しいわよ～』ですかこの嘘つき泥棒猫!!絶対許しませんわうふふふふふふふふふふあははははははははは、は、は、ひぃっ!いや、いやいやいやぁっ!!お金ならいくらでもありますだからだから助けてお願いします一夏さん助けてぇぇ――――っ、きゃあああぁぁぁぁぁっ!!（ヤンデレ脱出）」

鈴「ふっふーん、なによ、こんなもんなのかしら?拍子抜けね～。拍子……抜、け……あ、あははっ。そ、そんなワケないじゃない冗談よほら怒らないでね?ね?ね!?ううううそうそなんでこんな高いのあーあーあー!!ごめんなさいごめんなさいバカにしてほんとにごめんなさい運営者の方々そして死に腐れ責任者ぁっ!!っ!?ひっ、ちょ、セシリアその不気味に笑うのやめてよ怖い怖い怖いからぁっ!!二重に怖いからもうこれ絶対トラウマいや、いや、きゃあああぁぁぁぁぁぁっ!!助けて一夏っ!一夏一夏一夏ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!（半泣き）」

ラウラ「ぎゃあああっ!?騙したなクラリッサなにが楽しいだこんなの拷問じゃないかいやだ!いやだいやだいやだ!!死ぬ死ぬ死んじゃう!やめてくれほんとやめてこんの鉄の塊風情が図に乗りおってぇぇぇっ!!殺す!絶対殺す責任者運営者創業者開発者関係者全て一族郎党皆殺しだ死んで詫びて償え!!死ぬだけでは生温い３００日かけていたぶり殺し、３００日かけて死体をさらしてやるっ!

！ひゃ、あ、あ、あ、あ――――――っ！！ああっ！？あはっ、あはははははっ！！うぉぉぉぉっ！！わはははははははっ！！（楽しそう）」

一夏「ほ、箒！？セシリアまで！？ちょ、これヤバいヤバいヤバいって！！箒ぃっ！殺人はよせぇっ！ラウラお前もかぁぁぁぁっ！！り、鈴！セシリアがなんかヤバい――――って鈴！？お前まで！？うわ、うわうわうわぁっ！！四人の悲鳴とか笑い声が混ざり合ってお化け屋敷をはるかに越える恐怖感にっ！？み、みんな落ち着くんだすぐに終わるからそうだ！空だ空を見ろそうすればすぐに終わっ、てぇぇぇぇっ！！なんで上見たのに地面が見えるんっ、だぁぁぁぁぁぁっ、ぎゃあぁぁぁぁぁっ！！（事態回避失敗者）」

まさに地獄絵図。ちなみに俺とシャルの会話はあまりなかった。あったとしたら――――

「おー、すげぇ高いな……うっ、日差しがヤバい……っ！早く頂点いけよ……」

「か、一弥……手ぇ繋いじゃだめかな……？」

「ん？怖いなら乗らなきゃよかったものを……仕方ないな。ほら」

「う、うん。えへへ、ありがと……」

「ったく……」

ここまでが幸せだった時の記憶。

「ひっ、いやっ、ここ恐いよ一弥ぁぁぁ……や、やだやだやだぁぁぁ……」

「さ、流石に高いなこりゃ……。速度も出そうだし、風が気持ちいいだろうな！」

「そ、そ、そっか。そうだよね。気持ちいい、気持ちいい……きっと気持ちいいはず……っ！」

「ってあの、シャル？シャルロットさん？握る力が強すぎやしませんか？」

「うそうそうそつきぃっ！一弥の嘘つきこんなの絶対気持ちいいはずないよっ！！うわっ、うわうわうわわわわっ！！きゃあああっ！きゃあああぁぁぁっ！！きゃあああぁぁ――――っ！！！！（悲鳴はかわいい。やってることは悪魔のそれだが）」

「まだ上がるだとっ！？ちょ、ほんとやめて痛い痛いたたたたっ！！手がっ！手がぁぁぁぁっ！！砕ける砕けるちょっと待てどこにそんな握力隠してやがった！？ぃぎゃあああぁぁぁ――――っ！！（パキュッという音がした。幻聴だと信じたい）」

☆　★　☆

「いやぁ、始めはどうなることかと思ったが、なかなか楽しかったな！」

『……』

ああ、前言撤回。ラウラだけは無事だった。他は死屍累々といった感じだが。全員が揃ってｏｒｚのポーズをとっている。ちなみに俺は左手の感覚がないのでそのポーズすらできない。シャル、恐るべし……！

「よしっ！じゃあもう一回行くか！」

『一人で行けぇっ！！』

真の大魔王はラウラかもしれない。そう思った瞬間だった。

……あ。左手の感覚戻ってきた。

☆　★　☆

「……」

「え、えっと……」

地獄から抜け出し、早めの昼食を済ませた俺達は別行動を取ることになった。シャルと二人きりになりたかった、という気持ちも少しはあったが、ただ単に涼める場所を探していたらシャルがついてきただけである。そして俺達は今、広場の噴水の近くに訪れ、コンクリートに埋まっているうさみみの対処に頭を悩ませていた。すぐそばには看板も立っており、『絶対引いてねいいことあるよ特に〈か〉で始まって〈ん〉で終わる人』と書かれている。ああ、めまいが……日射病のせいだと信じたい。

だがしかし、ここまで明確にお願いされてしまっては期待に応えないといけないだろう。悩む必要なんてなかったんだ。最初からこうすればよかったんだな……。んじゃ、せーのっ

「閃け俺のライトニングシュート！」

「ぴぎゃぁぁ――――――っ！！」

バキッ、といういい感じの音と仲良く一緒にヘシ折れるうさみみの片割れ。それと同時に後ろの噴水からざばぁっ、という音と奇声が聴こえてきた。十中億兆幻聴だろう。

「ひどいよかずりんっ！私の生命線が半分に――ってなんでもう片方も折ろうとするの！？ストップストップやめたげてよぉっ！！どうしてそんなひどいことするのぉ！？」

「それはな、地球のゴミク……束。海より青い理由があるんだ」

「地球のゴミク……何！？次は絶対〈ス〉に濁音ついたのが入るよね！？それに青いじゃなくて深いだよ！理由に色は関係ないよ！！」

「いいから聞け。束、お前は俺にとって……特別な存在なんだ」

「かっ、一弥っ！？」

「ふぇ、ふぇぇぇっ！？そ、そんなかずりんってば、特別だなんて……」

「お前は俺にとって……特別腹が立つんだよ地球のゴミクズがっ！！」

「ふぎゃぁぁ――――――っ！！折ったね！？ついにうさみみが原形を留めさせないくらいにしたね！？特別ってそういう意味――――待

ってかずりん。そのすごく爽やかな笑顔はやめてよっ！！いたたまれないよ私っ！！」

「ははっ。気にすんな人型サンドバッ……グ！」

「言い切った！？今の躊躇は大切にしようよ！愛は地球を救うんだよ！？」

「ん？なら俺の地球に対する愛で汚染源たる地球のゴミクズを排除してやるか。素晴らしい愛だな」

「確かにね！言ってることはすごく立派だけどやってることはまんま人殺しだけどね！一回ほんとに焼却炉にポイされかけたしね！！」

「何言ってるんだ。ゴミをダストシュートするのは当然だろ？お、いいところにゴミ箱が」

「待ってかずりん。私のことはもうゴミで決定しちゃったの！？それになんでゴミ箱持ってこっちに向かって振りかぶってるの！？違うよ！ダストシュートの意味が違うよ！！」

「何言ってんだ。ダストにダストをシュートするからダストシュートって言うんだろ？」

「わあいすごいやかずりん。こんな扱いされたのきっと私が人類初だろうねー。あうあう……おいたわしやー……」

「ダス……束」

「うん。テイク2いこうか？」

「……ダスト」

「そっち！？せっかくのシリアスなのに喋ってる相手はゴミなの！？それじゃあかずりんも痛い子だよ！？」

「……束」

「あ、それで言い方直すんだ。えへへ、なんか目から汗が止まらないや」

「塞いでやろうか？チョキで」

「……遠慮します。それよりほらっ！テイク3いくよかずりん

っ！」

「……飽きた」

「誰が感想言えって言ったのさあ！！しかももう飽きたの！？かずりんの顔は三度もないの！？仏さまだって三度は許してくれるのにっ！！ほらっ！テイク４だよ！」

「チッ……束……チッ」

「すごぉく、すごぉくひっかかるけどこの際スルーさせてもらうよ。……かずりん……」

「お前は人類じゃない……ダストだ」

「私のシリアスがこんなにダストなわけがないぃっ！！」

はぁ……めんどクセェ。さっさと話聞いてさっさとダストシュートしてさっさとフルファイアで焼くか。

☆　★　☆

「くすん……くすん……」

「し、篠ノ之博士。これどうぞ」

シャルが泣きじゃくる束にハンカチを差し出す。それを受け取った束は目を拭く動作をしている。

「うぅ……こんなに優しくされたの初めてかもしれないよぅ」

ん？あの束が俺達以外にこんな態度をとるとは。こいつも成長しているということだろうか。それならまずは落ち着くという言葉の意味を理解してほしい。

「僕、シャルロット・デュノアっていいます。篠ノ之博士って、えっと……楽しそうな方ですねっ」

一瞬苦しい顔をしたシャルを俺は見逃さなかった。

「な、なななな、なんだってー！？」

「あ？どうした束」

「かずりんわからないの！？ボクっ娘だよ！リアルボクっ娘が今私の目の前に――――ってかずりん？なんで私の後頭部をわしづかみにして噴水の中に突っ込もうとしてるの！？ストーップ！ごめんなさいごめんなさい！」

真面目聞いて損しただろうが……。

「で？なんでこんなところに来たんだ。箒なら一夏と一緒にいるぞ」

「あー。えっとねー。今日はちょっと特別な用事があるんだよねぇー」

「特別な用事ぃ？……うさんクセェな」

「まあまあ！ほらかずりんっ！観覧車乗ろーよ観覧車！両手に花だねっ！このこのぉ！」

……ほんっとこいつめんどクセェ……。だが、シャルがＯＫを出してしまったので結局乗ることに。正直勘弁してほしい。シャルもなんだってこいつと一緒に観覧車に乗ったんだか。

「そーいやしゃるるんも専用機持ってたよね～。見して見してっ！」

「え？えーっと、それは……」

「大丈夫だーいじょーぶ！束お姉ちゃんにまっかせなさいな！」

「じゃあ……はい、どうぞ」

外の景色は日が落ち始め、いつもの黄色い太陽が赤に染まり始めている。まぶしすぎて直視できないが、その赤い光に照らされている遊園地は、どこか脆さを伴った美しさを表現していた。

「ふむふむ……これをこーしてあーしてちょいちょいぽーんっと！ほいっ！ありがとねん！しゃるるん！」

「いえ、こちらこそ」

「……それが特別な用事か？」

「うん？特別な用事の方はかずりんだよっ！じゃ、ＩＳ見してねん！」

閉ざされた空間で黒奏を腕だけ展開する。それに束はケーブルを差し込み、ホログラムキーボードを打ち込んではうんうん唸ったりニヤニヤしたりしている。危ない人に見えないこともない。

「はいっ、もういいよ！ちょっとメンテしといたからねっ！」

「ん。じゃあ用事済んだなら飛び降りて帰れ」

「まだ死にたくないよ。やりたいことがあるからねん！ほわぁー！夕日！綺麗綺麗！」

膝立ちをして後ろの景色を眺める束。なにがしたいんだか……。わからない。ＩＳなんて創り出して、こいつは一体何がしたいんだろうか。

「……お前は、一体なにがしたいんだ？やりたいことってなんだ？」

「……」

「……篠ノ之博士？」

束は答えない。後ろの夕日を眺めたまま、こちらに表情を見せない。

……が、やがてこちらに振り向いた。慈愛に満ちた表情が、俺に向けられる。

「私はね、かずりん。いっくんと箒ちゃんが大好きなだけだよ。もちろんかずりんも、ちーちゃんも」

「……答えになってねぇよ」

「ふふっ、まだ秘密なのだー」

夕日をバックに束に赤光が差す。その光の強さに思わず目を背けてしまい、束を直視できない。

束らしくもない不自然な表情と振る舞いに、俺は混乱が増すばかりだ。やがて観覧車も終わり、俺達は地上に降り立った。

「じゃあさ、かずりん。君は今の世界が好きかい？私が創り出した、

この世界が」

「……大っキライだ。お前が創り出した世界ってだけで首吊って死にたくなる」

「ふふっ、私もキライだよ。その前の世界よりはマシだけどね」

「……なら、なんで創ったんだよ」

「その答えはさっき言いました！ふふふ、じゃあね、かずりん」

たたたっ、と走って出口ゲートを目指す束。その途中で振り返り、

「――――――」

唇を動かし、なにかを告げた。だが、距離があるせいか、束が口だけ動かしたせいか、俺の、俺達の耳には届かない。なぜ束はここに来た？なにがしたかった？なぜＩＳなんか創った？束が創りたかった世界とは？アイツが最後に紡いだ言葉は？

疑問を残すだけ残して、束は俺達の前から蜃気楼のごとく姿を消した。その後ろ姿は、あくまでいつも通りで。

☆　★　☆

次の日の朝。篠ノ之束が消息を絶ったというニュースが、全世界を駆け巡った。

第三十七話　天賦の才は誰が為に（後書き）

感想お待ちしてますね。作者の元気の根源ですからっ。

第三十八話　忘れられた感情（前書き）

ＧＷも終わっちゃいますねー……休みという休みがなかった……。

第三十八話　忘れられた感情

「じゃあ行ってくるな」

「ああ、楽しんでこい」

早朝。今日は前に参加した祭のサバゲの賞品である温泉旅行のタダ券が効果を発揮する日だ。風呂好きの一夏は楽しみにしており、箒がそれを自分と行くのが楽しみと勘違いしているという負のサイクルも回っていたが。まあ……なんにしろ一夏が今から二日間いない、ということに変わりはないのだが。この二日でアイツらがどう転がるか見物だな。

一夏が部屋から去り、俺一人が残される。外の天気は快晴。夏も終わりかけているというのに太陽のヤツも頑張りやがるな。

「……うしっ」

パンッ、と両の頬を叩き、気合いを入れる。今日は一日ぶっ続けで特訓だ。夜に用事がある、とかいう理由でセシリアも鈴もラウラもいないが、昼からならシャルも来るというし、粒子剣で偏光制御（フレキシビリティ）の練習でもしていよう。

夏休みの学園は静かなものだった。もうすぐ新学期が始まるというのに、更衣室までの道のりにも更衣室にも誰一人、人っ子一人としていない。まあ今までもそんな雰囲気だったのだが。

ＩＳスーツに着替え、ざっとアリーナを見渡す。観客席にも、中央にも誰一人としていない。少しは練習しようぜ……とか思わなくもなかった。

（……黒奏）

頭で漆黒をイメージ、機体の全体像を思い描く。１秒とかからずに俺専用の機体は姿を現した。

俺は目を閉じ、ゆったりと空中を漂う。朝日はアリーナが展開した屋根のおかげで入って来ない。俺はしばらく無重力の中で体をならしながら二つの粒子剣をコールする。俺の両手で淡い光が発生し、形を取ってその姿が空気に触れる。

呼応するように二つの剣が脈打ったのを確認した瞬間、俺は『瞬時加速』を使い、フルスピードでアリーナの外側を駆け抜ける。１周、２周、３周……ルーレットの盤上で円を描く玉のようにグルグルと走り抜ける。

「……ふっ」

１０周目に入って小さく息を漏らし、アリーナ中央上空で静止する。

両の手に展開した二つの剣は未だその輝きを失ってはいない。

――黒奏。白式の姉妹……いや、兄弟機と呼ぶべきか。束が創り出した第四世代機。こいつがもし言葉を発することができたなら、俺になんと言葉をかけるだろうか。弱い自分をひた隠し、友達の前ですら仮面をかぶったこの俺に。滑稽だと笑うだろうか。哀れだと嘆くだろうか。臆病者と怒鳴りつけるだろうか――。

夏祭りで箒と戦った時、ようやく自分の弱さに気づいた。自分は、何一つ持っていないのだと。強いと見せかけた、強いと思っていただけの愚か者だと。そしてそんな自分に問うた。剥がされた仮面の下にあった、本当の自分に問い掛けた。

――俺は、強くなれるのか？と。

答えはない。それは誰もわからないことであり、誰が見ても明白なことだった。そんな自分を奮い立たせる怒りの炎すら現れず、ただ花火に遮られていた月を仰いでいた。

体から力が抜けていき、両手から剣がこぼれ落ちる。俯いたままその堕ちていく様を見つめ、次第に剣は粒子に戻っていった。

……こんなことをして、何か意味があるのだろうか。黒奏は次第に地面に向かって降下していく。気分はまさしく最悪の一言だった。強くならないといけないのに、頭が、脳のどこかがそれを否定する。

『不可能だ』と。

そんな、ネガティブな思考に入っていた時だった。

ドゴォンッ！！

「……」

何かが大きくぶつかり合う音がこだまする。それでも俺は顔を上げることはない。俯いたまま、視線を地面に向けたまま。黒奏のハイパーセンサーが差す方向は真上。連続した破砕音はついに止み、しばしの静寂が訪れる。

俺は顔を上げ、虚ろな頭で状況把握を試みる。天井の屋根は破られ、そのできた穴から5体の黒いＩＳが繰り出してきている。その姿は、女性的なシルエットを描き出し、鋼の乙女を彷彿させる容姿だった。

「……なんだよ、お前ら」

「……」

謎の襲来者は答えない。ただ沈黙を突き通し、俺の仕草、行動を観察しているように見える。何が目的か。誰の指示か。なぜ俺なのか。そんなことはどうでもいい。５体のＩＳに、その身をさらす俺と黒奏。今の状況には覚えがあった。

（……あの時と、同じか……）

まだ自分は強いと考えていた頃。ラウラのＩＳが暴走し、一夏の背中を請け負い、５人の教師に立ち向かったあの時と、今の状況がかぶっている。俺の脳が、そうだと知覚させる。

（……あの時は、３人をはりつけにして中断したんだったな……）

ならば。もし今この場面で、この５体のＩＳを戦闘不能にすれば。あの時できなかったことをすれば。俺はあの頃より強くなっていると考えることができるのだろうか――。

気づいた時には、俺は両手で二つの銃を握っていた。あの時と同じ、ダブラで応戦してやる。そして、俺でも、こんな人間でも強くなれると証明してやる。銃を持ったことで、襲来者達は臨戦体勢に入った。いつ襲い掛かってきてもおかしくない、緊迫した状況。俺は左手の《桜閣》を穿たれた穴から覗く、澄み渡る空に向かって連射する。

「……かかってこいやぁぁぁっ！！」

過去の戦闘が紡がれる。囚われた自分を解放するため、強くあるため、俺は戦いの狼煙を掲げた。

◇

「……一弥……？」

シャルロットは整備科にいた。今日の夜の用事のために、リヴァイヴの点検をしていたのだ。しかし、そんな時に何かが繋がったような錯覚に陥る。それが何なのかはわからないが、繋がった相手が一弥だ、ということだけは理解できた。

場所は……第2アリーナ。激しい戦闘訓練をしているせいか、射撃で薬莢をバラ撒いている……ように感じる。

それだけならまだ納得できた。だが、今専用機持ちは自分と一弥を抜いて全員が外出中である。一人であの量の薬莢を使うとは考えにくいし、訓練機が相手だとしてもあそこまで全力でやらないだろう。彼はそういう人間だ。

何事も相手のことを考え、行動する。自分はいつも影に潜み、文字の通り影ながらフォローをしてくれる。訓練の時も、常に対等なルールを作って模擬戦をし、常に勝っていた。

そんな彼が、全力で戦っている。そんな状況に違和感を感じ、シャルロットは自分でも気がつかない内に走り出していた。

「一弥……っ！」

想い人の名を口にする。いつもなら胸が熱くなり、頬がほのかに赤くなっていただろうが、今だけはその名を呼ぶだけで言いようのない不安が膨らんでくる。

気のせいだと信じたい。迫り来る不安を拭い去るようにシャルロットは廊下を駆け抜ける。ほどなくして、第2アリーナの前に到着した。

変わったところは見当たらない。屋根が閉まっており、アリーナ自体がかなり高いせいで全体像はわからないが、大した銃撃の音もしないし、少なくとも異常は見当たらない。

内心ホッとしたシャルロット。ここまで来たなら少し話をしてからまた戻ろう――そう考え、扉に手をかけた時だった。

「あああぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

一弥の絶叫が、シャルロットの耳を震わせた。

◇

俺が攻撃の意思を示した途端、５体のＩＳはそれぞれが動き出した。
異常な大きさの近接ブレードを展開する者、銃器をコールする者、
アリーナの屋根を破壊したとおぼしきレーザーライフルを構える者。
俺は敵の動きを意に介さず、《胡蝶》を地面に向けて一発、素早く
再装填してもう一発撃ち込み、瞬時加速で真上に飛び立った。道塞
ぐ者を《桜閣》の乱射で蹴散らし、空高く飛翔する。一拍遅れて襲
い掛かる襲来者達を尻目に、俺はハイパーセンサーを切り、静かに
目を閉じた。

カッッ――――――！

目を閉じたのを見計らうように、撃ち込んだ一つ目の弾丸を中心に
第２アリーナが太陽のごとく光の洪水と化す。特殊銃弾、閃光（フラッシュ）。

ギィィィンッッ――――――！！！！

次いで、雷鳴のごとく爆音がアリーナに響き渡る。特殊銃弾、轟音（カノン）。
ＩＳではなく、人体に直接ダメージを与える二つの銃弾が爆散する。

ＩＳのハイパーセンサーはあらゆる視点で見ることが、あらゆる音を聞き分けることが可能だ。その利点を欠点に逆転させるのが、この二つの銃弾である。そのために目を閉じ、ハイパーセンサーを切る、という自殺行為に等しいことをやってのけたのだ。

この攻撃方法は使わないはずだった。使えば、相手の視覚、聴覚に多大なダメージを被るし、タイミングを誤れば自分にもその魔の手が及ぶ。だが、今の俺にそんなことを考えてられる余裕なんてなかった。

だが、俺の予想に反して5体のＩＳは素早い立ち直りを見せた。それでも俺はできた一瞬の隙を突いて5体のＩＳを《雨簪》で貫き、地面に縫い付けた。

……終わった。余りにも呆気なく。過去の戦闘は幕を閉じた。5体のＩＳはバリ、バリッと紫電を走らせ、動かない。達成感の欠片すら見つからず、虚無感だけが残り、俺は絶望した。

「ふ、ざっ……けんなぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

叫び、ＩＳを穿つ。貫く。やりきれない思いをぶちまけるように。痛みから逃げるように。俺の心に、『怒り』が現れる。

いや、『怒り』ではない。悲しいだけだ。この呆気ない幕切れに、俺の強さが証明されるはずもない。なら、どうすればいい？俺はどうすれば強いと証明できる？答えの消滅した問いに絶望し、子供のように八つ当たりをしているだけだ。

動かないＩＳを睨みつける。未だ紫電を走らせている５体のＩＳ。
それを見て急激に脱力し、貫いた雨簑を引き戻すことすら敵わない。

――――――？

５体のＩＳが動きを見せる。だが、体を揺さぶるだけで大きな動きは皆無だ。次第にその紫電は電力を増していく。

「……電……力……？」

動かないＩＳ。動けないのではなく――――動かない？なぜ？その答えに到達する前に、雷のごとく――――いや、雷そのものの轟音が俺の耳に届いた。

バチバチバチバチバチッ！！！！

地面を焦がし、その力の片鱗を見せ付ける紫電。５体のＩＳは動かない。だが、雨簑で繋がれた俺に、その力を回避する術などない。
紫電は雨簑を伝い、俺の身体目掛けて走る。頭が働かない俺は、その様子を信じられないように見ていることしかできない。

「あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

紫電が黒奏のシールドエネルギーを削り、貫き、俺の身体を焦がす。
焼かれる痛みに、絶叫することしかできない。意識が消え、無理矢理引き戻され、また消え失せる。脳が思考を放棄し、苦痛により、その脳にまでダメージを受ける感覚すらする。

「一弥ぁっ！！」

戻った意識が俺の名前を呼ぶ声に反応する。嫌だ。信じたくない。嘘であってほしい。真偽を確かめるべく、声のした方向を向く。アリーナの入場口。そこにシャルが立っていた。

見られた。

「がぁぁっ……！！」

バレた。１番見られたくない人に見られた。強さを裏切った。弱さが露出された。シャルはＩＳを展開し、５体のＩＳに立ち向かう。

俺の姿を見て、何を思ったのか。わからない。知りたくない。絶望されるのが怖い。シャルが特攻したせいか、いつの間にか電撃は止んでいた。でも、痛い。心がズキズキと軋んで、押し潰される。

「うぁっ！」

短い悲鳴に顔を上げる。シャルが戦っていた。５体のＩＳに臆せず、勇敢に。俺を守っている。

「……ふざ、けんなよ……」

ふざけるな。ふざけるな。何がシャルを守るだ。立場がものの見事に逆転してやがるじゃないか。許せない。自分が許せない。情けない自分が許せない。頭に血が上り、何も考えることができない。

「ふっざっけんなぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

死んだはずの感情が、死んだと思っていた感情が現れる。それは、隠されていただけだった。俺の無意識なる手によって巧妙に隠され続けていたのだ。今なら、その理由がわかる。怖かったのだ。『怒り』を現した俺を嘲笑されるのが。失望されるのが。だからあの日、隠したのだ。

「おぉおぉおぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

バシィッ！という音と共に真の姿が白日の元にさらされる。《怒雷》に変換された武器をただ振り回し、狂ったように５体のＩＳを斬り刻む。敵ＩＳ共はそれに臆することなく近接ブレードを叩きつけ

たり、銃撃をこちらに向けてくる。それがまた、怒りのボルテージを引き上げた。

痛みも感じない。ただ、この怒りを発散したい。強かった自分を取り戻したい。確かな意思が、俺の中にあった。近接ブレードを振ってきたＩＳの首根っこを掴み、放り投げ、斬り刻む。レーザーライフルで狙い撃ちされながらも、銃弾の雨にさらされながらも、俺は自分の怒りが具現化したかのような《怒雷》を振るい続ける。

――だが。

「……ぁ、あぁ……」

シールドエネルギーが、ついに底をついた。紫電を浴び続け、銃弾を受け、粒子に焼かれ。黒奏に、限界が訪れてしまった。

いや、もっと前から、きっと黒奏に限界が来ていたのだろう。それを俺が無理に操ったせいで、動きを止めてしまった。

――シャルに弱さを見られ、黒奏を道具として扱った俺に、何も残ってはいなかった。

敵ＩＳが手にしているレーザーライフルが、こちらに向けられる。明らかな殺意。その銃口を、俺は視界に収め、受け入れた。死を覚悟した。

「一弥ぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

敵ＩＳの持つライフルの銃口が必殺の光を発した瞬間、何の防御もしていない無防備なシャルが俺の前に踊り出る。俺をかばうように、両手を広げて。

……こいつは、こんなに強かったのか。虚ろな頭で、ただそんなことを考える。俺が守りたかったものは、こんなにも強かったのだと。

俺は、弱かった――――。

◇

「一弥ぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

無我夢中で一弥を狙うＩＳの妨げになるようにその身をさらす。無防備な一弥はあのレーザーを受ければ、すぐに塵になってしまう。それだけは絶対に嫌だ。

（僕だって……！）

強くあろうとした戦士を、守るために。

（僕だって、一弥を守るんだ！）

シャルロットは強く願う。

（力を貸して。応えて！リヴァイヴ――――！！）

次の瞬間、無慈悲なる輝きを帯びた敵ＩＳの銃口は、光を爆発させた。

第三十八話　忘れられた感情（後書き）

さあ、いよいよ核心に迫ります。

第三十九話　運命（前書き）

タイトル変えました。どうぞご覧ください。

第三十九話　運命

月光。

全てを凍てつかせるような、はたまた癒すような光を放つ月。それは月自体が発しているワケではない。太陽の光が反射して、地球に降り注がせているのだ。

太陽無くして、月は輝きを見せることはできない。月にとって、太陽は必要不可欠であり、決して交わることのない存在なのだ。

光が収束する。シャルの周りに。それは偶然か、それとも運命か。交わることのない二つの天体が、今ここに交錯した。

第三世代機、《ラミュール・リヴァイヴ》。陽光の再誕、という意味を持つその言葉の通り、シャルのＩＳは茶色から黄色……いや、金色に変化している。

そして何より1番変わったのは、背中に漂うように広がる翼のようなオブジェクトだろう。流線的な美を振りまくその翼は、あたかも天使の構図を引き起こす。だが、本体の金色からかけ離れた色彩を見せており、太陽に弾圧されたコロナのような黒に、ホログラムパネルに浮かぶような緑のラインが丁寧に、一定の長さで走っている様は、闇を区切っているように明らかな影、堕天使を演じている。それは、光と影の表裏一体を示すのか、影すら従えるということを暗示しているのか。

穿たれた天井の穴から覗く太陽の光が、リヴァイヴの第二形態移行（セカンド・シフト）を祝福するかのようにまばゆくシャルを照り付ける。

――綺麗だ。

「……っ、ぐぅっ……！」

遅れてやってきた痛みをこらえながら、その姿をしっかり目に焼き付ける。こいつが、俺が守りたいものなのだ。ならば、こいつより、シャルよりも強くあらねばならない。

「……いくよ、リヴァイヴ」

シャルの声に応えるように、右手に淡い粒子が漂う。粒子はすぐに実体を持ち、一振りの剣が姿を見せた。長く、余りにも華奢すぎる剣身には、天空を思わせる蒼い光をまとわせていた。何の飾りもされていない、シンプルなロングソード。だが、それゆえに美しい。

シャルが取った行動は単純なものだった。ただ、空から降り注ぐ陽光にそのロングソードをかざしただけ。たったそれだけのことで、そのロングソードはさらなる蒼い輝きを見せた。その様子を認めたシャルは、その輝剣を真横に構え、５体のＩＳを見据える。

５体のＩＳは動かない。シールドエネルギーは既に空になっているはずが、まだ動く辺り……やはり、無人機だろうか。フルフェイス

の頭部から気配や感情を読み取ることはできないが、こちらの様子を伺うように、その身を動かすことはない。

シャルは剣を握り締め、瞬時加速で5体のＩＳとの距離を詰め――

「――やぁっ！！」

駆け抜けざまに、輝剣を横一文字に一閃させた。

シャンッ――という甲高い音が発生する。斬られたのだ。その答えに辿り着く前に、5体のＩＳは――コアごと、その身体を真っ二つにされた。

危機は去った。その様子を見て、シャルの後ろ姿を見て、俺は安堵したせいか、それとも痛みのせいか――意識が暗転した。

☆　★　☆

暗い、暗い、街。

空は暗黒に覆われ、周りにはビルを思わせる漆黒の建造物が建っている。

ここには一度来たことがある。銀の福音戦でボコボコにされ、気を失った時にこの場所に飛ばされたのだ。鬱蒼とした陰湿な空気は全く変わっていない。唯一、変わったことがあるとすれば――あの歌が聞こえない、ということくらいだろうか。

女の子は姿を見せない。探しても、どこにもいない。耳を澄ませても、何も聞こえない。

ここは、黒奏が思い描く思考の中。ならば、あの女の子は――

「奏」

わたしの名前だよ、と続く言葉が後ろから不意に聞こえてきた。振り返ると、やはりあの時会った女の子が立っていた。黒いワンピースにあどけない瞳、淡い唇、あまり高くない鼻。一体どこから出て来たのか。それは愚問というものだろう。ここは、黒奏の思考の中。目の前の女の子――奏が法律であり、ルールであり、支配者なのだから。俺は招かれたのか、それとも……。

「……奏。教えてくれ」

女の子に語りかける。奏は無垢な瞳で俺を見据えている。一時は道

具として扱ってしまった俺に、そんな権利なんてないことはわかっている。だけど。だけど……

「強さって、何なんだ……？俺は、強くなれるのか……？」

限界だった。体を焼かれ、心が砕かれた俺には、もう何かに、誰かにすがることしかできない。残っていたのは、疑問と痛みだけだった。俺はシャルを守れるのかという疑問。シャルの前で力尽きたという痛み。守る、なんて思い上がっていたのかもしれない。調子づいていたのかもしれない。でも、

「大切だったんだ……俺にとって……」

涙腺が決壊して、涙が溢れる。悔しい。悲しい。情けない。今にも消えてしまいたい。そうだ。大切だったんだ。失いたくなかったんだ。だから、守ると決めたんだ。なのに……守れなかった。そして、逆に守られてしまった。完膚無きまでに、強さをまざまざと見せつけられた。

「彼女を、恨んでるの？」

うら、む……？そんな訳がないだろう。俺は、ただ……

「彼女は、守られることを望んでいるの？」

望んで……いない、だろう。アイツは、強いから。きっと対等じゃないと言って……言っ、て……

「貴方が悩んでいたことはたったそれだけのことだよ」

それだけのこと。それだけのことに、俺はここまで悩んで、悩んで、悩み抜いていたのか。俺は結局、自己満足な悩みを抱えていたに過ぎなかったのだ。自分勝手に決めて、自分勝手に壊れそうになっていただけだったんだ。

「もうこうして会うことはないよね？」

「ああ……でも、いつもそばにいる」

奏に、こうして会うことはもう二度とないだろう。ないように、強くなると決めたから。だけど、いつでもそばにいる。奏は黒のピアスとなって俺のそばにいて、黒奏となって俺の力になってくれる。寂しいなんてことはない。

「さあ、目を閉じて。戻ろう？わたしたちの生きる世界に」

ふわっ、と浮いた奏が俺に近づいてくる気配がする。目を閉じた俺の額に、優しく、唇で触れたような感触がした。

ビルが瓦解する。空が崩壊する。黒の世界は封鎖され、俺の意識は途切れた。

☆　★　☆

目を開けると、真っ白な天井が見えた。薬品の特有の香りが満ちている辺り、保健室に連れて来られたんだろう。体は包帯でグルグル巻きにされ、ベッドに横たわっていた。

「一弥……」

「シャルか……」

俺が寝ているベッドの脇には、シャルが丸イスに座っていた。肩を

すぼめ、悲しんでいる様子は、太陽とはかけ離れている。いや……そうさせているのは俺だったか。

「……紫藤先生が言うには、完治までは二週間くらいかかる……って。それまで無茶はダメだ、って……」

「そっか」

奏のヤツ、実は道具扱いしたことを根に持ってやがるな……。まあ、それだけのことをした俺が悪いっちゃ悪いんだが。

「そういえばシャルのＩＳ、すごかったな」

「……」

沈黙が降りる。シャルは未だにすまなそうな表情をしている。なんでお前が……と思ったが、そんなことを言ってもこの空気に拍車をかけるだけだろう。

「……一弥は、弱かったんだね」

「……そうだな」

「……僕は……ずっと一弥に甘えてたのかもしれない……強いと勘違いして、ずっと頼りっきりだったんだ……」

「……シャル」

「でも……ほんとはそうじゃなかった。一弥は……強くあろうとしてたんだ……」

「……」

「そのことに気づかないで、一弥の悩みを知りもしようとしなかった……一弥の、弱さに……」

シャルの瞳から涙がこぼれる。それは、ついさっきまで俺が流していた涙と酷似していた。自責の涙が、きつく握り締められた拳の上に落ちる。

俺の弱さ、か……。

「そうだな。俺は弱い。守るなんて大それたことが出来る人間じゃなかった」

「……」

認めよう。自分の力量を。心を。だけど、それだけでエンディングを迎える気はサラサラない。

「だから、守ってくれ。シャル。俺の背中を守ってくれ」

もう、シャルに寂しい思いなんてさせない。こんな表情を作らせない。太陽に、シリアスなんて似合わない。

「そうしてくれれば……俺だって、弱いなりにお前の背中くらい守ってやる」

包帯が巻かれた、痛々しい手でシャルの頬に触れ、指で涙を拭う。それでも、涙が止まることはなかった。涙は止まらない。けど、さっきまでの自責の涙とは程遠い涙だった。

弱いなりに。認めよう。俺は弱い。なら、これから強くなればいいだけだ。焦ることはない。俺には、時間なんてものはたっぷりあるんだから。ゆっくりと、確実に強さを身につけていこう。

「ぐすっ……一弥ぁ……」

すくっと立ち上がり、俺の顔の上に自分の顔をかぶせてくるシャル。
俺は未だ包帯の巻かれた手でシャルの頬に触れている。

透き通った瞳が至近距離まで近づく。その瞳が閉じられるのを確認したところで、俺も目を閉じて――唇と唇が、重なり合った。

胸に広がる安堵感。温かさ。俺はその優しい感情に身を任せ、眠りについてしまった。

『ありがとう、一弥――……』

薄れゆく意識の中、柔らかな音が紡がれ、確かに俺の耳まで届いた
――……

第三十九話　運命（後書き）

シャルの武器の名前どうしよう……わからないのでアンケートをとらせてください。

シャルの新しい武器の名前。よろしくお願いします。

さあーついにくっつけちゃいました。これからどうなることやら…：まあそう簡単にイチャイチャさせないけどね！一弥くんざまぁ！

次回、ついに！？これ何回やったんだろ……あ、ついに夏休みが終わります。

第四十話　新たな戦い（前書き）

テスト勉強につき、しばらくは更新できないかもしれません……では、お楽しみください。

あ、シャルの青い剣の名前、まだまだ募集中です。皆さんのアイデアお待ちしております。

第四十話　新たな戦い

身を起こした瞬間、激しい自己嫌悪に陥った。

（う、ウソだろ!?寝オチ!?ファーストキスの真っ只中で寝オチしたってのか!?ありえねぇよありえねぇうわー!うわーうわーうわー!!何やっちゃってんだ俺!!ちくせう!ちくせう!!）

顔が熱い。頭を抱えてベッドの上で身もだえる。ひとしきり自分のアホさに絶望しながらも、腹の虫の大コーラスでむくっ、と起き上がる。現在時刻は……19時か。どうりで電気が点いてるワケだ。俺は痛む体にムチ打って立ち上がり、保健室を出て食堂に向かって歩き出す。痛みより空腹を満たす方が大事だ（キリッ）。そう思っていると、ふと前からちっこい水色の髪がこちらに向かって歩いてきている。俺の姿を認めた瞬間、その真ん丸おめめがパチクリと驚きに満ちた。

「おはようこんばんはです、紫藤テンテー。メシ食ってきますねー」

「え、う?お、おはようこんばんはです……ってまだ歩いちゃダメって言ったのに!?」

プリプリと怒って腕を振り回してくる奈菜を片手で抑え、食堂に到着する。一年生はこの時間帯は食堂を利用できないが、まあ黙ってればバレることも

「おんや一年坊かい？この時間帯は一年生は使えないよ」

「ないと……思ったんだけどなぁ……」

「二人だけの男の子なんだからバレないと思う方がおかしいのですよ……」

その発想はなかった。ちくせう、朝も昼も食ってないのに……。

「なんてね。夏休みだからアタシらも生徒がいなくて暇なのさ。なんでも好きなの選びな！」

「マジっすか！今金ないんですけどそれでも「紫藤先生は何にするんだい？」あ、あれぇ！？さっきまでの慈愛の表情どこいった！？」

「はあ……仕方ないですね。今回だけは先生がおごるですよ。だからそんな絶望の淵に立たされたような顔しないでください一弥ちゃん」

おぉ……！まさしく捨てる神あれば拾う神あり。お言葉に甘えて１番高い１４５０円の『豪華ディナーセット』を頼もうとしたらポカポカ殴られた。痛い痛い。ケガしてるからすげぇ痛いよ。三割くらい冗談ですから。

結局二人揃って仲良く３５０円の『ラーメンセット』を食べることに。透き通ったダシに細麺が絡み合ってめちゃくちゃうまい。ちなみに奈菜のだけおこさまセットについてるような容器に入っていた。それでいいのか社会人。認めちゃうのか教職員。

「それにしてもほんっと誰もいねぇな。夜の人気のない学園って雰囲気あるなー」

そう言った瞬間、奈菜は目を真ん丸涙目、口を正三角形（△こんな感じ）プルプル震え出した。あー……話題の選択ミスったか……俺は友達をイジる趣味はあっても子供をイジめる趣味はないんだ。おまけにそれ以外の趣味がほとんどないよ。

「ひ、ひぅぅ……こ、この時期は最後の夏休みを満喫しようとする生徒が多くて学園から人気が、な、なくなっちゃうんですぅぅ……」

「へ、へー。そんなもんか。……ん？」

Ｐｉｐｉｐｉ！

おぉ！話題を変えるチャンス到来！送信してきたのは……ラウラか！ナイスラウラ！

心の中でラウラを褒めちぎり、送られてきたメールの内容を読み上げる。なになに……？

「『２０：００ジャスト。月が冴え、風踊り、星降る中、一人で第２アリーナまで来い。なお、この件については他言無用とする』……あ、言っちまった」

「だ、大丈夫ですよぅ。詮索はしませんから。そ、そういえばこの時期は……ふ、ふぇ……」

ラウラコロス。結局涙目になりながらも怖い話一歩手前を話し続ける奈菜をあやし続けることになりながら、そんなことを思っていた。

その後、セシリアと鈴からも同じニュアンスのメールが届いてきた。ぬか喜びさせやがって……絶対許さん。

☆　★　☆

２０：０５。俺は先程まで激戦をしていた場所に舞い戻って来ていた。５分遅れたが、まあ別にどうでもいい。デートの類でもあるまいし。

『今思えば』という言葉に意味などない。それは、所詮それまでの過去を振り返っての『たられば』の話であり、愚行そのものだから。だが、そのことを理解した上で、敢えてその『今思えば』という言葉を使わせてもらおう。

そう、今思えば、それはもう始まっていたのかもしれない。俺がこの場所で襲われた瞬間……いや、もっと前。そう、この学園に入学した時から。

第２アリーナの重い扉を押し開ける。闇。扉の向こうには、屋根の下に落ちる影と夏の蒸し暑い夜が織り成す暗闇が広がっていた。

「ようやく来たか。では、始めよう」

アリーナの中央。穿たれた穴からスポットライトのように月光が落ち、そのサークルだけ明るく照らし出している。その場所に、ラウラが立っていた。いつもの服装と異なり、黒いスーツのようなものの胸付近には黒い……あれは、ウサギ……？らしきものがかたどら

れていた。

一体何を始めるっていうんだ――――。その質問をぶつける前に、俺は現状を理解した。

瞳孔が開き、暗闇に慣れた目でアリーナ全体をぐるりと見渡す。観客席には誰もいない。が、シールドエネルギーを挟んだ内側には、何十人という人間が集まっていた。その全てが女性。その中にはセシリアに鈴、挙げ句の果てにシャルまでもがいた。

「ＩＳの母、研究者の頂点に立つ篠ノ之束氏が一度は戻ってきながらも、再び消息を絶った件についてだ。篠ノ之氏はＩＳの膨大なデータを残し、基点としていた研究所から姿を消した。我らにはその希少なデータを手にする権利が平等にある」

感情を表に出すことなく、とつとつと告げるラウラ。その構図は、あたかも論文を読み上げる機械のように機械的だった。

「しかし、このデータを巡って総力戦の戦争を始めるのは不毛だろう。近代兵器を積んだＩＳでの戦争は、街を焼き人を壊す。それは、貴殿らの国にとっても望ましくない展開だろう。故に、強者のみの決闘形式と取らせてもらう。決闘に値せぬ雑兵の戦用は禁ずる。さらに、背中を預け合い、共闘することも許可する」

つまり、滅多なことがない限り、俺達が戦い合うことはないってことか。少しホッとしたな。

沈黙を払うものはラウラの女性にしては低い声のみ。それ以外に、衣ずれの音すら聴こえてこない。

「利潤を求め、戦争に身を投じる者は名乗り出でよ！その身を弾丸に例え、戦争に参戦する意思を示せ！私はドイツ軍特殊部隊を代表するラウラ・ボーデヴィッヒ。『シュヴァルツェア・レーゲン』と共に参戦を表明する！」

ラウラの小さな手に淡い粒子が散らばり、一つの弾丸が握られる。その銃弾は空高く放り投げられ、キィンッという金属音を高らかに響かせ、弾丸は地面に落ちた。

「デュノア社を代表するシャルロット・デュノアです。『ラミュール・リヴァイヴ』と共に戦線に立つことをここに表明します」

「イギリス代表候補生、セシリア・オルコットですわ！『ブルー・ティアーズ』と共に戦場に鎮魂歌（レクイエム）を奏でましょう！」

「中国代表候補生、凰鈴音。ＩＳ名は『甲龍』よ。戦争の空を支配するのはあたし達よ！」

ラウラに続くように、シャル、セシリア、鈴を始めとして続々と名乗り出る者が現れ、弾丸を投げていく。その中には、興味深い声も

混じっていた。

「ロシア国家代表、更識楯無よ。専用ＩＳ名『ミステリアス・レイディ』。よろしくお願いするわね」

サラシキタテナシ――確か、ＩＳ学園の生徒会長だったはずだ。暗くて顔はよく見えないが、水色の髪と手に持つ扇子が印象的だった。次いで、場を揺らがす声が発せられる。

「では……私達『亡国企業』も参戦させてもらいます。ＩＳは未だ決まってない所存でして……構いませんよねぇ？ドイツの遺伝子強化素体（アドヴァンスド）さん？」

『ファントム・タスク』？聞いたことがないな。が、俺以外の全員は知っているのか、その言葉に張り詰めていた空気がより一層の冷たさを増す。発信源は……ラウラだろう。

「……別に構わん。なら、貴様はそのことを告げるためだけに来た下っ端ということだな？」

「うふふ、そう解釈して頂いて構いませんよ。では、私は忙しいのでこれにて……」

ふっ、と気配が消える。ＩＳのステルス機能でも使ったのだろう。

そして、全員が終わったのか視線が俺に集中する。シャル、ラウラ、セシリア、鈴。その他、ここにいる全員が俺を見定めようとしている。

首無しＩＳ、メタルスライム、銀の福音と次々撃破してきた俺達だが、今回の敵は……厄介そうだな。

だが、俺がやることに変わりはない。手に淡い粒子をほとばしらせ、弾丸を手で弄びながらそんなことを考える。一夏と箒がいなくてよかったな。アイツらは真っ先に狙われるだろうから。

「ＩＳ学園所属、音無一弥――」

キィンッ、と爪で弾いた弾丸が空高く舞う。バックには月が。それは、俺の身代わり。宣戦布告の合図。

やってやろうじゃないか。この壁を乗り越え、俺はさらに強くなってやる。

「――『黒奏』。俺のパートナーの名前だ。始めよう。戦争を」

ＩＳ学園の二学期は、波乱を超えた戦争で幕を開けた――！

第四十話　新たな戦い（後書き）

ＩＳ戦争！一回書きたかったんですよね！

一弥達は一体どうなるのか！？新たな敵は！？亡国企業が企むことは！？実は全く考えてません！誰か助けて！

では、次回お会いしましょう。

４０．５話　見上げた空に（前書き）

久しぶりの投稿です。お待たせして申し訳ありません……。

今回は一夏くんに頑張ってもらいました。

４０．５話　見上げた空に

夏休みも終盤に近づき、暑さもそこそこ引いてきた頃。私と一夏は夏祭りでのサバイバルゲームで一弥から勝ち取った温泉旅行の宿泊先である旅館に向かうバスに乗っていた。天気は快晴だが、なんとも気持ちの悪い湿気が漂っている。正直、気分のいいものではない。が、これからのことを考えるとそんなことは気にもならなくなった。

なにせ二人きりだからな！二人きりだ！大事なことだからもう一回言うぞ！邪魔者なしの温泉旅行に二人はプリキュアだ！うん？少し間違えたか。まあ大した問題じゃない。

一夏も楽しみにしている風だったし、これを機に一気に距離を縮めて臨海学校の時の続きのような展開に……いや、も、もしかしたらそれを超えるようなことになるかもしれない！

『箒……いつも綺麗だと思ってたけど、今日はいつにも増して綺麗だ……』

『そんな……一夏もとても格好いいではないか……』

『箒。今気づいたんだ。俺は箒のことが好きだ。だから……』

『ふふふ、一夏、お前になら、私の全てを委ねよう……』

『ほうき……』

『いちか……』

なんて！なんて展開になるかもしれないしな！よ、よし。髪型ＯＫ、下着もバッチリ、顔にも叔母さんから教わった化粧を少し施したし、問題なしだ！ばっちこーい！ばっちこーい一夏ー！

……

……そう思っていたのだが……問題ないと思っていたのだが……問題が発生してしまった。

一夏の様子がおかしい。

私のようにわくわくそわそわてかてかしている訳ではない（まあそんなもんだよなとか言った奴そこに直れ）。さっきも言った通り、今はバスの中で移動中なのだが、ずっと視線を下に向けたまま考え事をしているようだった。

「一夏……具合でも悪いのか？」

「え？ああいや、大丈夫だ。すまん」

会話を続ける訳でもなく、ただ生返事をするだけの一夏。風呂好きの一夏にしては珍しい……というか変だ、不自然だ。サバイバルゲームの時、賞品がこの温泉旅行と聞いた一夏の反応は、面倒ながらもそこそこ行きたがっていたはずだった。

なのに……

「温泉、楽しみだな」

「あ、ああ」

取り繕うように話しかけてくる一夏。会話という会話はそれっきりに、それ以上の会話は続くことなくバスは山道を走っていった。

◇

気になることがあった。音無一弥、俺の親友の話である。

今日は温泉旅行当日ということで、６時に起床、その３０分後に寮を出たのだが、俺が起きる前に一弥はすでに起きていた。しかも、俺が準備している間にシャワーを浴びていた。用事でもあるのか、と聞いたところ、どうやらＩＳの訓練をするらしい。

元々一弥は興味のあるもの、面白そうなものにはとことん突っ込んでくるが、それは逆に返せばつまらないものには徹底的に面倒くさがるタイプだ。夏休み中、ＩＳの訓練をすることもあったが、大体が誘われて渋々訓練、といった感じだった。確かに自主的に訓練することもあったが、こんな時間からの訓練は初めてだ。

それだけなら、まだ気にならなかった。

でも、あの時。俺を送り出す時。『じゃあ行ってくるな』『ああ、楽しんでこい』口数はいつもより少なかったが、ほとんど変わりはないやりとり。簡単なあいさつ。それらに疑うような箇所は何一つない。

――あの、一弥の形容しがたい表情を除けば。

長年アイツとつるんできたけど、あんな表情は初めて見た。あれは……そうだ。苦悩。あの表情には、苦悩の文字がはりついていた。おそらく、一弥は悩んでいるんだ。あの、６割サド３割頭脳１割天然（百歩譲って優しさも入れておく）の一弥でも、悩むことがあるのだ。俺達の司令塔であり、１番の実力者。常に物事を冷静に受け

止め、影から俺達のことを見守り、正しい道に導いてくれる彼。この上なく頼りになる、俺の密かな目標。そんな人間が、悩みを抱えている。

一体何を悩んでいるのだろうか。いや、そんなことは二の次だ。

俺では、力になれないのだろうか？

やっぱり、俺は弱いんだ。守ってみせると言いながら、親友の相談相手にすらなれない。悩みを解決できない。頼りにすらされない。そんな人間に、一体何が守られようか。

「一夏……具合でも悪いのか？」

「え？」

俺の名前を呼ぶ方向に視線を向けると、箒が心配そうな顔でこちらを覗き込んでいた。マズい、少し表情に出てたかもしれない。

「ああいや、大丈夫だ。すまん」

そう付け足したが、箒はまだ心配そうな顔をしている。何か話さないと……俺、いつもどうやって話してたっけ？話題、話題……ああ、そうだ。

「温泉、楽しみだな」

「あ、ああ」

それっきり会話が続かず、重苦しい沈黙が場を満たす。こういう時に限って口は動いてくれないから不思議だ。

結局、そのままの空気でバスは俺達が泊まる旅館まで走り続けるのだった。

☆　★　☆

昼を食べ、その後何となくブラブラし、夜を済ませて温泉に入る。昼、夜は旅館で食べたのだが、臨海学校の時と比べると少し劣る感じだった。そう言うと旅館に失礼だし、正直に言うと悩んでいたせいで味がわからなかったということもある。箒はずっと心配そうにこっちをチラチラと見てたし……

「……はあ」

計らずも溜め息が出てしまう。温泉に入ればある程度スッキリするかと思ったけど……やっぱり根本的なところを解消しないとダメかな。大好きな温泉に入っていても、心に漂うモヤモヤしたもののせいで心から楽しめない。

「……上がろ」

湯舟から身体を持ち上げるようにけだるく温泉から上がる。身体を一通り拭いて浴衣に着替え、据え付けてあるドライヤーで髪を乾かす。まだまだ夏の名残があるせいか、風呂上がりとなると身体がほてってかなり暑い。自分の体温に嫌気がさしながら、浴場の脇に鎮座している自動販売機からお茶とサイダーを購入。確か箒は炭酸が好きだったはずだ。

購入したお茶を傾けながら自分達の部屋までのんびり歩いていると、俺達の部屋の前に浴衣を着た黒髪長髪の人影が見えた。言うまでもない。箒だ。

いた、というより突っ立っていた、と言う方が幾分か合ってる気がする。いつもはポニーテールにしているその長髪は風呂上がりのせいか降ろしており、俺と同じくこの旅館の浴衣を着ている。夏祭りの時は巫女服だったけど、それにしても箒に和服とか似合いすぎる。ドアが開いてる辺り、中の様子を見てフリーズ状態に陥ったってところか？というか年頃の女子より風呂が長い俺って……。

「箒、どうしたんだ？」

「……」

話し掛けてもフリーズから戻ってこない箒。何見たらこうなるんだろう……怖いもの見たさで（というか最終的には部屋に入るんだが）部屋を除いてみた。

部屋の中は荒れきっているとか謎の地球外生物がいたとか一弥が「来ちゃった☆」とかＩＳ乗って負のオーラを出してる鈴とラウラとセシリアがいた、とかではなかった（最後だったらきっと俺はトマトケチャップになってるだろう）。ただ、少し狭い感じの部屋の真ん中に布団が敷かれているだけ。

あー……なるほど。どうやら従業員の方々が余計なお世話を焼いてくれたらしい。枕がピッタリとくっついてるところからするに、俺達をカップルと勘違いしたんだろう。いやでも無理もないか……。

「なっ、なっ、なんっ、これはなんだ……っ！？いいい一夏ぁっ！？ちっ、ちち、ちがっ、こ、これは、あの、その」

フリーズから戻ってきた箒がこれ以上ないほどテンパる。……少し頭を冷やした方がいいか。箒にしても、俺にしても。

「こ、これはだな、おおおそらく従業員がやったことでひゃっ！？な、なにをしゅりゅ！？」

「しゅりゅ？まあいいや。少し外に出ないか？」

持っていたサイダーのペットボトルを箒の頬に当てたところ、それなりに落ち着きを取り戻したようだ。最後の方は少し噛んで真っ赤になっていたが、まあおとなしくなったのでよしとしよう。

「ううぅ……最悪だ……もう腹を切って死のう……」

それよりも一刻も早く頭を冷やさないと、どこぞのポニテ侍が切腹しそうだし……命は大事にしてほしい。

☆　★　☆

朝方に感じた湿気はどこへ去ったのか、月の下で流れる空気はからっと乾いていた。しかし暑いわけでもなく、継続的に吹き付けるそ

よ風がなんとも気持ちがいい。先ほど買ったお茶をまた傾け、飲み干し、喉を潤す。すると、自然と目線は上へと向かい、金色の月と黒い空で視界が満たされる。月の光のせいか星は見えないが、降り注ぐ月光は例えようのない力を持っているような印象を受けた。

「気持ちいいな、箒」

「……」

箒からの返事はなかった。まさか、まだ混乱しているのだろうか。わけもわからず俺に攻撃とかは流石にやめてほしい。

「……一体、どうしたというのだ、一夏。お前らしくもない……」

低く、それでいてよく通る声。音じゃない。俺の心臓はその内容に反応し、高く鼓動した。

「今日のお前は変だ……悩みでもあるのか？私では、力になれないか……？」

優しく、かつ不安げに尋ねてくる幼なじみ。悩みは……ない、とはとても言えない。今、絶賛苦悩の渦のど真ん中だ。

でも、それは俺自身の問題だ。弱い自分に対する悩み。それを相談するというのはお門違いな気がする。それに、これ以上弱さを重ねたくはない。まあ、こうやって悩んでること自体が弱い証拠なのかもしれないけど――そう思って、自傷の笑みを浮かべた時だった。

「――弱くなどない」

「……え？」

「……人に悩みを打ち明けることは、弱いことではない。まして、他人のための悩みなら、それはもはや強さだ」

「……」

「お前のその表情は何度か見てきた……いかにも、自分が相手の力になれなくて落ち込んでいるといった顔だ……」

「……そうだ……俺は、力になれない……弱い存在だ……」

「違う。それは絶対に違う！なぜそれだけのことで自分の価値を決めてしまうのだ……！なぜ、お前はそうまで自分を犠牲にするのだ……！」

「……箒？」

「……一弥は言った。『人の心配をした。それだけで主役を張れる』。……それは、強さではないのか。それは、主役というものは！弱い者がなるものなのか！違うだろう！」

「……一弥が……」

「他人の心配をして……勝手に弱いと決めつけて……！一人で抱え込んで！まるで貴様は、一学期の頃の私だ！弱さも強さも理解していなかった、あの頃の私にそっくりだっ！」

握った拳がギリリと音を立てる。下を向いた箒は、どんな表情をしているのか。わからない。でも、これだけはわかる。確実に、わかる。

「どうして私を頼ってくれないんだ！どうして一人で解決しようとするんだ……！……っ！？うっ、くそっ！くそっ！どうしてだっ！」

ダンッ、ダンッと、子供のように地団駄を踏む箒。悔しさからではないだろう。こぼれ落ちる涙。止めようのない涙を紛らすために、そうしてるんだろう。

しかし、それもすぐに止むこととなった。徐々に地面を蹴る力が抜けていき、やがて……こぼれる涙だけがその場で動く唯一のものとなった。

「……ははは」

「……っ!?な、何がおかしい!」

思わず、笑いが込み上げてきてしまった。それに反応するように、ばっ!と反射神経をフルに使ったように顔を跳ね上げる箒と目が合う。

「いや、箒を笑ったんじゃないさ。……そうか。また、か……」

「……?また……?」

「……なあ、箒。俺はバカだったってことなのか?自分で勝手に悩んで、勝手に落ち込んでた俺は……バカだったのかな」

「ぐすっ……そうだ。お前はバカだ。バカもバカ、大バカだ」

「……ああ」

「……でも、私だってバカだったんだ。そんなバカな私でさえ気づけたんだ。……一夏。お前だって、わかるはずだ」

わかったさ。俺でさえ気づけた。誰でもない、箒のおかげで。

流れた涙を拭き、上気した顔で、潤んだ目でこっちを見てくる箒。まだまだ俺は小さい存在だ。千冬姉などと比べたら本当にちっぽけだ。

でも、今俺は踏み出した。たった一歩。そのたった一歩は、きっと俺の力となってくれる。

「流石に長く外に出ると身体が冷えるな。箒、部屋に戻ろう」

「……一夏」

「大丈夫。ちゃんと……気づけたさ」

「……うん」

どちらからといわず、俺達は手を繋いだ。箒の手の平は温かく、柔らかかった。繋いだ手を離さないように。二度と間違えないように。

俺にとっては守るということの象徴。箒にとっては支えるということの象徴。俺はゆっくりと、真上で輝く月を見上げた。

（……まただな）

また、一弥に助けられてしまった。一体、アイツはどれだけの人間を助ければ気が済むのだろう。

夜空に浮かぶ月が、一際強く光ったような気がした。月。一弥の代名詞であるその天体は笑うように輝く。

目標は一弥。どうすれば彼に早く追い付けるか、その答えは至って簡単だ。隣に立てばいい。隣に立って、同じ戦場で戦えばいいんだ。遠慮はしない。遠慮し合うほど、俺達は脆くできてない。

追い付けるだろうか。肩を並べられるだろうか。目標は遠い。戦術を極め、知略に富み、温情に満ちた心を持った彼。

（……なんて遠い友人なんだろうな）

全く、彼には敵わない。それでも、目指した目標に近づくために俺は、俺達はひた歩く。一歩一歩を踏み締めて。

月はただ、その姿を優しく見下ろしていた。

４０．５話　見上げた空に（後書き）

うーん……まあ、一夏くん、がんばれ。

第四十一話　言葉の現す意味（前書き）

おかしい……テスト勉強するはずが……なんかできちゃってました。

それではどうぞ

第四十一話　言葉の現す意味

戦争。

その二文字に込められた意味は何だろうか。文化の発達の裏には必ずと言っていいほど戦争という影がついて回った。利益権利領地などのために同じ種族で争い合い、殺し合ってきた。人間の欲求は留まるところを知らず、その進んだ道のりを振り返ればむせ返るほどの死体怨念がこっちを睨んでいることだろう。

しかし文化が進歩すると同時に、戦争も変化を遂げた。

敵を殺す武器は剣から始まり、弓、銃、大砲、核。他にもまだまだあるだろうが、とりあえず例としてこれだけ挙げておくか。

近距離で人を斬り殺す剣から遠距離での殺人を可能にした弓、精密度と殺傷能力を上げた銃、広範囲多人数殺傷を実現した大砲、そして超広範囲を殲滅させる核。時代が移り変わるにつれて俺達の常識も塗り変えられてきた。

今時核なんて時代遅れだ。今時戦争なんて流行らない。

それがあの希代の天才、篠ノ之束が植え付けた常識だった。それがあの奇怪な天災、篠ノ之束が造り上げた世界だった。ＩＳ。正式名称インフィニット・ストラトス。剣を積み、弓を捨て銃を備え大砲を乗せ核を斬る。粒子を自在に操り、エネルギーを纏った世界最強の高機動兵器。約２０００のミサイルを墜とした瞬間、今までの世

界は崩れ、新たな世界が造られた。
それでも、戦争はなくならなかった。
今度は、ＩＳを巡ってのＩＳでの戦争が幕を開けた。
なあ束、教えてくれよ。
お前が造りたかった世界ってのは。一体なんだってんだ？

☆　★　☆

「あの後、三つに勢力が別たれた」
あの宣戦布告以降、夏休みをずっと情報集めに費やしていたラウラから聞いたのはそんな言葉だった。
ＩＳ学園新学期。現在、昼休み。一つのテーブルにお馴染みの７人で座ってこれからのことについて検討中だった。一夏と箒にはラウラから伝わったらしい。ひとしきりオロオロするだろうな、と思っていた一夏のリアクションは、意外としっかりしたものだった。一夏と箒は宣戦布告をしていないため、直接的には関わらないで済む

のだが、

「わかった。俺達も戦おう」

ヤケに吹っ切れた風の顔でそんなことを言ってきた。せいぜい頼らせてもらうとしよう。ちなみにこの時全員いたんだが、ドキューン☆×４という擬音が聴こえてきた。とりあえず一夏を一発殴っておいた。

閑話休題。話を戻そう。

まず一つ目の勢力。言わずもがな、俺達のことだ。周りからは『学園勢力』、アカデミーと呼ばれているらしい。

しかし、束のデータがかかっている戦争に国が何か口出ししてこないのか、と聞いたところ、その辺は問題ないらしい。まあそれもそうか。ここはＩＳ学園。言わば一つの国家だ。国から口出しはできないし、この戦争にはデメリットがないからな。

それに、シャル達の国としてもこの結託という俺達の選択について反対どころか嬉々として飛びついた。なにせ報酬はデータ。量など関係ない。どれだけ連合を組もうと、報酬は同じというなら仲間は作るに越したことはない。全国家が噛み合わないなら、噛み合う者同士で利潤を得る。そういうことだろう。

さらにラウラが言うには、強いヤツのそばにつけば問題ないと国は言っている。……その強いヤツが俺を指していたのが驚きだったが。買い被り、過大評価にも限度がありまっせ。

そのうえ、国家代表である生徒会長もこの『アカデミー』に所属するというのだ。あの宣戦布告の後、なんか知らんが疲れた顔のラウラがそう言っていた。つまり、この計８人がこの『アカデミー』の全勢力だ。

次、二つ目の勢力。これは至って簡単だ。この無視できない『アカデミー』の勢力に対抗してできた連合。俺達は『対抗勢力』、レジスタンスと呼んでいる。情報収集に徹していたラウラによると、その全体像は把握しきれていないが、おそらく……俺達を上回るであろう数になるだろう。

が、ＩＳの戦いは個々の強さで勝敗が決まる。そうだな、俺の黒奏と一夏の白式を例に挙げよう。

俺の黒奏は、もとより一対多、一対一に特化した機体だ。策を巡らせ、罠にはめれば５体のＩＳくらいは戦闘不能にできる。が、銀の福音戦の時のように多対一には向かない。故に、拡張領域を犠牲に多対一にも対抗できるように武器をストックしている。

一夏の白式はその真逆だ。近接ブレード一本にマルチウェポンだけという完全なる一対一、多対一特化型。要は囲めば試合終了コールドゲーム。

さらに、その単一仕様能力でその弱点を補うどころかさらに拍車をかける。つまり、一夏の場合は一人一殺を瞬時に５回繰り返し、俺は５人同時に相手をするのが１番機体の特徴を活かした戦い方だ。

少し話が逸れたか？つまりはそいつらに勝つか負けるかは頑張り次

第ということだ。

そしてもう一つ気になる点がある。この学園に所属している専用機持ちは計１１人。そのうち一人は事情があるのかないのか知らんがちょっと問題アリということで計１０人。

そう、１０人。俺達の勢力は８人。つまり、残りの２人は敵ということだ。おいおいいきなりヤバい状況に陥ってないか？

とりあえずそのことは置いといて最後、三つ目の勢力。これはまあ早い話がその他だ。特に名称はないらしい。『亡国機業』がそれにあたるだろう。こいつらの戦力は未知数だ。

「というワケで、かなりマズい状況だ。よっ、ほっ……」

「結構シリアスな話してんのにマカロニをフォークに刺して遊ぶな！しかも無駄に器用だなオイ！！」

「そう褒めるな……よし、あと一個」

「褒めようとしたのは認める！違う意味でな！今のお前見て一瞬でそんな気持ち消え失せたけどな！」

フォーク全部にマカロニ通してパクリ。ほわ～とした表情になぜかイラッとした。なぜかは知らん。

「でも、言うほどマズい状況でもないんですのよ、一弥さん。ここがどこだか、もう一度思い出してみてくださいまし」

「あん？……ああ、そういうことか」

「え？一弥、どういうことだ？」

めんどクセェ……ググれカス。

「ラウラから聞いただろ？この戦争に一般人を巻き込むことはタブーだ。誓約を犯したヤツは――」

「今度は、国家が総力を上げて戦争になるわね」

「そういうこった。つまり、首無しＩＳみてぇに学園に襲撃することはできない。俺達は誓約に護られてるってことだ。わかったか脳無しＩＳ野郎」

「理解はできたけど扱いに納得できないぞ！？」

ＩＳ学園のセキュリティは万全頑丈だし、忍び込むということもできないだろう。なるほど、まさに核シェルター並の砦ってワケか。

「それに、その敵２人も問題ないよ。もうすぐその機会もあるしね」

「機会って……あの、全学年の専用機組ランダムマッチのことか？」

専用機組ランダムマッチ。学園祭を後回しにして急きょ発案されたイベントだ。ペアを組んでのタッグマッチと一騎討ち形式での模擬戦がそれぞれ一回だけ行われるというものだ。聞いた話によると、首無しＩＳ、メタルスライムと試合中止が続き、専用機持ちのデータと経験値が不足していると危惧した学園側が発案したものらしい。理由としては納得できるが……タイミング的に怪しいものがあるな。

「でも、それなら俺達も戦うことになるだろ。味方同士で。そうなると一気に戦力が削がれるぞ。一度決闘に負けたヤツは負けた側の連合に入らなかったらそこでリタイアなんだろ？」

「大丈夫だよ、一弥。宣戦布告の時に弾を投げたでしょ？決闘形式だから、戦う時にまた弾を投げるんだよ。そうすれば、宣戦布告をしなかった箒と一夏も参戦できるってことになるの。僕達で戦う時は、弾を投げなければいいんだ」

なるほど……よくできてんな。

「まあ……一応今がどんな状況かは理解できた。あと一つ疑問がある。……一夏。箒に何をした……」

「いや……それが俺にもさっぱり……」

全員の視線が会話に参加してこなかった箒に集中する。ラウラ、セシリア、鈴が鋭い視線を送っても、箒に至っては……時々キリッとした表情になってもすぐにデレッとした締まりのない顔に戻る。この繰り返しだ。一体何すればこうなるんだ……。

「どういうことだ一夏っ！貴様は私の嫁だろう！」

「そうですわ！一体何があったんですの！？」

「場合によっちゃただじゃ済まさないわよ！」

「おー。なんか久しぶりだなこの展開。ホッとするぜ」

「「鬼だっ！？」」

作戦会議がいつの間にかいつものバカ騒ぎに。アホなことをしていたら結局予鈴を意味するチャイムが鳴ってしまった。俺達何してんだろうね。

「……一弥」

「んー？……なんだ？」

7人で教室に戻る途中、一夏に話しかけられた。ヤケに真剣な面持ちだ。正直似合わなゲフンゲフン。

「ランダムマッチのペア、俺と組んでくれないか？」

「……は？」

『はぁぁあああああああっ！？』

「うるせぇ！？驚くなら静かに驚いてくれないか！？せっかく我慢したのに！！」

一夏の爆弾発言に驚愕の絶叫が轟く。その中にはシャルまで加わっていた。あれ？箒が入ってなかったような？

「頼む」

「頼むじゃねーよ！お前何言ってんの！？俺まで標的になるだろうが！ほらぁー！シャルがめっちゃキレてるからぁー！」

「カズヤ……ドウイウコト……？」

「ひぃっ！ちょ、落ち着いて！？別に俺は一夏と組むつもりはないからな？な！？」

「一夏……一弥の嫁に行くのか……？」

「待てコラウラぁっ！それは絶対クラリッサとかいうヤツは関係ないな！？実はお前も結構染まってるだろ！？」

「一弥……っ！アンタだけは、信じてたのに……っ！」

「むしろ疑われてたらベランダからダイブしてるわ！一生裏切らねぇから安心しろっ！！」

「一弥さんに負けた一弥さんに負けた一弥さんに負けた……」

「セシリアぁぁぁっ！？お前実は情緒不安定だろっ！？精神科行ってこいっ！！」

くそっ！なんだこれ！？一夏に振り回されるなんて夢にも思わなか

ったよちくしょうっ！！

「一弥」

「あァ！？今俺は最っ高に最っ悪な気分だぞ！なんだ！？」

「俺も、強くなりたいんだ」

一夏の言葉に、全員の動きがピタッと止まる。真剣な表情。瞳には決意の炎が宿っていた。

「……本気かよ……」

「ああ」

ぐるっと周りを見回す。一夏の真っすぐな思い――強くなりたいという思いが伝わったのか、不服そうな顔をしながらも、もう反対の言葉はかけてこない。

俺はシャルと組みたい。シャルの背中を守ってやりたい……そう思ってたが、ここまで俺に似たヤツに頼まれては断るに断れない。全く、変なところでそっくりだな、俺達は。

「わかった。足引っ張んじゃねぇぞ？」

「当然さ」

ひとまず話は終わった。俺達は再び教室に向かって歩き出す。俺とシャルは最後尾だ。

「わりぃシャル……ほんとすまん」

「もう、一弥ってば……気にしてないよ」

それなら頬を膨らませてそっぽを向くのはやめてほしい……地味に傷つく。

「それに僕達……つ、付き合ってるんだよ……ね？」

「……おお。確かに今までのこと振り返ったらそう言わざるを得ない状況になってたな……」

「気づいてなかったの！？」

気づいてませんでした、はい。だってなんかバタバタしてたんだもん！シャルはセカンド・シフトしたリヴァイヴのデータ送る代わりにデュノア家と縁切ったっていうし！気づくワケないだろ！一夏じゃあるまいし！ん？一夏は一生気づかねぇか。

「それに、まだちゃんとした告白もしてないしな……」

「え、えぇっ！？あの背中を守るってそういう意味じゃなかったの！？」

「あ、あれかよ……まあいい。だったらさっさとコクるまでだ」

ふぇっ！？と奇声を上げるシャルを正面に見据え、俺の感情を口にする。……よし。

「俺はシャルのことが好きだ。だから背中を守りたい。ずっとそばにいてくれ」

「……っ！う、うん……僕も一弥のことが……ってなんで逃げるの！？」

くそぉおおっ！！はぁぁぁぁぁっずいなぁちくしょおおおおおっ

！！思わず全力ダッシュで逃げる俺。追いかけてくるシャル。あるぇ？普通逆じゃね？

俺達が喋ってる内に一夏達は教室に着いたらしく、最後に教室に入ったのは俺達だった。予鈴が鳴ってもまだ騒がしいクラスメイト。これも久しぶりだな……と、感慨深げに浸っていると2、3人が俺達の元にやってきた。

「あ！音無君にデュノアさん！ビッグニュースビッグニュース！」

「昼食ってスタミナ有り余ってやがるな……どうしたんだ」

「何かあったの？」

「それがね、実は――」

次の言葉を聞いた瞬間、俺とシャルは互いの顔を見合わせた。

「――転校生が来るんだって」

転校生。ＩＳ学園の転校生は、何を意味するものだったか。

そのことを思い出す最中で、本鈴を告げるチャイムが鳴り響いた。

☆　★　☆

「以上が、『アカデミー』の全貌となっています。結果論として、簡単には攻めこむことはできません。」

薄暗く、陰湿な部屋。その部屋の中央にはU字型のテーブルがあり、ディスプレイの放つ青白い光がその部屋を微弱ながらも照らしている。部屋にいるのは揃って女性、それも女子と呼ぶ方がしっくりくるような年齢層の人間が、だだっ広い部屋に集まっていた。

「隊長、どうするの？」
「隊長、どうしよっか？」

その中でも、最も子供っぽいと呼ぶべき二人が対岸の女子に意見を求める。目を向けられたその女子は静かに目を閉じ、腕を組んで何かを思案中のように見えてくる。が、一分と経たない内に目を開き、笑みに口元を歪ませた。

「ふふ……なら、私たちももぐりこむとしようか」

彼女のその言葉を聞いた瞬間、先ほど質問した二人の女子がきゃいきゃいと歓喜の声をあげ、ハイタッチを交わす。その構図は、この厳格な雰囲気を醸し出す会議室のような場所と見事にミスマッチしていた。

「音無一弥。まずは司令塔であるこの男から接触するとしよう」

二人の女子は未だ手を取り合って跳びはねている。隊長と呼ばれたその女子はその様子を一瞥し、ディスプレイに向き直った。ディスプレイに表示されているのは制服姿の男子、音無一弥。彼女はその映像に手を伸ばす。小さな、子供となんら変わりのない手。

「ふふふ……せいぜい神頼みでも済ませておけ……音無一弥」

その小さな手が握られた瞬間、音無一弥を映し出していたディスプレイにノイズが走ったように歪み、完全に消え失せた。音無一弥という人間を、冷たく葬るように。

第四十一話　言葉の現す意味（後書き）

なんとも言えない……

第四十二話　日常の帰還（前書き）

お待たせしましたあああああああ

第四十二話　日常の帰還

「転校生か……どんなやつだろうな？」

「さあ？十中八九敵だろうな」

目の前でブルマが踊りながら一夏とそんな言葉を交わす。現在、６時間目、体育。ゲーム形式に行われているバスケで女子の中に男子二人が混ざるという状況。未だ俺達の番は回ってきていないが、どうせすぐに社会的死刑通知が来るだろう。なんとしても回避してやるわ。

この学園はブルマにスク水と、学園長狂ってんじゃね？と思ってしまうほどそういうことに関しては旧世代だ。今までは女子しかいなかったからよかったんだろうが、少しは俺達のことも考慮してほしい。ちなみに一夏は半袖半ズボンというやんちゃ悪ガキスタイル、俺はその上に長袖を着ている。ブルマじゃないの？って思ったヤツは自重しろ。そして飛び降りろ。

「今んとこ分かってることなんか転校生が来るってことくらいだ。どこの代表候補生かは分からない。相手の出方を待つしかないな」

「そうか……じゃあ今のうちにやれることはやっておかないと。一弥、放課後空いてるか？」

「どうせ7人揃って特訓だろ。7人揃うのも久しぶりだしな」

にしても夏休み明けたってのにテンション高いなコイツ。何かあったんだろうか。そんな折、ふとシャルと談笑している箒が目に入った。

「……ああ、ついに箒とくっついたか」

「ぶふっ!?な、何言ってるんだ!?」

「いや、温泉旅行でテンション上がってつい……にゃんにゃんしちまったんだろ?」

「にゃんにゃんってなんだよ!?だ、大体、箒がそんなこと思うわけないだろ?」

「……」

「……なにその目」

「いや、暑苦しさもプラスされたイライラの根源をせめて冷ましてやろうとしてるだけだ」

「……いろいろと言いたいことはあるけど、なんかごめんなさい……」

「ごめんで済んだら千冬さんはいらねぇんだよ」

「アンタ千冬姉呼ぶ気!?そこは警察だろ!?ってかそもそも理不尽だろ!暑いなら上着脱げばいいじゃないか!」

「お前とペアルックなんて死んでもごめんだバカめ」

「……泣きたくなってきた」

涙目でイジける一夏からバスケへと目を向けると、ちょうど前半が終わったようだった。次は俺達の番だ。

「ほら一夏しっかりしなさい!あたしたちのコンビ見せつけてやるんだから!」

ああ、ちなみに言うとバスケは選択授業で2組と合同なので鈴もい

る。故に7人揃ってのバスケだ。女子のバスケと言えどもここはＩＳ学園。選ばれた者のみが校門をまたぐことを許される。言うまでもなく身体能力も高く、バスケもかなりハイレベルである。

「ほら一弥、立って立って！」

「っと……ふう、仕方ねぇな」

シャルの手を取って立ち上がり、上着を脱ぐ。夏を越えたとはいえ、まだまだ残暑が厳しいからな。

「ペアルックは嫌じゃなかったのか？」

「どうも後ろのヤツが本気らしくてな。それくらい我慢するさ」

コートの真ん中でボールを持った審判役の女子を挟んで一夏と他愛のないことを話す。どうやらあっちもやる気みたいだ。コートの中の箒、セシリア、鈴、ラウラ、そしてシャルを含んだ残り８人も真剣な顔つきに変わる。長くは保たないが、やるだけやるとしよう。

「じゃ、始めるよー」

審判役の女子が笛を吹き、時間が削られた瞬間、ボールを真上に上げる。それと同時に、俺と一夏も真上に跳んだ。

さあ、試合開始だ。

☆　★　☆

ガギィンッ！！

「つぁぁっ！！」

気合い一声、一夏の『雪片』が俺の『雨箒』を弾く。８本の内、４本の剣鎖が一夏を追い回し、一夏はそれを避け、弾き、防いでいる。その後の放課後、体育で疲れた体にムチ打つように（一応勝ったが最後の方は俺は完璧にバテていた）一夏と模擬戦をしている。今回のルールは『１５分以内に俺を墜とせ。第二変換、メイン武器の半分の使用厳禁』というルールだ。いろいろとめんどくさかったし、一夏を鍛えるための訓練なので俺が楽な方法にさせてもらった。悪しからず。

『ほれほれ』

『っ！？くっ！！』

向かってきた一夏に『天凪』の銃口を突き付ける。真っ正面から襲い掛かってきた一夏はその銃口を見た瞬間に大きく左に逸れた。

一夏の『白式』とてトップクラスの速さを誇る。俺の『月下閃影』もかなりのスピードを出せるが、装甲を武器に変えてしまうために物理防御のアドバンテージが皆無に等しい。つまりシールドエネルギーだけで敵の攻撃を受けるため、スピードは飛躍的に向上するもののシールドエネルギーの減りが速い、自己ダメージのレベルが高いという欠点がついてまわる。なんという自殺願望主義。束の頭は腐っているに違いない（あらゆる意味で）。避ければ問題ない？ホーミングされたら即死ねるぞこれ。

とはいえ、今の『不動月桂』は一夏の『白式』とそこそこ相性がいい。というのも、この不動月桂の装甲の固さが異常なため、一夏の『零落白夜』によるエネルギー無効化攻撃を受けてもこの装甲のおかげで絶対防御は働くものの、レベルの低いものなのでそこまでシールドエネルギーは削られないからだ。故に、この模擬戦ではまず、『雪羅』で装甲に穴を開け、その作った弱点に雪片で一気に片をつける、という過程を描く必要がある。当の本人である一夏が理解しているのかは知らんが。雪羅をカノンモードにしてるあたり、そこらへんはわかっているようだ。

ドゥッッ！！　重く、鈍い砲撃音が一夏の雪羅から響き、亜音速の

砲弾が俺を狙う。ここで『天凪』で逸らすのもアリだが――

ドゴォンッ！！　という爆発音が俺の心臓部に轟いた。っ痛ぅ――

――っ！バカでかい弾撃ちやがってあのバカ！痛みにこらえながら改良した『胡蝶』を取り出す。銃身にマルチユニットを装着し、異なる二つの弾丸でも装填できるようにしたのだ。

『残り5分。頭使えよ一夏』

自分が立っている地面に銃口を向け、引き金を引く。撃ち出された2発の銃弾はそれぞれ地面に激突し、煙幕弾（スクリーン）が黒煙を巻き上げる。俺を中心とした場所から煙が充満してみるみる視界が悪くなっていく。だが、ＩＳにはハイパーセンサーなるものが備わっているのだ。たかが一瞬視界を封殺しても、すぐにハイパーセンサーに意識を向ければ敵機の位置も動向も手に取るようにわかる――が、

『なっ……！？』

それはハイパーセンサーが正常に働いている時だけのこと。2発放った内の、二つ目の特殊銃弾、隠蔽（ジャミング）。撃ち込まれた銃弾の周りに阻害電波を放出し、ＩＳのハイパーセンサーの目から逃れることを着眼点とした隠密弾だ。……え？使用法？深く追求するのはやめようぜ？

とにかく、初めて試したが黒煙で視界を遮り、電波でハイパーセンサーを封じることに成功した。結果、

『……っ！？』

一夏は煙の中の俺を見失い、驚愕の声があがる。俺は胡蝶を粒子に還し、『桜閣』をコール、その声をかき消すかのごとく銃口から他の銃では考えられないほどの大きさの凶弾をバラまく。実弾なら一夏の雪羅では防げないからな。巨銃にかかる膨大な反動をこらえながら一夏の様子をうかがう。

（煙を振り払うか害電波の元を壊すか……どっちにしろその姿が見えたら桜閣の反動と瞬時加速でソッコー距離を取るだけだ。あとは遠距離で適当に時間を稼げば――）

と、そこで俺の思考は途切れた。なぜか？目の前に一夏のＩＳの象徴である純白が現れたからだ。

「う……ぉっ！？」

「らぁっ！！」

一夏の俺の心臓部を目掛けた必勝の突きがなんとか視界に映る。そのエネルギーを帯びた剣が体に届く寸前、とっさに左腕を盾代わりに使う。一夏の剣はシールドエネルギーを貫き、俺の左腕は弾かれ、

装甲にヒビが入った。いくら固いとはいえ、さすがに耐えきることはできなかったようだ。

『ぐっ……』

『まだだっ！』

素早く剣を引き、今度は爪のような形をしたクローモードの雪羅が襲い掛かる。方向転換して瞬時加速をするほど余裕もなさそうだ。それなら……っ！

バシュゥッ！！　なにかが弾け飛ぶような効果音が耳に響く。雪羅の光爪が俺のシールドエネルギーをごっそりと持っていかれるのと引き換えに、右肩を突き出しての瞬時加速で一夏にタックルをかます。吹き飛ぶ一夏を尻目にかけると、右肩の装甲がめくれ上がり、無視できない痛感が神経を逆なでる。くそっ、とりあえずこの場所から移動しねぇと……！煙が薄れてきちまってやがる。瞬時加速でアリーナの天井付近まで上昇すると、白式のハイパーセンサーがようやく俺を感知したのか、一夏も瞬時加速で俺との距離を詰めてくる。

『猪かっての』

雨箒を発射し、三次元に展開させて一夏の突進を妨害しようとした、その時。俺のハイパーセンサーが信じられないものを映し出した。

（砲弾っ！？いつのまにカノンモードに――）

ドゴッ！！　という大音量と衝撃で再び俺の思考が強制的に中断される。砲弾の威力で吹き飛ばされ、下腹部に激痛が走る。ってぇぇ……！まだケガ治ってねぇんだよ空気読め！ケガ人にはいたわれや！はァン！？（８９３ニラミ）

足止めに正確に展開した雨簗。しかし、今回はその正確さがアダとなってしまう。本体である核が動いたせいで雨簗が本来の軌道から外れてしまったのだ。エネルギーを閃かせ、あっさりと剣鎖を飛び越えてきた一夏の両手には、かたや光剣、かたや光爪が輝きを放っている。

そして、

☆　★　☆

「手、抜いてただろ」

夕飯、食堂にて。いつもの7人で食事を取っていると、憮然とした表情の一夏が話かけてきた。よくいうジト目である。

「抜いてねぇよ。やる気がなかっただけで」

「それを手を抜くって言うんだよ……」

仕方ねぇだろ、夏休み明けに思いっきりバスケさせられて模擬戦したんだから。ヘタしたら俺疲労で死ねるんだけど？

「それよりも、明日ですわね……」

「転校生か。情報通の女子の話では、一人ではないようだな」

セシリアと箒がうーん、と唸っている。何かあったらそんとき考えればいいものを。つーか眠い。

「ラウラ、アンタ知らないの？その転校生のこと」

「うむ……分かったのが今日の5時間目の前だからな。調査が追いつかなかった」

「今は様子を見るしかないね……」

はー眠い……あ、やべ、さんまにソースかけちまった。どーするよコレ……。

「やはり……専用機を持っているのだろうな」

「そうだね。そうじゃないと、転校なんて面倒なことしないはずだもん」

「ですが、このような形で攻められるとは……油断してましたわね」

確か一夏も同じ定食だったはず……よし、まだ手はつけてないな。

「うむ。こうなると模擬戦と称して決闘を申し込まれるかもしれないな」

「いつでも万全な準備が必要だね」

うーんと唸る一夏とさんまをトレード……よし、できた！ミッショ

ンコンプリートだ！今度はキッチリ醤油をかけて～っと。

「……」

ふと顔を上げると、正面にいた鈴がじぃぃっ、とコチラを凝視していた。どうやら見られていたらしい。

「……」

じぃぃ――。

「……」

じぃぃぃぃぃ――――。

ふう……仕方ない。

「……（スッ）」

そんなにこのたくあんが欲しいか……

「……（キッ）」

鈴の目つきが鋭くなる。いらないわよ！がう！みたいな表情だ。おま、ジャパニーズタクアーンなめんなよ！？

「……（スッ）」

押し返された。視線が移り、今度は大学芋に目がいく。その甘そーなのちょうだい！というキラキラした目でこっちを見ている。

1．首を振る。もちろん横に。
2．仕方なく大学芋をやる。
3．仲間にする。

1はヘタしたら一夏にチクりそうだし、2は糖分は疲れた体にいいって聞いたことあるし……よし、3だな。

だが、ゲームのようにタダでは仲間にはなってくれないだろう。よし、この黄金半月でもやるか。

「……（スッ）」

「……」

鈴にジト目で睨まれた。その視線が一夏の方へ向く。貴様……一夏にこのことをチクってもよいのだぞ？さあ、早くそのゴマとハチミツがかかったデザートをよこすのだ！的な顔だ。どうやら仲間にな

りたかったワケではないらしい。今度は荒々しく黄色野菜を突き返してきた。俺もぬか漬け嫌いなんだけど……仕方ない。一夏と騒ぐ気力もないし、大学芋やるか……グッバイ、糖分。

一本の箸でサツマイモを突き刺し、鈴の前に突き出す。キラキラキラーッ！！という効果音がつきそうなほど目におほしさまが輝いている。試しに右にサツマイモを動かすと……ささっ、と顔を動かして黄色野菜を凝視する。左に動かしても同じ。たくあんにもそんくらい興味示せよ……とか思ったが、たくあんに目を輝かせる女子とか微妙すぎる。

ほお杖をつき、スッと鈴の方にサツマイモをさらに突き出すと、両手で俺の手をガシッ！と掴み、はむっとサツマイモをほおばった。チッ、鼻に押し付けてやろうと思ったのに……。ふにゃ～という幸せいっぱい、夢いっぱいの顔で咀嚼する鈴。不意にその目が開き、また俺に向けられる。もう一個ほちいの！さつまいもほちいのー！という目で見て、再びトリップ。

――その様子を見た刹那。俺の深層心理の深淵に存在する闇の感情が沸き上がった（直訳：イタズラ心に火がついた）。未だ目を閉じて絶賛トリップ中の鈴を確認すると、今度はサツマイモの前にたくあんを突き刺し、その後に大学芋を刺す。そしてそのダブル黄色野菜を鈴の前に持っていく。もちろんたくあんは見えないようにだ。すると、ハチミツの香りに気づいたのか、鈴が再び目をキラキラさせて……ほおばった……！

初めは、幸福の絶頂ここにあり！みたいな顔をしていたが、

「……？……！？」

すぐに異変に気づき、（（（＜ｗ＞；））））という顔になった。たくあんと大学芋のハーモニー……鈴ざまあ（笑）

あまりにもまずかったのか、涙目でこっちを睨んできた。は、はかりおったなぁ！？むねんなり～～～！って表情だ。ってか鈴のアテレコ楽しいな。

「ぶっ、げほっ！な、なんだこれ！？さんまにソースかかってないか！？」

隣から一夏の声が聞こえたが、関わるのもめんどかったのでスルーした。

その後、鈴に睨まれながら残りの大学芋を堪能する俺がいたのだった。うめー。ふにゃ～。

☆　★　☆

「はー……」

今日は疲れた。これでまだ平和という文字に分類されるのだから明日からかなり憂鬱だ。今は……大体9時を過ぎたところといったところだろうか。いつものように（夏休み明けなのでそこそこ久しぶりだが）一夏予備軍が部屋に押しかけてきやがったから、俺は今学園にある綺麗に整備された裏庭に設置されているベンチに腰かけている。新学期早々いつもの日常に舞い戻れるアイツらの体力は計り知れない。ただの体力バカだろ。くそ、付き合わされてるこっちの身にもなれってんだ。

「あ、いたいた」

「ん……」

日の入りが遅い時期とはいえ、さすがにこの時間帯はほぼ真っ暗だ。ところどころ頼りなさげに光を発している電灯を頼りに声のした方へ顔を向ける。シャルだ。顔を向けるといっても、声がした時点でシャルだと気づいていた。それでも顔を向けたということは……さて、どういうことだろうな。

「座っていい？」

「どうぞ」

隣でギシ、という木の軋む音が聞こえ、それっきり俺達が放つ音源は消え失せる。草むらに潜んでいるであろう鈴虫達の鳴き声が無風の夜空に澄み渡る。……少し詩的表現だっただろうか。思わず浮かれてしまうほど、疲れた体はリラックスしてしまったようだ。

「……何か用でもあるのか？」

「うん？うーん……一緒に居たいから、じゃあ理由にならないかな？」

困ったように笑いかけてくるシャルに、俺も微笑みで返す。

そんな二人に、言葉はいらなかった。

「すげえありがちだなオイ」

「へ？なにが？」

「いや……思わず世界にツッコんじまっただけだ」

「???」

またそれっきり会話がなくなる。でも、気まずいというワケではない。それどころか、とても居心地のいい場所に早変わりしたかのように思えた。

「……明日、だね」

ポツリ、とシャルが視線を落として呟く。

「……あ、転校生か」

「今絶対忘れてたよね！？」

「バカだな、忘れてても思い出せればいいんだ。結果オーライってヤツだ」

「うんそれ絶対使い方間違ってるよね」

結果オーライ。

「んで、その転校生がどうした？」

「えっと、その……やっぱり、敵なんだよね」

「十中八九そうだろ。不安なのか？」

「……うん。だって、一弥はまだケガが治ってないし、それに……一弥を守れるのかな……って」

「ああ、あれか」

「僕、まだ全然リヴァイヴの力を引き出せてないし、一弥だって強くなったよ。転校生が来たら……僕は守られてばっかりにひゃりゅきゃもっていひゃいいひゃい！」

「あ、悪ィ。つい出来心でやった。だって長ぇんだもん」

「い、いきなり鼻をつままないでよっ！せっかくほんとに心配なのに！」

鼻を押さえ、涙目で抗議してくるシャルの頬に、ペチと弱く拳をつ

ける。

「今の俺の相棒は一夏だよ。お前じゃない」

「う……」

「心配なんて冗談じゃない。そんなネガティブな気持ち押し付けられるなんていい迷惑だ」

だから、と。俺は自分の恋人に続ける。

「どうせ気持ち押し付けるなら、絶対勝ってって言ってくれよ。負けないで、とか言って応援をしてくれよ。シャルの言葉なら、俺はそれだけでがんばれる。強くなってみせるからよ」

「あ……」

目を見開き、再び俯く。そして、頭を上げる。瞳には、力が灯っていた。

「……一弥、がんばってね」

俺の拳を両手で包み、シャルはそう言ってくれた。

「当然だ」

そう告げると、シャルは不意に立ち上がり、

「そろそろ休んで明日に備えるね。一弥、また明日！」

「お？おう」

俺達の寮へ走り去っていってしまった。

「……なんだ？」

首を傾げるが、シャルの言う通り夜もだいぶ更けてきたので、俺もその場を後にしたのだった。

◇

走る、走る。

みんな、がんばっている。

それは、一弥を筆頭にしている。

彼は、とてもとても頼りにされている。

心配だった。

本当は彼が弱いと知ったあの日。戦争が始まったあの日。

全てが始まった。終わりへと始まった。

これからも、一弥は頼られるだろう。

戦争が始まって、それに拍車がかかるだろう。

僕は走る。

あの日。

一弥が壊れかけたあの日。

恋人となったあの日。

僕は何を思っただろうか。

とある一室のドアの前。

そこで息を整え、ノックをする。しばらく待つと、彼女は現れた。

「……シャルロット？どうした？走ってきたのか？」

彼女の問い掛けに、うん、と答え、しっかりと見据える。一弥のために、僕は何をすれば背中を守れるか。

答えは簡単だ。

「箒。僕と――――ペアを組んでほしいんだ」

僕も、がんばればいい。

第四十二話　日常の帰還（後書き）

シャルの武器について候補が上がり、形が固まってきたのでアンケートをば。

シャルの武器はロングソードではなく、メインウェポンなしの武器補助型の能力にしました！

黒い翼のようなオブジェクト。それが太陽光を吸収し、そのエネルギーを熱エネルギーや電気エネルギーに変えることができる（乱入者を倒したときは熱エネルギーで蒸発させて真っ二つにした、みたいな）。

それでは、←の中からお選びください！

1. レラ・シェリル
2. ユングヴィティン
3. エピタシュロン
4. サナシュバリエ

皆さんのご応募、心よりお待ちしています！！

第四十三話　先制攻撃（前書き）

駄文感が……ウッウッ……泣いてないですぅ……。

アンケート、まだまだお待ちしています！詳細は４２話のあとがきに書いてあります。ふるって……ふるって……なんて言えばいいんだこれ。ふるって感想と一緒に応募してください？まあ、そんなかんじです！

ではどうぞ！

第四十三話　先制攻撃

その日の次の朝。俺は目を覚ました。自分からではなく、まさしく起こされたのだ。

「……っ」

ズグン、と心臓が歪んだ音をたてる。手を当て、服を握り締めて必死に痛みにこらえる。鈍痛はすぐに落ち着きを取り戻したが、なんとも気分が悪い。昨日のダメージが残っていたのだろうか。

……いや、おそらくあの紫電のダメージだろう。数日経った今でも傷は塞がっていない。腕には火傷の跡が走っているため、暑さをこらえて長袖の制服を、訓練のときは特注の全身ＩＳスーツを着ることにしている。腕ほどではないが、全身にも傷は広がっており、唯一無事だったのは顔くらいだ。それは不幸中の幸いか、奈菜の力量か。そういえばまだラーメンの借りを返してなかったっけ……治療の礼も込めてデザートもおごろう。

（……はぁ）

ケータイを開き、時間を確認するとまだ５時だった。それでももう

仄かに明るい辺り、まだまだ夏の名残を感じさせる。残暑の厳しさも全て込みで、気分はすこぶる憂鬱だった。

気分を変えるためにシャワールームに入る。冷たい水が傷口に染みたが、それにはもう慣れた。

最近、模擬戦では負け続きだ。セシリア、５体ＩＳ、一夏。実践でなら箒も。少しくらいやる気を出すべきだろうか。しかし、身体への過度な負担は傷口に響く。また開くことはないだろうが、身体に大きなＧがかかればその可能性だって否定できない。

（……今は耐えろ。時間くらいいくらでもあるさ）

しかし、一夏に負けたのは昨日が初めてだったな。まあ自滅に近いと言ったらそこまでだが……と、そんな折、あの約束を思い出す。一夏が女を作るまで応援する。子どもの頃の他愛のない約束。今思うと笑ってしまう。

あの頃、そんな約束をしたのは他人を必要としていなかったからだろう。頼る人間なんか必要ない。たかが一人の女に縛られるほど自分は弱くない。そう考えていた。そんな俺が、約束を破った。……いや、違う。破ることができた。ようやく自分が、周りが見えるようになれたのだ。それは、成長ということなのだろうか。きっとそうだと、穏やかに言えるくらい、強くなりたい。今はそう思える。

シャワールームを出て制服に着替え、今日一日の準備をする。ドアの前に来たところで、後ろを振り返る。アイツはまだ寝息をたてていた。

一夏。俺が約束を破ったということを聞いたらどんな顔をするだろうか。どうせアイツのことだ。一通り驚いて、「おめでとう」と言うだろう。だから、まだ言わない。アイツは俺を受け入れる。なら、言うかどうかは俺の気分次第だ。

「ありがとな、バーカ」

俺を支えてくれて、ありがとう。

最後にニヤリと笑い、ドアをくぐって俺達の部屋をあとにする。憂鬱な気分は、どこかに吹き飛んでいた。

☆　★　☆

「――――……！」

「ん？」

なにか聞こえた気がしたが……キョロキョロと辺りを見渡すと、剣道場が目についた。剣道場……箒か？時間もあるし、少し寄っていこう。

剣道場のドアは開いていた。広い剣道場の中で、箒がただ一人正座で座っている。目を閉じ、左の腰につけた真剣の柄に手を当て――なんで真剣なんだ……やっぱりこの学園はどこかおかしいと思う。ほんとーにそう思う。

「シッ！」

シャリン！と、箒の声と抜かれた刀の音が重なる。思わず見とれてしまうくらい、その一連の動作は美しかった。

「ふう……む？」

不意に俺に気づいたのか、顔がこちらに向いた。よっ、と片手を上げ、短いあいさつをしておく。

「おはよう。珍しいな、一弥がこんな時間に起きているとは」

「ああ、ちょっと目が覚めちまってな……それでも箒ほどじゃないだろ」

スッと立ち上がり、こちらに近づいてくる。剣道着を着て刀を腰に差して。ここは戦国時代か。

「これからどうするんだ？朝食までまだ1時間はあるぞ」

「んー……少し訓練でもするつもりだったけど……気が変わった」

む？という感じで首を傾げる箒に問い掛ける。ずっと気になってたことだ。

「お前ら、旅行中になんかあったのか？」

「……」

「図星か」

「ず、図星じゃないっ！ど、どうしてわかったのだ！？」

いや、目ェ泳いでたし顔ちょっと赤かったし髪いじってたし。ってか否定してからすぐ肯定すんなよ。

ゴホン、と咳ばらいをし、空気を変えるように箒は話し出した。

「一夏がやる気に満ちている、ということも少しは関係しているが、今日はいつもより早く鍛練をしてたのだ」

「ああ、転校生か？」

「それもあるが……一番の要因は、シャルロットにペアを申し込まれたからだ」

「シャルがお前と？ラウラじゃなくてか？」

「うむ。昨日の夜に部屋に来て直接頼まれたのだ。かなり真剣な様子だったぞ」

「へぇ……」

「だから、シャルロットの足を引っ張らないように鍛練を早めにしていたのだ。その様子だとシャルロットから聞いていないようだな」

ばりばり初耳だ。シャルと箒……かなりの強敵になりそうだ。でき

れば当たりたくないもんだな。しかし、そうなるとラウラがあの生徒会長と組むのか……かわいそうに……少し優しくしてやろう。一度話したことがあるが、あの会長は……いや、なんでもない。

「それより、せっかくなのだから一緒に鍛練でもしないか？まだ時間はあるぞ？」

「んー……いや、朝から体力使ったら一日がキツい。ただでさえ今日はウワサの転校生が来るんだからな」

鞄を持ち直し、開きっぱなしのドアを目指す。ここにいても箒の邪魔になるだけだろう。

「……そうか。では、また教室でな」

おう、と答え、俺は剣道場をあとにした。

☆　★　☆

「えぇっとですね、今日は体験入学生が来るので、自己紹介をしてもらいますねー」

朝のＨＲが始まり、山田先生からそんな言葉を聞かされた。体験入学先……ってなんだろう？みたいな顔をしている隣の男子生徒はほっとくとして……転校生じゃないのかよ。女子の情報もアテになんねーなー……。

それでもそんなイベントが三度のスイーツより好きな１年１組女子諸君。山田先生の話を聞いてきゃいきゃいと騒いでいる。勉強しろよお前ら……千冬さんがため息ついてるだろが。……そういえば千冬さんは戦争のことを知っているのだろうか。千冬さんの専用機も見たことないし。正直に言おう。死んでも相手にしたくない。なんかフラグ立たなかったか今。気のせいだと信じたい。

「……」

しばらくしてクラスの喧騒が止み、全員の視線がドアに集中する。シャル達専用機持ちが警戒を強めたせいか、一瞬ピリッと空気が張り詰めたが、気づいたのは俺と千冬さんくらいだろう。

「失礼しますっ」

ガラッと音を立て、教室の扉が開くと同時に、幼さを感じさせる声が耳についた。例の体験入学生はトコトコと教卓の脇まで歩き、こちらを向いた。

第一印象を一言で表すなら『子供』という文字がピッタリだった。鈴より低そうな身長に女性的な成長が見られない身体。肩までしかない赤毛の髪は片方だけ束ねられ、吊り目というほどではないが勝ち気で活動的な印象を受ける。小学生……か、もしくは中学生だろう。とても敵とは思えない、とても可愛らしい体験入学生だった。

が、

『……！！』

それにもかかわらず、俺達専用機持ちは驚愕に目を見開いた。ある一部分、それを除けばそこまで警戒することもなかっただろう。瞳。くりくりっとした瞳の色。その両方が――金色に輝いていた。

「リリアーヌ・レヴァシュタントです。リリア、って呼んでくださいっ。短い間ですが、よろしくお願いしますっ！」

彼女は朗らかにそうあいさつし、俺達以外の歓声をもって歓迎された。

◇

――――1年2組。

今回もどうせ全員1年1組に所属するんだろうなぁ、と思ってたけど、2人の転校生……ではなく、体験入学生があたしのクラスに来ることになった。今思えば1組に転校してきたのってシャルロットとラウラだけなのよね……専用機持ちが異常に密集してるから「あーまたか」みたいな感じに思ってしまう。

（……狙いはあたし？クラス的に孤立してるからっていうのが理由になりそうだけど……解せないわね）

あたし1人脱落させたところでまだあと7人の専用機持ちがいる。その中には、あのロシアの国家代表もいるし、第四世代の機体を持つ者も3人もいる。それに、ただでさえ1組には専用機持ちが固まって――

（……、固まる？）

少ない確率だが、その新しい生徒が味方かもしれない、という可能性がある限り、自分達は受け身の体勢を取らざるを得ない。ということは相手がなんらかの動きを見せないとこちらも動けない、ということ。先制攻撃（ファースト・アタック）。１組の専用機持ち６人を混乱、動揺させることができるファースト・アタックは何か。自分の思い至ったことを伝えるために、個人間秘匿通信『プライバシー・チャネル』に意識を向けるが、

（なによ、これ……声が飛ばせない……？）

ケータイを開くと圏外の文字。そんなはずがあるか。学園で圏外など起きたこともないし、聞いたこともない。ということは、

（……相手は、すでに電波もジャックしている……？あたしが気づくのも計算の内ってこと……！？）

２組に来る２人の体験入学生は……客観的な立ち位置にいるあたしの妨害のため。アイツと幼なじみという理由もあって、自分達の計画がバレると踏んだのだろう。

（まずいわよ……敵の狙い、それは――）

戦争に勝つために、巨軍を制するには何をすべきか。それは、

（一弥、アンタよ……！）

将を墜とすこと、である。

第四十三話　先制攻撃（後書き）

今の集計結果、

1…2標
2…1標
3…0標
4…1標

となっております。

待ってますよー！

第四十四話　画策と、歪んだ者（前書き）

遅れてばかり……ごめんなさい、このペースが普通になりそうですぅ……波が激しすぎる……。

第四十四話　画策と、歪んだ者

「……というワケで、俺以外は全員反対なんだが……生徒会長はどう思う？」

昼休み、生徒会室。今まで全くの無縁だと思っていた一室の中で、俺は来客用のふかふかソファーに腰を降ろし、購買で買ったパンをパクつき、出された紅茶を飲もうとしたら思ったより熱く、少しこぼれてしまった場所を近くにあったシルクっぽい布で拭きながら、真剣な目で生徒会長に話しかけた。

「全くの無縁の割に素晴らしくアットホームな感じね一弥くん」

目の前の生徒会長……更識楯無センパイは、扇子を口元に当ててくすくすと可笑しそうに笑っている。

「冗談だよ……すいません布仏先輩」

「いえいえ、音無くんもれっきとしたお客様ですから」

なんとも慈愛に満ちた声をかけてくれるのは布仏虚先輩。こんな俺の行動を見ても穏やかに微笑んでくれている。なんだろう……すごく癒される……。

「あ、でもそのタオルの請求書は後で渡しておくわね」

……プラマイゼロだった。

「おとなー元気出して？ほら、よーしよしよし」

「なんでかな。本音さんに頭撫でられるとダメージ増えるんだけど」

なんとも被ダメの多い一室だ。とりあえずブラックリストに登録しておこう。

「それでさっきの話に戻るけど……私も反対ね。一弥くんは早まりすぎだと思うわ」

「そうかねぇ……どうせなら全員相手にしちまえって感じだけど」

「それはダメよ。ちゃんとルールがあるんだから」

「そうか……」

「ねーねーおとなー。さっきから何の話してるのー？」

何の話って……決まってるだろ。

「「一夫多妻制について」」

「そんなことを真面目に議論してたんですか！？」

いやいや虚さん。俺の隣の席のバカに限って結構真面目に考えんといけんのです。賛成は俺だけだけど。せーとかいちょも純情なのね。

「仕方ないわね……そろそろ真面目な話に移りましょうか。体験入学生の様子はどう？」

「ああ……今のところアクションを起こす気はなさそうだ。鈴は２人の体験入学生に振り回されてるみたいだけど……まあ大丈夫だと思う」

「そう……なら、やはりランダムマッチかしらね」

「……」

一瞬、俺たちから攻撃すれば……とも思ったが、二重スパイということもある。俺たちの敵のフリをして、2年3年ペアに接触、情報の奪取が目的、ということだな。それに、

「やっぱりその3人は……ドイツの……？」

「出身で間違いないだろうな。厄介な相手だ」

ドイツ出身というのなら、今はそっちの可能性の方が高い。まあでも……なるようになるだろう。困ったときはそん時考えればいいし。

「それより一夏……じゃない、一夫多妻のことだ。あの調子じゃ何人の女子が犠牲になるか……！」

「親友相手にひどい言いようね。でも……確かに、近い内に墜とした女性全員からグサーってされるんじゃないかしら？」

「俺よりひどい言いようだ！」

「さて、緋弾の〇リアみたいに武器の所持を義務化しようかしら」

「アンタが黒幕かよ！想定内すぎるわ！」

「冗談よ。訓練機を生徒1人1人に渡すだけだから」

「それもう一夏の原形留めておくこと不可能だよな！？」

「装備は……そうね、最新兵器のワリバシン・Zを導入するわ」

「鉛筆の方がまだ殺傷能力が高そうな武器だなぁ！？てかそれ割り箸だろ！？」

「それもそうね……ならブロンズソードでも積もうかしら」

「だからなんでそんなゲームの主人公が序盤に持ってそうな武器なんだよっ！どっちにしろ攻撃力低いだろぉ！？」

おかしい……なぜ報告に来ただけで体力がガリガリ削れていくんだ……。あ、そういえば。

「ＩＳって言ったら、生徒会長のＩＳもよさそうだよな。俺じゃ敵いそうにねぇわ」

「ふふっ、だって生徒会長だもの」

「ああ、そのうえみずタイプだもんな」

「待って一弥くん。ＩＳにタイプはちょっと関係ないと思うの。みずタイプじゃないし」

「え？だってＩＳ名がアクエリアスなんとかじゃなかったっけ？」

「……どう考えても清涼飲料水です。本当にありがとうございます」

「あ、思い出した。アクエリアス・レディーだ」

「もうちょっと頑張って思い出してほしかったわね！それ絶対清涼飲料水の宣伝の人だから！」

「あ、でもでんき……雷属性に弱いですよね」

「なんで一瞬ポ〇モンから離れたの！？それに別に弱くないし！」

「だけど植物にまで弱いっていうのはちょっと……」

「弱くないわよっ！むしろ得意分野だから！」

「アクエリアスの　みずでっぽう！やべ、名前６文字じゃん！」

「心底どうでもいい……というかもうちょっと強い技を使ってほしかったわ！」

「クリアエア（不在風刃）……これだ……っ！」

「アクエリアスを並び替えたんでしょうけど、それもうみずタイプじゃないわよねぇ！？」

「そろそろポケ〇ンにかぜタイプ入れてほしいですよねー風刃さん」

「だから同意を要求されても困るというか改名された！？私の名前全否定してるわよねぇ！」

「とりあえずひこうタイプとして……みず・ひこう？ちょ！でんき……雷属性にめっちゃ弱いじゃないっすか！でんじほう……レールガンで確１っすよ！？」

「だから○ケモンで考えるなぁ――――っ！！」

生徒会長が遊んでくれた。

「ちなみに進化（第２形態移行）済み？」

「もういいわぁ――――っ！！」

ぼくはオリジ○フォルムとアナ○ーフォルムがあるよ、キラッ☆

◇

「それで……どうなんですの？ラウラさん」

昼休み、食堂。今、私たちは空腹を満たしながら作戦会議を行っている。ここにいるのは私を含めて5人。鈴は体験入学生2人の調査を、一弥は……

『生徒会長への報告は俺が行くよ。だってラウラ、お前……生徒会長とペアだし』

『にぎゃぁぁあああああっ！！』

……あの女とペア、ということを哀れんでか、生徒会室に赴いている。おのれ……！シャルロットだけは信じていたんだぞ……！

「ラウラ、どうなんだ？」

「あ、ああ。えー……」

ごほん、と咳ばらいして調子を戻す。まあ嫁と一緒にいられるならそれでいい。それより今は、

「確かにあの3人はドイツの連中だ。私たちのクラスに来たその中の1人には見覚えがある」

「見覚えってことは……軍出身なの？」

「ああ。私は今こそ隊長という役に就いているが、1度はそれも引き下ろされたこともあるのだ」

「ＩＳが出たから……だな？」

「嫁の言う通りだ。今はこの《オーディンの瞳》あるからいいものの、私個人のＩＳ適性値はＢ。いわゆる『できそこない』と言われたが……それより前、私が隊長に就任したとき、リリアーヌも軍にいたのだ。私と同じ、遺伝子強化素体だった」

水でのどを潤し、続ける。

「ＩＳが世に放たれたとき、リリアーヌは完全に居場所を失った。奴は私より低いＣ判定で、できそこないどころか『不必要』と言われ、軍を追い出された……」

私が知っていることは以上だ、と切り上げる。ここからは私の推測だ。

「おそらく奴はどこぞの研究所に拾われ、あの瞳を手に入れたのだろう。奴は貪欲と言っても差し支えないほど強さを求めていたからな……」

「なるほど……では、ラウラさんとの関係は？」

「……」

「……ラウラ？どうかしたのか？」

「……いや、なんでもない。そうだな……私の織斑教官に対しての感情に近いだろうな」

「それは、憧れってこと？」

憧れ……そうだ。奴は私に憧れていた。だが……当時の私はそれを拒絶した。余計な感情は戦場で致命的な弱点となる。故に、私はその羨望の眼差しをあしらい、伸ばしてきた手を振り払った。きっと奴は……私を怨んでいることだろう。

「……そうだな。……ご馳走様。済まないが、私用のため先に行く。また教室で会おう」

早口にまくし立て、その場を後にする。皆が戸惑うような雰囲気を感じたが、構わず私は歩きだした。

……それ以上は、聞かれたくなかったから。

☆　★　☆

……飛び出してきてしまった。嫁やシャルロットたちに変な風に思われないだろうか。中庭にはベンチに座って楽しそうに持参した弁当をつついている女子生徒が見受けられた。あれを嫁とやったら……楽しいだろうな。私が作った弁当を、嫁が食べる。嫁……一夏は困り果てたような顔をして、その弁当を食べるんだ。一弥とシャルロットがそばにいて、くだらない話に笑い合って、おかずの交換をしたりして……考えただけで笑みが浮かぶ。とてもとても、楽しいだろう。

それは、この学園に来てから生まれた感情だ。ほんのちょっと、たった1年の歳月を遡った私に会えば、その構図は俗物として、この金色の瞳に映すだろう。

……それが、私には怖い。ここに、この学園に居られるのはもうあ

と2年と半年、下手をしたらそれより短くなるかもしれない。そして、この学園を去り、軍に戻ったとき、

「この気持ちを……残しておけるだろうか……失わずしていられるだろうか……」

怖い。今の、この気持ちを失うのが。たとえ失わなかったとしても……一つの小隊を率いる者がこんな心構えでいいのか。

失いたくない。クラリッサたちがいるあの居場所も。一夏たちがいるこの居場所も。いつから、私はこんなに欲深になったのだろう……。なぜ、いつか離すとわかっていたこの手を、こんなに愛しく思ってしまうのだろう。最後に傷つくのは、自分なのに。

「……一弥は……」

無性に彼に会いたくなった。いつも私たちを引っ張り、くだらない話で場を温める、私の兄のような存在。それも、この学園に来て手に入れたものだ。

この沈んだ気持ちを吹き飛ばしたい。一弥に会って二言三言話していれば忘れられるだろう。彼はまだ生徒会室にいるだろう。あの女がいるのは不本意だが……どうせペアになったあいさつをしなければならんのだ。さっさと済ませてしまおう。

昼休みの予定を頭で揃え、目的地へ足を踏み出したときだった。

「お久しぶりですね、ボーデヴィッヒ隊長」

「……っ！？」

角を曲がり、その先にいたのは……かつての同志、リリアーヌだった。金色の双眸が私を捕らえるようにこちらを向いている。その瞳は笑っていないように見えるのは、錯覚だろうか。敵意を向けているのは、錯覚だろうか。

……落ち着くのだ。奴はかつての同志。この戦争では仲間として共に戦ってくれるだろう。

なら、なぜ今になって接触してきた？……手続きがあって忙しかったのだ。

なら、なぜここまで私たちの間に距離がある？……私が近寄るのを待っているのだ。

なら、なぜ――――

「この学園に来て随分と腑抜けてしまったようですね、ボーデヴィッヒ隊長。実に無念です。かつての私が敬った隊長はもうこの世にはいないみたいです」

拒絶の言葉が、私をえぐるのか。

「……な……なに……？どういうことだ……？」

「私はあなたを尊敬していたのです。それも過去のことですが。今の隊長は温水に浸かりすぎてさぞ極楽の限りを尽くしていると思うです。かつての隊長はもうこの世に存在しないようなのです」

突き付けられる今の私。そうだ。それが今の私だ。……錆び付いてしまった、戦争の道具だ。使い物にならなくなってしまった、哀れな存在だ。

「失望したのです、ボーデヴィッヒ隊長。あなたにも、その程度で腐ってしまう人間を尊敬していた自分にも」

見下したように言葉を綴る。私は言葉を発することすら、叶わない。

「ですが、安心してほしいです、ボーデヴィッヒ隊長。かつてのあなたを、私が取り戻しましょう」

悪魔が囁く。

「今のその居場所を捨て、私とおいでくださいです、隊長。今ならまだ、間に合うのですよ。ふふふ……」

「わ……わた、しは……」

「隊長……命は惜しいですよね？」

「いの、ち……？」

「今の迷いがある隊長……いいえ……ラウラ先輩が軍に戻り、戦場に立てば……どうなるかはご存知ですよね？くだらない感情は敵に利用され、やがて破滅をもたらすのです。なら、どうするば生き残れるというですか？簡単です。その感情を捨てればいいだけなのですよ」

「し、しかし……私は……」

「ふふふ……もうすぐチャイムが鳴るのです。私は先に教室に戻るですよ。ラウラ先輩が我らに加担するか否か。考えておいてくださいです。ただ……」

悪魔は囁く。選択を突き付け、愉快そうに笑う。

「拒絶した未来のあなたは……さて、どのような死に様となるですかねぇ？」

私は、何もすることができなかった。その場を動くことができなかった。呼吸をすることができなかった。瞳を動かすことができなかった。

奴の言葉すら、否定できなかった……

◇

「ねぇねぇリリちゃん。あれでほんとにこっちに来るのかなぁ？」
「ねぇねぇリリちゃん。それでほんとに仲間になるのかなぁ？」

階段で凰鈴音の妨害させるよう命じた部下――ミリアム、エレアム・シスフェリセインと合流する。こいつらは私と同じ研究所で瞳を手に入れた奴らだ。そのせいでよく仕事を同じくする。使い捨ての割になかなかしつこく生き残っている。

「問題ないですよ、シスフェリセイン姉妹。仲間に加えるつもりもないのです」

「ほぇ？どういうこと？」
「ふぇ？なんでなんで？」

「たとえ輝かしい過去があれど、今のような腑抜けた調子ではただの足手まといです。誘いに乗ればいつでも不意を突いて脱落させることができ、このまま戦場……ランダムマッチと言いましたか？その日まで迷いを引きずれば騙し討ちでさっさと脱落できるのです」

「うわー……黒いねぇ、リリちゃん」
「でもでももっ、名案だねぇ」

クスクスと背後で笑う手足ども。こいつらの使用法も考えておかないとですね。

ラウラ・ボーデヴィッヒへのアプローチは上々。放っておけば自分から自滅するはずですね。次は……

「いよいよ音無一弥ですね。まあ奴はダメージを引きずっているような挙動でしたし……手を焼くことはないですね」

ラウラ・ボーデヴィッヒを切り捨てたのも、あの男の挙動に気づいてなかったからだ。いかに巧妙に隠していたとはいえ、高位の軍人ならすぐに気づく。もうあの女は軍人などではない。ただの生徒だ。

戦争。なんて甘美な響きだろうか。その死線をくぐるだけで、私は強くなれる。かつてのラウラ・ボーデヴィッヒに近づける。いや……

（もう追い越したですね。くだらない目標でした）

次に越える壁は何にしようか。壁を乗り越えた瞬間。格上を葬った瞬間。絶望と失意でまみれたあの顔を見た瞬間。この上ない快感に身体は支配される。

彼女もまた、歪んでいた。

いつぞやの、ラウラ以上に。

「ところでリリちゃん。その口癖ってキャラ作り？」

「なんか学園に来てすごく敬語使ってるよねぇ」

「バカどもめ……敵地に入ったのだ。表の顔くらい作るのは当然さ」

2人に振り向いたその金色の双眸は、闇に包まれ輝きを増した。

ミリアム、エレアムが背筋を凍らせるほどに、その瞳は凍てついて

いた。

第四十四話　画策と、歪んだ者（後書き）

ご愛読、ありがとうございました……いやまだ終わらないよ。多分。

第四十五話　成長の成果（前書き）

ふと思いついたのです。あれ？ちゃんとしたタッグ戦って書いてなくね？

全員をうまく書ききれたでしょうか……

第四十五話　成長の成果

昼休みも終わり、午後の授業が始まる。言わずもがな、実習だ。1組と2組が合同で練習するため、かなりの専用機持ちが集まっている。2組に入ったらしい体験入学生の2人はクラス代表である鈴にべったりといった感じだ。背の低い者同士気が合うんだろうか。そんなことを鈴の前で言えばえぐるようなボディーブローが飛んでくるので口には出さないが。

「全員揃ったな。では、専用機組は近々公開試合が開かれるため、専用機を持っている者とそうでない者に分けての実習とする。専用機持ちは私について来い。それ以外の生徒は山田先生の指示を仰げ」

パンッ！と千冬さんが手を打つとそれぞれが動き出した。専用機持ちは……ひいふうみい……9人か。……ん？9人？

「音無。ボーデヴィッヒはどうした？」

「あ、ラウラがいないのか。いや、俺は何も聞いてません。シャル達なら知ってるんじゃないか？」

「えっと……ご飯を食べるときは一緒だったんですけど、その後は……」

「サボりか？ラウラも抜けてんな～」

『や、一弥（さん）じゃあるまいし』

「……」

おかしい。ここまで揃って言われるといっそ清々しくなってくる。

「ふむ……まあいい。音無ならまだしも、あいつが私の授業をサボることはないだろう」

え？まさかの追撃？

「では、さきほど言った通りお前達には公開試合が迫っている。まだ3週間近くあるとはいえ、気を抜けば重傷を負いかねない。そのことを頭に刻み込んでおけ」

『はい！』

「……へーい」

バゴッ！

「返事は変えるな伸ばすな遅れるな。もう一度言え」

「はいぃ……！」

出席簿君再び。どこまで追い詰めれば気が済むんだチクショウ。もう俺のライフはマイナスだぞ！ゾンビにクラスチェンジすんぞ！はァン！？

バゴッ！

「何か言いたいことでもあるのか？」

「……イエ、ナニモ」

ゾンビにクラスチェンジした。

「ではまずペアが決まっている者は前に出ろ。模擬形式で手合わせをさせる。レヴァタントとシスフェリセイン姉妹は参加不可だ。今日は見学だけの予定になっているからな」

「「「はいっ！」」」

千冬さんに言われた通り、俺は一夏と、シャルは箒と前に出る。それと、やはりと言うべきか鈴とセシリアがタッグを組んでいた。やっぱ仲いいよなこいつら……ん？鈴が仲間になりたそうな目でこちらを見ている。いや嘘だけど。目が合うとすぐに逸らされてしまった。え、マジでゾンビになってんの？

「ほう……そうきたか。くくっ、本当、お前らは見ていて飽きないな。なら……デュノア、篠ノ之ペアと凰、オルコットペアからハーフマッチの模擬戦を始める。定位置に着け」

ハーフマッチってのは、簡単に言うとシールドエネルギーが半分を超えたらアウトという形式のことだ。簡単に言ったが、むしろこれ以上難しく言えって言われる方が難しいねこれ。

『一弥』

と、無駄な解説に回ってると個人間秘匿通信を通じて声が飛んできた。鈴だ。

『あん？ゾンビに何か用か？お前もゾンビにしてやろうか？』

『……何ひねくれてんのよ。ううん、それよりも……』

『なんだよ。ネクロマンサー希望か』

『……。なんでもないわ。とにかく、体験入学生には気をつけなさいよ』

『ん……わかったよ。セシリア、お前らも気をつけろよ？シャルと箒っつーチートペアだからなー？』

『ふふん、ただで負けてやるつもりはありませんわ！必ず一矢報いてやりますわ！』

なんだろう。どっちにしろ負ける気満々に聞こえてならない。

「箒ー！シャルロットー！頑張れよー！鈴とセシリアもなー！」

一夏の言葉に、定位置に着いた４人は親指を立てて返事をする。それを見て、俺たちはシェルターの中に入った。中にはモニターもあるが、黒奏のハイパーセンサーの方が見やすいだろう。部分起動で視界を広げ、上空の鮮やかなＩＳの色彩を仰いだ。

「では、始め！」

千冬さんが拡声器で戦闘開始の合図を出す。その瞬間、得物を手にした彼女達は動きを見せた。

☆　★　☆

率直に言うと、先手を取ったのは意外にも鈴とセシリアのペアだった。

千冬さんが声を張り上げた瞬間、鈴の展開していた衝撃砲が、セシリアの《スターライトｍｋ？》と４機のビットが一斉に砲火を噴き出した。直線的に進む衝撃砲弾とスターライトのビーム弾をサポートするように４機のビットからレーザーが飛び散っていく。

同じく先手を取ろうとした箒は腰に据え付けてある《石蕗》と《空裂》を抜き放つ。抜刀の要領で突きと斬り払いを同時に行い、エネルギー弾とエネルギー刃が放出し、鮮やかな赤い光がバラ撒かれる。

拮抗は一瞬、鈴の衝撃砲弾と箒の攻性エネルギーがぶつかり合い、互いが弾け飛ぶ。残ったセシリアのビーム弾とレーザーが箒に襲い掛かった。

「ちっ！」

「逃がしませんわ！」

多少のレーザーを受けながらも、致命傷は回避できた箒に追随するセシリア。箒の打突粒子にはレーザーを、斬撃粒子にはビーム弾を正確に当てて軌道を逸らしていく。さらに、スカート状の腰部に取り付けられた2機のビットからホーミングミサイルも発射し、箒の隙を作っては確実に攻撃を当てていっていた。

「へぇ……レベルが上がってるな」

「すごいな……よくあんな正確な操作ができるよな」

若干押されてきた箒に追い討ちをかけるように鈴がサイドから割って入る。手には連結されていない《双天牙月》が握られている。接近戦に持ち込んで箒の攻性エネルギーを出させないためだろう。山田先生の時の模擬戦と比べれば飛躍的にレベルアップしている。

それに対し、まさしく絶体絶命の状況の箒。かなりシールドエネル

ギーが削られただろう、このままじゃソッコーでリタイアになりそうだ。

このまま、の話に限ってだが。

ズダダダダダダッッ！！という乱射音が空高くから轟いた。太陽と溶け込むかのようなＩＳ。間違いなくシャルだ。箒にべったりとくっついている鈴に２丁のショットガンを乱射し、とんでもないスピードで急降下してくる。

「甘いよ、鈴っ！」

「そんなの、おみとおしよっ！」

まさしく豪雨のように降りしきる弾丸が一斉に弾かれる。上空からの奇襲を想定して、あらかじめ頭上に衝撃砲を展開していたんだろう。強大な衝撃を伴った砲弾は、弾丸だけに飽き足らず、シャルまでにもその不可視のアギトを開いた。

それを見たシャルは――――

「にゃあっ！？」

ぐるんっ、と螺旋を描き、こともなげに２丁のショットガンを捨て

た。ちなみに鈴は驚いて猫みたいな声を上げてた。

シャルの手から粒子がほとばしった、と思った時にはすでに、あの華奢なロングソード――――《ティルヴィング》が握られていた。速度を落とすことなく、それどころか《瞬時加速》でさらにスピードを上げ、振りかぶるような大上段の格好で鈴に特攻していく。

「くっ！させませ――――」

「おっと、それは私の台詞だ」

さすがにまずいと感じたのか、セシリアがシャルに向かってスターライトを構える。が、シャルの大立ち回りでノーマークになった箒がセシリアに接近し、零距離で抜刀する。虚を突かれ、致命的な接近を許したセシリアはなす術なしに攻性エネルギーの餌食になり、セシリアのブザーが鳴り響いた。

「く……っ！」

その音を聞き、鈴が苦悶の表情を見せる。が、動きが鈍ることはなく、連結されていない双天牙月を交差させて受けの姿勢を取った瞬間。自分自身が弾丸のような速度で急降下したシャルが、その交差部分に剣を振り降ろした。

《ラミュール・リヴァイヴ》の単一仕様能力、《レラ・シェリル》。

何語なのかは全く不明だが、その力は多機能かつ高機能で、背後の翼のようなオブジェクトが太陽光エネルギーを吸収し、そのエネルギーをあらゆるエネルギーに変換できるというマルチアビリティだ。変換したエネルギーを武器に纏わせて攻撃してくるせいで、あまりにも予測が難しい。が、今はあの剣がどんなエネルギーを纏っているかは大体の想像はつく。

俺の予想が正しければ……あれは、重力エネルギーを纏っているはずだ。

ギィンッッッ！！

腹の底に響くような金属音。そして、拮抗と言えるような現象も見当たらず、剣を振り抜いたシャルが鈴を吹き飛ばし、地面に叩きつけた。

「あっ……ぐ……っ！」

叩きつけられた場所を基点に地面がえぐられ、クレーターができるほどの威力。シールドエネルギーこそ残っているだろうが……打撃系の攻撃は人体ダメージが高い。これ以上は鈴自体が危ういだろう。

「そこまで！デュノア、凰を診てやれ」

「はー……どいつもこいつも……とんでもねぇな」

鈴に駆け寄るシャルと箒、セシリアを見て、思わずそんな言葉を漏らしてしまう俺だった。

「……なるほどなるほど……なーるーほーどー……♪」

あんまり呆気に取られていたせいで、後ろからの楽しげな声は俺の耳に届くことはなかった。

第四十五話　成長の成果（後書き）

アンケートは以上です。

第四十六話　カレシとカノジョ（前書き）

頑張りますよ～

第四十六話　カレシとカノジョ

「……以上が先週までの活動報告です。今のところ機動性、銃器との相性、連携など、全てに精通していると思われます」

『了解。後日新たな武装を送達する。データの送信は欠かすことのなきよう』

ＩＳ学園に付属する寮の一室。さして他の部屋と変わりのない部屋にて、鮮やかなブロンドの髪の少女は携帯端末を手に、国境を越えて話をしているようだった。驚くほどにその顔には表情といったものが見受けられず、まるで人形のように固まりついている。普段の人当たりのいい彼女からは、考えられない様相だった。

『次のプロジェクトも近々試作段階に移る。あなたのデータはそのプロジェクトに基づくものになる。報告は欠かさないよう』

「そうですか」

『興味のかけらすら感じられない返答だな』

「事実、興味がありませんから」

『ほう。あなたの父親自身が発案したもの、と聞いてもその態度が変わることは？』

「……！父さん……が」

『我らがデュノア社は、あなたがするはずのない、本来有り得ない《第二形態移行》を行ったことで世界から注目を集めている。政府に至っては大幅にカットされていた予算を倍増する始末だ。言いたいことはわかるだろう。この世は結果が全てを物語る』

「泥棒じみたことをさせておいて結果がついて来るなんて、神様の目も案外節穴だということは理解できますよ」

彼女は忘れてはいない。かつて、自分を道具のような扱いをした父親のために友人を売ったことを。彼は寛大だった。それでも、他人からの命令だったとしても、自分が許されていい人間だとは思っていない。

「父さん……いや、もう赤の他人、ただの上司ですか。社長に伝えてくださいよ。あまり法に触れることは避けた方が、貴重な老い先を長くする秘訣ですとね」

『一社員の個人的な意見が耳に通るとは思えないな。極秘裏に進められている計画だ。今頃手を引っ込める真似などしないだろうさ。なにせ政府が、世界が味方だからな』

「ご存知ですか？日本には昨日の敵は今日の友、という言葉があるように、その逆もあるんですよ」

『だろうな。このプロジェクトが世界を敵に回すことのないように祈るしかないな』

「……報告は終わりましたが、いつまでこの雑談に付き合えばいいのですか？」

『望むなら延々と聞かせてやっても構わないぞ』

「失礼します」

ブゥンッという音と共に携帯端末が電源を落とす。あとに残ったものは、静寂以外にたいして見受けられなかった。

「……許されないから」

――だから、守る。

――いつか、そんなこともあったねって言えるくらい、強くなれるまで。

――その場所に、辿り着くまで。

◇

9月19日土曜日。本日は快晴とは少し言い難い雲が空を覆っており、午後から少し荒れる模様。とお天気お姉さんは言っていた。いつもは屋内に篭っているため（断じてニートではない）天気など気にする必要もないのだが、今日は特別だ。学園のすぐ近くを通るモノレールに乗り込み、適当な場所に腰を下ろす。同行者らしい人はいない。4人ほど座れそうな座席を贅沢に1人じめする。……まあほとんど使わないけど。それでもぎゅうぎゅう詰めよりはマシだ。貴重な休みなんだ。人ゴミ酔いでリバースしてました、なんてことは死んでも避けたいしな。

体験入学生がこの学園に足を踏み入れて約2週間。それは、実に変

化に乏しい2週間だった。リリアーヌ達は大人しいもので、全くアクションを起こしてこないどころか気軽に声をかけてきたりもしてきた。昼になれば3人が集まって食堂でご飯を食べているし、実習には参加しないものの、真面目に授業も受けていた。変化があったとすれば……鈴とラウラくらいだろう。

あの、生徒会長へ報告に行った日の夕食、食堂に集まった俺たちはようやく解放されたらしい鈴が鬼気迫るような表情で俺の首を絞めてきて一時呼吸困難に陥ってしまった。俺のその様子を見た鈴は頭の上にハテナマークを浮かべて納得しない顔でラーメン食っていた。もちろん夕食の後にやり返してやったが。理不尽にもほどがあるしその反応は俺がするべきじゃないの？違うの？ねぇ？

さらにラウラ。情報収集に勤しんでいるせいか、最近妙にすれ違いが激しい。授業こそちゃんと受けているものの、メシは一緒に取ろうとしないし目に見えてテンションが低い。何かあったのか、と聞いても何もない、心配するなとしか返してこないし、シャルに至ってはその原因が自分がペアを組まなかったからだと勘違いする始末。もうほんとなんでお前らはそんなに面倒くさいんだ……センチメンタルにも限度がある。

ケータイの時刻を確認。よし、遅刻はなさそうだ。他にもついているケータイの地図アプリを起動する。今日行くところをざっと下見。前に訪れたのは夏休みの始め辺りだったから1ヶ月ぶりということになる。前とたいした変化はなさそうだ……と、その時、モノレールが目的の駅に到着した。

駅にくっつくようにそびえ立つショッピングモール『レゾナンス』。その入口の脇には約束をしていたシャルの姿が……2人の男に言い寄られていた。あ、シャルが手首ひねった。男キレた。キレる１０

代って怖いよねぇ。

「シャールー」

「あっ、一弥っ！」

声をかけるとたたたっ、と小動物のように駆けてくる。お手って言ったら手を差し出すだろうか。試したかったが、さすがに自重した。

「チッ、男連れかよ」
「おい、行こうぜ」

ひねられた手首をさすりながらショッピングモールの中へ入っていくチャラ男A&B。こちらにかなりの恨みと怒りが篭った視線を飛ばし、姿を消した。

「って、なんで俺はデートに来てまで男を凝視してるんだ……」

「一弥が来てくれて助かったよ。あのままだったら軽い騒ぎになってたかも」

「……」

「……？か、一弥？」

ジーッとシャルを凝視。長いブロンドの髪はサイドテールにされ、白いシャツにネクタイ、その上に柔らかそうな生地の半袖アウター。下にはショートパンツにしましまニーソックスで、白い太ももがとても眩しい。さらにほんのり化粧をしてるのか、目立たない感じだがいつもとは決定的に雰囲気が違っていた。

「うん、今日もヘビー級にかわいいな」

「あ、ありがと……一弥は……長袖なんだね。暑くないの？訓練の時も全身ＩＳスーツ着てたよね」

まだまだ夏を感じさせる姿のシャルに対し、俺の格好は秋を想定したような私服を選んだ。黒一色のＴシャツにゆったりとしたカーディガン、下にはジーパンというラフなスタイル。シャルもなかなかラフだし、並んで歩けばそこそこいいカップルに見えるかもしれないな。

「ん……まあ、肌が弱くてな。あんまり日光に当たると真っ赤になるんだ」

嘘だ。カーディガンを羽織ってるのは傷を隠すため。全身ＩＳスーツはさらに対電撃用に絶縁体の素材を織り込んだ特注ＩＳスーツになっている。にしても俺って結構金かかってるんだよな。絶縁体ＩＳスーツは初めての試みらしくてかなりの数の実験を繰り返したって聞いたし、爆発（バースト）とか煙幕（スクリーン）みたいな特殊銃弾って一発一発が何十万ってするらしい。特に隠蔽（ジャミング）はかなり精密に造らないと機能しないから７桁はいく。この話を聞いた瞬間、もうストレス発散のためにバカスカ撃ちまくるのは控えようと決意したのは秘密だ。

「そっか、大変なんだね……」

だが、こうもアッサリと引っかかるとさすがに俺の中の数少ない良心が痛む。だけど、仕方のないことだと思うしかなかった。

「それより、せっかくのデートなんだ。いろいろ見て回ろうぜ」

デートといったら基本、思い浮かぶのは祭や海、遊園地に行くことだと思っていたが、今日はただのウインドウショッピングだ。なんせさっき挙げた例は一通り制覇したし、近くにこんなショッピングモールがあるなら見るだけでも楽しいだろうと思い、前々から誘っていたのだ。それに、建物の中なら涼しいしなっ。

「うん、そうだねっ。一弥は行きたいところとかあるかな？」

「ああ。秋……と、一応冬を想定した服があったら見てみたい。なにかしら揃ってるはずだろ」

デパートの中はやはり秋に近づいているにも関わらず冷房が効いていた。長袖にしてきて正解だったけど……シャルは寒くないだろうか。服を取り扱っている店は7から5階なので上から見ていけば暖かくなるかもしれない。

案内図はスルー、ケータイの地図アプリを呼び出す。店名で検索すればその全体像が浮かび上がるため、案内図なしに目的地を探せる。俺のケータイは中1から全く機種変していないため、かなり性能が低い。それでも対応できるこのアプリは重宝している。

「まずはシャルからだな。『サード・サーフィス』から見ていこう」

「うん。えっと……はいっ」

ケータイを閉じるとシャルが手を差し出した。え……普通逆だろ……なんて考えながら俺も手を出した。

「いや、お手って意味じゃなくてね……手、つなご?」

「……そっちか」

その発想はなかった。それでもシャルの手を握り、階段を使って7階へ向かう。

「そういえば、一弥の家って近いんだよね。ここにはよく来てたの？」

「んー、確かに家は近かったけど、あんまり来たことはないな。一夏と鈴は弾……あ、中学のツレな。そいつらとよく来てたっぽいけど」

「一弥だけ来なかったの？」

「まあな……その時は今より体調の落差が激しくて人ゴミに酔いやすかったし、買い物にも興味がなかったから。あとはまあ、知らないヤツの背中蹴り飛ばすくらい荒れてたしな」

「え、えぇっ!?そ、それでどうなったの!?」

「そいつに俺のことを皇帝陛下って呼ばせた」

「……ほんとにしてそうだね……」

事実だ。

「じゃあ臨海学校で箒が言ってたことはほんとだったんだ……驚いたなあ」

「黒歴史ってヤツさ。ふう……着いたな」

7階を階段で移動すると少し息が上がる。これで成長したっていうんだから俺も大概だな……。

『サード・サーフィス』にはそこそこの客がいた。服の知識に乏しい俺はシャルに任せっきりだった。ちなみにシャルが試着室に入っているとき、俺たちのことを覚えていたらしい店長と話が弾んでメアドを交換したのは別のお話。

☆　★　☆

ほどなくして店から出る。結局何も買わずに試着しただけで終わったが、店長はにこにこスマイルで手を振って送り出してくれた。

「何も買わなくてよかったの？」

「ウインドウショッピングだし、大体の目星はつけたからな。まだまだ連れ回すつもりなのに、荷物持ってバテました、なんてかっこつかないだろ？」

「ふふっ、そうだね。じゃあ、次はどこに連れてってくれるの？」

「いや、次はシャルが決めろよ。彼氏と彼女ってそういうもんだろ」

「えへへ……じゃあね、一回行ってみたいところがあるんだあ」

恥ずかしげにそう言われ、連れてこられた場所は……

「化粧品専門店……なんだ、シャルは化粧に興味があったのか？将来ケバくなんぞ」

「ならないよっ。その……前は興味なかったけど、最近勉強してみたんだ」

「ふーん……げっ、化粧水1つにここまで値が張るのか……！？」

近くにあったものの値札を見れば軽く5桁はしていた。世間のマダム達はこんなもんをガンガン塗りたくって金を消費してんのか？金の無駄遣いだな……爆発弾をバカスカ撃ちまくる俺の言えたことじゃないけど。そういえば夏休みに花火大会っつってアホみたいに夜空に爆発弾やら閃光弾やら轟音弾やら撃ちまくった時もあったな……軽く30発は撃ったから……ヤバい。一千万超えてたかもしんない。しかもそのあと千冬さんに死ぬほど怒られたし。よし、今度は一発一発に感謝して花火大会をしよう。

「それは美白液だね。他にもファンデーションとかアイシャドーとかまだまだあるんだよ。それに、自分の肌に合った化粧水じゃないとかぶれちゃうんだから」

「はー……思ったより金かかってんだな……なんで急に化粧に目覚めたんだ？」

「えっと……ね。ほら、僕にも一弥みたいな彼氏ができたからさ……自分の好きな人にかわいく見られたい……って思うのは、普通のことだよ」

頬を赤らめながらそう言うシャル。ちくしょぉ……鼻血が出そうだ

ぜ……！鎮まれ俺の理性よ……！煩悩退散煩悩退散……っ！

「そっ、そうか。どうりで今日はいつもと違う雰囲気なワケだな」

「き、今日は軽くだけど……ど、どうかな……？」

もともとシャルは中性的な整った顔立ちで、美少女にも美男子にも見えるのだが、今日ばかりは間違いなく美少女だ。ぷっくりと柔らかそうな唇にパチッとした目元。じっくりと見なければわからないほど薄く化粧されているが、纏う雰囲気は確かに美少女のものだ。

「ああ、なんかこう……俺だけが知ってるシャルって感じだ。もともとの顔がいいんだし、さりげないくらいでちょうどいいと思うぜ」

「ほ、ほんと……！？えへへ……じゃあ、これからはこれくらいにしようかな……」

はにかむシャルを堪能した。いやはや、ごちそうさまです。その後、化粧品を試したり説明を聞いたり化粧を施されそうになったりといろいろ遊び、その店を出た。

「あははっ。もう一弥ってば、あんなに断らなくてもいいじゃない。最近は男の人も化粧するってお店の人も言ってたよ？」

「断固拒否する。それに化粧する男なんて特殊性癖があるヤツだけだっ。俺にそっちの気はねぇっ」

「そうかなあ？あ、ちょっとお手洗いに行ってくるね」

「おぅ、ゆっくりしてこい」

トイレに向かうシャルを見送り、地図アプリを確認。次は予約した店でランチ、そのあとはまたブラブラ歩いて……

「ねぇねぇそこのお嬢さんっ」
「かっわいーねー！１人？」

と、次の予定を立てている俺の耳に聞き覚えのある声が届いた。声のした方へ向かうと、どう見てもデパートの前でシャルをナンパしてたチャラ男Ａ＆Ｂだった。こちらからはチャラ男の姿しか見えないが、またナンパをしているらしい。物陰に隠れて、他の客や警備員の目をごまかそうって腹だろう。おお、ちょうどいいぜ。

「……どいてください。通行の邪魔です」

「そんなこと言わずにさぁー！俺らとどっか行かない？」

つかつかつかつか。

「そうそう！俺らいい店知ってんのよ。お嬢さんもきっと気に入るとぶへぁっ！！」

チャラ男Ｂを殴り飛ばす。まだ借りを返してなかったんだよなぁ。社会的にも肉体的にもボコボコにしてやんよ。

「この痴漢野郎が！こんな幼い女の子に言い寄るたぁいい根性してるじゃねぇか！」

突然の俺の襲来と殴り飛ばされたチャラ男Ｂを見て唖然とするチャラ男Ａと女の子。あれ、こいつ……話が早いぜ。俺は知人であるその女の子に目配せをする。

「あ……えーっと……た、助けてくださいっ！この人達、無理矢理私の手を握ったりしてきたんですっ！」

「なっ！？待て！まだそこまでしてなげぶるぁっ！！」

「やっぱりかこの社会のゴミが！あっ、警備員さん！ここに幼女に暴行を加えたゴミがいます！」

近くを通った図体のデカいゴリラのような警備員に２人の身柄を引き渡す。事情を話すとゴリラ警備員は礼を言い、女の子を慰めてチャラ男ＡＢを引きずって去っていった。うん、すげーいい人だあの警備員。

「で、１人でどんなご用事だい？お嬢さん」

警備員の姿が見えなくなった時、俺は後ろのリリアーヌにそう問い掛けた。

☆　★　☆

「別に助けてもらわなくても１人で対処できたんですが？」

「そういうなって。こっちもいろいろあるんだよ」

あのゴミクズ共、シャルに言い寄って来やがったしな。リリアーヌは俺の言葉をどう解釈したのか、ジッとこちらを見ていた。

「お前も用事があってここにきたんだろ？ついてはいけねぇけど、早く行ってこいよ」

「ついてこなくていいですよ？私にはＩＳがあるですから。じゃあ音無先輩、助けていただき、ありがとうでした」

ペコッとお辞儀をして歩き出すリリアーヌ。それをその場で見送る俺。

（ヒーロー気取りの善意行動……データとは違うですが、なるほど。ただの偽善者、というのがこの男の正体でしたか）

密閉されたリリアーヌの思考は、嘲笑と侮蔑の混じったものだった。その思考に、俺が気づくことはなかった。

「お待たせ、一弥……うん？どうしたの？」

「や、なんでもない。さ、腹減ったな。ランチにしようぜ」

そういえば、１人でここにきてなんの用だったんだ？……まあいいか。

その後、辺りが暗くなるまでウインドウショッピングを楽しむ俺たち。そして、いざモノレールに乗って帰ろうとしたときだった。俺のケータイがメールを受信し、用事ができた。

Ｆｒｏｍラウラ

『一弥どこにいる？話がしたい。たすけて』

第四十六話　カレシとカノジョ（後書き）

次回、かなり勘違いさせるかもしれませんが、この小説のヒロインはシャルですはい。

第四十七話　選択肢（前書き）

勢いで書いた結果です。

第四十七話　選択肢

シャルをモノレールに乗せ、自分もすぐ帰ると言って駅を飛び出す。空には、いつのまにか分厚い雲が覆い、ぽつぽつと雨が降り出してきていた。今はまだマシだが、じきに本降りになるだろう。

シャルを学園に帰したのは、ただの直感。きっとラウラは俺と2人で話がしたいはずだ。そして、その話は今までのラウラの行動とリンクしている。なにがあったのかは知らないが、今はチャンスだ。ラウラを元に戻すチャンス。あいつは俺に助けを求めた。なら、助けてやるのが道理だろうが。

雨に濡れることはない。ラウラが行きそうなところはわかる。あいつは俺が向かう場所にいる。そう、その場所は――

「……一弥……」

――ショッピングモール『レゾナンス』。そのデパートの、中央の天井が吹き抜けの広場に、ラウラは立っていた。

「……よくわかったな。私がここにいると……」

「お前が本当に俺に会いたいなら、ドイツの部隊使って俺の居場所を推測できたはずだ。危なかったぜ、もうちょいお前からのメールが遅ければ学園に帰るところだった」

「……そうか」

ラウラの格好はやはり制服だった。そこだけはいつもと変わらない。

「さ、俺は忙しい。話すならとっとと話しちまえ。お前がそこまで落ち込む理由はなんだ？」

「……その前に、聞かせてくれ」

「どうした」

「どうして……どうして、お前は……」

声が震える。最後まで言わなくても、なんとなく言いたいことは理解できた。

「どうして……か。ラウラ、お前が学園に来た日に俺が言った言葉、覚えてるか？」

「……」

「ヤバくなったら誰でもいい。誰かに頼れって言ったんだ。お前は俺に頼った。それなら、」

助けるのは、支えるのは、当然だろ？

そう言った瞬間、デパートの照明が全て落ち、闇が広がった。

『……私はお前達が好きなのだ』

周りが騒然とする中、個人間秘匿通信からラウラの声が聞こえてきた。か細い、今にも崩れそうな声音。

『一夏が好きだ。シャルロットが好きだ。箒も、鈴も、セシリアも。そして……一弥、お前もだ』

吹き抜けの天井から月光が落ちることはない。厚い雲が覆っているから。

『怖いんだ……』

ぽつ、と雫が落ちる音。それと同時に、外では雨が豪雨となって降り注いだ。

『お前達を失いたくないっ！いつかこの夢は消える。楽しい時間は永遠とはなりえない！私は軍に戻り、お前達と会うことは2度となくなるっ！それが私には怖いんだっ！！』

彼女は続ける。

『なら……ならば……今、手放してしまえば、痛みは少ないもので済む。最後までお前達と一緒にいては……きっと私は戻れない』

嗚咽のような、言葉。

『所詮私は作り物の体だった……一弥のような強さは、持っていなかったんだ……』

追い詰められた者の言葉。

『私は……今度の公開試合を終えた時、軍に戻ろうと思っている。この学園で採れるデータは大抵採れた……』

なあ、一弥。

『私のこの判断は……間違っているのか？』

ラウラの縋り付くような問い掛け。俺は

「大間違いだ、バカヤロウ！！」

即答した。

「頭使えよ」

そんなこと、認めない。

「てめぇは失いたくないって言っただろうが。失うのが怖いって言ったただろうが！」

認めてやらねぇ。

「怖ぇのはいいさ。だから軍に帰りますだと？んなもん逃げただけだろうが！諦めただけだろうがっ！！」

ラウラに近づく。これが俺たちの距離なら、縮めるまでだ。

「本当に欲しいもんだったら足掻きやがれ！！頭ぁフル回転させて一発逆転の発想を編み出しやがれっ！！他人の知恵を利用しやがれってんだっ！！」

『……っ』

「お前見てりゃわかるさ。お前は軍の方も大事なんだろ！？だから悩んでんだろ！？どっちか選べねぇからどっちを選ぶか迷ってるんだろっ！？」

『……そうだ……私は……軍を選んだのだ……』

「そこが間違ってんだよッ！！」

――『選ぶ』っつー選択肢以外を探せってんだっ！！

『……それは……不可能だ……』

「なにが不可能なんだよ？欲しいなら両方手に入れる。ただそれだけだ」

『……っ！！そんなこと……できるならしているに決まっているだろうっ！！できないからこそこうして悩んでいるのがわからないのかッ！？』

「できる」

ラウラの目の前。表情は見えない。が、きっと泣いてるだろう。

俺は、ラウラを抱きしめた。

「俺の家族になれ」

「……ぁ……ぇ……？」

「俺の妹になれ。家族の糸は切れることはない。どれだけ遠く離れていようが、家族を理由に会えるだろ」

「わ……私、が……？」

「そうだ。一夏が好きなら、あいつに兄貴なんて呼ばれるなんて烏肌もんだが、我慢してやる。時間は永遠じゃないが、家族の絆は永遠だ」

「……家族とは……家族とはなんだ……？私が……作り物の私が、手に入れていいものなのか……？」

「俺だって作り物だろうが。父親と母親が作った人間だ。それに、人口受精も今時驚くようなことじゃねぇ。お前と何か変わったことでもあんのか？」

「……っ！なら……っ、誓え。今ここに誓えっ！」

俺の背中に手を回すラウラ。ようやく、こいつは受け入れた。

「ああ、誓う」

「私から……離れることはないかっ！？」

「ああっ！離れねぇ！」

「ずっと……ずっと！一緒にいてくれるかっ！？」

「ずっとだ！俺が一緒にいてやるっ！！この音無一弥がっ、一生家族をやってやるっ！！だからお前も誓えっ！！」

もう、2度と。

「もう2度と！諦めないと！誓えるかっ！？」

「……あ、……ああっ……誓う。誓うとも……っ！」

その場所から音が消える。雨音は止み、ガラスの天井から月光が差す。

新たな家族を、祝福するように。

第四十七話　選択肢（後書き）

後光が差しとるんやー

第四十八話　応えなき呼びかけ（前書き）

バカテスではコラボとかよく見かけましたが、ＩＳでは見かけないですね……

ぼくもやってみたいです、コラボ。やってみたいんだもん……

第四十八話　応えなき呼びかけ

「え？一夏の誕生日って今月なの？」

「あー、そういやシャルロット達は知らないんだったよな」

シングル戦のランダムマッチを明日に控えた木曜日。いつもより２割増しに騒がしい寮の食堂で夕食を取りながらいつものようにバカ話をしていると、不意にシャルが驚きの声を上げた。

「いつなの？」

「９月の２７日だ。学校も休みだし、一応俺の家で友達が集まって誕生日パーティーをする予定になってるけど……」

「２７日……し、明々後日ですわね……」

「全く……なぜそういうことは早く言わんのだ」

「え？いや、別に大したことじゃないかなーって」

「ふん。しかし、知っていて黙っていた奴もいることだしな」

「「うっ……！」」

ギクッ！と肩が震えるダブル幼なじみ。手に持つ箸も止まっている。動揺しすぎて隠してたことがバレバレです。本当にありがとうございます。

「お兄ちゃんもお兄ちゃんだ。なぜ黙っていたんだ。ひどいじゃないか」

「いや、俺は別に行くつもりはねぇし。……ってかその呼び方ヤメロ。なんで急にそんな呼び方になりやがった……」

「何を言っている。お兄ちゃんは私のお兄ちゃんだ。それに、日本の文化では血の繋がっていない義理兄のことは『お兄ちゃん』と呼ぶのが一般的な習わしだと書いてあったぞ」

「今度お前の部屋に家宅捜査に押し入るからな。漫画の類は全部焼却してやる……」

「そっ、それはだめだ！あれはクラリッサから借りたものなのだぞ！？」

「苦羅裏津沙ァァァァ……！！」

あのレゾナンスでの一件があった翌日、ラウラは正式に俺の家族になる書名を済ませた。つまり、今は『音無ラウラ』という名前なワケだが、俺のたっての願いで学園や軍ではまだ『ラウラ・ボーデヴィッヒ』を名乗っている。なぜなら音無ラウラなんて名乗っていたら赤っ恥かくのは目に見えているからな。だというのに、

『私は今日から音無ラウラになったぞっ！』

と、次の日には嬉々として名乗り回っていやがった。おかげで鈴やらセシリアやらから死ぬほどそのことについて尋問された。もちろんラウラを叱ったさ（断じて八つ当たりではない）。八の字固めでやり返されたけどな……なんて弱っちい兄貴だろう。泣きたくなってきた。唯一の救いはシャルが1番最初の理解者になってくれたことか。夜叉変化をすることなく、じっくり話を聞いてくれた。くぅぅ……さすが俺の嫁だぜ……。

「ラウラ。別に絶対にお兄ちゃんって言わなくてもいいんだよ？自分の好きな呼び方でいいの」

「そ、そうなのか？では……む、むう……しかし……」

「あんだよ、言っとくがお兄ちゃんだけは認めねぇからな」

「む、むう……」

腕を組み、思案するラウラ。……お、この浅漬けうめぇ。ポリポリ。

「な、なら……かず兄、と呼んでいいか……？お、お前の妹もそう呼んでいただろう。わっ、私も妹なんだし、そう呼ぶ権利はあるはずだぞっ」

顔を赤らめ、フォークでマカロニを弄ぶラウラかっこ俺の妹。その銀髪の頭をガシガシと撫でてやる。うわ、スゲーサラサラだこいつの髪の毛。

「上出来上出来。発音がちょっと違ったが、よくできましたー」

「あーんもうラウラってば可愛いなぁ！嫉妬しちゃうよ」

「ば、バカもの！抱き着くなシャルロット！か、かか、かず兄……もいつまで頭を触っているっ！やめりょ――――っ！」

恥じ入るラウラを堪能した。

「それで……なぜ一弥は一夏の誕生日パーティーに来ないんだ？昔は一緒に祝ってたじゃないか」

「逆に聞こう。なんで俺がこんなフラグ魔神の悪誕祭に参加しないといけないんだ」

「悪誕祭とまで言うか……」

「あたりめーだ。中学ん時のこいつの誕生日、家に千冬さんがいるからって俺の家が会場になったことがある」

「ああ……織斑先生がいるとお祝いムードにはなれませんものね……それでどうしたんですの？」

「移動中に一夏がフラグ立てたクラスメート女子が混ざりやがって俺の家で騒ぐだけ騒いで帰っていきやがった」

『うわぁ……』

「わ、悪かったって……だから片付け手伝ったじゃないか……ってか言い方ひどくね？まさか生まれたことを否定されるとは思わなかったぞ！？」

「黙れくたばれ死に腐れ。そういうことじゃねぇんだよ……」

フラグ立てた女子の処理をしろって言ってんだバカめ。

「うーん……いいじゃない、一弥。今年は一夏を祝ってあげようよ」

「そうだぞかず兄。私の嫁ならお前の義理弟だろう。祝ってやるといい」

「ヒィィイイイイイイッ！！」

「ちょ……っ！そこまで嫌がられるとほんと傷つく！心臓にグサグサくる！」

「チッ、仕方ねぇ……チッ、行くだけ行ってやるか……チッ」

「さすがに一夏が不憫に思えてくるわね……」

「気のせいだ」

「あ。そこは断定するのね……」

「そ、それよりっ！明日のシングルマッチ、みんなは誰と当たるのかな？」

「あー……そういやなんか対戦相手が書かれた用紙もらったな」

「ああ、なんか個別に対戦相手を知らせてるみたいだぞ？そういった細かいこと決めるのは山田先生の仕事らしくてさ。さすがに対戦相手を決めることはないけど。で、なんでも試合当日に生徒に知らせた方が盛り上がるからーとかなんとかって理由らしいぞ」

「よくわからん理由ですこと……それで、お前らは誰と当たるんだ？」

生徒会長は他の仕事があるという理由で不参加。で、整理すると……

一夏ｖｓセシリア……

箒ｖｓ2年先輩……

鈴ｖｓ3年先輩……

ラウラｖｓミリアム……

シャルｖｓエレアム、で……

「俺はリリアーヌとだ」

「……こうして見ると、どう考えても仕組んだとしか思えないわね」

「多分織斑先生だろうね。いつもとは違う相手と模擬戦をすることで、視野の拡大を図ってるんじゃないかな」

「ふむ……やはり決闘を申し込んでくるだろうか？2年3年はもちろん、ラウラからの情報でレヴァタント達も敵と把握できたしな」

そう、あいつらは敵だと判明した。が、アリーナに近づく気配を見せないので今まで決闘を申し込むことができなかったのだ。

「一夏とセシリアは傍観だな。ざまあみろ脇役フラグ魔神」

「いつまでそのネタ引っ張るんだ！？」

「死ぬまでだ。ごちそーさん。俺はちょっと整備科で最終調整してくる。お前らも油断して一本取られたりすんなよー」

満腹になったことだし、眠気が襲ってくる前にさっさと調整しちまうか。そんでもって風呂に入ってダイビングオブザベッドーっと。食器を流し台にかたし、整備科へと向かう。そろそろ秋とあってか、外は暗闇に満ちていた。

☆　★　☆

――整備科到着。

「うへ……真っ暗だな……電気電気」

パチ、とスイッチを押して電気をつける。にごったような暗闇は払拭され、明るみで部屋が満たされる。専門の工具やらなんやらが揃っているこの場所は、本来ならそういうことの専門家に任せるんだが……な。

「もう後は調整くらいしか残ってねぇしなー」

と、部屋の中を見渡し、足を踏み入れた瞬間だった。

「あれ？音無せんぱーい」

「うひっ……！り、リリアーヌか。ビビってねぇし。ビビってねぇし！？」

「何も言ってないのです……」

後ろから明日の対戦相手、張本人が入ってきた。まだ制服姿の当たり、こいつも調整目的だろう。

「明日はよろしくお願いしますです。お背中借りるです」

「ああうん。つーかお前のＩＳ未知数なんだよな。対策の施しようがない」

今までなんだかんだでＩＳ訓練に参加してこなかった体験入学生３人。理由は本国からＩＳが届いてないんだとかなんとか。まあよくわからん理由だ。

こいつは敵だ。が、それ以前に同じ学園の同じクラスの仲間だ。俺の役職は副委員長。敵だが仲間、という矛盾点しか見当たらないが、別に決闘するだけだし問題なしと割り切っちまおう。

「んで、リリアたんも調整か？」

「名前を略して変な呼び方をつけないでくださいです！……そうです、調整です」

「やべ、今のノリで調整の部分を変なおじさんに変えて言ってくんね？」

「……そうです、変なおじさんで……ていっ！」

「あたっ」

からてチョップ　を　くりだした！　きゅうしょ　に
あたった！

「狙ってないです！？」

「ぐぅぅ……！まさか男の急所を狙ってくるとは……！」

「だから狙ってないですってば！」

「へいへい。でも急所（頭）狙ったの事実じゃん」

「急所、の前に男の、って言葉を入れないでくださいですっ！ああもう……」

赤毛の頭を抱えてブツブツ唸っているリリアーヌ。ど、どうしたってばよ？

「オウフッ、それよりも調整してさっさと寝よう。――クロカナデ！君に決めた！」

「2人しかいないのによくそこまでテンションを上げられるものです……」

「ちなみにこいつ、はがねタイプね」

「聞いてないですっ！！」

雑談もそこそこに黒奏の調子をディスプレイから読み取る。オールグリーン。いつでもレッド戦いけるぜ！

「んで、リリアーヌ後輩のＩＳはどんなんだ？」

「……ええ、興味があるなら見てみるですか？」

「何タイプなのかは気になるな」

「……なら、こちらにどうぞ。この扉の向こうにあるですから」

どれどれ……リリアーヌが後ろで何かをいじってる間にその扉の前にくる。ほどなくしてその扉は横側に開かれた。

「……黒？」

そのＩＳは、一見すると黒を基調としていた。が、ところどころにラインが入っていて、その原点に目を走らせた瞬間。

猛烈な打撃が、俺の背後から襲ってきた。

「ぐ……がァァあああああああああぁぁっ！！！？」

体が吹き飛び、扉の中、その奥の壁に激しくぶつかる。その扉の中に、すでにＩＳはなかった。尋常じゃない痛みが体全体を駆け巡り、吐き気すら覚える。

「が……っ、げほっ！り、リリアーヌ……何のつもりだテメェ……！」

悠然とこちらに向かって歩いてくるリリアーヌに問いただす。が、その質問に答えることはなく、彼女は不気味に口の端を吊り上げ、手に持った整備科に置いてある机を横殴りに振り回した。

「あ……っ！が、ぁぁぁっ！！」

再び吹き飛ばされ、扉の中の隅に追いやられる。やっべぇ……骨イったかもしんね。つかなんか殺されそうな勢いなんですけど……っ！

「何の、つもりだよ……っ！」

「別に、そんなに驚くようなことじゃないですよね？あなたと私は敵。あなたは私をクラスメートとして見ているようですが、私達には絶対的な境界線が――」

「なんとか言えよ！」

「言ってるです！今まさに理由を説明してるですっ！話の腰を折らないでくださいっ！」

こんな状況でもツッコミお疲れ様です。

「……クソッ、お前……まさか……」

「ええ……私の目的は戦争ですよ。あなたを崩せば他の専用機持ちに動揺が走るです。その隙に決闘を申し込み、さっさと退場願う、という算段です」

「ちくしょう……っ！目的はなんだっ！？」

「今言ったでしょうが！1番最初に『私の目的は』って言ったでしょうがっ！なんなんですか、耳が悪いんですか！？」

完全に弄んでいます。体が痛むのは相変わらずだけど。

「うぐ……っ、リリアーヌ……！」

俺の眼前に仁王立ちする彼女。その目は冷たく凍り付いている。……気に入らねぇ。

「くまさんパンツ、見えてんぜ……」

「なっ、なぁっ！？はぁっ！？なんで今遺言っぽく言ったんですかっ！？ここまでやられて気になることは私のパンツなんですかっ！？」

「さぁね……あー、いってぇ……おいリリアーヌ後輩。手ぇ貸してくれよ」

「……ふん。もういい。殺す気が失せた」

リリアーヌの手を淡い粒子が包み込む。次の瞬間、鋏鋸糸鋸ナイフペンチドライバー釘……他にもあらゆる痛そうな道具が音を立てて床に散らばった。

「その余裕がいつまで続くか興味が湧いた。すぐに音を上げるようなみじめな姿にしてやる」

「ははは……ご冗談」

手始めにペンチで肉をえぐるか、とシャレにならないことを言いながらこちらに歩いてくるリリアーヌ。俺は心の中で問い掛けた。

……なあ、今のやりとり、どう感じた？

……楽しい、って思えなかったか？

……敵だなんだ知らねぇがな。

……俺はお前と喋ってたときは、

……結構、楽しかったんだけどな。

俺の呼びかけに応える声はなかった。

――なあ。俺のクラスメートなら、もっと楽しんでもいいんじゃないか――

応える声はない。

第四十八話　応えなき呼びかけ（後書き）

一弥フルボッコ。

第四十九話　剣舞（前書き）

ノリで書いた戦闘シーン。

……詰んだ

第四十九話　剣舞

「……」

「今戻った……シャルロット、一弥は？」

「あ……一夏。それにセシリアも。うん、よく眠ってるよ」

９月２５日金曜日。ランダムマッチ、シングル戦が行われる今日、１番初めの試合であるセシリアと俺の試合が終わり、保健室に向かうとシャルロットが一弥の寝ているベッドの近くで丸イスに座っていた。確かシャルロットは一弥の前、一弥は１番最後だ。だけど、一弥とリリアーヌの試合は……多分中止になるはずだ。

昨日深夜、整備科を管理している先生が見回りをしていたところ、血みどろの一弥を見つけたらしい。その時はまだ意識があり、その見つけた先生が言うには何かをうわごとのように言っていたとか……内容まではわからなかったらしいけど。その後保健室に運ばれ、紫藤先生が応急手当をしてベッドに寝かされた……という訳だ。犯人は未だ判明していない。

ベッドで眠っている一弥を前に、何も言うことができない。なんとも重い空気の中、保健室の扉が開き、箒と鈴が入ってきた。

「あら？箒さんに鈴さん……？試合はどうしたんですの？」

「いや、それが……」

「……先輩２人が棄権したのよ。なんでも武装にちょっとした問題があったとか聞いたけど……本当の理由はわからないわね」

そういえば、俺達はその先輩達のこと全然知らないんだよな……と、俺の疑問符が顔に出てたのか、セシリアが話し出した。

「３年のダリル・ケイシーと２年のフォルテ・サファイア。専用機名はそれぞれ《ヘル・ハウンド・ｖｅｒ２．５》、《コールド・ブラッド》ですわね。噂では鉄壁の防御で名が知られてるようですわ」

「なるほど……やっぱり経験とか俺達より１年多くあるんだよな。ダブルスではきっと出てくるだろうし……」

「そうね……そういえば、次の試合はラウラだったわよね？どうする？見に行く？」

「俺は残るよ。３人は見に行っていいぜ。ラウラの応援してやって

くれ」

「シャルロット……」

「……うん」

スッと立ち上がるシャルロット。ラウラの次はシャルロットの試合だから、今行かないと試合に間に合わない。

「……行くよ」

抑揚のない声。その言葉は一弥に向けたのか、俺達に向けたのか。それとも……自分に向けたのか。

シャルロットを含んだ4人が保健室を出ていく。俺はシャルロットが座っていた丸イスに腰かけた。

一弥は、目を覚まさない。

◇

バシュッ！！という噴射音と共にアリーナへ猛スピードで駆動する《シュヴァルツェア・レーゲン》。暗いピットの中から日光の差す外へ出たせいで視界が少しぼんやりと滲む。が、それも意味のない事象に過ぎず、ＩＳのハイパーセンサーに意識を向ければすぐに周囲の情報が流れ込んできた。今最も必要な情報……敵の情報だ。

――戦闘待機状態のＩＳを感知。操縦者ミリアム・シスフェリセイン。ＩＳネーム《セイント・シュヴァルテーゼ》。戦闘タイプ近接武装型――

眩しさのため、閉じていた目を開く。まだチカチカとした感覚は消えないが、初めよりかは幾分マシだ。それに、私のこの目にそんな小細工は通用しない。

「あれー？眼帯外したの？なんでなんでー？」

目の前できゃっきゃきゃっきゃとやかましい試合相手。戯れ事に耳を傾けることもなく、私は再び目を閉じる。

「一弥先輩のこと、残念だったよねー。誰かに襲われちゃったんだよね？」

「……」

「でもねでもね？これは戦争なの。弱い者はくじかれて、強い者が生き残る。それは暗黙のルールなの」

「……」

「あれれ？聞こえてないのかな？まあいいや！それじゃ、そろそろ試合開始――」

「……ごちゃごちゃとやかましい女だな、貴様は」

ラウラの冷めた物言いに、ミリアムの動きが止まる。静かに開けたラウラの瞳は、『ドイツの冷氷』の名をもってしてもまだ足りないほどの極寒を秘めていた。ブリザードが吹き荒れるかのような視線で、ミリアムが発していたほのぼのとした雰囲気も一息に凍り付く。心なしか、観客の生徒の声援も若干遠退いている気さえする。

「いいだろう。ちょうどむしゃくしゃしていてな。ストレスが爆発しそうなんだ。まずいな。これはまずい。ああ、一夏には、かず兄には、仲間には感謝をしなければ」

赤と金の瞳が細められる。笑っているのだ。ラウラ・ボーデヴィッ

ヒは、笑っていた。

「こんな気持ちは初めてだ。イライラが止まらない。怒りが煮えたぎる。血管が暴発しそうだ。致し方ないので貴様を嬲ってストレス発散させてもらおう。貴様もそれが目的だろう？」

淡い粒子が黒い装甲で覆われたラウラの手に収束し、気がついたときには一発の弾丸が握られていた。

ミリアムも同じく笑っていた。冷たさはない。ただ純粋に、この状況を楽しむように満面の笑顔を作り、手に大型のランスを呼び出し、さらにこちらも一発の弾丸を手に置いた。

試合開始のブザー。それと同時にラウラは弾丸を握り潰し、ミリアムは高らかに放り投げた。

☆　★　☆

ガガガギギガガガガギィンッッ！！

『ひゃあー！すごいよラウラせんぱぁい！手数は断然こっちがいっぱい出してるのにぃ！すごいすごい！』

『くだらんくだらんくだらんなァァァッ！私の怒りはこんなものではないぞォォォああァッ！！』

突き、斬り、払い、穿ち、刺し、殴り、蹴り、剥がし、砕き、破り、壊す。あらゆる破壊の手段が、２人によって再現されている。

ミリアムのＩＳは、言ってしまえば《白式》よりも近接型を極めた、超近接タイプだった。敵ＩＳにピタリと張り付き、大型ランスにワイヤーブレード、エネルギーブレード刃、ソードビット……あらゆる近接の装備が、その機体に詰め込まれていた。だが、それら全てを一度に使うことは不可能だ。故に全ての装備を織り交ぜた攻撃スタイルをミリアムは採用していた。

ランスで拮抗すればビットが敵のシールドエネルギーを削り、ワイヤーブレードで手元に引き寄せて手に展開されたエネルギー刃で引き裂き、ランスを投擲しつつ格闘戦に持ち込んだかと思えばいきなり後ろからワイヤーブレードがランスを掴んで特大の一撃をぶち込む――――。

４つの近接装備を駆使し、変則的に攻撃をしてくる、まさしく変幻自在のスタイル。それこそ、ミリアム・シスフェリセインが駆る《セイント・シュヴァルテーゼ》の特色だった。

『知ってるかなぁ？このＩＳって実は第２世代なんだよねぇー。あ、そういうと間違いがあるかな？実はこれ――』

『我が駆るＩＳ（シュヴァルツェア・レーゲン）、もしくは姉妹機（シュヴァルツェア・ツヴァイク）の実験機。そうだろう？』

ガギガゴギギィッ！！と、２人が会話をしている間にも響き渡る、重い金属音。２人の攻撃は拮抗し、弾かれ、防ぎながらも両者のシールドエネルギーをガリガリと猛スピードで削っていく。

対するラウラの戦闘も、完全なる近接戦闘だった。エネルギー刃、ワイヤーブレード。ミリアムと比較するとかなり見劣りする武装だった。

この試合で、ラウラはＩＳに積んでいるレール砲、ＡＩＣは一切使っていなかった。理由は明白かつ単純、使役する暇がないのだ。ミリアムの猛撃が、それを阻（はば）んでいた。近距離にいる相手にレール砲の照準が合うはずもない。ＡＩＣに至っては使ってしまえば自分まで動けなくなり、ミリアムの連撃が自分を斬り刻む。故に、近接用であるエネルギー刃とワイヤーブレードで抵抗していた。それでも決闘が拮抗しているのは、ミリアムの戦闘スタイル故だった。

絶対的な装備の差。それは認めざるを得ない。だが、前に挙げたように人間には腕が、手が２本しかないように、積まれた装備は一度に使役することができない。織り交ぜ、変則的……ミリアムがそんな戦闘スタイルに落ち着いているのは、単に『一度に全部の武器は使えないから全部の武器を度々使う』という理由だからだったのだ。

それならば。変則的に出ようが出まいが、使う武器の数が同じならば。渡り合えないことなどない――――！

『我がＩＳの実験機。貴様は近接戦闘のデータ採取のための機体。私と武装が似ているのもそれが理由だろう』

『なぁーんだ、知ってたのかぁ……えへへ、ずっと見たかったんだよねぇ。私たちがデータを採り続けてた母機体をさ。こんなにすごい人が乗ってるとは思わなかったよ』

でもね。とミリアムが続けた途端、彼女の嵐のような攻撃がさらなる熾烈を極めた。

『……ぐっ！？』

『言っちゃえばさ。私たちの機体の中間点、それが《シュヴァルツェア・レーゲン》でしょ？』

だったらさぁ、

『近接を極めた私のＩＳに、中途半端なキミのＩＳが勝てる道理があると思う？』

攻撃にさらなるスピードが乗せられ、ラウラの防御が間に合わない。近接を極めた者と、全てを平等に制した者。差が生じるのは当然だった。

ついにラウラのシールドエネルギーが危険域（レッド）を突入したとき、ミリアムが初めて――――近接特化とは思えないほどの距離を取った。

『最後に見せてあげるね？この機体に積まれた全ての武器を使った攻撃……《ブランディッシュ》。勢い余って殺しちゃうかもしれないけどさっ』

全ての武器を使った攻撃。聞く限り、不可能だと思うが、極論としては可能である。

全ての武器の軌道を一カ所に集め、ただまっすぐ閃くように命令する。ラウラ本人、余計なフェイントを加えず、ただ一点を目掛けて。

『バイバイ、お母さん』

自分に向かって一極集中する武器。ラウラに避ける術はなかった。

◇

「これは決まったですかね」

観客席で頬杖をつきながら試合を傍観するリリアーヌ。2人の試合……いや、決闘を見て、いかにもつまらないといった風にため息をついた。

「あーあ……やっぱり音無一弥は残すべきでしたか……」

「ここにいたか、レヴァタント」

後ろから声がかかる。千冬だった。

「もうすぐ貴様の試合だっただろう。こんなところで何をしている？」

（……こいつ、確かラウラの教官とか言ったか。なるほど……手強そう……いや、今の私では敵わないか）

ぞくぞくっ、と体に鳥肌が立つ。リリアーヌは、そのことに喜んだ。

――――次の目標はこいつだ。

「すいませんです……でも、ラウラ先輩が心配で」

「心配する必要はない。さっさとこい」

ぐいっと首根っこを掴み、猫のように連れていく千冬。これにはリリアーヌも焦った。

「ち、ちょ……っ！」

「まだ心配なのか？心配しなくていい。あいつは負けない」

一拍置いて、リリアーヌにニヤリと笑いかけ、

「あれは私の教え子だぞ？」

そう言った。

◇

時間が止まったかのような感覚。ラウラに向けられた武器が動きを止めている。走馬灯？違う。これは――

『確かに、このＩＳ、《シュヴァルツェア・レーゲン》は近接戦闘ではお前に敵わないだろうな。だが、忘れた訳ではあるまい。この機体が第３世代と呼ばれる、その所以を』

ＡＩＣ。慣性停止能力。それは、ラウラの機体の看板のようなものでもある。

一点突破を目指すがために、一極集中に向かったために。

全ての武器が、平等に停止結界の餌食となっていた。

ジャキッ！とレール砲をミリアムに向ける。その砲門を見たミリアムは、

『……よかった』

安堵し、

『私たちのお母さんは、やっぱり強かったや』

微笑んだ。そして次の瞬間、大威力の砲弾が、ミリアムのシールドエネルギーを残さず刈り取り、試合終了のブザーが鳴り響いた。

『……私は母などではない。……ただの妹だ』

崩れ落ちながらも、微笑みを絶やさないミリアムを一瞥し、ラウラは自分のピットに戻る。

「……胸クソ悪い」

ラウラＶＳミリアム――――

ラウラ、辛勝。

◇

「え……き、棄権？ま、またですかぁ！？」

僕の隣で山田先生が驚愕の声を上げる。どうやらエレアムちゃんが棄権をしたらしい。そうなると次は……一弥の番だ。

（……また、守れなかった）

初めは5体のＩＳが来たとき。そして今回。結局僕は、何一つ一弥を守ることなんてできなかった。

（どうして、僕ってやつは……！）

守れないんだろう。何もできないんだろう。悔しい。弱い自分が憎

い。

一弥の背中を守るために、この機構……《レラ・シェリル》を学び、覚え、理解し、扱えるまでになった。一弥の背中を守るために、この剣……《ティルヴィング》で数多くの模擬戦闘を積んだ。

それでも、守れなかった。だが、仕方のないことである。四六時中、一弥と一緒にいることなどできない。そこを突いた完全な不意打ち。守りようなどない。

だけど、

（それで……納得がいくはずがないじゃないか……っ！）

実際、一弥は生死の境にいるとはいかないまでも、かなりの重傷を負っているのだ。仕方ない、の言葉で済ませようなどおこがましいにもほどがある。

「どうしろって……言うんだよぉ……」

膝を抱える。涙が溢れ、無機質な鉄製の床にしたたり落ちる。何をすればいいのか。どうすればいいのか。わからない。わからないわからないわからないわからな――――

「……シャルロット」

「う……ぁ……らう、ら……」

気がつくと、目の前に試合を終えたらしいラウラが立っていた。あちこちに痣が見える辺り……苦しい戦いだったのだろう。シールドエネルギーに阻まれる以上、人体にダメージが伝わる場合には打撃もしくは衝撃として傷をつくる。ＩＳスーツで全身は見えないが、顔や腕の青い痣が痛々しい。

「……勝ったぞ、シャルロット」

淋しげに笑いかけてくるラウラ。そっか……ラウラは、勝ったんだ……。

「ぐすっ……おめでとう、ラウラ。でも……でもね。もう、僕の試合はないんだ……強さを証明することはもう……できないんだよ……」

「……シャルロット」

ぎゅっとラウラに抱き寄せられる。普通逆なのになぁ……そう思いながら、押し寄せてくる衝動を止める術もなく、僕はラウラにすがり、涙を流した。

シャルロットＶＳエレアム――

シャルロット、不戦勝。

◇

「ラウラのやつ、勝ったらしいぞ。トイレに行く途中で聞いたんだ」

保健室に戻り、ドアをくぐる。俺達男子が使えるトイレは限られてるため、大分保健室を空にしてしまった。犯人が未だわかってない以上、再び襲われることもあるのに……気をつけないと。

「ああ、そういえば気持ちいい風も吹いてたな。窓開けるよ」

カラカラと窓を開けると、涼しい風が入ってきた。もうすっかり秋になりつつある。過ごしやすい気温だし、余計な心配なく治療に専

念できる――――そう思って、一弥の方を見た。

俺が最初に来たとき。カーテンは全面に引かれていた。

俺がトイレから戻って保健室に入ったとき、一弥のベッドのカーテンは引かれていた。そう、ドアの方向から見たら、カーテンは引かれていた。だから、

一弥のベッドのカーテンが、窓側の方だけ開いていて、

「……一弥……？」

俺が名前を呼んだその人物がベッドの上にいないことに気づくのに、遅れてしまったんだ。

保健室には、窓からの秋風が流れていた。

第五十話　弱き者

「で……少し目を離した隙に音無は失踪した……と。そういうことか？織斑」

「え、ええ……すいません、俺がいながら……」

結局、ランダムマッチのシングル戦に一弥は来なかった。せっかくの専用機組のための行事が2戦しか行われず、科学者や観客達は不満のようだったが、また一週間後にダブルス戦があるということで不満の波はなんとかなったらしい。だが、そんなことよりも深刻な問題が浮かび上がった。

音無一弥の失踪。

保健室からいつのまにか出ていった一弥は、そのまま姿を見せることはなかった。学園側は失踪という形で捜索するつもりらしく、ランダムマッチを観戦に来た科学者達の送迎が済み次第捜索に移るらしい。この情報は全て、この生徒会室で聞いたことだ。今この場所には布仏姉妹を抜いて、千冬姉に生徒会長、それと一弥と2年3年先輩を抜いた専用機持ちが集まっていた。

「一夏くん、ラウラちゃんの試合が終わるまでは確かに保健室にいたのね？」

「ええ、それは確かに。トイレから帰る途中にラウラが勝ったって聞いたんです」

「うーん……目撃者もいないみたいだし……何か痕跡とかないのかしら？」

「いや、どうもそれらしいものは見当たらなかったらしい。流石私の兄だ。実に徹底したスニーキングだな」

「感心してる場合じゃないからねラウラ……でも、そこまで心配することもないと思うけどなあ」

シャルロットの言葉に、この場にいる全員の視線が集まる。１番心配すると思っていた人物が、あまりにも意外な態度だったからだ。

「どういうことだ？シャルロット。一弥はすぐに戻ってくる……そういうことか？」

「うん……箒の言う通りかなあ？なんだか、いつのまにか帰ってき

そうで……さ。だから、心配はしてないよ」

「ふふふ……なるほどね。シャルロットちゃんは一弥くんと固ーい絆で結ばれてるのね～？」

「あはは……そんなんじゃないですよ」

困ったように笑うシャルロット。それと同時に場が和む。ん？シャルロットって……こんな落ち着いてたっけ？もっと慌てると思ってたんだけど。

「じゃあ、試合をして疲れた方もいることですし、解散にしませんですか？ミリアムちゃんの様子も気になるのです……」

「そうだな。今お前達にできることはないだろう。間違っても捜そうとするなよ。音無を襲った犯人が……まだいるかもしれないからな」

千冬姉の視線が厳しいものになる。その方向にいるのは……リリアーヌ。やっぱり千冬姉もリリアーヌが怪しいと考えているらしい。

「じゃ、かいさ～ん！若奥様のシャルロットちゃんが言ってるんだし、心配することは何もないわ。今日はゆっくり休んでね」

生徒会長の言葉で……

「もう、一夏くん？楯無って呼んでって言ってるのにぃ」

地の文に突っ込んできた！？

「おねーさんにできないことはないのよー？」

……復唱してくださいね。東京特許許可局東京特許許可東京特許許可局。はいどうぞ。

「東京特許許可局東京特許許可局東京特許きょきゃきょきゅ！」

「アウト！最後アウト！」

「……アウトじゃないわ。スライディングセーフよ」

どっちにしろ危ないじゃないですか……。

「その後、一夏くんのため息を初めに、全員が生徒会室をあとにするのだった！」

「セリフとらんでください！？」

◇

生徒会室での召集を終え、リリアーヌはすっかり日が沈み、暗くなった中庭を歩いていた。雲１つない天候ゆえ、明るい月が柔らかな光を発していた。

（ミリアムのヤツ……なぜラウラを仕留めなかった！？音無一弥を抑えれば動揺するはずじゃなかったのか！？）

ＩＳ学園は緑化施設だ。あちこちに木が植えられており、なかなかの風景を見せているが、そんなことも目に入らないほどリリアーヌは焦っていた。

本来、今この時点で少なくともラウラ・ボーデヴィッヒとシャルロ

ット・デュノアの2人はこの戦争から脱落させることができるはずだった。音無一弥のいない奴らなど、その程度だとたかをくくっていた。

その計算の結果、あの近接戦闘のエキスパートであるミリアム・シスフェリセインはラウラ・ボーデヴィッヒに敗れ、エレアム・シスフェリセインはシャルロット・デュノアとの決闘に逃げ出した。ミリアムが心配だし、お母さんは強いと証明できたから、などという理由で。

（そもそも、ダリル・ケイシーとフォルテ・サファイアはなぜ動かない！？チッ！こうなったら1人ずつこの私が相手をして――）

苛立たしげに爪を噛む。赤毛の髪を掻き乱す。足を踏み鳴らす。思い通りにいかない。自分の計算が合わない。イライラが募り、周りに当たるリリアーヌ。

果たして、強い風が吹き、彼女の行く手を漆黒が阻んだ。

「お前は……っ！？」

◇

「……はあ」

全員と別れ、寮の廊下を歩く女子生徒（2人の例外を抜けば全員がそうなのだが）。けだるげにため息をつき、見るからに重い足取りで自室に戻っているその女子生徒は、さっきの会議室での召集で一言も口にしなかったセシリアだった。やがて自分の部屋に着き、またため息。その原因は部屋にあるのではない。むしろこの学園の施設には好感を持っていると言っても過言ではなかった。

以前の彼女なら不快感をあからさまに外に放出していた。それが今のように落ち着いているのも、成長の証と言えるだろう。

話が逸れた。

彼女、セシリアのため息の理由。それはやはり、自分の部屋の中に合った。

自動ドアが開く。中には、包帯に巻かれた音無一弥がいた。

「悪いな」

彼はそうセシリアに告げた途端、窓から身を投げた。セシリアは頭痛をこらえるようにこめかみを手で覆う。

「あの方はもう……無茶だけはやめてくださいましね……」

匿った自分が言うことではないのは百も承知だが――それでも、心配なことに変わりはなかった。

音無一弥は止まらない。

◇

「いい月が出てるじゃないか。月見酒なんてのもオツだな。そう思わないか？リリアーヌ」

「……なぁんだ、音無先輩ですか。そんな傷だらけの体で動き回って大丈夫なんですか？」

「……。まあな。腕のいい医者を2人ほど知ってるんだ。最近

借りを作りっぱなしだけどな」

「なるほどです。それで仕返しにきたってワケですか？随分と小さい人間ですねぇ？」

学園の並木道のような一本道。月光が照らす中、２人の生徒……一弥とリリアーヌが相対していた。一弥はすでにＩＳを展開しており、いつでも戦闘ができる状況。対してリリアーヌは生身。頭では襲うようなことはないと理解していても、本能がこのままではマズいと警告する。

「仕返しじゃない。これは腹いせさ。俺は今怒り狂ってるからな」

その言葉に、頭からも本能からも警告が鳴り響く。致し方なく、リリアーヌはＩＳを展開した。

「失望したですよ、音無先輩。八つ当たりなんて最低なことをする人間だとは思わなかったです」

「そう言うなよ。俺のことを大事に思ってくれてる人がいるんだ。つまりはその人は深く傷ついた。怒って当然だろ？」

バシィッ！！と弾けるような音が静寂を突き破る。彼の怒りを代弁

したかのような音。その音は、彼のＩＳの形態変換の音だった。一弥どころか、ＩＳからも怒りを感じるほどの音に聞こえたのは……気のせいだろうか。

「ちょうどいいですよ。私も怒り狂っていましてね。不甲斐ない部下を持つと計画が思ったように運ばないです」

黒のＩＳから５つの誘導兵器が飛び出る。が、その機器に武器といったものは見受けられない。セシリアのようなレーザータイプにしても、発射口が見当たらない、完全な球体だった。

疑問に思った直後。雷のような――――いや、雷そのものの音が空気を震わせた。

バチバチバチバチバチッッ！！

「我がＩＳ（アズール・パラノイア）。通称《碧き神》。あなたは聞きましたですね、このＩＳは何タイプかと。今答えるですよ。このＩＳは……雷タイプです」

黒いＩＳが碧い電気を纏う。機体に伸びていたライン。そのライン上に緑にも似た、青にも似た色の電気……碧電が駆け抜ける。その発電量は、５体ＩＳの出した紫電とはあまり変わりはないように見えた。

だが……５体ＩＳはただ電気を出すだけだった。完全にカウンター

の状況でしか使えないような仕組みだった。だが、リリアーヌのＩＳは違う。５つの誘導兵器で碧電を自由自在に操っている――！

「このＩＳはなかなか使い勝手がいいのですよ。妨害電波を出して個人間秘匿通信を遮断したり……デパートの照明を落としたり……ね」

リリアーヌが粒子を手に宿す。出てきたのは、何の変哲もない近接ブレード。その大して普通の武器は、碧電を帯び、凶悪な殺傷能力を秘めた武器へと一瞬で変貌した。なるほど、確かに応用が効きそうなＩＳである。

「さあ、どうするです？私がこの碧い雷を纏っている以上、あなたの攻撃手段は銃撃しか残されていませんですよねぇ？」

「……」

「音無先輩の今持っている銃器は３種類。分類はマシンガンとアサルトカノンとレイガン……でしたか？まあどちらにせよ磁場を形成して照準をずらせば当たることなんて万に一つの可能性もなくなるし、レイガンに至っては粒子が届くまでに霧散できるんですけどねぇ！？」

「……」

「無駄と承知で突撃でもしますですか!?確かにその方が散り方としては最高ですからねぇ!?それ以上のダメージをそのボロボロの体が耐え切れるとは思わない方がいいですよ?今度は確実に殺すですから!!」

「……」

「あはははっ!!早くかかってこいよ!?それとも死ぬ間際に一言でも残したいってか!?墓石に刻んどいてやるから今のうちに命乞いの言葉でも聞かせてみろよ!?」

「……」

「さあさあさあ!!さっさと始めようぜ!?決闘形式にやりてぇなら弾丸を投げろよ!!それが音無一弥の命運になるかもしれ――」

と、そこまで言ってリリアーヌは気がついた。音無一弥の、包帯でぐるぐる巻きにされた手の平に――弾丸を持っていることに。

リリアーヌが獰猛な笑みを浮かべる。それを見た音無一弥は、一体何を思っただろうか。キィンッ、と指で弾丸を弾き、いつしかのように金色の弾丸が月光に照らされた。

その弾丸が落ちるより早く。視覚が強化されたリリアーヌですら視認できないほどの何かが頬掠めた――そう思った瞬間。

ズガガガガガッッッ！！！！！と、

鈍い金属音と共に、リリアーヌは一瞬にして地面に磔にされた。

「……な、え……？」

何が起きた？なぜ自分は地面に突っ伏している？なぜ自分は起き上がれない？なぜ自分は動くことができない？

なぜ――私の装甲を、黒い鎖が貫いている！？

「……このＩＳスーツは絶縁体でな。電気を通さない特注品なのさ」

悠然と振り返る一弥、頭上に浮かび上がる月。地面にへばり付いたような体勢のリリアーヌを見下ろしているその構図は、とても幻想

的で。

包帯の合間に見える彼の瞳と風に揺れる木々のざわめきは、かなり神秘的で。

その全てが……無表情という名の冷たさを持っていた。

「さて。決闘は決した。デスマッチがお望みならズタズタにしてやるのも構わない」

所在無さげに降ろされていた手に、漆黒の鎖――――確か、《怒雷》という名だったか――――が絡み付く。鎖部分に稲妻状に展開されている刃が彼の腕に食い込み、血を流して……すぐにその傷は塞がった。

「ひっ……！」

恐怖。完全なる畏怖。圧倒的な力の差。さらにありえない治癒の早さ。その構図は、リリアーヌの金色の双眸にはさながら化け物のように映っただろう。

あまりにも静か。あまりにも流麗。あまりにも……強大、さらに凶悪。これだけの条件があれば、リリアーヌを震え上がらせるには十分過ぎるほどだった。

目標を超える。それはリリアーヌの全てだ。だが、初めからそのような性格だった訳ではない。ラウラに会い、部下として所属し、強い憧れの念を抱いた果てに……超えたい、という感情が湧いたのだった。

至って普通の感情。それが歪みだしたのは、やはりＩＳが世に放たれた頃だった。自分は全くの才能無しと言われた。それだけならまだよかった。

彼女にとって全てだった、ラウラ・ボーデヴィッヒが否定されてから、彼女は壊れ始めたのだった。自分は今まで何を掲げてきたのかと。黒い感情が彼女を覆い、歪んだ結果に行き着いた。

――なら、殺せばいい。

――目標を葬り、次の目標も葬り。

――やがて自分は最強に行き着くだろう。

彼女に闇が広がった。まず、最初の目標だったラウラ・ボーデヴィッヒを超えよう。そして私は頂点に立つ。彼女の闇の正体だった。やがて闇はラウラ・ボーデヴィッヒを飲み込み、音無一弥にまでその魔の手が及んだ。

それが間違いだった。飲み込んだラウラ・ボーデヴィッヒは音無一弥によって引き戻され、音無一弥を飲み込むにしては彼は強大すぎた。

元々、その闇は不完全だった。経験が足りなかった。ラウラ・ボーデヴィッヒを飲み込んだ闇は、自分に驕り、順序を踏み違えた。

底知れない敵、音無一弥に、リリアーヌ・レヴァタントは手を出し、結果として後悔する羽目になったのだ。

――だが、

「な……何のつもり……だ」

スッ……とリリアーヌの拘束を解き、宙をさまようように核部分に戻る剣鎖。リリアーヌの体に自由が戻った。

「これだけで済んだんだしな。そうだな……一言謝ってくれれば、今までのことは全部水に流すことにするさ。それに雷タイプじゃなくてでんきタイプ。平仮名は重要だぞ？」

許しの言葉。その言葉は、リリアーヌの恐怖を和らげた。和らげてしまった。

「……そうですね。私が悪かったです……」

そう言った瞬間、目を潰すほどの雷光と、耳をつんざくような轟音が発生した。

ピシャァァァアアアンンッッ！！

電気の応用。太陽のような光に雷のような音を、身に纏う碧電で再現したのだ。それと同時に、リリアーヌは手に持った帯電ブレードを閃かせようと――――

ズガガガガガガガッッッッ！！！！

起き上がった瞬時に、その行く手を剣鎖が阻んだ。

「目くらまし……着眼点はいい。敵を屠るにはなかなかのカードだ」

爆発的な光が収まり、穏やかな声が響く。帯電ブレードの錆にしてやろうと考えていた音無一弥、張本人だった。目を閉じたまま、しかし、見据えるようにリリアーヌに顔を向けている。

「ひっ……！な、なんで……っ！？」

ＩＳのハイパーセンサーは強力だ。視覚に至っては宇宙の彼方まで見通せることを前提として創造されたため、眩しい光などを感知し

てしまうと失明の恐れすらある。それは、聴覚にしても同じだ。

「そもそも俺は今、ハイパーセンサーなんて起動させてねぇんだよ。それにさぁ……」

――ハイパーセンサーなんて高感覚なもん起動させて、暴虐の虜になんかなりたくねぇからなぁ――

その言葉を発した瞬間、収まり始めた恐怖が、再び津波となって押し寄せた。

「や……ぁ、ぁ……っ！ゅ、許し……っ！！」

「もう遅ぇよ」

音無一弥の両手。その手にはいつのまにか、赤と青の粒子剣が握られていた。

「後悔しながら逝け。俺達に盾突いたことを後悔しながらな」

と、彼が死刑宣告を出したときだった。ザザザザッ！という音が徐々に近づいてくる。気づくのが遅れたのは、ハイパーセンサーを

切っていたからか……リリアーヌに至っては、恐怖から気づかなかっただけか。

「はっ……お仲間の登場か。どっちにしろ血祭りが派手になるだけで――」

黒と白のＩＳ。それは、音無一弥と織斑一夏を想起させる。が、音無一弥が口をつぐんだ理由はそのことではなかった。

一弥の目に見える位置。そこで、２人の増援は――膝をつき、頭を下げ……土下座をしていた。

「音無一弥様、代わりといってはとても失礼なことと承知で申し上げます！どうか……リリアの命だけは助けては頂けないでしょうか！？」

「も……もし、先程仰った『謝れば許す』という言葉がまだ有効なら……リリちゃんのことを見逃して頂けないでしょうか……？」

「……え、え……えぇ……？」

エレアム、ミリアムの言葉、挙動に愕然とするリリアーヌ。それは彼女だけでなく、音無一弥にしても同じだった――が、すぐに微

笑んだ。

「……おいおい、参ったな。これじゃあ結局見逃そうと見逃すまいと俺の負けじゃないか……は、ははははっ！」

彼の身体を粒子が包む。ＩＳを閉じ、ひとしきり笑った後、彼は歩き出した。悔しさの色が見える表情で。

「負けちまった……いつになったら強くなれるんだ、俺は」

その姿が闇に消える。それと同時に、エレアムとミリアムはリリアーヌに駆け寄り、手を取った。

「……なんでここにきた。私はそんなこと命令した覚えはない……」

「えへへ……そうなんだけど」

「えへへ……命令無視しちゃった」

バカが。ふざけやがって。命令に従え。使えない部下め。貴様らなどいらない。いらない、いらないいらないいらない――――

心の声。罵声。その言葉とは裏腹に、彼女の金色の双眸からは――
――涙がこぼれていた。

「……ありがとう、ありがとう！ごめ、ごめんね……！ふぇ、うっく……！あり、がとう……！！」

――――ありがとう。ごめんね。

その言葉を聞いた一弥は確信した。やはり、俺は弱かったと。

――――だが、彼のその選択は、間違いなく強いものだということに……彼が気づくことはなかった。

第五十話　弱き者（後書き）

もうだめだ……死のう……

第五十一話　戯れ（前書き）

梅雨→うめあめって読んでた時代がぼくにもありました

第五十一話　戯れ

「で……アンタ結局どこにいたワケ？」

食堂。今俺は俺達1年が使えるギリギリの時間に食堂に駆け込んだところ、専用機組みと合流し、夕飯を取っている。他の全員はすでに食べ終わったらしく、俺だけ食っているのを全員が凝視しているというこの状況。……食べにくい。

「だから、散歩？」

「……ここまでてきとうな言い訳だとむしろスッキリするな」

「一弥、体の方は大丈夫？本当になんともないの？」

「見ての通りだ。悪いな、心配かけて」

「心配なんてしてませんでしたわよ？シャルロットさんは一弥さんのことを信じていましたから。うふふ」

「もう……そんなんじゃないってば」

信じるか……まあ素直に嬉しいですな、うん。

「ごちそーさん。じゃ、食い終わったし部屋に戻ろうぜ」

「ん、そうだな。じゃあみんなおやすみ。えっと……また明後日かな？」

「え？なんで？」

「一夏の誕生日だろう。忘れるなんてひどいぞかず兄……」

うわ……そうだった……こいつの悪誕祭だった……まあ顔見せて帰ればいいか。いや、さすがにここまで嫌がることもないんだろうか。俺もなんかプレゼント的なもんを用意しとくべきかなぁ……。

そんなことを思いながら、自分の部屋へ戻っていくのだった。

☆　★　☆

Ｆｒｏｍ箒
『一夏の誕生日プレゼントが何がいいかで悩んでいる。よかったら明日、デパートにでも付き合ってくれないか？』

「ん、一弥。メールか？」

自室に戻ってシャワーを済ませ、ダラダラと寝っ転がっていると箒からメールがきた。それに反応する一夏。どうやらこいつも暇らしい。

「んー、まあそんなとこ」

カチカチ……

Ｔｏ箒
『暇だから行く（。Ｑ。）』

送信っと。明日は別にすることもないし、暇つぶしになるならなん

でもいいか。……にしても今も暇だ。

「なあ一夏、暇だぞ」

「んなこと言われてもなあ……」

「じゃあ……あれだ。一夏お前外出てろよ。俺がお前のケータイ隠すからお前はそれを見つける。１０分以内に見つかったらお前の勝ち、見つからなかったら俺の勝ちで全裸体操を廊下でやれ。いいな？」

「あれぇ……？おっかしいな。俺が勝ったときのメリットがないぞ……？」

「冗談だよ。負けたら今度の学食おごり。そんでいいだろ？」

「それならまあ……ってかよくそんな遊び思いつくよな、一弥ってさ……」

ぶつぶつ言いながらも、まんざらでもない様子で外に出る一夏。さて鍵を……かけるほど俺は鬼畜じゃないぞ。てきとうな場所に一夏のケータイを放る。次は……ん？

Ｐｒｒｒｒ!Ｐｒｒｒｒ!

メール……俺のか。誰だ誰だ？

Ｆｒｏｍセシリア

『ごきげんよう、一弥さん。まだ起きていらっしゃいましたか？すでに就寝なさっていたら、申し訳ございません。朝にでもご検討、返答をお願いしますわ。話というのは他でもありません。明後日の一夏さんの誕生日のことなのですけど、実はわたくし、まだプレゼントが決まっておりませんの。それで、一弥さんは一夏さんの幼なじみかつ男性の方ということで、プレゼント選びを手伝って頂けませんでしょうか？明日、時間帯は一弥さんに合わせますわ。せっかくの一夏さんの誕生日なのですし、ちゃんとしたものを贈りたいんですの。それでは、吉報をお待ちしておりますわね』

「長いわっ！」

チッ、まあいい。今に始まったことじゃない……で、内容だ。大体箒と同じ。明日しか準備の時間はないだろうし、どうしても2人一緒じゃないとキツそうだ。修羅場に発展しそうだが……まあなんとかなるかな……。

Ｔｏセシリア

『了解。時間は折って知らせるからな（。Ｑ。）』

送信後、すぐに感謝のメールが来た。こういう几帳面なところはセシリアのいいところかなーって思う。っと、それよりも一夏呼ばねぇと。

「もういいぞ一夏」

俺が呼び出すとドアをくぐるなり部屋をあさりだす一夏。この愚民めが！と言いたくなったのは秘密だ。

「う……見つからん。どこやったんだ？」

「ん？それは降参と解釈してよろしいのかね？」

「ぐ……く、くそっ」

ガサガサとあちこち探し回る一夏。シャワールームからトイレまで探したみたいだが、見つからないっぽい。これは俺の勝ちだな……ニヤリ。

その後、ケータイが見つかることなく１０分経過。一夏の負けだ。

「な、なんでどこにもないんだ……」

「残念でしたー。学食1回おごりな」

「ぐぅぅ……で、どこやったんだよ？俺のケータイ」

「ああ、ホレ」

ポケットに放り込んだ一夏のケータイを投げ渡す。なんか一夏の周りの空気がどんよりしてたが、気にしない方向でいこう。

「じ、じゃあ次は俺の番だな？今度は一弥が探すんだろ？」

「あぁ……まあ別にいいけど？」

どうせ無理じゃね？学食代浮くからいいけども。部屋から出た俺はそんなことを考える。と、そこに鈴が通りかかり、俺を見つけたとたんにこっちに走り出してきた。おぉう……嫌な予感しかしないぜ……。

「一弥！ちょうどよかったわ。ねぇ、明日開いて「開いてません」早いわよっ！ちょっと聞きなさいってばっ！」

ブンブンと首を揺すられる。とぅいまてーん。ボク、ケガ人なんで

すけどぉー？あはは、首もげそうだーい。……って洒落にならんわ。

「ああ！もう！なんだってんだ！一夏のプレゼント！？はいはい明日な明日！『レゾナンス』でいいですね！いいですか！さようなら！」

「うん？まあいいけど……よくわかったわね？」

「黙れ一夏ゾッコン娘め……とか思ったのは秘密」

「……まあいいわ。じゃあ明日ね。忘れんじゃないわよっ」

言うだけ言って走り去る鈴。ああもうめんどくせぇ……と、頭を抱えているときに部屋のドアが開いた。

「よっし！一弥、もういいぞ……一弥？どうしたんだ？」

「なンでもねェよ三下がァ……！！」

「なんでもないなら睨むのをやめてくれませんか……」

一夏に連れられて部屋の中へ。よし、じゃあ手始めに……

「一夏、ジャンケンポンっ！」

「えっ、えっ？」

俺：パー。一夏：チョキ。

「よっしゃ！」

「くそぅ。もう1回だ、ジャンケンポン！」

俺：グー。一夏：パー。

「どうだ！2連勝！」

「さっさと負けて居場所教えやがれ、ジャンケンポンっ！」

俺：パー。一夏：チョキ。

「って教えないからな!?なにこれ、俺が負けたら教えんの!?」

「誰もそんなこと言ってないだろ?ジャンケンポンっ!!」

俺:チョキ。一夏:パー。

「うわ負けたっ!」

「よし、じゃあ全裸で外走ってこい」

「いやだよっ!!なんでそんなクラ○ドみたいなことしなきゃなんないんだよ!?」

「冗談だって。ケータイ貸してくれ」

「え?ほら」

一夏のケータイを受け取り、電話帳を呼び出す。カチカチ……

Ｐｒｒｒｒ!Ｐｒｒｒｒ!

「発見」

「汚ぇっ！なんだよ、ルール違反じゃないか！」

「えっ？ルール言った覚えなんてないんだけど？」

「しまったぁぁぁ――――っ！！」

と、一夏と遊んでたらまたしても……

Ｐｒｒｒｒ！Ｐｒｒｒ！

……またか。またこのパターンなのか。

Ｆｒｏｍラウラ

『かず兄、明日は開いているか？一夏にどんなプレゼントを贈れば喜んでくれるのかわからないんだ……よかったら明日、協力してくれないだろうか？忙しい中すまない。なんとか頼む』

ぷっちん

ぷりん

カチカチカチカチカチ。

Ｔｏラウラ
『お兄ちゃんに任せとけ明日レゾナンスで決めような。じゃあおやすみ。いい夢見ろよ？（。Ｑ。）』

送信。カチカチカチカチカチ。

Ｔｏシャル
『よっ。まだ起きてるか？明日、一夏を抜いた全員でプレゼント選びのためにレゾナンスに行くんだが、シャルも協力してくれないか？よろしく頼む（。Ｑ。）』

送信。ふう……さて、と……

「死ねやゴルァァァァ――――ッ！！」

「どわぁぁぁっ！？あぶ、あっぶなっ！あぶなぁぁぁっ！？な、なにすんだよ！？」

「黙れこのクズめ……！もうキレた。完全にキレた。俺は明日かなりの体力を使うんだ。その前にストレスの元凶を断つことにしたんだ。オーケー？」

「お、オーケー」

「じゃあここで死ねぇぇぇ――――っ！！」

「なんでだぁぁぁ――――っ！！」

……その３０分後、死ぬほど疲れた体で５人に時間と場所を示すメールを１人ずつ（メールで追究されると面倒なため）送ったところ、５人から一斉にメールが届いた。

Ｆｒｏｍ箒セシリア鈴ラウラシャル
『ところで、（。Ｑ。）↑これってどういう意味？』

「……」

カチカチ。

Ｆｒｏｍ箒セシリア鈴ラウラシャル
『（。Ｑ。）＜ボク、一夏クンですぅープヒッ！』

夜は更けていった。

第五十一話　戯れ（後書き）

？？（ °Q° ）？？　（ー＿ー＃）

一夏　一弥

第五十二話　プレゼント（前書き）

ひーでーぶー

第五十二話　プレゼント

真上に太陽が昇り、土曜日。今日は一夏のプレゼント選びに付き合う日だ。言っててなんだか腹が立ってきた。バックレたい衝動にも駆られた。すこぶるいつものことだ。

「待て待て。久しぶりに一夏のヤツを祝うと決めたんだ。それにシャルも行くことだしな」

私服に着替え、必要最低点のものだけ持って寮の長い廊下を歩く。時折女子とすれ違いがある。大抵そういうときはあっちからあいさつしてきて俺が反応して終わり、というのがいつものパターンだ。クラスメートならちょこっと会話してさようなら。おかげで女子のあしらい方を極めた気がする。気がするだけだが。2、3回そんなやり取りがあり、やがて目的地にたどり着く。シャルとラウラの部屋だ。

コンコンココンコンクリート。

『……一弥だね？今開けるよ』

ガチャリ。バシュッ。扉が開き、シャルの部屋が目に映る。ラウラ

はいなかった。それにしてもノックだけで俺とわかるとは……これがバカップルだけが可能とする以心伝心ってヤツか……！

「一弥のノックってすごくわかりやすいよねぇ……コンクリート、なんて音どうやって出してるのさ……」

「それより、準備できたか？そろそろ行こうぜ」

「もう少しかかるかな？中で待っててよ」

「あい、りょーかい」

部屋の中に入り、ベッドに腰掛ける。シャルはポーチに荷物を入れる途中だったらしく、サイフの他にもハンカチやティッシュも詰めている。几帳面なヤツめ……やがて俺の視線は部屋に移り、目の前の大きな鏡のついたテーブルに目が止まった。

「おっ。これが化粧水か？種類は……あんまり揃ってないみたいだな」

「うん。あんまり化粧に頼るのもあれだしね」

「……そういえば今日は化粧してないのな。飽きたか？」

「そう簡単に飽きないよ……今日は……ほら、デートじゃないしね」

そっか、と答えた俺の中に違和感が走る。体中に電気が走るような感覚（体験済み）……とまではいかないが。だが、俺の頭は違和感を感じ取っても、その原因はわからなかった。

わからなかった。

「うん、準備できたよ。それじゃ、行こっか」

なんで、さっきのシャルの言葉が、言い訳じみて聴こえたんだろう。

☆　★　☆

学園直通のモノレールに乗り込み、本来の目的地に到着する。まだ１０分前だったが、全員揃って仲良く口喧嘩していた。

「諸君、よく集まってくれた」

「あっ！一弥！アンタこれどういうことよ！！なんでこいつらもいるの！？」

「それはこちらのセリフですわ！一弥さん、説明してくださいまし！」

「一弥、まさか知っていたのか！？よもや全員で行くなどと言わないだろうな！？」

「かず兄、私と行くのではないのか！？なぜたんこぶどもがここにいる！？」

「一弥くん、どういうこと！？あたし、何も聞いてない！つーかたんこぶツボったわ」

「一弥ー。現実逃避はよくないよー」

ちなみにラウラの次が俺でした。あー説明めんどいね。

「かくかくしかじか」

「「「「わかるか！」」」」

すこぶるめんどいね。

「まあよく考えてみろよ。……いいか？お前らは一夏のプレゼントを買うんだろ？」

「「「「当然」」」」

肩を寄せて作戦会議。さあ、一弥タイムがはーじまーるよー。

「一弥が悪い顔してるよ……」

「シャルも参加しろって。……で、だ。俺は考えた。どうせお前らのことだ。他のヤツらを出し抜いてでも一夏の好感度アップのためにプレゼントを用意したい。だけどどんなものをプレゼントすればあの鈍感が喜ぶかわからない」

「「「「ふむふむ」」」」

「あれ？認めるの？抜け駆けってみんな認めちゃうの？」

「それでも時は無情にも過ぎてゆく……なんらかのプレゼントは用意しなければならない」

「「「「なるほど」」」」

「なんか詩人みたいだね……一弥」

「だが！そこにフォールホール……つまり落とし穴がある。もし……プレゼントが被ってしまうような事態に陥ったら！？……一夏の好感度が急降下するのは防げないだろう……」

「「「「な、なんだってー！？」」」」

「一弥、きっと詐欺師になれるよ。僕が保証する」

「ならば被らないように相談する必要がある……そこが着眼点だ！たった1人が考えても大したアイデアは出てこない……だがしかし！日本にはこんなことわざがある。……3人寄れば文珠の知恵。3人で文珠の知恵ならば。その倍の6人ならどうなるっ！？」

「「「「ま、まさか！？」」」」

「一弥が悪魔に見えてきた件について」

「そうだ！！文珠どころか……神の領域にすら到達することが可能となる……。我はそれを見越し、見極め、見定めて……全員を呼び出したのだ……」

「「「「お、おぉ……！」」」」

「お、おぉーかっこぼうよみ」

シャルのヤツ、ツッコミ放棄しやがった。かわいいから許す。

「さあ、立ち上がれ迷えるシープたちよ。手を取り合い、ただ自分のために他者に力を貸すのだ！その先に待つものは……」

「「「「一夏……！」」」」

「そうだ！全ては自分のため。果ては一夏のため！神の領域に到達

した我らに不可能などない！当然、あの鈍感を振り向かせることなど造作もない！」

「「「「……ゴクッ」」」」

「もはや催眠術だねぇ」

「以上が私の考察、そして願望だ……君たちに、一夏を悩殺してほしいという、つまらない願望さ」

「「「「神父様……」」」」

「死神の間違いだと信じるよ」

「さあ歩き出そう。そのために僕は君たちを呼び出し、僕たちは……ここにいるのだから――」

箒「セシリア！」
セ「鈴さん！」
鈴「ラウラ！」
ラ「シャルロット！」
シ「……一弥」
俺「箒くん！」

「「「「いざ！神の領域へ！！」」」」

洗脳完了！（ブレインコントロール・コンプリート）

「ていっ」

「あたっ」

シャルに殴られた。

☆　★　☆

入口での説得も無事完了し、レゾナンスに入る。広いエントランスには休日のせいか、ゴミのように人が群がっていた。集中するヤローどもの視線はスルーするして、とりあえずエスカレーターで最上階を目指す。屋上ではない。屋上は一般開放はされていないが、聞

いた話によると階段昇れば行けるとかなんとか。割とどうでもよかった情報だな。

「神父様、まずはどうするのですか？」

「まず、どんなプレゼントがいいかを考える必要があるな」

「ツッコむな……！ツッコんじゃ負けだ……！」

「シャルロット、アンタどうしたの？ちょっと怖いわよ？」

「ほっといてほしいよ……」

「シャルの意見も聞きたいんだよ。まずお前ら、プレゼントはどんなもんがいいと思う？」

「おそろいの物じゃないか？」
「実用的な物ではなくて？」
「手作りってよさげじゃない？」
「思い入れのある物はどうだ？」
「一夏の欲しい物……とか？」

「大体正解。つーかアイツは何もらっても喜ぶ。フラグ大魔神だからな。それなら考えることはおおよそ４つ」

ピッと小指以外を立てる。その動作に全員の視線が注目した。

「１つ。そのプレゼントが２人きりの状況を作れる物。２つ。そのプレゼントが周りへの牽制となる物。３つ。そのプレゼントを贈ることで儀式的な意味を成す物。ラスト４つ。そのプレゼントが一夏自身への牽制となる物。他にもあるが、大体この４つだな」

「わ、意外と真面目だね、一弥」

たまにはな、とシャルに声をかける。他の４人は顎に手を当てたり腕を組んだりと思い思いのポーズで悩んでいるようだ。

それより、この中で１番心配な人間がただ１人。

「ラウラ、今思い浮かべたプレゼントを言ってみろ」

「む？バズーカ砲だ」

「……よかった。想定の範囲内だ」

「すごい！僕はマシンガン程度だと思ってたよ！」

ラウラに対する危険意識が高すぎる気がしなくもなかった。

「バズーカ砲に嫁へのプレゼントをセットし、嫁に向かって砲撃し……なんだかず兄？どうして泣いているんだ？」

「しゃぁるぅ……」

「よしよし……さすがに予想外だったんだね……」

とりあえずラウラのプレゼントはシャルが担当することでなんとか一件落着。他の連中も大体決まったのか、納得した風の顔だった。

「んじゃ帰るか。もう決まったっぽいし」

「そうだな。帰って早速準備しなくては」

「参考になりましたわ。さすが一弥さんですわね」

「ま、たまには頼りになるわね。んじゃまたね！」

クモの子を散らすようにエスカレーターを駆け降りる3人。それに続くように、ラウラとシャルも仲良く話し合いながら階下へと降りて行き、やがて見えなくなった。最後に残ったのは俺だけだ。

「じゃ、行くか」

後ろに振り返り、手を差し延べる。物陰からばつの悪そうに俯き、姿を見せたリリアーヌは、ためらいがちに手の平を出しては引っ込め……やがて俺の手を取った。

☆　★　☆

「これなんかどうだ？シルバーのネックレス。安定だろ」

「……」

アクセサリーショップにて。今、俺とリリアーヌは最上階から下へ降りていくようにレゾナンス全体を見て回っている。大体半分くらい回っただろうか、リリアーヌを引っ張るように手を引いてより取り見取りの店を冷やかしていく。後ろをついて来るリリアーヌは一言も言葉を話さず、首を振ったりするだけ。俺にとって2回目となるリリアーヌの私服姿は、最初に見たときのラフな格好よりもずいぶんとオシャレに見えた。

「ダメか？」

「……」

コクン、と俺が手に持つアクセサリーを見て頷く。ずっと同じ反応。変わらない様子。気まずいのか恥ずかしいのか申し訳ないのか……多分全部かな。大して気にすることもない。俺はもうこいつを許して、こうして買い物に付き合ってやっているのだから。あとはリリアーヌ自身の問題だ。

「んじゃ、次行くか」

「……」

歩き出したと同時に握った手に抵抗を感じた。後ろを見ると、リリ

アーヌが何かを興味深そうに凝視しているのがわかる。彼女の目線を追った先にあったのは、ぬいぐるみが売っている店だった。そういえばあそこはまだ行ってなかったな。

「よし、次はあれだな」

こっちに振り返るリリアーヌの手を引き、俺たちは人ごみに身を寄せた。その後、買い物を済ませたのちに大型ショッピングモールを出て、学園直通のモノレールに足を運ぶ。学園直通のせいか、周りにあまり人はいなかった。

近くの青いベンチに座り、モノレールを待つ。会話もないまましばらくじっとしていると、目当てのモノレールが音もなくやって来た。

俺は乗り込む。

だが、リリアーヌは入口の前を動かない。

「……今日は、ありがとうございました」

今日出会って初めて聞く言葉。気のせいか、深い悲しみと後悔の念が込められているような気がした。

「礼はいいから早く乗れよ。もう出るぞ」

「……いいえ、私はもう戻りません。あの学園には……もう、戻れません」

ふるふる、と首を振って否定する。やがてリリアーヌはポケットの中から何かを取り出し、俺に向けて差し出した。

彼女の手の中で、1発の弾丸が太陽の光を反射して金色に輝いていた。

「なんだそりゃ？」

「あの日、あなたが投げた弾です。これはお返しします。あの決闘で、あなたは負けてはいない。デスマッチと言ったのだから、私とあなたの両方が生きていては、それは引き分けです」

「こじつけだな」

俺の敗北を否定して、身代わりを差し出してくるリリアーヌ。俺はその弾を、

「……音無、先輩？」

受け取らず、1歩後ろに下がった。

「……何を……早く受け取ってください。ドアが閉まって――」

「断る」

リリアーヌの言葉を遮り、俺は彼女の言葉を拒絶する。

「俺は負けたんだ。勝敗をひっくり返したいなら、お前が俺の手に弾を渡せ。このモノレールに乗って、な」

俺の言葉に、リリアーヌの金色の双眸が見開かれる。つまり俺はこう言っているのだ。

――戻ってこい。と。

――俺たちと一緒にいろ。と。

「で……できません。そんなことは。なぜ……なぜ私が……」

「そうか。なら俺は晴れて敗者としてこの戦争から身を引けるな」

「な……っ!?違います!あの決闘は無効で――――」

「それはお前の言い分だろ?俺は確かに『負けた』って言ったぞ。お前の持ってる弾丸を投げてな」

リリアーヌの瞳が濡れ、頬に涙が伝う。どうすればいいのかわからないのだ。

この境界線を越えず、学園を去って俺に敗北を与え、2度と再会の機会を潰すか。

この境界線を越えて、学園に留まり俺に弾丸を返し、仲間として生活を続けるか。

迷う彼女に道を示すように、俺は手を差し延べた。この境界線を越えないと届かない距離。その行為が指し示す意味は、言うまでもなくただ1つ。

――――戻ってこい。

リリアーヌがそれを見た瞬間、

「……あなたは、いじわるですね」

「よく言われるよ」

眩しいほどの笑顔を乗せて。

「……でも、いじわるでも……」

足を踏み出し、境界線を越えて。

「……憧れるほど、優しいのです……」

――俺の手を取った。

第五十二話　プレゼント（後書き）

この小説だけは終わらせたいですな……

あーテンションが……

第五十三話　水面下に潜む黒（前書き）

かなりグッダグダな気がしますが。

第五十三話　水面下に潜む黒

『一夏、誕生日おめでーーーー』

「てめぇ弾コラァッ！それ俺の肉だろが離せ！眉間撃ち抜くぞゴミィ！！」

「やかましいこの妻帯者がっ！リア充なぞに俺の気持ちがわかるかボケェ！！」

「はァン！？負け犬がなんか言ってまーすよー！？なんっも聞こえねぇんですけどぉー！？」

「この腐れ外道がァァァァッッ！！死ねっ！死ねっっ！！むしろ死すら温いッッ！！」

「黙れくたばれ死にもげろっ！！シスコンはシスコンらしく大好きな妹の蘭にルパンダイブしてやがれハーゲハーゲ！！ハーゲンダッツ！！」

「何言っちゃってんですかねぇー！？シスコンはどっちですかこのツンデレシスコンが！！つかハゲてねぇよっ！！眼科行ってこいや視覚障害者！！」

『……』

「もっぺん言ってみろやクズハゲーーーうぎぃっ！？」

「上等じゃねぇか表出ろやクソガキ――――ぐげぇっ！？」

「か～ず～や～？ここに何しにきたの？ケンカなの？バカなの？死ぬの？」

「バカ兄、まさか人に迷惑かけてないよねぇ？むしろあたしが迷惑なんだけど？」

「「……さーせん」」

日曜日の夕方。まだ完全には日が沈んでいない中、一夏の家にて悪誕祭は行われた。さきほど言ったように清々しい天気にも恵まれ、そよぐ秋風が涼しいおかげでとても過ごしやすく、爽やかな１日で、一夏の悪誕祭にはもったいないくらいだ。

悪誕祭には俺が来る前に数多くの招待客が来ていた。いつものメンツである箒セシリア鈴ラウラシャル。それに加え五反田兄妹、ノノこと野々宮梨理子、妹の藍、さらに生徒会メンバーの生徒会長、布仏姉妹、新聞部エース・黛薫子……と、俺と一夏を合わせ全１５人。俺は予定時刻より３０分遅刻してきたからこれ以上増えることはないとして……その中で男が３人という壊滅的状況。『僕は悪くない。』全部一夏のせいである。果てろ大魔神め。

「別に今さらおめでつーなんて言う必要ないだろ。テキトーに盛り上がってテキトーに騒げばもうそんだけで祝ったことになるんだよ」

「おっ、いいこと言うじゃねぇか一弥。俺も一弥の意見に賛成だぜ。堅っ苦しいのなんざこいつにゃ似合わねぇよ」

「いててっ、なんだよ……まあ、その通りだけどさ」

一夏に軽いヘッドロックをかます弾に、飲み物をのどに通す俺。それを見てか聞いてか、他の面々も騒がしく盛り上がっていた。

（（なんで俺が素直に大魔神を祝わなきゃなんねぇんだっつの））

本心は割と最低と自負している。

「あ、あのっ、一夏さん！わ、私、ケーキ焼いてきたんですっ！ぜひ食べてみてくださいっ！」

「イチ兄イチ兄～！あたしも手伝ったんだよ～！」

「……一弥、藍ちゃんって料理できたっけ？……（ボソボソ）」

「……俺の記憶では、全くの初心者だな。大抵家事全般俺が仕切ってたし……（ボソボソ）」

「……そのココロは？……（ボソボソ）」

「……ひどい（ボソッ）」

「ｏｈ……ご愁傷様、一夏よ」

蘭と藍に背を向けて作戦会議。一夏の命がそこそこ危険ということくらいは理解できた。

「おぉ、ありがとな！んじゃさっそく……」

「「「……ゴクリ」」」

「どう？どうどう？美味し？」

パクっ、と生クリームとチョコのケーキを咀嚼する一夏。それをキラキラした目で見る藍（暗殺者）に祈るような目で見守る蘭（片思い）、さらに何かを期待するような目を向ける俺と弾（観客）。一夏は２、３度噛むような仕草を見せ、必殺？ケーキを飲み込んだ。

……感想のほどは？

「うん、すごくうまいぞ。蘭と藍は料理が上手だな」

「ほ、ほんとですか!?ありがとうございます!!すごく嬉しいですっ!」
「わーいっ!ほらほら、どんどん食べてねイチ兄っ!」

「「……チッ」」

おっと、弾といると心の狭い親友になっちまう。ちょっと離れて様子を見るとしよう。

「一夏、はいラーメン」

「おわっ!?鈴、いきなりだな!?」

「ふふーん。ただのラーメンじゃないのよ?麺からスープまで完全手作り!あたし特製ラーメンよ!」

「ついでにあたしと子作りしましょーうふん」

「「「ぶほぉっ!?」」」

待てや。今反応した3人誰だ?

「な、何言って――」

「ちょちょちょちょっと一弥っ！？こ、ここ、子作りにゃんてそんにゃ……き、気が早いっての！もうっ！もうっ！！このこのぉ！！アンタってヤツは――」

「かかか一弥さんっ！そ、そういうのはダメだと思いますっ！！じょ、冗談でもそんなこと言っちゃダメですっ！！一夏さんが本気にしちゃ――」

「「……ん？」」

蘭＆鈴→恋のライバル→プレゼントが同じ食べ物系→冷戦勃発→核が飛び交い世界滅亡。

「ものすごく奇怪な思考回路を垣間見た気がしたわね……」

生徒会長が何か言っていた気がしたが、ヤバいっ！？止めねぇとっ！！

「……あら、蘭じゃない。少しは成長したの？」

「……鈴さんこそ。相変わらずのロリ体型ですね」

くそっ！もう火花が飛び交ってやがる！鎮火させるには……事前に打ち合わせたアイツしかいねぇっ！

「野々宮大佐っ！出会え出会えーぃ！」

「あいあいさぁっ！りーんちゃんっ！久しぶりぃ！ね、ね、ＩＳ学園ってどんなとこー！？聞かして聞かしてっ！」

「きゃっ、ちょ、ちょっと！？もうっ、仕方ないんだからぁ……」

野々宮大佐に手を引かれて外に出る鈴。鎮火するには充分な距離が取れたはずだ。

「……っしゃぁっ！世界の平和は守られたようだな……」

「……一弥さんは……1人ですごく楽しそうですねぇ……」

「や、それほどでも」

つか、自分のセリフ遮られたからって食事続けてんじゃねーよ全元

凶。

「ん、一弥も食べるか？」

「……ひとくちくれ」

ケーキもラーメンもビビるほどうまかったせいか、ひとくちどころか少しだけ残っていたケーキもラーメンも全部食ってしまった。とりあえず一夏……と蘭と鈴にわりぃ、と思いながら流し台に食器を持っていく。すぐに戻ったと思っていたが、一夏のそばにいつのまにかセシリアがいた。

「一夏さん、お誕生日おめでとうございます。こちらをどうぞ」

「ん？なんだこの箱？」

「プレゼントですわ。開けてみてくださいまし」

「どれどれ……」

「へぇ。ティーカップか。……なるほどねぇ。なかなか考えたじゃんか」

つまり、これで一緒にお茶しませんこと？ってことだろう。ちなみにさっきの鈴はいつでも嫁にいけるという意味なんだろうが……まあ気づくワケないわな。援護射撃も無意味っぽかったし。バカな！！ヤツの鈍感力は化け物か！？はい、フラグ大魔神です。

「すごく……高そうです」

「一夏ちょっと自重しろや」

「そ、それでですね……こ、今度そのティーカップでお茶でも――」

おぉ、ついに言っちまうかセシリア。だがまあこの大魔神が気づくワケがねーと思うんだが――

「誕生日の一夏くんに突撃インタビュー！！はいっ！一夏くん、今どんな気持ちですかー！？」

「……そうきたか」

「そうきたか……じゃありませんわっ！ちょっと黛さん！？今はわ

たくしが一夏さんと話してるんですのよっ！？」

「えー？じゃあセシリアも映してあげるからさー。ほら、笑顔笑顔ー！」

「はは……悪い、セシリア。で、なんだっけ？」

「う、うぅ……うぅぅ～～～！」

「落ち着けセシリア……ほら、あそこに癒し系マスコットののほほんがいるぞ。癒されてこい」

「あぃあぃ～。セシリアよ～しよ～し。なでなでぎゅ～っ」

「こ、こんなことで癒されるわたくしではありませはふぅ」

スゲー癒されてるー。なんかもう溶けそうなくらい癒されてるわ。のほほん恐るべし。

「……次の世界平和に使うアイテムは……」

「世界平和？」

「気にすんな一夏。もうお前に期待するのはやめた」

「俺の知らないところで信用がガタ落ちに！？少なくとも誕生日に知りたい情報じゃなかった！！」

「ふふっ、楽しそうだね、一弥。一夏」

「し、シャルロット。もういくのか？ま、まだ時間はあると思うのだが」

「ん？シャルとラウラか。プレゼントだよな。待ってろ一夏。今バズーカ砲の弾用意してくるから」

「なんだ！？俺は一体何をもらうんだ！？」

「バズーカ砲の弾と……楽園招待券……？いや、地獄巡り旅行券？どっちだっけ」

「どっちも嫌だぁっ！！誕生日が命日なんて嫌すぎるっ！！」

「一弥と一夏っていっつも楽しそうだよねぇ……」

「違いないな。さすが将来の兄弟だ」

「……がっ……はぁ……っ！！」

「よくここまでダメージを受けることができるものだ」

元凶が何言ってやがる。

「あっ、そうそう。プレゼント渡さなきゃね？はい、一夏。僕からのプレゼントだよ」

「おぉ、ありがとな。開けていいか？」

「どうぞどうぞ」

シャルが一夏の相手をしている間にラウラの肩に手を回し、内緒話のポーズをとる。シャルが話し相手になっているから一夏は気づくことはないだろう。さて、こいつのプレゼントはなんだろう。いろんな意味でドキドキワクワクだ。

「んでラウラ。結局プレゼントは何にしたんだ？」

「う、うむ。シャルロットにもいろいろな享受を受け、悩んだのだが……私が軍で愛用していたナイフにすることにした」

銃刀法ェ……

「……まあいいや。なんか今さらだし……お前が決めたんならそれでいいじゃねぇか。一夏のヤツなら喜ぶだろ」

「ほ、ほんとかっ？い、一夏は喜ぶかっ？」

「自分の目で確かめな。……おーい！次はラウラの番だってよ！」

ほれ、とラウラの背中を押す。こっちに一度振り返ったが、それっきりこちらを向くことはなく一夏の元へ狭い部屋の中を駆けていった。すれ違いにシャルが戻り、俺が座っているソファの隣に腰掛ける。

「シャルはなにやったんだ？」

「腕時計だよ。白くていろいろ万能なやつ。男の子ならファッションを磨かないとね」

「へぇ……アイツにゃもったいねーな。あれ以上男磨いたら今以上に女が寄り付くぞ」

「ふふっ、一夏なら大丈夫だよ。あれでみんなのこと気にかけてるからさ」

「よく見てんだな、一夏のこと。……なんか妬けてきた。俺も男磨くかねぇ……」

シャルに見捨てられたくねーし、釣り合う男くらいにはなりたいからな。

だが、俺の思考とはまったく逆の言葉がシャルの口から聞こえてきた。

「……ダメ。ダメだよ、一弥。これ以上かっこよくなられたら……本当に噛み合わなくなっちゃう」

「……あん？そりゃどういう――」

「言ったよね。僕は愛人の子だって。それはつまり望まれて生まれてきたんじゃないってことだよね」

「おい、何言って……」

「嫉妬と欲望と怨恨に塗れた子供。黒い感情から生まれたその赤ちゃんは、何を見てきたのかな？淀んだ空気の密室に閉じ込められたかのような、薄い氷の上を渡るかのような人生。やがてその脆い氷は割れる時が来る。凍てつく水に足を取られ、溺れゆく子供はこう思うだろうね。『どうして自分がこんな目に合うのか』」

「……それがお前……シャル、ってことか？」

俺の問い掛けにシャルは微笑んだ。影の落ちた……笑顔。あの時と同じく、見ていて痛々しい。あの時――シャルと同じ部屋を共有していた時。こいつの話は、暗く、荒んだ世間の代表のような話だった。その時のシャルの顔も、見ていて痛々しいものだった。

今は違う。いや、痛々しい、という点は確かに酷似している。

だが――あの時俺たちの間に流れていた空気は、こんなに張り詰めたものじゃなかったはずだ。

「僕？……あははっ。違うよ。僕じゃない。一般論さ。黒の中で生まれた子供は……たとえ黄金のドレスに身を包んでいても、奥底は……きっと黒。知ってるかな？太陽には『コロナ』っていう黒い斑点みたいなのがあるってこと。周りの温度と比べると驚くほど冷たくて……寒いんだよ」

「……それなら、俺もその『コロナ』ってヤツの仲間だな。なにせ俺は全身が黒なんだからな」

「そう。そういうことだよ、一弥」

俺の言葉は肯定された。

なのに、なんでだ？

「同じ『黒』。『影』『闇』『悪』『暗』。これらは全て『黒』をイメージするワードだ。でも、その中には『正義』を掲げる『黒』もあった。一弥のことだね。人間の深層心理を覆した一弥にはすごく憧れるし、『黒』なのにすごく光って、輝いてるよ。でもね――」

なんで……心臓が握られたような錯覚に陥る？

冷や汗が俺の頬を嘲笑うように撫で、濡らし、滴（したた）り落ちる。

「その『黒』は、僕には少しだけ眩しすぎたんだ」

俺は何も言わなかった。

言えなかった。

やがてシャルはソファから腰を上げ、談笑の輪に入っていった。

◇

一弥は悪くない。全て自分が悪いんだ。

自分は許されざる身だ。罪を背負った人間だ。

母親を殺し、友人を裏切り、恋人を傷つけた。

それでもなお、自分の周りの仲間は……僕を受け入れてくれている。

それでもなお。自分の恋人は……僕を理解しようと、手を繋ごうとしてくれている。

甘えていいのだろうか。

また、裏切ることにならないだろうか。

僕は決心した。一弥を守ると。自分は弱いから、一弥の背中だけは精一杯守ると。

友達を裏切り、許された後、そう決意した。この罪がやがて許される時が来るまで、強くあろうと。

恋人が傷つけられ、治りきった後、再び決意した。もうこの罪が許される時は訪れない。僕の全てを賭けて、一弥を守りきろうと。

今はまだ、それが許される。

だけど。だけど――――

――再び罪を重ねた時、自分はこの居場所に居座ること自体、許されるのだろうか。

第五十四話　似た者同士（前書き）

思わせぶりです。よくありますよね。

第五十四話　似た者同士

「ここにいたのか。探したぞ、一夏」

「お、箒。楽しんでるか？」

「ああ、とても楽しいよ。たまにはこんな風に騒ぐのも悪くない……まあいつも騒いでいるがな」

「ははっ、それもそうだな」

「ほら、一夏。誕生日プレゼントにこれをやろう」

「お、サンキュ。デカいな……開けていいか？」

「ああ、ぜひそうしてくれ」

「んじゃ、遠慮なく……おぉ？着物だ！帯もついてるのか。なんか高そうだな」

「ふふ、主役が気にするんじゃない。そ、それに私とおそろいだしな……」

「うん？どうしたんだ？」

「い、いや！なんでもないなんでもない！」

「???まあいいや。でもこんな立派なものだと俺があげたプレゼントと釣り合わないな……」

「い、いや。これはこれですごく気に入っているぞ。うん」

「そっか、よかった。あれからずっと着けてくれてるよな。なんか嬉しいぞ」

「べ、別に毎日って訳じゃないからな！？」

「わかってるって。週2回くらいだろ」

「あ、ああ……よ、よく見てるんだな」

「まあ、箒のことだからな」

「そ、そうか……私のことだからか……」

「……」

「あ、あのっ！」

「は、はいっ！どうなさいましたか！？」

「な、名前をうかががってもよろしいでしょうか！？」

「は、はぃっ！え、えと……虚、です。布仏虚。貴方の名前も……その……聞かせてもらってよろしいですか……？」

「う、虚さん……虚さん……」

「あ、あの？」

「あ、え、はひ！？あ、あ、俺、俺俺、弾です！弾って言います！五反田弾１５歳独身！」

「弾……さん……いいお名前ですね」

「い、いい、うぇ！じゃない、いえ！虚さん――――じゃないっ！うわあああ俺のバカバカバカバカ！の、布仏さんの方が素晴らしい名前ですよっ！！」

「あ、ありがとうございます……あの、虚……と呼んでいただいて構いませんので……」

「あ……は、はひ……」

「「……」」

「「あのっ」」

「「！！」」

「そ、そちらからどうぞ……」

「い、いえ、そちらから……」

「「……」」

ブッチィィィィィィィッッ！！！！！！

ビキビキビキビキビキビキ！！！！！！

「うッッがぁぁぁあああぁあぁぁぁぁぁああぁぁあぁあああ゛ぁぁぁぁああぁあッッッッッッ！！！！！！」

人がシリアスってんのに周りでイチャコライチャコラ乳繰り合ってんじゃねぇぞグォォォルァァァァッッ！！

「うわっ！？一弥が壊れた！？」

「黙れクソッタレがァァァァッッぁぁぁああぁぁぐぅぇっほげぇっほげほごほごはぁぁっ！！てめぇらァァァ……！！」

「ちょっ、一弥がヤバい！！なんか知らんがヤバいっ！！藍ちゃんなんとか鎮めて―――」

「えへへぇ……もう食べられなぁい……」

「詰んだぁぁっ！！ここでまさかの伝説のセリフ！！……チッ！虚さんは俺の後ろに！大丈夫、俺が守ります」

「はい……弾さん……」

「だァァァ

「あらあら、バトルロイヤルならお姉さんも負けないわよ？」

「ぶっ殺したるわァァァァァァァァァァァァァッッ！！！！」

『落ち着け一弥ぁ――――っっ！！』

３０分後、俺は正気に戻った。記憶が消滅したのがわりと怖かったりした。

☆　★　☆

「ぐぁ……のどいてぇ……」

織斑宅から最寄りの自動販売機。暴走状態からなんとか帰ってこれた俺は頭を冷やすために外に出て風に当たっていた。のどもガラガラなことだし、ジュースでも買おうとしたワケだ。

ボタンを押すとガタンッ、と音がして買ったペットボトルを取り出す。おでこに乗せると、ひんやりとした冷たい感覚がとても気持ちがよかった。そんなとき、ふとペットボトルを押さえる腕に目がいく。ランニングTシャツに半袖パーカーにジーパンという今日のスタイル。当然、腕の部分はさらけ出してある。

無傷の腕が。さらけ出されている。

（……怖すぎだろ……自分のことながら）

尋常、正気の沙汰じゃない。ありえない。あれだけの傷が瞬時に治り……再びついた傷も信じられない速度で治癒した。黒奏……奏になにか起きているのか……なにかの前兆だろうか……ダメだ。わからねぇ。

だから、質問することにした。

「なぁ、アンタはどう思うよ？」

自販機の明かりがギリギリ届かない場所に佇む人影に。

「化けモンだな。てめーは間違いなく化けモンだわ。なんでバレたんだ？」

相手が1歩踏み出し、わずかだがその影くらいは伺うことができた。口調は男っぽいが、声の高さから女。身長は俺より低い。名前は

「ダリル・ケイシーね」

「先輩つけろやクソ後輩。ホント気持ち悪い奴だなオイ。なんでことごとくバレるんだよ個人情報がよぉ」

「まあＩＳ起動させれば名前ぐれぇ出るからな」

「だーかーらー敬語使えって。不敬罪で殺すぞ？あ？」

うざったいことを言ってる気もしたが、とりあえずスルーした。幸運にも合法的にＩＳを起動できるストレス発散サンドバッグがのこのこ出てきたんだ。このチャンス、ふいにするはずもない。

「上等。さっさとかかってこいよザコ」

あからさまな挑発だが、別にこの手の輩に頭を使って全力挑発する必要もないだろう。そう思っていると、甲高い笑い声が閑散とした住宅地に響き渡った。

「かははははっ！！なんだよ、随分好戦的じゃねぇか！？経験不足の童貞が興奮しちまったかァ！？」

「……気持ち悪ぃ。来ねぇってんならこっちからいくぞ」

コールした『桜閣』を両手で構え、体勢を低くする。ダリル・ケイシーはそれを目の当たりにしてもその場を動かない。ニヤニヤと気味の悪い笑みを浮かべ、ジトっと俺を凝視している。

「へぇ～。てめー随分とおもしれぇ目ぇしてんじゃねぇか。俺と同じ『強さ』を求めてる目だ」

「……あぁ？」

「似たモン同士ってことだよ。俺とてめーはソックリだ。嬉しいねぇ」

俺がこんな奴と似てるだと？

「テメェ……ふざけてんのか？」

「んなワケねーだろぉー？マジもマジ。大マジだぜー？新しい装備を試したかったけどやーめたっ」

くるり、と踵を返す。

「タッグマッチ、楽しみにしてるぜー？兄弟サンよぉ」

かははははっ！！と笑う敵。その態度、様子に、挑発されたのは俺の方だった。

「テメェッ！！待ちやがれっ！！」

笑い声が止み、気配が消え失せる。ＩＳのハイパーセンサーでも感知できないあたり、ステルス機能でも使って逃げたのだろう。

（似てるだと？ふざけろっ！！なんで俺があんなイカれた女と同列なんだよっ！！クソッ！！意味わかんねぇ！）

ダリル・ケイシー。迫り来るタッグマッチに、俺の感情は爆発寸前だった。以前は現れることのなかった感情だ。なぜこんなにイラついてるのか、自分でもわからない。俺の激情に反応するかのように、黒奏の待機状態であるピアスが、俺が気づくことなく鼓動した。

怒りの理由。考えてみれば原因は明らかだった。

それほどシャルロットという女性に、気づかない内に俺は惹かれてしまっていた。

そしてそのことに気づく頃、やがて世界を左右する出来事に発展することなど、そのときには夢にも思わなかった。

第五十四話　似た者同士（後書き）

フラグ立てすぎた件について……

第五十五話　絶対零度の影（前書き）

どうぞぉぅ～～～

第五十五話　絶対零度の影

次の日、つまらん授業の内の４つが終わり、昼休みに切り替わる。友達を誘って昼メシに行く生徒、委員会などの活動に行く生徒などが教室を次々と出ていき、教室内は昼休みすぐに食堂に行くと席が取れないという思考に至ったそこそこ頭のいい奴だけが残る。ちなみに専用機持ちは全員さっさと食堂へ行った。俺を教室に残して。

あの後、イライラしていた俺が一夏の家に戻ると、部屋の中は大層ひどいことになっていた。まあそのことに一夏予備軍が俺を糾弾してきたのである。イライラ絶頂状態にキーキーとうるっせぇ女の喚き声が俺のイライラをさらに募らせ、つい口論になってしまったのだ。かくいう今もまだ頭のマグマが冷え切っていない。あーイライラする。模擬戦やりてぇ。誰でもいいから殺りてぇ。誤字だ。気にするな。

まあそんなワケで教室の中、自分の席に座り、腕を組んで目を閉じて必死に瞑想状態を作っている。なんとか頭の隅っこに残っている冷静な俺が地の文をやっているワケだが……これが怒り状態の俺に地の文やらせたらヤバいぜ？呪詛怨念怒号絶叫奇声の嵐だからな。さすがに小説的にヤバいため自重してもらった次第だ。

「……メタ発言は自重すっか。瞑想瞑想……」

「あのー音無先輩。瞑想中に悪いんですけど」

目を開けて声のした方へ向く。サイドポニーの赤毛に鈴以上のちびっ子……リリアーヌだ。そういえばこいつも専用機持ってたな。

「なんだよ」

言ってすぐに後悔する。やべ、リリアーヌは関係ないのに……どうも調子が悪い。無意識に口調が厳しくなっちまう。これ以上ケンカの火種は増やしたくないってのに。

「食堂の人気が収まるのを待ってるんですよね？そろそろ行きませんか？」

が、俺の懸念は杞憂に終わり、リリアーヌはさして気にした様子もなく俺を食堂に誘ってきた。１人で食おうと思ってたんだが……ストレスをぶつけちまいそうで。だが、見たところリリアーヌなら後で謝れば許してくれそうだ。それに、少し聞きたいこともある。

「……今の俺、結構イライラしてるけど。それでもいいなら」

「自覚してるなら大丈夫じゃないですか？早く行かないと昼休み終わっちゃいますよ？」

「ん……よし、行くか」

あ、少しイライラが収まった気がする。そんなことを思いながら食堂へ行くと、一夏と予備軍はまだ食事中のようだった。全員の目がこっちを向くが、あえてスルー。せっかく収まってきたイライラをまた増やしてはキリがない。頭を冷やすという意味合いで季節外れの冷し中華を頼み、適当な場所にリリアーヌと一緒に腰かける。いつも7人だったから空席を探すのが大変だったが、2人となるとどこでも座れるもんだな。

「いただきます」

「……いただきます」

律儀にあいさつをするリリアーヌに当てられて、口まで持ってきた冷し中華を一時停止してあいさつをする。何か隣のヤツがいただきますって言うと自分も言わないといけないって気分になるよな。

「んむぅ。おいひいでふねー」

「ああもう……口の周りが汚いじゃないか……って、俺はお父さんかコラ」

「ふぁい？」

口いっぱいに料理を詰め込みながら顔を覗いてくるリリアーヌを見てがくり、と肩を落として脱力する。なんだかリリアーヌといると毒気が抜かれていく気がする……。ラウラの兄貴宣言に続いて今度は親父か……そんなに俺って老けてるんだろうか……。

「ふぉれにひへもここのごふぁんは……」

「飲み込んでから喋れ。ふもふも語を解読できるほど俺の頭はお花畑じゃないぞ」

「ふもふも……ごくり。それにしてもここのご飯はおいしいですね！研究所にいたときの固形栄養剤と比べたら音無先輩と亀ですよ！」

「悪い、例えの意味が全くわからない」

「月とスッポンってことです！」

そういうことかよ。結構単純だな。

やがて昼メシも食べ終わり、本題を切り出す。イライラは大方吹き飛んでいた。

「で、例の先輩タッグの件だ。そっち側にいたんだから大体はメイン兵器とか知ってるんじゃないのか？」

土曜日のあの一件以来、リリアーヌたちは晴れて俺たちの仲間になった――ワケではないが、一応『対抗勢力』（レジスタンス）の一員を名乗っているが、根本的には俺たちの仲間で……めんどくせぇ。ようするに2重スパイってことだ。ちなみにシャルたちにも言ってない。今日言おうとしたんだが、昨日のことが尾を引いているせいで話す機会がなかったのだ。

「それなんですけど……私ではあまり役には立てなさそうです……。というのも、この学園に来てその先輩タッグと一度もコンタクトを取っていないのです」

「……マジか？お前ら仲間だろ？」

「ええ、まあ。でも、仲間といえど所詮は一時凌ぎみたいなものですからね。仲間というのもこの戦争だけですし。自分から戦闘情報を垂れ流すバカはいませんよ。機密事項をベラベラと教えて国に消されたらたまりませんし」

「世知辛い世の中だねぇ……なんで戦争なんてモンがなくならねぇのかわかった気がするな」

「でも、ここの勢力は……本当に自分たちは仲間という意識で動いてる気がしますね。……少しうらやましいです」

うらやましい……か。今ケンカ中なんだけどなあ……。イライラも収まったし、さっさと悪かったって言っちまおうか。

「で、一応こちらで多少調べました。ですが……さっきも言った通り、あまり有益な情報は手に入らなかったのでお役に立てるかどうか……」

「構わねぇよ。役に立つかどうかは俺が決める。教えてくれ」

てか、今思ったらリリアーヌの口調が若干変わった気がする。あのとんでもなくキャラ作りくさい口調から普通の敬語に戻ったっぽいな。

「わかりました。率直に言うと、相手はかなりの防御よりの戦闘スタイルみたいです。それも2人揃って。コンビネーション名も《イージス》という名前がついてるみたいですよ」

「イージスってあれか。確かなんでも防ぐ盾だっけ？誇大表現にも程があるな。死ねばいいのに」

「まあ伝説の盾って解釈でいいんじゃないですか？どう考えても厨二病ですよ。死ねばいいのに」

やべ、こいつと結構話が合うかもしれない。一生懸命携帯端末を指で操作してるところとか健気だし。こんな後輩欲しかったんだよなぁ……。そういえば自己紹介のときに『リリアって呼んでください』って言ってたっけ。俺もそう呼ぼうかな。

「おそらくナノスキンを反映させて機体の装甲の自律回復を可能にしている第3世代の機体か、もしくは……シールドエネルギー自体に改良を加えてダメージが通らない性質を造り出したか……そんなとこですね」

「防いでねぇじゃん。マジで頭悪そうだな。……いや、実際悪いのか」

「え？音無先輩、会ったことあるんですか？」

そういえば昨日襲われた……ってかあれって襲われたのか？逆に襲ってやろうとしたら逃げられたし……バカの考えてることはわからん。

「昨日な。なんか新しい武装試すとか言ってたぞ。でもちょっと会話したら『似たモン同士だな！』とか言って高笑いして帰ってった。マジであれはイラッときたな」

「うわぁ……どうみても史上最強のイタさです……本当にありがとうございました。……って、はい？今新しい武装って言いました？」

「あ？ああ。確かに言ってたぞ。イタ笑いしながら。なんかおかしな点でもあるのか？」

「……聞いた話によると、あの２人のＩＳは近距離、さらに格闘に特化した超近距離型みたいなんですよ。それに新しい武装って……」

「どうせグングニルとかいう槍でも仕入れたんじゃねぇの？なんて意味だっけ……リリア、知らねぇ？」

「確か神を殺したとかいう害毒なほど胡散くさい設定だったと思いますよ？」

グングニル（笑）ってか。てか設定って言っちゃダメでしょうよ。

「あっ、音無先輩すいません。そろそろ失礼しますね。ミリアムとエレアムの見送りに行かないといけないので」

「ん？なんだよ、アイツら帰るのか？」

「本国、ドイツで情報収集に徹してもらうんですよ。ああ見えてハッキングとか趣味なんだそうです」

「悪趣味極まりねぇな……わかった。さっさと追い出してこい」

「わかりました。じゃあ失礼しますね。あと……音無先輩」

「あ？なんだ？」

「もう1回だけ、リリアって呼んでくれません？」

えへへー、と笑う後輩。……あ、リリアって呼んでたのか、俺。つい考えてたことと同じことを言っちまった。

「……さっさと行け。リリア」

「はーい！じゃあ失礼しますっ！また教室で！」

満面の笑みで手を振るリリア。あれは俺を男として見てるっつーよりもむしろ頼りにしてるって感じだな。そこまで信頼されるようなことをした覚えはないんだが……。

うーん、と唸っていると、そろそろ人影も少なくなってきた食堂で、不意に自分の近くに人が集まっているような気配がした。顔を上げると、ものの見事に専用機持ち勢揃い。ちょうどいい。さっさと関係を正しちまおう。後輩の信頼を裏切るワケにもいかんしな。

「あー、お前ら。ちょっと話したいことがあるんだ。えーっと……」

なんて言うべきか……素直にごめんなんて死んでも言いたくねぇし……と、少しばかり熟考していると、先に鈴が口を開いた。

「なによ……話したいことって、あたしたちの勢力から抜けるってこと？」

「……は？おま、何言って――――」

「違うとおっしゃいますの？なら、どうしてあんなに親しげにリリアーヌ・レヴァタントと話していたのか、説明してもらいますわよっ！」

「いやだから、なんで俺が寝返るんだよ。意味わかんねぇって――」

「昨日帰ってから判明したが、土曜日にリリアーヌと2人でレゾナンスで買い物をしたらしいじゃないか。かず兄、これはどういうことだ？」

「あ、ああ。そういえばあの後帰っちまったから渡せなかったんだっけ。一夏に渡すモンが――」

「それだけではない。さらにその帰り道だ」

お前らよってたかって人の話遮んなよ……うぜぇ。

「レヴァタントから弾丸を受け取ったらしいな。ラウラから聞いたが、それは敵対勢力に寝返るという意味だそうだが、これはどういうことだ？」

「……」

つまりこれは――あれか。

俺は疑われていると？

……いや、人を疑うことに罪はない。それは人間なら当然することだ。

……だが、ちっとばかしイラッときたな。

所詮、こいつらの信頼なんかそれまでってワケかよ。一夏のヤツも何も言わない辺り、俺を疑ってるのか。

……別に、こいつらに罪はない。あるとしたら、あの時勝手にリリアに決闘を申し込み、それを黙っていた俺の方だ。

だけど。

どうしても確かめたいことが、確かめなければならないことがある。

「……シャル、お前も……俺を疑ってんのか」

お前は、信じてくれてるんだろ？

自分だけじゃこいつらが手に負えないから、俺の口で説明しろってことだろ？

「一弥！俺たちはお前の疑いを晴らそうと――――」

「黙れ。俺はシャルに聞いている。部外者が口を開くな」

俺の言葉に、一瞬で空気が張り詰める。薄い氷を敷き詰めたように、雰囲気が凍り付く。俺が睨んだ一夏は若干たじろいでいる。どうでもいい。俺が知りたいのは、シャル。

お前がどう思っているか、だ。

「……僕は」

そして、彼女は口を開く。言葉を紡ぐ。

「……一弥の、好きにすればいいと……思うよ」

それは、信頼のような美しいものではなく。

それは、疑惑という生優しいものでもなく。

無関心という名の、人間の最も冷たい感情だった。

――――ブチッ

ガタッ！と勢いよく立ち上がる。敷き詰められた氷が砕かれ、圧倒的なまでの殺意の奔流が俺を中心として渦巻く。

久々の感情だった。

ラウラと戦ったときの冷たい怒り――などという甘いものではなく。

かつて俺に宿っていた、その冷たい感情が。

絶対零度の激昂へと昇華して、再び俺の元へ舞い戻ってきた。

「……そうかよ」

極寒を秘めた視線でシャルを射抜く。白羽の矢が立ったシャルは……左手で右腕を掴むような動作をして、目を逸らした。

その挙動を見た瞬間――何かが、致命的な何かが、砕け散った。

それは、信頼などというものではなかった。

それは、もしかすると、俺が完全にシャルという人間から、興味を失った音だったのかもしれない。

「決別だ」

静かに、無風の中で水が動きを見せることなく静止するかのような静けさで、俺の言葉は紡がれた。

「この瞬間をもって俺は『学園勢力』（アカデミー）を脱退する。安心しろよ。『対抗勢力』に入るつもりはない」

カチャ……と食器を持ち上げた、反対側の手の平。そこに粒子が集まり、やがて一発の弾丸が現れた。

しかし、彼の身代わりである金色の弾丸は、指の間をすり抜け……落ちていく。

一夏、箒、セシリア、鈴、ラウラ。５人はその落ちる弾丸に釘付けだった。目が離せないのは……信じたくないからか。

キィィン……ッ

甲高い金属音が床に響き、その場にいた全員の鼓膜に刻み込まれた。音無一弥は、完全にこの戦争から抜けた、と。

誰もが動けなかった。その中で、動く者がいた。

音無一弥。

彼は歩いた。理由はもうすぐ授業が始まるから。遅刻したら千冬に殴られてひどい目に遭うから。普通の学生の、普通の理由で。

その途中には、シャルがいた。じっとしたまま動くことはなく、目を逸らし続けている。

ああ……間違えた。

「どいてくれないか？シャルロットさん」

新たな敵との決闘、タッグマッチを3日後に控えた昼休み。

致命的なまでの亀裂が、音無一弥と『学園勢力』を切り離した。

◇

「ふう、ちょっと正門まで見送る程度でしたが、時間が経ちすぎてしまいましたかね……」

まずいですね。音無先輩の話では、あの織斑先生の出席簿アタックというものはすこぶる痛いそうですから。急がないとせっかく伸びてきた身長がまた縮むかもしれません……。

「そ、それだけは勘弁ですっ！」

足を早める、と書いて早足で歩く。いえいえまだ大丈夫ですよビビりすぎですよ私！あはは！……はぁ。１人でなーにやってんですかねわたしゃ。

こうなったら意地でも余裕を持って教室に入りたいですね。ギリギリに入って担任の先生に、

『ふっ……セェー……ふっ』

『く、悔しいよぅ！悔しいよぅ！』

とでも言わせたいくらいです。無理ですね。わかりますよ。無理なので余裕こいて教室に入る～くらいでやめときましょうか。

そんなとき、目の端っこに何かが映りました。……なんでしょう？粒子っぽかった気がしますけど……。

気になったのでその先に行ってみると、第５アリーナがありました。厳重な電子ロックがかかっているのに中からはどーんどーんという花火でもやってんのかというほど打ち上げ花火っぽい音がします。

そこで、まあ、なんですかね。目がきゅぴーん！と煌めいちゃいましてね。好奇心猫を殺す？私は猫じゃないので大丈夫でしょう。

「カチャカチャプイーンっと」

私の《アズール・パラノイア》の電子操作であっさりとロックを解析・解除します。ふっふっふ。手応えがなさすぎですね。こんなんだからあっさりと襲撃されるんですよバカですねーここの学園長も。私に管理させれば撃退ウイルスを４重くらい張ってやりますよ。

「おっと、それよりも……内部侵入。ミッション・スタート」

仮にも私は軍人ですからね。スニーキングくらいできますよっと。それにしてもバカスカドンドンとやかましいですねー。騒音おばさんかってツッコみたいですね。古いですかすいません。

中……というよりフィールドには１機のＩＳが浮かんでました。解析、解析……っ！？これは……っ！

（ダリル・ケイシー!?ということはあの機体……《ヘルハウンド・ｖｅｒ．２．５》かっ!?）

見た目は鳳鈴音の《甲龍》によく似ている。痛々しい刺のようなパーツがあらゆる場所から突出しており、見るだけでも痛そうだ。本人、ダリル・ケイシーもよくわからないことをしている。前に手をかざし、そのまま動かない。

（……なるほど、確かに音無先輩が言ったとおり、厨二病全開のようなヤツで――）

そう思った、次の瞬間。

かざした手の平から、ありえない出力のビームが発射された。

どぉぉぉんっ!!

大出力のビームは近くの対粒子用障壁にぶつかる。あれが音源だったのか……いや、そんなことよりもっと大事なことがある。

アイツは完全に格闘一色のＩＳを駆っていたはず。その理由は明白で、単に《拡張領域》が空いてないからだ。『白式』のようにさすがに０ではないが、それでもあんな極太レーザーを放てるような拡張領域は持っていなかったはず。

なのに――こうして熟考している今も、ダリル・ケイシーは粒子の奔流を手に弄ぶかのようにバカスカと撃っている。

（……やっぱり、あの出力はありえない。というか、いつから始めてるのか知らないですが、あんな濃密な粒子砲撃ってエネルギーが切れないことが――）

と、そこでリリアーヌの思考は急停止する。次いで、視界が暗転。体から力が抜けていく。

「うぁ……っ！だ……れだ……」

ぼやける視界に映ったのは――女性。どうやら自分は後頭部を殴られたらしい……という思考に辿り着くことはなく、リリアーヌは気絶した。

「ふふふ。近衛兵さんは……この子でいいかなっ」

リリアーヌを気絶させた女性の楽しげな声が、穏やかに空気に響き渡った。

第五十六話　台風の目

タッグマッチを間近に控えた授業。休み時間とは打って変わっていつも通り静かに授業を聞く生徒の間には、張り詰めたような空気が流れている。カリカリとノートに滑るシャープペンシルの音がやけに響く中、久々の空気に私は若干の不審感を抱いていた。授業中では昼寝にばかり勤しむ一弥ですらノートをとっている。その表情は真面目そのもの。だが、どうしても努力と解釈することはできないようなその瞳は、妙な冷たさが宿っている。……なるほどな。この空気の重さはこいつの仕業か。どうりでいつもソワソワしている専用機持ちが沈んでいる訳だ。授業をする側としてはありがたいが、担任として見逃しておく訳にもいかないか。

「……む、では今日の授業はここまでだ。それと音無は職員室に来い」

「げっ……せっかくやる気になったってのに」

ツイてねー、と言いながらも私の後をついて来る一弥。さて、別に職員室まで連れていくこともないか。外に出て涼しげに吹き付ける風の中で立ち止まる。中庭には木々が生い茂っているせいで青々とした香りが鼻孔をくすぐる。嫌いではない香りだ。周りに生徒がいないのを確認すると、私は目の前の男子生徒に顔を近づけた。

「で、今度は何があった？」

私の質問に軽く目を見開く。が、その表情はすぐに苦笑いに変わった。

「さすがっすね、千冬さん。気配でも読んだんですか？」

「質問に質問で返すのは感心せんが、そうだ」

腹を抱え、くっくっくと笑う一弥。笑いはすぐに収まったのかそうではないのか、今度は意地の悪い笑みを浮かべて私の目を覗いてきた。

「そうですね……あったと言われればありましたよ。些細なことですけどね」

「ほう？些細なことにお前は怒り狂っているというのか？」

「怒り狂う……？ははっ、違いますよ。俺はただ――――」

「見下しているだけ、とでも言いたいのか？」

私の言葉に、一弥の表情から笑みが消える。知らないとでも思っていたか、バカ者が。

「貴様はいつもそうだったな。感情をぶつけることを恐れ、高い位置で見下していた。最近ようやく治ったと思ってみれば……このザマか」

「……知ってたんすね」

また、一弥は笑う。今度は呆れの笑みか、自戒の笑みか。こいつはいつもこうだった。怒ることもせず、憎むこともせず、感情を押し殺して笑っていた。まさしくピエロの名に相応しい奴だ。

「もう一度聞く。何があった？」

「……」

沈黙を通す……か？ふん、痛い目を見ないとわからな――

「……ふふっ」

いや、沈黙は破られた。彼の得意の、“笑い”というもので。

「……何がおかしい？」

「千冬さんですよ。なんつー勘してんすか？マジで人間なんですか？」

両手を上げる一弥。その行為は降参を表す。ようやく話す気になったのか？

「質問に答える前に聞かせてもらいます。千冬さん、“アンタは戦争に気づいているだろう？”」

「……」

「さらに質問を重ねましょう。“アンタはどっちの味方だ？”」

真面目な表情。一弥にしては珍しいことだ。それが成長だと信じたいものだ。

「……ふん、言うまでもないだろう」

――私は、生徒の味方だ。

その答えを聞いた一弥が再び笑いだす。ひとしきり笑うと、落ち着きを取り戻し、眼鏡の位置を直してこちらを真っすぐ見てきた。

「安心しましたよ、その言葉に。そして、それはすでに千冬さんが聞いた質問の答えですよ」

つまり……離別、ということか。

「わからんな。私が言うのもなんだが、一弥。お前は重度のお節介者だ。なぜ今になって見放す？」

「お節介者ってのは認めますよ。千冬さんが言うのもおかしな話だ、というのもね」

一弥は続ける。

「だけど、そういつまでも世話焼くのはバカバカしく思えたんですよ」

私の脇を抜け、校舎へ戻る一弥。もう休み時間は終わり……か。

「訂正するのであれば」

付け足すように振り返り、言葉を紡ぐ。再び風が吹き付け、奴の黒い髪と白い制服が、対立する色同士ながらも調和を保つように柔らかくたなびく。その顔には、やはり笑みが張り付いていた。

「今回ばかりは、“見下す”っていう言葉は当て嵌まらないっすね」

その言葉を残し、身を翻した一弥は教室に戻るべく校舎の中へ姿を消した。

◇

「はあ……」

夕食を取り終え、自分の部屋に戻る。やっぱりみんなも落ち込んでいて、一弥を抜いた夕食時にはほとんど会話らしい会話もなかったまま重い空気が流れていた。今も俺の足取りが重いのがわかる。

いなくなって初めてわかる。一弥という存在は、俺たちの中でこれほどまでに大きくなっていたのだ……と。本当に胸にぽっかりと穴が空いた気分だ。

タッグマッチはどうなるのだろうか……一弥はタッグマッチには出るとは言っていたものの……本当に戻ってこないつもりなのだろうか。あれからずっと、今日だって誰ひとりとして話すこともしなかった。

（どうすればよかったんだ……）

一弥を信じてやっていればよかったのか？……いや、あの場所で一弥を問い詰めなかったら、疑惑はどんどん膨らんでいっただろう。回避できないことだったのか？どうもそう思えてならない……。

部屋のドアを開ける。俺たちの部屋に、一弥の姿はない。

「はあ……」

ため息。本当に……どうすればよかったんだ……探しても見つからない謎に埋まりかけた思考を切り換えるようにベッドに倒れ込む。

ぼふっという音を立てたと思ったら、カシャッという何かが落ちたような音もした。ポケットが空いているところ……ケータイが落ちたのか。

「何やってもうまくいかないなぁ……」

ケータイを拾い上げ、仕方なしにシャワーでも浴びようとクローゼットから着替えを取り出す。そして扉を閉めようとした時、俺の視界に何かが映った。

「……ぬいぐるみ……？」

それはぬいぐるみだった。一弥の方にあったから、一弥のだとは思うが……どうしても彼の私物とは思えない。

――と、そこで、一弥が決別を表明した時の記憶がフラッシュバックする。

『あ、ああ。そういえばあのあと帰っちまったから渡せなかったんだっけ。一夏に渡すもんが――』

渡すもの……つまりプレゼントだ。一弥はプレゼントにぬいぐるみを渡すつもりだった……？いや、違う。一弥はぬいぐるみに興味は

ないはずだし、それに……もっと大切なことを忘れてる気がする。
思い出せ。一弥とケンカになったのは、一弥がリリアーヌと一緒にレゾナンスにいたことがわかったからで――

（レゾナンス……？……まさか）

もしそれが事実なら――俺はなんてバカだったんだろう。たまらずケータイを開き、一弥に電話をかける……が、

（くっ、繋がらない！）

電源を切っているのか、それとも拒否ってるのか……どちらにせよ連絡の手段がない。これでは謝ることもできない。

時間が過ぎ去る中、辿り着いた事実に、ただ打ちひしがれた。タッグマッチを明日に控えた夜のことだった。

☆　★　☆

タッグマッチ当日。結局一弥は3日続いて部屋に戻っては来なかった。だが、ピットに入るこの瞬間。この時だけは一弥と会うことができる。更衣室で1人ＩＳスーツに着替える最中に、最初の対戦相手が発表される。……俺たちと先輩ペアだ。

（一弥は……もういるのか？）

着替えを済ませ、ピットに入る。一弥はいなかった。もうすぐ始まるのに……まさか、来ないつもりなんだろうか。

ネガティブな考えになった時、バシュッとピットのドアが開かれる。外に立つのはＩＳスーツを着た一弥。中に入ると同時に、彼はＩＳを起動させた。

「一弥！どうしても聞きたいことがあるんだ！」

反応はない。それでも俺は声を張り上げた。

「クローゼットにあったぬいぐるみって……俺へのプレゼントなのか！？リリアーヌが用意してくれたのか！？」

質問に答えることなく、一弥はただ目の前の滑走路を見つめる。そ

のままの姿勢で……やがて入場のブザーが鳴った。一弥は前のめりに体勢を崩し、今にもフィールドへ飛び立とうとしている。

やっぱり、もう戻れないのか――そう思った時だった。

「一夏」

一弥が、俺の名前を呼んだ。

「ＨＡＰＰＹ　ＢＩＲＴＨＤＡＹ。これは“俺からの”プレゼントだ」

キィンッ、と金属音が響く。これは――

「行くぞ。最後の付き合いになるかはお前次第だ」

その言葉を残し、一弥はフィールドへ飛び立った。しばらく呆けていたが、遅れながら俺もそれに続く。

「――ああっ！！」

暗い滑走路を抜け出し、俺は敵の待つ光の下に飛び出した。

第五十七話　真意（前書き）

難産でした……

第五十七話　真意

わぁぁぁぁ――――っ！！という盛大な歓声と、若干の冷気を含む澄んだ空気が、ピットから出てきた俺達を1番最初に出迎えた。観客を沸かすために《緋焔》と《氷如月》をコールし、軽くならすように振り回すと、2本の粒子剣が描いた軌跡に赤と青のエネルギー玉が生まれ、煌めくように破裂する。それを見た観客はさらに大きな歓声を上げて盛り上がりを見せた。

「余裕じゃねぇか。敵に自分の装備見せるたぁな」

すでにフィールドで待っていたダリル・ケイシーが笑いを含んだ声を俺に向けて放つ。そのかたわらにはペアの相手であろうＩＳに乗った女子生徒を従えている。相変わらずの褐色肌に、俺はため息をついて首を振った。

「ザコ相手に見せるも何もあったもんじゃないだろ？」

あからさまな挑発。目的の見え透いたその言葉に褐色女は反応することなく、ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべながら、手に持った弾丸を放り投げた。かたわらの女子生徒、フォルテ・サファイアも同じく決闘の儀式を済ませる。よほど自信があるのか、頭の中は冷

静なのか。確かめる術はない。

同じく一夏も弾丸を投げる。が、俺はもう関係がないのだ。ただひたすら待ち、アクションを起こさない俺に焦れたらしい褐色女が懐疑的な眼差しを向けた。

「何してやがる？さっさと――――」

「ああ、悪い、先輩。俺はもうこの戦争の関係者じゃあないんだ。期待させて悪かったな？」

その言葉を聞いた褐色肌は驚きに目を見開く――――かと思いきや、先と変わらない表情で……いや、さっきより面白そうな声音の笑い声を発した。

「かっはっはぁ！！まあ関係ねぇけどなぁ！似たモン同士仲良く殺ろうぜ！？」

……今気づいた。こいつはただの戦闘狂だ。優越感に浸るためだけに強さを求めている、言うなれば人間本来の心理を持つバカ野郎だ。

刻一刻と試合開始の時間が迫る。それ以上の言葉は飛び交うことなく、俺達はやがて来たるその時を待つ。あれだけ盛大な歓声を上げていた観客達も、今だけは沈黙をもってその瞬間を待ちわびていた。

音が消えたフィールドは歓迎するかのように――その瞬間を迎えた。

「ぶっ潰してやるァ！！」

試合開始と共に、雄叫びを上げながら瞬時に俺の顔面を目掛けて飛来する手刀を片手の剣の柄で捌き、試合は幕を開けた。

◇

アリーナの戦闘フィールドからバリアエネルギーで隔離された観客席。試合が始まるまではなりを潜めていた観客達だったが、試合が始まると同時に再び歓声が戻ってくる。その中には、歓声こそ上げていないものの、専用機持ち――セシリア、鈴、ラウラが席に座ってその経緯を見守っていた。彼女達の顔色は優れない。雲がかかったように、沈んだ面持ちで試合を観戦している。

「一夏……と、一弥。……大丈夫かしら」

「一夏さんと敵のペアとの相性は最悪、一弥さんとの連携は……難しいでしょう。厳しい戦いになりそう……ですわね……」

一弥は先日の一件以来、誰ひとりとしてまともに話した相手はいない。あったとすれば千冬に呼び出されたくらいだ。最悪のコンディションでの決闘。心配になるのも当然だった。

「……だが」

ラウラが逆説の意味を持つ言葉をこぼす。その言葉にセシリアと鈴は反応し、ラウラに注目した。

「確かに私達は……かず兄に頼ってばかりだった。そんなかず兄が消えた今、私達だけで戦っていかねばならんのも事実だ」

頼ってばかり、という言葉に思い当たる節があるのか、セシリアと鈴は目を逸らす。確かに、彼に寄り掛かってばかりだった気がする。

「なら、見せてやるしかないだろう。かず兄無しでも、私達はしっかり戦えるということを。それがかず兄への礼でもあると私は思う」

……私は、かず兄の家族なのだからな。と、ラウラは続けた。その

言葉に2人が驚いたような眼差しを向けた途端、ラウラの輝くような銀髪が鮮やかな水色に変わった。

「見〜つっけた〜！ラウラちゃん、一夏君達が終わったら次は私達よー？うりうり」

ラウラの後ろから飛び掛かるように抱き着き、ほお擦りをしている。信じがたいが、ＩＳ学園最強の称号である生徒会長の名を持つ、更識楯無その人である。絡まれたラウラはものすごく不機嫌そうだ。負のオーラすら漂っている気がする。

「……あーもーこんな時間かー急いでピットに向かわねばなー」

「あー。もう、つれないんだから。つまんないわねぇ」

立ち上がり、すたすたと歩きだすラウラについていく生徒会長。しばし呆然としながらも、残された2人はやがて顔を見合わせた。

「……確かに、ね」

「……ええ、そうですわね」

確かに、ラウラの言う通りだ。ならばどうするか？

「さぁって！確か最初のあたし達の相手は一夏と一弥だっけ？」

「そうですわね。２回目はラウラさんと更識さんのペアですわ」

互いに笑い合い、試合に集中する２人。現実、一弥は戦争から身を引いたのだ。もう彼はいない。傍観者という立ち位置に去ってしまった。

ならば、するべきことはただひとつ。自分達だけでも、彼などいなくとも戦えるということを彼に見せつけてやるだけである。

◇

「一夏……」

ピット内。さっきまで一夏と一弥がいたピットには、今は箒とシャ

ルロットが待機していた。モニターに映る2人を見て落ち込んだ声を出す箒。それを聞いて、シャルロットは目を合わせることなく呟くように声を出した。

「大丈夫だよ、箒。一弥がついてるから」

「シャルロット……だが、一弥は……」

「大丈夫。それは、箒もよく知ってるでしょ？」

……そうだ。確かにシャルロットの言う通り、あの2人が揃えば出来ないことなどなかった。幼少の頃から今も、あの2人は……最強だ。

「……そうだったな」

気を取り直してモニターを見る。箒の不安な気持ちはどこかへ消えていた。

「そう……一弥なら大丈夫なんだ……」

――――僕がいなくても。

シャルロットの声が箒に届くことはなかった。

◇

「ほらほら、全然当たんないッスよー」

「くそっ！！」

前回聞いた情報から2人揃ってのコンビネーションで仕掛けてくると思っていた俺はまず、1対1の状況に誘導されたことに驚かされた。だが、それぞれが離れた位置にいてもその鉄壁の防御は健在らしく、カノンモードの《雪羅》の砲弾が当たらない。接近戦に持ち込もうとしても、後退しながら高火力の荷電粒子砲を乱射してくるので近づくに近づけない。

《雪羅》をシールドモードにすれば瞬時加速を使って接近出来る…が、逆に言えば接近戦に引き込むにはそれしか方法がない。遠距離攻撃はカノンモード《雪羅》のみ。つまり、《雪羅》のモード切

り替えで俺の行動パターンが相手にあっさりバレてしまうのだ。カノンモードなら遠距離攻撃、シールドモードなら瞬時加速をしての特攻と、悠々と相手に情報を与えてしまう。

《白式》は高機動型のＩＳだ。セシリアとの模擬戦では捕まえることが出来たが、この先輩にその戦法は通用しなかった。

「データ通りッスねー。粒子と実弾の中距離攻撃に手も足も出ないっぽいッス」

そうなのだ。両肩に据え付けられた荷電粒子砲だけならまだなんとかなったが、その上に両手で巨大なマシンガンを持っているのだ。離れれば粒子、近づけば実弾が襲うという相性が最悪の相手だった。

しかも粒子を防ぐのにもシールドエネルギーを削らなければならないため、高機動を活かしてひたすら回避してエネルギー切れを待つしかない。

「ほーら。ここまでおいでーッスよ」

「ぐっ……！」

急に粒子砲撃が止んだかと思って近づけばマシンガンの餌食に……どうすることもなく立ち尽くしていたところに、荷電粒子砲の直撃を食らってしまう。

「がっ！……くそっ！！」

成す術もなく、俺はひたすら回避に専念していた。

◇

「かーっはっはっはァ！！無駄無駄無駄ァ！んなショボい攻撃じゃ俺ぁ墜とせねぇぜぇ！？」

「あーうっぜぇ。少しは黙れ……ってんだっ！！」

ザシュッ！！と何重にも折り重ねられた《雨簗》の刹那の連撃が褐色女を捕らえる。……が、俺の攻撃はシールドエネルギーを減らすまでもなく装甲に傷をつけるだけに留まる。なるほど、こりゃ厄介だ。まさかリリアの推測通りとは……

ナノスキンによる装甲の自律回復。そのスピードが桁外れだ。斬っ

ても斬っても装甲が治る。機体を《月下閃影》に変換して回復する前に斬り刻めればいいが……

「おらおらおらぁっ！」

「ぐっ……チッ！」

俺にぴったりと密着し、リストソードのついた拳や刃のついた足での蹴りが俺を襲う。粒子剣は実体がないのでリストソードが相手ではとても対処しきれない。しかも対粒子コーティングでも施されてるのか、焼き斬るということも不可能だ。《不動月桂》の堅固な装甲がなければ今ごろ俺はズタズタにされているだろう。引き離して《怒雷》１１本で総力攻撃という選択肢もあるが、引き離された褐色女が《怒雷》を攻撃して破壊してしまえば、もうドッグレースになって逃げ続けるしかなくなっちまう。

近距離ゆえに銃器も使えない。参ったね、これは。

「にしてもよぉ、おめーが『学園勢力』抜けるたぁな」

「ぐっ……あぁっ！？」

「かかかっ。あいつらだけじゃこの戦争に勝ち進めねぇってことだよ」

流れるような格闘術を繰り出しながら、何が楽しいのか褐色女は喋り続ける。

「どうせすぐ内部分裂でも起こすだろうなぁ？なぁ……教えてくれよ。何があったんだ？何て言われたんだ？」

「……ぎっ、がっ……！クソが……！」

「ああいう奴らは嫌だよなぁ？結局なんでも押し付けられんだからよぉ。ちょっと下手に出りゃつけあがる。上手になれば逆上だ。なぁに、おめーはなんにも悪くねぇよ。悪いのはわがままなあいつら――」

「うるっ……せぇんだよっ！！」

「っ！？」

ガシッ、とリストソードをわしづかみにして動きを止める。ゴチャゴチャゴチャゴチャうるさいったらない。

それにさあ……

「お前、何か勘違いしてないか？」

「……あ？」

「内部分裂だ？はっ、起こるワケねぇだろ。なんのために“わざと”決別したと思ってんだ？」

「……は？……わざと？」

俺がそんなブチギレてあいつら見捨てるワケねぇだろが。まあ確かにシャルの態度には結構キレたが。

「俺に非があるのにキレてどうすんだ？それであいつら見捨ててどうすんだって話だよ」

「はぁ……？わかんねぇなっ。だったらなんで『学園勢力』を抜けやがった？」

「んなこと、決まってんだろ？」

ギリギリと黒の装甲が嫌な音を立てて軋む。……まだ問題ねぇな。

「俺が必要なくなったからさ」

そうだ。

あいつらに、もう俺の力は必要ない。

「重度のお節介は俺の悪いクセでな。その悪いクセがまた出ちまったんだよ」

俺の悪いクセ。お節介。他人から頼られると、どうしても力になってしまう、自己満足。

今回もそのクセが出てしまった。

「頼ってばっかじゃ強くなれねぇだろ？あとはきっかけが欲しかったのさ。俺とあいつらを切り離すきっかけがな」

そう、あいつらをもう1段階レベルアップさせるには、突き放す必要があった。

それに、戦争から弾かれたといってご隠居生活をするつもりなんざさらさらないしな。

「知ってるか？あいつら、俺を“疑った”んだぜ？１番頼りにしてる俺を、だ」

「……だからなんだってんだっ！」

「信頼関係ってな、結構簡単に崩せるんだよ。その信頼を利用すればいいんだからな」

例えば、２人の信頼しているペアがいるとしよう。

敵は勝つために一方の声を真似て相方を呼び出す。１人でのこのこやってきた相方をフルボッコにすればあっさりと勝利を収められる。

まあこれは極論だ。俺が言いたいのは――

「これは戦争だぜ？“信じて”“頼る”だけでやってけるワケねぇだろ。それを理解した上であいつらは俺を疑ったんだ。これがどういうことかわかるか？」

「んの……っ！知るかっ！離しやがれっ！！」

もう少し聞けよ、あと少しで終わるからさ。

「つまり。早い話が――――」

――――そんだけ、あいつらは成長したってことだろうがよっ！！

「ぐっ！？」

褐色女を蹴り飛ばす。それと同時に、俺は叫んだ。

「一夏ぁっ！！」

きっとその時の俺は……かなりにやけ顔だっただろう。こんなに嬉しいことはないんだから。

……シャルのせいで結構萎えたのは別の話だが。

◇

「――――っ！！」

俺の名前が呼ばれた瞬間、待ってましたと言わんばかりに俺は手に粒子をイメージした。出てきたのは、一弥からの“プレゼント”。

「なっ！？」

「食らえっ！！」

ドウッ！！と豪快な音を立てて銃弾が飛翔する。一弥の言う《胡蝶》という名のアサルトカノン。俺の手には確かにその銃器が握られていた。一弥のプレゼントとは、一弥の持つ拡張領域だった。いちいち登録すんのがめんどい、と言ってそのままにしてあった一弥の拡張領域。たった2人の男性ＩＳ操縦者の、至高のタッグ。俺が一弥のレベルまで到達したとは思わない。だが、それでも彼は認めてくれた。その証こそ、拡張領域の使用可能という……実に彼らしいプレゼントだった。

俺が撃った弾は敵ＩＳの脇に逸れる。が、目的はそれじゃない。射撃練習をあまりやっていない俺が当てられるなどとは思わない。

だが、この一瞬。俺が銃器を使えるという事実を突き付けられ、動きが止まった――――この一瞬。この刹那の時間こそ、勝利の鍵とな

る。

「あああぁぁぁぁっ！！」

銃弾を撃った瞬間、瞬時加速を使って敵まで近づく。さらに瞬時加速で速度を乗せる。かなりのエネルギーが持っていかれたが、このチャンスを逃せばもう勝機はない！

「く……っ！まだだっ！」

だが、流石代表候補生の先輩、というべきだろうか。すぐさま体勢を立て直し、荷電粒子砲の砲門を俺へと向ける。

――間に合わない！

バチバチと放電状のエネルギーが溢れ、必殺の輝きが――あさっての方向へ放たれた。

「な――っ！？」

信じられないと言わんばかりに目を見開くフォルテ・サファイア。そのＩＳには……漆黒の鎖が穿たれていた。その衝撃で軌道がずれたんだろう。

（やっぱり、一弥には敵わないな……っ！）

高速で飛翔する俺の手に持つ《雪片》が強く高鳴る。久々の両手持ち。《雪羅》の分のエネルギーも全て込められた刀を大上段で振り被り――――

「おおおおおおおおおっ！！」

敵ＩＳのシールドエネルギーを一刀両断し、残さず刈り取った。

第五十八話　強さのカタチ

戦闘不能の合図であるブザーが短く鳴り響く。さて、一夏は残りほとんどのシールドエネルギーを使っての一太刀だっただろうし、もう危険域だろう。残ったのは似た者同士と呼称する、俺と褐色女か。

「じゃ、こっちもさっさと終わらせようか」

バシィッ！という音と共に装甲が砕かれ、武器へと変化する。残虐とも呼べる形状の１１本の黒き剣鎖が陽の光の下に顕現され、カチカチと互いの殺傷能力を比べ合うかのように打ち合わせる。

回復しようが関係ねぇ。瞬殺してやんよ。

「ケッ、フォルテの奴、油断してっからそうなるんだよ。……まあ関係ねぇか」

「関係大アリだと思うぜ？お前ももうすぐズタボロになるんだからな」

俺の言葉を聞いてもその余裕の表情は崩れない。それどころか、目を見開いて裂ける程に口元を歪ませる。こいつは重症だな……そう思った時だった。

褐色女の駆るＩＳが過剰な光を帯び、辺り一面に広がった。

――――これはっ！？

「セカンド・シフトか……っ！」

「いーや、これはちっとばっか特別なモンでなぁ。“人工的”なセカンド・シフトなんだよ。開発者からは《強制的形態移行》（フォースメント・シフト）っつー大層な名前がつけられてるらしいがなぁ」

「なっ……！？」

フォースメント・シフト……！？そんなもの知らない……いや、聞いたこともない！そもそも、そんなことはありえないはずだ！

ＩＳと操縦者の間には心というものが深く関係している。それは人間が作り出す技術では、決して立ち入ることの敵わない不可侵の領域。セカンド・シフトはその究極形。ＩＳと操縦者の、信頼関係が成り立って初めてなせる業。それは基本であり、絶対のはずだ。

その基礎理論を覆す現象。

禁忌の象徴――――《強制的形態移行》。褐色女は、そう呼んだ。

（くっ……！）

改めて、敵対の位置にある光に包まれたＩＳに目を向ける。形状や色彩に変化はないが、もっと奥……中央部から計り知れない程の力を感じる。

ふと、今まで空を仰いでジッとしていた褐色女が動きを見せた。左腕を俺に向ける。たったそれだけの動作。

たったそれだけの動作で、極太の粒子のレーザーが超スピードで俺の頬を掠めた。

「――――――っ！！」

ドゴォンッ！！という爆発音が背後から聴こえてきた。なんだ、今のは。速さ、威力、熱量、装填速度、全てが馬鹿げている。なんの前触れもなく発射されたため、避けることはおろか、反応することもできなかった。

「くくっ……かっはっは……ヒャーハッハッハ！！最高だぜ。間違いようがねぇ！！最強だ！！今の俺は無双だ！真実だ！！唯一だァァァ――――ッ！！！」

バッと、今度は右手が俺へと向けられる。稼動率は８７％。《月下

閃影》なら申し分ないスピードが出せる境地。だというのに、動くことすらできなかった。なら、次の『本命』を避けられる可能性は？

――皆無である。

ほとんどの装甲が砕かれた《月下閃影》で耐えられる道理は？

――絶無に決まってる。

放たれる光の束。それは、俺を焼き殺す程の威力を持っている。避けることもできない。耐えることもできない。走馬灯のように映る光が、圧倒的な力の塊が、ゆっくりと俺に降り注ごうとしている。

――だけど、

（認めねぇ！！）

光に向かって手を伸ばす。

（テメェの力が最強だっていうなら！！）

認めない。認めたくない。俺が望んだ強さは、ただ手を伸ばしただけで手に入ったのか。それなら、俺の今までは一体なんだったんだ。

科学。それは認めよう。ＩＳという兵器を造り出した、その力は認めよう。だが、それを使役するのは他でもない俺達人間だ。自分達

が強くなってこそ、科学の光沢は輝きを増す。
だが、なんだそれは？誰でも力が得られるのであれば、それはただ――
（科学に蹂躙されてるだけだろうが……っ！！）
そんな力がまかり通るのなら。
人間の強さが弾かれるのなら。
「俺が求めた最強は何だったんだぁ――――っ！！！！」
俺の絶叫は理想と共に光に呑み込まれ……大爆発を起こした。
◇
ドォォォォォォンンッッッ！！！！

「かずやぁ――――っ！！」

一弥へと放たれた極太レーザーは一弥を捉え、大音量と大爆発を巻き起こした。一弥がいた場所には力の余波か、大量の黒煙がもうもうと残っている。装甲を取り除いた彼が耐えることができたとは、夢でも信じられない。

「てめぇぇぇぇぇっっ！！」

刀を握り締め、未だ光を放つＩＳに接近する。もうほとんどエネルギーが残っていないせいで瞬時加速は使えず、スピードが出ないせいでひどくゆっくりと近づいているような気がした。

「ザコに用はねぇよ」

ようやくそのＩＳを俺の射程圏内に入れ、大上段を叩き込もうとしたその前にリストソードが俺の脇腹をえぐる。絶対防御が働くほどの威力ではないにせよ、俺の残りわずかなシールドエネルギーは０を迎え、《白式》の薄い装甲にヒビを入れた。

ビーッ！！という短いブザーが轟き、俺の敗北が確定する。動きを止めた《白式》はゆっくりと降下していく。それを意に介さず、興味が自分の持つ力に移ったらしい、一弥と俺を屠ったＩＳの操縦者

は自分の両手に熱の篭った視線を注いでいた。俺にトドメをさすことなく。

（くそ……っ！くっそぉぉぉっ！！）

相手にもされないのか、俺は。所詮、俺の力なんてそんなものなのか。

フォルテ先輩を倒せたのは、一弥の援護あっての賜物。やっぱり俺は、一弥なしには強くもなんともないのか。

（所詮、一弥には一生勝てな……）

一弥、一弥。……一弥？

そこで、はたと気づいた。

どうして、一弥がやられた時にブザーが鳴らなかったのだろう。

（……まさか）

そんなはずはないと思い、すぐにその考えを捨てる。

（そうだ）

なぜなら、あの一弥だ。規格外が専売特許の、あの親友だ。

（あいつなら……やりかねないか……！！）

空中を漂う黒煙。澄んだ空気の中、局地的な煙はすぐに色を失い、風に紛れていく。太陽が昇り、夜の闇を明るく照らすかのようにゆっくりと黒煙が消え失せ――――その姿をようやく目にすることができた。

予想していたような黒焦げの姿ではない。それどころか、無傷の身体が……眩しさに目を閉じた一弥の姿が、そこにあった。

◇

いつまで待ってもレーザーの高熱が来ないのを訝しみ、眩しさに伏

せた目を開く。

俺の視界は黒一色で、また奏の世界に飛び込んだのかとも思ったが、焼け焦げるような匂いが鼻を刺激し、その可能性はないと知る。

視線を移すと、まだアリーナのフィールドにいるようだった。いや、当然か。意識が無くなったワケじゃないんだし。

なら……

（目の前のこの『黒』は、一体なんだ……？）

視線を前に戻し、“それ”に目を向ける。視界いっぱいに映る黒。いや、黒一色というワケではない。ところどころに連結部分があり、何かを繋げたような……

「……ああ、……ははっ」

なるほど、理解した。目の前に映る黒……これはつまり、俺のメインウェポンである《怒雷》だ。黒き剣鎖を縫い合わせるように作り上げた、巨大な『盾』だ。

名付けるなら、《武装形態移行》。アーム・シフト。

いや、形態変化が自由自在というのなら……《武装形態変換》というべきか。

正式名称《雲縫》（くもぬい）。

掴み所無き空の奔放者である雲のように形が定まることのない武装。

『雨』を篝らせ、『雷』を怒らせる、『月』の守護者。《黒奏》の持つメインウェポンの最終、かつ究極形態。その力は、俺の目指す“強さ”を創造することができる力。

『糸』が衣服を作るように、

『鎖』が武器を造る力――――！

盾となった《雲縫》を解く。俺の思考を読み取った黒き鎖は絡まることなく瞬時にバラけ……今度は剣を生み出した。

俺が目指した“強さ”は、とんでもなく巨大だった。例えるなら、鈴の《双天牙月》の倍……いや、3倍はありそうだ。見上げなければてっぺんが見えないほど巨大な黒の大剣が、俺の手に顕現された。

「……なんだ、そりゃ」

唖然とした風の褐色女。今までは数で押し切る系統の攻撃だったから、傷をつけることはできても傷を重ねることはできなかった。攻撃しても回復するなら……仕方ないよな？

「一撃で破砕してやろう！！」

感情が高ぶるのが自分でもわかる。限界を超えた稼動率。《朧月夜》が発動し、限界突破した今の超スピードなら、あのレーザーだって避けられる。

さあ、仕切り直しだ。

第2ラウンド――――開始。

第五十八話　強さのカタチ（後書き）

どんだけ長引かせるの。

第五十九話　砕けた命（前書き）

ちょっと長いです。

第五十九話　砕けた命

黒剣を従え、トップスピードで俺は極太レーザーをかい潜る。

黒剣は持つ必要はなかった。鎖の時のように、俺が念じた方法で振り回される。半径1メートル以上離れられないというハンデはあるものの、重さも感じないのでさして枷となる制約でもなかった。

それでも、俺に攻撃のチャンスが与えられることはなかった。

「ヒャハハハハッ!!避けるねぇ避けるねぇ!!たぁーのしーいねーぇ!!」

「この変態がっ!その歪んだ性格叩き直してやんよ!!」

口ではデカいことを叫ぶが、絶え間無く必殺のレーザーを放ってくるために近づくことができない。真っ白い粒子の束がことごとく邪魔をする。

「そりゃあいいなァ!!ぜひやってみてくれよ!?その頃てめーは消し炭だろうがなァァァァッ!!」

劣勢の膠着状態。避け続ければいつかガス欠を起こすだろうと考えていたが、無尽蔵と言っても過言ではないくらいにエネルギーを撃ち出している。エネルギー切れは期待しない方がいい、か。

「んな紛い物に手ぇ出してるザコに負けるワケにはいかねぇんだよっ！！」

「紛い物ォ？ハッ！だからどうしたッ！？紛い物だろうがなんだろうが最強には変わりねぇだろうが！！」

「紛い物だって自覚があるんならっ！！なんでそこまでして執着するっ！？なんでそこまでして力を求めるっ！！」

「この世界がそう決めたからだ！！それがこの世界の理（ことわり）だッ！！強くなきゃ、最強じゃなきゃ俺らの居場所はねぇんだよォォォッ！！」

「その最強ってのはっ、テメェ自身の力じゃねぇだろうが！！お前はただ力に溺れたバカ野郎だ！！」

「だからどうしたッ！？俺の力じゃないからどうしたァッ！！他人の力だからどうしたァァァ――ッ！！この力は俺のじゃねェッ！！けどなァ、その力を使ってるのは紛れも無く俺だろうがァァァァッ！！」

「この最強バカがっ！！そんな力なんてなくても生きていけるだろっ！！お前には最高の後輩がいるんじゃないのかっ！！それでも足りないっつーなら――――」

「仲間になるってか？」

その声は穏やかだった。だが、その穏やかさとは裏腹にレーザー攻撃は熾烈を極める。それに合わせるように俺もまたスピードを上げるが、巨大なGが身体を軋ませる。

穏やかな声は、すぐに暴虐なるものへと変化した。

「ギャハハハハ！！バカはどっちだァ！？俺はな、力を振り回すのが生きがいなんだよォッ！！それが俺の理想であり、全てだッ！！それを否定するかァ！？だったらてめーの最強で捩じ伏せてみやがれェェェッ！！」

「ぐ、が……っ！やって、やる！俺が、教えてやるよ……っ！力は振り回すためのものじゃない。……守るためのものだってなぁっ！！」

身体にかかるGでうまく言葉を発せない。だが、それでも、叫ぶ。こいつは知らないだけだ。大切なものが、守りたいものが見つから

ないだけだ。

「やっぱ、てめーと俺は似てねぇな」

褐色女の声。だが、高速で飛翔しているため、あまり聞こえない。
断片的に届く言葉を頼りに、なんとか意味を解釈する。

「表面は似てるが、根本的なところが似てねェ。くく……かっはっは。こんな感情は初めてだ……！！気が変わったぜ」

「ぎが……っ、……ああっ！？」

「頑張って生き残れよォ？てめーが気に入っちまったからな。てめーの最強を捩じ伏せて、俺に似せるってのも悪くねぇよなァッ！？ヒャハハハ！！！！殺さねぇような加減はしねぇがなァッ！！」

その言葉に、俺の頭は超回転を起こした。

捩じ伏せる？

殺される？？

死ぬ？？？

現状を思い出す。俺は今、レーザーをなんとか避け続けている。

……身を守る装甲は？

ない。

……どんなレーザーだ？

必殺。

……当たれば――――

【死】

「……」

怖い。死ぬのは怖い。

恐怖心が心を覆う。褐色女に対する恐怖。何なんだこいつは。気持ち悪い。汚らわしい。人間は、ここまで醜くなれるのか。

沸き上がる恐怖心に……思わず、動きが止まる。そこに、致死確実のレーザーが掠めた。

体勢が崩れる。世界がひっくり返る。それを見逃すほど、敵は甘くはなかった。

「楽になれ。生きてたらまた会おうぜ。かははははっ」

放たれる粒子。俺は黒剣を引き寄せる。

殺意への恐怖心。それは確かに、俺の心に広がっていた。

だからなんだ？

そんなもの。

「浴びすぎてもう慣れたってなぁぁぁ――――っ！！」

醜いからなんだ？

そんなもの、仮面を被った頃の俺と大差ねぇだろうが。

だからこそ、こいつは俺と似てるからこそ……

性根を叩き直さねぇと気が済まねぇんだよっ！！

“意図的”に起こした走馬灯……いや、ひょっとすると無意識にハイパーセンサーに働きかけたのかもしれない、そのスローの瞬間。瞬時加速で回避と体勢の立て直しを同時に行う。走馬灯のスローモーションはすでに消えたが、俺はすでにアクションに入っていた。

握り締めた黒剣。それをバットに見立て……極太レーザーをフルスイングで振り抜く。

「おっらぁぁぁぁぁっっ！！！！」

バシャァッ！！と極太レーザーの軌道が１８０度曲がる――ことはなく、あさっての方向へ飛んでいく。妙案かと思われたピッチャー返しは失敗した。

ピッチャー返し“は”失敗した。

打ち返すことは、できたのだ。

なら――

「うおっ！？粋な真似すんじゃ――――がぁっ！？」

脇に逸れるはずだったレーザーが褐色女に直撃する。そのできた隙に、俺はすでに瞬時加速を行っていた。

『曲げることしかできないけどな』

《偏光制御》。あの頃の完全主義を気取っていた俺を殴りたい。

曲げるだけで、十分だってんだよっ！！

「が……っ！くそが……っ」

瞬時に攻撃範囲に褐色女を捉えた俺は黒剣を下から引き戻すように大きく、大きく溜めを作り――

「クソッタレがァァァァ――――――ッッッ！！！！」

「吹き飛べやぁぁぁぁぁ――――――っっっ！！！！」

いつしかの球技大会さながら、黒剣で褐色女を吹き飛ばした。

吹き飛んだ褐色女はアリーナのバリアエネルギーに当たり、大きくのけ反る。トドメをさすべく、追撃をしようとした――その時だった。

「ざけ、やがって……！！クソガキがァァァァ――――――ッッッ！！！！！」

大地を揺らがすほどの咆哮と共に、おびただしいまでの粒子が褐色女を包んだ。

☆　★　☆

熱い。最初の感想がそれだった。

爆発的に増幅した粒子の熱が気温にまで干渉し、真夏に逆戻りしたかのような熱気に包まれる。褐色女の背後にあったバリアエネルギーは瞬時にその効力を無くし、褐色女を中点に巨大な穴がぽっかりと穿たれていた。明らかな異常事態。褐色女のＩＳが暴走しているのは、火を見るより明確だった。

「おいっ！それ以上はお前自身もヤバいだろっ！！やめ――――」

「ヒヒ……ヒヒヒハハハハッ！！力がッ！！力が沸いてくるぜェェェ――――ッ！！これなら負けねェ……ッ！俺はもうッ、誰にも止められねェェァァァ――――ッ！！」

壊れたような狂ったような、甲高い絶叫が耳をつんざく。その激情に反応するように、褐色女を取り巻く粒子がさらなる光を帯び、背後の粒子障壁の穴がますます広がっていく。このままでは間違いなく観客にも被害が及ぶだろう。

『公開試合は中止！観客の者達は指導者に従い、非常口から避難せよ！アリーナを出た後は己の判断で安全を確保！繰り返す！危険が及ぶため、避難せよ！』

スピーカーから避難の合図が起きた瞬間、観客の歓声は悲鳴へと変貌した。必死に逃げ惑う姿が見えたが、それが意味のある行動とはとても思えない。

それほどまでに膨大で、暴虐な粒子だった。おそらくは強制的なＩＳへの抵触で拒絶反応を起こし、コアが暴走した――――そう考えるのが妥当だろう。それを褐色女は自分の力だと勘違いしているようだが……

（……駄目だ！俺１人なんかじゃとても押さえ込めない……っ！）

行き過ぎた粒子が臨界に達した時、ふざけた濃度の粒子が全範囲に

及ぶ拡散爆発を起こすだろう。その熱量だけでバリアエネルギーが消滅しているのだ。暴発した時の威力など、考えたくもない。

どうすればいい。

もう暴走は止められない。このままでは、アリーナどころか学園そのものが全壊してもおかしくはない。

考えろ。

熟考しろ。

頭を超回転させ、生き残る道を辿れ――――。

（……）

だが、とてもじゃないがいい案は浮かばない。そもそも、この状況で一発逆転なんて存在しない。

問題は、被害を最小限に抑えること。だが、それすらも俺1人では敵わない。

どうしようもなかった。

「一弥」

絶望に頭を悩ませている俺に声が掛けられる。耳に届くまで反応が遅れたが、確かに聴こえた。俺は振り返る。

そこにいたのは、いつものメンバー。

俺が見捨てたはずの、かつての仲間達。

「……ん、出番にしては……まだ早いんじゃないか？」

こうなってしまっては関係のない観客の誘導に当たった方がいい。それか、逃げるという選択肢もある。こんな状況だ。責任は褐色女を刺激した俺にあるし、国のためならＩＳを死守するために逃げの一手を使っても責めるヤツはいない。

……それでもお前らは残るのか？

「ヤバくなったら頼れ……そう言ったのは他でもない、かず兄……お前じゃないか」

……そうだったな。

「お前には多大な借りがある。剣のライバルとして、そのままではいられないからな」

……そんなもんか。

「わたくし達は頑張るしかない。そう教えていただいたのも、一弥さんですわ」

……それしかないか。

「たまにはあたし達を頼りなさいよ。……今度は、信じるからさ。アンタのこと」

……そんなワケにもいかないだろ。

だが、たまには売りに売った恩を返されるのも……悪くない。

「一弥……僕は、許される限り一弥を守る。そう決めたんだ」

「へぇ……泣かせるじゃねぇか。……この前は悪かったな、シャル」

「……ううん」

くしゃ、と片手で髪を掻きながら苦笑を漏らす。そうだ。俺達にできないことなんてない。1人で無理なら数を揃えればいい。数に頼

ればいい。元々俺は『気合』や『根性』を武器にする主人公、なんてキャラじゃないしな。

だったら……

「遠慮なくおんぶだっこしてもらおうか。その程度の覚悟はもちろんしてきただろ？」

『了解！』

その声を背に、空高いアリーナの天井に座す褐色女を見やる。アイツが暴走したのは俺の責任だ。もう熱気で近づくことはままならない。なら、俺に唯一できることをしよう。

アイツの『最強』を受け止める。

それくらいしか、俺にできることは思い浮かばなかった。

「よし。なら、今から俺が言ったように配置に着け。作戦はこうだ――――」

最終ラウンド。これで全てを終わらせよう。

☆　★　☆

『気分はどうだ？最強センパイ』

個人間秘匿通信を開通した褐色女に話し掛ける。準備は整った。あとはタイミングの問題だ。

『あァー？なんだこれェー？っつーかなに？ナニ？どこにいんのお前？？？』

今、褐色女は俺が見えない状態だ。大きな盾が、俺を視界から守っている。

『ちゃんといるさ。調子はどうだ、センパイ』

『あ？調子？状態具合感情のことォ？ヒヒヒッ、最高だ最高。粒子がよォ、こう、ドバドバッて溢れてくんの。これ全部俺の。俺の俺の。ヒヒヒヒヒヒ、粒子うめェー』

コアが暴走したせいか、褐色女は麻薬中毒者のような危なっかしい口調で話している。俺の声は聞こえてるようだが……それもいつまで保つか。

『一弥、光が強くなってきた。多分、そろそろくるぞ』

『……了解。全員問題ないな？』

一夏の声に応答し、全員の確認をとる。作戦はこうだ。

俺が半円状に変換した《雲縫》の盾で粒子を防ぐ。当然、それだけでは盾は破壊されるので、ラウラの《停止結界》で慣性を停止させ、破壊されても耐えられるようにする。さらにシャルの《レラ・シェリル》で褐色女の粒子の相殺させるようにエネルギーを盾に張り、負担を軽くする。

これだけではまだ足りない。そこで一夏の《雪羅》のシールドモードを極限にまで引き伸ばし、褐色女が見える半円状の盾の外、学園方面側で粒子を大量消滅させ、さらに負担を減らす。さきほどシールドエネルギーが尽きた一夏が復活しているのは箒の単一仕様能力の恩恵だ。

《絢爛舞踏》。ＩＳのシールドエネルギーを回復するという単一仕様能力。敵に回すと厄介なことこの上ない。が、今はその力を存分に利用させてもらおう。一夏の《零落白夜》は多大なシールドエネルギーを消費する。そこで箒がそばにいてすぐさまシールドエネル

ギーを回復することによって無制限に褐色女の粒子を消滅できる。

セシリアと鈴は一夏と箒の反対方面で粒子を押し返し、一夏に大量消滅に拍車をかけさせる。

ひたすら守りに徹した作戦だった。

『なあ、センパイよ』

壊れたように喋り続ける褐色女に話し掛ける。彼女だけに聞こえる秘匿通信。これだけは言っておかねばならない気がするから。

『やっぱ、似てねぇよ。アンタと俺は』

『……っ！くるぞっ！！』

一夏の言葉にラウラが《停止結界》を、シャルが相殺エネルギーを盾に張る。他の全員も気を引き締める中。俺が盾に手をかざした、その時だった。

『だったら、似せるってのも悪くねぇって言っただろ？』

狂気を含んだ、静かな声が響いた。

『これで終わりなワケねぇだろォ？たとえ俺が死のうが、てめーは俺のお気に入りだからなァ！？怨念怨霊になってでも2人目の俺に引きずり込んでやるよォォォ――――ッ！！ヒャハハハハハハハハハッッッ！！！！』

『その必要はないさ』

残虐な咆哮。俺に向けられたそれを、しっかりと受け止める。受け止めた上で、語り掛ける。

『ベクトルは違っても、最強を目指してたんだ。十分似てるさ、俺達は』

『……な……っ』

俺が一夏の誕生日の時、褐色女に『似た者同士』と言われて怒った理由。それは、イラついてただけじゃなくて……

図星を指されたから。

だから子供みたいにキレたんだと、俺は思うよ。

『……ッ！！うるっせェェェんだよォォォォォ――――――ッッッ！！！！』

断末魔を意味する褐色女……ダリル・ケイシーの雄叫びは、空気を震わせながら俺の耳に届いた。

その声は……最後まで、孤独な者のそれだった。拒絶を表すそれだった。俺は、ヤツのそばにはいられなかった――――。

（……ごめん）

怒り狂った絶叫が遮断されたように途絶えたと思った、次の瞬間。

太陽が爆発したかのような、光の、粒子の洪水が超衝撃となって黒盾を支える俺を襲った。

☆　★　☆

「ぐっ……おぉぉぉぉ……っ！！」

強烈な衝撃。一瞬でも気を抜けば一息に吹き飛ばされそうだ。ラウラの《停止結界》が黒盾の破壊だけは防ぐものの、襲い掛かる負荷だけは俺自身が受け止めるしかないし、他人に任せるつもりもない。ビキビキッと嫌な音が黒盾から響く。悪いがもう少しだけ付き合ってくれ……っ！！

爆散した粒子。その下半分が半円状の黒盾に遮られ、空高くに打ち上げられる。一夏……は、大丈夫のはずだ。俺と違って粒子を受け止めるのではなく片っ端から消滅させているから衝撃は届かないだろう。かたわらにいる箒の安全も約束されているはずだ。

役職的に最も危険なのが身を守る術がないセシリアと鈴だと思ったが、セシリアが俺より遥かに高度と思われる《偏光制御》で粒子の一部分の勢いを停止させ、鈴が衝撃砲で弾き返すというコンボを作っていた。この調子なら問題なさそうだ。

「かず兄っ！！大丈夫かっ！？」

「……問題ねぇ！もう少し……もう少しだっ！」

徐々に収束していく光。やがてその光は落ち着き、何事もなかったかのような静寂が訪れる。学園は無事だ。だが、ラウラが《停止結界》を解いた瞬間、俺の巨大な黒盾が瓦解していく。衝撃に耐えられないと高を括っていたとはいえ……奏に修復を任せるしかないか。すぐに使えるようになるといいんだが……

黒盾が崩れ、粒子となって俺の元に還る中……爆発の中心点を見る。
そこには、ダリル・ケイシーの姿は一切なく――――代わりに、光の玉が浮かんでいた。
それは紛れも無くＩＳのコアであり――――第２波の象徴だった。

「――――っ！！」

今にも再び爆発を起こしそうな、その光球に向かおうとした時。俺の手が引っ張られた。

「一弥っ！僕が行く。だから一弥はここで――――」

「悪いシャル。それ借りるぞ」

「なっ……一弥ぁっ！！」

シャルが手にしていた剣（ティルヴィング）をかっぱらい、瞬時加速で光球へ向かう。
ジェット戦闘機のエンジンめいた噴出音が背後から遅れて耳に届き、加速に使用したエネルギーを遠く彼方へ置き去りにする。全身が風を切るほどのスピードが臨界間近の機体に響くが、俺の目に映っていたのは太陽を収縮したような光球のみだった。目当てである光球は眩しさを閉じ込め、蓄え、さらなる放出時の威力をと言わんばか

りに鼓動している。それはまるで、ダリル・ケイシーの歪んだ信念が詰まった心臓にも見えた。

一瞬で速度をトップスピードまで跳ね上げた俺は時間がかかることなくすぐに光球の元へ辿り着いた。シャルに任せる訳にはいかない。これは俺自身が片を着けるべきだ。決着を着けなければならないんだ。使用許諾されたシャルの剣、《ティルヴィング》を右手で垂直に引き絞りながら左手を光球……いや、ダリル・ケイシーへと伸ばす。拒絶されると頭が理解していても、身体が自然と動く。

「――――忘れはしない。絶対に」

俺の顔面のすぐ横で構えられた剣が蒼く輝き、脈打つように鼓動したのを感じた、その刹那。ダリル・ケイシーの信念……暴走したISのコアに、まさしく瞬時加速を使った時のスピードで蒼剣が撃ち出され――――

シャンッ――――

甲高い音響が迸しり、光球に蒼剣が突き立てられた。

手応えはまるでなかった。水に剣を刺すかのような、透明な手応え。だが、頼りない感覚とは裏腹に光球は蒼剣に突き立てられた箇所を中心にピキピキと凍り付き、やがて無情なる蒼剣は光球の熱を全て奪い去り、氷はひび割れ、光を失ったコアは砕け散った。

負傷者0、死人1名を刻み込んだ事件は、氷の粒となって……呆気なく幕切れとなった。

☆　★　☆

――整備科。

教師の事情聴取を終え、俺は破損した武器の点検を、暗い部屋をたった1つの豆電球が照らす中で行っていた。《雲縫》は派手に壊れたが、奏が全力で修復に当たってくれているのか早い段階で再び使えそうだった。明日の試合までにはなんとか完全修復が期待できそうだ。改めて初陣で破壊された時の、その修復時間と比較すると格段に早くなっている。

（やっぱ……信頼関係、ってヤツか）

端末を閉じ、空中に漂うホログラムが消滅する。夕食を済ませる時間にはすでに空は薄闇色に染まるため、整備科の中は真っ暗だ。頼りない豆電球の光をボヤけた目で見ていたところに、近未来を感じさせるドアの閉会音がした。

「ここにいたか」

「……千冬さん？」

入室してきたのは意外にも千冬さんその人だった。相変わらずの黒のスーツにタイトスカート、狼のような鋭い雰囲気に艶のある黒髪といういつもの風貌。だが、その表情だけは通常とは異なり、複雑さを滲ませていた。

「お前の耳には入れておくべきだと思ってな」

首を傾げる――ことはしなかった。いや、できなかった。千冬さんのその表情が不安を駆り立てる。嫌な予感が心を満たす。

「《強制的形態移行》のことだが……それを研究している根源が判明した」

「……。その名前は？」

まず俺に聞かせるという意味。千冬さんの表情が複雑なものに変わる意味。俺の第６感が警報を鳴らす意味――。

「――デュノア社」

全てはシャル――シャルロット・デュノアに集結していた。

第六十話　歪な疑問

……誰だ、お前は。

『ヒヒヒヒヒ……』

……どうして、ここにいる。

『てめーにもう逃げ道はねェ。墜ちるんだよ、てめーは。地獄の底になァ』

……何を、言っている。

『てめーの真理は、この俺が焼き尽くす。後に残るのは俺の火力だけだ』

……眩しい。光、いや、粒子か。

『クククククク……』

……熱い。

『俺はいつでも、てめーの脳裏に現れる。てめーが俺になるまでなァ』

……熱い！

『俺の粒子はてめーを焼き尽くすまで光り続ける。早く楽になれ……』

熱いっ！！

『てめーは俺にそっくりなんだからよォォォォォォォォォォォォッッ！！！！ヒャハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッッッ！！！！！！』

ぐぁああっっっ！！！！！！

――ＡＭ．０６：００

明かりの途絶えた薄暗い廊下。

冬を前にする今の時期は早朝特有の窓に冷たい霜が降りる程の冷えた空気で覆われ、上着の類を着込まないと寒さを感じる程気温が落ち込む。が、俺は寒いどころか熱さを感じていた。

右手。熱を持った俺の右手を基点に、全身に熱が伝わっていく。その手は、まさしくダリル・ケイシーにトドメをさした凶器だった。

（これが悪夢……ってヤツか。……それとも、怨霊とでも言った方

がいいのか……）

そこで、沈みつつある思考を切り替え、長い廊下を大股に通り過ぎる。歩くたび、歩を進めるたびに俺の真下から靴音が、夜の天井の照明をともした時の豪勢さとは真逆の、いかにも閑散とした雰囲気の漂う長廊下に響く。そのリズムはやや早急で、俺本人が急いでいることを裏付けていた。それは認めざるを得ないだろう。今日は少し……やることが多い。

昨日の事件もあって、明くる日である今日は生徒達には1日の休みが与えられていた。成り行きとはいえ学園の校舎は死守したが、混乱に巻き込まれた研究者、観客、生徒達など、戦闘関連の部外者にとっては結構な重荷だろう。彼ら――――いや、この場合人数的に彼女らと言った方がいいのか――――を落ち着かせるといった意味合いで、学園側は試合も授業も休みにする、という手段を取っていた。ただの後回しだが、俺の頭に占める疑問符を取り払うにはちょうどいい時間といえた。精々、有効に利用させてもらうとしよう。

（手始めに……生徒会室）

早起きをするような真面目な生徒以外は未だ寝静まっているような時間帯だが、今はとにかく時間が惜しい。個人間秘匿通信で生徒会長と手短に話がしたいという旨のメッセージを飛ばし、目的地へと急ぐ。わからないという不確かなことが、明らかに俺自身を焦らせていた。

――AM．06：10

学園は広い。約600秒もかけて寝食を済ませるための寮から勉学に励むための校舎、そして学園最強を名乗る生徒に与えられる一室……生徒会室に到着する。鍵が掛かっている辺り、まだ本人が来ていないことを物語っていた。俺は暇が出来ないように持ってきた携帯食料を口に放り込み、廊下に座り込んで忙しく口を動かす。やはり空腹だと頭の回転が多少鈍る。俺に限ってはその最たる例だ。

「ふぁぁ……待たせたかしら？」

「待った。超待った。誠意の篭った謝罪を要求する。嘘。さっさと開けてくれ」

欠伸をしながら登場を果たす生徒会長にイラッときたが、時間を無駄に出来ないという事実を空腹が補われた頭がなんとか理解してくれたらしい。だが、未だ寝巻きのような服を着て鍵を人差し指でクルクル廻しながら欠伸と共に遅刻する……怒りを耐えた俺の理性は褒められるはずだ。

「それはいいけど……ふふ、おねーさんと密室に2人きりにしてどうするつもりかしら？」

「ふたりはプリキュアでもやってほしいのか？つか聞いてくれよ。俺のケータイって『ふたり』って打つだけで『ふたりはプリキュア』って出るんだぜ？マジで日本終わってるだろ」

「それならどうして私のケータイは『かめはめ波』が予測変換出来ないのよぅ。やるなら徹底してほしいわ」

くだらないやり取りを交わしながら開放された生徒会室に入ってソファーに腰掛ける。前座はこのくらいにして気を引き締めるとしよう。テーブルを挟んだ向かいのソファーに座る生徒会長もそんな雰囲気を感じ取ったのか……

「……ぐぅ」

……二度寝に入っていた。

「オイ！ここは真摯に話聞くとこだろ！寝るタイミングが絶妙すぎんだよっ！」

「う～……寝不足はお肌の天敵なのよ？一弥くんってSなのね……わかってたけど」

私とは引き合わないわね、と続ける生徒会長。誰でも知ってる磁石の法則だ。同じ極同士では、反発するのがオチ。結局生徒会長とはそりが合わないらしい。だからといって避ける理由にはならないが。

『S』同士なら、間に『N』を挟めばいいだけのことだしな。

「さて、時間が惜しいんだ。本題に入らせてもらう」

「聞きましょう。他ならぬ世話好き狼さんの頼み事だしね」

「……アンタ達に調べてほしいことがある。デュノア社についてだ」

「デュノア社……シャルロットさんの所属しているＩＳ関連の会社ね。主に訓練機である『ラファール・リヴァイヴ』を生産している会社……最近ではシャルロットさんの第二形態移行で注目を集めてるらしいけど……」

「余計な前座は終わらせたつもりなんだがな。昨日の事件についてに決まってんだろ？」

ペラペラと口上を重ねる生徒会長を遮る。昨日の事件の原因を知っていたことに驚いたのか、生徒会長は眉を吊り上げた。

「あら……情報が早いのね。なら率直に言うけど、調査自体はすでにやってるわ。最速でね」

「いや、俺が知りたいのはそこじゃない。シャルの親父があのふざけた装備と関係あるのかどうか、ってことだ」

「それこそ愚問というやつよ。社長ともあろう者が自分の会社が開発している商品を理解していない訳がないでしょう？」

「だろうな。いや、質問の仕方が悪かったか。俺が言いたいのは、シャルの親父が持ってる会社が本当に開発したのかってこった」

「……それは、どういうこと？」

「考えてみろよ。今の今まで訓練機の量産なんて地味なことやってた連中が、いきなり常識を覆すような大博打なんてすると思うか？第三者の介入があってもおかしくねぇだろ」

ただの仮説だがな、と付け加えたが、俺自身としてはこの仮説が正しいものだと信じている。以前のシャルからの話を聞いた限り、シャルの親父はなかなか腐った性格をしている。利益を得るため、あくどい連中と手を結ぶことを歯牙にもかけないだろう。

つまり……

「なるほどね……つまり一弥くんは、デュノア社と亡国機業が繋がっていると言いたい訳ね？」

「可能性としてはそれが1番高そうだからな。……ったく、ふざけた連中だぜ。シャルがまた黒くなったらどうすんだ……」

「うん？何か言ったかしら？」

「……何でもない。とにかく、そっちの線も考えた上で調べてみてくれ。どれくらい時間がかかりそうだ？」

「……難しいわね。デュノア社だけならすぐに情報は集まるけど、亡国機業は完全に秘密裏な会社だから……多少の時間は欲しいところね」

多少……か。いや、欲は張るまい。こうして協力してもらってること自体、感謝するべきだろう。

「了解、話は以上だ。眠い中悪かったな。もう二度寝していいぞ？」

「もう眠気なんて覚めちゃったわよ～。それに、ちょうどよく朝ご

はんの時間だしね。一緒にどうかしら？」

「悪いな。魅力的なお誘いだが、まだすることがあるんだ。次の機会にでも誘ってくれ」

一足先に立ち上がり、ひらひらと手を振って生徒会室を出る。目の前の視界に入った窓ガラスに付着していた水気はすでに吹き飛んでいた。その全体を確かめるように、俺は次の疑問の解消のために窓ガラスと平行に歩いていった。

――AM．07：45

次の疑問、すなわちリリアのことだ。

この3日間授業にも出ることなく、ずっと行方をくらましているリリア。俺が最後に会ったのは昼メシの時、一夏達と決別した時からだ。それ以降リリアはその姿を誰にも見せていない。個人間秘匿通信にすら出ないのだ。何かあったと考えるのが当然だろう。

で、探す方法だが……むやみやたらに探しても見つからないのは目に見えている。俺は最後に会った時のリリアの言葉を頼りに動いていた。

（リリアはあの時、双子の見送りに行くみたいなことを言ってたな……なら、本人に聞くのが1番か）

本人に聞くといっても、相手はすでに海外に飛び立っているだろう。直接聞くことは不可能だ。

だが、手がないというワケでもない。俺は目的を果たすために、今度はケータイでとある人物を呼び出した。

『……もしもし？かず兄か？』

「ようラウラ。おはようさん」

『……おはよう。珍しいな、かず兄が電話というのは』

「ま、緊急事態でな。少し頼まれてほしいことがあるんだ」

『なんだ？私に出来ることなら何でもするぞ？それこそ夜の営みだってな』

「意味わかって言ってんのか！？ちげーよ！！つか初めては一夏にとっとけ！」

『いや、しかしだな。せっかくならそこそこの経験を積んでからの方がきっと気持ちよく……』

「あー聞こえねー。なんっにも聞こえねー。聞こえねーったら聞こえねー」

『それにしても嫁はいつになったら私に身体を捧げてくれるのだろうか？かず兄からも言ってやってくれないか？』

「あえて言おう。知るかボケ、と。いやそれより本題に入らせてくれよマジで。なに？なんなの？なんで俺は愚痴をこぼされてんの？」

『そうだな。それはまたの機会ということにしておこう。私達は家族だからな』

「げー……まあいい。本題だ。例の双子とコンタクトをとれるか？」

『双子……ミリアム、エレアムのことか？……理由を聞かせてもらうぞ』

「そうだな。言わなきゃならんこともある」

俺は訝るラウラを説得するために今までの出来事を話した。俺が行方不明の時、リリアに決闘を挑んだこと。その決闘で曲がりなりにも負けたこと。その決闘でリリアの心境に変化があったこと。２人で『レゾナンス』に行ったのは、リリアの一夏へのプレゼント選びを手伝ってやるためだったということ。弾丸を受け取ったのは俺の敗北を撤回するためだったということ。そしてリリアに俺達に対する敵意はもうない、ということ……。

結構簡潔に説明したつもりだが、気づいた時にはそこそこの時間が経ってしまっていた。全部聞き終えたラウラは、

『……死のう』

生きる気力を無くしていた。

「待て！なんでその結論に行き着く！？」

『止めてくれるなかず兄！！私は……私は、かず兄を信じられなかったんだ！！なぜのうのうと生きていられようか、いや生きる意味などなぁい！！』

「反語！？いや、それより電話だけどわかるぞ！！とりあえず首に当てたナイフを降ろせ！！話を聞けぇ！！」

うぇっうぇっという泣き声がケータイから聞こえてくる。うわ……これなんてホラーだし……。

「まあそんなワケで……今、リリアが行方不明だろ？それが少し気になってな……双子なら何か知ってると思ったんだ」

『……』

「……ラウラ？オイ、死んでないよな？」

『……わかった。わかったよかず兄。私、伝令役になる！』

キャラ崩壊どころかキャラ破砕しているラウラ。これはもう修正不可能だな……俺は関係ないはずなのに罪悪感が襲ってくる。

「……まあ、そんなワケです。双子の方も悪い印象は持ってないはずだから、１回聞いてみてください」

『任せろ！こうなれば生涯かけてかず兄のご奉仕を……』

「あーあーあー！！聞こえねー聞こえねー！！……てか待てラウラ。

お前今どこにいる？」

『む？食堂だ』

「……」

食堂＝生徒の朝食の場所

「……いや、シャルがいないだけマシと考えることも出来るぞ。まだ大丈夫だ。大丈夫大丈夫……」

『む？シャルロットならさっき見かけたぞ？呼び戻すか？』

「……ラウラ」

『む、どうしたかず兄。私に出来ることならなんでもするぞ』

「……いや、もういいや……じゃあな」

ブツッと電話を切り、はぁ～……と深いため息をこぼす。明日からの俺のあだ名は間違いなく『ロリコン』だ。もしくは『幼女引率者』

だ。くそう、なにこれ死ねる。

つーかラウラもかなりの変質者的行動だっただろ……美少女は何やっても許されるから腹立つ。

電話が切れて飾り気のない待ち受け画面に戻る。時刻は０９：３０。時間はまだたっぷりと残っていた。

（次は……っと）

再び歩きだした俺の視界の端に２人の顔なじみが横切った。その２人組が鈴とセシリアとすぐにわかったのは、特徴的なピンクと青のＩＳスーツを着ていたからだった。これから訓練でもするんだろう。いやに貫禄がついてきたな、と苦笑する俺の耳に２人の会話が聞こえてきた。

「もう我慢なりませんわこの泥棒猫！！一夏さんとの逢瀬を何度邪魔すれば気が済むんですの！？」

「ふーんだ！！別にあたしが何しようと勝手じゃないの！！うまくいかないからって責任転嫁は見苦しいわよ！？」

「言いましたわね！？その生意気な口、二度と開けなくしてやりますわ！！」

「上等よ！！せいぜい緩みきった足元掬われないように気をつけなさいよね！！」

「「がるるるるるるっ！！」」

「……」

あーれー？一夏いれば普通に強くなってたんじゃねー？こいつらー？

なんとなく、本当になんとなくだが俺の存在意義が否定されたような気がしてならなかった。

ちなみに一夏に対して殺意が湧いたのも追記事項としておこう。

第六十一話　宝箱の中身は（前書き）

遅れてしまって申し訳ありません……なにぶん学祭準備中でして。

家に帰ると力尽きる始末……

第六十一話　宝箱の中身は

――AM. 09：50

次なる疑問、束はどこへ消えたのか。一応俺のケータイに束のアドレスはあるが、電話しても繋がりやしない。束はシスコンということで箒に頼んでかけてもらっても結果は同じ。残る手は……ただ1つ。

「ツレーしまーす」

形だけのあいさつをして職員室の中に入る。そう、千冬さんなら何か知ってると思ったのだ。前は時間が押してたせいで聞きそびれちまったからな。

千冬さんの机の上は書類に埋もれ……る程ではないにせよ、結構の量の紙束が置いてあった。昨日の一件の始末書みたいなものだろう。

「なんだ音無。見ての通り私は忙しい。用があるなら早急に言え」

千冬さんの言うことは事実のようだった。それに俺としても長話するつもりはない。

「束の件ですが」

俺がそう言った途端、書類を漁る手を止めて立ち上がる千冬さん。
その顔は厳しいものへ変化している。

「……ここで話すような内容ではないみたいだな。中庭へ行くぞ」

――AM．10：00

「音無はコーヒーを飲めたな。私の奢りだ。飲め」

「ども。てかいつも通りの呼び方で構わないっすよ」

「馬鹿者。私は仕事中だ。……で、束の件だったな」

中庭に設置されてある適当なベンチに腰を下ろす。外は風が気持ちよかったが、なんとも言えない灰色の空模様だった。雨でも降るんだろうか……いや、そこまで厚さがありそうな雲じゃないかな……。
コーヒーを口に運びながらそんなことを考える。

「……音無？おい、聞いているのか？」

「あ、ええ。聞いてますよ。そうっす。束がどこにいるか……千冬さんは聞いてないっすか？」

「……」

「……千冬さん？」

「……いや、私も知らん」

ぐび、と缶コーヒーを傾ける千冬さん。……そういえば千冬さんはこの戦争に参加するつもりなんだろうか。どうもこの人の考えてることが読めない。

今も意味ありげに間を開けたが、本当のところはどうなのか……

「それより、お前には礼を言わねばな」

「……え？」

「一夏を、あいつらを強くするための行動だった。そのことに遅れながら気づいたのさ。全くお前は正真正銘お節介者だ」

かと思えば、こういう言い回しもしてくる。ニヤリと笑う千冬さんの表情は優しく、慈愛に溢れているように思えた。

……読めない人だ。だが、敵ではないのは確実か。

「……聞きたかったことは以上っす。じゃ、お互い忙しい身ですし、この辺で」

「ああ、そうだな」

コーヒーを飲みきり、すぐそばにあるごみ箱に投げ捨て、腰を上げてさっさと歩きだす。……別に俺は忙しいワケじゃない。頭の中の大抵の疑問は、まあ答えは未だ出てないが調べることが出来て満足だし、残った時間は適当に過ごせばいい。

それでも、忙しくないから急がなくてもいい理由にはならない。

足早に去っていく。吹き付ける風は撫でるように火照った頬を冷ましてくれた。

◇

やれやれ……いつまでたっても素直じゃないな、あいつは。それが個性というものであり、音無一弥たるアイデンティティなのだろうが。

「さて、私も仕事を終えねばな」

昨日の後始末がまだまだ残っている。今日中には終わらせなければ。

コーヒーを飲みきり、缶を捨てて職員室に戻る。休日とあってかそれまでの廊下に生徒の姿は見えなかった。やがて職員室に着き、自分のデスクに腰を下ろした時。山田先生がこれまでにない程焦った様子でやってきた。

「おおおお！おお！おおおおおおおおー！！」

「……山田先生。落ち着きましょう。何があったんです？」

目を回して手をばたばたと上下しているところから焦っていること

はわかるんだが……

「た、たたた！大変なんです織斑先生！！実は……」

「……！？なんだと！？」

山田先生の言葉は、私を驚愕させるに足る非常識さを物語っていた。

◇

ＡＭ．１１：３０

「……することねぇ」

暇、暇、暇。暇が量産されていく。暇を売り出したら一儲けできる自信があるな。一足早くに昼メシを済ませ、することが本格的になくなった俺は自分の部屋に戻ってきていた。残すは生徒会長とラウラの報告を聞くだけ。だがそこそこ時間がかかりそうだ……そう考

えてベッドに寝っ転がってウォークマンをかけた時だった。大事なことを思い出した。

「……って！シャルの誤解解いてねぇぇぇ――――っ！！」

ぎゃあああ！！と悲鳴を上げる。これはひどい……昨日仲直り？したばっかなのにまたシャルが黒くなっちまう……！ヤバいヤバい。何がヤバいって俺の命とか寿命とか。ひいい、ただでさえバイオレンスになってきてるのに……

……そういえば一夏の誕生日の時に言ってたな。確か……俺の黒は眩しすぎた、、だったか。ずいぶんと哲学的な言い方をするもんだ。苦笑する。眩しいからなんだっていうんだ。俺なんか、もっと前からシャルを眩しく感じていたんだ。だから強さを求めた。隣に立つと決めた。それがお互いに思っていたことで、すれ違って、曲がりくねって……少し道を踏み外しただけなんだろう。近くにいながら遠くに感じて、背中を守ったがために守るべき存在が見えなくなっただけだったんだ。

こんな些細なことでこの関係を終わらせるつもりはない。微塵もない。それ程アイツの存在はデカいんだ。笑うなら笑え。蔑むなら蔑むといい。

シャル以上のいい女など、俺の中には存在しない。

その手を離さないためにも、まずは仲直りをしなきゃな……あと、シャルのネガティブな部分も取り除けたらいいんだが……

俺が傷ついたせいでシャルまで傷ついた。心に傷を負い、治すことを放棄して心を閉ざした。なら、まずは心を開くことからだが……

「……あ？なんだ？俺はいつからカウンセラーになったんだ……？」

……気にしないことにしよう。それよりもどうするか……デートでも誘おうか？カチカチとウォークマンを操作しながら考えていると、その小さな画面のメインメニューの端っこに『録音』という文字が目に入った。

「……これだっ！！」

ＰＭ．１２：００

「えっと、シャルか？俺だ。一弥だ。……うわ、思ったより恥ずいなコレ……」

そう、俺が考えた気持ちを伝える方法、ボイスレターだ。閃いた時は名案だ！と思ったが……やっちまった感が否めないぜ……

「えっと……」

うわ、何言えばいいんだコレ。とりあえず落ち着け、まずは落ち着くために……

「よし、一発芸をするぞ。『回れ右をしなければいけなかったのに回れ左をしちゃって照れ隠しに織田裕二のモノマネをする一夏』」

「……あっ、え、えっと……な、なァにやってんだよォ！……事件は右から起きてるんじゃない！……左から起きてるんだァァァ！！」

……

ベシッ！！

「あああああ――――っ！！投げちまったぁぁぁ――――っ！！」

こ、壊れてないよな？……よしよし、まだ動いてるな。まだ続けられるぜ。……むしろ壊れてほしかった。つかなんで一発芸なんてしたんだ俺は……

「よ、よし。まあ前座はこれくらいにしとこう。本題はこっからだ」

本題本題……

「……（なんだっけ）……あ、そうだ。シャルのことだ。うん。忘れてないからな」

そうだ。ちゃんとやろう。シャルを元気づけるためだ！……ん？ならもっと砕けた感じにするべきか？……まあ堅苦しいのは無しの方向でいこう。

「んーと、シャルは一夏の誕じょ……悪誕祭の時言ってたよな。俺の黒は眩しい、みたいなこと。そんなことねぇぞ。だいたい考えてみろ。黒が眩しいワケねぇだろ。それでも眩しいって感じるなら……アレだ。シャルが輝いてるからじゃねぇのか？」

「月ってさ、太陽の光を反射して光ってんだぞ？それで眩しいってお前……自画自賛じゃねぇかっ！？やべぇ！レベル高ぇなオイ！！」

「……コホン。まあそんなワケだ。お前は鏡見てたってことだ。光ってる自分を鏡で見て眩しく感じたってことだ。……うん、うまいこと言った。まあだから、早い話が気にすんなってことだ」

「それにさ、俺を守れなかったからって落ち込むことねぇぞ。そん

な四六時中一緒にいるワケにもいかねぇだろ？……あ、いや、シャルがいいならずっといるぜ！また一緒に風呂入るか！」

「……アレだな。ツッコミがいないと結構キツいわコレ。ツッコミがいてもスレスレか……。……で、なんだっけ？えーっと……あ、そうそう。俺が傷ついても気にすんなってことだな。いやまあ、心配かけるようなことは控えるけどさ……俺だってシャルが傷ついたらマジで怒り狂う自信あるし。多分その時は千冬さんだって倒せるわ。マジで。そんでシャルと他のヤツらにに止められたりしてな」

「ＩＳに必要なのは、心の強さだ。お前らは強くなったよ。シャルは特にな。俺がいなくても充分やってけるさ。リアリストの俺が言うんだから間違いねぇよ」

「足場の氷が壊れたからなんだ？だったら水被ったついでに水浴びでもしてけ！風邪引いたらそん時考えろ！看病ぐれぇ俺がしてやらぁ！むしろさせてください！」

「……話が逸れたな。逸れたどころじゃねぇけど。まあいいや。んでさ、まあー俺が言いたいのはさ。……シャル、お前、バカだろ？」

「……コレ言われると『は？』って思うよな！？思っただろ！？一夏に言われた時『ふぇ？』って思っちま……あ、な、無しだ！今のナシ！ノーカン！つかさっきの一発芸もノーカンだ！」

「……ふう。んで、シャルは自分が許されないって思ってんだろ？うん、バカだな。バカバカバーカ。でも可愛いぜ。……じゃなくて！つまり、お前の悩みなんて俺から見たら所詮そんなもんなんだよ。だからくだらねーことに悩むのは……いや、違うか？」

「もうさ、許してやれよ。自分のこと。俺がフラフラするのはいつものことだろ？それにシャルが悪いなんて思ってねぇよ。守るってのは……こう……ああ、そうだ」

「居場所だよ。居場所を守るんだ。俺が安心して帰って来れるように、居場所を守ってほしい。たまには肩を並べて戦うのもいいけどな」

「ま、そういうこった。罪意識で守るんじゃねぇんだぞ？ちゃんとシャル自身がやりたいって思ってくれれば、俺はもうそれ以上はいらねぇからさ」

「そういうワケだ。俺はシャルを守る。シャルはそんな俺の居場所を守る。どうだ？いいコンビだろ？まさしく夫婦じゃねぇか。ははっ、照れるぜ」

「最後になるが……これからもよろしく。あ、そうだ。じゃあ1曲歌ってやるよ。だから元気出すんだぞ？」

……

「……おし。じゃあまたな、相棒」

PM. 14:00

ボイスレターを作り終えた俺はすぐにシャルの部屋を訪れた。ボイスレターを渡すためではない。デートに誘うためだ。デートが終わった時に渡すつもりなのでウォークマンは部屋に置きっぱなしにしてある。あんなもん聞かれた後に顔なんか合わせられるか。

バシュ、と開く近代的なフォルムの自動ドア。開いた先には私服のシャルがいた。お？黒いオーラが感じないな。

「一弥？どうしたのかな？」

「ああ、せっかくの休みだ。デートしないか？」

こんな時に不謹慎かもしれないけど……

「ふふっ、いいよ。待っててね、少しお化粧するから」

にもかかわらず、意外とすんなりオッケーが出てこっそりガッツポーズをする。シャルのヤツ、結構機嫌がいいみたいだな。

やがてシャルの身支度が済み、外に出る。相変わらずの曇り空だったが、別に気になることはなかった。

「どこ行く？やっぱ『レゾナンス』か？」

「ううん、せっかくだから……一弥の生まれた町が見たいな。……ダメ、かな？」

「俺の生まれた町ぃ？そりゃ、別に構わねぇけどよ……なんだってまたそんな場所に……」

別に、俺の町は観光名所ってワケじゃないんだが……あると言ったら小洒落た住宅街くらいだ。

「うん……見てみたいなぁ……って、思ってさ。そうだ！せっかくなんだから自転車に乗ろうよ！２人乗りって夢だったんだぁ」

言って、シャルが用務室へ走りだす。しばらく待つと、校門へ両手

でハンドルを握って自転車を押すシャルが戻ってきた。致し方なくその自転車に乗り、ペダルに足を掛けるとシャルが後ろから抱き着いてくる。

そこまで言うなら仕方ない……が、

「ったく……なら、今度はシャルの町を案内してもらうから……なっ！」

ガッとペダルに足を掛けて一気に力を入れる。２人分の重量を乗せて、軽快に風を切りながら……俺とシャルを乗せた自転車は走りだした。

俺の住んでいた町へ。

俺の過去が眠る町へ――――。

第六十二話　透き通る道（前書き）

祝！１００万ＰＶオーバー！ついにここまで来ましたぁ！

１００万ですよ１００万。ミリオンですよミリオン！すごい！すげー！ふはははは！！テンションがおかしなことに！うきゃー！！

それもこれも皆さん、読者様のおかげですね！ありがとうございます！ありがとうございます！大事だから2回言ったよ！

これからもよろしくお願いします！月並みな言葉でごめんなさいでした！

第六十二話　透き通る道

シャーッ、という音を耳で感じながら、地面を滑るように下り坂を自転車で移動する。風がほんの少し冷たい気もしたが、後ろに座るシャルの体温のおかげでとても心地いい。

「さすがＩＳ学園。自転車まで一級品だな」

「え？一弥、何か言った？」

「自転車ー。あ、すげぇ。これ電動だわ。帰りはこっち試すか」

下り坂でスピードが出ているせいか、どうも聞こえにくいみたいだ。若干ブレーキを効かせよう。

空は相変わらずの曇天模様だった。しかし、やっぱしそこまで厚い雲じゃない。雨の心配はないだろうな。

「どのくらいかかるのかな？」

「5分弱ってとこだなー。それより、夢の2人乗りの乗り心地はどうよ？」

「風が気持ちいいよ。けど……やっぱりちょっと怖いかな……。あんまりスピード出さないでね……？」

「まったく同意見だ」

おそらく夏休みに行った遊園地でのジェットコースターがトラウマになっているんだろう。その気持ちはよくわかる。

「やっぱ人の嫌がることはしちゃだめだよな」

トラウマをえぐるなんてもってのほかだ。大体、2人乗りでスピードを出してたらシャレにならない事故にも繋がる。そんなバカなことをする程、俺は落ちぶれちゃいない。

「本音は？」

「手ならまだしも腹部はヤバいと本能が呼びかけている」

「……」

「あがぁっ！！ちょ、肋骨が……！聞こえちゃいけない音が肋骨から……！！」

違う意味で腹筋が崩壊した（肋骨に押し潰された的な意味で）。

☆　★　☆

一夏や箒、弾の住む町と、俺の住む町とは隣町だ。決して遠いワケではない。現に小、中学校が同じだったのだから。

一夏達の町と俺の町の違うところを挙げるなら、俺の町の方が若干都会的というところだろう。というのも、一夏の町には箒の実家である篠ノ之神社があるからだ。その規模は知っての通り、祭が開ける程のもの。その影響も相まってその地域だけ少し田舎な感じなのだ。今はどうか知らないが、以前に篠ノ之神社は剣道教室を開いていた。だが俺は隣町ということで（決して面倒だったワケではない）剣道を習うことはなく、一夏、箒、千冬さんの３人しかいなかったが……

「こんなことなら、剣道やっとけばよかったかもな……」

「うん？剣道？」

「や、こっちの話。それよりも俺の町はどうよ」

「うん、良く言えば……家がたくさんあるね」

家がないと町って言わないだろ。

「悪く言えば？」

「……家しかないね」

「だろ」

シャルの言う通り、俺の町はリアル家だけだ。商店街やショッピングモールのような気の利く建物は一切ない。それでも道路なんかは整備されているんだが。

大体、俺の過去が眠る町なんて大層なことを言っても、こんな家し

かない場所にどうやって黒歴史を作れってんだ。せいぜい1個が限界だ。

だが、そのたった1個の不幸が俺の全てを狂わせたのも確か……か。

「じゃ、帰るか」

「早いよ……一弥の家って近い？見てみたいなぁ」

「……なんか、今日のシャル、わがままだ」

「えへへ……今日だけは、ね？」

「……ちぇ」

正直に言うと、俺も自分の家がどうなっているのか気になっていた。夏休みに藍が五反田一家を引き連れて大掃除をしたらしいが……一度気になりだしたら止まらない。俺は少しだけ自転車のスピードを上げた。

やがて俺の家……実家、生家に到着する。鍵は持っているのは面倒だという理由でポストに入っているはずだ。かちゃり、と鍵を開け、シャルと共に中に入る。

「……綺麗にしてあるね」

「……ああ」

殺風景だが、ちゃんと綺麗にしてある。家を空けた時と変わらない。

俺の家は大してデカいワケじゃない。部屋だって妹と共有していたくらいだ。

「ここで……一弥が生まれたんだね」

「ああ。懐かしいな」

懐かしい。俺の心に現れた感情を言葉で表現するなら、その言葉がピッタリなのだろう。懐かしい風景。懐かしい香り。たった半年間離れていただけなのに、どうしてこんなに懐かしく感じるのだろう。

そのまま2人で数少ない部屋を順に見ていく。居間、リビング、俺と藍の部屋。大体これくらいだ。

「一弥、この部屋は？」

「ああ、そこは……」

――父さんと母さんの部屋だ。シャルが開けた部屋のドアの隙間から中を覗くと、そのあまりの代わり映えの無さにタイムスリップをした感覚に陥る。

昔の俺は誰かに頼ることを拒んでいた。きっとそのせいだろう。両親の遺影も、部屋も、墓にだって俺は寄り付かなかった。視界に映そうともしなかった。その行為自体、死んだ両親から励ましを受けている気がしたから。

死者は所詮死人。それが昔の俺の考えだった。死人に頼っていてはこの世界を生き抜けない。そもそも、死人に頼るなんてまっぴらごめんだ、と。

でも、それは間違いだ。

そして、俺は間違いに気づけた。

「わっ！か、一弥!?どこ行くの!?」

隣の抗議を聞き流し、俺はシャルの手を握って荒々しく家を出た。近くに留めておいた自転車の後ろの荷台にシャルを乗せ、自転車にまたがってペダルを踏み付ける。

立ち乗りでペダルを踏む力を最大限に使う。冗談抜きで2人乗りでスピードを出すのは危険だ。

――だけど。

「しっかり掴まってろよっ」

どうしても、どうしても。一刻も早く行かなきゃいけない気がしたんだ。

☆　★　☆

「ここって……」

カシャン、と自転車を留める。ハイスピードで向かった先は、デートにはどう頑張っても似つかわしくない場所。早い話が、墓地。

父さんと母さんが眠る場所である。

「実は、1回も来たことはなかったんだ」

「……」

驚いているのか呆れているのか、黙り込むシャルの手を引いて墓石に刻まれた苗字を1つ1つ確認していく。場所がわからないなら全部見て回ればいいだけだ。

「反抗期ってヤツだよ。誰でも通る道だ。大して変わったことじゃない。ただ、唯一違うところがあったとすれば……“反抗する相手がいなかった”ってことか」

俺の独白は続く。

「だから、俺の“反抗”の相手は常に自分だった。自分を追い詰めて、傷付けるように仕向けて、そのために無駄な知恵を絞った。一夏達のおかげで自分を追い詰めることはなくなったものの、頼ることはなかった。それは情けないことだと考えてたからだ」

でも、それは間違いだった。

「気づかせてくれたのはシャル、お前だ」

「……僕？」

「ああ。それに、きっかけをくれたのもお前だ」

俺は教わった。人1人では何もできないと。頼ることは勇気でもあるということだと。

そして、この行為は頼ることではないと。たった今気づいた。

「……見つけた」

『音無』と刻まれた墓石。他と比べてもほとんど大差ない。墓地という場所に溶け込んでいる。

数年ぶりに顔を見せた俺に、両親はどう思っているだろうか。それとも、何も思っていないのかもしれない。死人なんてそんなもんだ。脳の持たない骨が思考するはずがない。

それでもいいじゃないか。意識などなくても、両親の存在は間違いなくここにある。

ここにいるのだから。

「行こう、シャル。そろそろ帰るぞ」

「……もういいの？だって……」

「いいんだ」

久しぶりの再会。積もる話もある。報告すべき話もある。自慢したい話もある。でも、今日はこれだけ。

だってそうじゃないか。

そうすれば――――またここに来る口実ができる。

ツンデレの俺には、理由がないと動けないからな。

踵を返し、今度はゆっくりと歩く。シャルはまだ納得いかない顔だったが、俺がいいと言って気にするのをやめたんだろう、繋いだ手を握り返して俺の隣に並んだ。

☆　★　☆

「ねえ、一弥」

「ん？」

学園への帰り道、後ろに座るシャルに声をかけられた。

外は日が暮れ、夕焼けが青空の一部を赤く塗り替えている。その景色は一抹の寂しさを含んでいたが、それゆえの美しさを孕んでいる。赤と青のグラデーション。互いが互いに溶け込むような彩りが生まれ、見る者を魅了していた。

「一弥は、一弥のお父さんとお母さんにずっと会わなかったことをどう思ってる？罪意識とかあるかな？」

「んー……まあ、ないっつったら嘘になるけど。死人相手にいつまでも囚われてたら先に進めねぇだろ」

相手に意識がないのなら、自分の解釈で相手をするだけだ。あの墓石に両親の意識はない。でも存在は確かにある。

それが俺の解釈だ。

「そっか。じゃあ、相手がまだ生きてたらどうかな？」

「……生きてたら？」

「そう。相手は生きてて、自分の犯した罪を許してくれてるんだ。どう？罪意識はある？」

「……相手は許してくれてんだろ？だったらもうその話は終わりでいいじゃねぇか」

「罪意識はないんだね？」

「……まあ、な」

そっか、と言ってそれっきり会話がなくなる。俺はシャルの言う意味を考えていた。

相手が許しているのなら、そのことを引きずり続けるのは相手にとって失礼だ。相手は対等を望んでいるのだから、むしろ罪意識があるのなら特に普通に接すればいいだろう。

……シャルはどう思っているのだろうか。こうしてまた日常に戻れ

たのだから、罪意識は消えたんじゃないのか。

（……よくわかんね）

やがて学園に到着し、シャルの指示で自転車を返す。デートっぽくはなかったけど……次はちゃんと考えてから誘うことにしよう。

「でもね、一弥」

寮に向かって歩いている途中、再びシャルに俺の名前を呼ばれる。前を歩くシャルは俺の方へ振り返って、

「相手が罪を許す許さないに関わらず。自分に罪意識があるないに関わらず――」

今までの晴れ渡るかのような笑顔を、

「自分が罪を犯したことには変わりないんだよ」

一瞬にして、瓦解させた。

冷たい、鋭利な双眸。その視線が射抜いているのは……紛れもなく俺だ。

「……ッ！？」

瞬間、俺は金縛りにでもあったかのような感覚に陥る。身動きが取れない……いや、“身動きの取り方を思い出せない”。完全に不意打ちを受けていた。

時間すら硬直したようなままの状態が続く。シャルの、俺とは異なる冷たさを秘めた瞳に目が離せない。

そんな膠着状態を破ったのは……

「音無、デュノア！ここにいたか。探したぞ！！」

珍しく慌てた様子の千冬さんだった。

今になって思う。俺が選んできた選択は間違っていたのか。間違ってはいなくとも、決して正解ではないだろう。

――――どうして、俺は気づいてやれなかったのか。

「緊急事態だ！！急げ、間に合わなくなるぞ！！」

「何があったんですか？織斑先生」

「詳細は後で説明する！！会議室……いや、生徒会室に集まれ！急がないと……」

抑揚のない声がシャルの口から流れる。相当焦っているのか、シャルの後ろにいる千冬さんは気づかずに早口にまくし立てている。

俺は、シャルから目が離せなかった。

「――――日本が滅ぶぞ！！」

壮絶、剣呑、獰猛。それらを含む笑みが、シャルの顔を歪ませていた。

第六十二話　透き通る道（後書き）

――最終章、突入。

第六十三話　Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ！！（前書き）

お待たせしました！！

第六十三話　Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ！！

―――４５０。

希代の天才、篠ノ之束が創造したＩＳ。そして、その本人しか量産できない、まさしくブラックボックス状態であるコア。そのコアを持つＩＳ……俗に言う専用機は、世界で４６７機。本人にそれ以上のコアを作る意思がないため、この数は例外を除けば絶対だ。俺が破壊したものや束が特別に作り出したコアもあるが、正式にはこの数が一般に広く知れ渡っていることだろう。

コアを搭載したＩＳ、専用機。そのスペックはコアを持たないＩＳ、訓練機を遥かに凌駕する。機動性、拡張領域、シンクロ率、稼動率、解像度、センサー精度、出力限界値、レーダーレベル……性能と名がつくものならあらゆる点で訓練機と大差をつけている。

その力量は現代科学の頂点に立ち、軍事バランスと世界のバランスに激震を与えた。それだけＩＳという兵器は兵器の鑑として完全であり、平等の象徴として不完全だった。結果、ＩＳを操れる者こそ正義。操れない男は悪、という大前提が人々の間で流通した。

すなわち、それ程の軍事兵器。

粒子の実体化を顕現させた、まさに未来の結晶。

――４５０機である。

現代科学の頂点に立つ兵器の最上位、専用機。

その専用機４５０機が――――――一斉に暴走した。

「――――――は？」

「現在、アルゼンチン北部、上空５０００メートル地点で停滞しているものの、暴走したＩＳは全てこの場所に集結している。推測によれば、おそらく暴走したＩＳの４５０機が集結次第……動きを見せるだろう」

その場にいる全員、口を開くことはなかった。そのあまりの非現実ぶりに、思考がついていかないのだろう。かくいう俺だってそうだ。

「て……偵察は出したのですか？いや、そもそもなぜ暴走など！？かつての私、ＶＴ（バルキリー・トレース）システムや強制的形態移行などならまだ納得できますが、４５０機が一斉になど……！！」

我に返ったラウラが質問を重ねる。さすが軍人というべきか、多少なりともこの非常事態についていけているみたいだ。

「偵察は行った。アメリカがハワイ沖から訓練機を４機」

たんたんと端末を指で叩く千冬さん。ああ、イライラしてるんだなぁ、とぼんやりした頭で考えていた。

「“それら全てが撃墜された”。今度はさらに大量に送り込んだが、“結果は先と同じだった”」

な……、とラウラが再び驚愕で閉口する。俺を含んだ他の連中は、まともに動くことすらままならない。

１人を除いて。

「織斑先生、どうするんですか？」

シャル。その表情は先程とは打って変わり、哀しいものだった。

「……暴走したＩＳはすべからく日本を経由することなく集結場所へ向かっている。このことから……日本を襲撃する可能性が非常に高い。我々の目的は暴走したＩＳの迎撃、殲滅だ」

「ま……待て待て待て！！千冬さん、アンタ自分が何言ってるかわかってんのか！？

――――専用機４５０機だぞ！？」

かつて、『白騎士事件』というＩＳが世間に知れ渡るきっかけとなった事件が起きた。

日本を攻撃可能な各国のミサイル２３４１発。それらが一斉にハッキングされ、制御不能に陥り、発射された。

もちろん、そんな数のミサイルが日本に弾雨のごとく降り注げば、日本という国は世界地図から姿を消していたかもしれない。それ程の大事件だった。

その未曾有の危機を救ったのが、後に『白騎士』と呼ばれる兵器――ＩＳだった。白に統一されたその機体は音速で飛翔し、ミサイルの半数をたたっ斬り、残り半数を荷電粒子砲で殲滅させた。

そんなバケモノじみた兵器が、“４５０機”である。

どれ程の脅威になるかなど、計り知れるはずもない。

「……わかっている。わかっているからこそ、今こうして対策を打っているんだ」

「対策！？なるほど、そりゃあ常識だ！緊急事態に対策を講じるのは当然だ！！――――だったら聞かせてくれよ！！この最低最悪な状況！！滅亡の危機っ！！一発逆転できる奇策ってモンをなぁっ！？」

「お、落ち着け一弥！千冬姉を責めても何もならないだろ！？」

「……ッ！！」

「……このままいけば明日の早朝に専用機の軍勢は日本に上陸するだろう。朝日の昇る夜明け……我々はステルスモードにて奇襲、鎮圧する」

「勝算はあるのですか？」

「その勝算を限界まで引き上げるため、戦場はＩＳ学園付近の市街地で行う予定だ。市民を退避させるため、教職員と学園の生徒に避難活動をさせる。お前達も例外ではないが、仮眠と機体の調整の時間は必ず取らせる」

「し……しかし、ＩＳ学園といえど、この付近一帯の民間人を収容できる程のスペースはありませんわ。必ずあぶれる方が……」

「それに関しては問題ない」

一拍置いて、千冬さんが話を続ける。

生徒会室内は驚くほど静かで、なぜか閑散とした雰囲気を漂わせていた。豪奢な家具が、美しい植物が、空間そのものが……まるで、色を無くしたかのような寂しさを放っている。そんな中、千冬さんの低音の声だけが色褪せた部屋に響いていた。

「ＩＳ学園、地下特別区画。そこを開放する。それなら一般人を収容し、なんとか戦闘フィールドを確保できるはずだ」

その言葉を聞いた瞬間、俺は少しだけ落ち着きを取り戻した。

地下特別区画。そんなもの聞いたことがない。ならば、それは秘密裏なもので、極秘事項なのだろう。それを民間人の前に晒すことになろうとも、千冬さんやＩＳ学園関係者は民間人の命を守るつもりなんだ。

「……へぇ、好奇心のくすぐられるワードですが、今は置いときますか。……作戦決行時刻は？」

「私が個人間秘匿通信で呼び掛ける。それまで民間人の誘導だ。召集がかかった後に機体の調整、仮眠とする。異論はあるか？」

「……行くぞ、お前ら」

シャルを抜いて固まったままの全員に声をかけ、生徒会室のドアに手をかける。木製のドアは軋んだ音を立て、内側に開いた。

「い、行くって……どこに？」

「さっき千冬さんが言ってたろ。市民の避難活動だ。自分のフィールドくらい自分で作らなくてどうする。悪いが俺はもうおんぶだっこするつもりはないからな」

俺の挑発に、全員がむっとした表情になる。ここから先の戦いは、まさしく死闘となるだろう。

覚悟ができたならついて来い。
侮辱と感じたならついて来い。
プライドが傷つけられたならついて来い。

これは戦争だ。

（……生き残る。絶対……絶対にだ……！）

専用機持ち8人。俺達は歩きだした。
長きに渡る、戦争の終結へ。

◇

（……行ったか）

生徒会室から専用機持ち全員が出払い、千冬1人が部屋に残される。
ギシッ……とイスに座り、未だに情報を表示している端末に目を向ける。数多くの文字の羅列の前に視界に入ったのは『Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ！！』の赤いアルファベットだった。

「やってくれる……世界でも掌握した気分か、貴様は」

怒りに目を燃え上がらせ、語りかける。誰に向かっての言葉、という問いに答えるならば……やはり、このような事態を招いた者に対して、という解になるだろう。

握る手に力を加える。手にした端末はミシミシと軋んだ音を立て、すぐに砕け散った。砕かれた哀れな端末の破片が千冬のすらりとした手の平を切り裂き、流血が滴る。

赤。

溢れ出す手の出血を鬱陶しいように振り払い、千冬は静かに立ち上がった。

「舐められたものだ……」

――たとえ専用機の軍勢が押し寄せようとも。

――たとえ我が身が引き裂かれようとも。

あいつらだけは、必ず守り抜く。

「私を止められるなどという甘い考え……今すぐ抹消してやる」

千冬が出ていき、生徒会室が無人と化す。向かう先は、地下深く。

地獄と見紛う程、暗く、深い……闇の底である。

◇

街は混乱の一途を辿っていた。

俺達専用機持ち、そしてＩＳ学園生徒は必死に避難誘導のためにあちこちを駆け回った。戸惑う市民から灰色の雲がかかる空、町並み、そしてまた市民へと視界が切り替わるように移ろう。それに従って疲労も徐々に積み重なり、頭にぼんやりとした霧がかかる。

記憶が曖昧になる感覚の中、唯一感じたことがそれだった。たった数十分前の、シャルと一緒に町を回った時の穏やかさは欠片もない。逃げ惑い、怯え果て、中には発狂する者さえいた。

今、この状況を『嘘だ』と言えたらどれだけ楽だろう。こんな現実味のない現実を、信じられなかったらどれだけいいだろう。

だが、もう目を背けることは許されない。信じるしかない。それしか道は残されていない。なぜなら、既に前例があるからだ。

『白騎士事件』。ＩＳが世に知れ渡る以前に、その奇っ怪な事件は、日本を、世界を破滅に追い込んだ。２３４１発のミサイル。それら全てを叩き落とす前……そのあまりの急展開に、人類は理解がついていくことができなかった。その結果、日本人達は避難することを

拒んだ。

――――これは夢だ、と。

――――タチの悪い悪夢だ、と。

現実から目を逸らし、迫り来る脅威に何の抵抗も見せなかった。２３４１発のミサイルを、笑い飛ばしていた。

「モノレールは満員だ!!すぐに発車させろ!!子供、老人、女性を優先的とする!!到着したらその場の誘導役から指示を仰げ!!収容スペースについては問題ない!!」

だが、それが許されるのは初めの１回のみ。

今回に至って……目を逸らすことは許されなかった。

『一弥!商店街方面はどうだ!?』

『まだ５割近く残ってる。居住区はどうなんだ!?』

『わたくしと他の生徒達で誘導してますわ!作戦決行までにはなんとか!!』

辺り一帯が闇に沈む中、ひたすら町を駆け巡り、暴動が起これば鎮圧し、泣き叫ぶ者を必死に勇気付ける。

疲労で身体が悲鳴を上げ、霧が立ち込めるように意識が薄れる中……それでも闇雲に人々の道しるべとなる。

全ては、生き残るため。

儚い命を、強いものだと証明させるため。

愛する者を救うため。

ただそれだけを頭に、俺は仮眠が許されるその時まで暗雲が月を覆う闇の空を飛び回っていた。

◇

専用機持ちに召集がかかった時、彼女は人の気配が消えた街中で静止していた。

黄金に輝くＩＳ。ふわふわと浮遊しながら、彼女は過去に浸っていた。さながら水の上で浮き上がるように。

「ああ、楽しかったなあ」

凛とした声が小さく空気を伝う。しかし、辺りに人がいないせいで音の波は誰からも聞き取られずに霧散していく。

見上げる空は、一弥の飛翔したものと同じ空だった。それなのに、この悪意に満ちた空は2人を囲っているのに、隣には一弥がいない。矛盾だと、彼女はクスクスと微笑んだ。

「……本当に、夢みたいだった……」

その時。暗黒の空と同調するかのように、背後の黒い羽のようなオブジェクトが揺らめいた。

キン、キン、と金属同士を打ち付けるような音が聴こえたと思った時……赤い粒子が彼女の利き腕である右腕を取り込んだ。

彼女の自分なりに決めた、タイムリミットである。

「――――さよなら」

仰向けの体勢を翻し、彼女は急ぐことなく飛び立った。

◇

「一弥くんあなた……大丈夫なの？今にも死にそうな顔してるわよ？」

「至っていつものことでございます……と」

ＩＳ学園に降り立った俺は途中で鉢合わせした生徒会長と一緒に生徒会室を目指していた。さすがは国家代表というべきか、まだまだ余裕の表情だ。

「……」

しかし、それを機に黙り込んでしまう。やっぱり疲労が溜まっているのだろうか……。思考するのも億劫になった俺の頭がぼんやりとそれだけのことを認知する。

今はとにかく休みたい。じゃないと暴走ＩＳ４５０機相手に上手く立ち回れないだろう。あくびを噛み殺し、会話のないまま生徒会室に辿り着いた。部屋の中に入るなりイスに座り込み、ようやく一息つく。

「……かず兄、大丈夫か？」

「おぉ……正直キチーが、仮眠取ればなんとかなる……気もする」

「果てしなく不安ね……」

他愛のない話をする中、俺は目を閉じて背もたれに沈み込んだ。

妹……藍は避難できただろうか。野々宮、弾、蘭……みんなちゃんとＩＳ学園へ辿り着けただろうか……それだけが気掛かりだ。

自分は守り切れるのか……？この国を……この世界を……。俺はまだまだ強いとは言えない未熟者なのに……。

「では、作戦の再確認をする……その前に確認したいことがある」

心に不安が立ち込め始めた時、千冬さんが話を始める。俺はぼんやりと千冬さんの言葉に耳を傾け、

「召集から３０分……知っている者は教えてくれ。

――――デュノアが、未だ戻っていないのだ」

その言葉を聴いた瞬間、今までの疲労を吹き飛ばすかのように身体を弾き――――俺は全速力で駆け出した。

第六十四話　思い出の地

バンッ！殴り付けるように荒々しく生徒会室のドアをこじ開け、蛍光灯の光が照らす明るい部屋から暗闇の立ち込める廊下へ飛び出す。

午前3時。真夜中と呼べる時間帯に濃密な闇を伴って存在する廊下を、明るいところから暗いところに移ったために確立しない視界の中をそれでも疾駆する。後ろから俺の名前を呼ぶ声と制止する声が締め切られた空間に遠く響くが、それすらも俺は聞かぬフリを突き通して走る足に力を込めた。風が冴えた冷気を乗せて俺の肌を突き刺すように包み込む。疲労と睡魔を振り払うにはちょうどよかった。

「……らぁっ！！」

果てしなく長く感じた廊下の終わり、外へと続く扉を文字通り蹴破ってそのまま走り抜ける。

激しい焦燥に駆られた俺は夜の闇のせいで視界の遮られた外界に盛大に舌打ちするも、記憶を頼りに校門へ向かう。その途中でようやくシャルの居場所がわからないという考えに行き着き、再び舌打ちしてＩＳを起動する……が、

（クソ、センサーに引っ掛からねぇだと！？プラチャネにも出ねぇ

たぁどういう了見だオイ！！）

思うように捜索が進まず、憂さを晴らすように壁に拳を叩き付ける。ゴキッ、という嫌な音が聴こえて拳に鈍い痛みが走るが、気にも留めずに今度は私服のままの服装、ジーパンのポケットからケータイを取り出してシャルの番号を呼び出す。

「はぁっ……はぁっ……！」

全力疾走で息が切れる。こんな状況でも体力の限界を通告する自分の身体が憎い。

プルルルル、という電話の音が幾度となく、心なしかスローテンポで耳に伝わる。何度も何度もその単調なコール音が続き、そろそろ聞き飽きてきた時だった。

『……一弥』

コール音が途切れ、シャルの気落ちした声が聞こえた。

「シャルっ！何してんだ！もう呼び出しから1時間は経ってんだぞ！！今どこにいる！？」

『……それは言えないよ。だって、教えたら一弥はこっちに来ちゃうでしょ？』

「……ッ！」

シャルは、俺がシャルの下へ行くことを……いや、俺と会うことを拒んでいる。それはつまり……

「……戻ってこねぇつもりかよ……ッ！！」

『……ごめんね一弥。君は、罪深い僕に背中を預けてくれた、大切な……本当に大切な人だったのに……結局、僕の力不足で君を2回も傷付けた。本当に……ごめん』

「……うるせぇっ！なにつまらねぇことグチグチ言ってんだっ！お前のせいじゃねぇだろっ！」

『ううん、僕のせいなんだよ。僕はもう、許されることはない』

まだそんなこと言ってやがんのかコイツは！？……いや、おそらくはこれこそが今のシャルを暗い思考に貶める理由のはずだ。なら……

「……そうかよ。いいぜわかった。だったら――俺が許してやるっ！被害者である俺が許す！だから……帰ってこい！シャルっ！！」

その理由を解決さえすれば、シャルは帰ってくる。俺はシャルの心に届くように、精一杯語りかける。喉が水分を失っても、俺はシャルの名を叫んだ。

『……わかったよ、一弥』

「シャル――」

『君と僕との考え方には、決定的なまでの相違があることがよくわかった。そして、僕にとって君の見解がものすごく腹立たしいこともね』

ぞわり、と何かがうごめく気配がした。

俺の呼び掛けに、シャルは突き放すように怒りと冷たさを含んだ返答をする。その再びの豹変した声音と態度に俺は思わず絶句し、足が止まった。

「な……っ、どういう、意味だ……？」

干上がり、しゃがれた声をなんとか振り絞る。冷や汗が全身の毛穴

から吹き出るような、不快な感覚。俺のその様子を見通すように、

『さよなら、一弥。せめてこの災厄で君だけは生き残ってほしい』

彼女は冷たい声音で別れを告げ、電話は切れた。

◇

「待て音無！まだ帰ってこないと決まった訳ではないぞっ！！」

千冬の制止の声が届くことはなく、一弥の荒々しい足音はどんどん離れていく。だが、駆け出したい衝動に駆られたのは彼だけではない。その場にいた一夏、箒、セシリア、鈴、ラウラもまた、遅れながらも一弥の後を追うようにドアへ殺到する。

それに反応した千冬の一喝が、生徒会室に轟いた。

「――――そこを動くなァッ！！！！」

ビリビリと千冬の咆哮が空気を震撼させ、さながら衝撃波のごとく窓を、蛍光灯を、そしてこの場にいる全員の鼓膜を激しく揺さぶった。その一喝に機先を制された、ドアへ向かった全員の動きが思わず止まる。

「みんな落ち着きなさい！織斑先生の言ったように、まだ帰ってこないと決まった訳じゃないわ！」

「で、でも――」

「これ以上戦力を削っては暴走ＩＳ共を鎮圧できる見込みは万に一つもなくなる。デュノアのことは音無に任せ、私達は予定通り仮眠時間とする。異論があるなら言ってみろ」

威圧的な声が、重く沈み込むように一夏達の腹の底へ響く。どう聞いても言葉の裏腹の意味を持っているようにしか聞き取れない。その千冬の纏う雰囲気を目にして、一夏達は口をつぐむことを余儀なくされた。

――否、

「……お言葉ですが、織斑先生。今の状況で一弥一人に行かせるには少々危険が過ぎると私は思います……！！せめて２人……一弥を

合わせた2人なら安全性が確保され、織斑先生の言う戦力が削られる心配も減るはずです……！！」

箒。金縛りに囚われている中、それでも千冬に噛み付く。

「……」

「それに、一弥がシャルロットを見つけたとしても、そのまま敵陣に独断で突っ込む危険性もないとは言いきれないはずです！なぜシャルロットが戻って来ないのかはわかりませんが……この状況で命令に背くということから、ただ事では――」

「もういい、篠ノ之」

目を閉じて箒の弁論を聞いていた千冬がそれを制する。胸の前で組まれていた両腕は、やがてその片腕が痛む頭を和らげるようにこめかみを抑えていた。

「ただし篠ノ之だけだ。補佐は1人で充分だろう。それ以外は認めん。……まったく、面倒事が絶えん。行くからには必ず連れて帰ってこいよ、篠ノ之」

「……はいっ！ありがとうございますっ！」

1つ礼を言って頭を下げ、箒は一弥を追いかける。ひんやりとした廊下の冷気が、疾駆する彼女の束ねられた髪をたなびかせていた。

◇

「――一弥っ！」

後ろから名前を呼ばれる……が、俺は振り返ることもせずに未だ立ち尽くしていた。

「箒……」

なんとか声を絞り上げ、目の前に立った箒を見る。ケータイ片手に立ち尽くす俺を見て大体のことを察したのか、一瞬だけ表情が歪んだと思いきや、引っ張るように俺の手を取った。

「行くぞ一弥。何を言われたかは知らんが、今は一刻を争う」

「……どこに行くかわかってんのか？たった今唯一の連絡手段が途切れたんだぞ」

バッ！と繋がれた手を振り払い、箒を睨みつける。だが、それを怯えるおくびも出さずに、それどころか睨み返してくる。

「それを考えるのがお前の仕事だろう。私と一弥の2人の内、どちらがシャルロットのそばに長くいたかなど愚問にすぎん」

「……チッ！」

ケータイのメールボックスを開き、なんらかの手がかりを探す。中身は一夏のものなども含まれていたが、圧倒的にシャルのメールが多かった。

「……お前と過ごした時間の方が多い、か。笑わせる……」

「……あぁ？」

「なに。シャルロットの相棒は私であるはずなのに、まともに戦っ

たことはなかったな……そう思っただけだ」

「……そうでもねぇだろ。模擬戦とか鍛練を積んでたじゃねぇか。道場とかにも誘ったんだろ」

「模擬戦は所詮模擬戦だ。道場に誘ったのもあまり意味はなかった」

カチカチと操作音のする闇の中、校門そばでぽつぽつと喋り合う。今にも世界が終わるということに実感が湧かないのは、果たして俺だけだろうか。

「……なんだったのだろうな、私は。シャルロットにとって」

操作に集中する中、箒の言葉が続く。

「それを考えて、何も出て来ないことに憤った。私達の関係は、相棒という存在は、そんな薄っぺらいものだったのかと」

「……」

「一弥」

「……なんだ」

「シャルロットは、私が連れ戻す。一弥はそばで見ていてくれないか？」

その言葉を聞いて、俺は不覚にも安堵してしまった。シャルの拒絶の理由がわからない今、万が一再び相まみえたとしても何を言えばいいのかわからなかったからだ。

「今、私はシャルロットの相棒だ。ならば、相棒の失態は私の失態。それの尻拭いも、相棒である私の仕事のはず……いや、それは外側の理由だな」

違うんだ、箒。それはお前の失態じゃないんだ。俺が原因なんだ。

「一弥、シャルロットは今、危機に瀕している。違うか？」

「……」

「私は相棒を、シャルロットという人間を救いたい。そして、もっと距離を縮めて気兼ねなく話せる……親友になりたい。それくらい私はシャルロットという人間が好きなのだ……」

「……箒」

ああ……そうか。

こいつもこいつで、友達が欲しかったのか。

鈴と同じく、一夏への気持ちと同じくらい、友達が欲しかったのだ。

そして友達ができ、その友達が危険に陥ったと考え、助けたいと思った。救いたいと思った。

とてもいいことじゃないか。やはり、こいつは成長している。

「シャルは……故意に命令を無視した。何をするつもりなのかはわからないが、逃げる気ではないはずだ……。それは間違いない」

「……！！」

「俺じゃシャルを説得できなかった……。頼む、箒……」

そして、俺はそれに縋ることしかできない。

「あいつを、シャルを……救ってやってほしい……」

弱く、醜く、非力な俺では。

「……案内してくれ、一弥。シャルロットの元へ」

俺は頷いた。それしかできなかったから。

粒子が身体を包み、漆黒のＩＳが顕現する。さらにその装甲を砕き、速度重視の形態に変換する。

箒も同じく深紅のＩＳを身に纏ったのを確認し、俺は再び暗雲ひしめく空へ飛び上がった。

☆　★　☆

眼下から夜の海が見守る中、高速の移動が続く。機動性を重視した《紅椿》が俺を追随する中、俺は説明をしていた。

『シャルは間違いなく「レゾナンス」にいるはずだ。消去法からして心当たりはそこしかない』

『レゾナンス……商店街か。なるほど、目の前は学園直通のモノレールが通ってるから避難は早く終わるはず、か……』

『それもあるが……今シャルを突き動かして暴走させてるのは……おそらく罪悪感だろう。暴走してるヤツが上の命令を聞くはずはない。シャルの独断のはずだ』

なら、シャルはこの世から別れを告げるつもりなら、必ずその場所に行くはずだ。暴走ＩＳ集団を相手にするつもりでも、レゾナンスは高さがある。屋上を戦場として使うという魂胆だ。

『……一弥はいいのか？お前達、付き合ってるんじゃないのか？』

『……さっきも言った通り、シャルの言葉の意味がわからない今、何を言っても無駄だ。だから箒、お前が――』

そう続けた時。俺のセリフは激しい警告音で掻き消された。

――ビシュン――ッ！

『『――――っ！！』』

俺と箒の間の空間をレーザーが焼き焦がす。確認するまでもなく敵襲だ。だが――――

『どういうことだ！？いくらなんでも早過ぎる！！』

『いや、違う！これは……先発隊だ！！クソッ、暴走してるくせに頭使いやがって！！』

そう、全てのＩＳが襲撃したワケではない。様子見として数十機が駆り出されただけだ。

周りが海だけに生徒達もいない。ほっとけば間違いなく街を焼くとなれば、いやがおうでも応戦するしかない。

（このクソ忙しい時に――――！！）

俺の苛立ちに反応するように、再びレーザーによる攻撃が俺と箒に襲い掛かる。幾筋もの濃縮された粒子が、あたかも獲物を仕留める弓矢のごとく飛来した。

◇

「……さて、今度こそ仮眠時間とする。全員ついてこい」

「……くそっ」

「……待つことしかできんのか……」

その場の全員のため息がユニゾンする。彼らとて力になりたいのだ。なぜあの圧力に抗えられなかったのだと、後悔しているのだろう。零れるため息を、千冬は完全に遮断するように廊下を歩く。

物音が床を叩く靴音のみの中、ゆっくりと進んでいく。角を曲がり、渡り廊下を抜け、やがて保健室と書かれたプレートの前に到着した。

「あっ！皆さんお待ちしてました！ベッドの用意は済んでますよー」

「紫藤先生、ありがとうございます。では、中に入れ」

ぞろぞろといった具合に中へ入る一行。保健室の中はいつもよりベッドが多く設置されており、さらに先客がいた。

「さすがに目が合っただけで身構えられると傷付くッスねー」

フォルテ・サファイア。今は亡きダリル・ケイシーの相方である、専用ＩＳ（コールド・ブラッド）を駆る2年の代表候補生。見たところ、どうやら彼女のＩＳは暴走する事態には陥ることはなかったようだ。

「……あなたもこの作戦に参加するんですの？」

「ちょっと、後ろからぐさーなんて冗談でもごめんなんだけど？」

「頭使ってくれッスってか敬語使えや縦ロールとちびっ子コラー」

「誰がちびっ子よ！？ラウラだって充分ちびっ子じゃない！」

「む？失礼な。この身長は徒手格闘に最適のスタイルになるように調整されてのことだ。なりたくてなったワケではない」

「あたしだってやりたくてちびっ子やってるワケじゃないわよっ！！」

「あれ？自覚あったのか？」

「あんたらってか一弥のおかげでね……！！」

「話続けていいッスか？縦ロールさん」

「えぇ。後ろの方々はほっといて構いませんことよ」

「え～っと、とりあえず今の状況が異常も異常、超常な状況なのはわかるッスよね？」

「そうですわね……ヘタをすれば世界だって危うい……それ程の脅威はあることでしょうね」

「そもそも私はカプセルに入ればどんな体形にだってできるんだぞ。それこそ箒のようなばいんばいんのぼいんぼいんにな」

「敵よっ！ラウラ、あんたはこの瞬間間違いなくあたしの敵になったわ！！」

「それにしても箒ちゃんは反則よねぇ。９０くらいあるんじゃない

かしら？一夏くん、どうなの？」
「なんでそこで俺に聞くんですか！？知りませんよ！ってか知ってたら修復不可能な距離置かれますから！」

「残った専用機がウチらのＩＳくらいッスから、『おいおい戦争なんかやってる場合じゃねぇぜ！』みたいな感じなんッスよ。ってか残ったのウチ１人ッスから協力するくらいしか道が残されてないんッス」

「……なるほど。ありきたりな正義を掲げた言葉よりは信用できそうですわね。こちらとしても戦力は多いに越したことはありませんし、ぜひよろしくお願いしますわ。……あとそのあだ名はなんとかなりませんの？」

「ふふふ……ばいんばいんのぼいんぼいんだぞ？その暁にはまず鈴を窒息死させてやろう」
「コンの野ウサギ……っ！注射器で吸い取ってでも抗ってやるわ……っ！！」
「まあまあ鈴ちゃん。貧乳はステータスって言うじゃない。ね、一夏くん？」
「だからなんで俺に振るんですか！？……って待て鈴なんで標的を俺に絞る！？」

「はぁ……まったくお前らは……まあいい」

ギャーギャーと騒ぐ一行に今度は千冬がため息をつく。一弥がいないだけまだマシなのだが、それにしてもキャラの強すぎる専用機持ち達である。

「……あれ、そういえばもう1人の男子がいないッスね――――ってなんで一気にテンションが下がるッスか？」

「気にするなサファイア。むしろファインプレーだ。では、さっさと仮眠に移るぞ」

フォルテの言葉に黙り込んだ隙にテキパキと指示をする。やがて全員がベッドに横になった時、

「……ああ、そういえばやり残した仕事があったな」

その一部始終を見ていた千冬が背後のドアに手をかけた。

「紫藤先生、申し訳ありませんが手伝っていただけますか？お前達、私は少しの間離れるが、“決して窓を開けて脱出しようなんてするなよ”。……では、紫藤先生。行きましょう」

『……え？』

「え？あ、は、はいっ」

パタパタとドアをくぐり、ピシャリと閉められる。カツカツと足音がする辺り、どんどん遠ざかっているようだ。

「……なあ、今のって……」

「いえ、でもまさか……」

「……でも、あたしには『窓からバレないように脱出しろ』って聞こえたわよ？」

「奇遇だな。私もそう聞こえた……」

頭を寄せ合い、ヒソヒソと秘密の作戦会議を即時実行。秘密になっていないのに気付いているだろうか、いや気付いていまい。

「とうとうナレーションまでふざけだしたッスよ」

「ふふ、フォルテちゃんも協力してね？」

「げー……マジッスか。……まあ、敬語で頼まれたら考えるッスか

ね」

その秘密になっていない秘密会議を、２人の先輩が見守っていた。

第六十四話　思い出の地（後書き）

千冬さんのＩＳがわからない……どうしても出したいんですが……。

完璧オリＩＳでいくか小説の発売を待つか……どうしましょうかねぇ……。

第六十五話　友人四人の無謀な勇姿

幾筋ものレーザー。俺と箒を正確に狙ったそれらの攻撃は空気を切り裂き、甲高い音を振り撒きながら殺到する。先程の、あいさつ代わりのつもりかわからないレーザー攻撃が焦げ臭さを残す中、俺は双剣を呼び、箒が二刀を抜いて迎撃態勢、回避行動に移る――――その刹那。

飛来する純白の光芒が一斉に――――屈折した。

『あらあら、早計な方々ですわね。そのうえ無礼とは救いようがありませんわ』

『わぉ、結構いるわねー、各国の極秘事項。くわばらくわばらっと』

『お前ら……っ！？』

セシリアの得意とする《偏光射撃》（フレキシブル）。その上位版である《偏光制御》（フレキシビリティ）。その実態は粒子を自在

に操るというもの。簡単にやってのけやがったが、余りある才能と血の滲む努力が両立していないと不可能とされる、言わば机上の空論。しかし、セシリアはその前人未踏を切り開いた。

1本でさえ曲げるのに苦労するのに、幾筋もの光芒を完全に《制御》したのだ。

『一弥。目的地はレゾナンスだな？護衛させてくれよ』

『見ていろ箒。私もすぐにばいんばいんのぼいんぼいんになってやるからな』

『ら、ラウラ？それに一夏まで！？こ、これは一体――』

『第2射、来ますわ！』

キュイッ！！と先ほどと同じような甲高い音を響かせ、再びレーザーが飛来する。が、セシリアがそれらに手を向けると、たちまちあさっての方向へ逸れた。

『セシリア、鈴！任せたぞ！』

『『了解！！』』

『任せたぞって一夏、それに護衛って――――どういうつもりだ！？千冬さんは！？』

ワケのわからない展開に思わず一夏を問いただす。俺の疑問と焦りをよそに、その質問に一夏は満面の笑みを返しやがった。

『脱出するなって言われたから、反抗してやった！やっと俺も千冬姉に反抗できたぜ？』

『ははっ！私が教官の命令に逆らうとはな！反抗期とはわからんものだ！』

『ば、バカかお前達は……あとで織斑先生が怒り狂うに決まって――』

『ほら、さっさと行きなさいよ一弥！箒！』

『ここはわたくしと鈴さんで食い止めます。貸しイチ、ですわよ？』

……なんだよ、この週間少年ジャンプみたいなノリ。

バカだな。相変わらず愛すべきバカ共だ。……はぁ、おっかしいなぁ……大概、俺の立ち位置はこういうのをバカにしたポジションだったのに。

……ありがとう。

『……任せたぜ。せいぜい死亡フラグ立てねぇように抗えよ死に損ない共ッ！！』

セシリアと鈴から目を離し、正面に向き直る。こうなったら、何が何でも連れ戻してやる。

そして、救う。シャルを、この世界を。

『……いくぞっ！！』

ようやく決心がついた。俺の声が電子空間に響いたのを合図に、俺達４人はレゾナンスへ向かうべく推進器（ブースター）を唸らせた。

◇

「……行った？」

「行きましたわね……ふっ！！」

キュバァッ！！と第３射のレーザー束を屈折させるセシリア。勢いが先程の２射より強い辺り、徐々にこちらへ近づいてきてることがわかる。レーザーの量から察するに、

「２０機は超えてそうですわね……その１つ１つがハイスペックの専用機……」

「まさに自殺行為ってヤツね。ま、死ぬ気なんてサラサラないけど」

鈴がお馴染みの《双天牙月》を呼び出し、さらに《衝撃砲》の威力を最大限に放出すべく広域空間を圧縮。セシリアもそれに続いて己の武器《スターライトｍｋ？》を手に照準を左目に出現させ、ＩＳ名の所以である《ブルー・ティアーズ》との連動狙撃による拡散銃撃の準備を始める。

調整も済ませ、準備は万端。敵小隊は粒子銃撃は効果なしと見極めたのか、飛行速度を上げてぐんぐん距離を詰めてくる。衝突まで1分とかからないだろう。

近づく脅威の大群に、それでも2人に焦りの色は現れない。

「タッグマッチでは何もできませんでしたものね」

「あー。わかるわそれ。せっかく息巻いてたのにね」

まずは初撃。圧倒的火力を見せつけるために。

「「さあ、名誉挽回の狂想曲（カプリッチオ）を奏でましょう？」」

無謀の極みで、勝機は見えなくて、それでも敗北は許されない戦い。

自らその戦場に立つことを望んだ2人が、轟く銃声に舞い踊る。

◇

『かず兄、お前に言っておかねばならないことがある』

『あ？遺言か？３０文字以内な』

『リリアーヌの件だ』

『……む』

高速機動を続け、背後で砲火の飛び交う音が遠ざかる中、ラウラがそう切り出した。

リリアーヌの行方。俺の疑問の１つだ。それを解決するためにラウラに協力を要請し、シスフェリ……長ぇ、ロリ姉妹に詳細を聞き出してもらったのだが……

『あの姉妹は……言いにくいが、何も知らないようだった。役に立てなくて……申し訳ない』

『……そうか。なに、今にわかるさ。これだけのＩＳが暴走してやがることだしな』

『……すまない』

沈痛な面持ちで頭を下げるラウラ。それよりも聞きたいことがあった。

『ところで……「何も知らない」ってのはどういうことだ？一度も会ってないってことか？』

『む？ああ、いや……学園の正門前で別れた、とは言っていたが……それがどうかしたのか？』

正門前……ってことは、少なくとも学園の外には出てないってことだ。つまるところ、ＩＳ学園に侵入した部外者に連れ去られたか、ＩＳ学園の関係者に幽閉されてるか……ってところか？

（クソ……情報が足りねぇ）

可能性として、リリアがＩＳ学園敷地内にいることは極めて低い。

そりゃ、地下区画なんてもんがある学園だし、かくれんぼに打ってつけの場所があるのかもしれないが……リリアが生きてると仮定する以上、食糧の問題が発生してくる。それにまず、ＩＳ学園に潜んでバレないワケがないしな。

（生きてると仮定する以上……か）

小さく舌打ちし、頭にかかるもやを振り払ってネガティブな思考を打ち切る。リリアだって軍人だ。生存率の確保くらいそこらの人間より圧倒的にできるだろう。それよりもリリアをさらったヤツだが

――――

『っ！一弥！また暴走ＩＳの大群が……っ！』

『チッ、そりゃ第２波も用意するよなぁ……。一夏！ラウラ！』

一夏とラウラが高速飛行から急停止し、その場に留まる。目線の先に見えるのは紛れも無い夜の闇だけだが、その視線は確かに迫り来る暴走ＩＳに焦点を合わせている。

『任せたぞ』

『……すまない、一夏。ラウラ』

高速飛行を続けているせいで、一夏達とは瞬く間に遠ざかってしまう。が、高速機動特有の飛翔音が辺りに響く中、俺と箒の耳は確かに2人の声をキャッチした。

『『任せろ』』

と。

◇

無人機。すなわち、人を乗せずに稼動するＩＳ。暴走したＩＳは例外なく人を乗せずして動く無人機だった。

無人機に意思はない。だが、コア自体にはしっかりとした意思があるためになんとも言えないが、今このＩＳを突き動かしているのはそういった意思ではなく、コアを所有する全国家のＩＳにハッキングを仕掛けた犯人による簡潔な命令だった。

曰く、『日本を殲滅せよ』。

なぜ日本なのかはわからない。もしかすると日本という国自体に恨みがあるのかもしれないし、ＩＳを発明した国に自分の発明した兵器で滅べと暗示しているのかもしれない。はたまた運悪く、投げたダーツの矢が日本に刺さっただけなのかも。

どちらにせよ、今この状況、不当なハッキングを受けて己の自由が制限されている今、その真意をコア達が知る術はない。感情を殺して戦禍を広げる以外のことを考えることは許されない。

だが。遥か彼方にて立ち塞がる２人のやり取りを見て、暴走したＩＳは思わず首を傾げた。

「ふむ、やはり嫁としては胸は大きい方がいいのか？」

「ぶほぉっ！？い、いきなり何言うんだラウラ！？」

「いや、単純に疑問に思っただけだ。デカい方が一夏は興奮するのか？みたいな感じに」

「単純にすごいこと疑問に思ってるよこの子！べ、別に俺は大きくても小さくてもその人に合った体型が１番だと……」

「ちなみに一弥は大きいのが好みだぞ」

「あー……。え？一弥ってロリコンだとばかり……あれ？違うのか……？」

「――――と、一夏の趣向を教えてくれた」

「ぶはぁっ！？ちょっと待て！一弥の好みを言ってたんじゃないのかぁっ！？」

「ほぅ……その反応、やはりデカい方が好みなのだな……？」

「あれぇー！？知らない内になんか俺追い詰められてるー！？」

ぎゃあぎゃあと騒ぐ目の前の障害。なぜ逃げないのか？なぜ無駄話をできるのか？いや、そもそもなぜこんなところにいるのか。

なぜ――――臆さないのか。

ひとりでに自分の拡張領域にストックされている武器が両手に握られる。あるいは、備え付けられた砲門が照準を合わせる。すると、途端に２人は引き締めた表情でこちらを向き、

『待ってろ。今助ける』

男のＩＳ操縦者が手に持つ刀を構えながら、そう呟いた。

なぜそんな言葉をかけるのか。あらゆる疑問が思考を占める中、激突の音響が鳴り響いた。

第六十五話　友人四人の無謀な勇姿（後書き）

ああもう自分でも何書いてるのかわからん。サッパリわからん。

第六十六話　激怒と侮蔑と驚愕と（前書き）

スランプ気味……そのうえ駄文感しかない……

よし死のう。

第六十六話　激怒と侮蔑と驚愕と

見上げると、空の彼方には薄い雲の切れ間から月が覗いていた。

真夜中の空は純粋とは言えない闇が降りる。目が慣れてきたせいか、その色は灰色に落ち着いている。

黒に限りなく近い灰色に、やがて迎える日の出。白に塗り替えられる時に、空は何を思うのだろうか。

それとも――日の出は来ない、とでも暗示しているのか。自分が白に塗り替えられる時は来ないと、渦巻く戦火に期待を寄せるだろうか。

しかし、どんなに悪意の含まれた思想を持っていても、その空の色は灰色。黒に近いといえど、若干の白が混ざっている。

月光。その輝きが、空が闇に堕ちることを食い止めていると言っても、きっと過言ではないはずだ。

光を降らせる月は、やがて流れる雲に身を隠してしまう。だが、その輝きは雲に包まれようと失われることはない。

辺りがいっそう暗さを増す。見上げている、相当の高さがある目の前の建築物は黒いもやがかかったような、得体の知れない何かが潜んでいるような、不気味な気配を漂わせている。

人の立ち入りを拒む、さながら有刺鉄線のような冷たく鋭い空気。吹き付ける風が神経を逆なでする中、それでも目の前の建築物へ足を踏み出す。

扉に鍵はかかってはいなかった。ギィ、という錆び付いた音を鳴らし、矛盾ながらも歓迎するようにその思い出の場所は開かれる。

実際、この場所は歓迎しているのだ。拒絶しているのはこの場所に訪れた人物の方であり、過去は優しく抱きしめるように受け入れる。

そう。

ここで、たくさんのことを知った。

ここで、多くのことに心臓を高鳴らせた。

ここで、あらゆることに心を弾ませた、その場所の名は。

――――『レゾナンス』。

☆　★　☆

「……やっぱり、来ちゃったんだね、一弥」

大理石の上を踏み出すたびに甲高い音が生まれる。俺と箒、２つ分の靴音が閑散とした内部に響く中、静かな声が頭上から聴こえてきた。間違いない、シャルだ。

ショッピングモールの内部は、俺が知っているような人の行き交う賑やかな印象とは正反対に、張り詰める厳かな印象を受けた。人の気配などするはずがなく、あまりに急いでいたのか店にシャッター

を降ろすこともなく、ついさっきまで楽しげに買い物をしていた人達の余韻が感じられた。

「シャルロット。２時間ぶりだな」

「……そっか。箒もいるんだね。できれば１人で来てほしかったな」

気落ちした様子の声。そっちに目線を向けるが、暗闇が広がっている中でははっきりとシャルの顔を見ることはできなかった。

「ふふ……それは私が邪魔者だと言いたいのか？」

「うん？いや、違うよ。１人で来てほしかったのは箒。一弥には……来ないでほしかったんだけどね」

そうか、と口に含むように相槌を送り、一歩前に出る箒。

俺は頼まれる訳でもなく、一歩後ろへ下がった。俺にできることは、何一つなかったから。あとは箒に頼るしかない。

「学園に戻るぞ、シャルロット。いや……たった今、一夏とラウラ。鈴とセシリアが暴走したＩＳの集団と戦っている。私達も加勢に行こう」

単刀直入。その言葉がピッタリの箒のセリフが、凛とした声音で張り詰めた空気を一掃するように広がる。波紋状に響くその声は、確かにシャルの耳に届いたはずだ。

「ああ、そう」

……にもかかわらず、返ってきた返事は先程と同じく沈んだ声――――いや、

いつしかの興味のなさそうな、無関心を表すものだった。

「――――……な、」

「そんなことより、一弥」

そのまま標的が俺へと移る。もう箒と話をするつもりはないらしい。

その証拠に、箒の言葉を、シャルは『そんなこと』でばっさりと切り捨てた。

「どうしてここに来たの？君だけは生きてほしい……その願いが伝わらなかったの？ここにいたら、助かる見込みなんてないのに……」

「……、」

まて、よ。

ちょっと待てよ。

お前は……、シャル、お前は、

「何を言ってるんだ……？」

お前が今、話すべき相手は……箒だろ？

お前が今、心配すべき相手は……一夏やラウラ、鈴にセシリアだろ？

「それは……おかしいだろ……」

目の前にいるはずの相手は。ひどく歪んだような相手は、

本当に、シャルなのか……？

俺が内心動揺しているにもかかわらず、シャルは未だ俺の身を案じるようなセリフを綴る。は、はは……いつからこいつはヤンデレになったんだよ……。

と、そこでようやく俺の視線はシャルから離れた。というのも、隣が淡い赤の光を放ったからだ。発信源は箒。ＩＳを起動させた彼女は、その燃えるような赤に身を包ませている。

「……よくわかった、シャルロット」

それに比べ、底冷えするほど低い、威圧感を含めるだけ含んだ箒の言葉。その表情は、まさしく激昂という言葉がぴったりはまり込む怒りを持っている。きっと無視されたことに怒ってるんじゃない。……一夏達を軽視したことに腹を立ててるんだろう。

スラッ……と、箒が脇腹に仕舞われている2本の刀を静かに抜く。外界の空気に晒された2本の刀《空裂》と《石蕗》は、箒の怒りに適応するかのようにその身に宿す粒子を爛々と輝かせている。その迫力に、不覚にも生唾を飲んでしまった。

「できることなら、今後のことを考えて無傷で連れ戻したかったが……。許せシャルロット。……貴様だけは一発殴っておかないと、

その考えを変えることはできなさそうだし、なにより私の気が済まない……！！」

ギラリ、と貫くような鋭利な眼光が箒の双眸に宿る。ＩＳによって浮いた体が２階ぐらいの高さに到達し、その赤い光がいっそうの輝きを増した時。その赤い光に照らされたシャルの姿が浮かび上がり、

――――絶句した。

「――――――ッ！？」

シャルはすでにＩＳを展開していた。辺りが深い闇に包まれているせいで、色や形などの細部はわからなかったが、ＩＳを展開しているということだけはわかった。

羽根のような真っ黒のオブジェクトは黒さを際立たせ、黄金色の機体は光源に影響されて鈍い赤と混ざった、なんとも濁った感の否めない色をしている。

そして、なによりも。

その手に持つ赤い剣が、凄まじい存在感を振り撒いていた。

「……殴る、ねぇ。だったら僕は――――」

ふわり、とシャルの機体が同じく浮き上がる。手に持つのは、箒の火柱をかたどった色の赤い刀とはあまりにも掛け離れた、禍々しく、血液を凝縮したような色の赤い剣。

銘を、《ティルヴィング》。

「うーん、何がいいかなぁ……？まあ、戦意が喪失するぐらいにいたぶってあげるよ」

同じ色で、それでいて性質のまったく異なる、シャルの持つ赤い剣。持ち主である彼女は、向かってくるかつての相棒に躊躇なくその剣で迎え撃った。

◇

暗いショッピングモールの中、それも空中で私は目の前の、今となっては敵と認識しているシャルロットに特攻する。《瞬時加速》時の、さながらジェット機のエンジンのような音と、衝撃波によって粉々になったガラスの破砕音を背後に残し、即座にトップスピードへ速度が跳ね上がる。ぐにゅり、という加速時に特有の視界の揺れに脇目も振らず、その速度に負けないほどの速さで2本の刀を上からXの字を描くがごとく剣閃が交錯するように、標的を一刀両断する勢いで振り切る。

実質、それほどの心意気でなければシャルロットを鎮圧することなどできるはずがない。たとえ現行ＩＳを上回るスペックを持つ機体といえど、それは結局機体の性能差の話であり、それを補う技術や技量があれば、約束された勝利はあっさりと覆される。そして、シャルロットにはそれだけの技術と技量がある。

私の振るった二刀は空気を斬り裂くような音を立て、寸分狂わずシャルロットの機体（ラミュール・リヴァイヴ）へと吸い込まれる。回避を許さない、まさに神速の攻撃。確実に一撃が入る軌道。予想外の速さに虚を突かれたせいか、シャルロットの目には驚愕に見開かれている。

シャルロットの取った行動は単純、かつ基本を抑えたものだった。回避ができないなら受けるまでのこと。手に持つ赤い剣を剣閃が交錯する中心点で構える。だが、

（甘いな……ッ！！）

今、私は視界が一瞬揺らぐほどのスピードで突撃を行っている。メーターを振り切るほどの速度で突っ込むとなれば、当然そこにはとんでもない重量、力の波がなだれ込む。その力の波をただ一点、刀と刀の交差点に余すことなく全て注ぎ込む。そうなれば受けることなど不可能だ。シャルロットは背後の壁に叩きつけられ、私は巻き上がる砂塵に乗じて視界の確立しないシャルロットに粒子の雨を浴びせる。それが私の描く必勝の策だった。

完全なる一方的な短期決戦。時間を無駄にできない今、一分一秒が惜しい。早くシャルロットを連れ戻し、一夏達の援護に向かわねばならない。

――――なのに。

「……驚いたよ。現行ＩＳを上回るスペック……すっかり忘れてたなぁ」

私が放った渾身の一撃は、ズズッ、という鈍い音を立て……シャルロットの持つ赤い剣によって、あっさりと受け止められていた。

金属同士が激しく打ち付けられたのに、非常識なまでの効果音が短く響く。それに加え、そのあまりの手応えのなさ。それは、私の中の常識を打ち砕くには充分すぎた。

それだけではない。

「な、ぐ――――ッ！？」

シャルロットの持つ赤い剣。その禍々しい赤に、さらなる光沢がその剣身を包む。それに対し、私の握っている二刀の放つ赤い光がどんどん色あせていく。その構図は、刀の光が剣に吸収……吸い取られているようだった。

「……っ！！」

手に持つ二刀が悲鳴を上げたかのような錯覚に陥り、とっさに推進器（スラスター）をフル起動させてその場から距離を取る。シャルロットは自分の立っている場所から動くことはなく、追撃してこないことが奇妙な薄気味悪さを物語っていた。

……一体、なんだというんだ。《紅椿》の単一仕様能力である《絢爛舞踏》を発動させ、色あせた二刀に再び光が戻るのを横目に、混乱した頭でなんとか現状把握に移る。……シャルロットの単一仕様能力（レラ・シエリル）は、背後の黒いオブジェクトが太陽光を吸収し、そのエネルギーをあらゆるエネルギーに変換できるというもののはず。

なら、太陽が引っ込んでいる夜。それも、雲によって月の光も遮断されている今の状況はシャルロットにとって不利極まりないはずだ。エネルギーに変換する以前に、太陽光が欠如しているのだから。

なのに、なのになぜ……

「うーん……やっぱり僕の方からも攻めないと撃墜は難しそうだね」

考えは纏まることなく、シャルロットの言葉によって中断を余儀なくされる。過剰反応とわかっていながら、刀を交差させて目線を向ける私に、シャルロットは――

「仕方ない。……くだらないやり取りは終わりにしよう」

凍える吹雪さながらの冷たさを孕んだ言葉を浴びせ掛け、私との距離を一息に詰めてきた――!!

第六十六話　激怒と侮蔑と驚愕と（後書き）

少々アンケートを取らせてください。

千冬さんのＩＳを出したいのですが、ＩＳの次巻が出るのを待って小説に合わせるか、もしくはぼくの考えるオリＩＳを出すか……

？小説の次の巻が出るのを待つ

？作者の考えたＩＳでいいや

よろしくお願いします～……

第六十七話　Ｓｃａｒｌｅｔ　ＶＳ　Ｂｌｏｏｄ（前書き）

アンケートにご協力、お願いします。

第六十七話　Ｓｃａｒｌｅｔ　ＶＳ　Ｂｌｏｏｄ

シャルが《第２形態移行》を果たしたのち、１つ疑問に思っていたことがある。シャルの持つ剣の、ティルヴィング、その名前についてだ。

《ティルヴィング》。それはいわゆる古代の伝説の剣の名称で、歴戦をくぐり抜けてきた剣の名前を表している。

別に、形状が一致してないとか粗探しをするつもりは全くない。せっかく伝説の名前をつけたのならちゃんとその剣を再現しろ、なんてぶーたれるほど俺はマニアックじゃない。

俺がおかしいと感じたことは、その伝説として明記されているものとシャルが振るっていた（・・）もの。その２つの《ティルヴィング》という武器の、昔の《ティルヴィング》の由来と今現在の《ティルヴィング》の性質が全く異なっていたことだった。

《ティルヴィング》。数多の戦禍を戦い抜け、数多の人間を屠ってきた剣。大したことじゃない。武器なんて大抵が血に濡れるものであり、その剣身が赤く染まるのは別段珍しいことでもない。

その剣身にこびりついた血に、持ち主のそれが含まれていること以

外には。

ありがちな話だ。その剣を手に取れば、どんな温厚な性格の持ち主でもたちまち狂人と化し、殺戮の限りを尽くす。やがて、その一向に落ちることのない斬れ味を持つ刃は主人へと向けられるという…早い話、曰くつきの剣。そのタチの悪さから《魔剣》と称されるようになった、血を糧とする剣。俺の記憶が正しければ、それが《ティルヴィング》（血塗られた剣）の伝説、本性だ。

それに対し、シャルの持つ剣はどうだ？……いや、どうだった？雲ひとつない空に負けないほどの青い剣身は、影響するエネルギーによって色を変えるという、《魔剣》とは程遠い性質だった。さらに付け加えるなら、変化する色の中にあんな気持ちの悪い色なんてなかった。

（……なにか……なにか、きっかけがあるはずだ）

シャルの持つ《ティルヴィング》がその性質を改変させたターニングポイント。それがわかれば、あの剣の正体、本質を掴めるはずだ。

……シャルの心情の変化か？いや、確かにＩＳは操縦者と心理関係を持つが、それはＩＳ本体に限ってのことだ。たかが剣一本に、シャルの心境の変化が関係するとは考えにくい。

……夜だけに発動する能力？なるほど、そう考えればつじつまが合うことには合うが、表面的にしか捉えることができないし、現実的ではない。あのドロドロのマグマのような血液のような色から連想させる邪悪さを証明するには、あまりにも不可解な点が残る。

（思い出せ……どんな些細なことでもいい！今日この瞬間まで何があった！？）

まっさきに思い浮かぶのはダリル・ケイシーの暴走。あいつにトドメをさしたのは、間違いなく《ティルヴィング》だったが……

（……まさか、あいつの怨嗟が取り憑いた？）

……非現実的すぎる。

（くそっ！わかるワケねぇだろ！！大体シャルのワンオフから特殊すぎ――――）

答えが全く出てこないことに毒づいた時、俺の耳を一際巨大な轟音がつんざいた。慌てて視線を上げると、何本もの光条と遅れて突撃するシャルの姿。続けて鳴り渡る金属音。

その光景と音響に、強烈な違和感が沸き上がった。

◇

「つぁぁっ！！」

飛翔する箒が空中で体をひねり、腕をしならせ、手首を返す。それら全ての動きは手に持つ刀へと直結する。草木の根本に干渉すれば、花や果実にも影響を及ぼすように。連動するように弧を描き、空を突くたびにその動きに合わせて、握る刀が従順に振り回され、無尽蔵の粒子が標的へと降り注がれる。踊るような舞うような一連の動作は、まさしく乱舞という文字がピッタリと当てはまるようだ。刀が唸るたびに攻性エネルギーが放出され、獲物を焼き斬らんという意思を持つかと思うほどの、業火とも言える赤い粒子が荒れ狂う。その一線一閃が致命傷を負わせる威力を孕み、その全てが正確にシャルロットへ向かっていく。

「っと……！」

しかし、シャルロットが魔剣を振るい、赤い粒子にその剣身を叩きつけるたび、必殺の刃が瞬時に霧散していく。線の軌道には剣で散らせ、点の直進には体を捻るなりしてやり過ごす。殺到した粒子の奔流は黄金の機体に掠る程度の成果しかあげられず、そのほとんどが魔剣によって掻き消され、機体に触れることもできないまま背後

の壁に激突した。

ガラガラ……と、美しい大理石が途端に瓦礫と成り果てて崩れ、粉塵が舞い上がる。その音に多少の戦慄を覚えるシャルロットだが、構わず魔剣を右手に持ち、速度を上げるために推進器を唸らせた。それに同調したのか、手に持つ魔剣が濃密な赤い光を鼓動させる。自分にとって憎い仇敵であるように、箒は表情を歪ませた。

先の経験から、あの魔剣相手に接近戦はまずいと箒の直感が告げていた。どんな理屈か知るよしもないが、シャルロットの持つ剣には一夏の『零落白夜』のようなエネルギー無効化に似た力がある、というのが箒の見立てだった。いや、自分の刀に秘められたエネルギーをも削るとなれば、それ以上の能力かもしれない。それは箒の駆る機体『紅椿』の武器態勢から考えるに、天敵と言っていいほどの相手だった。

（近距離戦も遠距離戦もあっちに分がある、か。やはり勝敗の鍵を握るのはあの剣……！）

自分の武器を完全に封殺する剣。近距離での渾身の一撃も、遠距離での必殺の連撃も防ぐともなれば、残る選択肢は――――

（近距離による手数での圧倒、もしくは起死回生のカウンター。……しかし、素性が掴めない以上はあの剣と打ち合いたくないな……）

ならば、不意を突いてのカウンターで勝機を見出だすほかない。こ

ちらに向かって猛スピードで迫るシャルロットを見据え、刀を納めてぐっと腰を落とす。狙いは初撃を避け、懐ががら空きになったところを居合術で一気にシールドエネルギーをもっていく。

タイミングを見極めるために、シャルロットの一挙動一動作に目を離さない。やがて箒の目が捉えたのは――――左手。

五五口径アサルトカノン《ガルム》だった。

「っ！？しまっ――――！！」

二の句を継げることができず、箒の機体に凶弾が突き刺さる。次いで襲い掛かる魔剣の斬撃からなんとか逃れるため、高度を上げて距離を取る。しかし、そうなればそうなったで次々と《ガルム》の銃口から火花が散り、殺傷能力に長けた銃弾が箒を苦しめていた。

箒が失念するのも無理はない。シャルロットの本来の強み、それは圧倒的な『器用さ』にある。《高速切替》から始まり、多方面に精通した技能、あらゆる武器類の使い勝手、そして、さきほどのＩＳのセンサーに引っ掛からないためにロックを外してもなお、決してブレることのない銃撃の正確さ――――

それら全てがシャルロットの力であり、強さなのだ。一夏や箒のように刀一本に頼り切る訳ではなく、ひとつの武器に固執することはない。残弾数が切れたなら次の手段を。剣が折れたなら次の切り札を投入する。武器を捨てることを厭わない、実に変則的な相手だったのだ。それこそ、まるで一弥のように『必殺の一撃』を良しとし

ない、『圧倒の手数』を重視する戦法だった。

今回、シャルロットは自身の持つ《ティルヴィング》を箒の前でちらつかせた。自分には、そっちの武器を完全に凌ぐ武器があるのだと。意図的に箒の注意を魔剣に移し、自分本来の切り札から注意を逸らしたのだ。

残弾数が切れかけることを告げる警告が視界の隅に映るのを確認すると、未練もなしにアサルトカノンを手放し、ふたつ目の《ガルム》を目にも留まらぬ速さでコール、銃撃に入る。一切の隙を切り捨てたような華麗な動作に、箒は持ち前の高機動を活かして赤い残光を残し、回避に専念していた。

シャルロットの一方的な攻撃がしばらく続き、一種の膠着状態に陥る。止まない弾雨に痺れを切らしたのか、箒が乱舞による攻性エネルギーの連撃を再び放つ。その威力と数は、シャルロットの弾丸を弾くものの最初と比べて見るからに劣っている。

当然ダメージが届くはずもなく、魔剣によってほとんどが掻き消される。本来、必勝の武器を守りに使うことにより、こと防御に関しては無敵を誇っていた。

――それでも、付け入る隙が無いという証明にはならない。

「……っ！？」

刀を縦横無尽に払い、放たれた粒子。その影になるように、自分も

同じく、それこそ弓から撃ち出される矢のごとくスピードでシャルロットへと突進する。狙いはカウンター。それを銃弾と魔剣が互いを補い合いながら阻むなら――“そのふたつが封殺される手段、瞬間を狙えばいい”。その荒唐無稽な作戦を思いついた結果――広範囲に放った攻性エネルギーが銃弾を弾く盾となり、魔剣を封じる鎖となった。

攻性エネルギーは確かに魔剣によって無効化されたが、それは大した問題ではない。重要なのはその次の一手。振り切った魔剣の下をくぐり、懐に入れたということだ。

「ハァァッ！！」

まずは初撃。鞘に納められた二刀を、両手でふたつ同時に抜き放つ。二刀流居合という亜流の攻撃。積み重ねられた経験が無意識に体を動かし、閃光とも言える速度でふたつの斬撃が交錯、その交差点が吸い込まれるようにシャルロットの機体を叩き、シールドエネルギーが一気に削られる。

「ぅく……っ！！」

「まだだっ！！」

続いて次撃。順手に持った二刀の乱舞。さきほどのそれとは異なる、直接攻撃に視点を置いた攻撃。すでにシャルロットの魔剣は引き戻

されていたが、このチャンスを逃すつもりはないらしい箒はそれでも畳み掛ける。魔剣に阻まれながらも、その勢いは衰えることはない。最初の乱舞とは比較するのもバカらしいほどの、熾烈を極めた刃が魔剣の合間を縫って機体を穿つ。シャルロットも捌ききることができないまま、後退の一途を辿っている。

（まだだ。まだ上がる！！ついてこい、シャルロット――――！！）

繋がる連撃。守りに徹したのを機に、二刀を逆手に持ちつつシャルロットの脇を抜け、斬り払う。正面からの攻めは守りが固い。ならば前のみならず、前後左右上下斜め全てに攻撃を展開すればいい。本来はそのための高機動なのだ。《瞬時加速》をフルに使い続け、目にも留まらぬ速さで斬り抜け斬り裂き斬り臥せる。腕を動かす必要などない。ただ持つだけで、逆手に固定された二刀は標的を斬り刻むのだから。

シャルロットは完全に反応が遅れ、なす術なく斬撃の嵐に巻き込まれていく。目の前で魔剣を構え、必死に煌めく赤刃に耐えている。やがて最速の域に至った箒の剣閃が魔剣を捉え、

ガギンッ！！という鈍い金属音を響かせ――――

箒の刀が、魔剣によって弾かれた。

「が……っ！？」

「重力エネルギー、だよ」

驚愕に塗り潰された表情の箒に、すかさずシャルロットが声をかける。重力エネルギーによる、反作用の力。その限度を超えたスピードがそのまま反動となり、箒の動きを止めたのだ。

それでもすぐさま《瞬時加速》で速度を取り戻そうとする辺り、さすがというべきかもしれない。だが、その一瞬の硬直は致命的すぎた。仕返しとばかりにシャルロットが魔剣で横一文字に凪ぐ。お世辞にも鋭いとは言い難い勢いで、呆気なく箒の刀に阻まれたが、重力エネルギーの纏う魔剣ならそれだけで効果を発揮する。再び鈍い金属音が響き、決定的なまでの距離が開いた。

だが、近づくための方法がわかった今、圧倒的に箒に分があることも事実。アサルトカノンなどによる銃撃は大した脅威とはならないし、シールドエネルギーが削られたのなら回復を施せばいい。

（くっ、またふりだしか。だが、体勢を整えて次の――）

「――次は、ない、よ」

箒の思考を読んだシャルロットの声が響く。左手に銃を構え、今度はしっかりとロックしているのか、箒のＩＳから警告が鳴る。しかし、反動が大きすぎて思うように動けない。シャルロットの初撃はあまんじて受けるほかない。

しかし、銃撃は大した威力は持たないとわかっていても――――背筋に走る悪寒を止めることはできなかった。

「次はない」

繰り返される言葉。無視できない傷を負いながらも、痛みにこらえるような色が混じっても、その声色には強い意思が感じられる。本人の中で無限の力を供給する信念は、たとえ不特定多数の人間が悪呼ばわりしようとも、自分にとって絶対の正義であることは揺らがない。我が身である黄金の機体が無数の切り傷を付けられようが、その信念が音を立てて崩れることはなかった。

そんな彼女の正義に味方するように、標的に向けた銃口に光が集まり、見る見る内に収束していく。光が宿る銃の名は六二口径ショットガン《レイン・オブ・サタディ》。等身大ほどの大きさを誇る無骨さと、その銃口に集まるエネルギーが絶大な脅威を指し示している。

話を逸らそう。

『ショットガン』という銃器は、本来、日本語訳が『散弾銃』というだけあって使用者が引き金を引いた、その一瞬の内に小威力の弾丸を多数バラ撒く大型携行銃である。発砲の瞬間、円錐型の角度をもって放射状に発射され、一定範囲内を均等に散らばり着弾する。マシンガンのような連射ではなく、アサルトカノンのような単発でもなく、瞬時に展開される弾丸の渦。生身の人間に晒そうものならリアルハチの巣が見れるし、ＩＳの戦闘においてもその弾雨で隙を作ることが臨める、なかなか優秀な銃器である。

だが、それでも致命傷とはなりえない。手数を重視するため、決定打にならないからだ。小威力は所詮小威力。大幅にシールドエネルギーを削る手段に用いられることはまずない。

――ならば、力を与えようではないか。

――だったら、威力を高めてあげよう。

バチバチという危険な音が、銃口から光とともに溢れ出す。その光は金属質の弾丸ひとつひとつに密集し、本来の銃弾が吹き出る速度を飛躍的に高めるよう作用する。

そう。

使用するのは、電気エネルギー。

電気エネルギーを纏った全ての弾丸は。音速の3倍で撃ち出された全ての弾丸は。誰もが求める《必殺の一撃》と《圧倒の手数》の双方を秘めた攻撃となる。

すなわち。あえて名付けるというのなら。

散弾電磁銃。ショットレールガン、と。

「が――――――っっ!!」

キュガッッッ!!!!!!と、数えるのもバカバカしく思えるほどの光条の群集が1秒と満たずに全弾発射され、何重にも織り重ねられた甲高い音響が箒の悲鳴すら奪った。

光条はまさしく散弾のように展開され、その全てが電撃の尾を引いて赤い機体を貫通し、発動した絶対防御が寸でのところで光条を弾き、夜の闇を切り裂き背後の壁を突き崩して、遥か彼方へ圧倒的な威力の余韻を残して消えていった。

崩れ落ちる瓦礫に埋もれるように箒の機体、というより箒自身が力を失ったようにうなだれる。散弾電磁銃の電撃弾の起こした衝撃波

に巻き込まれ、大きく後退して瓦礫にぶつかったらしい。それでもすぐに上体を上げ、《絢爛舞踏》を発動させてエネルギーの回復を試みる。体に甚大な裂傷や出血が見られるが、その瞳にはまだまだ闘志が燃え盛っている。

しかし、それは敵わなかった。手に持った銃器を投げ捨て、どす黒い赤色の魔剣を大上段で振りかぶる、シャルロットが目の前に現れ……一気に振り下ろしたからだ。

「ぐぅ……っ！！」

すかさず二刀を交差させて受けるが、異常なほどの重量感が刀を通して体に伝わり、背後の瓦礫の山に押し付けられる。手に持つ刀はミシミシと嫌な音を立て、やはり特有の赤い輝きが色あせていくように失っていく。

「……なぜだっ！？シャルロットッ！！」

巨大な重力に押し付けられながら、それでも箒は問い掛けずにはいられなかった。

「お前は……私の、パートナーじゃなかったのかっ！？相棒であり、互いの背中を預け合う間柄じゃなかった、のか……っ！？」

「……っ！」

「一夏達だって、そうだ……。私達は……仲間じゃないのか？どうしてあんな……あんな、冷たい態度をとったのだ……っ！？」

「……うる、さい」

「……っ！！答えになってないぞシャルロットッ！！お前の私達に対する信頼度などそんなものだったのかぁッ！！」

「知らない……！仲間なんていない。どうだっていい……！！」

「それが……ッ、それが、お前の答えかッ！！私達がどれほどお前を心配しているか知った上で、そう答えるのかッ！！シャルロット！！」

「もういいんだよ……！心配なんかしなくていいッ！！望むなら箒も一夏達も生かす。だから、だから、もう……」

ギシギシ、と刀が悲鳴を上げる。それも構わず、箒は叫ぶ。

「シャルロット……！シャルロットッ！お前に、お前の中に――――」

「僕に、構うなぁあああああああああああああああッッ！！！！」

「私達は、いなかったというのかぁあああああああああああああああッッ！！！！」

バギッッ、という音と、

ザンッッ、という音がこだましたのは、まったくの同時だった。

「が……ッ、は……ぁ！」

箒の二刀《空裂》と《石蕗》はシャルロットの魔剣により、微塵に砕かれ、咎めるものが無くなったことにより力の解放された魔剣は箒の体を斬り裂く。絶対防御が再び発動し、シールドエネルギーは底を尽きたせいで絶対防御が完全に働かず、箒自身の体に致命的な切り傷が刻まれた。

「ほ……箒ぃっ！！」

「……あ、あぁ……」

一弥が駆け寄ってくるのがわかる。

――――いやだ……

今は、目を合わせられない。

自分のしでかしたことから目を背け、シャルロットは逃げるようにその場を後にした。

◇

「箒。おいっ！箒！！」

ＩＳが強制解除され、瓦礫の上に横たわる箒を抱き起こす。……よし、生きてることには生きてるな。

「……何を、している。一弥」

「……あ？」

「はや、く……シャルロットを追え……。後はお前に任せる……」

「追えって……あ、アホか。お前、放っておいたら死ぬレベルの出血だぞ……！」

「ふん……こんなもの、そのうちＩＳが、治すだろう。お前にできること、が……私ができない理由になってたまるか……」

「バカなこと言ってんじゃねぇ……！！そんな賭けみてーなこと、俺はするつもりはねぇぞっ！！」

「……は、はは……。……ならば、お前に、なにができる？」

「……なに？」

「傷を治す手段は、一弥。さすがのお前も持ってないだろう……？

ここで油を売っているくらいなら、お前のやりたいことをやれ……」

「なんだよ、やりたいことって……」

ドクドクと血が流れていく。まずい、これ以上は……

「……バカ者。さっさとシャルロットを追いかけろ……。あいつは屋上へ行った。やはり止められるのはお前……だけ……」

「……行きてぇよ。俺だって」

でも。だけど……

「……なんて言えばいいんだよ？あいつは……シャルロットは、俺とあいつの考え方には決定的な相違があるって言ってた。俺はまだ……その違いってやつがわかんねぇんだよ……！」

1番近くにいたのに。1番長い間寄り添ってたのに。

「あいつの考えてることが……わかんねぇんだよ……」

わからない。

なぜシャルロットは命令に背いたのか。

俺とあいつの考え方の相違とはなにか。

わからないんだ。今も、まだ。

「なら……放っておくの、か……。違うんだろう……？」

「……」

「……はやくいけ……私、は……死なな……い……」

「……篭？」

目を閉じる篭、一瞬焦ったが、どうやら寝てるようだ。

止血……

「……確かに、できねぇや」

そのまま眠りの妨げにならないように、瓦礫の上から駆け降りる。

この場所で、俺にできることはない。

自分にできること。

すなわち、シャルロットを追いかける。そして、その後……

（……戦闘も、覚悟した方がいいな……）

胸の奥がちりっ、とくすぶる中、俺はシャルロットを追いかけるために階段を昇った。

◇

……行ったか。

「ぐ……これは洒落にならんな……っ」

斬られた、ということで痛みはさほどないが、どうも出血の量が心許ない。このままだと、そう長くはないだろう。

「だが、死ぬつもりはカケラもない……！！」

赤い粒子が小さく弾ける。現れたのは、修復不可能なほど破壊された刀。

「そういえば、これは直るようなものなのかな……。……まあいい」

私はまだ、死ねない。

しゅる、と髪留めをほどく。それは、夏の臨海学校で一夏からプレゼントされたものだった。

「……一夏……」

それを愛おしそうに口元にやり――――口の中に押し込む。

（……死んでたまるか……！！未練なぞ腐るほどあるのだからなぁ……！！）

残る力を振り絞り。手に持った、折れてもなお粒子を溢れさせている刀を。

傷口に、押し付けた。

「――――――ッッッ！！！！」

声にならない絶叫が、その場を離れた友人に届かない範囲でこだまする。

やがて、今度こそ力尽きたように、止血を終えた箒は燃える瞳をまぶたの裏で休ませた。

第六十七話　Ｓｃａｒｌｅｔ　ＶＳ　Ｂｌｏｏｄ（後書き）

息切れが……っ。やっちゃった感がハンパないです……。

第六十八話　Ｎｏｉｓｅ　ａｎｄ　Ｓａｂｅｒ

夜が明けようとしていた。

重役出勤のつもりらしい太陽は、地平線の下でなりを潜め、ところどころ切れ目のある雲が広がる空をゆっくりと明るく染め上げる。

『レゾナンス』の屋上は静けさに満ちていた。穏やかな風が起こす風鳴りの音だけが辺りを包み、ヘリコプターの着陸地点を表す地上標識が真新しく描かれ、それら全てが厳かな雰囲気を醸し出している。かなりの高度があるにも関わらず、外側を囲む柵らしきものは見当たらない。一般開放されないのも頷ける、本当に閑散とした場所だった。そして、それゆえの神秘さ、神聖さを漂わせているようにも感じる。

目線を左方の眼下へ向ける。この場所が静かすぎる理由が、そこにはあった。人気の消え去った町に動くものはない。人類が生活していた名残だけが町に存在し、そこに人類は存在しない。危険を警告された人類は、比較的安全な学園で膝を抱える、肩を震わす、目を閉じる。危険が払拭される、その時まで。それは、なんとなくノアの方舟を連想させた。

夢の町。

あるいは、惨愴たる処刑場か。

視線を逆の方向に向けるために、首、正しくは目を１８０度動かす。海。朝の光が水面で弾けることはないにせよ、その色は少しずつ青を取り戻している。穏やかな波間に揺れる海は、この場所から見ると真っ二つに別れているように見える。

モノレールを渡す、海の上を走るレール。駅前すぐというこの立地の屋上から見たところ、それは広い海の境界線の役割を果たしているように見える。そして、そのレールの先には熾烈な戦闘が繰り広げられていることだろう。音こそ聴こえないものの、たびたび粒子の光が花火のように上がるのを、俺はただぼんやりと目に映していた。

（死んでない、よな……箒も……。……死ぬなよ……絶対）

「――――おはよう、一弥」

前方から発せられた声が鼓膜をつつく。声のした方を向くと、そこにはシャルが昇りきらない太陽を背に、今にも飛び降りそうなほど

端っこの場所でこっちを見つめている。しぱしぱと目を瞬かせながら、俺はその姿をつい険しい目つきで見つめ返した。

「ひどいなあ……あいさつは大事だよ、一弥？」

「……ＩＳ、降りたのか」

妙に優しげな表情と声音に惑わされないように、思ったことを口にする。シャルはそれを聞くと、小さく頷き、一歩ずつ、ゆっくりと俺の方へ前進した。

「……だったら、その剣も引っ込めたらどうだ。薄気味悪い」

ピタリと、シャルの歩みが停止する。それと同時に、剣を引きずった、ガリガリという金属がコンクリートを傷つけるような音も止んだ。

シャルの持つ赤い剣は、さっきの戦闘時とは異なった、錆びた赤銅色をしている。さらに指摘するとすれば、その体積も心なしか増えた気がする。本来そんなことはありえないが……

「今から俺が立てた仮説を説明するよ。訂正、間違いがあれば言え」

訝しげな視線を遠慮会釈もなく向けるシャル。片手で持ったその剣をぶらぶらと振り子のように振り、勢いをつけて肩まで持っていき、支える。端正な顔、温和な性格の彼女には、その光景は目を覆いたくなるほど似合わなく、悲しくさせるものがある……が、今は目をつむろう。

掴みは上々。シャルを自分のフィールドへ引っ張り入れることはできた。あとは、持っているカード、切り札で……なんとかするしかない。

忘れてはいけないのだ。もうすぐこの場は激しい戦闘の舞台となり、圧倒的不利の状況下、それでも勝たねばならないということを。もう夜明けは近い。それはつまり、タイムリミットが近づいているということと同義。シールドエネルギーを削り合うような戦闘をするつもりはない。……が、シャルの方はそのつもりはないのかもしれない……。

そうなれば、万に一つも勝機は見失うだろう。ゆえに、俺の取るべき行動はただ一つ。

説得。

ある意味、戦闘よりも遥かに難易度の高い選択肢だ。ただ戦うワケでもなく、仲間に引き込む。それができなければ、おそらく俺達の未来はない。

「《ティルヴィング》。シャル、それがお前の持つ剣の名前だったよな。その名前が指し示す意味……それは『魔剣』。人を斬って屠って殺してきた剣。幾星霜に渡って戦場を人の血で塗りたくってき

た剣だ」

「……」

「別に、俺は考古学者を目指して日々勉強してるワケじゃない。ま、それでもゲームでも出てくるぐらいの知名度を持った剣のことくらいは知ってるぜ。付け加えるなら、どんなゲームでもその名前の剣は闇属性だかなんだかで、すべからく負のイメージを持ってた。ご丁寧なことに、ハイレベルの攻撃力も誇ってたな」

シャルが肩を竦める。が、それだけのことで言葉を挟むつもりはないようだった。

「だけどな、シャル。お前の剣は違った。今こそ見るに堪えない有様になっちまったが、今までのことでそんな負のオーラが漂うことはなかったはずだ。華奢で、いかにもすぐに折れちまいそうな水晶のロングソード。お前が《第2形態移行（セカンドシフト）》を起こして、初めてその剣を見た時に抱いた感想だ」

綺麗だ。と。

その剣を携えて直立するシャルに、俺は真っ先にそういった感情を持った。

シャルの視線が担いだ剣へと移る。自分でも何か思うことがあるの

か……それはシャル自身にしかわからない。

「そこで、昔の《ティルヴィング》の由来がリンクするワケだ。なあシャル。お前はおかしいと思わなかったか？『人をさんざん殺しながら戦場を渡ってきた剣が、なぜその斬れ味をそのまま残しておけたのか？』次から次へと持ち主が変わり、その最中ずっと人骨を断ち切ってきた剣が、だ」

顔は剣に向けたまま、視線だけをこっちに向けるシャル。構わず俺は話を続ける。

「持ち主が律儀にメンテナンスをしたから？……違う。斬れ味とは無縁の剣だった？違う。敵の血が剣身にこびりついても斬れ味が落ちなかったのは、“血、そのものが剣の斬れ味だったからさ”」

ピッとシャルの担ぐ剣を指差して告げる。

「つまり、剣身に血を浴びれば浴びるほど、剣の斬れ味は落ちるどころか上がっていく。だからその剣、《ティルヴィング》は長い世代を渡り歩くことができたのさ。まさしく『血を糧とする剣』として、な。……まったく、『魔剣』の名に相応しいクソッタレなオプションだぜ」

本当に、剣を鍛えた奴は気が狂ってるとしか言いようがない。今さ

らそんなことを言っても仕方ないんだが。

「そこでシャル、お前の剣が出てくるワケだ。っつっても、今の時代で戦争なんて滅多なことそうそう起きやしない。人殺しなんてもってのほかだ。糧となる血がない現代。ならどうするか？……簡単だ」

とうとうこっちに顔を向けたシャルに、決定的な核心をつく。

「……代用すればいい。そう……『エネルギー』でな」

「……」

つまり、こういうことだ。

遠い昔、その猛威を振るっていた『魔剣』も、初めの頃は糧となる

血が一滴も満たされていない状態だ。すなわち、その時点ではただの剣と同じ。シャルの持つ剣が、初めあんな華奢だったのもそのせいだろう。

そして、模擬戦を重ねていく内に、背中の黒い翼のようなオブジェクトがエネルギーを蓄え、シールドエネルギーを吸い取り、剣は少しずつ、少しずつ……力をつけていった。

決定的なのはダリル・ケイシーの凝縮された粒子を残さず吸い取ったこと。底知れぬ淵より沸き上がる粒子を、その全て一滴たりとも残さずに吸い尽くした。おそらくきっと、それが劇的な変化のトリガーだったんだろう。血ならぬ、『粒子を糧とする剣』と推測するならば、先の箒との戦闘も説明がつく。荒れ狂う攻性エネルギーの乱舞も、所詮粒子ならまったくの逆効果。傷をつけるどころか敵に力を与えるようなものだ。

そして、それだけじゃない。

「昔は血だったからよかったが、現代はエネルギーを糧として甦った。なら、エネルギーを求めるのなら、“打ち消したエネルギーを剣に貯蓄、さらに使役することも可能になる”ってことだよな？一夏の特技が『エネルギー無効化』だとしたら、シャル、お前のは……『エネルギー吸収』。それはさっき箒が身をもって証明してくれた。太陽も出てない致命的な時間帯だったのに、エネルギーを使った攻撃をしたことがなによりの証拠となる」

俺の言葉にひたすら沈黙するシャル。その沈黙を肯定とみなした俺は言葉を重ねる。

「太陽光を黒翼オブジェクトで別エネルギーに変換するワンオフ、《レラ・シェリル》。そして、そのエネルギーを貯蓄できる魔剣、《ティルヴィング》。その二つがお前のメインウェポンだ。……どうだ？満点の回答だろ？」

そこで言葉を切ると、シャルがまじまじと俺の顔を見てくる。それもすぐのことで、くすっと微笑を漏らした。

「そっかぁ……ふふっ、そりゃ気づくよね。あれだけ苦戦させられて、たくさん切り札を出しちゃったんだから。……それで？」

「……」

「一弥の回答、僕からは９０点をあげるよ。すごく的を射た考察だ。……だからどうするのかな？」

……そうだ。この会話、及び推測はシャルの戦闘力を考察しただけに過ぎない。たとえ１００点満点の回答だろうが、０点の悪答だろうが、中身は全くないものなのだ。

だから、もう一つ付け加える。

「……それで、か。シャル、お前は……何がしたいんだ？」

「……」

「それだけの力がありながら……いや、この際力なんて関係ないか。シャル、お前は何がしたい？こんなところまで来て、箒と戦って……一体全体、何がしたいんだ？」

早朝の冷たい風が頬を撫でる。寒空とは言わないまでも、こうも微妙な冷気が吹き付けてくるときついものがある。

冷たい……

冷たいのに……

体が、疼く。

「償い」

俺の疑問に、シャルは短い答えを出した。『償い』と。

償い……それはシャルとのケータイでのやり取りで知っていた。俺を傷つけ、守れなかった自分に帰る場所はない、と。

俺はそれを許したはずだった。被害者である自分が、加害者でもないシャルを確かに許した。もともとシャルに罪なんかない。それでも自分に非があると言い張り、それなのに俺の許しの言葉は冷たい言葉で突き返された。

俺が傷つけられた理由。敵対していたリリアに無防備に背中を見せ、さらに挑発したこと（リリアの言い方からすると挑発は正しい選択だったのかもしれないが）が原因だ。そこにシャルの入り込む余地はない。それなのに、シャルは自分が悪い、自分が許せないと――

「……？」

……今、今確かに、何かが引っ掛かった気が……したはずだ。不確かに閃いた直感を探るために、俺は頭をさらに回転させる。

「僕はね……もう帰れない。いや、帰らないよ。一弥の背中を預かっておいて、僕はその背中を守れなかった。それは信頼を裏切る行為だ。だから僕は――」

――――そうか。

そういうことか、シャル。

なるほど、俺達の考え方の決定的なまでの相違ってのは……

「シャル、お前は……自分で、自分を、裁くつもりか」

シャルが微笑む。正解だ、ということか。

なるほど、つまりは俺が図に乗っていただけってことか。

自分で自分のことを許せないのに、自分ではない人間に許されてもそりゃ納得がいくはずないだろう。自責の念は他人では晴らせない。自分の決めたルールで、自分の罪を償うしかないのだ。

「……ふざけんなぁっ！！！！」

自分で裁くだと？

他人の入り込む余地はないだと？

だったら俺は、今ここで罪を償うシャルを黙って見てろって意味だろうがっ！！

シャルは言った。自分の罪は、許されるものではないと。

つまりそれが指す意味は――――

「ダリル先輩の暴走……その果ての粒子爆発。あれなら、ある程度固まってくれれば４５０機の専用機も無力化できる。そして、この剣はあの規模の爆発を意図的に再現できるんだよ」

「ふざけるなと言った……！！美しい自己犠牲なんざクソ食らえだ！！そんなもん罪を償ったことになんかならねぇっ！！シャル、てめぇは結局逃げたいだけだ！！」

「そうだよ。そのとおりだ。僕はこの罪から逃げたい。許されない罪を一生背負うのは……怖いから。それなら、犠牲になった方が……いいんだよ」

「怖いなら俺がそばにいてやる！！自分から率先して犠牲になるなんざ、俺は絶対に認めねぇ！！自分から逃げるんじゃねぇっ！！一生背負うからなんだ！！んなもん時間が経てば忘れて、薄れて、消えてくようなもんなんだよっ！！」

「……それこそ、一弥が口出しするようなことじゃない。これは僕の問題であり、僕が決めることだ。君が認めようと認めまいと、君が横槍を入れる資格はないよ。わかってほしい……一弥」

「……っ！！わかるかよ……っ。わかるワケねぇだろっ！！みすみす死にに行くようなヤツに、俺はもろ手を挙げて賛成するようなヤツだと思ってんのか！？」

「……そうだね。このままじゃらちが明かない。ほんと、一弥の頑固さには呆れちゃうな……ふふっ」

「……っ」

「ゴメン、一弥。死なない程度、動けない程度に痛めつけさせてもらうよ」

――ああ……

どうして、俺達はこうまですれ違ってしまうんだろう。

どうして、俺達はわかり合えないんだろう。

どうして、シャルと仲良く過ごした日々が――――……

（こうも、遠いんだ……）

遠い。なにもかもが。

どうして。一体どうして……

どうすれば。一体どうすれば……

わからない。俺はどうすればいいのか。

大切な、大切な……人。

その人のために、俺ができることはなんだ？

俺と彼女の意見は、まったくの正反対。天と地ほどの差ができてしまっている。

時間はもうほとんど残されていない。焦れた彼女は強行手段を取り、一戦交える気で満ちている。

そんな彼女に、俺は――――

『叩き潰せばいいんだよ、その女もろともなァ……』

俺は……

『なんであの女はあそこまで考えを曲げねぇと思う？お前の話を聞いてねぇからさ。お前の声は、アイツにゃ届かねぇんだよ』

届かない……？こんなに必死になってるのに……？

『ホラ見ろよ。俺にトドメ刺した剣を構えてやがるぜェ？自分の邪魔をするてめーを排除しようとこったなァ』

邪魔。排除。

沸々と、俺の頭の中で何かが沸き立つ。むくむくと、俺の頭の中で何かが膨らむ。

『まァ、あっちがその気ならこっちもその気になればいいだけのことだぜ？もうそれしかねぇだろうなァ……。なにせ――――』

そして。

『――――アイツ、お前のことなんざ眼中にねぇんだからよォ』

俺の中で、何かが弾けた。

第六十八話　Ｎｏｉｓｅ　ａｎｄ　Ｓａｂｅｒ（後書き）

もう…だめぽ…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2122r/

IS 《インフィニット・ストラトス》 ～陽光の戦乙女と月下の黒騎士～

2011年10月20日08時29分発行